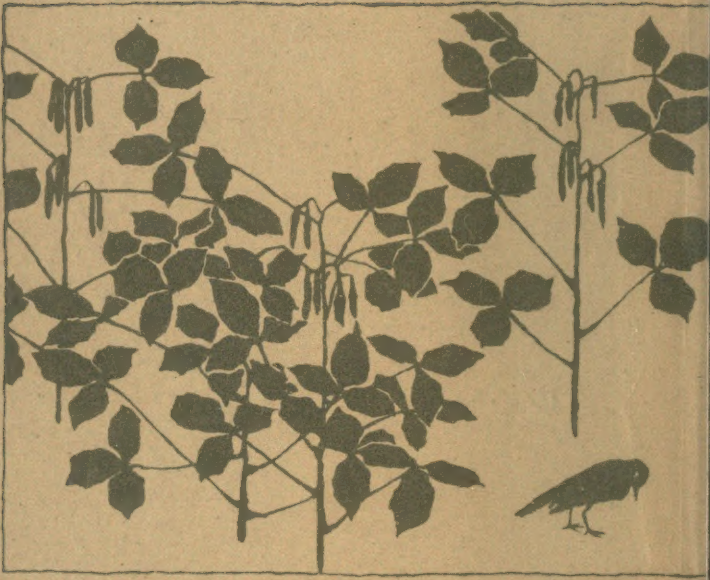




大正二年十一月一日印刷
大正二年十一月四日發行

有朋堂文庫（非賣品）
南總里見八犬傳四

不許複製

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

（岡山製本）

る所あり。然るを今幸ひに、皇城の地を踏ならば、見聞に就て後學に、なること多く候はむ。いかで饒させ給へかし。と思ひ入て請稟せば、義實主笑しけに、義成主を見かへりて、安房殿いかに思ひ給ふぞ。親兵衛は智勇捷れて、身材も亦大人びたれど、童顏はいまだ耗せず。且額髮ある者なれば、室町殿へ使して、都の手態に熟ずとも、させる咎はなかるべし。他を遣し給ひね。と仰に義成主異議もなく、その義承り候ひぬ。然らば副使には、十一郎こそしかるけべれ。他は四方に使して、事に熟たるのみならず、その性謹愼を旨とすなれば、常に失寡き者也。因て親兵衛は、願ひの隨意、這回の使を課せんず。十一郎もこの意を得て、倶に京都に赴きて、小心して親兵衛が、幇助になりね。と宣へば、親兵衛が歡び、いへばさら也、照文忻然と席を避て、八犬士の上はしも、微臣屢おん使を、奉り候ひしに、今番倘漏されなば、遺憾の事に候はむに、御諚は一期の面目に、候と稟すにぞ、餘の七犬士は、大事の使の、選に本意なく漏れしかど、倘童年なる親兵衛に、超られたれば爭はず、爲に皆云云と、歡びを稟せども、大法師は始より、思ふよしある面色にて、聞ざる像く默然たり。却上にもいへるごとく、この一回も平和の事にて、やうやく佳境に入まくすなる、話說なほ多かれども、楮數言に涯りあれば、巻を更て亦下回に、解分るを聽ねかし。

の德義は、師表に同じ。宿世の父現世の師表、一身二扮の因に儘して、義父と仰ぎ、師父と稱え、金碗氏を冒せとある、御諚は至極の道理にこそ、と思ひ奉り候へば、はやく京都へおん使を、遣さるゝおん計ひこそ、願しく候なれ。慿稟すは、人もなけなる、誇言に似たれども、異體にして心同き、道節おん承仕れば、自餘七個の義兄弟も、同意勿論に候はむ。と應へて左右を見かへれば、信乃毛野、莊介大角現八、小文吾も親兵衞も、今道節が卽座の論議に、感激せられて、仔細に及ばず、皆共侶に額衝き承て、同意のよしを稟すにぞ、義實含笑點頭給ひて、安房殿、他們は領承したり。誰を使に遣すべき。と問せ給へば、義成主、然候。この使節は、尤大事に候へば、犬士們の內中、一兩名を、遣さるべうもや。と答給へば、義實主は、然也々々。と頷きて、又犬士們にうち向ひて、然ば今番室町殿へ、まゐらする正使には、汝們の內中、一人たるべし。誰か京師へ赴きて、この使をよくせんや。と問るゝ詞も果ぬ程、犬江親兵衞突然と、拔み出額を衝て、豫黃なる小猴子が、年も才智も勝りぬる、義兄弟們をうち超て、願ひ稟すは烏滸なるべけれど、その御使を小臣に、仰付させたまへかし。自餘七個の犬氏們は、年來諸國を遊歷したれば、地理に細しく候へども、小臣は年四才の秋より、富山の洞嶇に成長りて、この春やうやく人間に、出ることを得たりしかば、當國安房の地理だにも、いまだ知ざ

ば後なき金碗氏、今この八個の義子を得て、子孫あるに異ならず。遮莫陪臣にして氏を更るに、天子へ願ひまつりし者、例あらずといふもあらんを、皆義實が孫也とて、室町殿（足利義尙）に請稟さば、必奏聞せらるべし。この義汝們同意ならば、京都へ使をまゐらせん、甚麼ぞや。と問給へば、犬士們は、阿とばかりに、答難つゝ沈吟ずるに、今俗は皆庿字を稱えて、姓氏は要なきに似たれども、族を另ち尊卑を知るは、氏と姓にしくものなきに、开を改るは大事の議也、目今問るゝ好歹を、目今決斷すべくもあらず、いかにすべき。とおのもおのも、思ふ心をいへばえに、嵒堰く水にあらねども、詞の委み搔流す。道節一個膝を找めて、隨卽答稟すやう、御諚承り候ひぬ。臣等八人宿因に、儘して舊姓を改めて、金碗氏を冐さん義は、恐れながら理義分明、誰か推辭奉るべき。勿論臣等は所生の父母あり、本來の姓氏なきにあらねど、伏姬上は、宿世の母也。こゝをもて那神靈、年來臣等が窮阨を、幾番となく救せ給ひし、神恩顯然として疑ふべからず。然ばこそあれ畏うも、おん外孫に擬せられまつれる、御教諭感佩仕りぬ。且臣等が各感得したる、靈玉の出る處と、世に同因果の義兄弟、八名あるべきよしを悟りて、竟に全く集りて、當今無雙の賢君に、仕ることを得候ひしは、則是、大師の、二十餘年、行脚の功德、指南ありしによりて也。有恁れは是、大師は、亦臣等が宿世の父にて、指南


妙ちん
三世力


妙真饗饌もて八犬士を欵待す
代四郎

抖藪行脚の、桑門に倣しより以來、二十餘年の修行蘊りて、佛意にや稱ひけん、既に兩椿事の大功あり。便是昔の罪を、償ふに足るもの也。然れども堅固の出家なれば、今さらに還俗を、薦るとても、いかにして承引るべき事にはあらず。但この親子、二世の忠臣、反て後なくならん事、佛の教に稱ふといふとも、陰德ありて、陽報なく、先祖の與に不孝なるを、世の人も亦遺恨に思ん。因て一向安房殿と、商量したる義あれば、今白地に問試ん。汝們は各々、所生の二親あるものから、倶に宿因を推ときは、伏姬は是宿世の母也。こゝをもて、大師を、現世の義父と倡るとも、以なきにあらざるべし。然ばとて、汝們が、皆犬をもて氏に做せるは、又是自然の妙契なれば、今さら他姓を冐すべからず。但し今の氏は、私稱にて、古の姓と氏に同じからず。いにしへは姓を改め、氏を更んと欲する者、必天子に奏しまつりて、敕免あるにあらざれば、行ふことを得ざる者也。然ば今俗に氏といへるは、實の氏にあらずして、家號なれば、庿字といふ。氏は則源平藤橘、菅原淸原の類にて、姓は朝臣、眞人、連、宿禰の族、即是也。譬ば里見は廟字にて、源朝臣は姓氏也。今俗人の名を問に、家名實名、什麼といふ、家名は家號、庿字の事にて、實名は名乘也。汝們氏は源平藤橘、この他もなほあるべきを、今改めて、金碗をもて、倶に氏に做すときは、犬塚信乃金碗戍孝とこそ稱すべけれ。爾ら

一日は照文の宿所へ招れて、饗應に日を消し、一日は代四郎に請待せられて、祝壽の盃を薦られ、又一日は照文代四郎們を、犬士の合宿に招き聚へて、答禮の酒を裝などす。只交遊の上のみならず、官途は事猶繁くて、義實主は間なく時なく、犬士們を召ことあり。又義成主も這毎を、折々稻村の城に召よせて、面談し給ふ日もありけり。恁りし程に、三伏の夏過て、袂涼しき七月の、十日あまりになりし時候、有一日義實主は、又犬士們を召させ給ひつ、この日は、館（義成主也）の渡らせ給ひぬ。ゝ大法師も召れにけん、方僅まゐりにき。と聞えしかば、犬士們は、何事やらんと思ひつゝ、うち列りて見參に入るに、兩侯則同席にて、小書院に在しける、身邊には、ゝ大法師と、蜑崎照文と侍りたり。登時義實主は、八犬士を召親著て、席を賜ふて宣ふやう、今日の所要は內談なるに、汝們は、我外孫に、同じかるべき宿因あれば、意衷を隱さず告る也、ゝ大師も倶に听ねかし。恁いはゞ言腐しく、いふがひなきに似たれども、抑這延命寺（ゝ大を云ふ）の親也ける、金碗八郎孝吉は、當家創業の功臣なるに、故主（神餘光弘）の與に祿を辭ひて、剩自殺したりしかば、切てその子大輔孝德に。といひつゝ、ゝ大を見かへりて、東條の城を與へて、我女壻にせまく思ひしに、大輔も亦幸あらず。一旦の失ながら、こよなき罪を釀しつゝ、饒すに據のあらざれば、首に代て頭髻を斬棄、願ひのまに〱、

こも亦後話也。却說道節們の七犬士は、親兵衛と代四郎を郷導にて、なほも峯上に攀登りて、觀音堂に參詣す。そのゆく折もかへさにも、親兵衛と代四郎は、這里に六稔をふりにたる、事愆々と思ひ出、いひ出て解き慰れば、餘の七犬士は、豫より傳聞たることながら、見れば情景八入なる、那谷河の前面にて、丶大法師の尙少かりし、金碗大輔たりし時、八房の犬を擊んとしたる、その銃丸餘りて姫上を、害ひまつりし當時の光景、想像るだに痛ましきに、羅綾の袂蘭麝の裳、深窓紅閨の裏にのみ、愛養れ給ひたる、二八の佳人這太山に、浮世を捨て身は只單、明し暮させ給ひけん、憂苦さこそ、と推量る、懷舊の淚、眼包に溢れて、人々嗟嘆に堪ざりけり。然は今、大法師が、七日の斷食、不退の勤行、那舊迹に身を擲ちて、なほも菩提を弔まつれるは、倣しゝ罪障、解脫の牡鑰歟、道心勇猛是も亦、得易からず、と噂をしつゝ、日暮て瀧田の宿所に還りぬ。愆而又この次の日も、八犬士は早旦より、倶に禮服を整へ馬に跨り、作當を領て白濱なる、延命寺に赴きて、義烈院の廟墓、五十子方、法號某の院の、墳墓に燒香し奉り、看主の老僧に對面して、各香奠をまゐらせて、里見家世々の祠堂なる、木主を拜み奉りぬ。この餘も亦一日は、洲崎明神、役行者の嵓窟、及那古の觀音へ參詣す。那古は、小文吾が祖の廟字の地なれば、懷舊殊に深かるべし。是より後も八犬士は、左に右に暇はあらで、

昨日稲村殿を退る折、途にて作當を皆寺へ還しつ、亦復行脚の打扮して、昨宵這山にうち陟り、姫上の菩提の與に、讀經してこゝに在り。七箇日斷食の、修行を果して寺へ還ん。然る要緊の折にはべれば、饒し給へと經卷を、又拿抗つうち戴きて、讀誦に他事なく見えしかば、八犬士代四郎們は、倶に感激して多言せず、先伏姫の墳墓に、花を建水を畤け、皆跪き眼を閉て、拜手默禱に、丹誠を凝らし、倶に退きてその邊なる、犬馬塚、力二尺八が墓表を、此歟と問つつ立寄て、畤の花に、天然石の、苔を拂ひ水を沃ぎて、廻向に當時をしのぶ草、垣衣に似たる山蕨、延て節立ツ箭竹の、縁は耗たる夏山蔭の、薊に交るつりがね草の、花は開けども早晩に、鉦鼓に疎き、深山幽谷、瑰松奇岩いたづらに、観る人もなく年歴たり。昔藤の俊成卿の歌に、

　まれに來る夜はも悲しき松風を絶ずや苔の下に聞らん（新古今集）

とよみ給へる、心操にひとしかるべき、犬士們は廻向し果て、退き去んとしつる折、道節はなほ立かねて、恁る義烈の弟兄に、墓碑なからんは、遺恨の事也、我必よくせんず、と獨語たりけるが、この明年七月二日、十條弟兄の七回忌に、道節果して碑銘を爲り、その忠孝を石に勒して、永くこの山に貽しけり。惟伏姫の墓碑をのみ、義實主推禁めて、建ることを允し給はず。事情を原るに、那大功は功なしといふ、造化の自然に本づきて、もて神に做せばならむ。

恩賞受るに由なくなりしを、八犬士は倶にうち不娯て、もて千載の遺恨とす。然ば又杉倉氏元は、衰老して勤に勝ず、又堀内貞行も、齢七旬に遠からねば、倶に致仕せまく思ふに、折から便宜也ければ、氏元はその子直元に家督を渡し、貞行は男兒なければ、侄貞住を婿養嗣にして、所生の女兒を妻せんとて、各致仕退隱の、情願書を呈りしに、義成懇に禁させて、饒し給はざりしかど、氏元も貞行も、なほ請稟して已ざりければ、竟にその職役を免除せられて、則直元貞住に、親の所領を賜りて、倶に兵頭に倣され、廳南榎本、兩守城の頭人には、浦安牛助友勝と、登桐山八郎良于これを奉り、館山の城預、高宗逸友は、故の儘にて、倶に上總へ赴きける。こは是後話也。爾程に八犬士は、當日稲村の城を退る折、丶大法師に相別れて、照文代四郎と共侶に、各人馬を從へて、日暮て瀧田の宿所に還りつ、次の日も未明より、八犬士うち連立て、大山寺へ赴くに、代四郎を伴ふて、奴隷などは多く倶せず。先伏姫の祠堂に詣て、各香奠を獻り、不動を拜みまつり、軈て富山にうち登りて、伏姫の墳墓に詣るに、岩嵎の内に、一個の法師あり、麻の法衣に索襷して、石を机に結趺跏坐せる、讀經の蟬聲高やかなるを、と見れば是別人ならず、延命寺の寺主、丶大法師也ければ、大家こはいかに、と訝りつ、呆れてよしを問難たり。登時丶大は經卷を、石上に閣きて、犬士們に報るやう、拙僧は、

也。次に、大法師と、蟹崎十一郎を召よせて、氏元辰相仰を傳へ、八犬士を招會の功を譽て、東西を賜ふこと多かり。又その次に、姥雪代四郎を、別席に召よせて、氏元辰相列坐たり。富山以來の功を譽て、兩個の孫、十條力二郎尺八郎に、月俸各二十口を賜ひぬ。因て他們が成長まで、代四郎その後見して、軍役には、犬山道節が隊に隷くべし。今より後、臨時の御用あらば、代四郎出て仕奉れ。御用なき折は退きて、老を頤ふべしとて、時服と黄金二百兩を賜ひしかば、各々君恩の、身に餘れるを拜謝し奉りて、倶に遠侍に退りしに、この日の恩賞は、只這每のみならず、曩に蟇田素藤を、前後兩度の征伐の折、有功の聞え紛れなき、堀内藏人、杉倉武者助、堀内雜魚太郎、東六郎們、及荒川兵庫助、浦安力助、小森但一郎、登桐山八、浦安牛助、苫屋八郎、田税戸賀九郎們を首にて、士卒功あるは漏されず。或は秩祿を加增せられ、或は職事を登し、格席を薦め、泛々なる雜兵には、金銀青趺を賜ふこと、各差あり。那晉文が介子椎を、遺れし疎忽あることなければ、誰か雀躍せざるべき、大家恩を拜し、宿所に退りて、置酒して所親に祝壽の、盃を薦めけり。开が中に杉倉武者助直元、堀内雜魚太郎貞住、小森但一郎高宗、浦安力助逸友は、各守城の頭人にて、いぬる比より上總に在りしを、今番皆稻村へ召よせられて、この日恩賞に預りけり。唯政木孝嗣、石龜屋次團太鯰三のみ、

其後、大照文代四郎も、兩茶片茶の禮を饒され、且その功を譽て盃を賜り、又別席にて、八犬士と同じく、酒飯を賜ふ事なども、昨日に異なるべくもあらず。但し當館にては、恩賜の數を增て、八犬士一人別に、札よき甲冑を添られ、又饗饌も、海醋野蔬種々の、珍味を盡させ給ひけり。式禮畢て、義成主は、又氏元辰相をもて、八犬士に仰渡さるゝやう、汝們の內中、犬江親兵衞を、這囘又改て、上總國夷灊郡、館山の城主に做さる、逆賊蟇田素藤を、再征大功の賞也。しかれども猶思召旨あれば、七犬士と共侶に、權且瀧田の宿所にあるべし。又犬塚信乃犬阪毛野、犬山道節犬川莊介、犬村大角犬田小文吾、犬飼現八們は、甲斐國猿石石禾、又下總なる結城にて、當家の與に、功ありけるよし聞えたり。遮莫親兵衞は、既に當家に仕へ、汝們はいまだ當國に、參らざりし折なれば、おのづからその功に、甲乙なきことを得ざるべし。こゝをもて餘の七犬士は、家老の下、兵頭の上たるべき、城主格に做さるゝ者也。今よりして又大功あらば、各その城を賜ふべし。但し汝們八犬士は、當家に宿因あるをもて、老侯則外孫に擬ひ給はしたる、愛顧既に他に殊也。爾らば當館のおん與にも、當に外任に同じかるべし。この故に、異日城地を賜ふまで、隨卽八士の賄料として、月俸五百口を宛行はれ、この餘所從の人馬はさら也、臨時の軍役あらん折、雜費は右の定の外にて、上のおん賄ひたるべしと

這里は苟なる、休息所にとて賜りしに、いと廣やかなれば、合宿の如くならず。客房あり書院あり、寢室浴室厠あり、況、家具、調度、夜物、蚊帳に至るまで、通て足ざる東西なかりけり。才に一旬許の程に、恁る家を造り賜るすら、容易からざる所爲ならんに、東西として匱しからぬ、君恩の過分さを、且畏み且歡びて、各枕に就きしかど、短夜なれば明易き、曉天に皆起出て、倶に浴し梳り、なほ燈下にして、早飯を果す程に、昨日の件當們七八十名、馬を牽つゝ來にければ、八犬士は遽しく、禮服を整て、各件の人馬を領て、二の城門を出る折、照文と代四郎も、件當を將て出て來つ、倶に稻村へ赴くに、五月は那國も雨障り、屢なるべき時候なるに、這四五日は天晴て、路の便宜きものから、(瀧田と稻村は郡異にて、(瀧田は平群郡稻村は安房郡)程近からねば犬士們は、倶に馬の足搔を早めて、巳牌半竿過たる時分、稻村の城に參りけり。この日の執事は、杉倉木曾介氏元、東六郎辰相也。この他堀内藏人貞行、荒川兵庫助清澄、登桐山八郎良于、浦安牛助友勝、田稅戸賀九郎逸時、苫屋八郎景能們、有司近臣いと多く、出仕の袖を列ねたり。有恁りし程に、延命寺の住持、大法師も、はやく當城に參りしかば、八犬士は昨日のごとく、廣書院にて、義成主父子に見參す。八士進上の贄、兩公の賜、兩茶の禮、犬士們の功を賞美の詞、都て昨日瀧田殿にて、ありし趣なれば具にせず。

措處さへ中坐席、中睦じき武勇士の、交りは現憑ある、犬江を今宵の東道ぞ、と猶提撕つ姥雪の、雪にはあらぬ鹽燒の堅魚の、切肉裝分る、八箇の小碟は渺くとも、管待態は淺からぬ、大盞ほと〳〵困じたる、沙量に小飯の合膳は、煎茶の土瓶、何よりの、馳走と鱇て引よせて、渇く隨意幾茶碗、上頓も累る盃酒の、數し竟酌に鳴る鐘は、初更か二更歟、更闌て、音鎬々と聞えけり。登時諸犬士兩膝正して、倶に妙眞にうち向ひて、歡びを舒別を告るを、妙眞听ず、禁れども、犬士們固辭て從はず、そは忝く候へども、今番上より賜りし、宿所へいまだ入らずして、こゝに團坐の輿に乘する、夜讌は憚りなきにあらず。且明日は亦稻村の、大城へ召れ候へば、然ばかりの准備もしつべし。身の暇を賜りね。といへば代四郎も倶に辭ひて、宿所は近き程なれば、腋子（親兵衛をいふ）はさら也、諸君子も、時々對面輒かるべし。今宵に涯る事かは。といふに妙眞强難て、竟にその意に儘せしかば、八犬士は叉告別して、外面に立出るに、宿所に隷られたる、奴僕兩三名、張燈を携て、迎に來つと聞えしかば、开を從へてかへりゆくに、間才に一町の内に在り。登時妙眞は、音音曳手單節們と、倶に門傍に是を見送り、代四郎は猶後に跟て、其門前まで送りけり。恁而八犬士は、這新造の宿所に入るに、今日より隷られたる、雜色奴隷八九名在り、开が中なる若黨二三名、遽しく紙燭を秉て、玄關に出迎へけり。

に、片茶の禮さへ饒されしは、御恩あまりて心裏耻しく、實に苦しう候ひき。といふ側より妙眞は、憶ず詞の折衷りて、そはいと愛たき事ながら、口誼は一霎時閣き給ひね、と且盃を薦めまほし。といふを音音は見かへりて、然也。前より盃の、准備ははやく整ふたるに、女中は何して侍るやら。といひつゝ立ば、曳手單節も、各兒毎を推立して、倶に庖湢へ退りけり。登時毛野は膝拍鳴らして、却忘れたることこそあれ。我們が作當は、今番上より隷させ給ひし、御内の雜色奴隷なるに、這頭に等せ置んは要なし。さぞ呟れたりけんかし。といふに大家諸ひて、その義は心屬ざりき、とく勞ひてかへさんず。といそぐを代四郎推禁めて、否作當の事はしも、小可こゝろ得たりければ、明日又作にまゐりね、と時分を示して先の程、皆還し候ひき。勿論各位のおん馬は、上の賜で候へども、厩櫪なければ、厩奴に、預けて秣を飼すべく、鎗柳筥なンどは、おん宿所へもてゆきて、給僕們に遞與しね、と吩咐ていなし候ひぬ。と報るに大家再議に及ばず。毛野は听つつ點頭て、寔に老功脫落はなし。と譽れば大家うち興じて、倶に笑局に入る折から、曳手單節が庖厨より、手繰に運びもて來つゝ、薦る盃銚子に、三四種の酒菜さへ、白人料理の似而非鹽梅も、饗應に誠ある、心ばかりはあつものの、冷ぬ程に、と妙眞が、老婆親切、うち扇ぐ、夕照暑き紙窻、群て入る蚊と、燭點して、音音が出す燭臺の、

久後憑しかりぬべし。寔に忠臣孝子順孫、義姑と節婦にあらざりせば、猛火の中に必死を免れ、良人の身後に遺れる子あり。皆是神祐、不測の錫、我道節們がいかにして、企及ぶ事ならんや。實に敬服々々。と嘆賞すれば、信乃荘介、小文吾現八は荒芽山にて、一夕値遇の相識也、又毛野と大角は、今番が初度の對面なれども、迭にその名を知られしかば、倶に舊識の思ひあり。皆共侶に相祝する、言多ければ蕭然なりし、席上熱閙しくなりにけり。當下音音は、兩個の媳婦と、兩個の孫を共侶に、卒とばかりに推立して、拯み出つゝ犬士們に、うち朝ひ額を衝て、この日の嘉會を壽きて、却道節に答るやう、寔に目今仰のごとく、死すべかりける老們が身は、伏姫神の冥助加護、又兩館の御庇にて、刀禰達に先だちて、御扶持の下に侍るすら、冥加あまりて本意ならぬに、代四郎が物々しう、使れまつるは願しからぬ、僥幸なりけるを、傍痛く思されん、物體なくこそ侍るなれ。といふを道節聞あへず、そは嚮に老人に、解諭したることぞかし。功は人の貴賤によらず、寸功也とも閣き給はで、賞せらるゝは明君の、善政なるを爭何はせん。昨日までは落魄たる、我道節が舊僕の、當館に仕へ奉りて、同家臣になりぬるは、則故主の面目にて、恁ばかり歡しき事はなし、誰か傍痛しとせんや。と諭せば代四郎拯み出て、その義は豫御教諭にて、馬の尾に附く蒼蠅の、幸ひなるを知るものから、却今日の見參

に、涙をとゞめ點頭て、开はこゝろ得て居るけれど、査し給ひね犬田主。おん身の顔を見てしより、阿沼藺が事、爹々の事、及房八が事さへに、先この胸に思はれて。といひつゝも亦目を拭へば、慰めかねし小文吾親兵衛、歎きは同じ亡親の、ありし世偲ぶ、簷下の松の、梢瞻仰て愁然と、又いふよしもなかりける。心汲知る信乃現八、自餘の四犬士共侶に、今は世になき家尊家母、又亡妻の事さへに、懐ふ犬塚犬村里の、舊巣遙けく八百日ゆく、越路にあらぬ濱ちどり、迹は都に疎かりし、鄙の雛衣、名を紀なる、心々の衷情、人異にして憾は似たる、憂には何か勝間田の、池の鴛鴦、夜の鶴、子を先だてゝ老を鳴く、雌雄の中なる孀婦鳥、翅しほれて立まく惜き、音音と曳手單節們は、有恁團坐に亡者が、尚存命て侍りなば、歡びもせん、喜れんに、儘せぬものは世間に、短き人の命ぞ、と胸の憂也憮也繰復す、千行の涙一筋に、泣じと倶に聲を呑む、心も知らず、稚兒們は、睡氣つきけん、呀々と泣くを、佶と疾視る二母親の、眼包に餘る兩霤、膝に珠做す可にて、席上各蕭然也。登時道節氣を奨さんと、音音をヤヤと喚かけて、やよ孀母、幾も健にて、恁ばかり芽出たき再會は、世に多かるべきことならんや。死せりと思ひし汝們夫婦、曳手單節も恙なく、子さへ擧けし奇異妙契、其里に侍るは那兒毎にて、二世の力二と尺八歟。現物種は竊れずといふ、世の常言は以あるかな。孰も父の面影あり、

は薄き疎茶ながら、遺なく薦めて道節們に、うち朝ひ額衝つ、退きて妙眞の、後方に一霎時侍るにぞ、力二郎尺八は、親を慕ふて出て來つ、八犬士們をつらくと、見つゝ憚る面色にて、そが儘祖母の左右に坐り。又代四郎は庖門より、找み入りけん、權且して、像忙に這里に來て、兩個の孫の在るを見て、含笑ながら音音們と、倶に其頭們に坐を占けり。是より先に小文吾は、妙眞にうち向ひて、絶て久しくなりぬ、犬江の大母御、恙もまさでいと芽出たし。我們が上はしも、結城穗北の事までも、蟹崎生に聞れけん。丶大大德と蟹崎生が、穗北へ迎に渡せられて、水路を來つゝ今日曉天に、船は白濱へ著くとそが儘、皆當城へ召よせられて、老侯に見參し奉り、只今宿所へ退るなれば、親兵衞を見せまゐらせん、と思ふて立寄り候ひき。犬塚犬飼は行德以來、相識なれば、いふもさら也、この餘犬山犬阪犬川、犬村四個の義兄弟も、訪慰めんといはれしかば、相作ふてこそ候なれ。と引合すれば、信乃現八、道節莊介、毛野大角、識も認らぬも名告をしつゝ、皆云云と慰れば、妙眞ははふり落る、涙にものをいひ難て、應するのみ兩袖を、顏に掩ふて俯沈むを、親兵衞も亦慰めて、喃大母さま、曩には時の不祥にて、憶ずも別となりて、ものを思せ奉りしに、その禍鬼を芟拂ひて、這大兄達、小父公共侶、咱毎歸參の再會なれば、歡ばるべく樂からんに、うち泣給ふことかは。といはれて妙眞やうやく

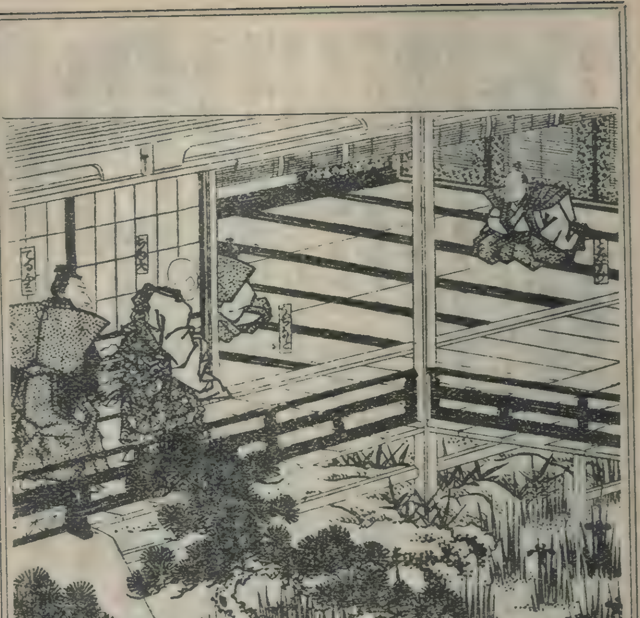
に來つゝ問慰めて、迭にこの日の歡びを、野邊に今咲く撫子よりも、孫は迭に愛たさの、老女心の親切に、饗應の手傳ひしつゝ、庖漏掙き手の届く、架の鍋さへすみ熟て、汚目見ゆる釜の蓋に、被けし布巾を搔拿て、洗ひ流しは昨夕の飯粒、小桶の底に浸されて、肥滿宍なる炊妾に、幇助多かる火燒鳥、搨る擂盆のみそさゞゐ、現鶯は刷匙の、異名篩の目細鳥、目白壓瓜、早漬の、茄子の小瑠理、青鵐の醆口に、搔くや辛のきく戴は、籠に買れし鷄頭海苔、萌生の豆鳥、筍の、皮をむく鳥、鰭津物、魚類介藻濱笊の、目面を抓むいそしさに、長き夏の日長からで、下晡になりし時候、親兵衞小文吾、道節們の八犬士は、はやく外面に來ぬる程に、代四郎は伴當を、走らしつ呼門して、よしを告れば妙眞は、遽しく立出て、内より開く片折戸、巻石傳ひ庭門より、案内せらるゝ犬士們は、緣頰よりぞうち登る。坐席は纔八疊に、八個の賓客圍坐せる、座著の折敷は打鰒魚、昆布、搗栗執具ひ、卒と薦めて、胆向ふ、心ばかりの壽きは、老女東道の手差配に、廻り難たる掌を、連りに鳴らしつ茶を呼べば、音音們曳手姉妹は、倶に濡手を褌の、端折返して拭ひもあへず、襷外して汲出す、盆に茶碗の八曜は、六稔ふりにし月日星、今再會の折を得て、給侍も對の義姑節婦、歡しさと哀しさの、涙ぞ遣る瀨中暖簾、褰げて倶に出て來つ、累ねし茶托兩三箇、載する茶碗の曆手は、よろづよし野の花ならで、色香

げて、又七犬士を索んとて、結城なる丶大庵へ、赴きぬといふその日の事まで、はやく這里へも聞えしかば、妙眞歡び慰めて、後の音耗を等程に、丶大法師が先君の、御骨壺を駝奉り、照文と共侶に、結城よりかへり來ぬる事、且白濱なる延命寺にて、御改葬の事の顚末、又親兵衛們八個の犬士は、代四郎と共侶に、武藏の穗北に杖を住めて、丶大法師の迎に來ぬるを、等つゝ氷垣許在りといふ、信具に聞えしかば、妙眞はいよ〳〵安堵て、かへり來る日を幾日とは、まだ知らねども、當城内に、八犬士同居の爲とて、いぬる比より番匠們が、猛可に居多聚ひ來て、造り出しゝその宿所は、遠くもあらぬ程なれば、日毎に折々外に出て、觀るも樂しく忝き、兩館の寵恩を、仰げば高き、柹葺屋の、廣やかなる日數を累ねず、まだ一旬には足らぬ間に、造果しは昨日の事にて、今日は亦曉天に、八犬士代四郎さへ、丶大照文と同船にて、白濱なる延命寺に、著到の聞えあり。隨即老侯に見參の爲、今日當城へ、召よせらるゝ、と云事の由を、今朝有司の徇知せしかば、手の舞足の踏ところを、知ざる迨の歡びは、獨妙眞のみならず、音音曳手單節們も、稍等得たるこの日の歡會、恙もあらずかへり來ぬる、代四郎のみ歟、故主道節、自餘の犬士も、親兵衛も、故鄕ならぬ所以ある鄕に、飾る錦の有磯貝に、花を添たる花貝の、下枝の蕾數ならぬ、兩個の孫に、新しき、手織麻衣うち被せて、手を掩き倶して、妙眞が、宿所

らず。中酒の折に、老黨若黨那這へ心を屬て、盃を薦めけり。恩饗やうやく事果て、又茶を賜ひ、果子を賜ふ。姑且して八犬士は、老黨有司に、君恩の歡びを演て罷り立つ程に、丶大代四郎も出て來つ、丶大は犬士們にうち向ひて、明日稻村へ參會ふべき、時分を契り相別れて、白濱へかへり去ぬ。照文は、なほ老侯の御要ありと聞えしかば、獨君所に留りて、遠侍に侍りたり。嚮に照文が、犬士著到の注進に、稻村殿へ參りし折、館の仰られし事あらば、听せ給はんとてなるべし。爾程に八犬士は、代四郎と倶に退り出て、休憩所に赴くに、今番猛可に造出されし、八犬士同居の宅は、第二の郭の邊に在れば、妙眞代四郎們に賜りし、宿所と相距ること遠からず、且照文が屋舗は、其首より猶這方にあるよしなれば、八犬士は作當の、從ふ隨に相倶して、先照文の宿所に赴き、玄關に呼門して、執接人に名簿を遞與し、招會せられし慰勞の口狀、倶に歡びを舒るのみ、照文いまだ歸宅せざれば、そが儘に退き去て、倶に妙眞が宿所に立寄て、先その安否を問んとすめり。爾程に妙眞は、曩に親兵衛に別れし日より、果しなけきは逆旅の安危を、いかに〳〵と思難て、寤寢不娛しき曉每に、枕を安くせざりしに、約一旬有餘を經て、親兵衛は兩國河原にて、館の御使蜑崎生に、料ずも逢ふことを得て、隨即素藤を再征の與、その宵快船にうち乘つ、上總の館山に、推寄て城を拔き、妖賊魔兵を、悉討夷

今日に至ること、和漢の儔あるべからずとて、兩茶の禮を行はる。爾後亦姥雪代四郎を召出させて、貞行仰を傳るやう、姥雪與保、老て衰へず、百里の遠きを往復して、道節們の八犬士に、倶してかへり參りにける、その功鮮小ならず。恩賞は稻村殿にて、必御沙汰あらんずらん。先この旨を存ぜよとて、片茶の禮を允されけり。恩命遺る隈もなき、身の程々に過ぎにたる、就中代四郎は、感涙を禁難て、畏りをぞ稟しける。恁而見參の禮儀畢りて、兩個の近習左右より、捲たる翠簾を垂す程に、義實奥に退き給へば、大家ひとしく額衝て、姑且目送り奉り、然而八犬士を首にて、丶大照文、及代四郎に至るまで、各二家老に拱み向ひ、歡びを演恩を謝して、倶に遠侍へ退りしに、程もなく又別席に招きよせられ、貞行清澄、瀧田の老黨、某甲們列坐にて、則仰を傳るやう、犬士の毎、竝に十一郎代四郎は、明日稻村殿に參上りて、館に見參し奉るべし。延命寺は寺に退りて、明日稻村へ參會ひね。犬士們の休憩所は、造出されて、當城内に在り、只今御飯を賜ふべければ、箸を拿て退りね。と仰渡させ給ふにぞ、大家承り恩を拜して、共侶に罷り立つ程に、給侍の毎案内をして、又別席にて、饗饌を羞めらる。犬士と照文は同席にて、丶大と代四郎は、亦上下二間に別られたり。甲は出家人なれば、其饌に魚肉を用ひず、乙は格式異なれば、犬士に列ることを允されねども、膳部は疎なるべくもあ

年來の、退隱の翁なるに、今安房殿を閣きて、傲物しき對面は、那人の意に從ふて、先見參の試檢也。却感心の事こそ多けれ、親兵衛が三たびの大功は、世に有がたきことながら、开は仕ての上ぞかし。其外なる這七名は、いまだ當家に參らずして、信乃道節は、甲斐の猿石にて、濱路姫の窮阨を、救ひ拿りし大功あり。又毛野莊介、大角現八、小文吾們も結城にて、那僧俗の惡を懲して、反てその勍敵を、一人も殺戮せず、且先君の御遺骨を、異なく當國に入れ奉りし、こも莫大の勳功也。親兵衛が富山の功名、及汝們七名が猿石結城、二箇所の智計功名は、倶に當家の與にして、いまだ仕ざりし已前に在り。今也八雄滿足して、招きに應じこの地に聚合て、倶に安房殿に仕れば、楠家の八臣、新田の四天に、優りて憑しかりぬべし。各忠勤を盡しね。と懇切に譽慰めて、盃を賜する、恩命例あるべからねば、八犬士は倶に唯々として、言承を稟しつゝ、獻酬三度に及ぶ時、一人別に太刀一口、孰も價千金なるを、手自拿て賜りける。この式禮に時移りて、祝壽やうやく果しかば、ゝ大法師を召させ給ふに、この折蜑崎照文も、稻村よりかへりまゐりぬ、と聞えしかば、倶に召され見參す。登時亦義實主は、ゝ大法師の功德無量、照文も亦、招賢の宿命を、果しゝ勤勞を譽させ給ふ。就中延命寺は、二十餘年、信心移らず。こゝをもて神靈佛陀の、冥助屢經驗あり、遂に當家の寶貝たる、八賢者を汲引の、


滝田稲村の城に
八犬士
里見両侯に
拝謁す



仰を傳へ、程なく逢せ給ふべしとて、軈て奥へぞまゐりける。この折瀧田隷の老黨有司們も、八犬士に對面して、見參の式を傳達し、訖て廣書院へ案內をしけり。爾程に八犬士は、晉上の五明扇、竝に大刀馬代を、各前に閣きて、謹て等奉るに、姑且して義實主は、上壇の間に出まして、儲の裀に著給へば、貞行と清澄は、壇前なる左右に侍り。近習東峯萌三は、佩刀の役にて、そが儘後方にぞ侍りける。登時瀧田の老黨は、犬士們の姓名を、一個々々に告聞え、且つ晉呈の贄、恁々と、都て披露し奉れば、近習の每多くいで來て、件の扇子、太刀馬代を執接て、御前近く進らすれば、義實つら〳〵觀し、犬士們に席を賜ふて、先兩茶の禮を行はる。こは里見の家例にて、年始の祝壽、及初見參の折などに、親戚の人々、家老城主の每には、最初に薄茶を、主君にまゐらせ、その人にも賜るを、兩茶の禮と倡へたり。かくの如き每に、盃を賜るに、酬しまゐらせて、三度の禮あり。片茶は主君にのみまゐらせて、その人には賜らず、盃も賜ふのみにて、酬し奉ることを許されず。こは兵頭以下の有司、功ある者の格式也。この他は茶禮を行はれず、盃も賜流しにて、受戴きて退くのみ。开が中に、今八犬士に、兩茶の禮を行はるゝを、人みな是上なき榮とす。茶禮畢て、義實主は、犬士を身邊近く侍らして、含笑ながら宣ふやう、汝們は予が外孫に、擬ふべきよしありといへども、我身はこ

從ひ、一對の柳筥に、紫の厚總結びたると、天鵞絨の飾囊被たる長柄の傘、おなじ頭囊ある蠟塗の杖、淺沓発、雨衣籠なゝど持る、伴の奴隷、猶多かるべし。然ば八個の犬士們は、馬上優に列を亂さず、孰も青年二十前後にて、面白く姿美しきあり、又筋骨逞くて身材いと卬きあり。現鼻直く口横たはれる、人面異ならざるに似たるも、美貌醜顏、人さまぐの、中に玉成す壯夫們が、今青雲の時を得て、前駈後從の作當多く、徐行く馬上の光景は、這頭に得がたき壯觀にあなれば、路に行あふ良賤男女は、うち驚きつゝ訝り觀て、歩を停ぬはなかりけり。恁而八犬士は、代四郎貝六郎を先に立て、引れて瀧田の城に來つ、第二の城門にて馬より下りて、倶に玄關にうち登れば、小水門目案内に達て、遠侍に迨る程に、丶大法師も續きて參りぬ。代四郎と貝六郎は、倶にその席末に在り。聞くに義實主は、昨日當城に還り給ひぬ、今朝は亦、稲村の城よりして、犬士們を進退の與にとて、堀内藏人貞行と、荒川兵庫之助清澄を、はやく瀧田へ遣して、執事たらしめ給ひけり。初螢崎照文が、招賢の使を奉りて、關の八州をうち巡りしは、義實主、尙在任の時よりなれば、今番犬士們が初見參を、瀧田より掤させて、且故老の家臣奉りて、この日の執事たるよしは、終始本末、人を易ざる、愛たき例とぞ聞えける。間話休題。恁而貞行清澄は、丶大を勞ひ、八犬士們に對面して、老侯の

雲啓けて、天日を見る、時に取りては是も亦、面目あまりありとぞ思ひける。當下景能照文は、犬士們都て參著の趣を、館へ聞えあげんとて、別れて稻村の城へ赴くに、その身の伴當のみを將て、那十個の夥兵をば、なほ八犬士に從はするに、代四郎が伴當も、曩に風波に病煩ひて、上總の木更津より還りたる、奴隷と倶に三四名、瀧田の城より來にければ、いよゝ黨勢多くなりて、いと晴やかにぞ見えにける。爾程に、大法師は、犬士を郷導の頭人なれば、先へ立べき該なれども、勇士の馬前に出家人の、立んは相應しからずとて、故意後方に從へば、代四郎と貝六郎は、各伴當を領て先に拔みて、三門より出てゆく程に、八犬士も推續きて、准備の駿馬にうち跨るに、仁義八行の次第に倣ふて、第一番は則是、犬江親兵衛仁也。他は犬士を招會の、使者の一人なれば、郷導を兼るに宜く、字順も亦かくのごとくなれば、大家強て他を推て、はやく行列を定めたり。次は犬川莊介義任、犬村大角禮儀、犬阪毛野胤智也。是を仁義禮智、四行の一隊とす。是より下十間許、故意横路を啓きて相續ず。却第五番は、犬山道節忠與、犬飼現八信道、犬塚信乃戍孝、犬田小文吾悌順也。又これを忠信孝悌、四行の一隊とす。しかれども甲乙あるにあらず、只八行の字順に據るのみ。是より又二三十間引下りて、ゝ大法師は、網代包の轎子にうち乘たる、左右には、麻の袿衤の、股佩袺りたる兩個の寺侍と、所化四名相

御沙汰なれば、當館とまうせども、辭せ給ふべくもあらず。こゝろ得給へ。と諭すにぞ、ゝ大も倶に犬士を諫めて、剛才這使達が、拙僧と蜑崎姥雪に、兩館の御意を傳へ給ひし折、拙僧には乘輿にて、犬士と倶に參るべし、とありしかば本意ならねども、不敬の罪を、怕れておん承仕りぬ。然ば熟に拙僧が、更に穗北へ赴きて、各位を迎へし折、なほも行脚の打扮なりしは、二十餘年の宿望成就の、客情を果しゝ也。既に將てまゐりては、迭に一所不住也ける、行客の折と同じからず。呂尙（大公望）が渭濱に、文王と、同車の例に倣はずとも、己を枉て君の命に從ひ奉らずは不敬ならむ。この義を思ひ給はずや。と悄語示せば、犬士們は、倶に曉得て後悔しつゝ、謝して貌を改めて、然而景能にうち向ひて、畏りをぞ稟しける。言果て八犬士は、倶に別席に退きて、衣裳を更めなどする程に、作當聚合ぬ、と聞えしかば、軈て玄關に出立るに、ゝ大法師の轎子にて、寺格の作當尠からず。又八犬士には、一人別に隷られたる、兩個の伴若黨と鞋奴と、甲乙都て二十四名、玄關の邊に在り。この餘、乘馬八疋に、鑣奴十六名、並に鎗手柳筥、傘雨衣秣籠、坐革圓坐なンどを持る、伴の奴隷五六十名は、咸三門の外面に在り。そが中に、親兵衞が乘馬のみ、今番賜る駿足にはあらで、曩に當國を立去る折、稻村の城へ牽して、厩櫪駁吏に預けたる、那青海波也ければ、含咲るのみ、何ともいはねど、浮

丶大照文代四郎と共侶に、三板傳ひに船を離れて、濱の沙石地に下立つ程、夥兵作當は別船ながら、推續き漕寄られて、件を缺く者なかりしに、城より來にける人の數、殊更に多かれば、是より猛可に作當殖て、最晴やかに熱閙しき、旅迎にぞありける。恁而八犬士は、その人々を勞ひて、倶して延命寺に赴けば、客殿に請待せられて、早飯を羞めらる。この餘も管待大かたならず。是より先に、稻村瀧田兩所の城より、八犬士を迎接の頭人、苫屋景能、鮹船貝六、准備の人馬を多く領て、既に延命寺に來て、別席に在り。權且して件の兩個の頭人は、丶大照文代四郎と倶に、八犬士に面會して、兩侯の命を傳ふ。其言の趣は、犬士の毎、風波を歉はで、召に速に應じしを、神妙に思召さる。船中の疲勞あるべけれども、この年來等たるかひに、今日は先瀧田に詣て、明日稻村に參るべし。是に由て、所從の人馬を遣さる、遲礙すべからず。と演達す。當下犬士們は、席を避け拜聽して、倶に答稟すやう、兩舘の恩命、冥加にあまりて、倒に後安からず。親兵衞を除くの外、臣等は未だ、一介の功なきに、非如隷させ給へばとて、騎馬にして作當を、居多將てまゐりなば、烏滸がましく候はむ。丶大長老も同意なる歟。臣等を迎接に來ぬる折、兀自行脚の打扮なりき。然ども見參の禮服は、聊准備仕りぬ。只この儘に召倶せられん、事をし願ひ奉る。と辭ふを景能うち听て、否、この義は老侯の御意より出たる

自評に云、這前後二回は、上にもいへる如く、無異平和の事のみにて、且前回より此に至て、商議の段多かれば、看官歎しく思ふもあらん。遮莫皆是有要の事にて、内中に伏線あり、襯染あり。後に思ひ併さるべし。約莫作者の筆勢は、多く平和の話説に在り。且看官は承知の事にて、反て本傳中の人、そをいまだ知ざるあれば、亦復解ざることを得ず。其頭は竝て花なき故に、筆澁り硯乾きて、費心一倍なるものから、諄々として閣らず。是を作者の苦界とす。本傳處々にこの類あり、實に已ことを得ざるのみ。然るを知りつゝ左も右も、綴り果して、看官に、厭れざらむはかたき技にて、唐山元明、稗史の大筆、彼六才子と數まへられしも、思ひを潛る處なるべし。

第百三十一回　八行靈玉光を良主に增す　九歲の神童氏を花營に請ふ

離合時あり、窮達命あり。然れば、丶大照文が、八犬士を迎の快船は、通宵走りて、詰朝、安房の白濱へ將て來ぬる程に、延命寺より出し置たる、千里候の道人が報知せけん、本山の役僧五七口と、稻村の城より遣されたる、雜色奴隷さへ、多く等つゝ馬頭上に在り。登時八犬士は、

を、加えて夥兵十三名と、伴當を皆乘せにけり。犬士們の乘る船の、輕くて走るに速からん爲也。船の内には有種が、幾の程に歟餽り來したる、食籠酒壺多くあり。大家肇て是を見て、恁猛可なる別路に、心を用ひし交遊の、情義を感ぜぬはなかりけり。然ばゆく者は陸に向ひて、離別の口誼に遑あらず、目送る者は水際に立て、猶再會を契んと欲するに、船ははやくも岸を離れて、隅田河さして漕下すを、招くかひなき弱蘆に、聲咴しき囂々子、鳥すら友を思ふべき、憂ことあれば歡びの、あればある世に類なき、越に八個の俊傑を、八個の靈玉共侶に、串きとめし大法師の、功德は年をふる郷に、飾る錦の袈裟ならで、緇染法衣今もかも、抖藪行脚の打扮は、身を雲水に儘しつゝ、追風に競ふ快船の、はやく來にける澳津波、音のみ高く日は暮て、甲夜闇ながら星光、水に映るを螢か、と疑れぬる短夜の、明ぬ程にと篙工毎が、建連ねたる艪に楫に、械と腕の憑しき、力を勠していそぎけり。意ふに犬江親兵衛が、兩國河より解纜の折と、勢ひ相似て事情は、同じからざる所あり。那里は魔を討つ艨艟、這里は弘誓の蓬庫なる、法師も里見の寶貨船、八行の璧、打出の槌、躱簑笠、隱れなき、名を顯せる天の下、俯仰瞻れば上總なる、磯山傳ひ水長鳥、安房の白濱皓々と、明ゆく時候に風恬て、港口に船は果るなるべし。

て出て來つ、ゝ大照文に對面して、親に代りて恩貺の、歡びを稟しつ、且、大法師に乞て、十念を授らる、親の病厄解除の與也。爾後八犬士と代四郎は、一個々々重戸に對ひて、皆懇切に別を告て、尊大人は大病にて、厭しからむ、と憚りて、這回は故意諸慰めず、この儘にして別れぬる、本意なかりき。と不娯しげに、甲も一言、乙一句、迭の口誼長からねども、人多ければ時移りて、下晡になりにけり。幵が中に、ゝ大のみ、素より酒肉に疎ければ、唯人の裝る盃を、うち長視たる鈍ましさに、心悄地に焦燥つものから、推禁んはさすがにて、事の果るを等程に、照文諸犬士代四郎は、幾番となく東人夫婦に、辭ひてやうやく盃を、收めさせて退きて、身裝して出て來つ、大家ひとしく告別して、倶に外面へ立出れば、前後の夥兵伴當們は、是より先に伴部屋にて、酒飯の管待、漏るゝ者なく、事恁々。と照文に、告て玄關の邊に在り。當下有種は、世智介小才二們に、八犬士と代四郎の、行裹を持してぞ、千住河まで送りける。然ば亦、這穗北なる莊客們は、犬士の結城よりかへり來て、復止宿すと聞知りて、安房へ赴き給ふ折には、遠く送らんといひしかど、忍岡へ憚りあれば、有種豫他們を制めて、この日の離別を告知せず。恁而八犬士と代四郎は、ゝ大照文士僕と倶に、千住河原に來て見れば、今朝しも、ゝ大照文が、安房よりして漕し來にける、迎の快船二艘あり。その一艘には、初八犬士の倶したる




小文吾

改葬の、事の顚末を告知せ、有種には、正月以來、犬士止宿の歡びを述、夏行の病患の、安否を叮寧に問慰めて、然而兩侯より夏行有種へ、賜する東西兩三種、朝鮮人蔘、時服、夏引の麻苧なンど、折櫃幾箇に斂斂めしを、目錄と共に遞與すにぞ、有種はいぬる日に、八犬士の傳へたる、那一裏の歡びだに、照文には尙云々と、いふべき遑あらざりしに、今又有恁る恩貺の、大かたならぬに且羞て、拜謝するのみ、左右なくは、有繋に受も收め難しを、犬士們は傍より、爲に歡びを舒て、且良將の、仁義の餘澤を解示せば、有種やうやく目錄を、受戴て照文に答るやう、在下們は、貴藩のおん與に、一介の功なきに、昨今兩度の恩賞は、冥加に餘れる造化也。義父の病患瘥らば、必安房へ參上て、御恩を拜し奉らん。這義宜くおん執成を、願しくこそ候へ。と應て亦、大八犬代四郎們に、歡びを演る程に、次の間に侍りたる、世智介小才二こゝろ得て、おそる〳〵出て來つ、恩賜の折櫃を、手繰に奧へ運入れて、退んとしける折、有種やよ。と喚返らして、饗饌をいそがするを、大は急に推禁めて、有種に告るやう、今番は火急の君命にて、十一郞と共侶に、八犬氏を迎に來ぬれば、然る管待に預りがたかり。やよ犬士達、姥雪も、行裝に時をな移しそ。やよ疾々。と只管に、去向を促す揉臀に、有種強ることを得ず、先茶を看め果子を薦め、立まくしたる諸袂に、携りて纔に送行の、盃を羞る程に、重戶も召れ

を分つ者は、斷金刎頸の交りあり、なでふ止宿の久しきを歎んや。遮莫諸賢の齎しならぬ、貴介の恩賜と承れば、固辭奉るも不敬に似たり。爾りとて功なきに、受奉るは心にず、什麽すべき。と思ひ難しを、現八大角慰めて、然までに思ひ給ひなば、我們と共侶に、安房へ赴き給へかし。我兩侯はこの年來、賢を招かせ給ふをもて、博く愛して棄給はず。よき折からに候はずや。といふを有種聞あへず、そは願しく候へども、義父殘三は大病なるに、且預けられたる莊園あれば、目今驥尾に附がたかり。後の便宜を等んのみ。といふに道節信乃莊介、自餘の犬士も、代四郎も、亦云云と解諭して、薦る黄金に義を思ふ、有種只得受戴きて、重戸を召て、件のよしを、告てそが儘一裹を、遞與せば重戸は、犬士們に、うち對ひつゝ歡びを、舒て、親にも恩賜を、見せ侍らん。と孝心に、看病勤しき身を起しつゝ、軈て奥へぞ退りける。是よりの後、八犬士は、兩侯に見參の、衣裳を准備したるのみ、盤纏匱しからねども、孰も都て外物を、飾るを好と思はねば、その餘を求ることを要せず。安房より、大の音耗を、等つゝ一旬有餘逗留の程、五月の初になりし時候、有一日、大照文は、夥兵作當を從へて、穂北の宿所に來にければ、有種はやく出迎へ、犬士代四郎と倶に對面して、管待大かたならざれども、大照文は歸路をいそぎて、敢長談せず。八犬士には兩舘の、御諚箇樣々々と傳へ示し、且御遺骨

影西、父子忠孝の美談、徳用並に堅削經稜、素藤の事、風竊の天助、成朝の理非明斷、禍反て福に、做りけるよしを解示しつ、大法師は先君の遺骨を、安房へ倶し奉りて、更に又犬士們を、迎に來てん、と約束しつゝ、照文主僕と共侶に、途にて袂を分ちし折の、其事の尾まで、迭代に語を續て、最詳に告しかば、有種は听毎に不思議々々。とばかりに、感嘆膝の拔むを覺ず。恁まで天助冥福ある、這八犬士は、和にも、漢にも得がたき俊傑なるに、不肖の我身、犬山主と、舊縁ありて友垣に、入ることを許されしは、幸ひ也き、と尊信の心いよく他事なければ、管待滋篤かりけり。爾後道節は、自餘の七犬士と商量して、嚮に照文より預りたる、金一裹拿出つゝ、有種に是を贈りて、こは里見殿の賜ひし也。受收め給へといふ、こころを有種知ざれば、尙訝りて受ざりしを、犬士們齊一諭すやう、落鮎主、その一裹は、我們が齎しならず、實に我兩館の賜もの也。事情を推すときは、氷垣の翁は結城の殘黨、和殿は豐島の舊臣なれば、犬山犬塚に由縁あり。然ば犬山が復讐の始より、親兵衛を除くの外、我們這里に三四箇月、止宿のよしを蜑崎生が、聞知りて義俠を感じ、這回君侯より賄せ給ひぬる、餘金聊あるをもて、翁と和殿に餽れるなれば、則是兩館の、賜ものに異ならず。この義を查し給へかし。といはれて有種辭ふに由なく、沈吟じつゝ答るやう、同好知己の事に莅て、その憂

乘にける。這船國主の番船なれば、皆究竟の篙工毎なるに、且追風なりければ、波濤上安らかにて、明の日未牌の左側に、兩國河に漕入れて、宮門墨田に溯れば、はやく千住の郷に來にけり。不題再說。信乃毛野道節、莊介現八、大角小文吾、親兵衛們の八犬士は、曩に、丶大照文主僕に別れしより、代四郎竝に作當なる、三個の夥兵と、倶に一路十二名、路を武藏のかたに取りて、次の日穗北に來にければ、軈て氷垣の宿所に造るに、東人殘三夏行は、中風の病患初の隨にて、ものも得いはず身も動かねど、有種重戸は幾も易らで、管待いよ〳〵篤かりけり。この折親兵衛と代四郎は、初對面なりければ、有種夫婦胆を潰して、這老幼兩個の事は、豫聞しと同じからで、親兵衛が大人びたる、及代四郎は荒芽山にて、戰死の聞えありしに、こは別人歟、と訝りしを、犬士們はさもこそとて、犬江が富山に再出世の事の顚末、伏姫神の靈驗擁護、雄雪一家の萬死を免れて、富山に在りしよしまでも、告て疑ひを解きしかば、有種重戸いへばさら也、小才二世智介、奴婢們まで、傳聞く者駭嘆じて、凡夫ならずと稱えけり。恁而這主僕十二名、權且逆旅の杖を住めて、丶大の音耗を等程に、有種と團坐の折々、犬江親兵衛が、素藤妙椿を討夷げたる、二度の大功を首にて、孝嗣次團太、鮒三們が忠孝義俠、及他們が薄命の事、這回結城にてありし事、地藏菩薩の奇異利益、季基朝臣の遺骨、狙公の刀の事、又淨西

に置れたる、狙公の名刀を拿扛て、義成主に宣ふやう、大月像小月像、大小兩刀は、當家相傳の重寶なれども、小月像は富山にて、犬江親兵衛が大功の賞として、他に取せたりければ、兩刀の內中、一刀闕たり。しかるに先考御遺愛の、這狙公は、小月像に、優ること遠かるべし。月と狙とは、水月猿猴、那に代るに這をもてせば、拿得がたきを拿得たる、遺刀に因あり、亦緣あり。表裝は好みもあらん、和殿の隨意左も右もして、身の衞にし給へかし。と解示しつゝ遞與し給へば、義成主は遽しく、膝を找めつ受拿て、帶て歡びを稟し給ふ、口誼は看官猜すべし。恁而、丶大は暇を給はり、退り出んとしつる折、兩侯より衆徒の衣料に、絹五十反、布五十反を、賜ふべき旨を仰あり、貞行則承りて、後に延命寺へ遣しけり。この折亦照文には、數度のおん使の賞として、秩祿を增賜り、格席を登せらる、恩命遺漏なかりけり。爾程に照文は、君恩を拜し、瀧田の宿所に退りて、又起行の準備を整へ、次の日夥兵伴當を從へて、延命寺に來て問ふに、丶大法師は然る准備もせず、時いと早しとて、方丈にて閑談せらる。等こと久しかりければ、主僕に、煎茶夕饍の管待あり。恁而その宵二更の時候に、白濱なる篙工每が、風いと佳と報しかば、大家ひとしく立出るに、丶大は一個の沙彌だも倶せず、なほも行脚の打扮にて、笈を搭駝ひ、錫杖を衝鳴らして、倶に港口に赴きつ、主僕別れて准備の船、二艘にぞ

自臣僧と、照文主僕五七名にて、事足るべく候はむ。と辭へば照文も膝を找めて、氏元貞行に談ずるやう、いと憚りある言ながら、延命寺（ヽ大をいふ）の稟す義は、便宜にこそ候はめ。人多ければ路次遲滯して、障りなき事を得ざるべし。且那穗北は、忍岡なる、敵の城へ遠からねば、是も亦憚りあるべし。犬士が參聚ひて後に、格式を定められなば、伴當の多寡も候はめ。這囘は往復亟なるこそ、便利なるべく候はめ。といへば貞行沈吟じて、寔にその議も謂あり。然ば先度の例に傚ふて、究竟の夥兵十名と、行裹を持すべき、奴隷五七名にて足るべき歟。といふを義實主听給ひて、義成主に宣ふやう、寺主（ヽ大をいふ）と照文が意見も以あり。忍岡へ聞えもあれば、他們が主意に儘すべき歟。と問れて義成主異議もなく、仰承り候ひぬ。然らば事皆延命寺の、隨意計ひ候へ。と仰に、ヽ大は歡び承て、白濱は武藏へ赴く、便路にて候へば、照文と共侶に、翌夕解纜を仕らん。御改葬の首より、法務に遑なかりしかば、伏姬上のおん墳墓を、いまだ拜み奉らず。又願ひ稟さまほしき、事なきにしも候はねど、先要緊なる犬士迎を、果し候はん。と稟すにぞ、兩侯倶に點頭給ひて、その義尤しかるべし。明日照文に、夥兵伴當を從して、其許へ遣さん、倶に解纜をいそぐべし。この義は貞行、有司に下知して、宜く賄ひ得さすべし。と仰に大家額衝て、倶に言承をぞ稟しける。當下義實主は後方なる、刀架

かへり來にける、功を累ねし奇特は、譬を取るに物もあらず。我も太宗の例に倣ふて、弟といはまほしけれども、年齢我より兄なれば、內兄とこそ稱ゆべけれ。こは我心單にあらず、嚴君の御意を注するのみ。と諭し給へば、大法師は、いよ〳〵困じて、額に汗する、頭を擡げ得ざりしを、氏元然こそ、と執合して、兩侯に稟すやう、丶大法師の謙遜辭讓は、則忠臣の赤心にて、御諚は人の美を擧て、功を虛しうせじとおぼし召す、御本意にこそをはしますらめ。この義は先閣れて、一日もはやく犬士們を、招きよせさせ給ふべき、おん計ひこそ願しけれ。と稟せば義實主點頭て、有現先度とは同じからず。今番は他們が伴當の、准備を安房殿定め給へ。と仰に義成阿と應て、却氏元と貞行に、こゝろを得させ給ふにぞ、丶大は才に感涙を、禁めて兩侯に稟すやう、御懇命の辱さに、おん承當惑、畏うも、遲滯の罪を許させ給へ。臣僧釋門に入りしより、幾臘歟歷て候へども、弘經の與には寸功なきに、何でふ三藏を望むべき。然るを是上なき恩命は、臣僧のみ歟、父孝吉の、今も尙靈あらば、さぞな歡び候はむ、と思へば憶ず法衣の袖を、坐に濡し候ひき。却恐ながら御諚の如く、八犬士の伴當を、多く遣されんには、倒に路次の障りに、なる事も候はん。御意は賢者に等閑ならぬ、御厚篤にをはしませども、他們は質素を旨とすなる、勇士にて候へば、苟且にも外物を、飾る事を歡ばず。這回も兀

功昔の愆を、償ふに猶餘りあり。又那結城の禍鬼をおもふに、成朝良將ならざりせば、事一朝に解がたからんに、是も意外の歡び也。且這回犬士を中途に留めて、先御遺骨を倶しまゐらせしは、事序次ありて、我意に稱へり。既に安房殿（義成をいふ）に商量したりき。今日より法務に暇あるらん、照文と共侶に、はやく穗北に赴きて、犬士を迎へ來よかし。といと懇切に課すれば、丶大法師は、阿とばかりに、額衝たる頭を擡げて、御諚畏うも、承り候ものかな。臣僧原是何等の人にて、然る御褒賞に預らんや。愆には候へども、昔倣したる罪障を、許されまつらば、こよなき面目、事危きに似て安きに至るは、兩館の御盛德にて、伏姫上の神靈擁護、及八行を具足したる、八士の所以に候。と稟すを義成主推禁めて、然ないひそ。唐山には、相似たる例あり。那唐朝の三藏法師は、渡天の往還、十二箇年、約莫十萬八千里の、逆旅を凌ぎて、雷音寺に、經を受たる大功あり。太宗其首途を叡感のあまり、他を弟兄に擬へて、御弟と稱られしにあらずや。遮莫その十萬八千里は、遠しといへども、投す方あり。和僧は一旦散失たる、八顆の靈玉の往方を索ねて、毫も投す所なし。只志移らざりける、深信堅固の故にこそ、八顆の靈玉、八個の賢者を、聚合て當家の寶貝にすなれ。この大功は、三藏法師に、讓るべうもあらざるに、有や無やを定めかねたる、義烈院の御遺骨と、狙公の名刀さへ、携て

名勝舊迹奇絕の佳景に、遊ぶことなかるべし。況這改葬の條の如きは、上に念佛供養あり、相距ること三四回にて、亦復佛事あるなれば、事重復を免れて、犯さゞらんは僅ばかりにも、容易からぬを思ふは罕にて、作者の苦心を後々まで、知らぬは竝て多からむ歟。寔に要なき贅言ながら、村翁野客を醒さんとて、聊自評を附るにこそ。

却說、改葬の忌閼の日に、丶大は稻村の城に召れて、兩館に見參す。この折までも義實主は、當城に在しかば、拜見一時に事果て、丶大に饗膳を賜るに、照文を相伴にて、近習の毎給侍に達たる、管待等閑ならざりけり。齋畢て更に又、丶大を別室に招して、老侯は、安房侯と同席にて、髩皷くまで面談あり。身邊には氏元貞行と、照文のみぞ侍りける。登時義實主は、丶大を譽て、且宣ふやう、和僧が兩椿事の大功德、天助と犬士們が勇戰智略、又那惡僧德用們、結城の驕臣、經稜素賴惴利が奸虐の顚末は、嚮に注進にも聞え、その後又照文に、听て詳なることを得たり。就中那十十八入道淨西と、その子影西の忠孝は、古來稀なる美談也。畢竟那親子の陰德と、和僧が二十餘年の勤行、勇猛精進の陽報にて、地藏菩薩の利益ありけん。然ば當家に宿因深かる、八犬全備の招會すら容易からで、渴望年を累ねしに、他們よりなほ得易からざる、先君の御遺骨と、狙公の名刀を、家裏にせられたる、幸ひ何事歟これに優すべき。大

寺へ參詣す。第四日には、大山寺より、義烈院殿夫妻の墓碑を、延命寺に遷しまゐらせ、又瀧田の夫人五十子方、法號某院を、當山に改葬せらる。亦復是等の法事あり。第七日に義成主と、義通君も參詣し給ふ。兩侯公子墓參の折、伴當の多寡、打扮なンどは、こも事略ぎて詳にせず。正に是大諸侯の、富貴を、看官思ふべし。有恁れば改葬の法務、七箇日にて、やうやくに果にけり。只伏姫の木主のみ、大山寺より遷されず、延命寺の祠堂には、新製なるを居られけり。現伏姫は烈女也、こゝをもて死して滅びず、不動の靈地に憚ざるは、もて神に做せば也。

作者鎦帷の裏に在て、漫に獨語ていへらく、約莫這第三十回は、都て平和の話說にて、笑を取るに足らねども、亦これなくばあるべからず。何となれば、前に神佛の冥助あり、又、大の奇功あり。是に加るに、里見兩侯は純孝也。爾るに這頭を省略せば、所云龍頭蛇尾にならむ。抑和漢稗說に遊ぶ諸才子、新を出し奇を呈して、看官の愛憐ぶ條は作者もおのづからに筆找み、又話說平和にて、看官のすさめぬ條は、作者難義の文場也。遮莫是等の平話なければ、新奇も倒に綴るに由なし。是を旅ゆく人に譬へば、名勝舊迹、山水佳景は、誰も觀まく欲すれども、平和の驛路、險阻の山海、いくばく里か歷るにあらずは、

かば、軈て靈柩を擡出して、准備の穸に斂めまゐらせ、番匠們幾名輳聚ひ來て、殯をしぬる程に、更闌て星斑なる、曉天にぞなりにける。然ば件の殯の邊には、幔幕打たる守屋あり、番士雜色幾名か隷られて、交代に戍るなるべし。この夜の月は亥中より出たるに、張燈蕉火篝火さへ、本堂より塋路まで、處々に多かりければ、那不夜城も恁やと思ふ、國主の威德仰ぐべし。、大法師は廻向し果て、三家老と共侶に、客殿に退きて、然而狙公の名刀を、杉倉氏元に遞與しけり。這遺刀の事はしも、嚮に往進の條々に、寫著たる事にしあれば、三家老はこゝろ得て、、大の奇功を感嘆す。就中氏元貞行は、昔見たりし靈刀を、今亦越に手にぞ拿る、懷舊の涙堰あへず、老て要なき身も今さらに、生甲斐ありとぞ思ひける。然ばこの次の日より、安房四郡の諸寺院はさら也、上總及下總まで、里見の封内たる諸宗の住持は、修驗山伏に至るまで、豫猛可に徇られたれば、轎子を飛し路次をいそぎて、延命寺に來會す。路いと遠きは、第三日の、法筵に稍會ひにけり。恁而その第一日には、義成主參詣あり。この日は荒川兵庫助清澄、勤番の頭人たり。この餘浦安牛助友勝、登桐山八郎良于、苫屋八郎景能、田税戸賀九郎逸時們、有司なほ多かるべし。その次の日は、義通御曹司、第三日には、瀧田の老侯參り給ふ。この日は小森衛門篤宗、浦安兵馬乘勝們、老病致仕の者までも、願ひの隨意允されて、皆延命

ゝ大は、客殿に請待せられて、看主の老僧、看茶の禮あり。爾後杉倉氏元、東辰相、ゝ大を別席に招きて、兩侯の仰を傳ふ。君命の趣は、先大功を譽させて、且今より當山の住持として、改葬の導師たるべしと也。則布施として、錦繡の袈裟、紋紗の法衣、白綸子の夾衣と、奴袴一具を賜り、兩椿事の大功を、猶懇に賞せらる。登時堀内貞行も、禮服に更めて、この列席の内中に在り。美服は、ゝ大の本意にあらず、況本山の住持たるべしとある、御諚はなくもがな、と思へども、寵恩辭するに由なければ、拜し承て退りにけり。次に蜑崎照文も、召れて、禮服に更めて、兩館の仰を傳へらる。亦是代香使の勤勞と、靈柩の守護を譽させ給ふ、而且あまりあるなるべし。有恁し程に、讀經を促す、鐘鎗々と响くにぞ、ゝ大法師は、おん布施の、袈裟法衣に身裝して、威儀儼然と、看主の法師を先に立つゝ、徐々と出て、本堂に來にければ、この口はやく參會ふたる、大山寺の住持、諸寺院現住の老僧們、齊一迎て、揖讓あり。ゝ大は三たび讓りて後に、導師の席に著しかば、役僧磬をうち鳴らし、衆徒經卷の繙きて、讀誦に時をぞ移しける。爾程に、三家老諸有司照文們、左右二側に星列て、禮服の袖を連ね、瀧田の有司近習の每、小水門東峯鮹船們も、漏るゝ者なく相勤たる、事嚴しく見えにけり。この折導師、衆僧の所作は、いと多端なるべきを、事省ぎて具にせず。爾間に日は暮て、廻向燒香果し

寺には、この日、國主の家臣杉倉木曾介氏元、東六郎辰相を首にて、兵頭有司十數名、竝に瀧田の老侯よりまゐらせられたる、老黨有司近習の每、東峯萌三、小水門目、鮹船貝六郎と共に、通計三四十名、當山看主の老僧と、諸寺院の住持の、參聚ひし者、幾十名歟、或は玄關、或は本堂に在り、或は三門に立出て、櫬柩を迎奉る。門前には裝沙あり、且三箇組たる番手桶多くあり、又高張の挑燈五六對あり。三門より本堂に至るまで、中黑の花號染做したる、白麻の幔幕幾張歟、透間もなく張亘したる、甃石の左右には、警固の輕卒一百名、袴の稜いと印く、膝の上まで褰祜み、手に〳〵桿棒を突立て、非常を儆る者、門前にも亦かくの如く、齊整たるを、推て知るべし。況本堂の壯嚴は、紫の幕、紫雲かと疑れ、金色の本尊は、拈華微笑の容顏貴し。然ば紈龍の畫天井より、垂たる華幔、旛天蓋美麗く、佛の御前の臺盤には、燭托の鶴龜、畜生道の呵責を知ず。爾らば華箭なる金蓮は、無熱池の水にや生出けん。錦綉の打敷、眼に赫奕き、打鳴す鉦磬、耳に噪しからず。供物の餅は、五色を雜へ、阿吽の獅座は、香爐に見えて、數脚の机案に、經卷多く、大册の靈籍、見臺に在り。現美を盡し善を盡しゝ、通ての事の光景は、細に名狀すべからず。看官この餘を査しねかし。却說靈柩は、巾牌時候に、延命寺に入り給へば、本堂に居まゐらせて、衆僧竝に貞行照文們は、そが儘守護して退かず。

是より隊伍を整へ、、大照文は先に立、貞行は騎馬にて、後方にあり。齊々整々として徐行く程に、その道路土民の、老弱男女肩を比べ、處々に聚ひ跪きて、櫬柩を拜む者尠からず。然ば件の延命寺は、近屬義成主の沙汰として、建立ありし香華院也。初義實主の時、那平郡の大山寺に、先考先妣の廟墓を造り立、且五十子方の墳墓をも、其邊にものせられ、又伏姫の木主をも、那寺に措給へり。しかれども大山寺は、原是不動の靈場也。那里の不動は、日本武尊なるべしと云、好古の記録に載たるもあれば、墓碑は憚りなきにあらず。義實是に依て、後悔あり。義成その性孝順なるに、且老侯の後悔理りなれば、則件の白濱に、一箇寺を建立して、無量山延命寺と做喚しゝは、大客歳よりの事にして、去年落成したれども、智識の名僧を得がたければ、いまだ初祖たる住持はあらず。一個の看主と、衆徒四五十口を聚置るゝのみ。この故に大山寺より、兩先靈の廟墓をも、五十子方の墳墓をも、尚改葬はなかりしに、今番不測に義烈院の、遺骨を迎奉れば、瀧田稻村の兩侯は、憂の中なる歡びにて、改葬の儀式大かたならず、軈て延命寺に入れまゐらせて、安葬の義を行ふべく、且廟墓と墳墓をも、件の寺に遷すべし。因て、、大大德を、開山の鼻祖として、住持たるべき者也、と猛可に定られたりければ、貞行則この議に依て、白濱へ倶しまゐらせけり。間話休題。爾程に白濱なる、無量山延命




市河坂
照文
貞行の

なりければ、倶に其書を披き見て、歡ぶこと大かたならず、軈て注進の趣を、義成主に聞えあげしかば、義成感悅いふべうもあらず。隨即荒川清澄に、丶大照文の使价三名を差添して、瀧田の城へ遣し給へば、義實主も奇に驚き、且、丶大が不測の大功の、一方ならぬを只顧に、嘆賞涯りなかりける。然ば先君のおん骨迎へ、並に改葬の事はしも、稻村殿(義成主)の意見に依るべしとて、那里の處分に儘し給へば、一兩日の程にして、准備はやく整ひけり。爾程に、丶大照文主僕は、使价を安房へまゐらせし詰朝、關宿の道場を立出て、連りに路次をいそぎしかば、約莫二宿許にして、はやく上總路に來にければ、稻村より下知せられけん、其頭の守城の頭人は、各士卒を將て出迎へつゝ、管待特に淺からず。恁而、丶大照文は、第四日の巳牌左側に、上總と安房の封疆なる、市河坂まで來にける程に、稻村瀧田の兩侯より、堀內藏人貞行に、士卒並に柩舁、雜色奴隷さへ、都て二三百名隷させて、遺骨を迎らるゝに逢にけり。登時貞行は、丶大照文を、一霎時其邊なる道場に、立寄せて對面す。この折嚮に、丶大照文の使价に達たる、兩個の夥兵と紀二六は、昨朝上總路までかへり來て、四家老の回翰を、丶大照文に遞與しゝかば、既に伴當の中に在り。恁而貞行は、丶大照文に、兩侯の仰を傳へて、丶大の大功を譽、長途を勞ひ、准備の櫬柩に、骨壺を斂めまゐらせて、倶に白濱なる、延命寺に入れ奉るに、士卒

當を相俱して、關宿より水行を要せず、上總を過り、安房へまゐりて、更に又八犬士を、迎に來てん、と約束しつゝ、別れて路次をいそぐにぞ、犬士並に代四郎は、三個の夥兵を從へて、穗北を投て、二條の、路の去向の夏霞、引別れつゝ遙なる、天に聲する舞鶴、かへさ忘れて子や鳴ん、心も知らず人は卒、今こそ罷れ田に畔に、麥の初穗に揚らしたる、秋露けき旅衣、乾よしもなき友垣の、事をし思ふ向膽の、こゝろぞやるせなかりける。爾程に、丶大照文主僕は、犬士們に相別れたる、その宵は關宿なる、道場に歇を求めて、兩舘へ注進すべき、先君義烈院殿の御遺骨の事、及八犬士們に環會て、穗北に留置く事の趣を、詳に寫著つゝ、この甲夜間に、兩個の夥兵と、紀二六に吩咐て、若們はこの津より、今宵船にうち乘て、はやく兩大城（稻村瀧田）へ注進せよ。意ふに海上順風ならば、明日は必那地に迨らん。這呈書一通は、瀧田殿（義實老侯）へ獻れ。又一通は、稻村なる、四家老達に相達して、尋らるゝよしあらば、御遺骨の事、八犬士の事、見も聞もせし如く、詳に聞えあげよ。その餘の事は箇樣箇樣。と示して書翰を遞與しゝかば、紀二六們はこゝろ得果て、快船を央ひうち乘て、安房を投て走らするに、折から順風なりければ、思ひしより逸早く、次の日稻村の城に届ることを得て、隨卽、大照文の、注進の呈書を、堀内貞行に呈閱して、事態々と稟すにぞ、四家老出仕の折

には似ず、相應しからねど、東西持すべき手のあれば、無僕には勝るべし。譬ば那里に逗留中、大敵襲ひ來ぬるとも、然しも八士の武勇をもて、なでふ作當の幇助を借んや。この義穩當なるべき歟。といふに照文感服して、又八犬士にうち向ひて、各目今听れし如く、庵主の意見理りならずや。夥兵三名をまゐらせん、いかで承引給へかし。と他事なくいへば、犬士們は、そを推辭んはさすがにて、恩を拜しつ、件の金は、そが儘道節預りて、懐にぞ歛めける。恁而再度の商量も、言はやく果しかば、照文は紀二六に、こゝろ得さしつ、晝饌の、價を店小二に還して、卒とて大家身を起して、草鞋を穿つゝ這店を、出てゆくこと幾町なりけん、武藏へ別るゝ便路あれば、八犬士と代四郎は、三個の夥兵を從へて袂を分たんとしぬる折、親兵衛毛野、莊介小文吾は、ヽ大照文に囁くやう、この川下は逈にて、暴河へ合流ぬれど、その間には、田圃へ引るゝ細流もあらんかし。倘浮屍骸を見給はゞ、孝嗣次團太鮒三が、做れる果かも知るべからず。庵主は面善り給はずとも、かの折の衣の色は、犬江こそ好知りたれ。といふに親兵衛恁恁と、件の三人の面影と、年の齢と、衣の色まで、いと詳に告知すれば、ヽ大照文うち點頭て、そはこゝろ得候也。作當にも遺なく示して、こゝろを屬させ候はむ。と應をしつゝ犬士們が、交遊の義に厚かるを、倶に感心したりける。恁而、大と照文は、五個の夥兵、九個の、作

寸功あらざりける、臣等に有恁る寵恩は、冥加餘りありて、今さらに、おん承當惑仕りぬ。臣等も亦先君の、御遺骨のおん作を、仕るべき該なれども、未兩館に拜見せざれば、その義隨意ならざるに、幵をいかにして八個の夥兵を、倶して穗北へ赴んや。那人々は、御遺骨の、おん作勿論たるべき歟。且氷垣落鮎は義士なるに、莊園多く候へば、非除十人二十人、逗留客あればとて、雜費に事を缺くべくも候はず。なれども兩館の御恩澤を、他們に傳る爲ならば、這おん金は拜受して、他們に讓與へ候はん。然ばとて多人數にて、逗留に日を累ねなば、那五十子と忍岡の、敵の城内に洩聞えて、又禍鬼をや惹出さん。その義も後安からねば、作當の義は只管に、用捨をこそ願しけれ。こは我一個の愚衷にあらず、自餘七個の義兄弟も、情願かくの如くなれども、就中在下は、那壻翁に恩義あれば、初に發語したりし故に、諸兄弟に代れる也。この意を査し給へかし。といはれて照文應難て、丶大に意見を請問へば、丶大も一霎時沈吟じて、照文に答るやう、聞が如きは犬士の情願、理りならずと思ふことなし。然ども今より八犬士は、我兩館の御家臣なるに、無僕にして穗北に造らば、館のおん與に外聞歹かり。爾りとて、多人數にては、憚りありといはるれば、幵も亦強て薦めがたかり。往日兩國河原にて、犬江が借用しつと聞く、夥兵の例もあるなれば、兩三名を隷給へ。八個に三名の作當は、犬江

館のおん與なれども、御遺骨を先にして、臣等を後にせらるゝが、則君臣上下の階級、理の當然といひつべし。孰か教諭に從ざらんや、皆こゝろ得候。と亦別議なき言承に、代四郎憶ず吿咲て、数ならぬ身をおん使に、遣られまつりし甲斐ありて、今亦故主們に隷るゝ、一期の面目この上なし。本意也けり。と不勝の歡び、然こそと思ふ犬士們は、有憑る折にも孝嗣次團太、鮒三が薄命を、又云云といひ出て、遺憾やる方なかりけり。當下蜑崎照文は、八犬士にうち向ひて、嚮にも告し事ながら、いぬる日卑職、紀二六をもて、那氷垣許訪せし折、東人夏行の病患の、重やかなる事の趣、及和殿達は稍久しく、那里に止宿の顚末まで、聞知て候へば、いかでかへさに立寄て、安否を問まく思ひしかども、衆議一決して、路異なれば、今番は素懐を果しがたかり。諸彦那里に造り給はゞ、この意を傳へ給へかし。といひつゝ懐なる財嚢より、圓金一裹を拿出し、扇兒を開きうち載て、喃諸君子、這おん金は、今番倘幸ひに、和殿達に環會ば、臨時の費用は取せよとて、館より賜りにき。作當には夥兵們を、八個みなまゐらせん。姥雪を加えて、主僕十七名、氷垣許十四五日、止宿に所用あるべきに、已前も雜費多かりけん、宜く相計ひ給ひね。と囁き示して件の金を、恭しく遞與すにぞ、八犬士は阿とばかりに、應をしつゝ左右なく受ず、一霎時小音に商量し果て、道節が答るやう、親兵衞を除くの外、いまだ

犬阪の、意見はさら也、犬江の議論は、人情に似て公然也。庵主海容あれかし。と異口同様に庶幾ふ、衆議稍一決したりけり。登時、大は沈吟じたる、頭を擡げうち點頭て、諸彦の情願、寔に以あり。恁いはゞ下として、上を料るに似たれども、兩館は人の及ばぬ御孝順にをはしませば、先君の御遺骨改葬の義によりて、必しも七箇日の、おん齋戒あるならむ。然ろ折から和殿達を、相伴ふて參りなば、凶事と吉事と混雜して、不便にこそ思し召らめ。然ば先、拙僧と蟹崎生は、御遺骨を衞奉り、一日もはやく安房へまゐりて、よしを、兩館に聞えあげ、御改葬の事果て、更に又和殿達の、旅宿に赴き、相倶して、然而見參に入れ奉らば、迺事に階級あり、吉凶混亂すべからず。この義いよ／＼同意ならば、和殿達はこの地方より、拙僧們に相別れ、穗北の鄕を過る折、氷垣許立寄て、逗留十四五日に及びなば、拙僧們は又安房よりして、和殿達を迎の與に、穗北に造りて對面せん。其時候過ても音耗なくば、各位は那里を去て、上總まで來て、舘山なる、城に入て等給へ。然では迭に約束ありて、迎接品騰すべくもあらず。這議は什麼。と叮寧に惝語示せば、道節親兵衞、自餘の犬士も歡び承て、その議寔に佳妙也。親兵衞と代四郎は、這囘新に加增えられて、我們七名を招會の、おん使で候へば、我們安房へまゐるまで、進退を倶にせん事、私に似て私ならず。庵主今我黨を、鄉導の一椿事は、是兩

れしごとく、順路に就くは義にあらず。非如一晌三箇日、はやく安房へまゐるとも、然る不義の士ならば、稲村殿いかにして、愛憐せ給はんや。咱們は穂北へ立寄るべし。今さら別義なしといふ。信乃と毛野とはこの議を喜して、倶に、大照文に談ずるやう、目今具に听れしごとく、犬山が欲するよしは、人情に侍れども、實に已ことを得ざるに在り。因て我們思惟るに、庵主並に蟹崎主は、この年來我黨を、聚合て君に薦ん、と思欲たる本意を遂給へば、大功例なかるべきに、又先君の御遺骨を、安房へおん作做し給ふは、猶一層の大功にて、我們を招會の、君命より重かるべし。恁れば庵主蟹崎主は、御遺骨を衛奉りて、安房へ赴き給はん事、勿論に候歟。却我們は、亦一兩日、身の暇を賜りて、那穂北なる夏行許、立寄ることを允されなば、公道人情兩ながら、缺ずとやいふべからん。但し犬江親兵衛は、自餘の七人と同じからず。他も亦招會の、おん使に候へば、庵主に倶して、返命を聞え上べくや候はん。と議するを親兵衛推禁めて、开はいはるゝことながら、御遺骨の事はしも、進退庵主の上に在り。咱們は、七個の義兄弟を、相伴ふて安房へ還れとある、御諚を初より承たるに、獨別れて那里へいなんや。且那氷垣落鮎の、義俠を豫聞知りたれば、對面せまく思ひしに、かへさの便宜は本意に稱へり。そを思はずや。と怨ずれば、荘介も現八も、大角も小文吾も、共侶に點頭て、犬山犬塚

第九輯　巻之二十一

第百三十回

里見侯白濱に旅櫬を葬る
大法師穗北に客情を果す

却説信乃毛野、道節莊介、大角現八、小文吾親兵衛們の八犬士は、、大代四郎、照文主僕と、倶に諸川の驛稍盡處なる、飯店に立寄て、晝飯を喫果しかば、去向の便宜を相譚ふに、或はいふ、關宿より船に乘りて、安房へ渡らば順路にて、陸をゆくより速なれども、庵主は先君季基朝臣の、御遺骨を駝給ふに、路の近きを貪りて、風濤の險しきを、今さらに犯すべからず、且穗北の一議あり。然ばとて皆共侶に、路を武藏へ取るならば、亓は迂遠くして、慥ず時日遲滯せん。然るときは君命を、家に留る者に似たり、とは思へども、夏行と、有種は義士なるに、今番かへさに那病患の、安危を問ずは、亓も不義也。今公道を宗とせば、人情に缺る所あり、又人情を先にせば、公の道立ず。いかにせまし、と思ひ難たる、衆議尙區々なりけるを、道節單決斷して、餘人は左まれ右もあれ、那氷垣落鮎は、我復讐の幇助に做りたる、恩義をはやく忘

饌を誂て、夥兵作當一様に、各書飯を果しけり。畢竟八犬士們這里に憩ひて、後の話說甚麼ぞや。幵は下の囘に、解分るを聽ねかし。

らず。誰かその因て、起る所を覺知んや。然ば神佛の靈驗利益は、慥に思ひ定めずして、只その冥福の、我に及べるを尊み仰ぐを、達者の用意といふべからん。曩には我姉君の、靈驗を喋喋しく、稟す者ありしかど、我は只この意をもて、慥に思ひ得ざれども、冥福あるを歡ぶのみ。と最叮寧に諭し給へば、照文深く感服して、寔に得がたき御教諭にて、無明の醉は醒侍りぬ。昔年毛野が論じしも、恐れながら相似たれど、御論はなほ精細にて解しがたからず、こゝろ得易かり。因て思惟れば中庸に、國家將に興らんとすれば、禎祥あり、國家將に亡んとすれば、妖孽ありといへりしも、則魔佛同根にて、靈驗利益と、妖怪變化と、禍福の同じからざるは、只その人にあるよしを、曉得るも皆是御高論の、御庇にこそ。と只管に、稱えて退り出にけり。こはいと後の話なれども、淨西影西、父子忠孝の小傳の、局をこゝに結んとて、文を次る事かくの如し。看官前後を相照して、是より下は、廢院の、果の段に復して見るべし。閒話休題。

再說八犬士、、大代四郎、照文主僕は、當日朝重と未得を目送りて、軈て荒院を立出つゝ、諸川の驛を過る程、既に亭午なりしかば、大家晝餉をたうべんと欲するに、驛稍盡處なる飯店に、帘を揭出して、酒と飯を賣るあれば、卒とて倶に立寄るに、這店いと奇麗やかにて、奥にも座席ありしかば、、大八犬士、照文代四郎は、倶に奥まりたる伽屏の陰に坐を占て、蔬菜の

を稟しけり。この比義成主は、照文を召よせて、結城の光景を、問給ふことありしに、照文は、那能化院の本尊なる、勝軍地藏菩薩の、昔ありける利益靈異を、今番親兵衛と倶に、肇て悟りしよしをいひ出て、その故は箇様々々、と曩に親兵衛に、丶大の急難を告知しゝ法師の事と、照文に、丶大庵を案内しける法師の事を、解示しまゐらせて、前後約束の違ざりける、靈佛奇妙の應驗を、只管稱賛したりしかば、義成主點頭て、开はいと奇しき事なりき。約莫靈佛の利益をいふ者、和漢に例尠からねど、木石十二體の地藏菩薩、倶に化現の靈異ありしは、前未聞の利益也。しかれども、是を地藏の化現也、と思はゞ惑ひの醒ざる也。何となれば、石をもて刻み、木をもて作りし佛像の、よく手脚を揮して、言ふべき道理なし。その石佛木佛の、得做まじき事を做せるは、譬ば那傀儡師の、よく木偶を儛する像く、开を使ふ神物の、別に必あるならん。別に神物あるときは、佛像の靈異にあらずとせん歟、然では佛の利益を否して、愚俗を善道に導くに由なし。爾りとて、石像木像の地藏菩薩が、未然の禍福をよく知りて、手を動し脚を運して、言ひし事ありといはゞ、听く者孰か實事とせん。この故に聖人は、怪力亂神を語らずといへり。都て神異靈應の、人に福あるときは、世俗是を靈驗利益と稱え、又神異靈應の、人に禍あるときは、世俗是を妖怪といふ。有恁れば魔佛同根にて、相距ること遠か

たるに、這本尊の地藏星も、額の中央にはあらで、些し左へよりたれば、原其那折の忠告法師は、這本尊の化現なりけり、と肇て悟て、且感心のあまり、よしを照文に悄語けは、照文も亦心づきて、咱們も曩に代香使たりし折、丶大庵を尋かねしに、案内をしける那法師の相貌も、この本尊に似たりけり。甲も乙も這御佛の、化現の利益なりけるを、今は十あまりの年を歷て、肇て倶に悟りき。といふを、丶大もうち听て、人の發明遲速あれども、佛の利益は始より、違ざりしを感じけり。恁而、丶大親兵衞照文は、倶に客殿に請待せられて、先知客の役僧に、里見殿の故らに、三箇所十二箇の、地藏菩薩へ寄進し給ふ、三箇の銀の大香爐と、幾唐櫃に藏めたる、一切經を遞與にければ、住持影西出て對面して、茶を看め果子を薦め、然而里見殿の寄進の、大かたならぬ歡びを舒などして、一切經は、年來欲しく思ひ侍りしかども、恁る田舍にて、輙く得がたければ果さゞりしに、今番賜りしは、宋板なれば、實に千金の至寶也。昔年庵主の、逸疋寺へ遣し給ひし、三種十數軸の經と共に、今より寶藏へ祕置て、永く法孫に傳へ候はむとて、怡悅の眉を開れける。爾後、丶大と法問あり、又齋を薦めらるゝ程に、日影既に傾きたれば、丶大親兵衞照文は、能化院を立去りて、伴當夫役を從へつゝ、一宿して次の日に、又關宿より船に乘て、又その次の日に、稻村の城へかへり來つ、倶に義成主に見參して、返命

義成主に見參し、ヽ大照文、代四郎にも對面して、兩國守の舊交新約、障りなく整ふ程に、義成主は、影西の孝順、その父淨西の孤忠によりて、先大父義烈院の白骨、改葬の歡びを、叮寧に宣して、日每の饗饌大かたならず。影西は逗留の間、出家なれば許されて、大山寺の不動、洲崎の岩窟、那古富山の兩觀音、伏姫の靈迹、義烈院殿(季基)の廟墓へも、參詣の本意を遂て、罷去んとしぬる前日に、義成主は、影西朝重に、東西を賜ふこと尠からず。更に亦、ヽ大法師と、犬江親兵衛、蜑崎照文を、答禮の使として、國產と、三所の地藏菩薩へ、寄進の東西をさへ、多く夫役們に舁せ從はして、影西朝重と、倶に結城へ遣して、兩國和順誓約の、禮に答給ふにぞ、成朝主いよゝ歡びて、ヽ大、親兵衛照文に、饗應山河の珍味を盡しつ、且多く牽出物を賜ふて安房へ還されける。是よりして後、里見結城の兩家、長く脣齒の國となりて、相犯すことなかりけり。這折親兵衛は、ヽ大照文と倶に、那路傍堂なる石地藏、季基主の鎧塚、淨西法師の墳墓に詣ける、かへさに又能化院に立よりて、十體の石地藏菩薩を拜み奉り、又本堂なる、勝軍地藏菩薩に燒香の折、這本尊を、つら〳〵と見奉るに、曩に諸川の那方にて、ヽ大法師と、代四郎照文主僕の、急難を忠告しける、那法師の面影によく肖たれば、訝りながらなほよく相るに、件の法師は、額の眞中より、聊か左によりて、いと大きなる黒子ありしを記憶

に聚ひ來て、土を運び木石の車を推す者、日毎に幾百名なるを知らず。約莫三稔許にして、七堂伽藍遺もなく、奇麗壯觀目を驚すまでに、都て落成したりけり。こゝをもて、影西長老は、那勝軍地藏菩薩を、逸疋寺の寶藏より出し奉りて、昔の如く能化院の本堂に居奉り、又その本堂の西のかたに、地藏堂を造營して、那十體の石地藏をも、逸疋寺より、件の堂に移しまゐらせ、又那左右川の邊なる路傍小堂を、いと廣やかに造更めて、その四下なる莊客の田圃を、價宜く購拿りて、香華料として、守堂の老僧を置きけり。況又能化院には、學寮を建て、衆徒を教育し、曩に德用に追遣られたる、良善正直の法師們を召還して、諸役僧に做ければ、國守成朝主、その大功を譽て、影西前權僧正を、能化院中興の祖と仰ぐべく、なほ逸疋寺の住持をも、兼帶すべしと命ぜらる。原是逸疋寺は、能化院敎主寺の屬院なりしに、本山荒廢より以來、その子院屬院は、多く逸疋寺に屬從ひしを、今番又改めて、都て能化院に隷られけり。影西既に功成りしかば、法務の暇、安房へ赴きて、里見殿に見參し奉り、且、大庵主、八犬士にも、對面せまくほしとて、國守の旨を伺ふに、成朝主歡びて、我も亦この折をもて、舊交を復結んとて、軈て小山朝重と、影西長老を使として、種々の土宜を齎して、安房へ遣し給ひけり。恁而影西長老は、朝重と共侶に、多く伴當を將て、稻村の城に來著しつ、八犬士に就て、

の使僧を結城へ還して、某の院の法親王に、陳情の啓をたてまつり、且病著に托著て、連りに職事を辭ひ稟しょに、法の竹園直ければ、その孝順を感じ思召とて、願ひのまに〳〵下總へ、還ることを允し給ひしかば、この年の冬の時候、影西は、結城なる、逸疋寺にかへり來つ、師父未得に對面せしかば、迭に再會の歡び大かたならず。軈て國守に聞えあげて、影西逸疋寺の住持に倣りしより、遠近の良賤渇仰して、繁昌隣國に類なかりけるに、又那十體の石地藏と、又那路傍小堂なる地藏菩薩の、利益靈異を傳聞く者、參詣日毎に間斷なく、兩所の賽錢、夕々に、箕をもて料らざることとなし。こは皆逸疋寺へ收納しぬれば、財用餘りあるものから、影西は儉素にして、衆徒を教育の暇ある毎に、徒弟四五名を將て、みづから錫を突鳴らしつゝ、城下の町、近郊の邨里を劵緣しけるに、大刹の住持みづから出て、衆生に薦る托鉢なれば、賢も不肖も皆尊信して、その捨の寡きを恥とせり。有恁りし程に、先住未得は遷化して、三周の忌に丁る年までも、逸疋寺に聚合たりし金、無慮二三萬兩になりぬ。影西は豫より、那六道山能化院を、再興の志願あり。秄が爲に貯たる、財用なれば、他事に使はず。よしを國守へ愬へ、免許を經て、土木の工を興しょかば、成朝主歡びて、則數千金を捨して、その經營を幇助給はり、且能化院の坊料を、舊の如く寄附せらる。然ば結城、武井、諸川の士農工商、招ざる

讞斷の一條は、朝重搃裁として、有司と倶に、主君の旨を伺ひて、像のごとくに行ひけり。爾程に經稜素頼は、纔に獄舍の呵責を饒され、所親の家に閉籠られて、放免の日を等けるに、その六月の時候にやありけん、熱病に犯されて、倶に黄泉の客となりけり。爾るに經稜素頼、及惴利は、各髫歲なる男子あり。そは母親に携られて、外祖の家に、養るよしし聞えしかば、三稔許歷て後に、成朝則件の經稜素頼、惴利が兒子三名を召出し、親の本領の半分を賜りて、堅名長城根生野の、絕たる家を嗣しめ給ひぬ。成朝かくの如く公平にて、賞罰正しかりければ、諸臣畏服して、亂臣賊子なく、忠臣賢才は用ひられて、這家長く治りつ、天正の年間、晴朝の世に至るまで、舊家連綿の大諸侯たりしよしは、世の人の知る所也。閒話休題。却說逸疋寺の未得は、德用堅削が追放せられしこの年、使僧を京師に遣して、故の徒弟なりける、那僧正影西に、德用堅削們は、犯せる殺伐の罪により、追放せられしよしを告知して、我寺荒て、諸檀離れんとす。御坊始を忘れずして、鴻雁北に歸くの意あらば、いかで僧綱の顯職を惜まで、はやく我寺に來て法燈を紹ぎ給へ、一葦の亟ならんよしを、等こと旱天の雨の如しとぞいはせける。影西この消息を得て、感涙の拭むを覺ず。倘今顯職の勢利を捨て、師の招きに應ぜずは、這世は牛車の榮ありとも、來世は必地獄に墮ん。只速にゆくべしとて、先そ

かへり來つ。隨卽主君成朝に、靈佛の奇異、犬士の武勇、丶大照文代四郎們が、答稟しゝ事の趣、及經稜素頼、德用堅削們、僧俗十數名の罪人を受拿て、牽して歸城の終まで詳に聞えあげしかば、成朝主又うち驚きて、丶大の道德、犬士の智勇を賞感特に淺からず。往古より靈佛の、利益をいふもの多かれども、然まで正しき靈異は得がたし。我も結緣の爲なれば、その念佛の行者丶大と、八個の勇士に對面して、意衷を示すべかりしに、悔しかりき、とうち不娛て、今さら捨がたき思ひあり。是により、經稜素頼們の、非義非法の罪を糾して、賞罰公ならずもあらば、必や隣國の諸侯の爲に侮られんとて、更に朝重に課て、件の罪人們を、緊く獄舍に繫せて、拷問數回に及びしかば、經稜素頼、德用堅削們は、今番の奸詐暴虐を、具に招了しぬるのみならず、年來驕恣にて、上を憚らず、下を虐げたる事までも、這時都て發覺れけり。しかれども經稜素頼們の親は、嘉吉に忠死の舊功あり。又德用は、當家再興の折、京都の管領家へ、提撕しよしもあれば、俱に死罪一等を宥めて、經稜素頼は、所親に預け置れ、德用堅削、竝に同惡の僧俗は、或は法衣を剝捉られ、或は背を鞭れて、俱に追放せられける。この日逸疋寺の先住未得を召よせて、德用們は、恁々の罪あれば、追放せらるゝよしを言示されて、後住は、その器に當るべき、學徒の老實なるを擇て、入院せしむべし、と命ぜらる。この

親兵衛を除くの外、いまだ主君に見參せず。這回やうやく時至りて、八人遺なく相伴て、安房へ赴く旅なれば、不本意ながら結城へかへりて、賢君親疎に私なき、憲斷の歡びを、稟すことを得ざる也。この義宜く執達の、芳情を仰ぐのみ。と一個々々に語を續て、異口同樣に辭ひつゝ、ゝ大照文代四郎さへ、留るべくもあらざれば、朝重有繫に強かねて、切て諸川の酒樓にて、留別の酒杯を、薦めまほしく思へども、私の面會ならぬ、君命の使价にて、且いと多かる罪人を、牽もて退れば、愚意に儘せず。卒爾にこそ。とうち陪話れば、犬士も亦慇懃に、いかでかは然る義あらん。苟且ながら主客の禮あり、先立給へ。といそがせば、朝重隨即外面なる、夥兵們を召入れて、經稜素頼德用們の、僧俗如干の罪人の、索を拿らしつ牽立させて、且門外へ出し遣りて、然而未得と共侶に、ゝ大八犬、照文們に、告別しつ、身を起して、角門より出てゆけば、等設たる作當們が、馬を牽向け、轎子を、擡げ寄せつゝ相迎へて、倶して結城へ還りけり。爾程に八犬士は、ゝ大照文、代四郎と共侶に、この日の首尾を歡びつゝ、一霎時庫裏に退きて、身甲臂縛脛巾の武具を、脫ぎて庸常なる、逆旅の衣裳拿領ひ、夥兵作當を從へて、諸川のかたに急ぐ程に、長き日なれば、然ばかりに、時は移らで去向の村に、午の貝吹く時候なりけり。話分兩頭。然ば又小山朝重は、途にて未得に相別れて、結城の城に

ひにして穩當なる、家臣を使節として、事の仔細を問れしに、照据既に分明にて、我們に罪なきよしを、詳に知られなば、實に意外の造化也。犬江が意見は、いかにぞや。と問ふを親兵衛聞あへず、そは勿論の事也かし。那惴利は、他人の爲に、撃れて命を隕したりとて、我怨さへ解ならば、そは唐山の鄙語に、張公酒を喫ぬれば、李公が醉ふといふに似たり。狗骨折て、鷹に捉られし怒を移さば、不狂人も、倶に是走る也。犬阪犬田犬川に別議なくば、却已なん。宜く計ひ給へと云。親兵衛かくの如くなれば、誰か亦異議すべき。皆共侶に、朝重にうち向ひて、目今の議を聞給ひし歟。國守賢明の憲斷によりて、我們に罪なきよしを、知られ奉りしは、得がたき面目、歡び何事か是に優すき。但し生擒の僧俗を、那儘遞與しまゐらせなば、守に賞罰なきに似て、非禮にこそ候はめ。解饒すべくもや。といふを朝重聞あへず、其義は決して厭しからず。他們は都て罪人也。然ば各の掛たる索は、我君命を奉りて、掛たる索に異ならず。那儘に將て退るべし。主君かさねて那靈佛の、一かたならぬ、利益のよしを聞れなば、庵主にも各位にも、對面せまく欲しかるべく、恁る名僧良臣を、多く得給ひたる里見殿の、武德を羨しく思れん。權且結城へ立かへりて、逗留あらば幸ひならん。といふを犬士は諾なはず、そは辱く候へども、庵主は先君の白骨を、駝奉り候へば、只管去向をいそがるべく、我們は故ありて、犬江

地に遺り給へば、墳墓空しからずして、後に古迹となりぬべし。那僧正に對面して、是等のよしを云々、と告なばさぞな歡れん、その歡びを面前に、いはで過なん遺憾しさよ。この意を傳給ひねかし。と憑めば未得も朝重も、又這奇談に駭嘆じて、醉るがごとく醒るが如く、只共侶に感服して、得がたしとのみ稱えたり。姑且して未得は亦、ゝ大と八犬士們に談ずるやう、那白骨の一條は、亦是奇中の一大奇事にて、庵主の佛意に稱ひ給へる、德の高きを知るに足れり。就て德用堅削們、及堅名根生野、不良の僧俗、都て俘囚にせられたれども、前にも既に陪話候ひき。他們は一個もおん身方に、淺痍だも負し得ざりしかば、罪饒さるべくや候はむ。但那長城傴利のみ、殺害の罪免れがたけれども、那身は村長剛九郎が爲に、首を喪ひたれば、自業自得といひつべし。伏て願ふ那僧俗を、放ち給はゞ幸ひならん。と勸解れば、ゝ大は點頭て、そは亦愚意も相同じ。八士の意見はまだ聞ねども、拙僧年來の志願を果しゝ、念佛供養の作善を忘れて、執念深人を怨んや。といひつゝ傍を見かへりて、各這義を何とか思ふ。と問ば道節先答て我們他鄕の旅客にて、權勢もなく、羽翼もなければ、賞罰は國守の隨にて、敢恣にせんとにあらず。倘結城殿良將ならで、只その家臣と封邑の、法師們を最屓のみにて、自他の邪正を糺すことなく、討隊の士卒を差向られなば、我們只得刃に霸りて、人をも殺し身を殺さんに、幸

といへば莊介大角現八、小文吾道節、照文代四郎、孰か正可に思ひ得べき。俱に感ずる朝重は、人の噂に聞知たる、淨西親子の忠孝に、猶も新奇の靈佛利益を、今さらに又嘆唱して、時の移るを知らざりけり。當下、大は未得に向ひて、聆新なる淨西親子の、忠孝の美談に就て、告まゐらすべき一奇事あり。倘京師なる影西僧正が、師父（未得をいふ）の招きを承容れて、かへり來給ふ日もあらば、言傳て給ひねかし。その故は箇樣々々。と那星額の齎したる、季基主の白骨と、狙公の刀の事を、詳に解示して、初拙僧結城に來て、庵を締びし比よりして、我先君の墳墓の、有や無や、と思ひ難て、人に問つゝ索ねしかども、竟に知るよしなかりしに、憶りもあらず、白骨と、紀の大刀を得てけるに、幵も亦南柯の夢に似て、其白骨と名刀の、出る處を今ぞ知る、佛の利益、いへばさら也、淨西法師の賜ものにて、おん墓表の石地藏の、化現の靈異はありながら、齎し給ひしは別佛にて、曩に國守の建立と聞く、地藏菩薩の化現にあなれば、事齟齬するに似たれども、萬佛原是一佛にて、地藏菩薩に兩箇なきこと、譬ば田每に移る月の、影幾にも見ゆれども、眞の月をうち仰げば、只一輪なるが如し。この理をもて推すときは、逸疋寺と路傍小堂と、自他十一箇の地藏尊、利益は則一靈佛にて、今さら分別すべからず。我先君の白骨と、紀の大刀は土中を出て、安房に赴き給へども、なほ一種の紀の鎧、永くこの

らめ、饒し給へ。とうち陪話れば、八個の犬士、丶大代四郎、照文主僕に至るまで、倶に感歎の聲を合して、奇也々々。と稱えたる、开が中に信乃がいふやう、原來那淨西は、始我思ひしごとく、里見に由緣あるのみならで、親子罕なる忠孝を、聞けばいよ〳〵なつかしけれ。然る忠僕の剃髪して、亡君の菩提の爲に、建立しける石地藏ならば、那衰老法師に化現して、我毎に忠告の、利益は俗に云緣なき衆生を、度するの義にはあらざりき。因て今亦思惟るに、那路傍小堂なる石地藏の、面部に缺たる處あるは、件の願主淨西が、明の失たるに類り給ふ歟。その側に栽たりし、一樹の松を、淨西の、墓表ならんとは、いまだ知るよしなかりしかば、廻向せざりし悔しさよ。といへば毛野も亦いふやう、獨に紀二六が白屋にて、見きと告たる一個の法師は、眼を閉柱に凭れて、喚べども應せざりき、といひしを思へば开は淨西の、在りし形貌を顯し示しゝ、亡魂にもやありけんかし。といへば親兵衞點頭て、爾らば咱們に、中途にて、庵主の急難恁々、と告知しける那法師も、亦淨西の靈魂歟、とは思へども、其法師は、齡三十あまりにて、色白く見えたりき。开を淨西に思ひ方れば、三十許も弱かるべし。年齡相應しからざれば、那靈魂にあらずして、是も亦伏姫神の、神變不測の靈應歟。それかあらぬ歟、智力をもて、目今量り知るべからず。是等の奇異は、後に至りて、思ひ合する事もやあらん。

鳴らして念佛を、唱ること朞月にして、既に親の服闋しかば、逸疋寺にかへり來て、恩を謝して學寮に在り。是よりして影西は、夜に日に佛學を研究して、又五七年を歴にければ、本山屬院の衆徒はさら也、約莫下總一國に、他が右に出る者なし。こゝをもて拙僧は、寺職を影西に讓りて、退隱せまく思ひしに、德用は師兄にて、且結城の家再興の折、京都の管領へ、俗緣の義をもて、提撕稟しゝ功あり。是に加るに、城內なる重職、堅名長城根生野なゝど、年來德用と、方外酒飯の友多かれば、後住の一義は左に右に、拙僧の意に儘せず、只得寺職を、德用に讓渡しゝに、心術正しき檀方、是非に明なる、同學の法師們は、倶に不平の心あり。德用これを鬱悒く思ひて、遂に事に假托て、その法師們を追出し、剰悄地に影西を、毒殺せまく欲ししを、影西はやく氣色に猜して、辭し去て京師に赴き、更に八宗を兼學して、いよ〳〵智識の聞えあり。こゝをもて、某の法親王の執事にせられて、權僧正に成登りぬ。既にその高貴きこと、拙僧なゝどが今さらに、企及ぶべきにあらねども、今番の異變を告知して、後住の義を憑なば、影西本性孝順なり、永く勢利を愛せずして、今の顯職を辭ひ稟し、必這地にかへり來て、我寺の法燈を紹ぐべし。有感る美談に候へば、那淨西の事をしも、問れてその子の上までも、詳にせざることを得ず。主客地上に坐しながら、思ひ遣せぬ長談は、さぞな傍痛か

の御前に在りて、往還の人に憐愍を、乞つゝその口を消しては、親の手を扶掖て、這里の白屋にかへり來つ、立冬の寒けき日は、著たる襤褸を悄地に脱て、親に被て熟睡するまで、身をもてその脚を温め、又三伏の暑き宵は、親の爲に終夜、蚊を拂ひて睡ること稀なり。恁而年來を歷る程に、この事遠近に聞え、人に知られて、孝行小僧と喚做しつゝ、那路傍小堂の頭を過る男女は、必錢を取せ、東西を與て恩とせず、憐ざる者なかりしかば、只日毎に親子の口を、餬ふのみにあらずして、求めざれどもその折々に、故衣なども得易くなりぬ。淨西が明を失ひしより、又六七年の光陰を送りて、寛正の初の年間、淨西は豫より、死期を知りて、影西に、こころ得さしつ遺言しけるに、果してその日になりければ、病苦もあらず端然と、合掌十念の聲の中に、睡れる像く息絶けり。影西哀慕悲泣に堪ず、然而あるべきにあらざれば、則父の遺言に從ひて、那路傍小堂なる、石地藏尊の側に安葬て、松を栽て標とす。敢墓碑を建立せず、こも父の志なれば也。これを傳へ聞く遠近人、その柩を送る者、幾百幾千なるを知らず。これが與に茶を賣り、餳糕米を鬻ぐ經紀さへ、その四下に出しとぞ。この事逸疋寺へ聞えしかば、拙僧則淨西が爲に、衆徒を聚合て、三個日の讀經を修行し、且前約の如く、影西を寺へ召執んと欲するに、他いまだ從はず、親の在りし日のごとく、日毎に石地藏の御前に趺坐して、鉦を


忠孝の
父や子に
路備ふ堂
の佛前



甲斐のなからんより、只うち閣し給ひね、と推辭て尚始のごとく、曉毎に餽りしかば、拙僧いよ〳〵感佩して、他が飯の足ざれば、饑もやせん、と憐愍て、只何となく折に觸ては、果子餅を取らするに、开はなほたうべず、持てゆきて、必親に餽りけり。左右する程に、その次の年の春の時候より、淨西は、風眼を病わづらひて、久しくなるまで愈ざりければ、影西只顧憂ひ歎きて、夜毎に水を浴み、身濯をしつゝ、神に佛に願言して、己が身をもて親の病著に、代らんとのみ念じしかども、竟にその利益はあらで、淨西は盲目になりぬ。影西いよ〳〵うち歎きつゝ、よしを拙僧に告知して、生涯親を看とらん爲に、身の暇を請ひしかば、拙僧ます〳〵憐愍て、爾らば淨西を寺へ召來たして、子舍を與へて養せん。恁る孝子をいかにして、乞食に倣すべきやとて、連りに禁め慰めしを、影西泣きつゝ承引かず、その義は願ひ稟さん、と豫思ひて幾番となく、親に薦め侍りしに、只一筋なる氣質に侍れば、然しては心安からずとて、從ふべくも候はず。猶この上のおん慈悲には、身の暇を賜るべしとて、恩を謝し別を告て、飄然として出てゆきけり。影西曩に剃髮して、當寺に在ること二稔に過ず。年は纔に十三なれども、親の爲に乞食して、一毫も艱苦を歎はず。始故郷に在りける日、他が母親に仕へしも、恁ありけん、と猜せらる。實に得がたき孝子也。爾程に影西は、親と倶に那路傍小堂なる、石地藏

して、這廢院は、地藏菩薩の、靈跡なるを思ふ故歟、頽れ残りし庫裏の背に、最褊小なる白屋を締掛て、夜は寢處と做せるのみ、子を養ふべくもあらざれば、只得その子を逸疋寺に將てゆきて、有恁る奴の舊里より、尋來ぬるを爭何はせん。願ふは頭を剃圓めて、扱使れなば幸ひならん。この義をいかで方丈へ、聞えあげ給ひね、といひ捨て回報を等ず、那身ははやくかへり去りぬ。這事後に聞えけり。この年の春、先住は遷化して、拙僧住持なりければ、那淨西が出家堅固の、志操を豫より、得がたし、と感じ思ひしかば、則他が所望の隨意、軈てその子に祝髮させて、法名影西と喚做しつ、内典外典を讀學するに、一を聞て二三を知る、才の捷れたるのみならず、その性孝心深かりければ、その身たうべる三飡を、親の爲に半分ちて、曉毎に疾起出て、二里にあまれる、親の在處に赴きつ、飯を餽りて、天明ぬ程に寺に還りて、常の勤に就ること、一日も懈怠なかりしかば、初は人皆訝りて、云云といふもありしに、その實やうやく發覺れて、拙僧に人の告しかば、感心のあまり、その夜分、影西を召よせて、恁る孝行ありと聞ぬ。しからば汝の饍をな分ちそ。淨西が食料は、日毎に取らすべし、といひしかど、影西敢從はず、有がたきまで辱き、仰では候へども、然しては親の心に愜はで、おん慈悲

髮の、願ひをこそ、と稟すにぞ、幵が儘止宿を允されて、次の日本尊の御前にて、剃髮の義をものせられて、法名を淨西と喚倣され、血脈度牒、袈裟法衣、一具を取らせ給ひしかば、十十八の淨西は、師恩を拜し歡びて、なほ一兩月逸疋寺に在り。竟に左右川の頭にて、一間四方の地を購得て、季基主の白骨と、紀の武器二種を、悄地に埋葬りて、墓表の與にとて、一軀の石地藏菩薩を、石工に課て造り奉りて、細小なる雨掩の、御堂さへ建立しけるに、那金あれば、思ひの隨に、宿願を果してけり。是よりして淨西は、日毎に件の、石地藏の御前に在て、鉦をうち鳴らしつゝ、朝より暮るゝまで、念佛の聲間斷なければ、近き村民、往還の良賤、相憐愍て、錢を投與へ、或は餅握飯などを、取らするもありければ、淨西は炊ねども、饑ざることを得たりけり。約この一條は、當時拙僧弱齡にて、師の坊の侍者なりければ、親しく見もし聞もして、その大略をおぼえたり。然ば又件の淨西は、上毛なる舊里に、留置たる妻ありて、尙伃き獨子さへ、孚養せたりけれども、一たび佛門に入しより、浮世の事を思ひ捨て、妻をも子をも見かへらず、稀なる風の便にも、慰めはせで過す程に、十稔許の光陰を歷て、その子の年才十二になりける春、母親病て身故りしかば、馴れし故鄉に住不娛けん、父を慕ひつゝ、辛くして、尋て上毛より來にければ、淨西驚き、厭はしさに、あらずもがな、と思へども、

ら十十八を、方丈に召入れて、隨即對面せられけり。當下十十八は、其身の素生箇樣々々、と首より解諦して、季基主戰歿の折の光景を、告知すること半晌許。然而いふやう、いと烏滸がましく候へども、小可已がたき情願あり。這主君の白骨と、這紀の兩種を、悄地に御寺に執置て、葬ることを允し給はゞ、薄少ながら布施として、圓金二十兩を獻らむ。此は是主君季基朝臣、鎧の脇鎌に藏め措れしを、後に小可見出しにき。且小可を御弟子に做し給はりて、祝髮得度の願ひを果さば、生涯貴寺に留りて、火打水汲み箒拿る、犬馬の力を盡すべし。いかでいかで、と件の金を、薦めて手を摩り身を投伏て、請求るのみ他事なければ、師の坊只頗感心して、奴隷には得がたかるべき、心操なり、と思れしかど、結城氏滅亡て、當時は事皆兩管領の、處分に依ざるよしのなければ、心に儘しがたしとて、叮寧に諭すやう、祝髮の義は障りなし、そは願ひの隨意たるべし。但し那籠城の諸大將の亡骸を、今我寺に葬らん事は、憚なきにあらざれば、後難實に料りがたかり。汝然までに思ひなば、その金あるこそ幸ひなれ。當山より遠くもあらぬ、武井左右川の頭などにて、些の墓所を購求めて、主の白骨を瘞め、墓表を造り立て、箇樣々々に行はゞ、汝の本意に稱ひやせん。是より外に術あらじ、といはれて十十八沈吟じて、やうやく思ひ得たりけん、貌を更め額を衝て、仰承り候ひぬ。然らば先祝

身々々を離れ給ひて、苦患をおぼえずなりしかど、倘起べうもあらざりければ、朝重隨卽夫役に下知して、地藏と倶に惡僧們を、載たる儘に吊臺を、舁して先城內へ遣す折、未得は那經卷と、五十金の來歷を、肇て、大に聞知りて、返しまゐらせん、といひしかど、大は決して諾はず、後竟に逸疋寺の什物にぞ做にける。然ば再度の奇異靈應に、犬士們は餘談を惜まず、开が中に信乃は亦、語次に未得にいふやう、前にも解示し侍りたる、那左右川に程遠からぬ、路傍小堂なる石地藏の背には、建立の歲月見えて、嘉吉元年、七月二十四日、建立願主淨西と勒したり。この淨西は法名ならむ。本貫那里の人氏なるや、聞も及せ給はぬ歟。と問へば未得は頷き答て、その淨西の事はしも、拙僧故ありて具に知れり。他は和君達の先君たる、里見季基主の馬の鑣奴にて、十十八と喚れし者也。身は卑賤くて數ならねども、その性は美しくて、人の及ばぬ忠心あればや、季基主戰歿の折までも、馬の邊を毫も離れず、その身も痛痍を負ながら、敵にいまだ知られぬ程、主君自殺の亡骸を、肩に引掛け命を免れて、近き山林に迹を埋め、當夜季基主の亡骸を、煙に做し奉りて、寄隊の大軍退き去りし後、有一夜十十八は、主君の骨壺と、紀の大刀と、甲冑を搭駝ひつゝ、我寺に潛來て、悄地に憑み奉るべき、椿事ありと倡て、住持に對面を請ひにけり。この時逸疋寺は、我師の坊住職なりければ、訝りなが

用が遮りて、禁め稟しゝ惡報にて、那身と倶に同惡なる、僧俗都て懲されけむ。願ふは庵主怨を忘れて、この御佛達におん勸解を、做し給はらば、千僧の、萬部の讀經に彌優して、必納受し給はん。いかでいかで。と老僧の、慈悲は涙に顯れて、請求めつゝ他事なきを、ヽ大法師は感嘆して、則未得に答るやう、爰に肇てこの廢院の、來歷緣故を聞知りて、思ひ合することこそ候へ。嚮に拙僧那長老、星額師に訪れし折、その在住の寺の名を、能化院と側聞たるのみ、結城城下の寺院にこそ、と猜して問も質さゞりしに、原來件の能化院は、この廢院の事なりき。爾るに化現し給ひける、這十體の石地藏は、逸疋寺に置れ給ふを、能化院ぞと告られしは、當初國守の發願に、この地に建立做しまゐらせん、とありし由緣を开が隨に、地藏菩薩の靈場たる、基を示させ給ひしならむ。然ばこそあれ那法名の、星額は是地藏尊の、額に見ゆる黑子にて、俗にいふ地藏星なるべし。又その師父の法名を、寶珠としもいはれたり。こも亦地藏の持せ給ふ、摩尼寶珠のよしなるを、今やうやくに悟りにき。佛法廣大、無邊無量の、善巧方便、不可思議なるかな、仰ぐべし信ずべし。と只管稱讚禮拜して、身を起しつゝ、吊臺なる、十個の惡僧にうち向ひて、懺悔を薦め業果を示して、地藏經一卷を、徐に讀誦したてまつりて、放免祈請の眼を閉、合掌して惡僧們に、十念を授けしかば、破戒の罪障解脫やしけん、十體の石地藏は、那

登時又未得のいふやう、這惡僧們が受たる冥罰を、人々面前に見給へども、いまだ知られぬ所あり。抑この石地藏十體は、曩に結城の家再興の折、當君成朝主の志願にて、先亡義烈の諸大將、忠死の士卒の菩提の爲に、建立せられし御佛是也。始は這廢院を再興して、居奉らばやといはれしを、徳用が喫酷く思ひけん、屢し掠めしによりて、遂にその義を停止せられて、我寺に建立し給ひけり。今さら思ひ合するに、いぬる日我寺なる、這地藏菩薩十體、倶に忽然と、見え給はざることありなんど、いふ者のありしかど、實事しからず思ひしに、果して恁る靈應あり。拙僧昨日中途にて、この義を思ひ出しかば、作當を寺へかへす折、那十體の石地藏尊を、よく見て來よとて遣しゝに、十體ながら見え給はずといへり。しからば是この御佛達は、即是我寺なる、石地藏に疑ひなし。就て又告まゐらすべき事あり。抑這廢院は、むかし結城の乃祖たる、七郎朝光主の建立にて、六道山、能化院教主寺と喚做たる、七堂伽藍の大刹なりしに、嘉吉の兵火に燒亡れて、かくの如くに荒果にき。當寺の本尊勝軍地藏菩薩は、平將門の女兒なりける、妙藏尼の作なるを、我寺に迎執り奉りて、祕佛として寶藏に在り。といひつゝ樹の下を見かへりて、那徳用は、我徒弟なるに、恁いはんははづかしけれども、他們が各位に俘囚にせられて、這荒寺に牽れしを思ふに、曩に國守の這寺を、再興の沙汰ありし時、徳

件の惡法師們を、倶して共侶にゆき給へとて、昨宵は宿所に歇置れ、心利たる雜兵四名を、關宿千住の兩路筋へ、走らしつ遣して、庵主並に諸君子の、往方を索求められしに、這廢院に止宿のよし、天明て後に聞えしかば、小山主に從ふて、轎子をいそがしつゝ、倶に這の門前に、來つゝ案内を等たりき。拙僧さへに面伏ながら、實に懺悔の爲なれば、先や件の惡僧們を、おん目にかけん。やよ喝食達、那吊臺を舁寄せさせよ。といふを夫役們うち聞て、吊臺都て寄せ並べて、掛たる袱を褰祛くるを、覩れば無慙や惡僧們は、皆石地藏を駝たる儘にて、仰反り苦しむ眼を睜り、齒を切る冥罰を、救ふ佛はなき世とて、蓮臺ならぬ吊臺に、地獄の呵責も恁やと思ふに、猶正しき照据あり。矚に、丶大の、星額に贈りたる、那經卷と五十金は、財嚢と袱に裹みし儘にて、這石地藏二三體の、項に結著てありしかば、丶大代四郎、照文主僕、八個の犬士も今更に、事新しき心地して、是も亦我伏姫神の、神變不測の妙智力もて、懲させ給ふ神謀り歟、と思ふこゝろをいへばえに、いはず語らぬ德用堅削、經稜素頼、隊の僧俗まで、同じ祟を身に摘て、舌を振ひつ並て皆、驚き怕るゝ奸虐破戒の、先非を悔しく思ひけり。

第百二十九回

忠僕死に事る靈佛の起本
孝子京を去る傳燈の法脉

籠んとていそぎしに、那師弟十個の法師達は、路にて猛可に重くなりて、遂に堪がたかりければ、悪僧每は壓伏られて、反起んとしたれども、幾十貫匁あるやらん、身を動すこと克はねば、各嗟き苦しみて、人の扶助を求る折から、其頭を過る里人が、怪みつ立よりて、觀れば件の悪法師們は、各々石地藏を背へ乘せて、道路に平張伏して在りしかば、里人いよ〳〵訝りて、軈てその地藏菩薩を、拿卸さんとしてけるに、怪しむべし、皆その背へ、漆をもて黏たるごとく、擡れば那身も倶に、擡げられて毫も離れず。こは必神佛の、祟ならん、と怕れたる、里人寺へ走り來て、事の趣を告しかば、拙僧驚き、且訝しさに、時を移さず轎子に、うち駕りつ舁走して、其里に迨りて檢しゝに、現虚談にはあらざりける。悪僧十個の懺悔によりて、事詳に知られしかば、伴當を寺へかへし遣して、猛可に十荷の吊臺を、門前なる莊客們に、舁し來たしつ、十個の衆徒を、十體の石地藏と、倶に吊臺にうち載せて、軈て城內へ將てまゐりて、年來師檀の好ある、小山主に直訴しけるに、小山主驚きて、這里にも亦愆る情由にて、長城犒利が橫死の訴あり。且經稜素頼犒利が、伴當夥兵們の自愬招了にて、自他の邪正分明なれば、靈佛の祟り疑ふべからず。はやく〳〵大とその每を、赶蒐て謝せよとある、舘の御諚を承奉りぬ。猶又御坊の告訴のよしを、聞えあげて、又おん下知を、承りて打立べし。御坊も

ひね。といひつゝ後方を見かへりて、作若黨が携たる、袱裹を解披せて、出すを觀れば首函にて、內には果して惴利が首級を歛めてありければ、丶大照文代四郎們、又八犬士も照文、の作當夥兵も駭嘆じて、天理の當に恁あるべきを、感ぜざるはなかりけり。登時朝重又いふやう、事の湊合是のみならず、前にも各に告たりし、未得老隱居に對面して、又那奇特を見給へかし。といひつゝ又作若黨に、箇樣々々と吩咐れば、こゝろ得果て門外へ、遽しく出にけり。

爾程に逸疋寺の先住未得老僧は、嚮に小山朝重と倶に來て、這廢院の門前に、轎子を歇て在りしに、今朝重に招れて、轎子を立出つゝ、兩個の喝食に扶掖れ、東西を載たる吊臺十荷に、十枚の大袱をうち被しを、夫役二十名に肩擔せて、主客の席に來にければ、丶大法師は立迎て、迭に口誼果て後、八犬士、照文代四郎も對面して、請て席を薦れば、朝重も亦詞を添て、儲の革席に坐らせけり。當下未得は、丶大法師と、八犬士們に告るやう、今番法弟德用們が、非道非理の計較を、拙僧はやく聞知りて、只願諷諫の詞を盡しゝかども、他のみならず、件の非道を、資る三個の檀越は、國守譜第の重臣なれば、千言萬句も聽れざりしを、うち歎きて候ひしに、那人々は事の開場に、庵主の法筵に來會したる、師弟十個の法師達を、根生野の隊に搦捕りし折、我寺血氣の惡衆徒十名が、膂力に乘し、肩にうち載て、はやく寺まで將てゆきて、閉

て、件のよしを稟す折から、經稜素頼が列卒伴當、及惴利の夥兵にも、逃て城内へかへりしも多くありて、隨卽其者每の訴によりて、件の僧俗の僻事聞え、和殿們の武勇、風霾の奇瑰、經稜素頼德用們が、生拘られたる事までも、その崖略を聞知りしかば、猶も緊しく鞫問して、いよゝその實を得たり。有恁りし程に、逸疋寺の先住未得老僧、轎子を飛しつゝ、城内へ參上りて、佛の利益冥罰を、箇樣々々と愬らる。是によりて那怪風は、庵主並に諸君子の、爲に天助の奇特を知られ、皆是凡人ならざるべきを、主君成朝感心の有餘、各位を赶蒐て、宜しく謝せよ、と命ぜられたる、來意は都てかくの如し。件の經稜素頼惴利は、常に鷹を放ち、田圃を損ね、驕放なる聞えなきにあらねども、他們が親は、忠義の老黨にて、嘉吉に戰死の譽あり。又逸疋寺の德用は、出家人に相應しからぬ、勇力にして武藝を好む、と折々人の噂にて、成朝これを知るといへども、他は當家再興の日、京都の管領に內緣ありて、執成稟しゝ功あれば、甲乙倶に用捨せられて、させる咎はなかりしを、他們は思はで大かたならぬ、僻事をしいだしたり。然どもなほ幸ひに、同士擊をしたるのみにて、各位の伴當をだに、害するに至らざりしに、惴利ばかり犬江生の、一路兒を三個まで、擊陷しける冥罰ならむ、那身は村長剛九郎に、斫殺されし因果覿面、諸君子今那首級を檢して、其友達の與にしも、怨をいかで解給

れたる世は舟車屈かで、好を安房に結ぶに由なく、遠くもあらぬ藩屛ながら、胡越のごとく疎濶なりしに、這回、大庵の念佛供養は、嘉吉に戰死の列將士卒の、追薦の與にして、且舊交を忘られざりし、自他平等の心操を、成朝始より聞知らば、法會を資くべかりしに、庵主はさらなり、諸君子も、名利を歡ふ心もて、告られざれば、是非に及ばず。爾るに逸疋寺の住持德用、當家の驕臣經稜素頼惴利們、敢この義を思ふことなく、妬忌の邪念を挾みて、城より向ひし緝捕使と謂り、猛可に多勢を驅催して、庵主並に來會の諸君子を、推捕へんと欲せしに、反て他們は生擒られて、恥を當城に胎すに至る、言語同斷の僻事なれば、縱諸君子の愁訴なくとも、允されがたき罪人也。そが中に、長城枕之介惴利は、亂妨の折、犬江主に馬を撻れて、人馬共侶、左と川へ陷たれども、流れて川下より岸に登りて、其頭に相識る村の長、剛九郎と喚做す者の家に立寄て、水に弱りし馬を勦らせ、濡れたる衣裳を火に炙らせて、敗軍のよしを告しかば、剛九郎は推鶩と、倡て盃を薦る程に、主客共侶に亂醉して、口角をしいだしたる、果は惴利怺ずして、刀を拔て斫んとせしに、醉たる者の癖なれば、鈍や刀を挑捉られて、反て剛九郎に首を擊落され、剛九郎も亦國守の家臣を、斫殺しゝを後悔して、免れがたしと思ひけん、卽坐に自殺したりけり。是により、近隣の莊客們、驚譟ぎて、時を移さず、城内へ告訴し

に、乞ふて怨を雪ん爲に、姑且這里に露宿して、國守の處分を等候ひき。といへば道節聲高やかに、我們既に商議したり。那惴利們が罪を糾して、我們に遞與し賜り、且星額長老師弟を、放ちてその寺にかへされなば、生拘たる經稜素頼、徳用堅削們を、返しまゐらせん。然らずは今面前に、生口毎の首擊落して怨を雪ん、いかにぞや。と惴るを信乃は推禁め、朝重にうち向ひて、今親兵衛がいひしごとく、擊たで克はぬ敵なるを、殺さゞりしは豫より、丶大庵主の敎諭あれば、先亡菩提の本意を忘れて、殺伐を宗とせず。然らでも仁義にあらざれば、手を動さざる我們が、本性都てかくの如し。爾りとて三個の友を、奸惡人に亡れて、猶是をしも忍ぶべくば、亦何事をか忍ざるべき。言聽れなば幸ひならん。と緩急各理を盡して、殘る所はなかりしを、朝重熟听果て感ずること大かたならず、爲に貌を改めて、愁然として答るやう、家に暴戾の臣あれば、是則主君の恥也。今番經稜素頼惴利們、並に逸疋寺の住持徳用が、非理非法の擧動は、故ありて昨日より、當城内に聞えしかば、某則君命により、各の足跡を赶索ねて、越に對面を得ぬるかひに、事の合否を知まく欲くて、胡意來路を問試しに、豫我聞し趣と異ならず。抑里見殿の先君季基朝臣は、我先君故判官(氏朝)と、同義烈の良將にて、交も亦淺からず、倶に嘉吉の役に戰歿の後、年を歷て當家再興の喜びありといへども、亂

緝捕の士卒、うち向ふと聞えし折、那長老は、徒弟と共侶に、いかで寄隊を和解んとて、开が途へ出迎へしを、その隊の頭人長城生が、捕捕りにき、と聞たるのみ。と告るを朝重うち聞て、爾らば又犬士達とやらゝ、何等の故に當家の士卒と、逸疋寺の法師們を、多く虜にせられしや。と問へば道節毛野、莊介現八、小文吾大角は、經稜素頼惴利が、德用を帮助たる、詐僞の緝捕の事、兩所の茂林の戰ひを、箇樣々々と解示して、我們は、始より人と爭ふ心なし。遮莫殘忍奸虐なる、惡僧俗們に失れん、命惜しさに已ことを得ず、他們を虜にしたれども、敵一人も敢殺さず、この地を遠く立去ざりしは、國守の處分に依んとて也。この義を查し給へかし。と異口同樣に愬れば、信乃は亦德用を、俘囚にしける爲體、及路傍矮堂なる石地藏の、利益奇特の崖略を、恁々なりき。と告るにぞ、親兵衞は、七犬士に、後れて昨日這地に來にける、左右川の邊にて、、大代四郎、照文主僕の、危窮を救ひし當日の事、及一路兒孝嗣們、三人は那川の圯橋にて、惴利が伏兵の、鐵砲に撃れ、水に陷て、骸も住めずなりし事、その折風癮しし天の祐にて、惴利が隊兵們は、或は同士撃し、或は水中へ滾陷て、死活は知らず做りし事まで、詳に陳示して、又いふやう、我一路兒、孝嗣次團太鮒三は、莫逆知音の良友にて、忠孝義俠儔罕也。爾るに寃家惴利を、擊漏したりければ、遺恨今さらやる方なし。那惴利を解死人

ずべし。といひつゝ後方を見かへれば、件の奴隷がこゝろ得て、携たる革席十枚あまりを、東西程よく布並れば、八犬士も亦找み出て、朝重に對面す。這廢院に庫裏あれども、朽敗れて、無が如く、白屋はいと陜くて、舊たる隨に荒たれば、膝を容るゝに處なき、主客の席に準備居きし、朝重の脱落なきを、人々都て感じけり。恁而主客揖讓して、倶に程よく坐を占れば、朝重ヽ大にうち向ひて、只今尋問んといひしは、則是別義にあらず、和僧は嘉吉の役に、躬方戰歿の菩提の爲とて、結城の古戰場に庵を締びて、昨日結願供養の折、十個の法師來會して、法筵を相資け、且施主ありて、貧民乞兒を、賑したるにあらずや。と問ふを、ヽ大はうち听て、然ン候。那先亡の菩提を弔ひしは、我舊君里見殿の先考季基主、法號義烈院殿を首にて、故當國守氏朝主、並に列將士卒の爲に、宿願昨日成就したれど、敢他の施主の帮助を討ず。しかるにこの義安房へ聞えて、悄地に遣されける代香使、這蜑崎照文に、齎し給ひし布施の金子あり。拙僧素より寡欲にて、然る東西を欲せざれば。といふ時照文語を紹て、某犬士と相計て、殘さず施行に牽きたりき。と告れば、ヽ大又いふやう、昨日法筵を資けたる、十個の法師は、舊識ならねど、招ずして來會せられ、且石塔婆を一夜の間に、造り出されし奇工あり。其長老は能化院の、星額とか聞たるのみ、寺は那里にあるやらん、开は聞漏し候ひき。爾るに昨日城內より、

て、角門より入來ぬるを、と見れば、年齡は五十許にて、その骨相卑からず、身には縹緋縅の夾衣に、唐織の戰外套を披下し、青葱純子に、黑き下間道ある野袴穿て、白柄に、螺鈿鞘の兩刀を腰に帶たる、汗衫の上に、黑革絨の身甲して、網鎖に銀の鋲打たる臂縛、袖の端より顯れたり。又八犬士、照文代四郎は、昨日の儘なる行裝にて、野袴の織色、兩刀の表裝も、各同じからねども、皆千金の銳刀にて、帶たる人も咸千金、その打扮を今こゝに、小山朝重に方れば、二の町に似て二の町ならず、骨相都て彌優て、遖一人當千の、勇士ならずと見ゆるはあらず。曩に甲斐の指月院にて、才に信乃と道節が、武田信昌主に見參の折だにも、看官譽ざるはなかりしに、この日は八士具足して、且從類も多かれば、英氣先度に十倍して、いと晴やかなる對面也。然ば躬方の夥兵伴當們は、思ふにも似ず、結城より、來ぬるは討隊の軍兵ならで、只平和の使者なれば、幸なるかな、と含笑て、言の仔細を听まく欲しさに、各耳を傾けたり。却說小山朝重は、樹下に擊れたる、躬方の僧俗を尻目にかけて、甃石の中央を、徐々と來ぬる程に、丶大法師は照文と、代四郎を左右にして、找み出、立迎へて、且法名を告て對面しつゝ、來意什麽、と尋れば、朝重答て、某は、結城同宗の老黨なる、小山大夫次郎朝重是也。君命により、各に尋問ふべき一義あり。那犬士とやらん聞えたる、八個の施主も在宿ならむ、迭に坐して談




八犬士を逐て
朝重結城より到る

もなき所行也。今この寺院に在宿せらるゝ、八犬士とやらゝには、多力の少年これありと聞、風聲によりて粗知れり。倘その言實ならば、這三門の傾きたるを、推正して開れんや。その義ちから及ばずは、角門より出迎て、對面せらるゝや。と喚るを、親兵衛聞あへず勃然として、みづから急に答るやう、いはるゝ趣、その意を得たり。八犬士の多力なる、獨その少年のみならんや、昔の義秀親衡に、十二倍ならぬはなし。就中犬田小文吾は、曩に越路に旅宿の折、暴たる牛を隻手に駐めて、面色變らず自若たり。然ば這傾きたる三門を、推正して開ん事は、いと易かるべけれども、爾しては小山殿の爲に、門卒に傚るに似て、面正しくもなき所行也。所詮角門より入らじとならば、目今這門を推倒して、廣やかにして客を迎へん。壓にな撲れ給ひそ。と解誇りつゝ、三門の柱へはやく手を掛て、推せば忽地搖々と、搖動つ瓦墜碎けて、覆るべく見えしかば、朝重驚き聲高やかに、やよ等給へ、いふよしあり。非如無住の廢院なりとも、我身一箇の所以をもて、這三門を破却せられば、後世の罪障免れがたけん。我謬ぬ、卒然らば、角門より入るべけれ。と勸解れば親兵衛冷笑ひて、卒とて信乃と共侶に、犬士の隊に退きけり。登時紀二六こゝろ得て、三門の傍なる、件の小門を開く程に、朝重馬より下立て、多かる夥兵伴當を、皆門外に留置て、纔に兩個の伴若黨と、東西持る奴隷二名と、鞋奴をのみ従へ

紀二六制め退けて、いそしく庫裏に走りゆきて、八犬士照文們に、件のよしを注進す。然ども犬士は毫も譟がず、速に對面せずは、怯れたりと思れん。箇樣々々にすべけれとて、ヽ大照文、代四郎にも、示して倶に立出けり。开が中に信乃と親兵衛は、三門の邊に赴き、餘の六犬士は庫裏を距ること、二十間許にして、苔生たる甃石の中程に在り。その後方には、ヽ大法師の左右に從ふ、照文と代四郎在り、又照文の作當夥兵們は、竹槍を秉、列を整て、六犬士の左右に侍り。紀二六は信乃親兵衛に從ふて、又三門へ赴きつ、生口每はなほ那這なる、樹の下に繫れたり。その爲體武備儼然、士卒三十名に足らざれども、數萬騎籠れる城郭に、劣るまじくぞ見えたりける。當下信乃と親兵衛は、倶に三門の裡面に在り、隨即紀二六をもて答るやう、小山殿にものまうさん。知らるゝ如くこの處に、ヽ大庵主八犬士、並に蜑崎十一郎照文、姥雪代四郎與保們、主僕甲乙二十八名、昨日より止宿して、來命を等こと久し。國守のおん使に候はば、三門をうち開きて、入れまゐらする該なれども、いかにせん、這門酷く傾きたれば、開くべくも候はず。我們這里へ立寄りし折、角門の敗れたる所より入候ひぬ。この義を亮查あれかし。といふ聲爽にて委みなきを、朝重具にうち听て、又伴若黨をもて答るやう、いはるゝ趣こころ得候。但し當國主の使たるに、角門より入られなば、开は君命を辱るに似て、面正しく

しかば、照文は八犬士と商量しつゝ、夥兵と紀二六們に課て、渉庭に篝火を焼するに、半分朽たる散木と、老樹の枯枝多かれば、通宵薪に匱しからず。八犬士照文們は、結城より蒐らるべき、追隊を等つゝ暁しょに、這里に憩ひしを、人知ざる歟、小夜深るまで外面に、推寄來ぬる敵なければ、背を合し膝を抱きて、一霎時疲勞を補ふ程に、夏の夜いとゞ短くて、那方に鳴てゆくらん杜鵑、横雲の隙に聲のみして、鴉は茂林を離れても、城より追隊はいまだ蒐らず。昨夕殘れる飯あれば、又筍兒を壤蒸にして、大家早飯を果しつ、犬士們は等不娯しさに、城へ使を遣して、那里の答を听くべき歟、然ずは間諜兒をもて、城の動靜を探ん歟とて、商議に時を移しょかば、巳の左側になりにけり。浩處に、這廢院の三門を、只管に敲く者あり。紀二六はやく聲をかけて、來れるは誰やと問ふ。當下敲く者答ていふやう、是は結城殿同宗の老黨にて、小山大夫次郎朝重と喚做す者也。念佛供養の行者、、大庵主とやらん、並に那法筵に、來會の人々も、昨日事ありしより、この處に止宿のよしを、やうやくに聞知りて、事の仔細を尋問ふべく、且君命を傳ん爲に、馬を飛して來ぬる也。はやく三門をうち開きて、對面せられよとぞ喚りける。照文の夥兵作當們は、これを聞つゝ目を注して、素破敵こそ寄せたれとて、昨宵准備に、竹藪なる、竹を伐て火に炙り、各手製の竹槍を、挾み身を構て、防ぎ戰んと欲するを、

る飯と筍兒を、菅笠に載せ、奴隷に持し來て、犬士と照文に報るやう、仰に儘して米と筍兒を、
壤蒸に仕り候ひしに、是覽せ、米は奇くも一倍殖て、兩個の嚢に滿候ひぬ。恁ては上下二
十八人の、夕饌に餘りあるべし。めさるべうもやとてさし出すを、大家見つゝ奇に驚きて、是
も亦伏姫神の、冥助なる歟。とばかりに、敢亦多辯せず。飯は各腰に吊たる、水飲の椀あれば、
出して手々に裝わけなどす。筍兒は蒸しゝ後に、皮を去て切たるを、紀二六が準備しける、楢
の廣葉にうち載て、人別に薦めけり。登時信乃は、古歌を思ひ出て、

家ならば笥に盛るものを草枕

う、とち誦すれば、大角軈て下を續て、

旅にしあれば椎の葉にもる

といひけり。恁ばかりの事も折に觸ては、さすがに興なきにあらざるべし。然ば世の常言にい
へるごとく、飢たる折は、東西皆美味にて、各腹に充滿しかば、その餘は夥兵作當們にとて、
紀二六に遞與すにぞ、他們も都て漏るゝ者なく、飽までにたうべしに、猶翌の早餉に、做すべ
き餘飯ありといふ。疏食を啖ひ水を飲み、肱を枉て枕として、今宵をこゝに明しぬるも、亦是
君子なるべしといふ、毛野が秀句に興あれば、大家笑局に入りにけり。左右する程に、日の暮

内に慓利も倶せられん。縦慓利は來ずもあれ、眞の追隊がうち向はゞ、自他の邪正を解諦して、慓利を乞て怨を雪ん。言聽れずはその折に、生口毎の首撃落して、追隊を破りて安房へまゐらん。开は已ことを得ざる義也。といへば大角も亦いふやう、遠く唐山の禮を按ずるに、君父の讐には、與共に天を戴かず、兄弟の讐には、兵を復さず、朋友の讐には、邦を同うせずといへり。そも亦時宜に依るべきのみ。と諭せば、大も亦いふやう、約莫這囘の念佛供養は、先君並に列將士卒の追薦の爲なるに、精舍は阿脩羅の街衢に變りて、殆危窮に暨びしかども、躬方三所の鬪戰に、一個も敵を殺さずして、他們が同士撃したるのみ。恁てぞ拙僧本來の、志願に稱ふを歡びぬるに、今一朝の怨によりて、殺伐の義を行れなば、その理ありとも慨しけれ。この義を承容給ひね。と陪話れば、親兵衛信乃現八、照文も代四郎も、大の意衷を思ひ汲て、倶に詞を竭す程に、道節遂に思ひかへして、うち微笑つゝ答るやう、各意見を竭さるゝは、現我爲に良藥也。那孝嗣は咱們より、犬阪犬江の知音也。又次團太は、犬田犬川と、舊交尤淺からず。しかるに這二三子の、意見を等たで我一個、殺伐の義を旨としぬるは、傍若無人に似たれども、非理暴戻なる仇の爲に、益友三名を亡れたる、憤のやる方なさに、漫なりける劇談を、傍痛く思れけめ、よしなかりき。とうち解て、なほ又餘談に及ぶ程に、紀二六は、蒸た

そが中に道節は、憶ず聲を勵して、今番、孝嗣們三友の横死は、悔て復らぬ歎きなれども、犬江が那折に、寃家の頭人、長城惴利とやらゝを討捕なば、慰るよすがあるべきに、只その馬を撻走らして、川へ沒たるのみならば、亓は亦仁の過たる也。當の敵にはあらずとも、皆同惡の奴們なれば、生口毎の首撃墮して、這憤怒を洩さずは、何をもて孝嗣們、三個の亡魂を祭んや。と性起るを毛野は推禁めて、そはいと易き事なれども、今つら〳〵と思惟るに、那風霽の天助妙應、又犬江に中途にて、ゝ大庵主の急難を、忠告しつといふ法師の事、又石地藏の奇異利益、都て躬方に福ありしは、甲も乙も總括めて、伏姫神の神所行ならん。亓を何ぞと推ても見給へ。神靈は是形貌なきを、物に託るときは形貌あり。爾らば那忠告の路上法師も、亦路傍矮堂なる石地藏も、皆是我姫神の、神所爲にぞあらんずらむ。慝る妙應ありながら、里見の家臣ならずとて、忠孝の後生、義俠の老人を、見殺しに做し給はんや。那命數の竭たると、竭ざるとは誰か知るべき。非如那三個の知音們が、敵の鐵砲に撃れたりとも、窮所にあらずは死すべからず。又急流に陷たりとも、水戲に熟て好泅がば、命を免るゝこともあらん。いまだ屍骸を檢せずして、惴利ならぬ同惡の、生口毎を殺さん事は、短慮にこそ。と諫れば、莊介小文吾も、その議を好して、現犬阪の意見のごとく、結城の城より追隊の士卒が、今にもあれ索ね來ば、案

いよ〱路次をいそぎつゝ、左右川の上にて、緝捕の頭人長城惴利の、馬の尻を撻走らして、人馬を急湍に滾し落し、敵の夥兵を拗ぎて、〻大代四郎照文主僕の、急難を救ふ折、後れて來ぬる孝嗣次團太、鮒三も共侶に、那里の圯橋を渡る程、前面の藪蔭に、敵の伏兵ありて、放出す鐵砲に、件の三人は撃落されて、急湍の爲に流れや亡けん、骸も任めず做りしかど、天助風塵の奇特によりて、劫敵或は同士撃し、或は川に顚陷て、〻大代四郎、照文主僕を、拯ひしよしを慇々と、告知しつゝ又いふやう、那折風霾の天助をおもふに、必是伏姫神の、靈驗擁護なるべきに、里見に舊縁なければとて歟、忠孝義俠多く得がたき、我三個の一路兒を、看煞にし給ひける、神慮は料りがたけれども、鄙語にいへることあり、藥は死ざる病人を治し、神は高運の凡夫を衞る。然ば孝嗣次團太鮒三が、果敢なく川へ撃陷されしは、倶に命數盡たるならむ。左にも右にもいと惜しけれ。と不娛つゝ具に解示せば、〻大照文代四郎も、那折の事をいひ出て、人各幸不幸の、同じからぬを歎きけり。今これを所く毛野道節、莊介小文吾信乃現八、大角も皆胸を潰して、孰か浩歎せざるべき。惜むにあまる孝嗣次團太、鮒三們が一期の薄命、先縁虛しからずして、偶この地に來にけるに、再會の本意畫餅に做りしは、造化の小兒の失策ならず、といはざることを得ざるべし。果せるかな。と皆共侶に、遺恨やる方なかりけり。

引提て軈て外面へ退りけり。この日は四月十六日にて、日の最長き最中なれば、朝の事を忘るべき、この時までもまだ暮果ねど、八犬士は、那邯鄲なる客舍に、憩ひし盧生にあらざれば、件の飯の蒸るまで、假寐の枕を求ず、大家、親兵衛を珍客にて、丶大照文代四郎も、倶に草褥に團坐して、閑談數刻に及びたる。當下小文吾は、親兵衛にうち向ひて、喃仁、汝が富山に出世して、老侯に見參の始より、素藤を征伐の事の趣、又いぬる日兩國河原にて、蜑崎生に相別れて、素藤を再征の爲、水行を上總の舘山へ、赴きし折の事までは、蜑崎生にも姥雪にも、對面の折に听しかど、爾後の事はいまだ知ず。那折上總へ伴ひにき、と聞えたる、那三個の一路兒を、などてこの地に、倶して來ざる。と問へば又莊介も、聞つる隨に親兵衛と、次團太鮒三孝嗣の、奇耦を只顧感じて已まず。又毛野と道節は、孝嗣が舘山にて、軍功の有や無や、那身の安危を、いかにと問へば、信乃現八大角も、又、丶大照文代四郎も、齊一膝を找めつゝ、いかに〳〵。と問れたる、親兵衛憶ず嘆息して、肇て玆に解示す、素藤伏誅の事の光景、及妙椿は、富山なる牝狸にてありし事、孝嗣並に次團太鮒三も、戰功はありながら、八犬士に先だちて、舘に仕まつらん事を欲せず、又親兵衛に從ふて、結城へ來ぬる路の程、今日諸川の這方にて、親兵衛は憶りなく、一個の法師に喚留られて、丶大庵主の厄難を、詳に告られしかば、

生たるを見き。筍兒は自生の儘、拔ずして梢を伐棄、然而竹の枝をもて、根までよく節を串きて、上より醬油を沃ぎ入れ、その四下の土を穿て、何まれ薪にして燒ときは、その筍兒蒸熟して、味ひ烹たるに勝れども、如此すればその明年、其頭に筍兒出ることなし。寔に好事の膳饌なれば、其に傚んとにあらねども、藪なる筍兒を穿採して、幵も壞蒸に做すならば、飯の足ざるを補ふべき、合菜に妙ならずや。といふに大家歡びて、毛野が萬事に脫落なく、恁る折にも見ることの、逸早かりしを譽にけり。恁而信乃は紀二六に、恁々とこゝろ得させて、件の米を遞與んとするに、囊は原是石地藏の頭巾なれば、二升の米を容たりとも、二升の飯は蒸がたし。何を欲得とて求るに、丶大の頭陀囊の、白布單にて製れるあり。是よかゝなんとて、笈を啓きて出すを見れば、現四五升の飯を容るべし。登時信乃は、又紀二六に示すやう、米は甲乙兩個の囊に、分ち納て水に浸し、そが儘沙く土中に埋て、柴を燒かば飯に做るべし。又嚮に汝も見つらん、竹叢に生出たる、筍兒を多く拔採て、皮を剝袪ずして、梢を伐棄、根まで節を串きて、石地藏に供たる、鹽を佛に乞稟て、筍兒の節の內へ、鹽を斑なく好搗入れて、壞蒸にして皮を剝きね。と教諭せば照文も、詞を添て、やよ紀二六、その義は要なき奴隷每に、手傳せてはやくせよ。ゆきね〳〵。といそがせば、紀二六はこゝろ得果て、囊の米と頭陀囊さへ、受拿りつ

今日の大厄を救はせ給ひし、利益眼前疑ひなし。又風雲の天助の如きは、伏姫神の擁護ならむ歟。神の冥助は烈しくて、佛の利益は促迫ならず。是神佛の異なる所以、賞罰その差あるに似たるも、惡を懲して善に與する、天理の外はあるべからず。寔に得がたき幸ならずや。と感嘆に他事なかりしを、信乃はさら也、餘の七犬士も、我們なでふ然らんやとて、倶に謙遜したりける。姑且して信乃は毛野にいふやう、見らるゝごとく這米は、才に二升あまりあり。爾るに我一路兒は、庵主媼雪、蜑崎主僕夥兵と倶に二十名、是に我們八名を加れば、都て二十八名の食料なれば、粥に炊ずは一碗を、各啜るに足ざるべし。那白屋に鍋はなきや。と問へば毛野は頭を掉て、否、那里には簀子に布たる、敗筵一枚あるのみ。鍋釜などはあらずといふ、答を道節うち听て、しからば和殿們も知るごとく、其米を嚢の儘に、水に浸し壤に埋めて、上にて柴を焼ときは、蒸れて飯に做るべし。こは野陣して鍋なき折、戰飯を炊く者の、必する事なれども、人の多きに米寡きは、粥より外にせんすべなし。といへば莊介點頭て、現この米にて足ざれば、一握宛也とても、一宵の饑を凌ぎもせん。そも鹽なくては不便にこそ。といふを毛野は見かへりて、否、鹽は有り鹽は有り。咱們方僅、這庫裏の背なる、白屋の邊を檢しゝ折、其頭に在する石地藏に、人の供たる鹽二土器あり。又その前面なる大竹藪に、多く筍兒の

第九輯　卷之二十

第百二十八回

犬士露宿して追隊を迎ふ
老僧袱を褰て冥罰を示す

却說、犬塚信乃戍孝は、嚮に憶ず憩ひたる、路傍矮堂にてありし事、地藏菩薩の奇異利益、齎したる米の來歷を、照文並に、丶大代四郎、親兵衞にも漏すことなく、四六城の舊僕、出來介が横死の事、及德用を虜にしたる、その事の終りまで、言詳に盡す程に、照文が若黨紀二六も、庫裏の邊に在りしかば、一五一十を洩聞て、倶に感嘆したりける。當下信乃は、紀二六に吩咐て、嚮に夥兵某甲に預けたる、米を嚢の儘拿寄せて、件の人々に見せしかば、皆奇に驚き妙と稱えて、佛法无量廣大の、利益を仰ぬはなかりけり。丌が中に、丶大法師は、恭しく身を起して、左右川の方にうち向ひ、合掌して地藏菩薩を、伏拜むこと數回、念じ果て坐に復りて、却信乃に告るやう、拙僧素より菲薄にして、念佛の外所作なけれども、君侯御父子の御盛德と、和殿達八犬士の、孝義賢才に因緣あればや、世は今澆漓に及ぶものから、非情の石像靈異ありて、

這奴ば則別人ならず、那甲斐の猿石なる、四六城木工作が小厮にて、出來介と喚れし者也。曩には名曳に哄誘されて、洒家を誣て、不軌淫奔の、證人になりしかど、その伎倆はやく發覺れて、名曳が死刑に置れし折、這奴は追放せられし也。是よりの後那里に在るや、知るよし絕てなかりしに、この地は這奴が故鄕なる歟、然らずは流れ來にける歟、今又我を撃んとしつゝ、同士撃せられて身を喪ひしは、因果覿面、とはいへども、この餘も隱慝積惡の、餘殃にこそあらんずらめ。蜑崎生に傳聞たる、那安西出來介は、義俠の與に身を殺して、芳しき名を貽しゝに、這奴も他と名は同くて、善惡邪正、死ざままで、雲壤の差あり。亦是宋魯の曾參歟、もて警と做すべきのみ。然は思はずや、と解示せば、大家驚き、且嗟嘆して、天理彰々、隈なきを、亦今さらにかしこみけり。畢竟信乃が不用意にして、齎したる米の來歷を、丶大照文們に解示して、後の話說甚麽ぞや。幵は下の回に、解分るを聽ねかし。

しても、猶堪べくもあらざれば、毛野は笑つゝ推禁めて、無益の所爲に骨をな折りそ、閣ねく〱、といふにより、そが儘にして棄にけり。登時又大角は、件の夥兵們にうち向ひて、汝們知ずや。約莫器械は、使ふ者の膂力より、二三等輕きを利とす。爾らざれば持重りして、騎馬の揮き自由ならねば、遂に不覺を取ることあり。譬ば蜀漢の關雲長が、八十二斤の青龍刀を、使ひしよしは、三尺の童子も知れり。然ども那關羽に、百二三十斤の膂力あらざりせば、八十二斤の器械を、馬上自在に使ふことは、得做しがたき技にこそ、と思ふ者は罕なるべし。然ば這德用は、六十斤の膂力あらんに、使ふ所の鐵杖も、亦六十餘斤なるをもて、不覺を取りしも、この故ならん、と諭すを信乃はうち聞て、辯論寔にその理あり。德用は多力にて、且武藝なきにあらねども、兵法を知ざれば、我と兩度の斷殺に、不覺の同士擊をしつる也。就て亦一奇事あり。方僅德用と倶に埋伏して、洒家を擊んと欲しつゝ、謬て德用に、擊殺されたる這道人を、事果て後によく視れば、こは舊怨ある者なりき。犬山、和殿は忘れし歟、と問へば道節立寄て、道人の死貌を、熟覷つゝ、頭を掉て、咱們はおぼえず〱、といひつゝ軈て退けば、莊介毛野、大角現八小文吾も、立替りつゝ屍骸を覷て、乍麼這道人は何等の故に、犬塚和殿に舊怨あるや、と訝り問へば、信乃がいふやう、この義は豫各に、解示したりければ、今又思ひ合さるべし。

用を擒虜にしたる事、地藏菩薩の靈應利益の、首尾を解示して、囊頭巾の米を見せ、又佛像の項に乘したる、錢と方金さへ指し示して、思ひしよしを告知すれば、六犬士は咸胆を潰して、我們は今見らるゝごとく、虜にしたる敵の惡僧俗と、兩所に戰ひし折も、又牽してこゝへ來ぬる路にても、爾る風塵の起るに遇ねば、鬧く做りたる事はあらず。意ふにそは伏姫神の、靈驗冥助なるべき歟。但思ひ得がたきは、這石地藏の利益也。こを建立の願主淨西は、現和殿のいへるごとく、今もなほ世に在る人歟。いとなつかしき心地はすれども、那は左まれ右もあれ、這石佛の利益に依て、多勢の敵を防ぐべき、准備を立地に做しゝかば、思ひの隨に克ことを得て、敵の頭人惡利尙們を、かくの如く虜にしたり。有恁れば那隊に鐵砲ありとも、庵主はさらなり、蟹崎生も、姥雪も恙なかるべし。寔に奇也、妙なるかな、と稱えて俱に跪きて、地藏菩薩を伏拜めば、側聞せし八個の夥兵も、皆駭然と驚き感じて、深信胆に銘ずるまでに、最憑しく思ひけり。這時德用は息出て、やうやく我に復りしかば、信乃は夥兵に索を取しつ、囊頭巾の施米をば、腰に纒てもてゆきねとて、そが儘夥兵に預る折、又餘の夥兵們に指し示して、德用が這鐵の鹿杖は、後の話柄に做りぬべし。膂力ある者預りて、左も右もしてもてゆかずや、といふに夥兵們こゝろ得て、壯なる者一個して、擡んとするに及ばねば、幇助を喚て、二人して、辛く力を勠


神女湯


徳用誘て道人を棒殺す
信乃
とく用

て、地藏の項へ、そが儘楚とうち載ける、こゝろは既に佛菩薩へ、まゐらせたる米なれば、則一分の金をもて、那と這と換るなり。恁而信乃は、嚢頭巾の、口を結びつ引提て、徐に外面へ出る程に、這路傍小堂の左右に躱れて、信乃を竊ふ兩個の敵あり。是則別人ならず、一個は逸疋寺の徳用にて、鐵の鹿杖を、靑岸に採て在り。又一個は同院の道人、某乙と喚るゝ破落戸にて、明晃々たる中刀の長やかなるを、眞額に拔翳して、出ば撃ん、と構へたり。這時信乃が危きこと、旭に向ふ草の露、風の前なる燈火に、等しからむを思ひも掛ず、出るを遲しと等著けたる、左右一度に邪と聲掛て、撃つを閃りと引外す、神速微妙の慓姚に、惴りし徳用空撃して、俱に找みし道人の、肩尖磤と撃摧けば、呀阿とばかりに叫びもあへず、血濆起て仆れけり。徳用これに驚き慌て、二たび撃ん、と振抗るを、信乃は撃せず右手なる臂を、拳揚りに拿禁て、丁と中たる臼打の妙術、徳用も亦斤斗りて、仆れて一霎時氣絶やしけん、又起べうもあらざりしを、信乃は大刀の緒拔出して、最も緊しく結栫りけり。浩處に、道節毛野、大角莊介、小文吾現八們二隊の六犬士は、生拘の僧俗を、或は馬にうち駝し、或は八個の夥兵に牽して、うち連立て來にければ、信乃は逈にこれを觀て、近づく隨に六兄弟に、二度鬪戰の事の趣、怪風猛に塵埃を起して、一霎時晦冥に倣りし事、迷ふて這里なる路傍矮堂に、風を避つゝ料ずも、徳

ひ合すれば、曩に、大庵にて施行の折、最後に來にけりといふ、那忠告の衰老法師には、紀二六が計ひて、殘れる米二升あまりと、錢五百文を取らしき、と聞えしに、這那符節を合する如し。然ば那衰老法師は、這地藏菩薩の化現にて、米と錢は紀二六が、取らせし東西に疑ひなし。この事奇異に過たれども、熟唐山の故事を思惟るに、豊山の鐘は、不敲しておのづから鳴り、魏揄の石は非常にして、よく言ひし事あり。又僧生公は、經を虎丘寺に講じしに、そを信ずる者なかりしかば、石を聚て聽衆と做しゝに、談義妙理に至る毎に、その石皆點頭にきといへり。しからば今這神靈奇瑰も、亦那等類といはまくのみ。畢竟、大老庵主の、多年勤行不怠の積德、天地幽冥に感通して、那菑害を這佛の、はやくも告させ給ひし歟。然にても常言に、緣なき衆生は、度しがたしといへり。抑這地藏菩薩は、始里見殿に緣ある者の、建立したる歟とばかりに、思ひ難つゝ御佛の、背のかたをよく觀れば、彫做たる歲月あり。嘉吉元年七月廿四日、建立、願主淨西といふ、一十六言の、鮮明に讀れしかば、越に聊考据を得たり。這淨西を人に問はゞ、素生を知るよしなからずや。有恁る奇特を庵主にも、義兄弟にも、蜑崎們にも、告るに事の照驗なくば、虛談としも思はれん。要こそあれ、と肚裏に、主意はやく決りしかば、地藏菩薩を默禱して、然而勒肚の財囊より、方金一個を拿出し、紙に拈りて、五百の錢に、結附

し合せて、推捕稠て撃んとす。時に劾風猛可に起りて、天を翳る塵霧に、敵も信乃さへ仰ざまに、吹滾されて捫捋しつゝ、兵別れにぞなりにける。然ば徳用も悪衆徒們も、怪しき風に怕れて迯し歟。然らずは猛に闇きに迷ひて、心ともなく退き去りし歟、這頭に敵は在らずと猜する、信乃は剛才川の邊にて、敵の銃响聞えしを、思へば庵主蟇崎生、姥雪們はいかになりにけん。疾那里へ赴きて、安危を倶にすべけれ、と心頻りに遽がれて、搔撈々々橋ある方に、走りゆかまく欲せしに、黒白も別ず暗ければ、鈍や投す方には届らずして、小屋の邊に迷ひ來つ、訝りながら那這と、拊つ探りつ推量るに、こは褊小なる路傍矮堂也。嚮にこの處を過りし折、心ともなく見しは正可に、是なるべし、と猜しつゝ、姑且風を避んとて、軈て裏面に入て撈檢るに、四面は僅に六尺に過ずして、立像の石佛あり。門扉は風に吹採られし歟、出入に障りなければ、臺座の石に尻を掛て、風の恬ぬるを等程に、いまだ半時ならずして、風歇み塵埃鎭りて、天の明けるに異ならず。登時信乃は、這路傍小堂なる、本尊を摯て見るに、則是石造の地藏菩薩、身材五尺許なるが、臺座の上に立給へり。素より石の良らねばや、面部に缺たる處あり、且茜染の布嚢の、麻の紐を附たるに東西を納て、錢四五百文縢附たるを、項に掛給ひにけり。其爲體訝しければ、拿卸して検するに、嚢は地藏の頭巾なるべし、米貳升許藏てあり。熟思

在つゝ等けれども、既に日の傾けば、又紀二六を先に立て、庫裏の邊に來にける折、七犬士は、丶大照文代四郎と倶に、裡面に入て憩ひて在り。經稜素頼、德用堅削們、都て生口毎をば、外面なる葛籠石、或は老たる松に繋して、照文の夥兵作當們うち戍りたり、現庫裏の簀子は朽たれども、猶膝を容るゝ處なきにしもあらず。遮莫筵を求めがたければ、猛可に草を多く刈せて、そを打布しつゝ、丶大法師は、笈を上座に卸し居て、徐に數珠を爪繰て坐り。开が身邊には、七犬士と、照文代四郎も團坐したるに、毛野が今來ぬるを見て、照文がいふやう、今日の鬪戰は、不慮の事にて、戰飯の准備なければ、孰もさぞな、東西欲しき時候なるべし、と思へども、市遠くして徵めがたかり。犬阪主は、智囊の譽あり、好主意は候はずや。と問ふを信乃は推禁めて、そは咱們豫より、准備したるにあらねども、細小の齎あり。連立來ぬる六兄弟は、見も聞もしたる事ながら、その餘にはまだ告ざりければ、先や來歷を解んといふ、事の顚末を原るに、信乃は獨に中途にて、舊稻塚の小杉木をもて、居多の敵を擊走らして、那德用と戰ひしに、德用は武藝あり、且膂力人に勝れて、六七十斤もあらんと思ふ、鐵の鹿杖を兩手に採て、一霎時は挑みたりけれども、分に過たる器械なればや、漸々に如意ならで、腕亂れて堪ざりけむ、怯れし衆徒を罵勵して、翊助を討ること急なりければ、初逃たる惡衆徒們、一度に咄と返

應せざれば術もなく、走りかへり候ひき。と報るを照文うち听て、且犬士們の意見を問ふに、異議あるべくもあらざれば、卒とばかりにうち連立て、大家三門の邊に迫るに、杜酷く傾たれば、雖推々、門扉開かず。只得角門の頽れたる處より潛り入るに、現紀二六がいへるごとく、寂寞たる廢毀院、昔の餘波は礎のみ。茫々たる夏草の裡より、驚き立つ告天子は雲に入り、青葱たる新樹の蔭には、郭公鳥の聲高く聞えたり。然ば苔生たる石の水盤は、虚しく施主の連名を殘し、笠を喪ひし露佛像は、膝に茨の花開て、鍼の筵に趺坐し給へり。是をもて、鼯鼠の栖に倣れる、埋井に隣る狐の穴あり。衆鳥の糞、白き石上に、兎の足跡多かり。正に是、應仁亂離の災に遇ずは、嘉吉の兵燹に亡びたる、七堂伽藍なるべしとぞ思ふ八犬士は、丶大照文代四郎と共侶に、立聚ひつゝこれを觀る程に、毛野は紀二六を案内にして、庫裏の背にありといふ、白屋にゆきて檢するに、在りと聞たる、一個の法師は、那里へゆきけん影もなく、其頭に立る石地藏の、水盤の左右の隅に、鹽を土器に、杉形に裝たるあり。這石菩薩には、罕に詣る人ある歟、然らずは那法師の、供へたるならん、と猜するのみ、人在らざれば問に由なし。又這白屋の前面には、いと大きなる竹叢あり、折から壤を串き出たる筍子の、或は二三寸、或は四五寸なるも、多くありけり。毛野は那法師のかへり來ぬるや、と一霎時白屋の檐下に、立

を談るも樂しかりぬべし。然ば左右川橋の那方なる、田圃を畊す莊客們は、這光景を遥に觀て、驚怕れざるはなく、途に行あふ土民、旅客も亦逃躱れて、遮禁る者なければ、八犬士は十二分に、隊伍を整へ、威風を燿かして、徐歩ゆくこと半里許、と見れば路の傍に一町あまり引入れたる並樹ありて、前面に故りたる三門見えけり。登時毛野は遽しく、先に立たる道節莊介、小文吾現八を喚住め、各這頭に憩んとならば、那舊院こそしかるべけれ。といふに道節們は、一議に及ばず、信乃大角、親兵衛照文代四郎にも、遺なく毛野が意見を示すに、大家しかるべし。と應しかば、照文隨卽伴若黨なる、直塚紀二六に吩咐て、那里の光景を見て來よとて、いそがし立て遣しゝに、姑且してかへり來て、照文並に犬士等に告るやう、小可那里へ赴きて、隈なく檢し候ひしに、昔はしかるべき大刹なりけん、今觀る所は荒果て、草茸々たる處々に、柱礎の遺れるのみ。遮莫庫裏は猶これあり。丌も甍は墮碎けて、雨はさら也、月も漏るべく、白壁壞れて、骨の顯れたる處、蟢手形なる窻に似たり。然ば柱斜にして、片假名のノの字の如く、簀子は朽て、燕子花なき八橋かと疑る。恁れば守る者候はず、但庫裏の背のかたに、褊小なる白屋あり、其首には年六十計なる一個の法師が、柱に背を凭けて、打睡して在りしかば、山號寺號を問んと思ひて、しば〳〵喚覺し候ひしに、熟睡したるか、聾兒なる歟、

事恁々と告知すれば、信乃は亦、大照文に告るやう、嚮に咱們は悪僧毎に、路を斷れて合期せざれば、庵主の先途を救ふに遑あらず。戰ひ央なりし時候、怪しき風に兵別れして、後に徳用を生拘りぬ。折から這六兄弟們が勝軍して、退き來ぬるに逢ひしかば、事の首尾分からず、且その地方の路傍小堂にて、今昔未曾有の奇異あるを見き。思ひ合するよしあれば、はやく告まくほしかれども、恁立聚ひて時を移さば、城より討隊の大勢を、蒐らるゝことあらん折、防ぐに便り宜しからず。先諸川の方に退きて、便宜の地方に敵を等ん。といへば道節拱み寄て、その義最しかるべし。城より討隊の追來るならば、悪僧俗們が非法邪計を、詳に解示して、我們素より罪なきよしを、告るとも聽れずは、先黨祀に生口毎の、首撃落して寄隊を破らん。今更別議はなきものをや。と惴るを毛野は推禁めて、开も亦時宜に由るべきのみ。卒ゆくべし。といそがせば、親兵衛も亦いふやう、咱們も亦賢兄達に、告まくほしき一路兒の、薄命の歎きありといへども、今の急務にあらざれば、再議の折に、餘談を盡さん。這里には要なし、卒々。といふに大家異議もなく、八犬照文代四郎は、夥兵作當共侶に、ゝ大法師の先に立ち、後に跟きつゝ生口毎を、追立々々左右川橋を、渡りいくその路すがら、荘介と照文は、年來疎遠の親族にて、小文吾と親兵衛は、外戚の小父猶子なれば、那と這とは肩を比べて、悄々に舊にし事

告知して、躬方三所の勝利を問ふに、道節莊介先答ていふやう、豫相謀りし如く、我們は那茂林にて、毛野大角、現八小文吾と二隊に別れて、緝捕の士卒を撃走らし、小文吾現八は、悪僧堅削と、堅名經稜を生拘りぬ。又大角は根生野素頼を虜にしけるに、其奴們は足を損ねて、あるくべくもあらざれば、分捕したる經稜が、馬あるをもて件の三虜を、一鞍に縢附て、牽してこゝに來ぬる也。この餘の生口も、法師武者は、殺伐破戒の罪許すべからず、又經稜素頼が家僕也と聞えしは、饒さずして牽もて來つ、その他泛々の奴們は、兩所の茂林の樹の幹に、結枷著たる儘にして、皆うち棄候ひき。豫庵主の教訓あれば、一個も敵を殺さゞりしに、却憐むべきものは、星額長老師弟也。事の始に寄隊の士卒を、和解て無事に扱んとて、漫に走出たるを、素頼が理不盡に、一個も漏さず搦捕らして、後陣に退けたり、と聞えしかば、鬪戰果て、躬方の夥兵に、其頭を隈なく索させしに、那里へか牽もてゆきけん、亟に往方は知れずなりぬ。故に這生口們を、那長老師弟と交易の、爲にもがなと思ふのみ。却這里にても前後に敵ありて、戰ひ難義なりし折、天の資助か、風雲にて、いと闇くなりけるよしは、犬塚に聞て胸安からざりしに、恙もまさで芽出たし。と祝せば現八小文吾毛野、大角も亦云云。と喜びを舒などす。當下、大照文は、星額師弟をあはれみて、且八犬士等の功を譽め、這里なる敵は同士撃しける、

第九輯卷之十九

五八九

に牽して、聚ひ來にける光景は、天部の善神戰克て、阿修羅を降しゝ勢ひも、恁やとぞ思ふ照文は、見つゝ手を抗げうち招きて、喃犬塚主犬士達恙もなきや。我們は、嚮に這地方にて、大敵防ぐに勢ひ窮りて、主僕共侶に搦捕られ、庵主も免れがたかりしに、料ずもこゝに來にける、犬江生に拯れて、勍敵退散したりといふ、歡びあまりて懼りもなき、喚聲の高かるは、自然の勢ひならんと思ふ、親兵衛ははやく身を起して、代四郎と紀二六が、後に跟くを見かへりながら、走りて五十歩許出迎て、小父公は孰に候ぞ、犬塚犬飼自餘の賢兄、晩生則犬江親兵衛仁にこそ候なれ。と告名るを等ず、小文吾信乃、現八を第一番にて、荘介道節毛野大角も、はやく親兵衛に近づきて、こは大八歟、聞しより、思ひしよりも大人備て、適男になりけるよ。洒家は小父也、小文吾也。咱們は信乃也、現八也。と七個名告る、不勝の喜び、背を撫つ顔うち目戍る、親しき疎き隔なく、皆骨肉の思ひあり、具に名状すべからず。代四郎は含笑ながら、照文の若黨紀二六們と、倶に跪きて傍に在り。嗚呼時なる哉、至れる哉、八犬爰に具足して、八行の玉聯串の功、丶大の宿望虚しからぬを、看官もうち微笑るべく、作者は二十餘年の腹稿、その機を發く小團圓、いはでもしるき一朝の、筆ならざるを思ふべし。閒話休題、登時、大照文も、七犬士を相迎へて、親兵衛が救厄の戰功と、風雲天助の崖略を、箇様々々と

犬士は、迭に面善るべくもあらず。然ば犬田は和君の小父でも、犬塚犬飼は相識でも、そも面忘れしたらんに、何を所据に名告あふべき。只我們も俱にゆくべけれ。といはれて親兵衛沈吟じて、然とても兩個は要なし、姥雪叟を作ふべし。枉てこの議に任し給へ。今先見べきものこそあれ。といひつゝ軈て身を起して、走りて圯橋の中央に迨りて、水中を見つ、左右の水際を、兩三番見亙して、故の處にかへり來つ。然而、犬照文代四郎們に報るやう、晩生那里に赴きて、檢ること隈もなかりしに、孝嗣次團太鮮三們は、急湍の爲に流されけん、屍骸は孰も見えざりき。又嚮に晩生に、馬の尻を撻驚されて、走りて人馬共侶に、川に陷りし敵の頭人は、則結城の家臣にて、長城枕之介惴利、と喚做奴ならん。こも那奇しき法師に听にき。爾るに那奴も馬さへ見えず。只那惴利のみならず、慌て怒風に吹滾されて、一度に川へ陷たらん、と猜し思ふ那伏兵們も、川下より逃たる歟、推流されし歟、在らずなりぬ。恁れば後安かりてん。蟹崎主は、作當を將て、庵主と俱に這川邊を、はやく立去り給ひね。といそがす折から跫然と、結城の方より人居多、這方を投て來ぬるあり。敵歟と見れば、正に是、七犬の儕にて信乃は既に德用を生拘りて、躬方の夥兵に索を執らして、眞先に是を牽したり。又道節毛野大角、莊介現八小文吾は、素賴經稜堅削を、一馬に滕乘せて、この宅生拘の僧俗を、こも亦七個の夥兵

にける程、這里に勍敵の起りし折、犬塚も亦一百あまりの、悪僧們に路を斷れし、力戰の光景は、間遠くもあらざれば、拙僧們も見てこれを知れり。しかるに風雲の奇異ありて、猛可に暗くなりし折、犬塚は何とかしけん、今又見るに那里には、敵も那人もあらずなりにき。且塔所の茂林に敵を等たる、犬山犬川六犬士の、勝敗いまだ知るべからず。この義を思ひ給はずや。と問へば照文代四郎も、然也々々。と點頭て、現犬塚の上はしも、我們も亦心に掛れば、犬江和君に商量して、指揮に據んとおもひしかども、要談多にて、言後れたり。といふを親兵衛見かえりて、その義は庵主も叟達も、然までに配慮し給ふな。犬塚は、那孝嗣次團太、鮒三們と同じからず。身をはなさゞる靈玉あれば、搦捕らるべくもあらず、とは思へども、丌が儘に、見捨て那里へかいなんや。晩生は、悪衆徒に、認られざるこそ幸ひなれ。那里までも赴きて、犬塚竝に餘の六犬士の、安危を尋ね力を勠して、共侶に將て來てん。叟達は、庵主に倶して、諸川まで退き給へ。這里は人煙遠けれども、結城へ入る者出る者の、必據るべき要路ならんに、今まで往來の人なきは、風雲の闇きに怕れし歟、然らずはこも亦神明佛陀の、禁めさせ給ふにやあらんずらん。然ばとて虚々と、這里にて長談すべがらず、やよとく〳〵。といそがせば、照文代四郎頭を掉て、そはこゝろ得候へども、犬田犬飼犬塚を除くの外、和君に對面せざる

菩薩の利益なる歟、亦守護神の冥助なる歟、然らずは、遺骨を駝れ給ふ、先君威靈の擁護なるべし。恁る奇特はありながら、孝嗣次團太鯽三のみ、果敢なく敵に擊陷されしは、命數爰に竭たる故歟。他們は忠孝義俠にして、身を禍鬼に喪れし、因果を佛說に據て思惟れば、前世の業報とやいふべからん。左にも右にもいと惜しけれ。と喞言がましく解示すを、听つゝ呆るゝ照文代四郎、告んと豫思ひし事を、奇しく親兵衛に聞知られて、他よりいはるゝ當意卽妙、さてもゝゝ。とばかりに、答るよしもなかりける。姑且して照文がいふやう、是も亦犬江生、聞知られし歟知らねども、卑職この地に來ぬる折、丶大庵をたづね難て、殆困じたりけるに、奇しき法師に案內をせられて、面會の本意を遂にき。𢌞亦星額師弟の、石塔婆の奇工あり、乞丐法師の忠告あり。是に由て彼を思ふに、和殿に先機を告し法師は、權者の化現なるべき歟、いと憑しく候。といへば代四郎もうち點頭て、倶に感嘆したりける。這時丶大は笈をも卸さず、朽樹の伐株に尻を掛つゝ、件の奇談を聞果て、親兵衛に向ひていふやう、聞がごときはいよゝゝ妙なる、這那一致の善報は、凡智をもて悟りがたけれども、那政木生とやらん、善人三個の薄命は、實に和殿のいへる如く、過世の業因なるべし、と思ひ絕なば絕もせん、なほ心許なきは、犬塚が安危也。那人は始より、趕來る敵のありもやせん、と思慮りつゝ、一町許、胡意後れて來

折、前面より來ぬる一個の法師が、咱們をヤヤと喚住めて、和君達は、今日、大庵の、念佛供養に會んとて、結城へ赴き給ふなるべし。いまだ知せ給はずや、件の庵主は、今恁々の地方にて、一路兒と共侶に、免れがたき急難あらん。その故は箇樣々々、恁々の情由ありとて、庵主の宿願成就の事、星額長老師弟の事、及先君季基朝臣の遺骨の事、又施行の折に來にける、乞丐法師の忠告の事の趣、逸疋寺の住持德用、その徒弟堅削們が、惡心邪議を帮助ぬる、結城の驕臣、經稜素頼惴利們が、詭詐の緝捕の事、又犬山犬阪、犬飼犬川、犬田犬村の義兄弟は、塔所の茂材邊に猶在りて、二隊に別れて敵を等つ事、又犬塚は蜑崎姥雪們の帮助として、庵主に俱して塔所の茂林を、はやく立去りし事、この餘念佛供養の光景、姥雪叟は、故主の隨意、與四郎の與を改めて、代四郎與保、と喚るゝことまで、漏さで具に告らるゝ、言約にして諄からねば、時を移さず聽果ける、虛實は知ず、怪しくも、胸安からねば、件の法師の、出處を問質すに遑あらず、只そが儘に立別れ、飛が像くに走り來て、見れば果して那言錯はず、叟達主僕は搦捕られて、庵主も危窮の折なれば、毫も凝議せず踏入で、聊孤力を盡しゝに、敵に火銃の準備あれば、防ぐべくもあらざりしに、奇しき風雲の帮助によりて、同士擊させて、射方に利あり。遂に怨敵退散して、皆恙なき幸ひは、是晚生が功にあらず、庵主の道德高ければ、佛

での、餘時あれかし、と思ひぬる、心頻りにいそがれて、はやく館山を辭し去りつ、孝嗣次團太鮒三を伴ふて、今日巳牌過る時候、船關宿に果しかば、送られたる五十三太們に相別れて、陸に登り、路次をいそぎて、剛才這里に來にけるに、橋より見れば、おん身竝に、蟹崎主僕、姥雪們に急難あり。敵は誰にもあれ、饒すべき奴ならざれば、聊孤力を盡しゝに、猶風雲の天助ありて、思ひの隨に、各位を、救ひ得たりし歡びに、就て叉最遺憾しきは、孝嗣次團太鮒三が横死也。我步殊に早かりけん、他們は後れて來にける程に、藪陰なる敵の鐵砲に撃れて、川に陷しかば、骸も留ずなりにけん、今の歎きは是事のみ。といふに驚く、大と倶に、側聞しぬる照文代四郎、さては。とばかり胸を潰して、齊一嘆息したりける。姑且して代四郎は、親兵衛にうち向ひて、喃和子、老僕もいぬる日に、蟹崎主とおなじ折、おん使を奉りて、船をおん身の舊里なる、市河へとて乘走らしゝ、その事の趣は、聞も及せ給ひけん。しかるに風波の障りありて、おん身が那里を立去り給ひし、後に犬江屋へ尋ゆきしかば、本意を得遂ず、這地に來て、蟹崎主に對面の折、おん身の往方も、那人々の、忠孝義俠を聞知りて、いと憑しく思ひしに、政木生石龜屋們も、這里まで來つゝ敵の爲に、可惜命を隕されしは、現痛しき事にこそ。といふに親兵衛嗟嘆して、そは勿論の事ながら、嚮に我們路次をいそぎて、諸川を過る

り拿つゝ、笈を搭駝る隨にして、端然として立在たるに、今親兵衛が名告るを听て、左見右顧つゝ、感涙の抆むを覺ず、うち頷きて、詞徐に答るやう、いはるゝごとく、絕て久しき、再會の甲斐ありて、今の薛鬼を對治せられし、武勇人柄正に是、和殿なりしを知るものから、然も危窮の折にして、風雲闇夜に異ならねば、事問ふべくもあらざりしに、勍敵去て、風雲歇り、恁は迭に恙なき、對面何事歟これに優すべき。却いと大きう做りけるかな。神の冥助と靈山仙果の藥餌に憑りて、大人備たりき、と聞しに優る目覺しさよ。和殿は自餘の義兄弟、七犬士に先だちて、君侯御父子に拜見の始より、大功ありける事の顚末、いぬる日兩國河の邊にて、憶りなく蜑崎生に、君命を傳へられて、反賊蟇田素藤を、再征の爲にとて、田税逸時、苫屋景能、並に五十三太、素手吉とやらんを伴ふて、舟路を上總へ赴き給ひしと云、その折までの崖略は、蜑崎生に聞たりき。意ふに再征の功はやく成て、目今來會せられしならん。といはれて親兵衞、然ン候。旣に猜し給ひしに錯はず、素藤對治の寸功は、逸時景能、孝嗣次團太、鯽三們の幇助もあり、又討隊の大將荒川老の、陣營にも謀し合しゝ、御方の勇戰一致の故也。然ば素藤妙椿はさら也、宗徒の兇賊遺もなく、或は生拘り、或は誅して、館山平治したれども、猶一椿事の先命あれば、自餘七個の義兄弟を、索て途に迎ふべく、蜑崎生に面會して、這地の法筵にあふま

暴れて、塵霧天を翳め、一霎時野干玉の烏夜になりしかば、敵の伏兵慌迷ひて、走りて河水にや陷りけん、其頭に水音高く聞えて、居多の人の吁とばかりに、叫ぶ聲してけるが、爾後は、音もせず、寔に奇しき天助なるに、猶幸なりけるは、疾風烈しかりけれども、親兵衛その餘も躬方の身邊を、避てや吹けん中らねば、吹倒さるゝ患ひもあらず、只孝嗣們を悼み思ふ、哀歡交分くよしもなく、惆然として在りける程に、勁風恬ぎ、塵霧霽て、青天白日明亮たり。登時親兵衛聲をかけて、やよ蟹崎主姥雪叟、幸ひにして恙なきや。と問つゝ鞘て匕首をもて、蟹崎主僕、代四郎が、掛られたる索を截棄れは、大家歡ぶそが中に、照文と代四郎は、敵の夥兵に打隳されたる、兩刀を拿抗、腰に跨て、感涙の拭をおぼえず、吁よき折から犬江生、救れたるは、神所爲歟、再生の恩、奇にして妙也。やよや那里に在するは、大庵主にこそといふ。親兵衛これを聞あへず、遽しく、大の身邊に、找み朝ひつ跪きて、こは師父にてをはするよな、晩生則犬江親兵衛仁にて候也。年纔に四歳の時、舊里近き行徳にて、おん日にかゝり候ひしを、人傳に聞くのみにして、面忘れたりければ、咫にはものをいひ難し、遲鈍失敬許させ給へ。といと丁寧に陪話にけり。這時、大は、料らざりける、親兵衛が幇助によりて、身は勍敵の索に被らず、且風雲の天變にて、最大暗くなりし時、敵の夥兵に打隳されたる、錫杖を搔撈




天助人力窮厄を解く

で、一隊は圯橋を渡り來ぬる、三個の敵を撃陷し、一隊は少年を撃んとて、十四五挺の銃頭を、はやく其方へ推向て、一度に鑽て放ちしに、伏姫神の擁護にや憑りけん、親兵衛、大の身にはさら也、搦捕られて這里にある、照文主僕、代四郎們には、その銕丸毫も中らずして、撃るゝは皆他們が伙家の、親兵衛と戰ふ者のみなれば、死を免れしは驚呆れて、群たる鼠の逃るが如く、一個も在らず做りしかば、伏兵も慌、且恥て、又遽しく丸を籠て、復親兵衛を撃んとす。恁る折から忽然と、颶風猛可に吹起りて、最凄じかりければ、那伏兵們は、鐵砲の、火索を都て風に拿られて、又撃出すべくもあらず。天さへ曇る塵霾に、黑白も別ずなりしかば、伏兵們は、驚譟ぎて、吹倒されじ、と四下なる、竹に携りてありけるに、藪陰に年歷たる、槐橫の倒るゝに、撲れて矢庭に死する者、五七名なりければ、大家得堪ず、慌迷ひて、立去んとせし程に、最闇ければ、いよ〳〵迷ひて、川の邊へ出て來つ、憶ず風に吹滾され、齊一急湍に陷りて、浮きつ沈みつ流れけん、這頭に敵はあらずなりけり。爾程に親兵衛は、後れて來ぬる三個の同行、孝嗣次團太鯽三が、方纔右左川橋の中央にて、憐むべし敵の鐵砲に、撃れて水に陷りける、其光景を見るといへども、事急なれば、拯ふに由なく、剩我身も敵の銃頭を、免るべくもあらざりしに、反て他們は同士撃して、躬方の洪福になりしのみならず、颶風猛可に吹

怒に堪ぬ聲高やかに、やをれ人々手を止めよ。事具には知らねども、同藩の情、朋友の義、見てやは已ん。兵毎聞け、犬士の一人、里見の家臣、犬江親兵衛仁なるぞ。と名告も果ず、鐵扇もて、惴利が馬の尻を、力に乘して托地と撻つ。撻れて驚く馬は只、狂走れる勢ひ駐らず、主共侶に左右川の、淵へ汆と陷にけり。親兵衛これを見もかへらず、驚き譟ぐ敵の夥兵を、又鐵扇もて毆伏せ、或は蹴倒し、搔抓み、飛礫に拿て投る折から、後れて來ぬる孝嗣次團太、鯽三も共侶に、事ありけり、と見てければ、うち驚きつゝ甲乙齊一、走りて渡る左右川の、橋の中央に迨る程、前面の岸なる藪陰より、連放る鐵砲の、箭嚮と共に孝嗣們、三名は倶に撻と撃れて、陷て往方は急湍の水に、推流されし歟、淪みし歟、在りとは見えずなりにけり。原るに、這數十挺の鐵砲は、是別人の所行ならず、惴利豫夥兵を分ちて、三十人には鐵砲を、持して藪陰に伏置きつ、尶尬兒們倘悍くて、手に餘る事もあらば、擊仆しね。と下知しけり。然ばその三十個の夥兵們は、思ひがけなき一個の少年が、諸川の方より走り來て、矢庭に頭人惴利を、人馬共侶撻走らして、川へ陷しゝのみならず、躬方の夥兵を投石に拿て、人なき境に入る如き、武勇に當るべくもあらざるに、他が一路兒にやあらん、主僕と見えたる武士三名、那少年に些し後れて、走りて川の前面より、突然として來にければ、這藪陰なる伏兵は、趣を易竃をわかち

ひ、兩虎高岳に宍を欲するも、慿やと思ふ可なれば、全隊の惡僧道人們は、呆れて倶に長視て在り。然ば又左右川の邊にて、照文代四郎居多の敵を、防ぎ難つゝ共侶に、只得刀を引拔て、殺拂々々、一霎時は挑戰へども、憍利連りに隊勢を找めて、息をも養ず攻たりければ、照文も代四郎も、竟に勢ひ窮りて、代四郎は跌顚び、照文も又敵の十手に、刃を丁と打落されて、ひとしく搦捕らるゝを、見るに不娛しき、大法師は、左右の帮助を喪ひて、防ぐに術のあらざれば、亦倒に敵を拒まで、觀念の外、他事なかりしを、夥兵們得たり、と左右より、抓み馮つゝ組禁れば、憍利馬上に雀躍して、其奴緩めな。手も足も、結梱れ〳〵。と下知しけり。嗚呼憐むべし、二十餘年、抖擻行脚の勇僧も、時運好からで、暴戾奸詐の、這禍鬼を攘ひもあへぬ、嗟嘆やる方なかりけり。浩處に犬江親兵衛は、政木孝嗣と、石龜屋次團太鮒三を伴ふて、五十三太素手吉に送られたる、水行を今日は關宿より、陸に登り路次を急ぎて、孝嗣們に先だつこと、約莫一町許にして、目今這里に來にけるが、と見れば左右川の那方にて、旅客ならん、三個の僧俗、緝捕の夥兵と戰ひ負て、既に搦捕らるゝあり。その旅客主僕の內中、兩個は是武士にして、紛ふべくもあらざりける、照文と代四郎なりければ、原來法師は問でもしるき、丶大大德にこそあらめ、と驚き思ふ意外の遭際、等といはれぬ左右川橋を、飛が像くに渡り來つ、

の虛實を閱ひ、恩を窮民に施して、這地に住り我寺を、傾けんと欲しぬる、伎倆を誰か知ざるべき。國守の與には奸賊也、當寺の爲には法敵也。この故に、我忍辱の鎧を脫て、彌陀の利劍に異ならぬ、這鹿杖を携たり。只一打に往生させん。噫法師們、手溫し手ぬるし。大刀佩たりとて憚る事歟、宙に吊してもて來ずや。と喚り哮れば、その隊の惡僧、道人さへ共侶に、或は眉尖刀、捍棒を、打振々々競ひ蒐るを、信乃は准備の小杉木もて、打拂々々、先に找みし一兩僧を、左右へ撐と擊仆せば、怯むをさこそ、と聲高やかに、若們破戒無慙の兇僧、一個の敵と侮りて、安房の里見の犬士の一人、犬塚信乃をまだ知ずは、本事を見せん。といはせも果ず、替る二の隊の惡僧們が、入む眉尖刀に身を淪して、兩膝撲地薙倒す、武藝精妙、思ふに優たる、神出鬼沒の搾きに、惡僧們は皆舌を掉ふて、又立替る新隊はあらで、逡巡をしぬるのみなれば、德用悚へず、鐵の鹿杖兩手に拿揚て、輪々、と兩三番、振試々々、虀粉に做さん、と走り蒐れば、信乃は透さず身を反して、小杉木をもて了々礑と、受つ流しつ相挑めども、器械相應しからざれば、看官越に胸安からで、勝負誰何と思ふもあらん。知ずや信乃が懷には、那孝の字の靈玉あり。然でも自得の武藝精妙、毫も透間あらざれば、德用憶ず腕亂れて、心悄地に驚けども、猶も撓ず踏入々々、噓き叫びて戰ふたる、事の光景目覺しく、雙龍深淵に珠を爭

れけり。そが中に、ゝ大法師は、駝奉りし季基主の、遺骨を失はじとのみ心に掛て、聲も亂れぬ降魔の經文、誦掛々々錫杖もて、防ぐ甲斐ある武藝の妙要、昔の餘波著れて、毫も透間あらざれば、敵の夥兵は鬩くのみ、輒く捕も得ざりしを、惴利馬上に焦燥て、罵りつ又勵して、連りに隊勢を找めける。有恁りし程に犬塚信乃は、趕來る敵のありもやせん、と豫思へば由斷せず、ゝ大法師と相距ること、約一町許にして、殿しつゝ來にけるに、患は後にあらずして、緝捕の勁敵前にあり、一騎の頭人、居多の夥兵們、ゝ大代四郎照文主僕を、推捕稠て鬩くを、見るといへども慌ず譟がず、はやく心に思ふやう、那奴們は、豫聞く、結城の三士の一人にて、逸疋寺の住持を帮助る、亂妨こゝに及べるならん。先那騎馬の頭人を、撃仆しなば、殘兵は、戰ずして退け易し、と勝負を揣る、武略の卽智に、見かへる路の傍なる、舊稻塚の小杉木を、是究竟、と拔拿て、腋挾みつゝ奮然と、走り向んとせし程もあらせず、這里にも樹蔭に又敵ありて、顯れ出る法師武者、その勢約莫一百許の、內中に一個の隊長あり、問でもしるき這は是、逸疋寺の住持德用なり。括袖法衣に袈裟頭巾、尙巳時可なる、白き夾衣の下に身甲して、鐵の鹿杖の、重六十五斤なるを、突立々々先に找みて、隊勢と倶に犇々と、去向の路を斷塞ぎ、信乃を佐と疾視て、四下に响く聲も尖銳く、若們大胆、烏滸の尷尬兒、事を法會に假托て、當城

り、その一川は、許我川俣へ相沃ぎ、又一川は、仁連木、家部、堺に迨りて、倶に利根河に合流せり。こゝをもて土俗、是を左右川と喚做たり。今は這川あることなければ、看官訝り思ふもあらん。遮莫水路の同じからざる、今をもてその昔の、栞としも做すならば、船に契して、遺しゝ劒を求るに異ならず。陵墓鋤れて田となるあり、蒼田没して海に做れる、世代の轉變おもふべし。然ば這左右川の分るゝ處に、長五六間許なる圯橋ありけり。關宿より流に溯て、結城の城下へ來ぬる者は、必この橋を渡るなるべし。閒話休題。却說、信乃照文代四郎は、九個の伴當と共侶に、丶大法師の前後に立つゝ、武井の驛をうち過て、左右川の上に來にける程に、小塘隄に植る並樹の間より、居多の隊勢を從へて、走り出來る騎馬の武士、是則別人ならず、長城枕之助惴利也。去向をはやく殺塞ぐ、その隊の夥兵六七十名、御諚々々。と喚りて、各手々に振晃めかす、十手の電光、目を射る如く、前後を爭ふ緝捕の勢ひ、猛からざるにあらざれば、丶大法師の先に立たる、照文も代四郎も、今倒に一言半句の、問答の暇もなく、こは何事ぞ。とばかりに、組しはせじ、と相挑む、修煉の捍き、劣らず優さず、投退々々防げども、捕隊は然しも岌より蒐る、多人數なれば物ともせず。然ば照文が若黨紀二六、並に八個の伴當は、怯れたるにあらねども、武勇捷れし者ならねば、防ぎ難つゝ撻伏せられて、遺なく搦捕ら

頭立たるを許すことなく、那里までも牽もてゆきて、犬塚蜑崎姥雪に、力を勠して、庵主を守護せん。皆立給へ。といそがせば、大角一霎時と推禁めて、嚮に咱們が馬共侶に、薙滾して生拘たる、那根生野素頼は、馬に布れし折より腰立ず、その馬も亦後脚痺たり、牽もてゆくに不便なり。經稜堅削と共侶に、孤馬にうち駝せん。といふに大家異議もなく、夥兵にはやく吩咐て、素頼をも亦合鞍に、縢け駝して牽出す、その爲體をうち見れば、俗にいふ三貌荒神の、輕尻なれや、草枕、旅路いそしき六犬士は、去向甚麼、と安からぬ、こゝろ武井の驛路投て、人にはあはぬ杖原、其里歟とばかり捷徑を、求めて倶にいそぎけり。誠や時運に厚薄あり、事に幸あり不幸あり。丶大に倶したる信乃們の安危は、下の回に具なるべし。

第百二十七回

丶大庵の厄に親兵衛件を喪ふ
石菩薩の前に信乃應報を悟る

單表犬塚信乃戍孝は、道節毛野、莊介小文吾、現八大角們の、六犬士に先だちて、蜑崎主僕、姥雪代四郎們と共侶に、丶大法師に相從ふて、上總路を投ていそぎつゝ、旣に結城の町を離れて、ゆくこと一里半あまり、武井の驛をうち過て、杖を諸川の方に曳く程に、當時は這頭に岐川あ

さし〳〵等つゝ在りしかば、迭に鬪戰の趣を、箇樣〳〵と解示して、倶に笑局に入りにける。爰が中に道節がいふやう、假討手の頭人たる、素頼と經稜は、犬村犬飼に生拘られて、這頭に敵なきに似たれども、生拘毎を拷問して、他們が密策を听得たるに、尙一隊の兇徒あり、庵主を搦捕んとて、中途に埋伏しつといへば、胸安からざる所あり。和殿們この義を聞ずや。と急迫しく問へば、莊介答て、然ばとよ、その事なれ。我們も亦堅削が首伏にて既に知れり。然ども他們を誅戮せで、この處まで牽もて來ぬるは、丶大庵主の敎を守りて、衆議に任せんと思へばなりき。といふに小文吾現八も、亦云云と解示すを、毛野は倩うち听て、那隊の頭人長城枕之介惴利は、經稜素頼と同じからで、一百名の夥兵あり。是に加るに、逸疋寺の住持德用は、出家に似げなき武藝に長て、膂力飽まで剛かり、と聞くだに侮り難かるに、惴利は、隊兵に持したる、準備の神器將軍多かり、と生口毎が招によりてこれに思ふに、實に是勁敵也。犬塚素より智勇に秀て、よく敵するに足るといふとも、失なしとすべからず。又那星額長老師弟は、嚮に素頼に撞見して、搦捕られき、と聞えしかば、剛才躬方の夥兵をもて、其頭を曲なく索させしに、那里へ牽れけん、あらずといへり。事の理る折もあらば、這宗徒の生口と、那十個の法師達と、交易に便り宜しかるべし。然らでも武威を示す爲也、素頼經稜堅削們、悪僧は殊更に、

きて、犬山犬阪犬村們に、示して衆議に儘しなば、なほせん術もあらんかし。と諭せば現八感服して、その議寔に精妙也。約莫今番の鬪戰は、他們が妬忌の奸虐のみ、我より做しゝ事ならぬに、今一朝の怒に乘して、殺さば他們が主君たる、結城氏と怨を結ん。然では里見殿のおん爲に、宜しからざるを思はざりしは、我ながら短慮なりき。嗚呼愆り〳〵。と諄返しつゝ他事なければ、莊介小文吾、再議に及ばず、四個の夥兵にこゝろ得させて、經稜堅削們の生口を、牽立よとていそがするに、經稜は撲傷に惱て、一步も運び得ず。堅削も亦生拘られし折、片足を折きたる故に、立だに輙からずといへば、嚮に經稜が牽せたる、馬も既に分捕せられて、繫て樹下にあるをもて、隨卽件の僧俗を、その馬にうち乘せて、鞍に縢附などす。莊介們はこれを見て、二たび夥兵に下知するやう、この餘の生口多かれども、皆泛々の雜兵なれば、この儘にして棄てゆかん。但那儘に閣くまじきは、嚮に樹間に植させたる、涅槃偈の旛也けり。はやく採卸して燔棄よ。といふに夥兵們こゝろ得て、儀のごとくに做しにけり。有恁しかば、莊介小文吾現八は、經稜堅削をうち乘せたる、馬を眞先にあゆませて、この餘生口の惡僧を、夥兵に牽せ路をいそぎて、塔所の茂林にかへり來にける程に、道節毛野大角は、根生飛雁太素頼と、その隊の僧俗幾名歟、多く生拘たりけるを、茂林の樹の幹に繫がして、莊介們の三犬士を、を

指揮に依りて、已ことを得ず、當隊に加り候へども、只懲さんとおもひしのみ、眞實大人們を擊捕ん、と欲せし惡心は候はず。と勸解れば亦經稜の、伴當列卒の生拘られしも、咸跪き額を衝て、異口同樣に陳ずるやう、喃刀禰們聞し召せ。小可毎は、這囘の、計較には毫も干らず、情由だに知ず候ひしを、主命なれば、是もなく非もなく、相從ふて候ひき。いかで賢査し給へかし。と陪話つゝ連りにうち口說くを、三犬士は見もかへらず、柚木の株に尻を掛て、莊介が談ずるやう、犬田犬飼は、いかに思ひ給へる。堅削們が招に據るに、兇徒三方に向ひたる、事既に分明也。只心許なきは、ゝ大庵主の安危のみ。供養塔所に快立かへりて、犬山犬阪犬村們と、一隊に做りて庵主の跡を、赶て犬塚に力を勠せん。今の急務は只是のみ。といへば小文吾點頭て、そは勿論の事ながら、這生口們をいかにすべき。と問を現八聞あへず、幵も商議に及ぶことかは。一個々々に首を刎て、後安くせずもあらば、逃たる奴們がかへり來て、被たる索を解んずらん。然では盜に糧を齎し、仇に刃を借すに似て、是禍を貽す也。この義を思ひ給はずや。と勇むを莊介推禁めて、否、如右せんは易けれども、ゝ大庵主にいはれしよしあり。仄に聞ぬ、犬江親兵衞は、逆將素藤を征しゝ折、兇徒を一個も殺さずして、全勝の大功あり。然るを這生拘們を、殺さば庵主の誨に違ん。但經稜と惡僧們をのみ、供養塔所に牽もてゆ

の株に、腊を打せ、阿と叫びて、又起べくもあらざりしを、犬士の夥兵們走り蒐りて、索を被てぞ牽居ける。登時荘介小文吾は、現八が今にはじめぬ、拳法の精妙なるを感じ賞て、倶に經稜を責ていふやう、やをれ、烏滸の小人悔しからずや。爾は結城に由緒ある家臣、親の忠死の賞として、重職美祿を禀ながら、放辟邪侈にして、理義を思はず。心術相似たる、同僚の佞人、根生野飛雁太素頼、長城枕之介惴利と共侶に、逸疋寺の住持徳用、その徒弟堅削們に哄誘されて、、大庵の念佛供養を、非義とし媢て、君命と僞倡へ、僧俗烏合の多人數もて、我們さへに推並て、搦捕まく欲りしぬる、その計較の趣は、人の告るに知りたるが、今又惡僧堅削們の招にて、その詳なるよしを听得たり。知ずや那惡僧們は、爾が與に斥候して、漫に這頭へ來にけるを、我們既に擒捕て、爾を等こと久しかりき。今さらいふに及ばねども、、大庵主の念佛供養は、若們が先君先父の、菩提にしも干かれば、相歡びて、一臂の力を、資んとこそおもふべきに、そを告ざりしを罪として、讐敵の思ひをなせるは、抑何等の心ぞや。忠にもあらず孝ならぬ、冥罰越に覿面なるは、其身々々の亡君亡父に、叛きし祟もなからずやは。恁ても陳ずるよしあるや、甚麼ぞやいかにぞや。と迭代に責問へども、經稜は折傷の痛楚に、得堪ざりけんものいはず。當下堅削們の惡僧は、倶に蟬聲戰して、犬士達とやらゝ、允させ給へ。我們は住持徳用の、

著られてありしかば、いよ〳〵驚く經稜はさら也、隊兵都て膽を潰して、故を問ふあり、評するありて、捫擇しつゝ聚合噪ぐを、經稜急に叱禁めて、兵毎烏滸なる口をな啅そ。先那索を解捐よ。といはれて大家阿と應て、間近く立たる隊兵們が、腰に帶たる匕首を、手に〳〵拔て、堅削們が、索を截棄んとせし程に、前後の樹蔭に敵ありて、咄と鬨たる鬨の聲、谺に响きて、多少を知らず、突然として顯れ出る、這里にも三個の犬士の武者聲、犬川莊介こゝにあり、犬田小文吾、犬飼現八、茲に在り、こゝに在り。と名告被たる武威胆勇、その手に從ふ夥兵們は、纔に四名に過ざれども、士卒一致の進退烈しく、面に顯れ背に靡けて、短兵急に拉ぐ、奮勇正に虎をもて、羊を驅るに異ならざれば、始よりして鬪戰に、心なき莊客們は、いまだ近くは找まで在りしに、目今敵の鬨の聲を、聞くより呀々と驚怕れて、辟を衝て逃しかば、誰か駭慌ざるべき、逸疋寺の惡僧們はさら也、經稜が伴當列卒さへ、軍旅に熟ざる者のみなれば、敵の多少も見かへらず、皆只命を免れんとて、樹間を潛り路を求めて、走りもあへず、樹の根に跌き、或は背に續く者に、壓倒され踩躪られて、剩三犬士の夥兵們に、生拘るゝも多かりけり。开が中に經稜は、走る躬方を罵辱しめて、復せ戻せ。と喚りつゝ、憶ずも退後れしを、現八横ざまに衝と寄て、刃を丁と打落し、組しもやらず中一中て、三間あまり投しかば、經稜は老樹

樵夫のかよふ路のみにて、繁り粒たる松柏の、枝を交ぬ處もなければ、騎馬の進退難義なるべし。御坊は先鋒の頭人なれば、勇僧まれ猛卒まれ、五七名を從へて、わけ入りて隈もなく、渉獵らば敵の有無を知らん。那奴們倘切所を負みて、盾籠りてあるならば、驅出して戰ふとも、御坊們都て身單の、功名を貪らで、陽走しつゝ敵に趕して、誘引出すを妙とせん。この義な愆給ひそ。と心屬れば、堅削は、好しからぬ所行なれども、今さら推辭むことを得ず、そはこゝろ得て候。と答て聽て退きて、心魂相似たる、惡僧五六名を伴ひて、各持る眉尖刀にて、去向鬱悒き樹の枝を、搔分けつ亦推抗つ、敵を索ねて覺くも、深き森にぞ入にける。恁而堅名經稜は、隊勢を分ちて、那這なる、樹の蔭に埋伏させて、馬を駐めて、堅削們が、敵を惹寄するやとて等けるに、久しくなるまで影だに見せねば、且訝り且焦燥て、只得馬より下立つゝ、我みづから渉獵んとて、躱し置たる隊兵を、咸召出し、意見を示して、馬を牽しつ前後に立して、わけ入る茂林は鳥路熊徑、苔滑に樹下闇くて、辿るに辿り易からぬを、左右して兩三町、來ぬらんと思ふ程に、其頭の樹の下に人ありて、やよや人々救ずや、助けよかし。と叫ぶにぞ、經稜も隊兵も、噫とばかりに咸駭きて、觀ればこは是別人ならず、嚮に斥候に遣られたる、堅削、並に同伴の、法師武者さへ五六名、藤蔓をもて結紐られて、一個も漏れず老樹の幹に、縢

在り。下馬して命を乞ずや。と罵りながら白樫の、棒もて馬の後脚を、撥剌理托地と薙折けば、馬は一聲嘶きあへず、宛屏風を倒すが像く、主共侶に倆累りて、死活は知らず平張けり。話分兩頭。爾程に、堅名衆司經稜は、樹間に敵の旗見えたる、東の茂林へ推寄て、肇て後方を見かへれば、嚮に定めし人數にたがひて、從ふ隊兵多かりければ、こは甚麽、と訝りて、その義を問まく思ふ程に、堅削も亦走り來つ、喘を定め找寄りて、經稜に報るやう、嚮にはおん勢の多寡を定めて、三が一ッと宣ひしを、兵毎が聞誤て、莊客們さへ法師武者さへ、多く從ひ來にければ、三が二ッは這隊にあり。拙僧他們を喚返さんとて、軈て追蒐候ひしに、おん馬の最早ければ、得趕著かで這里に到れり。不便いふべうもあらどねも、今領て還らば六日の菖蒲、那里の期にはあひがたからん。この儘這頭の敵を擄りて、旗のみならば、この多人數もて、根生野主の後勤は勿論、捕漏されて逃るを趕はゞ、好獲もこそ候はめ。拙僧おん伴仕らん、この議に儘せ給はずや。と己が怯を塗祕す、舌も旋るや燕脂刷毛に、吐く巧言を信容るゝ、經稜屢點頭て、然也、這里より返すは遲かり。我主意も、其頭に過ず。素賴小勢になりぬといふとも、なほ一百個は隊兵あらん。且他が武藝勇悍、我と惴利們に伯仲す。不覺の搼きすべくもあらねば、那里の事は心安かり。先當要は這頭なる、敵の虛實を擄るに在り。とは思へども爭何せん、


現八僧俗二虜を挈く
大角
現八


大角一棒人馬を倒

逃も躱れもせざらんに、非道の索に被らるゝとも、我們をしも一列に、思れなば後悔あらん。といへば道節聲ふり立て、唯那十個の僧のみかは、、大庵主も、我黨も、罪せらるべき事ならねば、なほも來意を知まく欲さに、庵主の伴に立ずして、姑且和郎們を等つゝありける、是この兩個を誰とか思ふ。安房の里見に由縁ある、「八犬士のそが中にて、爾る者ありと知られたる、他は則犬阪毛野、我は犬山道節也。恁いひ解ても听れずは、弓箭採る身の常態にて、引は返さぬ武士の意地、本事を見せん、爭何ぞや。と理り譴たる兩個の犬士の、然しも雄々しき勢ひに、素頼計較物に違ひて、侮がたく思へども、多勢を負みて毫も猶豫せず。噫尷尬兒們が唔きたり。辯舌人を惑すとも、若們は是里見の與に、事を法會に假托て、竊に當城の虚實を覘ふ、悄使たるよしは、言語の端にも顯れたり。兵毎搦捕ずや。と劇しく隊勢を找れば、群立散動て爪を張る、猫も釋氏も共侶に、御掟ざふと喚り叫り、競ひ蒐るを道節毛野、兩個の夥兵も棒をもて、打拂うち拂ひ、毫も寄せず薙倒す、修煉に透間あることなければ、寄隊は多きもそのかひなく、いめき噪ぎて逃んとす。素頼これに駭慌て、道節毛野を射て仆さん、と思ふ箭坪を量りつゝ、弓に箭刺ふて彎絞る、那時遲し、這時速し、後方に一個の犬士あり、兩個の夥兵を從へて、樹蔭を出る聲高やかに、根生野素頼無禮なせそ。八犬士の隨一人、犬村大角こゝに

衆徒の帮助を借んと欲せず、貧民乞兒に施行して、恩義を示すは、奇怪ならずや。意ふに是若們は、隣國の間諜兒歟、爾らずは謀叛の奸賊ならむ。搦捕て領てまゐれとある、當館の御諚に依て、根生野飛雁太素頼が來つる也。似而非頭陀、丶大は、那里に在る。今日捕隊の頭人は、只我一隊のみならず、我同僚たる兩勇士、長城枕之介惴利、堅名衆司經稜們も、隊兵並に逸走寺の、加勢の大衆を從へて、八隅隈なく捕稠たれば、水も漏さず、火にも燒せず。然ば、丶大を資けたる、十個の賣僧はこれらのよしを、聞知りたる歟、猜せし歟、逃んとしつゝ我馬前に、撞見したれば、一個も漏さず、搦捕りて、後陣に在り。先途を知らば一個も遺なく、出て馬前に跪きて、索に被れ。と喚れば、道節呵々と冷笑ひて、愍念入りたる長談義に、今さら答んは大人氣なけれど、惑ひを釋んよく听ね。抑先亡追薦の、念佛供養の願主たる、丶大法師は無慾にて、素より名利の與ならねば、當城主へ訴て、免許を請んよしもなし。況這地の寺院に告て、帮助を借りて何にせん。且兼愛して普く濟ふ、施行は佛の慈悲なるに、疑るべき事にはあらず。約莫今番の法筵は、和郎們が先君氏朝主の、菩提にしも干りたれば、歡るべき筋ならんに、罪する事歟、こゝろ得がたし。と詰れば毛野も語を續て、既に搦捕られしと聞く、能化院の長老師弟は、丶大法師の舊識ならねど、善に與する心もて、昨今來會しぬるのみ、那身に犯せる罪なければ、

ち突然と、走り蒐れる鷙鳥の勢ひ、當るべうもあらざれば、星額長老徒弟們は、駭慌る聲戰して、こは人々理不盡也。惴りて疎鶻なし給ひそ。いふよしあり。と叫べども、耳にも被ず擊倒し、或は蹴返し突跌俯して、一個も餘さず犇々と、捕索被てぞ牽立る。開場勇しかりければ、素賴觀つゝ懽びて、やよや法師達でかしたり。その賊僧們を這頭に置ば、大們を搦捕る折に、脚手資緣になるべからん。今來し方に牽退けて、兩三人してよく衞りね。由斷してとりな復されそ。といふに惡僧們こゝろ得て、牽立んと欲するに、星額師弟は云云と、勸解て毫も身を起さねば、罵り怒る惡僧每、果しなければ十個の法師を、一個々々に搔抓む、膂力自慢に十個の肩へ、米苞の像くうち載て、被擔連てぞ舊路へ、掛聲揃てもてゆきけり。當下根生野素賴は、隊勢を我る樹粒の間より、庵頭に近著て、前面を佶とうち見れば、尙燃殘る猛火を背に、十間許前み出て、雙立たる勇士あり。是則別人ならず、道節毛野の二犬士也。左右に從ふ兩個の夥兵も、各持る捍棒を、或は突立脇挾みて、來れる者は是誰や。と問せも果ず根生野素賴、騎馬苛めしき聲も尖銳く、若們無禮烏滸の僧俗、近曾這頭に庵を締びて、嘉吉のむかし戰歿したる、列將士卒の菩提の與とて、人の憑ぬ念佛三昧、法會の今日に及ぶまで、國の守たる結城殿に、云々と請稟して、事の免許を承奉らず、況這地の大刹なる、逸疋寺へその義を告て、

拙僧程なくかへり來て、後陣に續きて新隊をもて、相資候はん。といふに素頼頷きて、そはしかるべし、赶蒐給へ。と答る間に堅削は、屑尖刀肱腋に引著て、飛が像く走去けり。爾程に素頼は、堅削を目送りつゝ、ゆきも得やらず在りけるに、東のかたには處々に、榛樹楙杉多かれば、往くも還るも見えわかず。等こと久しくなる隨に、心いよ〳〵焦燥て、左さま右さま思惟るに、隊兵寡くなりしかど、尚八九十名は這里に在り。开を堅削們が還るを等て、虛々として時を移さば、躬方の虛實を敵に知られて、頭陀們は遠く逃亡てん。爾らんには、我さへに怯れたりとて、經稜にも、又惴利にも笑れん。敵は他鄕の旅客なれば、骨ある奴們は七八名歟、十名には過ざるべきを、我隊兵に比れば、多寡の知れたる敵手也。克ずといふことあるべからず、と尋思をしつゝ隊兵們に、事恁々とこゝろ得させて、丶大庵へぞ推寄ける。この折までもまだ滅ぬ、敵の自燒の烟にて、迷ふべくもあらざれば、丶大の庵へ近著程に、早一町には足ずなりぬ。浩處に、能化院の星額長老は、逸疋寺の衆徒と城の士卒を、和解て無事に扱んとて、九個の徒弟を相倶して、走りて前面より來にけるを、素頼はやく佗と見て、那奴們は問でもしるき、丶大を幇助し禿驢にて、法會を果して還るならん。遣るな逃しそ搦捕れ。一個も漏すべからず。と劇しき下知に、逸疋寺の、惡僧們は、皆逸早く承りぬ。と答も果ず、士卒に先だ

つ、猛可に二隊に引わけて、東へ馬を早むれば、始よりして戰ひを、好ざりける莊客們は、敵なからんといはれたる、東の茂林こそ得意なれ、と思へば定の數に錯ひて、我も〳〵と經稜に、從ふ者のみ也ければ、堅削が隊に隷て來ぬる、子院屬守の法師武者に、亦一二の足を蹈も有て、我們は是出家なるに、今剛敵と戰ふて、分捕功名すればとて、武名を傳ん子孫はあらず、所領の主になるにもあらぬに、可惜命を的にして、敵ある方に向んより、東へゆくこそよかめれ。と一人がいへば、頷くあり、甲に囁き、乙に亦、はやく傳へて經稜が、馬の尻趕ふ夥計別に、素賴堅削聲苛立て、鈍や兵毎聞違へし歟。然しも要なき東の茂林へ、若們までがゆくこと歟。這方へ來ずや。と喚れば、素賴が列卒伴當們も、聲を資て喚禁れども、聞ぬ態して咸歩早に、見かへる者だになかりしかば、素賴も堅削も、呆れて一霎時長覷て在り。そが中に堅削は、肚裏に思ふやう、咱一朝の怒りに乘して、法敵たる、大們を、搦捕まく思ひつゝ、旣に先鋒の頭人たるに、今憶ずも夥計別して、隊勢寡くなりにける、這隊の搼き心許なし。我も東へ適には不如、と主意しても猶只管に、焦燥たる面色しつゝ、素賴にうち向ひて、見給ふ如く莊客們も、我黨も三が一ヶを、聞違へけん大かたならず、この隊を離れたらむには、軍令等閑に似て不便也。拙僧はやく赶蒐て、皆悉領て來てん。おん身は徐に馬を抜めて、頭陀が庵に推寄せ給へ。

を相て、噪ぎたる氣色もあらず。とばかりにして經稜は、馬上に堅削を見かへりて、御坊爾までに狐疑し給ふな。那首に旗の見ゆればとて、籠れる敵のあるべきや。丶大はさら也、聚合し奴們、這方の軍議を覦著けん、苦しき隨の拙策のみ。那は奇兵の術にて、東の茂林にも敵居多、籠れり、と思はせて、寄隊を住めて幵が間に、落延んとこそ計りけめ。烏滸なる事を。と冷笑へば、素頼、然なり。と點頭て、その議寔に違ふべからず。非除、丶大の施主たるものが、安房の里見の家臣でも、十餘名には過ぎざるべきに、由緣もあらぬ這地に來て、火急の難義あればとて、誰を憑て加勢にせんや。といへば經稜然ばとよ、推量明白なる上は、東は要なきに似たれども、萬に一の與なれば、堅削、御坊は東へ向ふて、敵の虛實を撈り給へ。猜する如く敵あらずは、はやく隊兵を這方へ找めて、庵の邊に在る敵の、尙退かで戰ひ剛くば、はやく横鎗を入れ給へ。そは必勝の搼きならん。といふを堅削うち听て、その議はこゝろ得候へども、師父の軍議に任せられて、拙僧先鋒に找みしを、敵なからんと思はるゝ、東の茂林へ立別れて、うち向んは本意にあらず。と推辭めば經稜焦燥て、幵は亦無益の議論也。今さら這里にて役不足して、時を移さば敵は皆、思ひの隨に逃亡てん。和僧爾までに思ひなば、洒家東へうち向ん。然ばとて多勢は要なし、我伴當と列卒每と、荘客們は三が一ッ、相別れて從ひ來よ。と辭急迫しく言示しつ

第九輯 卷之十九

第百二十六回

假捕使三路に兵を行ろ
義兄弟兩林に惡を懲す

復說、堅名衆司經稜、根生野飛雁太素賴は、鄕に逸匹寺の客殿にて、住持德用が意見に儘して、長城惴利們と二隊に另れし、緝捕の計議に違はず、這隊は則寺の惡僧、陸釋坊堅削を先鋒として、從ふ僧俗二百五六十名、ゝ大庵を投て推寄來つ。既にしてその間、遠くもあらずなる程に、正に去向の茂林の中より、黑烟立升りて、猛火の光見れけり。當下堅削眼早く、原來那奴們幾の間に歟、這方の機密を猜しけん。やよや兵每那を見よ。目今庵を自燒して、他鄕へ走るにぞあらんずらむ。捕な迯しそ、皆急ぎね。と聲高やかに罵示して、連りに找む程しもあらず、憶はず見かへる東の茂林に、一行の句を寫しゝ旗、三四旒樹の間に在り。曇勝なる四月の天の、雲餘波なく吹拂ふ、風のまに〳〵閃きたり。思ひかけずや敵も亦、二隊に別れし光景に、堅削疑訝りて、隊勢を制めて、左右なく找まず、後陣を等て意見を問ふに、經稜素賴も亦これ

稗官野乘は、鄙事也。是を好とは思はねども、本傳結局遠からねば、いはで已んはさすがにて、こゝにも筆を費して、百年以後の知音を俟べく、今より後の嘲哢議論を、解ばやとおもふばかりに、丁酉の秋八月念六日、東園黄白の木犀花馥郁たる、南檐の下にしるす者は、著作堂の癡老。

蓑笠漁隱

の山斗たり。愆れば昔の草子物語は、此にも俗語もて綴れるを思ふべし。和漢その文異なれども、情態をよく寫し得て、その趣を盡せる者、俗語ならざれば成すこと難かる、彼我同く一揆なり。然ばとて、今此間の俚言俗語の、轉訛侏離の甚しきを、そが儘文になすべからず。余が駁雜の文あるは、この侏離鄙俗を遁れんとて也。しかるに近世、建部綾足が西山物語、及本朝水滸傳（一名吉野物語）は、をさ〳〵古言もて綴るものから、就中本朝水滸傳は、その趣淨瑠理本とかいふものに似たる條ありて、今の俗語もまじりたれば、木に竹を接たるやうにて、且時好に稱ざりけん、僅に二編にて、果さゞりけり。（第二編は寫本にて傳ふ）又村田の翁が筑志船物語は、今古奇觀第二十六なる、蔡小姐忍ㇾ辱報ㇾ讐（拍案驚奇にも此と相似たる物語ありてその文同じからず蓋別話也）といふ一編を、皇國の故事に翻案して、古言もて綴れる也。然しも能文の所爲なれば、必初學の爲に、資助になるよし多からむ、惜むべし。この翻案半分にて、翁は簀を易にき。いかで門人に續出す者ありて、原本の局を果せかし、と吾一知音は呟きけり。そも國學者流にて、且和漢の稗史さへ、愛る餘力あれば也。とばかりにして俗の看官は、いまだその書を知らぬもある歟、行はるゝこと廣からず。只勸懲を旨として、書讀む事を好ざりける、世の婦幼にも、よく讀するは、余が如き、ゑせふみにもやあるべからん。

言魂を宗とし給ひて、文字の製度はなかりしに、應神天皇の御時に、初て漢字を傳へしより、後の世に至りては、人の詞はさら也、源氏物語などにすら、音訓うち任したる文あれば、なほ後々には、和漢駁雜の文章の、必いで來ぬべき勢ひ也。（太平記などを見て思ふべし）そを又一轉して、假名文に、唐山の俗語さへ、諳記の隨取用ひぬる、余が爲せ文を、國學及漢學の博士達、倘その眼に觸るゝもあらば、この駁雜を嘲噱ふて、云云といはるべからん。遮莫唐山にて、俗語もて綴れる書に、正文あり、方言あり、しからざれば用をなさず。又儒書方書佛教は、正文なるべき者なれども、そが中に俗語あるは、二程全書、朱子語類、俗語をもて綴りしは、奇功新事、傷寒條辨、虛堂錄、光明藏の類、なほあるべし。先輩既にこの辯あり。恁ればば彼が文華なるも、言魂の資を借ざれば、文を成すに如意ならず。矧亦大皇國の文章は、和漢雅俗、今古の差別あり。然るを今文場に遊ぶ者、孰かよく貫通せん。いとかたしとも難からずや。意ふに古昔の草子物語、竹採宇通保、源氏物語なども、作者勉て、その詞をあなぐり撰て、もて綴れるにはあらざるべし。必是當時大宮人の、常語方言さへ、そが隨に載ためれど、古言はおのづから鄙俗ならず、且宮嬪の詞には、雅俗うち任したるもあれど、（海人藻芥及眞淵の草結などを見て思ふべし）才子才女は、その品殊にて、且能文の所爲なれば、後世和文

もあらず漢にもあらぬ、駁雜杜撰の筆をもて、漫に綴り創しより、世人謬りて遐け棄ず。そが中に本傳は、いと甚う時好に稱ひて、憶ずも一百四十五囘の、長物語に做りにけり。こは年來、吾机案上の工夫にて、愁に切磋琢磨せる、自得の戲墨なるものから、かくの如くにあらざれば、唐山なる稗說の、趣を寫すに由なし。然ばにや、彼は文華の國なれば、俗語といへども出處ありて、悉字義に稱へり。但正文と異なる所以は、その用同じからざるよしあり。譬ば正文に慚愧といへば、則恥る義なるを、俗語には、且忝し、といふ義にも用ひたり。又工夫は、考索思量の義なるを、俗語には、空虛閑暇の義とす。工は空の省文にて、夫は助語なれば、則空也。こゝをもて俗語の和訓は、その處によりて異同あり。然るを原を極めずして、此間に抄錄したる、俗語をのみ見て取用れば、大く義理の違ふことあり。筆の次にひとつ二ッいはん。水滸西遊などに、在を於の如く、像を如のごとく似のごとく、則を唯のごとく讀するは、其文に法則あり、叨に用るにあらず。似を讀て如とすなるは、似レ飛に涯り、則を讀て唯のごとくすなるは、不二則一日一に涯り、像を讀て如となせども、如レ之といふには用ひず。況教の轉じて叫に做れる、(教は令也)尿の轉じて鳥になれる、(人を罵る時にいふ)底の轉じて地に做り、又轉じて的になれる、一朝に解盡すべくもあらず。我大皇國は、邈古の久しきより、をさく

八犬傳第九輯第十九　簡端贅言

本傳は、文化十一甲戌年、第一輯五卷を綴り創しより、今玆天保八丁酉年に迨りて、無慮二十四の春秋を歷たり。其間、作者の腹稿、或は流行に據り、或は昨の我に饜て、趣を易文を異にして、體裁同じからざるもあるべし。そを何ぞといふに、始は只通俗を旨として、綴るに敢奇字を以せず。この故に行每に、假名多くして、眞名寡し。六七輯に至りては、拙文、唐山なる俗語さへ抄し載て、且意訓をもて、彼義を知しむ。要なき所爲に似たれども、世に獨學孤陋にて、唐山の稗史小說を、讀まく欲する諸生あらば、其が筌蹄になれかしと思ふ、作者の老婆親切也けり。こゝをもて行每に、眞名多くなりて、字の數さへ、覺ず始に彌增たり。抑曲學にて、要なき書を、好みて多く綴りぬる、余が如きゑせ文は、半表半裏の筆に成れり。そを知ざるにあらねども、畢竟文字なき婦幼の、弄びにすなる技にしあれば、故りて風流たる草子物語は、取て吾師に做すべくもあらず。又彼唐山なる稗官小說の、大筆にして奇絕なるも、その文は摸擬に要なし。然ばとて坊間に、寫本にて行はるゝ、軍記復讐錄の類なるは、俗の看官もすさめざるべく、余も素より綴まく欲せず。この故に吾文は、枉て雅ならず俗ならず、又和に

勞を省くによしあり。然ば只この五巻を看て、第百十五回より上には、劣りにけり、といはむ君子は、糠を舐りて糟あるを得知らず。隴を臨て蜀の富るを、思ざりける儔なるべし。

とも思はで催促に、儘して倶に來ぬる鈍さよ。悔しかりき。とばかりに、勢ひ既にこゝに至て、脱るべくもあらざれば、已ことを得ず從ふものから、躬方の心一致せざるを、知らぬが個の意に叛く、法師武者さへ、道人さへ、部に勇む去向の進退、皆三門を出ると聽て、經稜素頼惴利は、各馬にうち跨て、二隊にわかるゝ二條路に、暗號を定め期を約しつゝ、小敵と見て侮り思ふ、那僧俗を遺もなく、捕漏さじとぞいそぎける。這段はなほ長やかなれども、楮數言に定限あれば、作者の自由に成がたくて、姑且筆を輟るのみ。畢竟結城の三士們が、惡僧德用堅削と共侶に、ゝ大竝に七犬士を、搦捕まく欲しぬる、這日の勝負甚麼ぞや。幵は又卷を改めて、本輯下帙の中の首に、解分るを聽ねかし。

作者云、この第九輯は、始の腹稿より、卷の數いと多くなるをもて、上中下三帙に相分ち、又帙毎に上下にわかちて、凡六たびに出すよしは、本帙の首卷(十三、十四)なる、附言に既にいへるが如し。就中這第百二十五回に說く處は、七犬士們が憶りなく、又厄にあふ緼染なるを、后までいまだ解分ざれば、看官思ひ惑ふこと多かりてん。然るを今憖に、茲にて筆を輟めぬるは、唯看官の遺憾のみならず、作者の本意にあらねども、本帙にのみ限るにあらねば、看遺すもなか〳〵に、後の樂多かるべく、綴り遺すも、長々しき、筆の

們言を設て、我先君の菩提をしも、弔奉るといへばとて、人の憑まぬ法會三昧、迺是我君を、蔑如にし奉る、非禮の狡猾許すべからず。烏滸なる言を。と罵れば、然也と點頭く徳用堅削、倶に腕を扼りて、三檀越の言、道理に稱へり。當君曩に季基們が、義烈の戰歿を憐み給ひて、墓標を建立ありし折、其義を安房へ告られずとて、他が領地に建しにあらねば、今番他們が這地に于て、館に免許を稟請ざる、法筵施行と同からず。亂れたる世は出家でも、彌陀の利劍を頭に翳して、天子將軍、國守領主の、與に兇徒を芟拂ひぬる、山門の大衆、南京法師、先例は多くあり。迂遠なる似而非談義に、時後れなば後悔あらん。敵手に足らず、立給はずや。と打斷鎚の、あたりを拂ふ、三士の勢ひ、鷙鳥の像く、大家立ね。と身を起すを、猶禁ん、と携れども、堰留難し水や空、千劍降てふ脩羅隆りにて、無得心なる惡僧俗が、未得を搔遣り推隔て、皆散動きつ外面へ、出るを遲し、と等著たる、長城が夥兵、莊客們、及堅名と根生野の、作當列卒們遺もなく、玄關近く二側に、齊整として星列れしを、三士は佶と相亘して、事恁々と言示せば、大家都てこゝろ得ける、そが中に近郊なる、莊客毎は歡ばず。料らざりける緝捕は、古戰場なる庵にて、念佛供養に施行愛たき、那大願主、大坊、及來會の士卒も漏さで、搦捕まく欲するよしを、爰に肇て聞知りて、且驚き且呆れたる、目を注するのみ、言には出さず。然り

主に代れる供養に侍れば、里見の家臣も幾名歟、來會しつと、聞えたり。嘉吉のむかし籠城せられし、御方の列將多かる中に、那里見季基主は、我先館氏朝朝臣と、莫逆の信友にて、その忠その義に甲乙なければ、當館成朝朝臣、城邑再興の刱より、嘉吉に戰歿の列將義士の、菩提の爲に、石造の、地藏菩薩を建立あり。多かる中に殊更なる、大佛一體を、季基主の墓表と、定させ給ひしを、世には知る人稀也とも、我住職の折にして、當寺の舊記に紛れなし。有恁ば件の法筵は、獨里見殿の爲のみならず、先館氏朝朝臣、並に御方の列將士卒の、菩提といへば自他平等、多く得がたき法會に侍り。縱那義を當館へ、外より訴まつるとも、愛憮せ給はなん、何でふ追捕の沙汰あらんや。といひつゝ又根生野們、三個の武士にうち向ひて、各位は格別ながら、素より道理に兩箇はなし。那義を叵しと思ひ給はゞ、館へ訴稟してこそ、おん下知に依り給ふべきに、私の議を旨として、或は土兵を斷催し、或は僧侶の幇助を借りて、緝捕の准備、何事ぞや。忠にもあらず義に違ふ、傲慢の辜免るべからず。みづから三思し給ひねとて、這方を禁め、那方を窘め、理り切たる老僧の、藥言口に苦ければ、狂へる馬に鞭うつ像く、いよ〳〵怒る經稜素頼、愲利も亦共侶に、權威に乘する聲もひとしく、爾ばかりの言、和僧に听んや。慈悲忍辱は、佛意でも、邦には邦の法度あり、武士には武士の務あり。譬ば那奴




けんさく
みらく
緇素と聚會て徳用魔談を凝らせ

會はゞ、伏兵にならん事、勇士の本意ならねども、現二の隊こそ大事なれ。咱身は既に准備して、夥兵を遺なく將て來にければ、持せし火銃多くあり。敵に援の兵いで來て、倘手に餘らば撃仆さん。この義もこゝろ安かるべし。と噪がず蒼髯搔捋るを、皆憑しく思ひつゝ、却洒盃を行替して、なほ云云と相譚ふ折から、這近郊なる莊客們は、堅名經稜、根生野素頼が催促に從ふて、走聚る者二百餘名、手に〳〵連枷、捍棒、長柄の鎌を携て、既に當寺に來にけるよし、その聞えありければ、大家いよ〳〵勢ひ憑て、卒然らば快打立とて、德用堅削、衆徒道人、准備あるは身甲鎧衫、爾なきも各臂縛脛衣に、身拵しつ器械を、皆傍に引著て、倶に部を听く程に、本山の先住なりける、未得と喚做す老僧あり。齢は既に八十有餘、年來隱居して、山内の別院に在り。今この一議を人傳に、聞知しよりうち驚きて、一霎時も得堪ず、兩個の行童に、扶掖れて出て來つ、住持德用にうち向ひて、淚と共に諫るやう、聞くに他鄉の行脚の法師が、當城外なる古戰場にて、嘉吉に陣歿の列將士卒の、菩提の爲にすなるといふ、念佛供養、施行の義を、先我寺へ告示して、非除帮助を請れずとも、开は歡ぶべき筋なるに、人の好事を踏しとて、屬院の衆徒さへ召聚會、武家の檀那に告譚ふて、出家人には相應しからぬ、殺伐の議に及べる歟。天魔の障㝵と謂つべし。且法會の願主、大とやらんは、安房の里見の舊臣にて、故

の餘は庵主を資けぬる、出處不定の禿驢のみ。其も十人に過ずと聞ゆ。爾るを躬方の多勢をもて、八方よりして捕稠なば、那奴們萬夫の勇ありとも、捕漏すことあるべからず。と慉るを德用推禁めて、开は勿論の事ながら、事は成がたくして、洩易かり。非除里見の士卒們を、遺なく搦捕るとても、似而非頭陀、大を走らしなば、後々までの遺恨ならずや。今愚意をもてせんに、堅名主根生野主は、士兵を相率て、本街頭より推寄給へ。堅削是が副となりて、子院屬院の衆徒道人を、半分はその隊に相俱して、宜く先鋒に找むべし。又長城主は隊兵を領て、間道より先に找みて、他們が敗れて走ん折、开が去向を捕稠て、刺挾みて擊給はゞ、漏すべうも候はず。但し武井の這方に岐路あり。正路は關宿より、木下風行德に到るべく、开が岐路は江戸へゆくべし。恁れば又拙僧は、當寺の所化と道人們を從へて、長城主と共侶に、悄地に先へうち出て、那岐路に敵を等ん。武非諸川の這方には、知らるゝごとく細川多かり。下流は利根河に相通じ、關宿よりして兩流の、一箇は松戸新宿より、別れて戸田河と做れる也。有恁ば去向に津も多かり。不知案内の敵なれば、進退不便、推て知るべし。この義は誰何。と手に拿る像く、鼻蠢めかして解示せば、大家理ありと稱えたる、そが中に長城慉利は、件の一議をうち听て、適愛たき長老の說法、死なぬ躬方に引導は、その圖に當りて精妙也。咱們は初度の隊に

れなば、多からずとも二三百名の、躬方の兵越にあり。案内知たる事なれば、悄地に那首へ推寄て、短兵急に拉がば、嚢裡の東西を探るが像く、一個も漏さず搦捕りてん。惴利並に近郊なる、莊客們の來ぬるを等て、諜し合して部を定めん。日屬の武談虚しからずは、器械拿て覺あるべき、法師武者こそ憑しからめ。準備をいそぎ給へかし。と答て倶に說誇れは、德用堅削いへばさら也。這席上に在りと有る、破戒無慙の衆徒兇僧、歡び勇ざるはなく、且素頼經稜に、酒杯を薦めつゝ、なほ云云と相譚ふ程に、長城枕之介惴利は（惴利又逸利に作る）素頼經稜に告られて、はやく這義を聞知りしより、一百許の夥兵を倶して、城内より出て來にければ、素頼と經稜は、圓坐の席に招容れて、住持德用共侶に、大家ひとしく面談す。惴利これを聽あへず、現那賣僧、大が事は、同僚達に告られて、その崖略を聞知たれば、又いふにしも及ぶべからず。聞がごときは這奴們が烏滸所行、倘是をしも忍ぶべくば、孰をか忍ざらむ。咱們は緝捕の准備して、夥兵を遺なく領て來たれり。各隊配甚麽ぞや。と問へば經稜素頼は、倶に答て、然ばとよ、この義咱們は不用意にて、從ふ夥兵あらざれば、這よりして程遠からぬ、莊客們に徇示して、猛可に土兵を、駈催したりければ、時を移さで咸來つべし。是に本山内外なる、法師武者を加れば、既に四隊の雄兵あり。却又那里の法會に連る、里見の士卒は三十餘名、そ

當に吩咐て、菴頭の風聞を撈らせしに、安房の里見の兵毎が、那頭陀、大に哄誘されて、今番の法事を執行ふといふ、衆口既に紛れなし。縱その事、實也とも、嘉吉に戰死の列、將士卒の、菩提の與なる法會ならば、よしを我君侯に告稟して、已前に免許を請奉るべく、當寺へも恁々、と示して幇助を請ふべき該也。爾るをその義に及ざりける、他們が烏滸の擧動は、饒すべきにあらねども、今さら告訴に時を移さば、敵手は遠く逃亡てん。然る時は六日の菖蒲、十日の菊にて悔しかるべし。非如訴稟さずして、今忽地に搦捕るとも、他們は非法の癖惚兒也。疎忽の咎あるべからず。我們兩個長城と倶に、三家は結城譜第の重臣、先代忠死の兒孫なれば、各夥兵一百名を、與けられて、倶に是、兵頭の上席たり。恁れば兵權なきにあらず。なれどもこの義を知らざりければ、伴當列卒們のみにして、夥兵は一個も倶して來ず。然ればとて城内へ、還りて夥兵を召聚めなば、人の爲に訴られて、且時も移るべし。故に我們商議して、悄地に一箇の伴當を、城内へ走しかへして、則長城枕之介に、事の趣を告知しつ、箇樣々々にいはせしかば、枕之介はやくこゝろ得て、那身の夥兵百名を、倶して力を勠せんといへり。恁れば程なく來會すべし。又近郁なる莊客們に、緝捕あり、と徇示して、猛可に土兵を、駈催したりければ、他們も幾隊歟出て來てん。是に加るに本山なる、子院屬院の勇僧と、道人們を用せら

せば、本山の侍者なりける、祿釋坊堅削と喚做す惡僧、衆議を得等ず、突然と、找み出て答るやう、現御鬱憤の事の趣、道理至極に聞え候。然ながら兵書にも、兵は是拙速を、貴ぶとかいふ義あり。その計巧也とも、久しきを佳とせず。爾るを今さら長詮議して、この議を領主に訴給はゞ、憶ずも時日移りて、他們は他鄕へ走るべし。しからんには常言にいふ、鬪諍果ての棒三昧、世の胡盧にならんのみ。因て悄地に思量るに、幸ひなるかな、本山の檀越たる、堅名根生野兩兵頭は、追鳥獵の爲にとて、今朝未明より城を出て、程遠からぬ野邊に在り、と告たる者の候へば、弟子隨便人をもて、那毎によしを告て、快來會を請しかば、時を移さずまゐらるべし。御商量候へかし。といふ詞いまだ訖らず。結城の家臣と聞えたる、堅名衆司經稜、根生野飛雁太素頼は、堅削が招きにより、伴當列卒を相倶して、鶻を臂、狗を牽し、畋獵裝束の儘にして、野邊より這里に來にければ、德用歡び斜ならず、軈て堅削に出迎して、衆議の席に招きしかば、經稜と素頼は、伴當列卒們を門内に、住めてそが儘堅削に、引れて德用に對面す。子院屬院の法師們は、席を讓り上坐に請薦めつゝ寒暖を、舒て恙なきをぞ祝しける。登時住持德用は、迭の口諠の果るを等ず、經稜素頼にうち向ひて、件の事の趣を、辯舌尖鋭く演知するを、兩士は听つゝ推禁めて、その義は嚮に祿釋坊より、告られしかばこゝろ得たり。因て伴

第百二十五回

逸疋寺に徳用二三士と謀る
退職院未得名詮諫て不得

單表、這結城の城下なる、通无奇山逸疋寺の住持徳用は、この朝憶りなく、ゝ大が念佛供養の義を、傳聞て拈醋に得勝ず、猛可に子院屬院なる、住僧們を召聚合、事恁々と言示して、敦圉悍く論ずるやう、抑本山は、昔より、結城氏の香華院にて、彼家累世の廟墓這里に在り。爾るに似而非頭陀、ゝ大とやらン、近曾這地に庵を締びて、嘉吉の役に戰死したる、列將士卒の菩提と倡て、一座の石塔婆を建立し、出處不定の禿驢を聚めて、念佛供養しぬるのみならず、施行の報條を衢に貼して、恩を貧民乞兒們に、施さんと欲するは、只是烏滸の所爲ならずや。畢竟我寺はさら也、領主結城殿をしも、蔑如にしたる結構、その肚裏は料りがたかり。寔や件の似面非頭陀は、安房の里見の舊臣にて、故主に代りて、追薦の、法筵なれば、他人を雜へず、安房より代香使を遣られて、里見の士卒二三十名、來會しつ、と風聲あり、巷談ながら施行の報條の、證据あれば紛れなし。早く領主へ訴て、理非を糾明せずもあらば、何をもてこの後を懲さん。武門の耻辱、佛家の瑕瑾、忽諸にすべからず。各這義を思はずや。と席を拍つゝ言示




草菴を自焼して七犬士
敵を分つ
諸行無常
信乃
道節

可に驅催したる、土兵にやあらんずらん、敗たる武具を著たるあり、爾もなきもうち交りて、竹槍或は連枷なゞどを、携たるがいと多かり。既に屯をうち立たれば、推寄んこと程あるべからず。御小心候へかし。と言語急迫き注進を、丶大法師もうち听て、しからんには拙僧は、衆議のまに／＼退るべし。犬士達、武勇を負みて、愆をなし給ひそ。敵退かば赶捨て、引返すを勝とすべし。よくし給へ。と期を示しつゝ、星額師弟に別を告て、笈を揺揚げ、錫杖を、衝立衝立出てゆく。左右に從ふ照文代四郎、次に蜑崎の伴當八九名、信乃は殿して、徐に後にぞ續きける。爾程に、莊介現八小文吾は、夥兵四名を相倶して、石塔婆の邊なる、四旒の紙幡を、拿おろし夥兵に遞與して、東の方へ赴きけり。登時星額長老師弟は、倶に菴を立出て、寄隊の近づくを等程に、毛野道節大角は、倶にその隊の夥兵に下知して、幕は白張也とても、安房より遣し給ひしを、敵に亂暴せられなば、後々までも瑕瑾ならん。その餘の佛器も漏さずに、皆庵中へ拿入れて、燒草にせよ。といそがして、軈て煙を颺にけり。嗚呼歎ずべし、濁世の境界、不善の小人多かればや、沙門の忠信、大功德なる、八十許日の念佛場は、脩羅戰諍の巷と變れる、流轉間なき生死の、海過なる結城の郊外、嘉吉のむかしを今こゝに、照す樹間の苔石滴、淺くはあらぬ犬士の才略、勢ひ既に決然たる、武勇を感ずる夥兵們は、皆憑しくぞ思ひける。

なっと諭せば道節うち笑ひて、そは亦無理なる軍令なる哉。兵は原是凶器なり。今大敵と戰んに、殺さで克を拿ん事は、最做しがたき所行ながら、近曾犬江親兵衛が、武功を傳聞たるに、富山にても舘山にても、幾千百なる凶黨を、一個も殺さで降伏したる、例もあれば左も右もせん。といふを莊介推禁めて、その義咱們は肯ひがたかり。何となれば、人は各、得たる事あり、得ざる事あり。犬江は仁字の玉に應じて、その性仁恕ならんのみ。他が仁慈に及ばずとも、又立優る所もあらん。非如教に違ふとも、饒し給へ。とうち陪話れば、小文吾現八大角も、共侶に笑局に入りて、寔に是はいはれたり。出家は出家の作行あり、武士は武士の進退あり。鬪戰の方はしも、只我們にうち任して、とく〳〵退り給ひねかし。と答る間に照文代四郎、及犬士們も禮服を、手ばやく脫て、袱兒に、裹て聽て照文の、伴當に遞與しつゝ、身を固めたる肱纏臑盾は、現戰世の沿習とて、恁る折にも武を磨く、准備に脫落なかりけり。浩處に兩個の夥兵は、城下の方よりかへり來て、七犬士に報るやう、小可們は、おん指揮に從ひて、那這と徘徊しつゝ、敵の虛實を張ひ候ひしに、その勢二三百も候はん。大將とおぼしきは、狩場裝束にて騎馬なるが、綾藺笠を戴きて、箭を貯ひ弓を携たる、甲乙二騎に候也。㕦が伴當とおぼしきは、二三十名に過ぎ候はず。他們は半纏脚袢にて、列卒繩捍棒なゞどを引提たり。この餘は猛

難ずるやう、愆いはど無禮也とて、叱られまつる歟知ねども、小可偶故主に逢て、今この危窮に及ぶ折、ふり捨て阿容々〱と、安房へ退りかへらん事は、憚りながら本意にあらず。死ぬるとも生るとも、共侶にとこそ思ひ候へ。願ふはこの儘留置て、道節が隊に隷たまへ。いかでいかで。と切なる願ひを、道節聽かず、聲ふり立て、そは亦無益の口誼也。嚮にもいはざる事歟、和老も今は里見の家臣、我們と朋輩なるものを、私情を演るは、その義に違へり。最烏滸也。と窘れば、小文吾荘介大角は、共侶に慰めて、皆云云と諭すにぞ、代四郎才に承伏して、倶に准備をしたりける。當下信乃は庵主に向ひて、大徳ははやく御遺骨を、衛て當所を退き給へ。倶しまゐらせん、出給はずや。といはれて、丶大は一議に及ばず、季基主の骨壺と、狙公の名刀を、笈に藏めて、脚絆を著けて、草鞋穿締め、笈佛を塔駝て出んとしぬる折、星額師弟を見かへりて、長老今番のおん好意は、千萬言にも罄しがたかり。緣竭ずは異日亦、再會の折も候はん。鬪諍の側杖打れんに、とく〱退り給へかし。といふを星額うち听て、否拙僧をばうち置し給へ。寄隊近づかば立迎へて、和解めて無事を相計はん。そも亦出家の役なれば。といふに、丶大は點頭て、又道節們にうち向ひて、いふまでにあらねども、好みて人をな傷り給ひそ。一個なりとも敵を殺さば、日屬の作善は空となりて、自他の功德を喪ん。この義を忘れ給ふ

士相倶すべし。心許なく思れなば、我們義兄弟七名の中、一人和殿と倶に退ん。推辭事かは。と諫れば照文爭ふことを得ず、やうやくこの議に從ひけり。登時信乃は遽しく、信と傍を見かへりて、犬阪和殿は、智嚢に富たり、極て宜き主意あらん、快隊配を定めずや。といはれて毛野は毫も礙議せず、否我とてもおん身們と、異なる良策なけれども、寄隊大勢ならんには、奇兵をもて敵を分ちて、一時に拉ぐにしくべからず。吾を皆這里にて敵を等ば、犄角の戰ひ心許なし。今愚意をもて計んに、蟹崎生は、伴當共侶、犬庵主に從ふて、關宿路へ立退べし。犬塚、和殿と姥雪と、蟹崎生を相資けて、赶來る敵を防ぎなば、萬に一も過ながらん。又犬川犬田、犬飼は、夥兵三四名を從へて、這里を距ること三四町、東の茂林を盾にして、其邊なる樹の枝に、紙幡を掛け、多勢と見せて、敵の先鋒に疑せて、その撓むを撃捕るべし。又愚弟は、犬山犬村と共侶に、殘る夥兵を相從へ、這草庵に火を放て、煙を揚て敵を分ん。しかれども、敵も亦、間諜兒をもて、這方の虛實を、窺ひ知ることもあらん。縱小勢と知らるゝとも、一人當千ならぬもなければ、討退けん事易かるべし。この餘の手談は箇樣々々。と意衷を遺なく解示せば、信乃道節、莊介們、大角も小文吾も、皆共侶に好と稱えて、先夥兵の中、兩個に課て、敵の動靜を見て來よとて、城下の方へ遣しけり。爾程に代四郎は、件の軍議をうち听て、倒に歡ばず、找出つゝ

すべし。いと憚りある言ながら、施行の一事は過て及ぬ、各位の千慮の一失、後悔こゝに達べからず。誠や唐山の常言にも、三十六計走るをもて、最上とす、といふにあらずや。はやく立去り給へかし。危き邦に居る事かは。と利害を談じ、得失を説く、教諭叮寧也ければ、大家驚く开が中に、、大法師は沈吟じたる、頭を擡げ感服して、長老の示教道理に稱へり。一切衆生自他平等、只結縁に任するこそ、如來の本願なるものを、愁に他し施主を、討る時は、利を謀る、是名聞に庶ければ、他領に菴を締びながら、今番の遠忌追薦を、領主にだにも告ざりしは、現拙僧が愆なりき。甚すべき。とばかりに、後悔涯りなかりしを、照文然こそ。と慰め難て、倶に頭を揮しつゝ、犬士に意見を尋れば、道節勃然と膝を找めて、今さら雌々しく何をか按ぜん。畢竟施行の一條は、我們が思ひ起して、薦めて做しゝ事なれば、我們七名踏留りて、寄來る悪魔を刈拂ん。蜑崎、和殿は庵主に倶して、はやく當所を立退給へ。といふを照文聞あへず、开はいはるゝことながら、咱們は和殿達を招會の、御使に擇れて、偶環會けるに、只今事の危窮に及びて、縱大德に倶するとも、捨て那里へ歟退るべき。只命運に儘せんのみ。と惴るを信乃は推禁めて、その議寔に理りなれども、案内知たる敵なれば、留るとも退くとも、安危はいまだ定むべからず。我們は左まれ右まれ、、大大德は、先君の御遺骨を衛奉り給へば、一二の勇

他宗を誹謗して、己に勝れるを憎むこと、讐敵に異ならず。なれども當城主の香華院にて、この地第一の大刹なれば、七八箇の子院あり、又十餘箇所の屬寺あり。皆是同氣相求る、奸佞の賣僧下風に立て、枝葉院に住持たり。これらの故に城内なる、諸侍に檀家尠からず。就中結城の家臣、長城枕之介逸利、堅名衆司經稜、根生飛雁太素頼なンど喚做す三士は、先代よりの家宰筋にて、大父は孰も嘉吉の役に、戰歿の老黨也ければ、結城の家再興の抑より、他們は職祿人に超て、倶に兵馬隊長の上席たり。なれども相似たる、無學俗骨にて胸廣からぬ小人なれば、先祖の忠義を鼻に掛て、傍若無人の擧動多かり。然ば件の徳用と、師壇の交り淺からず。素より暇ある身なれば、狗兒を牽き、隼鶻を放つ、遊獵を事としつ、幵も餉ときは共倶に、那逸匹寺に參詣して、住持徳用と武を講じ、人を誚るを樂みとす、殘忍無慙の暴雄なれば、必徳用を相資けて這方へこそ打向はめ。しからば實に大敵也。今更いふかひあるにあらねど、庵主今番の追薦供養は、單に里見殿のおん與なれば、敢他人を雜へざりける、悄々の修行、好といへども、慭に施行の報條を、城下の四巷に布れし故に、立地に人に知られて、這殃厄を釀したり。夫寺を造り僧に施すは、只是有漏の緣なる故に、達磨の取らざる處なり。以あるかな、施行は富裕の慈善にて、兼愛の義に庶かれども、又名聞に似たるもあれば、時宜によりて用捨

に徇示し、城内一二の權臣なる、檀越に訴へて、大勢をもて推寄て、搦捕んと隊配す。恁れば僧俗數百の大敵、今目前に起らんに、弃を避ずして、敗を竢ば柴薪の上に巢を造る、燕々に似て愚魯ならずや。このよしを庵主にも、施主達にも疾稟し給へ。施行の報ひに告侍り、やよな疑ひ給ひそ。といひ捨て丶、又杖に携りて、脚を曳つゝかへりゆくを、怪し、と目送る紀二六代四郞、胸安からねばうち連立て、はやく菴に注進しつゝ、丶大照文七犬士們に、事恁々と告知するを、丶大は听つゝ眉を顰めて、弃はこゝろ得ぬ事也かし。約莫今番の法筵供養は、我獨力に做すものから、當城の先主たる、結城氏を首として嘉吉に陣歿の列將士卒の、菩提の爲にすなる好事を、非如那里へ告ずとも、歡るべき筋なるに、弃をいかにぞや罪として、搦捕らる事かは。と理論に照文七犬士們も、共侶に點頭て、大德の意見理り也。おもふに必傳聞の、錯誤にこそあらんずらめ。といふを星額長老推禁めて、さな宣ひそ。善惡邪正は、君子小人の取る所、その用心同じからず。抑逸匹寺の住持德用は、便佞にして世智に長たり。是をもて、させる佛學あるにあらねど、俗の視聽を傾る、談義說法に口才あり。加旃出家には、相應しからぬ武藝を好みて、且その膂力、角をも拆くべし。恁ればむかしの辨慶也とも、他が右に出んこと、かたかるべし、と人みな思へり。遮莫小人の癖なれば、その行狀正しからず。常に

甘きに附く像く、幾個といふ涯を知らず。豫期したる事なれば、代四郎紀二六兩隊にわかれて、伴當們に米を料らせ、夥兵は錢を拏らするに、纔に半時許の程に、漏さず施したりければ、殘る錢米は一兩人に拏する可に也にけり。憖りし程に、一個の衰老法師の、鼻は損ね足も痛たるが、竹の杖に携りつゝ、辛して來にければ、紀二六みづから立迎へて、招きよせつゝ左見右見て、和尚は脚の不便なればや、詣來ることの遲かりけれども、なほしかるべき果報あり。施行は目今盡處にて、一兩人分殘りたり。定より多けれども、餘さず拏せん、裝器あるや。と問ふを衰老法師はうち听て、南無阿彌陀佛、そは造化よき、方便にて候也。然あらば是に賜らん。といひつゝ窳の紐附たる、茜染の頭巾を拏出て、啓くを奴隷がこゝろ得て、殘れる米を一粒も、漏さず楚と料り入れて、錢さへ四五百文殘りしを、卒とてそが儘拏すれば、衰老法師は笑しげに、錢も一緒に推戴けて、やと搭駝つゝ、亟には去らず、なほ那這と見かへるを、紀二六訝り聲苛立て、鈍や這乞丐坊が、施しをだに受たらば、要なからんに、疾いなずや。と叱るを听かず冷笑ひて、洒家は左まれ右もあれ、刀禰達などて疾立去らで、幾まで賊這里に在せる。知ずや這城の下なる、通無奇山逸匹寺の住職を、徳用和尚と喚做したり。しかるに今番、這里なる庵主が、法筵供養に他們を請はで、憖る施行の聞えあれば、徳用和尚怒りに得堪す、子院枝寺

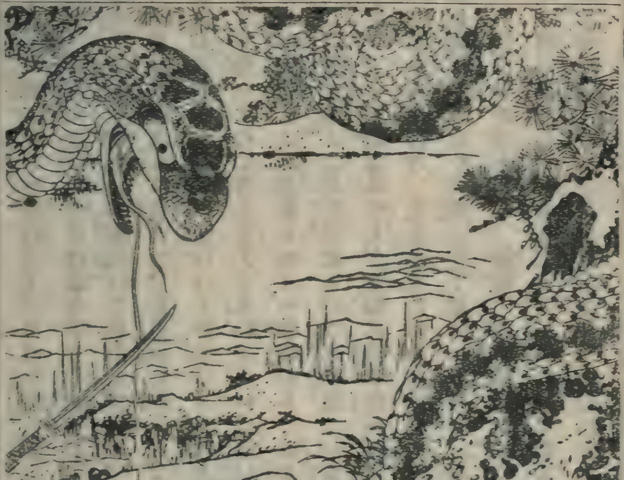
遺骨を齊一拜みけり。當下照文は、丶大法師に商量しつゝ、五十金を布施として、星額師弟に薦め與るに、君侯父子のこの年來、施を好み給ふよしと、遺骨遺刀の歡びを、叮寧に演る程に、丶大法師も兩館より、寄させ給ひし經卷と、香奠を拿寄て、倶に星額長老に贈りていふやう、拙僧は一所無住にて、今番故鄕へ還り侍れば、是等の東西はせん方なし。願ふは長く貴院に留めて、先君竝に先亡の、爲に廻向を做給はらば、いよ〳〵幸ひならんかし。と憑むを星額うち听て、出家は無慾を心とす。一鉢の齋一領の衣、饑ず凍ざれば足れりとすべし。恁れば是等の財寶は拙僧も亦要なけれど、貴捨とし聞けば、推辭がたかり。なほ又思ふよしもあれば、姑く與り候はん。と答て件の五十金を、財囊の儘に項に掛て、懐に楚と收め、又香奠と卷軸は、兩箇の袱兒に分ち裹みて、徒弟們に遞與しけり。浩處に小乘屋より、三四箇の小廝們が、最大きなる籠兒二荷に、椀家伙までも拿納たる、蔬菜の晝饌をもて來にければ、代四郎紀二六立迎へて、庖湢に擔ひ入させて、拿出て主客十一口の、法師們と照文と、七犬士にこれを羞め、次に代四郎夥兵の毎、及紀二六以下の伴當まで、遺もなくたうべ果しかば、又椀家伙を籠兒に收めて、持して軈て小乘屋の、小廝們を返しけり。爾程に、這頭四下なる窮民乞丐は、昨夜街衢に掲示されし、施行のよしを今朝聞知りて、時分を料りて、陸續と、丶大庵へ來ぬる者、蟻の

やう、小可獮猴を大蛇に呑れて、生活の便著あらずなりしを、慨しく思ひ候ひしに、然る東西也とは知ざりける、刀の價に這様棠色、百枚を賜るは、御恩に御恩を重られたる、おん慈悲にこそ候なれ。是だにあれば猴牽く技を、生活にせずとても、旦夕安く老を送らん。這御慈善の餘慶をもて、おん家長久、御子孫繁昌千秋萬春、萬々歳、と壽詞を囀り、歡びを稟しつ酒さへ賜りて、前にも懲りずや十二分、醉を盡して退りける。朝暮七が事、この下に話なし。恁而季基朝臣は、件の腰刀の表装を改めて、思ひの隨に造らしつ、狙公と名づけ給ひて、愛玩して一日も、帶給はざることなかりしに、季基撃れ給ひし折、狙公の名刀も、何人の手に落にけん、ありとも知らずなりけるを、瀧田の老侯、一二の功臣、杉倉堀内は見覺たれば、君臣閑談の折折に、迭にこの義をいひ出て、いと惜み給ひしとぞ。今は居多の年を歷て、名をだに知るもの稀ならんに、先君の御遺骨と、共に件の名刀の、料ずも又世に出て、正に菴主の家裏に、ならせ給ふは一大奇事也。兩館のおん歡び、然こそと推量したてまつれば、我們さへに面目あり。併寶珠星額、兩大德の賜にて、菴主の功德こゝに及り。有がたきまで辱き、妙造化にこそ候なれ、と一五一十を解示す、遺刀の來歷分明なれば、ヽ大の歡び、いへばさら也、七犬士們も尊信の、耳新なる心地して、貌を改め膝を找めて、照文と共侶に、又佛壇なる先君の、

この刀を、獻り候はん。惜むべくも候はず、といふに季基歡び給ひて、しからば價を拿せんず、宿所へ來よと召倶して、御館へ還り給ふ程に、其頭を過る莊客に、有し趣を言示さして、件の大蛇の亡骸は、那儘に燒盡して、灰を田圃の肥にせば、效あるべし、と課しかば、この義を傳へ承る、近村の民胆を潰して、且歡びも大かたならず、相公の武德を稱讚しつゝ、儀の如くに倣しけるに、その明年は、田圃の實り殊更に宜しかりしとぞ。事の便宜は是のみならず、件の池は昔より、主神あればとて、村人怕れて、網を下さず釣もせず、夏は旱天の折などにも、この池水を田の用水に、援ことを要せざりしかば、寔に無益の大池なりしに、是よりの後人憚らず、或は網をもて鯉鮒の、漁獵の利を得ぬる者尠からず。或は池の四周なる、水淺き處には、蓮慈姑なンどを植て、賣買を做す者あり。又水覆しき稻田には、這池より援汲すれば、娛し貌にも鳴く蛙さへ、領主の德を仰ぬもなければ、近村の民相稱えて、武德の池とぞ喚做ける。こは是後の話なり。然ば又猨公朝暮七は、季基朝臣に從ひまつりて、軈て御館へ參りしかば、季基隨卽近習をもて、他が腰刀を拿寄て、拔放ちて見給ふに、退蛇之神刀といふ、五字の銘ありければ、こは疑ふべくもあらぬ、奇貨也けりとて、卽便其刀の價として、金百兩を拿らせ給へば、朝暮七は呆るゝまでに、歡び望の外に出たる、一期の福德この上なし、と受戴きつゝ稟す

手煉なれば、二の箭に大蛇は咽喉を射さして、共に裏決く窮所の深痍に、弱りて松の杪より、撻と墜てぞ死でける。狙公はこの响に、うち驚きて覺たれども、既に蛇毒に觸たれば、舌さへ强りて腰立ず。爾程に季基朝臣は、伴當をもて狙公に、件のよしを告知して、幵が身邊に馬を找め、腰附の藥籠なる、解毒の丹藥を賜ければ、狙公は稍我に復りて、その言を听、那大蛇の、死たるを見て駭怕れ、且歡ぶこと大かたならず、跪きつゝ稟すやう、小可は何がし村なる、朝暮七と喚做しゝ魯鈍の狙公にて候が、今日この近鄕なる、鄕長許、厩祈禱に招れつ、祝壽酒に醉されたる、かへさに這頭を過る程に、憶ずも睡臥にけん、爾後の事を覺ず。倘相公の武勇をもて、拯せ給ふにあらざりせば、獼猴を喪ふのみならず、この身も大蛇の腹内に、葬らるべかりしに、現再生の御恩德、孰の時にか報ひまつらん。得がたき幸ひ也けり。とて、感涙坐に氾むまでに、倆拜みたりけるを、季基然こそ、と點頭き給ひて、いなとよ、儞が死ざりしは、その腰刀の奇特にて、我大蛇を射て殺しゝは、然る後の事也かし。抑儞がその腰刀は、世に多からぬ名物ならん。父祖傳來の什物歟、然らずは儞が買拿たる歟、甚麼ぞや、と問給へば、朝暮七答て然候。這一刀は、親の時より持傳へて、獼猴を儛しに出る毎に、腰には帶候へども、大刀拔く術も知らざれば、況刃の好歹を、辨へたる事候はず。倘御所望に候はゞ、命の御恩に


名刀名将
暗に
狙公を拯ふ



出たるならん、頭は松の杪に在りて、尾は水中に隱れたり。その長きこと推て知るべし。眼は百錬の鏡を、雙掛たる像く、口は血を裝りし盆に似て、いと長やかなる舌は、閃く火焰歟と疑はる。那漢の手飼の獮猴は、駭怕れて逃んとすれど、絆に拘れて悶掻く程に、はやく大蛇に吞れけり。然ども大蛇はなほ飽ずや、又狙公を吞んとて、那松枝より頭を下して、口を張り舌を吐き、既にして近づく程に、怪むべし狙公の、帶たりける腰刀、忽然と脱出て、晃めき升りて件の大蛇を、遮り制めて听んとす。大蛇はこれに勢ひ撓みて、松の繁茂に躱れて出ず。他退けば刀も亦、自然と鞘に返り入りぬ。一霎時ありて又大蛇は、頭を伸して吞んとすれば、腰刀も亦鞘を出て、禦ぎ鬪ふこと始の如し。季基朝臣は一町あまり、蕃山の脚に馬を駐めて、這前未聞の光景を、うち長覰て在せしが、倶に駭き怪みたる、伴當を見かへりて、若們他をよく見たる歟。刀劍の身を衞れる、素よりその德ありといへども、那漢子の腰刀は、就中世に稀なる、神寶にこそあらんずらめ。然ばとて見つゝ過さば、惻隱の情なきに似たり。いでや拯ふて得させんず、と宣ひながら上挿の、獵箭二條拔拿て、箭路を量り馬を拵めて、弓に箭刺ふて等給ふに、大蛇は猶も狙公を、吞んとて又頭を伸すを、季基透さず彎固めたる、矢聲を發て瓢と射給ふ、寃錯はず件の大蛇は、右の眼を箆深く射られて、一霎時も堪ず仰反りしを、季基箭刺速の

を知れる遺囑の趣、又星額師の德誼老實、共に得難し得がたし。と一唱三歎、異口同樣に、一霎時稱えて已ざりけり。當下蟹崎照文は、狙公の大刀を受拿て、兩三番うち戴き、七犬士にも見せんとて、やをら緣頰の邊に膝を找めて、皆共侶にこれを看るに、刀の長は二尺に過ぎたる、その表裝は怎なりけん、鍔すら多く鏥朽たれば、鞆糸失て、鞘破れたり。軈て拔放ちて内を相るに、刃は毫も鏥あらず、夏なほ寒き、稀世の名刀、小鍜冶が小烏、干將鏌邪が太阿龍泉也とても、是には優さじと思ふ可の、鎺に十六言の記文あり。その文に、依二弓馬之力一不レ料所レ得狙公之刀　源　季基、と鑽著てありければ、いよゝ疑ふべくもあらず。皆共侶に嘆賞しつゝ、照文刃を鞘に收めて、大法師に返していふやう、這名刀の來歷は、口碑に傳へたる義あるを、道德は聞知り給はずや、犬士達はなほ知ざるべし、星額長老も聞召れよ。卑職總角なりし時、親にて候輝武の、夜話に听ることあり。むかし先君季基朝臣、上毛の御舘に在せし比、有一日近習四五名を將て、射獵の爲に遊山し給ひしに、其頭なる蕃山の麓に、底不知と喚做す池ありて、老たる松兩三株池畔に繁粒たる、その樹下に、狙公とおぼしき漢子、株に臂を凭掛て、身單睡俯して在り。季基朝臣は蕃山より、麓に馬を找んとて、逈に其方を見亘し給ふに、件の漢の頭の上に、最怕るべき蟒蛇在れり。そが軀の太かるは、千歲の松に異ならず。件の池より

遺骨を附屬せよ。然ども正しき證据なくば、疑るゝこともあらん。我始より如右思慮りつ、季基陣歿の折までも、隨身の大刀一口ありしを、遺骨と共に祕し置ぬ。开は狙公と命けたる、那家の名物なれば、聞知りてぞあらんずらん。汝この義をよくせよ。と叮寧に遺託せられて、遺骨の壺と那名刀を、拿出て遞與し給ひしとぞ。恁而今茲の春よりして、拙僧この地に葬を締びて、常念佛を修行しにける、事情をいかにして歟、星額長老聞知り給ひて、衢には徒弟達を相倶して、我爲に石塔婆を、一夜の間に造り立て、法會の莊嚴を幇助給はり、今日も亦早旦より、師弟共侶に這里に來まして、始て件の來意を示して、先君の御遺骨と、那名刀を拙僧に、授賜りしのみならず、結願供養の讀經まで、助聲せられし、洪恩徳義、何事歟又これに勝べき。拙僧這地に來ぬる始より、季基公の墳墓の、ありもやせん、と思ふをもて、普く里人に尋問ひしに、竟に知るよしなかりしかば、うち歎きてのみありけるに、料ず善知識の德義に依て、御遺骨を得たりける、歡び譬るに物も侍らず。是併我兩舘の御孝感の致す所、拙僧が所以にはあらず。先や件の名刀を、拜見せられば、我言の、錯ざるを知られんのみ。といひつゝ軈て狙公の、名刀を拿出して、照文に遞與すにぞ、奇談に驚く照文はさら也、倶にうち听く七犬士、及緣頰の片隅に、尻をうち掛て在りし代四郎まで、感嘆せざる者もなく、寶珠和尙の智慧廣大なる、未來

七犬士にも口誼あり。却那壺を携て、幇助の長老師弟と倶に、照文們を誘引立して、草庵へぞ退りける。這庵極めて陜ければ、十僧と一客のみ、這宅は膝を容るゝ處なし。この故に七犬士は、緣頰に席を布して、肩を比べて倶に坐り。幇助の長老に對面して、歡びを舒るにも、獨犬江親兵衞が、這小集に闕たるを遺憾しみ、且孝嗣と次團太們の、噂をしつゝありける程に、照文は丶大法師に、今日石塔婆に具措れし、壺の事を問けるに、丶大答て、然ばとよ、件の一義は、問れずとも、疾告ばやと思ひながら、いまだその暇を得ざりき。犬士達も听給へ。といひつゝ佛壇を見かへりて、那壺は今朝這長老の、携來て贈り給ひし、先君季基朝臣の遺骨也。長老は這近邊なる、能化院の住持にて、法名は星額、先住寶珠和尚の、法燈を續ぎ給ひしよしも、今朝聿て聞知りぬ。しかるに師父寶珠和尚は、昔季基朝臣と、方外の交りあり。こゝをもて、季基陣歿し給ひし折、首級をはやく拿隱して、亡體と共に煙に做しぬ。然ども思ふよしあればとて、壺に藏め祕措きて、後々までも葬らず。恁て居多の年を歷て、寶珠和尚遷化の折、今の長老星額師に遺教し給ふやう、季基主の朽骨は、いかで那人の後たる者に、贈んと思ふをもて、この年來祕措きにき。是よりの後年の序、癸卯に丁らん比、必行脚の僧有て、姑且この地に杖を歇て、恁々の林原に、菴を締ぶことあらん。そは里見の舊臣なれば、汝悄地に我意を告て、件の

兩公子の小傅、大塚匠作三戌、法號訓山榮后遺璧禪定門夫妻、其子犬塚番作一戌、法號知命達德速逝禪定門、孺人藤原氏、諱は手束、法號節操如竹似松禪定尼、信濃國人氏、井丹三藤原直秀、法號當覺自證以眞居士、この宅嘉吉の義兵、忠戰陣歿の列將士卒、修する攸の妙典、及念佛の功德に依て、一蓮托生、永劫極樂土、子孫後榮、施主繁昌、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。十念訖て更に亦、結願の偈を倡て曰、

圓輪如㆑輪歲月流。個中名利等㆓浮漚㆒。漫勞㆓計較㆒分㆓吳楚㆒。且任㆓稱呼㆒作㆓馬牛㆒。世事看來從㆓理順㆒。人謀怎似㆑所㆓天休㆒。要㆑知㆓弔㆑滅酬㆑恩訣㆒。念佛勤行成就秋。

南無過去未來。見在三世。諸佛菩薩。

と唱訖れば、幇助の長老も、亦偈句を誦して曰、

願以㆓此功德㆒。莊㆓嚴佛淨土㆒。上報㆓四重恩㆒。下濟㆓三途苦㆒。若有㆓見聞者㆒。悉發㆓菩提心㆒。盡㆓此一報身㆒。同坐㆓極樂國㆒。十方三世一切佛。諸佛菩薩。摩訶薩。阿耨多羅三藐三菩提。

と唱訖れば、從僧都て低頭して、供養は於是に果にけり。登時庵主、大法師は、拂子を拿つゝ身を起して、照文の坐邊に來て、兩館より寄給ひぬる、經卷並に香奠の、歡びを演などして、

ず。この次の壇の左右には、花を供へて、水罇の水盤あり、下壇には香爐あり、塔の四方なる樹枝には、四箇の楮幡を吊し掛て、諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂といふ、涅槃經なる、四句の偈を寫したり。照文隨卽懷より、伽羅一裹拿出し、恭しく燒香して、額衝き拜み默禱して、身を起しつゝ退けば、犬塚信乃立替りて、找寄りつゝ燒香す。信乃が大父大塚三戍、及外祖、井直秀は、忠勇義烈拔群にて、昔年結城落城の折、戰歿の譽あり。こゝをもて犬士の中、信乃を第一番の、燒香にぞ達せける。恁れば信乃は懷舊の、涙と倶に再拜して、やうやくに退りける。次は道節、莊介毛野、大角現八、小文吾們、立替々々、次第を追ふて拜し訖れば、照文二たび找み出て、代四郎と共侶に、私の燒香す。爾程に、大法師は、本處に退き坐して、連りに木魚をうち鳴らしつゝ、十個の衆徒と異口同調に、念佛數百遍唱へたる、聲淸喨と澄亘りて、理寂滅爲樂の偈句虛しからず、と思はぬ者なんなかりける。恁而諸士の燒香果しかば、、大法師は衆僧と倶に、唱名の聲を歇めて、合掌して念ずらく、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧、三寶請誦し奉る。追薦冥福の諸精靈、故鎌倉の管領持氏朝臣の兩公子、春王君安王君、法號某院某大童子（云云二唱）里見治部少輔源季基朝臣、法號義烈院忠慈賢山大禪定門、孺人烏山氏、貞心院慈德如峰大禪定尼、當城の先主、故下總判官、結城氏朝朝臣、法號某院某大居士、春安

はしむ。吁佛弟子の功德、廣大無量、迷津慈航の資を得たる、胸月眞如虛しからず。其善念の投す所、上は有頂天に屆るべく、下は金輪際に融通して、彌陀勢至觀音の、三尊倶に降臨し、五五の諸菩薩、天部善神、肩を比べて影向あらば、異香馥郁として、金蓮葩を降し、天外の音樂、節奏の妙なる、鳳簫龍笛、睡蛇を覺さば、慶雲忽岫より起りて、靉靆たらざることを得ざるべし。然らば則數萬の精靈、必是三惡の、火坑を長く脫離して、亟に無量壽の寶座に遷り、三十六天の仙室に向はずして、常寂光の樂邦に遊ん。乃至一闡提、普く八正道に赴き給へ、と爾いふ事由を、本願の大檀那、前治部大輔、里見義實朝臣、安房守兼上總介、里見義成朝臣に代り奉りて、淨場修行の沙門、大、行香使臣蜑崎照文等、敬白。

とぞ誦したるける。登時蜑崎照文は、七犬士們に揖をしつゝ、徐やかに身を起して、塔婆の邊に找む程に、代四郎紀二六こゝろ得て、安房より兩侯の寄せさせ給ひし、經卷と香奠を、兩手に捧げ相從ふて、照文が身邊に措くを、照文見かへり受拿て、塔前に具る程に、代四郎と紀二六は、舊の樹下へ退きける。然ば又照文は、塔婆に朝ひ、端坐して、且石塔を仰ぎ看るに、細工の精妙いふべうもあらず。第一の石壇には、義實主の先考妣（季基夫妻）の神主あり。その傍に、水二三升を、裝る可なる壺の、網囊に容たるあり。こは何等の東西なるを知ら

燒れて、誰か一人も殘るべき。哀かな。義實不肖にして、當時父と倶に其城に在り。城陷るの日、遺訓辭するに路なく、鋭を劈き堅を破り、命を東南の海隅に免れて、神餘が與に、逆臣を誅戮し、且不義の兩郡司、麿安西を討夷げて、安房の四郡を有ちしより以來、民を撫るに仁を以し、士を招くに賢を擇り。加之愚息義成、孝にして且武略あり。是を以て下風に立武士二十餘城、遂に隣國二總を幷して、一方の藩屛たり。是併先考威靈の守る所、祖先の餘德に依る者也。義實幸に、良臣勇士の羽翼を得て、爲ことありし創より、遙に考妣兩尊の、靈魂を招きまつりて、廟墓を平群の大山寺に建立し、春秋の祭祀、忌辰の追薦、敢怠慢あらずと雖、今也、戰世割據の列國、關隘處々に横はりて、車馬を遠きに致すに由なし。是故に、躬自其地に迨りて、恩に答へ德を謝すべき、弔祭の情、盡すこと能はず。言に舊臣二世の忠良、金碗入道、大あり、恩を棄て無爲に入り、寧恩に報んと思欲したる、勇猛精進、五戒を具足し、且塵世に染著せず、錫を飛して嶮岨を踰越し、抖藪行脚、二十餘年、近曾義實父子に代りて、草廬を嘉吉の古戰場、幽陰茂林の中に卜て、三月不退の大念佛を勤行し、遙に重昏の臺を仰ぎて、將に冥福を、舊冢に薦んとす。義實夙に之を聞て、相懽びて寢られず。因玆、涅槃經三部、盂蘭盆經五部、隨求陀羅尼三卷を摸寫し奉り、使臣蜑崎照文等に齎して、以供獻燒香の、奠禮を行

老沙彌の差別なく、皆緇衣被て、白紗綾の袈裟なるが、左右兩側に排立て、更に供養結願の讀經あり。梵唄和讚の妙音に、聽者齊一心耳を澄し、木魚鉦磬の响、呂律に叶ふて、天樂花を雨するの祥瑞あり。寶器云に足らざれども、其式を失はず、衆徒實に匱しけれども、深信猶餘りあり。供養の讀經、復一時許、既にして讀果しかば、、大法師は寶座を立て、過去七佛を、唱名膜拜したてまつり、遂に諷誦の願文を、聲爽に諳讀す。その文にいへらく、(この文、必ず漢文にすべきを、婦幼の與に、假名をまじへて綴れり。作者の本意にあらぬものから、實にやむことを得ざるわざなり。)

夫四恩必報ふべし。狼獺の不仁なるすら、時として天を祀り、雛鴉の惡食なるも、猶反哺の孝なきことを得ず。倘人にして德を思はず、恩に報ふの心なくば、禽獸にだも曷ぞ及ん。伏して惟れば、嘉吉の擾亂、君臣相克し、五常地を拂て、人心猛獸と異ならず。是時に當て、獨結城氏の鯁忠あり。是をもて左袒義に仗る所の雄兵、遂に亦尠からず。最屓の諸將、恩顧の勇士、故君兩公子の奉爲に、妻子を忘れ、性命を擲ち、甲兵孤城に據る處、無慮十萬有餘人、四門の防禦、矢石に富、三略六韜、計拙からず。籠城既に三箇年の久しきに、よく堪て、百萬虎狼の勁敵も、その勢ひに乘ること能はず。雖然古語に不云乎。人多ければ天に勝、天定りて人に勝の、時いまだ至らねばや、弓折れ勢窮るに洎て、君辱られ臣死せり。玉石共に斷

と犬士們は、持し來ぬる圓坐を、庵邊なる樹下に、各分ちうち布して、坐して讀經の果るを等程に、昨宵照文が吩咐たる經紀們們は、精米數十苞と、永樂錢七八十貫文を、倶に數輛の車子に積て、連り推させてもて來にけり。照文はやく是を見て、伴當們に受拿して、經紀兒をかへし去らしめ、施行は人別に、米一升と錢百文と相定めて、伴當們によしを示し、この日の爲に准備したる、白麻の幕七八張を、丶大庵の檐下より、眞直に供養塔の頭まで、左右なる樹木を片拿て、透間もなく張亘し、且兩道の席幾枚歟、長くその中央に布しなどして、准備遺なく整ひしかば、八個の夥兵は、身甲に、各肱盾臑甲なる、手に／＼捍捧を衝立て、分れて非常を警めたり。勿論侍品は禮服にて、照文は長袴、犬士は肩衣半袴にて、倶に綈の夾衣晴やかに、小腰刀を帶たりける。然ば姥雪代四郎も、麻社衵を被たれども、施行の折の頭人たるべしとて、錢を頒ち米を料る、手配をいそがするに、直塚紀二六宰領たり。約莫この義に相與る、伴當都て立挊きて、准備に暇なかりけり。恁而巳牌左側に、早朝迴向の讀經果しかば、丶大法師は、衆僧と倶に、徐に草庵を立出て、石塔婆を距ること六七尺なる、儲の胡床に著たりける、身には白栲の夾衣に、香染の法衣、黒綸子の袈裟披て、手に拂子を拿れりける。その容素朴に似たれども、松體竹心、仙骨見れし、最も尊く見えたりける。相從ふ法師們は、十口都て一樣にて、長

第九輯 巻之十八

第百二十四回

師命を守りて星額遺骨を齎す
殘捨を受て猾僧禍鬼を告ぐ

文明十五年、癸卯の四月十六日、、大法師の宿願成就して、下總國結城郡、城西と聞えたる、古戰場の草庵にて、嘉吉に義死の里見氏(季基)竝に春王安王兩公達、城主結城氏朝を首にて、大塚匠作三戍、井丹三直秀們、當日戰歿の忠將義士の、諸靈魂の菩提の與に、獨坐不退の常念佛の、結願供養を遂んとす。則是五十年忌の前修にて、嘉吉元年辛酉より、今に至て四十三年、念佛修行は、其創より、八十口許に及たる、本日は卽那諸將士の、祥月亡日なれば也。爾程に犬塚信乃、犬山道節、犬川莊介、犬阪毛野、犬村大角、犬飼現八、犬田小文吾們の七犬士は、里見殿の代香使、蜑崎十一郎照文、副使姥雪代四郎與保と共侶に、照文の伴當と、八個の夥兵を相從へて、この旦辰の初刻に、、大庵へ參會す。折から那某甲の院の住持長老は、、九個の徒弟を相俱して、はやく來まして庵中に在り。庵主を副けて、經卷讀誦の、最中にてありければ、照文

も、はやく遐邇に知せずは、詣來る乞丐なからんとて、猛可に五六寸なる、紙牌百枚許に、施行のよしを寫さするに、人多ければ時を移さず、立地に寫果しを、照文隨即仵當と、夥兵們にも吩咐て、この宵件の報條を、路傍なる樹の幹など、或は町々の、門柱へ貼しけり。この餘は、明日の晝餉を、店小二にこゝろ得させて、多く焚出せ。と誂えたり。又燒香の折用ふべき、兩邊の席なンどは、翌の朝開に買せんとて、準備遺なく整ふ程に、夏の夜なれば短くて、寢る間もあらず明にけり。恁而照文犬士們は、倶に浴湯し梳り、早飯果て、二十餘個の、主僕歇店を立出て、大庵へぞ赴きける。畢竟金碗、大法師が、二十餘年の宿念成就し、先亡追福、大念佛の、結願供養の光景は、出像をこゝに載たれども、〔本書此の繪を省く〕猶詳に知まく欲せば、开は又這下の囘に、解分るを聽ねかし。

主は素より無慾にをはせば、然るおん東西は要なからん。然らばその半分をもて、某甲寺の師徒、十口に是を施すべく、又其半分をもて、米に易錢に兌て、もて施行に布くときは、則是本願主の功德也。この義を以庵主に告て、旨を問試しに、丶大師歡び大かたならず、その義寔にしかるべし。蜑崎生と商量して、はやく相計ひ給ひね、といはれたり。餘日なければばかへるさに、米穀經紀と、錢鈔を兌る肆店に、立よりて恁々と、吩咐たれば程なく來つべし。この義を相計ひ給へかし。と告れば照文諾ひて、嚮に咱們、丶大庵に赴く折に、奇き法師の案内をせしあり。それ歟あらぬ歟、訝しけれ。といふに代四郎も奇也と稱えて、來べき經紀們を等つ程に、この日も暮て、那錦綉店より、昨日七犬士の、誂たる晴の衣裳を、刺縫て都てもて來にけり。又米穀經紀も、兌錢兒も、犬士の指揮に從ふて、主管たる者各一名、小厮に張燈を、秉しつゝ來にければ、照文は又七犬士們と商量して、布施物の代料は、百金なるを兩個に折て、却五十金は、法會の幇助にならんといひし、那法師們の布施にすべく、殘る五十金を又分ちて、三十金を施米の價に遣し、二十金は錢に兌て、米も錢も、明の朝辰牌に、丶大庵に送れとて、那庵のある地方を、叮寧に誨えにければ、兩個の主管はこゝろ得果て、金子を受拿り、手實を寫し呈閱して、倶に宿所へ退りけり。當下又照文は、犬士們と相計るに、施行の儲、好といへど

常念佛間斷なく、那諸靈魂の亡日なる、本月の十六日に、供養を遂給ふにあらずや。拙僧微力薄學なれども、丌を仄に聞しより、歡びて寢られず。供養の式を幇助ん與に、推て愚衷を告まつる。本日供養の石塔婆は、什麼せさせ給ふやらん、いまだその准備あらずは、この庵の西のかたに、相應しき巨石あり。昔其頭に細流ありし時、土民の架しゝ石橋なるが、今は埋れて土中に在り。是等は主のなき石なれは、造りて石塔婆に做すに宜し。召倶したる徒弟の内中には、石工の技を做もあり、任用し給ひね、と最叮寧に來意を示して、石ある處に赴きつ、持し來ぬる鋤鍫もて、穿起すこと三尺許、果して土中に、長八九尺なる青石と、四面五六尺なる石、兩三隻あり。徒弟們是を穿出して、水を汲て土を洗流し、その通宵塔婆に爲るに、速なることいふべうもあらず。曉行時候に文字まで、遺もなく彫果て、隨卽庵主に指揮を請ふて、樹柆隙ある程よき處に、件の石塔婆を立にけり。その細工の精妙なる、只一夜分に落成の、奇特に庵主は驚き感じて、衆僧を勞ひ、茶を薦るに、かへさをいそぎて、よくも得喫まず、供養の折に復こそ來めとて、告別して皆共侶に、いそしくかへり去りしとぞ。丶大道德は件の奇特を、我們に解示して、建たる石塔婆を見せ給ひしに、實に是凡作ならず、意ふに權者の所爲なるべし。因て我每商議すらく、今番兩舘より、寄させ給ひし布施物は、遠路の故に代金なるべし。庵

後なるに、今又席の高低を、論ぜずもありぬべし。蜑崎主歸國の折、この義を以兩舘に、おん執成を願ふのみ。といふに歡ぶ與四郎は、面目いよ〳〵身に餘る、感涙を復禁めあへず。照文これをうち聞て、いはるゝ趣、誠に爾也。都てこゝろ得候。と應をすれば、六犬士們も、果斷愛たき道節が、意見を好とぞ諸なひける。然ば是より與四郎は、通稱の字を改めて、姥雪代四郎與保、と名告るものから道節と、主僕の禮儀を失はず。親兵衛竝に餘の犬士をも、いよ〳〵ます〳〵敬ひけり。却この折に小文吾は、代四郎を慰めて、荒芽山にて曳手單節を、赶失ひし折の事、又親兵衛と他們一家が、六稔富山に神の加護、听つる隨に云云と、いひも出れば荘介們も、次團太が事、孝嗣が事、舊を語り、新しき、言の交り果しもなきを、信乃は制めて道節と、倶に照文に告るやう、我們今日も、大庵に赴きて、庵主の勤行、暇ある折に、一霎時相譚ひつゝうち听しに、いと不思議の事候也。知らるゝ如く、大法師は、今番の法事に、他の施主を求ず。又當地の寺院に報て、宗門の幇助を借んと欲せず。只是獨坐一念に、稱名看經の外、他事なかりしに、昨日の黄昏時候に、年三十有餘なる法師の、徒弟八九名を從へ來て、、大法師に談ずるやう、拙僧は、這結城なる、某甲の院の住持也。聞くに庵主は、嘉吉のむかし、當城沒落の折戰歿したる、大將士卒幾萬の、忠義の靈魂菩提の與に、この春よりして數十日、

は、蟹崎主の告給はして、知し召れしよしなれば、そは言省き候はん。左にも右にも伏姫神の、冥助に生たる身の幸を、思ふにも只心苦しきは、君に先だち奉りて、富山を出し始より、料らずも國主御父子の、見參に入り奉りて、御扶持の下に召措れ、剰今番、蟹崎主と共侶に、恁る大事のおん使を、奉り候ひしは、鄙語にいふ痩馬に、過たる荷岌の高きより、猶も重かる嚴命の、免れがたきによりて也。この故に犬江腕子に、倶して出世の那日より、數ならねども我通稱の、世四郎の世を與に改めて、與四郎と喚れ候ひき。こは惶うも君が名乘(忠與)の、與の一字を賜りし、心操にて候也。恁れば君が御名代に、身は逸早く安房に在り。世四郎ならぬ君が名の、一字を戴く名頭こそ、故を忘れぬ愚僕が本性、この義を饒させ給へかし。いかで〳〵。と繰返すを、道節听つゝ感嘆して、適愛たき忠義の用心、我名の一字は所望に儘せん。そは左も右もの事ながら、同じくは與四郎の、與を改めて、代の字に倣さば、即我に代るの義あり。又與の字も捨がたくば、今よりして姥雪代四郎與保と、名告りねかし。保は則猎平の、猎と這那同訓なれば、共に昔を忘れざる、その誠心を後々まで、識者に示すに足りぬべし。恁はいへども、今はしも、我も和老も里見殿に、仕へまつれば朋輩也。況我們八名を、招かせ給ふ副使と聞けば、上坐に置く該なれども、御諚並に御教書は、曩に蟹崎生の傳へ賜りて、承りし

下おん使を奉りながら、犬江に得逢はず、おん身に後れて、犬士に面會しぬる事、いひがひもなく鈍きに似たれど、異日道節們に相倶して、安房へ還らば此上なき面目、望足りて候。と謙退りたる誠心を、照文連りに感嘆して、なほ餘談にぞ及びける。浩處に信乃道節、荘介毛野、大角現八、小文吾們の七犬士は、共侶にかへり來つ、階子を徐にうち登りて、齊一坐席に入る折に、道節は逸早く、與四郎を見かへりて、こは世四郎歟、恙もなきや。好こそ來つれ、幾よりぞ。と問つゝ照文に揖讓して、信乃們と倶に坐を占れば、この餘の犬士、信乃荘介、現八と小文吾は、荒芽山にて相識れり。いまだ認らぬ毛野大角も、姥雪也、と聞しより、是はく。とばかりに、或は再會の情義を演、或は初對面の歡びを舒などするに、與四郎は只額衝應へて、坐に感涙の拭むを覺ず。照文さこそとその意を猜して、先道節們に恁々と、與四郎も亦水路にて、風波の障りありし事、却市河に赴きて、依介夫婦に、親兵衞が、去向をこの地と聞しより、路次をいそぎて來にけるを、照文が見出して、招きよせつゝ、犬士們と、倶に旅宿の事の趣、又親兵衞が事さへに、解示したる條々を、告れば道節、餘の犬士們も、この日の便宜を歡びけり。登時與四郎は、頭を擡げて恭しく、先道節にうち朝ひて、絕て久しき見參に、恙もあらずをはします、歡びは短き詞に、罄すべうも候はず。小可、音音、兩個の媳婦們が、再生の事の趣

里にて他を等んより、漫行を做すならば、反て路にて遇ふこともあるべし。先那庵に赴きて、前日の歡びを稟すべく、かへさに錦綉店にも立よりて、衣裳の刺縫を催促せんとて、いそぎて午飯を果しつゝ、うち連立て、出てゆきにき。恁れば我們主僕のみ、詞敵もなかりける、徒然に堪ざれば、這矮樓なる那窻より、身は只單外面なる、人の往復を稍久しく、うち長覷て在りける程に、和殿に似たる旅客の、像忙に過るあり。戴きし笠の深ければ、面は安定に見えねども、被たる夾衣の染色と、背と袖なる花號さへに、首途の折認記あり、叟なるべし、と思ひしかば、早伴當を走らして、赶せたりしに、果して錯はず。犬山竝に六犬士們も、程なくかへり來つべき時候也。且甘坐て等たまへ。寔に珍重々々。と祝して具に告らるゝ、長談畲話を長しとも、思はで耳を敧けたる、與四郎屢點頭つゝ、听果て貌を更め、且歡びを演ていふやう、言腐爛しく候へども、今番犬士を招會の、おん使を命ぜられしは、おん身と在下なるものから、おん身は國主譜第の御家臣、在下は亦道節の、舊僕で候へば、親故尊卑の差なきにあらず。且おん身はこの年來、犬士を招き來たさんとて、水火を避けず、諸國を、偏歴度々に泊びしに、這回在下先だちて、犬江にも逢ひ、六七の、犬士に御諚を傳へなば、おん身は才に御代香の、一役のみにて本意なからんに、事皆序次あり、階級あり、是も亦伏姫神の、神謀にこそ候はめ。在

るゝ如き小庵なれば、然る東西を措く處なし。御香奠は供養の折、塔前に備奉り、布施物は、事果て後、貧人乞兒に取すべし。姑且預けまゐらせん。拙僧この春當所に來て、草の庵を締びしより、念佛の外、この地の人と、言語を交しことあらず。然れども今日の珍客は、七犬士なり、和殿也、一霎時勤行の鉦を止めて、閑談せざることを得ざれば、憶ずも時を移して、既に黄昏に及びたり。今宵は犬士們共侶に、且旅亭に退きて、大後日の朝來會し給へ。大念佛の結願は、十六日の巳牌也。拙僧這回の大法事は、惟里見殿のおん與なれば、當地の城主結城氏、成朝主にだに告知せず。況その下たる、城內の士庶はさら也、城下の寺院、町人們に、幇助を請はず、劵緣もせず、是本來の眞面目、この年來の情願也。迭の意衷は、異日磬さめ。小庵多客を宿しがたかり、とく〳〵罷出給はずや、と出家氣質の飾りなき、示教に大家諾なひて、告別しつ共侶に、城下の町へ退りけり。恁て咱們は柴門の、外面に等したる、夥兵と伴當を従へて、七犬士と倶に這里に來つ、那這と宿を擇て、隔昨の夜分より、這小乘屋の矮樓に在り、七犬士們は法會の折の、禮服を整んとて昨日は、隣町なる錦繡店より、絹多く買拿つゝ、刺縫を誂などせし程に、その一義にて、日を銷しにき。しかるに、七個の犬士們は、和殿の便宜を聞しより、他も必この地に來つべし、不知案內にて、大庵を、索難ぬる事もあらん、這

年、辛くして忠孝七行の、玉をし綴り得たれども、倘闕處は仁の一玉、犬江の在處を知るよしなきを、うち歎きてのみ在りけるに、那人既に安房に在り、拙僧他を導ざれども、伏姫神の引接にて、君の御用に達たれば、我將てまゐりしに異ならず。この理りもて推ときは、素是分身同因果なる、八士に前後輕重あらんや。開を今さらに功あると、功なきをもて褒貶すべからず。犬江は大功の賞として、はやく城主になされしかども、敵の反間に中られて、遠く他鄕に退けられ、一旦孤客となりし日は、始よりして功なきに、しかずとこそ思ひけめ。幸ひにして君侯の、おん疑ひ解しより、召かへさるゝは各と、是同日のおん沙汰なれば、各々と遲速なし。造化の默契かくの如く、人智に量りがたかるを、恥るは要なきことならずや、と諭せば七犬忽地に、胸豁け倶に微笑て、現愆てり、あやまちぬ。親兵衛が大功は、是我們が開手也。そのことなくば推並て、虛名の勇士といはれんのみ。意ふに這回も親兵衛は、復素藤を生拘りて、舘山の城を拔くなるべし、といひつゝ倶に貌を改め、諚意承り奉りぬ。法會果なば、道德に倶して、安房へまゐりて年來の、恩招を謝し奉らん、今さら仔細候はず、と齊一畏りを稟しける。登時咱們は、庵主に向ひて、今番兩舘より寄させ給ひし、御香奠あり、おん布施の料物あり、目今遞與しまゐらせんや、と問へば庵主は頭を掉て、そは辱き事ながら、見ら

來、貴命を辭ひ奉りしは、時至らざる故なりけん、宿因齊一義兄弟、いまだ具足せざればなりき。しかるにこの春に至りて、犬阪毛野に逢ふことを得て、七名までは聚合しかども、獨犬江親兵衛が、存亡死活を知るよしなければ、世に憫しき涯りなりしに、豈料んや那神童は、伏姬神の冥助にて、世四郎音音、そが媳們さへ、皆他にしも守傅して、六稔富山に養れ、心術さへ身長さへ、大人びたりしのみならず、君侯御父子に仕へまつりて、莫大の功あらんとは、思ひがけなき手柄也。我們七名、六稔以來、百折千磨の窮阨艱苦を、凌ぎて恙なかりしは、皆姬神の冥助なりしを、感激の外候はず。しかれども勞するのみにて、いまだ一介の功あらず、孰か九歲の總角なる、親兵衛に恥ざらんや。亓を明君の棄給はで、今又御書を賜りて、招かせ給ふは倒に、面目に似て面伏也。おん承當惑仕りぬ、と異口同樣にうち陪話しを、咱們所つゝ慰めて、然な宣ひそ。窮達時あり、榮辱遲速ありとても、八個の犬士に甲乙なし。そが中に犬江生は、仁字の玉を得たりし甲斐に、一仁進て、餘の七行を、導き來たすは自然の道理。老侯この義を感悟あり、當舘も亦御同意にて、今一犬士を得たるすら、かくの如き大功あり、八犬こゝに聚合なば、關の東に敵やはあるとて、等給ふこと一日も、三秋に異ならず。この義を思ひたまはずや、といへば庵主も倶に諫めて、蜑崎生の意見、その理あり。拙僧行脚二十餘

叛の爲體、且妙椿が幻術もて、親兵衛を遠離たる、反間の事の趣、淸澄討手の大將を奉りて、舘山の城を攻伐ども、全功いまだあらざる事、又友勝良于、逸時景能們が浮沈の事、南弥六、出來介が戰死、濱路姫の二度の厄難を、姫神擁護の示現により、舘の疑ひ解させ給ひて、はやく親兵衛を召かへし、且七個の犬士們の、在處を索ねて將て來よとて、和殿と咱們は招會の、おん使を命ぜられ、自他の去向を異にして、水路をいそぎし事の崖略、約是までの數箇條は、既に和殿の知れる如く、一事も漏さず告知しつ、さて、又咱們は兩國河原にて、犬江に逢ひけるその宵の首尾、孝嗣次團太、鄕三が事、靈狐政木が奇特の忠告、又向水五十三太素手吉、逸時景能們の、來歷は箇樣々々、恁々也と解示し、犬江は素藤誅伐の、御教書を賜りて、孝嗣竝に次團太鄕三、逸時景能們を相伴ひて、その曉天に五十三太素手吉が、准備の快船にうち乘て、舘山を投て漕走らしたる、その別路の終まで、言詳に告しかば、庵主はさら也、七個の犬士ひとしく駭嘆じて、感佩せずといふものなく、犬江の上、和殿們の事、死中に生を得たりける、伏姫上の神恩靈應、我君御父子の賢明武德を、又今さらにうち仰ぐ、歡びあまりて、感淚の、拭むを孰も覺ぬまでに、歡唱涯りなかりけり。登下咱們は、ゝ大法師に、兩舘の御諚を傳へ、且七個の俊傑に、御教書を遞與しにければ、犬士們倶に受藏きて、在下們這年

け、庵主は佛壇の邊に端坐し、犬塚犬山、犬川犬阪、犬田犬飼、犬村の七賢士、面識りたるも識ざるも、左右二側に坐を占て在り、閑談闌なりけん歟、倶に咱們を見かへりて、こは珍しや、とばかりに、片寄て席を譲られたり。登時咱們も團坐に入りて、犬川犬阪、犬村們には、初對面の口誼、互に疎ならず。又犬田犬飼はさら也、就中犬塚犬山には、石禾以來恙なかりし、再會を祝し祝され、却今番、當精舍の法會に就き、瀧田稲村兩舘の、御代香を仰付られて、參向の事の顚末、瀧田の老侯、年來の、御本意に稱はせ給ふ、おん歡びの趣を、大法師に傳達し、供養の時日を問などしつゝ、公私の話説に及びける、主客の喜悦いふべうもあらず。爾程に七犬士は、犬阪犬山の復讐の事、及氷垣殘三夏行、落鮎餘之七有種們の、素生義俠の事の趣、又河鯉守如、その子孝嗣の事、亦賊婦船虫、媼内が事、善惡成敗、箇樣々々、恁々に候ひきとて、その崖略を解示されて、大法師と共侶に、別後の動靜を問れしかば、咱們則犬江の奇談、那人富山に老侯の、危難を拯ひ奉りし、その事の始より、伏姫神の冥助靈驗、和殿夫婦、兩個の媳婦達、再生の天助善報、兩個の孫さへ、出生の奇異洪福、又那神餘滿呂安西、出來介復五郎九三四郎、南彌六墜八們が歸服の事、兩舘の仁政、四家老の良佐言行、素藤が叛逆、義通君の窮阨、妖尼妙椿が幻術に至るまで、都て犬江が智勇大功、君臣の得失、素藤を恩赦、竝に再

詣しかども、故ありて、大道徳に、面談は仕らず、本意なくかへり來にければ、事朧に似たるものから、件の庵は城下にあらず、乾淨たる茂林中に、締掛たる柴門こそ、那精舍にて候なれ。地方に知る者稀なれば、索難させ給はなん。遮莫城下より西のかた、約莫十町許にして、只那嘉吉の古戰場と、問せ給はゞ紛れはあらじ、といふに紀二六こゝろ得果て、走りかへりつ恁々、とよしを咱們に報しかば、亦復言に便宜を得たり。恁て這夜は糟壁なる、客店に明しつゝ、次の日早旦に宿を出て、連りに路次をいそぐ程に、晡時の比及に、はやくこの地に來著して、件の嘉吉の古戰場を、人に問するに紛れもあらず。既にして誨られたる、茂林頭に來ぬる程に、料ず一個の法師に遇ぬ。因て我又その法師に、、大庵を問試しに、法師答て、开は這里より遠くもあらず候へども、樹柆深ければ迷ひ給はん。愚僧も那里へゆくもの也、這方へ來ませ、と先に立て、導くこと二町許、果して樹柆の間ある處に、締べる草の菴ありけり。登時法師は、咱們を見かへり、索給ふ、大庵は、則這里で侍る也、といふに咱們は歩を早めて、我み近づき、歡びを、演るを法師は聞あへず、魆て樹陰に入るとおもへば、忽地見えずなりにけり。恁而咱們は紀二六に、呼門しつゝ我み入るに、緣頰の障子は開きてあり、坐席は才に九尺に過ぎず、前面に六尺許なる、佛壇に笈佛あるのみ。中央に一個の地炕を開きて、席薦五枚布儲

紀二六と喚做たるに、意衷を示し、使を課て、氷垣許遣しけるに、等こといまだ半晌ならず、紀二六はやくかへり來て、那里の動靜を報るやう、小可那鄕士許赴きて、おん使のよしを言示し、那七個の犬士達の、今も逗留なさるゝや、と問試しに、知ずと答て、左右なくは事の實を、報べうもあらざりければ、小可猜して、毫も擬議せず、則里見の御內人なる、蟹崎主の使なるよしを、詳に解示しゝかば、那毎の疑ひ釋けん、氷垣の家の老僕なるべし、世智介と喚做たるが、玄關に立出て、小可にうち向ひ、悄やかに報るやう、蟹崎主の御姓名は、豫聞知り候ひしかば、隱すべうも候はず。尋給ふ七犬士は、春より久しくこの處に、逗留して在せしが、結城なるゝ大庵の、法會にいかで値んとて、今朝早天（四月十三日なり）より立去りて、那地へ赴き給ひにき。折から東人殘三は、猛可に中風の大病にて、半身不遂に候へば、餘之七も那人人と、倶に結城へゆくこと得ならず。只小生們一兩名、犬士達を一里あまり、送りて方僅還りたり、といふに紀二六こゝろ得て、开は胸苦しき御病厄、早の平愈を祈らんのみ。照文は君命にて、件の法會代拜に、去向をいそぐ旅なれば、立よりて御安危を、問まゐらすることも克はず。かへさには犬士達と、倶に必訪ひまつらめ。このよし宜く稟し給ひね。却、大庵は、結城にて、那方に候ぞや、と問へば世智介、然候。いぬる比小生は、犬士の使を承りて、那草庵へ

田税戸賀九郎逸時と、苫屋八郎景能が、五十三太許寓居の事、都てその日の事の顚末、一事も漏さず解示して、却親兵衞は、是等の便宜に、快素藤を對治せんとて、十三日の曉天に、逸時景能、孝嗣次團太鯛三と、照文が夥兵十名の內中、才に兩個を借從へて、那五十三太素手吉が、准備の船にうち乘りて、上總を投て漕走らしたる、事の光景今見る像く、手做をしつゝ聶き告れば、輿四郎听つゝ笑局に入て、奇也々々。と感嘆す。登時照文又いふやう、然ば咱們は犬江の船出を、河原に目送り果しより、更に去向のいそがるれば、疾立去まく欲するものから、宿の艄公、篙工奴婢們は、前夜の忽劇に駭怕れて、那地ゆきけん在る者なければ、亓を辭せずして慌しく、出てゆかんはさすがにて、人の憑ぬ留守をして、憶ずも天を明す程に、艄公夫婦、奴婢們まで、那里より皷出て來つ、朝の炊に又時移りて、日はいと昂う升りし時候、稍早飯をたうべ果たる、夥兵と伴當們をいそがし立て、却艄公に別を告、犬江竝に一路人們の、房錢までも遺なく還して、千住の方へいそぎしに、豫は穗北の郷士と聞えし、氷垣夏行許立よりて、七個の犬士們の事をし問ん、と思ひし甲斐なく、不知案內の疎さは、十町許行過て、始て人に問せしに、そはいと逈に後也、といはるゝに悔しく思へば、且試に伴當を、走らしてよしを聞せんとて、咱們と以下の兵每は、路傍なる茶店に憩ひて在り、心利たる伴の若黨、直塚

て、其頭の客店に留め、順風を等て、十三日の朝、市河なる、犬江屋に赴きて、依介夫婦に對面せしかば、親兵衛主の往方も知られ、那人は數日那里に在りしに、結城の法會に値んとて、十二日の朝未明に、立去にき、と報られける、長談會話に時移りて、東人夫婦に留められ、只得那里に止宿しつ、昨日は船もて依介篙工們に、關宿まで送られて、昨夜は堺の客店に、明して七里を走一走に、未牌の時候に這城の下に、來ぬる事は來つれども、ヽ大法師の菴を知らねば、索難つゝ氣さへ脚さへ、疲勞すまでに、困じたりしに、憶りもあらず、おん身に見られて、喚れずは這便宜を得んや。おん身は又幾の間に、はやくこの地に來給ひたる。ヽ大道德に逢給ひし歟、犬士は來會せられし歟。と問ふを照文推禁めて、然ばとよ、且听給へ。我も亦往る十一日の夜艾より、勁風劇波に漂されて、船は找まず、危ふかりしを、辛して十二日の下晡に、武藏下總の封彊なる、兩國河に漕入れしに、風波に心地を損れて、我身安からざりしかば、那河原なる艄公の、坐席を借て臥て在りしに、その宵料らず犬江仁に、相逢ふことを得てければ、隨卽舘の御諚を傳へて、御教書を遞與しにき。その故は箇樣々々、恁々の時宜也けりとて、親兵衛は一路人、河鯉佐太郎孝嗣が事、又靈狐政木が事、竝に孝嗣が改名の心操、又石龜屋次團太と、开が角紙の弟子鯛三が事、又那河原の俠者と聞えし、向水五十三太弟兄、竝に

れば、丶大法師の草庵を、里人們に尋問ふに、知れりといふ者なかりしかば、且訝り且問ひつゝ、最長やかなる城の町を、索不娛てぞゆく程に、忽地後方に人ありて、开は姥雪主にてをはさずや。住り給へ、やよ喃々。と聲高やかに喚被るを、與四郎急に見かへれば、是則別人ならず、豫面善れる照文が、這回の伴當ム乙なれば、與四郎心歡びて、遽しく菅笠を、脫て引提て等程もなく、那僕はやく走著て、小腰を折め、莞然に、與四郎に告るやう、主にて候十一郎は、這城の町なる歇店に在り、老爺の過らせ給ふを見て、喚まゐらせよ、といはれしかば、おん迎にまゐりにき。卒給へとて先に立つ。事の便宜に與四郎は、幸なるかな。と勞ひて、仔細を越に問に及ばず、案内に儘して舊路へ、立復ること一町許、照文が宿とせる、歇店にはやく來て、と見れば店の白壁に、小乘屋と寫したる、矮樓兒の一座棟也。恁而與四郎は、草鞋を脫捨、脚を濯ぎて、引れて店の傍より、軈て矮樓にうち登れば、照文は這里に在り、宿の[illegible]が汲もて來ぬる、茶を與四郎に薦めたる、外には同宿の客もなく、次の間には照文が、夥兵伴當のみぞ居たりける。登時與四郎は含笑ながら、照文にうち向ひて、最早かりし蜑崎主、在下は首途の折、那船に乘りしより、幾程もなく風波暴れて、既に危窮に及びしを、纔に免れて上總なる、木更津に船を歇留て、次の日は那港口に在り、只一個なる伴當の、病臥たるを陸に登し


犬江屋
いぬえや
ミを


依介水を行ひ與四郎を送る
より介

霎時廻向をしぬる折、昨夕准備の金壹兩を、分ちて二裹にしたりしを、悄地に賻贈て退きけり。事情を原るに、與四郎が肚裏には、東人夫婦の好意を感じて、昨日より今朝までも、酒飯の管待大かたならぬに、剰船もて遙々と、關宿まで送らるゝ、報ひを做さでいなれんや。然ばとて錢財は那人決して受べからず。今番は猛可の旅なれば、遺裹にせん東西もなし、要なからずや、と尋思をしたる、賻贈は一事兩用にて、件の金を遺措きしを、その折水澪は心もつかず、程經て肇て見出しけるに、裹に寫せる姓名にて、疑ふべくもあらざれば、心單に感じて已まず、當晩良人の還るを等て、事恁々と告るにぞ、依介も亦與四郎が、大かたならぬ誠心を、只顧感佩したりける。こは是後の話也。爾程に與四郎は、いそしく水澪に別を告て、依介が儲の船に、うち乘る折は尚暗けれど、兩個の篙工に依介も、力を勠して漕ぐ程に、月落て鴉いまだ啼ねば、明ずや天のとね河に、溯りゆく艪は三挺、舟行十町あまりもや、來ぬらんと思ふ比、東やうやくしらみけり。恁而この日の下晡に、船は關宿に果しかば、與四郎は依介們に、歡びを演相別れて、獨陸地をいそぐものから、纔に一里許にして、點燭時候になりしかば、今宵は堺の驛なる、客店に杖を駐めて、明るを遲しと立出つゝ、連りに路次をいそぎたる。結城まで七里也、身は老たれども尚健にて、歩の運びに撓みなく、この日未牌の左側に、結城の城下に來にけ

もて來て推居て、時分は既に過ぎたるに、物欲しくこそをはすらめ。疎飯に侍れど、先箸を拿せ給へ。と給侍して、中酒の盃、餚さへ、竹筴魚の鹽炙、竹筍は、歯に稱ふ與にと杪を搗し、饗應の叮寧に、手の屆きたる手長鰕、然しも魚米に富たる郷の、貝の柱に初胡瓜、那這採て裝分る、弁と葛西の新茄子、根芋はいまだ子のあらぬ、夫婦右より左より、屢羞めて已ざりける、人の好意に與四郎は、今さら推辭むことを得ず、是より話説も長うなりて、伏姫神の冥助靈驗、親兵衛が世に儔なき、文武の才學、大功の事の趣、又孫等が事、音音が事、曳手單節が事さへに、身の幸ひは富山なる、神と君との恩惠ぞ。と有來し方を說誇れば、依介水澪は親兵衛が、這里に旅宿の事の顚末、又妙眞か上をしも、いひも出、听もしつ、夏の日鎖し長しとも、思はぬまでに時移りて、黃昏近くなりしかば、與四郎只得意見に儘して、明日と契りて、去向をいそがず。先結城への便路を問ふに、依介答て、この地方より、那里へ十七八里も候はん。幵を船にて關宿まで、利根河を溯らば、足を勞すことなくて、倒にいと近かり。小可送りまゐらせん、任用し給ひね。といふに與四郎歡び承て、今宵はこゝに明しけり。恁而次の日の曉天に、依介は篙工兩三名を喚覺して、出船の准備を做す程に、水澪は亦與四郎に、早飯を羞めなどす。是より先に與四郎は、臥房を出、漱ぎて、身裝しつ、家廟を問ふて、房八沼藺が木主に朝ひて、一

迭の口がけなき賓客は、與四郎也と聞しより、船の揚荷を篙工們に任して、衣脱更て對面す。迭の口誼果しなき、歡びいふべうもあらざりけり。登時又與四郎は、東人夫婦にうち向ひて、今番稲村殿の仰により、照文と共侶に、親兵衛を召復さるべき、おん使を奉り、迭に去向を異にして、水路をこゝに索來ぬる、その事の端より、風波の障りに遲滯の事、この地は親兵衛が舊里なれば、立寄りしこともあらん歟、と思ひ量りし事の情を、云云と告知らすれば、依介も又親兵衛が、曩にこの地にかへり來て、數日逗留の事の趣、且昨の朝未明に、辭して當所を立去て、隍地に結城の、大蕣を、訪はゞ必七犬士に、逢ふよしのあらんとて、去向をいそぎし事までも、報れば與四郎歡びて、しからんには便宜を得たり。恨る所は我船の、始より順風を得て、昨日早旦にこの地に來ば、對面輒かるべかりしに、期に値ざるこそ悔しけれ。非如結城に七犬士の、來會せることあらずとも、犬江の和子は、十六日まで、那里に在さんこと疑ひなし。既に去向を知りながら、こゝに長坐は無益なり。今より結城へ赴くべし。といふを依介推禁めて、そは又酷く性急也。今日は中の三日に侍るに、明日、朝立にし給ふとも、十五日にはいとはやく、那里へ到り給はなん。寔に得がたき賓客を、只この儘に還しいなして、和子に知られば爭何せん。風波に水路の疲勞もあらんに、枉て一宿留らせ給へ。といふ間に、水澪が准備の、饌を

も、益なからんと推量りて、始よりしてその議に及ばず、只瀧田なる音音們に、水路の障りに恙なかりし、與四郎が上、箇様々々。と具に聞え知せしかば、音音曳手單節們は、驚きつ且歡びて、日數程經ぬ旅ながら、市川よりの後の事、聞まほしさに還る日を、待わびしくぞ思ひける。閒話休題。爾程に與四郎は、那日依介が宿所に赴きて、姓名を告て對面を請ひしに、折から東人依介は、荷船の上乘して江戸へ赴き、女房水澪は、香華院へ、墓參しつと聞えて、留守には耳のいと疎かる、薪炊の老嫗のみにして、篙工だに一個も在ざりければ、何を問ふても外々しく、己がいふ事のみなれば、與四郎は、親兵衛の、這里に來ぬるや、否や、と目今知るに由なくて、心頻りに焦燥ども、東人の妻の還り來るまで、等より外に術あらず、と尋思をしつゝ、しからんには、其首を漫行して、復こそ來め、と期を推て、退きてこの郷の神社佛閣を拜んと欲するに、差たる都會の地にあらねば、靈場古迹の觀るべきもなし。只幾番も犬江屋の、門邊を過りて覷入るゝに、老嫗のみにして、寂寞たり。左右する程に、亭午になりつ、この時亦復ゆきて問ふに、依介が妻水澪は、方纔歸宅の折なれば、遽しく出迎へて、先與四郎を客房へ請登し、名對面して、茶を看めなどしたる、管待特に淺からず。六稔富山に親兵衛を、衞孚れし値遇の緣、聞たる隨にいひ出て、その歡びを演る程に、依介も亦かへり來つ、思ひ

果敢しくは飲ざりければ、只得陸に扶登して、這津の客店に留め、將息させて、下總へ將てゆかず、篙工們が還る比までに、他が病著稍瘥らば、稻村へ送りかへせとて、店小二に介保を、委ねて、又與四郎は、遽しく船に乘る程に、既にして日は暮たり。恁而亥中の時候よりして、風はいよ〳〵宜しとて、篙工們は船を漕出しつゝ、市川を投て走らする程に、十三日の朝、船果て、這里歟とぞ思ふ市川なる、犬江屋の河岸に來にければ、與四郎は篙工們は勞ひて、那件當の事をしも、こゝろ得さしつ、行裹を、手自引提て船より出れば、篙工們はそが儘漕戻して、安房を投ていそぐ程に、當晚又上總なる、木更津に船をよせて、篙工一兩名陸に登り、那客店に赴て、與四郎が留め置たる、件當の安否を訪ふに、頓に瘥り果べくもあらず。然ばとて幾までも、恁てあるべきにあらざれば、駝もて出して船に載よ。安房へ還らんといふにより、扶けて軈てうち載て、次の日の曉天に、安房の宿所に歸著しつ、隨卽稻村の城へよしを告て、件の伴の病人を、城內へ返しけり。是により與四郎は、風波の障りありといへども、恙もなくて市川へ、昨日著到しぬるよしの、稻村の城へ聞えけり。然ば件の件當は、約莫一旬許にて、稍起出ることを得たれども、時日遙に歷にければ、又與四郎が迹を赶ふて、下總へゆくべくもあらず。有司們も亦與四郎が、幾までも市川に、在るべからぬに、件當を、又那里へとて遣すと

この詩歌の意を知まく欲せば、且下回に、解分るを聽ねかし。

第百二十三回

小乘樓に一僕故主に謁す
大庵に十僧法筵を資く

話表姥雪與四郎は、四月十一日の晡昏に、一個の伴當を從へて、照文們と共侶に、稲村の城を罷出し折、近き港口より船に乘りて、下總の市川へとて、連りに水路をいそぎしに、この夜猛可に風波暴れて、幾番となく吹戻され、十二日の曉方に、辛して上總なる、木更津に船を歇留て、更に順風を等たりけるに、その日も終陽海暴れて、渡海の便宜を得ざりしかば、心いよ〳〵焦燥て、陸路をこそ走らめ、と思ふものから篙工每が、今にもあれ風だに復らば、船を遣る事易かりてん。开を忿に惴り給はゞ、弓と弦なる譬に漏れで、又徒に五六宿の、日數を費し給はなん。尙一霎時等給ひねっと諫る言の理りなれば、この日を工夫に消しゝに、纔に一個の伴當は、昨夜通宵狂風逆波に、搖惱されたりしより、苫を被ぎ病臥て、亟の役には達べくもあらず。左右する程に、黃昏時候より、漸々に風軟ぎて、且に追風にならんとす。なれども與四郎が伴當は、心地死ぬべう覺るとて、飯はさら也、准備の藥を、薦られても甲斐なき迄に、果敢

朝義成主は、正廳に出まして、四家老（杉倉堀内東荒川）に宣ふやう、這回妖賊征伐の折、清澄高宗逸友們、この餘も有功の士卒多しと聞けども、第一の功臣、犬江親兵衛は、結城へゆきて、這里に在らねば、目今賞を行ふに由なし。然るに他を閣きて、賞祿を急なば、本を棄て末を拿るのみ。有恁れば、親兵衛が歸城の折まで、姑且沙汰に及ぶべからず。この義を隱なく徇示しね。但怨諸にしがたきは、夷灊の民の艱難也。他們は年來素藤主僕の、奢侈淫樂の爲に責拿られて、貧きは子を賣り妻を鬻ぎ、富るは財寶、子女妻妾を奪れしより、猶分鏡の全からざるもあるべし。嚮に清澄は、館山にて、犬江親兵衛が薦により、那里の民に賑給を、行ひにき、と聞たれども、然ばかりにては秋實迄、支るに足ずやあらん。因て夷灊一郡は、稅斂を三稔免すべし。下知を高宗逸友に、傳へよかし。と仰れば、四家老們は承歡びて、儀の如くに行ひけり。是をもて功ある士卒は、理義を感じて、恩賞を望ず、夷灊の民は枯たる苗の、甘雨にあへる歡びあり。三稔の長きを等ずして、次の年より常の如く、獻んとぞ願ひける。然ば安房上總は此の如く、善政愛たかりけれども、結城の安危は未だ聞えず。、大法師が宿願の、法筵那里に成就して、八犬集會しぬるや不や。分致あり。昔年開手結城城。秋月春花幾十更。

白妙の木綿城の庵は雪ならで年歴てむすぶ垣のうの花

擁護と、犬江仁が、帮助ありしによりて也。いふまでにあらねども、神佛を等閑にな思ひ奉りそ。親兵衞を總角也とて、必な侮りそ。若達年歲こそ增りもしたれ、その才幹の及がたきを思はゞ、志を勵して、仁に劣らじと勉よかし。一犬士の這里に在るすら、妖賊都て俘囚になりぬ、異日八犬具足して、倶に安房殿（義成主をいふ）を佐けなば、必よ關より東の、八箇國に敵なかるべし。意ふに件の犬士們は、安房殿の寶貝たらん事、他們が所藏の靈玉と、又何ぞ異なるべき。今番仁も上總より、結城へ赴きたらんには、七犬士們を伴ふて、必かへりまゐるべし。我は犬士を企て、等こと既に久しくなりぬ。と宣ひつゝ呵々とうち笑ひて、若達軍旅の疲勞もあらんに、老の諄言、益なかるべし。とく〳〵罷り候へとて、甕襲の玉を清澄に、返して暇を給ひしかば、友勝良于、いへばさら也、逸時と景能は、齊一唯々と承まつりて、背に冷汗の流るゝを覺ず、額に席薦の跡印までに、畏りてぞ退出ける。是より纔に一兩日を歷て、稻村の城內には、素藤們を誅戮の沙汰ありて、浦安牛助友勝、登桐山八良于、實檢使を奉り、雜兵一百名を從へて、素藤竝に願八盆作、本膳狼之介們を、長須賀なる申明亭に牽出して、再度叛逆の罪戾を、恁々と宣示して、皆悉斬し畢て、却碗九郎麻嘉六が首級をも、倶に梟首せられしかば、これを觀る者堵のごとく、肩を比べ袖を列ねて、日旬に間斷なかりけり。その詰

れば、こは里見の犬たるべき、前兆あり、と賢達て、戯語しを思ひ出れば、悔しくも恥しき、批言寔に疎鹵なりき。狸の古字は豸に從ふを、犬に從ふは後の事にて、今も猶通用す。況玉梓が餘怨貪緣りて、當家に祟を做すべしとは、神ならぬ身の知るよしなかりし、亦我口の過なりき。しかるに今玉梓が、餘怨解脱の折を得て、狸兒も共に命終りし、その亡骸の毛の中に、經文の偈句見れしは、正に是親兵衞が、持る靈玉の奇特にて、畢竟役優婆塞の、方便利益ならんといふ、狐龍の忠告違ふべからず。然らば洲崎の巖室へ、代香の使者をまゐらすべく、又這妙椿狸の皮は、逢坂の關のあなた、と榮花物語（峰の月の卷）にしるされたる、那關寺の、牛佛の例もあれば、はやく華幔に爲らして、大山寺へ寄捨せんずとて、おん後方に侍りたる、小湊目と、鮹船貝六郎を召近づけて、恁々と吩咐て、皮を目に預給へば、兩個の近習はこゝろ得果て遽しくぞ退出ける。現老侯の仁心なる、仇に報ふに德をもてして、玉梓竝に妙椿狸の、菩提をしも弔しめ給ふは、世に有がたき賢君かな。と淸澄特に感服して、却友勝良于、逸時景能が、稻村殿の仰によりて、まゐりしよしを聞え上れば、義實主點頭給ひて、軈て件の者每を、身邊近く召よせて、今番の軍功を讚給ふのみ。曩に或は虜にせられ、或は城を沒落したる、其頭の事は問給はず、但諭し給ふやう、若達が恙もあらで、竟に功績の愛たきは、神の

なれるは、恥に似て恥にあらず。しかるに浦安牛之助友勝、登桐山八郎良于は、神火の冥助に獄舍を出て、名ある賊徒を生拘りて、會稽の恥を雪めし事、尤奇特に思召さる。宜く本領を安堵すべし。又田稅戸賀九郎逸時、苫屋八郎景能は、城を棄て命を免れ、罪を他鄕に避たるは、饒されがたき越度なれども、今番犬江親兵衛に從ふて、早く敵城に入て火を放ち、且仙田厩嘉六を相擊にしける事、又その前夜、兩國河より、親兵衛を送り來ぬる折、五十三太們と相計て、快船をもて束の間に、敵地に近づき得たるよしも、曩に親兵衛が呈書に聞えて、恩免を請まつるに依り、則這回の忠戰をもて、那先非を償ひ得さしめ、舘山の城の頭人を罷られて、その餘は舊の儘に闇る、清澄に從ふて、瀧田へまゐでて、老侯に、おん禮を稟上よ。と仰渡させ給ひしかば、友勝良于、逸時景能は、おそる〳〵恩命を、拜して退り出にけり。爾程に荒川清澄は、いまだ私宅を見かへらず、件の四士を伴ふて、馬を早めて瀧田へ詣て、義實朝臣に見參し、犬江親兵衛が大功、素藤們が伏誅、都て稻村殿に、聞え上たる條々を、一事も漏さず告稟しつ、妙椿狸の奇き皮と、甕襲の玉の由來を解て、憲覽に備へしかば、義實主は歡びと、又驚きも大かたならず、玉と皮とを閲して、原來那妖尼は、昔八房の犬を守養ける、富山の牝狸でありけるよ。那折我は倘壯年にて、件の犬を愛るのあまり、狸といふ字は犬に從ひ、里に從ふよしあ




清澄山の
諸士親兵衛
と共に地道の
首塚を観る

結城へ赴きし事、又親兵衛は自餘の七犬士を相迎へて、共侶にかへりまゐらんとて、葉四郎們が還るを等ず、いぬる十五日の下晡に、孝嗣次團太師弟を倶して、水行を下總へ赴きし心操、眼前に見し事はさら也、傳聞ける事までも、その崖略を聞え上げ、妙椿狸の奇き皮と、甕襲の玉を見せまゐらせて、這狸兒は箇樣々々、と昔年瀧田の近郁にて、八房の犬を孚養ける事の始より、玉梓が餘怨那身に齎緣りて、當家に祟を做したるよしを、政木狐が親兵衛に、告たりといふ奇談の顚末、幷も靈玉の威德により、玉梓が餘怨解脱して、妙椿狸は卽死しける、そが亡骸の毛の中に、如是畜生發菩提心の八字見れし事、是より先に政木狐は、上野の原にて狐龍に化て、升天の奇特まで、漏すことなく告稟すにぞ、義成主は事每に、驚奇感嘆大かたならず、身邊に侍る三家老、近習も倶に側聞して、駭嘆ぜずといふものなく、耳新しくぞ思ひける。且して義成主は、淸澄に宣ふやう、妖怪賊徒一時に亡びて、當家士峯の泰きに至るは、則犬江親兵衛が、神の冥助を得たるによれり。そも亦汝が敵を壓えて、寛の一字を守るにあらずは、多く士卒を損れて、この全勝を得がたかるべし。瀧田へまゐりて條々を、又詳に稟し上よ、然こそ歡び給ふらめ。先友勝良于、逸時景能們を召べしとて、召さして見參を聽し給へば、杉倉氏元奉りて、卽便仰を傳るやう、武士たる者、時運により、勢ひ竟に究りて、敵の爲に擒に

の外は、首級も右同斷たるべき事、とありければ、清澄卽便高宗逸友們と、共に詮議して、次の日賊徒の、兇暴なるを誅戮しつ、この餘烏合の雜兵の、罪輕きは追放しけり。有恁し程に素藤が、暴虐に堪難て、隣郡へ走りたる夷灊の富農豪民は、漸々にかへり來つ、又那梶野葉門們、諏訪兩社八幡の神主も、稻村よりかへり來て、各職に就きしかば、夷灊の浦波靜にて、舘の山風枝を鳴さず。郡民安堵したりしかば、五七日を歷て清澄は、更に人馬を整へて、友勝良于、逸時景能們と、共に稻村へ凱陣す。然ば素藤、竝に宗徒の兇賊を檻車にうち乘し、旆多羅に昇して、眞先にこれを牽せける、勢ひ苛めしかりければ、巷街は人の山を成して、觀る者處々に充滿たり。恁而次の日に清澄們は、稻村へ歸城して、義成朝臣に見參し、犬江親兵衞が大功の事の趣、竝に政木孝嗣、石龜屋次團太師弟、向水五十三太弟兄の事、及孝嗣に舊緣ありといふ、政木狐が忠告の事の顚末、又荒磯南彌六が弟阿彌七、その二男增松の事、及南彌六が首塚の事、又親兵衞が靈玉をもて、城の地道の石を劈き、兵火に守屋の柱倒れて、獄舍の牖子を摧きしかば、友勝良于は出ることを得て、本膳盆作を虜にしける爲體、又親兵衞が仁の字の靈玉は、獨に大母妙眞許罷出て、船に乘まく思ふ折、忽然と翻返り來て、親兵衞が懷に入りし事、又照文は兩國河原にて、料ず親兵衞に逢ふ事を得て、御書を遞與し仰を傳て、那身は

して、小可と素手吉は、結城へおん伴仕らん。といふを親兵衛聞あへず、否水路こそ汝達の、幇助によりて、便宜を得たれ、陸地の伴は決して要なし。口誼に時の移りやせん、大義にこそ。と勞ひて、刀を引提て身を起せば、孝嗣次團太鮒三も、亦五十三太們に別を告て、倶に船より出てゆくを、禁め難たる五十三太素手吉、乾兒も齊一目送りて、徐に船を返しけり。話分兩頭。爾程に館山の城内には、親兵衛們が結城へとて、立去りて幾程もなく、鮑内葉四郎、詰茂嘉橘、幷に親兵衛が使价に達たる、兩個の夥兵は、稻村よりかへり來て、隨卽荒川淸澄に、下知狀一通と、三家老連署の奉翰を、遞與して首尾を告にけり。是により淸澄は、有功の諸士を聚合て、倶にその書を披見るに、第一箇條には、犬江親兵衛が大功を讃させ給ひて、七犬士招會の使には、照文與四郎あり、親兵衛は、淸澄們と共侶に、稻村へかへり參るべし。倘性急にて立去りなば、その意に儘して赶ふべからずとあり。是より下の三四箇條には、夷灊の凋民賑給の事、又館山の城は、小森高宗田税逸友を、番士の頭人として、士卒五百名を留て守らすべき事、又淸澄は、友勝良于景能と共に、素藤以下、生拘の兇黨を、牽して徐に凱陣すべし。但し礪時願八、平田張盆作、奥利本膳、奥利狼之介の外は、稻村へ牽べからず。誅すべき者はこれを誅し、追放つべき者は追放ちて、民の煩ひなからしめよ。淺木碗九郎、仙田麻嘉六

そは思ひがけなき事也。我們和殿に從ふて、附驥の小功ありけるよしは、國主に忠を盡しゝにあらず、又荒川翁の與にもせず、只義の一字を思ふをもて、和殿の幇助になりにしを、那翁より贈らるゝ、東西ありとても受べからず。和殿この意を猜し給ひて、受て我們に贈り給へば、則和殿の貺物也。しからんには推辭がたかり、いと辱く候。と應て傍を見かへりける。孝嗣かくのごとくなれば、五十三太、次團太も亦辭ひ得ず、歡びを演受戴きて、倶に金をぞ收めける。恁而早飯果しかば、五十三太、素手吉、篙工每は、亦復船を走らして、荒河へ漕入れけるに、現溯る船なれば、勢ひ始のごとくならず。遮莫伏姬神の冥助やありけん、思ひしよりもいと早くて、午にはいまだならざりしに、關宿の邊に來にければ、親兵衞は勒　肚より、圓金十兩拿出して、これを五十三太素手吉に、與へていふやう、こは瑣細なる東西ながら、折周に拿する也。這囘は和郎們が幇助によりて、思ひの隨なる幸ひ多かり。その歡びの寸志のみ。異日船路を安房へ來て、逸時們を訪ひもせば、その折我も再會せん。倘又用ることあらば、必館へ聞え上て、恩賞は功に依らまし。いでや袂を分つべし。といふに五十三太素手吉は、乾兒們も皆額衝承たる、そが中に五十三太は、件の金をうち戴きて、噫慚愧。館山にて、昨日下されしおん米だに、意外過分の造化なるに、今又恁るおん金を、受まつるこそ本意ならね。船は乾兒們に漕しかへ

水路を結城へ赴く、遠近を問試しに、五十三太答て、然候。江戸より結城へ十六里あり。この浦より兩國河までは、既に知せ給ふがごとく、一夜さにして到るべし。遮莫兩國河まで還りては、迂遠くて路に損あり。因て行德浦に赴きて、荒河を溯り、關宿より陸路を走らば、結城まで八里也。荒河に漕入れては、船の找むこと遲かるべけれど、有繫に覺なきにあらねば、這八個の者毎が、腕の涯り掙きて、明日亭午には下總なる、關宿へ漕著てん。最も日長き時候なるに、陸地をいそがせ給ひなば、結城へ到著疑ひなし。といふに親兵衛歡びて、その議尤しかるべし。然らばいそげといふ隨に、篙工們ははやく艪を建列ねて、その通宵漕ぎしかば、果して十六日の曉天に、行德の浦に來にけり。越に姑且船を歇て、篙工們は早飯を炊ぎなどす。登時親兵衞は、孝嗣と次團太們に、淸澄の意を傳へて、贈られたる金二裹を、拿出て分ち薦めていふやう、この金些少にあなれども、窮民賑給の東西にあらず、又我君の賜にもあらず。只那翁が各へ、餞別也、といはれたり。そを那折告知しなば、必や推辭れん。然では言數多くなりて、人の志の空にならめ、と思ふによりて預り置ぬ。むかし唐山前漢の韓信は、その身貧しかりし時、漂母に食を受たるよしは、世俗もをさ〳〵知れり。この金本意にあらずとも、漂母の飯に勝らずや。願ふは收めて明日よりの、路費に用ひ給へかし。と諭すを孝嗣うち听て、

いふ間に逸時景能も、共侶に走來て、浦邊の船まで送んとて、前に立後に携りて、放つべくもあらざりしを、親兵衛聽かず、頭を掉りて、平安無異の折ならば、柳を紈ね水を沃ぐ、送行の義をも致さめ、妖賊俘囚になりぬといふとも、殘燼いまだ冷ならず、願ふは各宿老を、幇助て當郡を理め給へ。私情は今の急務にあらず。と諭して毫も從はず、卒とばかりに孝嗣們に、目を注し袖を拂ひて、飄然として出てゆく程に、孝嗣次團太鮒三は、遽しく淸澄們に、別れの禮を盡しも果ず、はや外面に立出て、後れじとてぞ親兵衛を、赶つゝ倶に從ふたる、事最酷う急迫しさに、淸澄竝に諸士們さへ、唯呆然と目送りけり。恁而犬江親兵衛は、孝嗣次團太師弟を將て、はやく舘山の城を立去て、浦邊を投ていそぐ程に、長き卯月の日は暮果て、望月の影隈もなければ、磯山傳ひ迷ひもせず。既にして船までは、五町許もあるらんと思ふ程に、素手吉が蕉火を振照して、迎に來ぬるに逢ひにけり。登時素手吉は、伙家の船三艘に、恩給の米を分ち載て、剛才かへし遣しぬ。と告てそが儘先に立て、故の浦曲に案内をす。大家他を勞ひて、いよ〳〵路次をいそぎしかば、この夜酉半刻の左側に、齊一船に乘にけり。船には五十三太が心を用ひし、夕饌の設あり。爾程に五十三太は、今戶火盤に柴折り燒きつゝ、乾兒の篙工を給事に逵して、親兵衛以下の客人に、飯を羞などせし程に、親兵衛は五十三太弟兄に、這里より

適愛たき忠魂義胆、誰か九歳の童子といはんや。然までに主意決りしを、今さらに爭何はせん。七犬士を相伴ふて、歸參を今より等んのみ。と應て一霎時退きて、却高宗逸友と、共侶に出て來つ、折乾金十兩と、寫したる三裹を、親兵衛に薦めていふやう、犬江主こは薄義ながら、老拙が餞別なり。この二裹は大全氏と、石龜屋へ贈まく欲す。和殿はさら也、那人々の、戰功稻村へ聞えなば、賞祿莫大なるべきに、おん下知を等遑なければ、只この私情を表するのみ、といふ間に高宗逸友は、その三裹を推拵めて、倶に別を惜みけり。當下親兵衛は三裹を、曲々に受戴きつゝ、一裹を推返して、淸澄に答るやう、美情辱く候へども、晩生はいぬる比、稻村より首途の折、上の賜りしおん金あり、路費匱しくも候はねば、是はこの儘預けまつらん。但し大全と、次團太は浮浪の人也。なれども義士で候へば、こを輒くは受べからず。然とて是さへ返しまつらば、長者の好意を破るに似たり。因て晩生收め措て、折をもて傳達すべし。去向をいそぎ候へば、餘談は異日歸參の折、この歡びをも罄してん。身の暇を給はりね。といと遽しく應ながら、件の十金二裹を、懷に夾め退きて、程よき處に等したる、孝嗣次團太、鯛三に、よしを告げ伴ふて、立去んとせし程に、淸澄高宗逸友は、赶攜りつゝ袂を拕て、いそがるゝは理りなれども、留別の盃を、儀ばかりだも薦めんと欲す。一霎時住り給へかし。と

用あるべし。この義を思ひ給はずや。といふを親兵衛うち聞て、政木石龜們が事はしも、晩生只顧薦めしかども、他們は七犬士に先だちて、仕途に莅まく欲せず。そのいふよしも理りなれば、姑且折を等んのみ。且晩生はいぬる比、七犬士を招會の、仰を稟て、稲村を、退出て逆旅に赴きしに、更に又妖賊對治の、御教書を成下されし、そのおん使蟇崎氏に、料ずも兩國河にて、相逢ふことを得てければ、隨卽征伐を先にして、賊徒を討も夷けたり。遮莫七犬士を招會の、先命はまだ果さぬに、幵を照文與四郎に、任せよとある仰は聞えず。且嚮に呈書をもて、この義を聞え上たるが、そは聞きね、と仰するとも、七犬士們と共侶に、歸參は我宿望也。義兄弟們に先だちて、恩賞を得まく欲せず。意ふに自餘の七犬士は、必結城に來會して、丶大法師の菴に在るべし。本月十六日の法會には、今日より只一日のみ、途遙にして期に値ずとも、その路次までも出迎へて、君命を達すべし。妖賊既に對治せられて、當城無異に民安ければ、晩生玆に在らずとも、賢老正に上に在り。且諸勇士の羽翼多かれば、事缺るべうも候はじ。といひつゝ甕襲の玉を拿出て、清澄にこれを遞與して、この玉は後に又、用ることあらんといへりし、政木狐の誨あり。この義を聞え上給ひね。晩生は一路兒們と、倶に解纜をいそぐべし。願ふは海容あれかし。と詞急迫しく本意を舒て、住るべくもあらざれば、清澄連りに感嘆して、

この餘剾て手に達がたきは、矢場に海へ推墜して、殺したるも候ひき。といふに親兵衛逸時們は、その挊きを讃め勞ひて、よしを清澄に告しかば、清澄則雜兵們に、生口每を受拿して、其本來を責問するに、他們は都て、顚八盆作が隊兵にて、年來虎狼の威を借りて、良民を虐げたる、暴惡分明なりければ、緊しく獄舍に繫せけり。然ば又清澄は、向水五十三太弟兄が、いぬる日親兵衛們を、送來にける事の趣は、既に逸時景能に聞たるに、今又賊徒を生拘りて、多く牽もて獻する。任俠宜く賞すべしとて、五十三太素手吉乾兒們に、賞米五十苞、拿するよしを言示して、二十餘疋の馬に駝して、その浦邊まで遣しければ、五十三太們は歡び拜して、罷り出んとせし折に、親兵衛急に喚返して、我は又投方あれば、復汝達が船に乘りて、舊路へ還んと欲す。恩給の米はしも、乾兒們が船に分ち載て、はやく家路へかへし遣りね。汝達はなほ船を歇て、必よ我を等ねかし。といふに五十三太素手吉們は、こゝろ得果てぞ退出ける。當下又親兵衛は、孝嗣次團太と商量しつゝ、却清澄に別を告て、立去んとていそぎしを、清澄制めて談ずるやう、嚮にもいひしことながら、和殿は這囘も大功あるを、舘の見參に入れずして、那地へとてか放ち遣んや。且政木生は、賊の頭人、淺木碗九郞を擊捕て、素藤に索を掛たる、その功和殿の亞にあり。及次團太鮒三も、俱に是軍功あり。和殿稻村へ作ふて、聞え上なば重

自祿を思ふて、民を意とせず、事に愆なからん與に、分量授與に時日移りて、六日の菖蒲に做る事多きは、和漢同日の通病にて、識者の浩嘆こゝに在り。這城附の米錢こそ、おん下知に依らずして、施す事はかたくもあらめ。その餘は都て素藤が、民を掠めて積し東西也。今それをしも散さずは、良民家に還るとも、何をもて明日よりの、露の命を繋ぐべき。この義を以罪を得ば、獨仁が上にあらん。願ふは賢老、轍鮒の危窮を救ふて上の仁政を、普く民に知しめ給へ。と詞を盡して諫めしかば、清澄言下に感服して、遂にその議に儘しつゝ、良于逸時景能に、當時城附の米穀金錢の、多寡を問ひ、勘辨して、倉廩をうち開き、餘財餘分の米穀をもて、賑給遺なくものせしかば、阿彌七幷に良民們は、天に歡び地に喜びて、擔ひ連てぞかへりゆく、舊所に安堵したりける。然ば又親兵衞は、是等の事に管づらひて、憶ず逗留三日に及びて、四月十五日になるものから、けふも倘事の多くて、退くことを得ざりしに、この日晡時の左側に、向水五十三太と、枝獨鈷素手吉は、生拘の賊徒二十餘名を、乾兒們に牽しつゝ、俱に舘山の城に來て、親兵衞、幷に逸時景能に報るやう、小可每は約束のごとく、船を那這の浦曲に歇て、犬江主を等奉りしに、大前の夜より、今日までも、這城頽の落人の、津を求る者多かりければ、欺きて船に乘せて、毆伏せて搦捕りしは、二十餘名候也。

が、親兵衞に從ひ來て、軍功ありし事の顚末、その來歷さへ寫し載て、准備亟に整ひしかば、家老隷の番士なりける、那鮠內葉四郎も、這回は淸澄に從ふて、陣中に在るをもて、隨卽件の葉四郎と、詰茂嘉橘に使を課て、先稻村へとて遣すに、親兵衞も亦手自、呈書一通を書寫けて、昨日照文に借用したる、兩個の夥兵を使に達して、倶に君所へぞまゐらせける。爾程に淸澄は、殿臺を守らしたる、士卒を城に召聚へて、那里に要なき陣營は、毀ちて神領を掃除せしめ、且乙接村の阿彌七們、及素藤に駈入られたる、城內の良民と、女每を出し遣りて、各 家に還さんとて、猛可に士卒を部して、是等の所要をいそがするに、高宗逸友頭人たり、とばかりにして窮民に、賑給の義はなかりしを、親兵衞悕へず淸澄に、勸めて施行をいそぎしに、淸澄頭をうち掉りて、その義は愚老も豫より、心屬たる事ながら、曩に素藤們を追放の折、這舘山の城はしも、和殿をもて城主になされ、後には亦番士を居れて、軍要金あり、粮米多かり。皆是上のおん東西なるを、素藤が復叛くに及びて、他が掠奪したりしを、いまだおん下知に依らずして、窮民也とて賑しなば、罪得がましき所行ならずや。といふを親兵衞推返して、晚生 黃口き孺子として、憖いはゞ烏滸なれども、思ふていはずは、不忠に似たり。抑 歲に豐凶あり、國に治亂なきことを得ず。民の凍餓を救せ給ふは、是仁君の善政なるに、开を 奉 る吏人は、

の畫巻に見えたり）开を只齡と職分の、等否をもて序次を倣さば、誰か又命を惜まで、各主君のおん與に、後の戰功を勵んや。愚老は賊徒誅伐の、仰を稟たれども寸功なし。因て重て館より、和殿に征伐を命ぜられて、立地に大功あり。恁れば主客地を易て、今日討隊の大將は、犬江卽和殿にて、愚老は當に副將たるべし。恁れば席を讓るとも、和殿に于て非禮にあらず。誰か僭稱としもいはんや。然るを謙退せられては、殆愚老を羞殺す。いかで我意に儘し給へ。といふを親兵衛承引ず、なほ云云と論じつゝ、爭ひ果しなかりしかば、高宗逸友雙方を、推制め相和解て、犬江氏の謹愼は、臣たる者の本たるべく、荒川主の謙遜辭讓は、世の家宰の龜鑑とすべし。この義我們證人也。枉て且同席にて、はやく事を議し給へ。益なき辭讓に時を移さば、不便にこそ候はめ。といふに友勝良于們、及逸時も景能も、共侶に勸めしかば、親兵衛竟に已ことを得ず、只得淸澄と共に上坐に在り。是よりして高宗逸友、有功の諸士次第を追ふて、左右兩側に羅列れたり。但孝嗣と次團太們は、家臣の列にあらざれば、故意遠侍に在り。當下荒川淸澄は、親兵衛と商議して、稻村瀧田の兩大城へ、妖賊伏誅の趣を、はやく聞え上んとて、二三士に筆を把らして、素藤幷に生口の、賊徒の姓名を具に注し、又一通には、犬江親兵衛が大功を首にて、友勝良于、高宗逸友、景能逸時們が忠戰、又政木大全孝嗣と、次團太舩

に、知れる者ありて答て云やう、この塚は野幕沙雁太が、亡骸を瘞めしなめり、と賊徒は思ひ候ひしかど、實は猜したまふごとく、軻遇八が悄地にものせし、荒磯が塚に候。といふに親兵衛點頭て、阿彌七を召近づけ、こは是汝が兄の塚也、宜く是を祭るべし。我も廻向をすべけれとて、先阿彌七に拜まして、然而清澄と共侶に、揖して目禮してければ、高宗以下の士卒はさら也、次團太鯽三に至るまで、倶にその塚にうち朝ひて、合掌念佛せざるもなければ、阿彌七は只辱さに、坐に感涙の找むを覺ず、其頭に侍りし良民さへ、咸感激して鼻うち擤れ、老も弱も涯りあれば、竟に逝く身を忠義の爲に、恁は命を捐てこそ、榮を兒孫に貽すめれ。死映ありと思ひけり。恁而荒川清澄は、親兵衛と共侶に、有功の諸士を領て、城の正廳に集會す。登時清澄は、親兵衛に席を讓んとて、叮寧に請找めしを、親兵衛敢從はず、詞急迫しく論ずるやう、燕毛をもて序ずれば、我は九歲の總角にて、荒川主は大父に等し。又尊卑をもていふときは、荒川主は討隊の大將、卽館の御名代にて、我は臨時の副將也。然るを小功あればとて、席を犯さば、宿老を、獨蔑如に做すのみならず、是君侯へ大不敬、僭稱是より甚しきはなし。決して從ふべからず。と推辭むを清澄推禁めて、理論は寔に然ることながら、軍旅の序次は非常にて、功ある者は上に在り、功なき者は下に在ること、那剛臆の坐の如し。(後三年合戰

聞知ることを得たりとなん。介殿讒死し給ひしより、先祖は乙接村へ退隱して、子孫小可毎に至るまで、十四五世にやなり候はめ。大父の時兵火の爲に、家系燒亡候ひしかば、具に知るよし候はず。といふを親兵衛うち听て、そは得がたき異聞也。廣常主の別館に、脫路あるを嫌ひしは、我義兄弟犬山道節が、火遁の術書を燔棄しと、日を同うして語るべし。そも今阿彌七微りせば、我疑ひを解くよしあらんや。寔に珍重々々。と只顧嘆賞したりしかば、清澄們も亦歡び感じて、神佛冥助の不可思議を畏みたる。そが中に清澄は、親兵衛に亦恁々と、阿彌七が素生、その子の事さへ、聞たる隨に解示せば、親兵衛屢點頭て、現那兄にして這弟あり。南彌六は義俠をもて、館のおん與に戰歿したるに、後なからんは遺恨の事也。然るを豫任增松を、養嗣の約束甚妙也。宿老（清澄をいふ）凱陣し給はゞ、その義を聞え上給ひね。必恩賞あるべけれ。といはれて清澄仔細に及ばず、そはこゝろ得て候也。巡檢は且閣きて、妖賊伏誅の趣の、注進をいそぐべし。這方へ來ませ。とうち連立て、本城に赴く程に、友勝良于が籠置れしといふ、獄舍は既に燒亡たる、幷が邊より遠からぬ、走馬場の藪蔭に、新に壤を小高く裝て、雛松を栽たる土饅頭有けり。親兵衛これを見かへりて、那海松芽軻遇八が、悄地に埋めたりといひし、南彌六が首塚は、玆なるべし、と思ひしかば、清澄們を喚住めて、城の良民に尋る

方僅親兵衞が問に及びて、おそる〳〵報るやう、小可が曾祖の時まで、這夷灊郡なる、普善の乙接の、村長にて候ひしに、大父の時より家衰へて、寒民に做り候へども、些ばかりの舊記も殘り、家の口碑に、傳へたることも候ひしを、目今おん尋によりて、思ひ出候ひき。抑この舘山の城は、昔上總介平廣常主の、別舘にて候ひしに、有一年這頭の、平山より山蜃脫て、今の副門の外面なる、岡より出て海に入りぬ。その路約莫二三町、おのづから洞に做りければ、城内より悄出る、活路に宜しかるべしとて、當時の家臣們愛憐びしを、單廣常主は妙とせず、一二の老黨に宣ふやう、世に武士たる者の、敵に攻られて籠城せんに、命運其首に窮らば、潔く戰歿すべし。然るを豫より城内に、活路を爲れるは、命を免れん、と欲するのみの准備にして、躬方の出る便あれば、敵も亦入る便あり。出沒素より安定ならぬ、山賊の住る洞などこそ、然る准備はありもせめ、武士の家には要なき者也。なれども幷を悉、穿崩して埋めなば、无益の事に民を勞して、雜費も亦尠からじ。這四下の岡の邊には、大きなる石多かれば、殊に勝れしを擇み曳して、前後の洞口を塞ぐべし。この義世に聞えなば、人の疑ひを惹もやせん。夫役の農夫を誡めて、祕よ、風聲すべからず、と叮寧に命じ給ひしかば、一二の老黨と近習の外は、この意を知ず候ひしに、小可が遠祖は、當時介殿（上總介廣常をいふ）の近習也ければ、

前後の石門裂開けて、鬻に出入の自在なりしは、我靈玉の應驗なれども、畢竟役優婆塞と、伏姫神の冥助ならずは、這石又舊の如く、はやく一片に合んことは、いよ／＼あるべうも候はず。倘裂れたる儘にてあらば、賊徒こゝより脱出て、網を漏るゝも多からんを、然る便りを得ざりしは、則御方の大利にて、神助冥福ます／＼奇也。世に復得易き事ならんや。といふに大家、然也と應て、齊一感嘆したりける。登時親兵衛又いふやう、這活路の事はしも、政木狐の、忠告にて、昔の城主が作りしを、後に這巨石をもて、塞ぎしよしは聞知りたれども、何等の故に塞ぎしや、この義を問も漏しにければ、今さら遺憾尠からず。聞傳へたる者もやあるとて、隨從の雜兵們を、召近づけて尋るに、知れりといふ者なかりけり。しかるに荒磯南彌六が、弟阿彌七は、いぬる夜南彌六が、舘山の城に入りて、素藤に痍を負して、那身は出來介共侶に、戰歿の事の風聲を、はやくも傳へ聞しより、素藤が祟を怕れて、家を棄宅眷を倶し、殿臺なる、寄隊の陣營に身を寓て、よしを告て愛顧を請しかば、清澄肇て、南彌六に、一個の弟ある事と、阿彌七が二男增松を、南彌六が養嗣にせんとて、約束したる事までも、詳に聞知りて、仔細に及ばず、妻をも子をも、そが儘陣營に留めて扶持したれば、この日阿彌七は、雜兵にうち交り、清澄が隊に從ふて、倶に城内に入ることを得て、作當の中に在り。件の活路の濫觴を、

そが儘咱們が手に残りしを、方纔拿降して開き見けるに、果して件の勾玉あり。是見給へ。と懐より、玉を出しつ由來を解くこと、いと叮嚀也ければ、清澄を首にて、高宗逸友、逸時景能、友勝良于、いへばさら也。又次團太も鯽三も、兩個の夥兵、この餘の士卒も、咸愕然と奇に驚き、靈異に感ぜざるはなく、事皆犬江親兵衛が、神助智慧の恁までに、世にも人にも捷れしを、亦今さらの事に覺て、齊一嘆賞したりしかば、先より緊しく細められて、夥兵に索を拿られたる、素藤は驚き羞て、頭を低てよくも見ず。又十一個の生口們は、皆珠數繫に括られて、半死半生なりければ、只今妙椿が爲體を、見たるもあり、見ざるもありしに、這里に在らざる寄隊の士卒も、及願八們の兇黨も、後にぞ隈なく聞知りける。然ば又親兵衛は、高宗逸友、友勝良于們に、再會の口誼を陳て、その軍功を讃ければ、良于と友勝は、兵火の奇特に獄舍を出たる、事恁々と告などす。當下清澄は又親兵衛に、孝嗣が功をおもはで、敵の首を拿ざりし、心操の愛たきよしと、开を次團太がいと惜みて、耳を煞て表標にしたる、その用心の便利なりしを、云云と報知して、孰も要ある毎也。就中政木生は、犬士の亞流といひつべし。寔に得がたし得がたし。と只顧賞讃したりしかば、親兵衛滿面うち笑れて、然也。今番も亦神と人との、資助を得たるはそれのみならで、這城内には昔より、人の知らざる活路ありしを、政木老媼に告られ

孚みける、安房の富山の牝狸なれば、那毒婦玉梓が、餘怨その身に殘るをもて、國主御父子を恨みまつりて、素藤を哄誘し、遂に兩度の兵亂を、起して今日に至れる也。その故は箇樣々々、と那玉梓が怨靈は、昔年八房の犬と倶に、役行者の利益にて、既に解脱を得たれども、當初這狸兒にも、貪縁たる他が餘怨は、尚耗ずして在りけるよしを、解示して又いふやう、是に由て思惟るに、今この牝狸の背毛の、燒縮れしは、我靈玉の、光に撲れし跡にして、自然と文字になれるならん。その所以を什麼と推すに、昔この八箇の靈玉に、如是畜生、云々の文句見れしより、八房の犬は佛果を得て、後に又仁義八行の、文字に變りぬ、と傳へ聞しに、この牝狸も、靈玉の、光りに撲れ、死するに及びて、又靈玉の初の文句、如是畜生發菩提心の、八字を玆に示されしは、狸兒と倶に玉梓が、餘怨この折解脱して、菩提心に至れるを、明々地に知しめ給ふ、是も亦只役行者の、神變不思議の大利益、奇く貴く、惶からずや。又この狸兒が勍風を、起して寄隊を破りしは、甕襲の玉を持れば也。抑件の奇玉は、往古垂仁天皇のおん時、丹波國、桑田郡の人民也ける、甕襲の家に飼ける犬の、名を足往と喚做たるが、咋殺しゝ貉兒の腹より、出ける八尺瓊の勾玉也といふ。この義も亦政木狐に、聞知ることを得たるのみ。いまだ見るよしあらざりしに、嚮に妙椿を捉へし折、那身は裳脱て、樓より滾落ち、衣と項掛の護身囊は、

然る褒賞に預らんや。妖賊一時に夷げられしは、當館の御盛德、幷に賢老諸勇臣の、寛を守り功を急がで、事のこゝに及べる也。那見給ひね、素藤は、晩生樓上より投降して、政木生に搦捕したり。又那妖尼妙椿は、我靈玉の光に撲れて、樓より滾落しに、那地ゆきけん見えずなりぬ。倘那奴を走らしなば、又妖孽を遺しやせん、と思ふ心の安からねば、夥兵們に吩咐て、政木生さへ共侶に、庭面を幾番歟、漏す隈なく渉獵し程に、憶ずも時移りて、和老に對面遲滯に及びぬ。しかるに世の常言に、燈臺反て下闇し、といへるに恰似たる事あり。といひつゝ簷下に大きやかなる、石の淨手盤あるを指し示して、那妖尼奴は樓より、是この內へ陷りて、死して本形を見はしゝに、底深ければ心屬かで、樹の蔭草の裡をのみ、幾番となく索ねつゝ、可惜暇を費して、方僅憶りなく見出したり。いで〳〵。といひつゝも、遽しく淨手盤の、頭に立より手をさし入れて、項を抓みて引提出すを、大家ひとしくうち見れば、最大きなる牝狸の、既に死したるにてぞ有ける。事の奇怪は是のみならで、そが背の毛は焦縮れて、模樣譬ば燒畫の像く、如是畜生發菩提心といふ、八箇字の見れて、いと鮮明に讀れしかば、人々訝る其が中に、親兵衛も亦這八字を、こゝに肇て見るものから、然ばかり驚く氣色なく、淸澄們にうち向ひて、晩生昨日上野の原にて、政木老嫗に聞ることとあり。件の妖尼妙椿は、むかし八房の犬を

們を赦免の折、舊職に復されしに、素藤が又叛きて、重て這城に據るに及びて、亦逆賊に從ふて、順逆向背の理を知らず、最愚魯なる者なれども、天性婦人の仁ありて、よく罪囚を憐みたり。この義は我們獄舍に在りて、甘じ思ひし所也。といふに清澄點頭て、現軻遇八がなす所、御方の與にせざれども、嚮には南彌六が首級を擊め、良民竝に和殿們に、慘く當らざりしは、殊勝の事也。獄卒們も共侶に、頭項を續し得させんずとて、縲絏の索を解しつゝ、罷立ね。と饒されて、軻遇八は獄卒と、倶に額を衝き歡び承て、うち連立てぞ退りける。軻遇八が事、この下に話なし。是より先に清澄們は、親兵衛が又素藤を、生拘りたりと聞知りて、歡びおちゐて對面をいそがず、先殘黨を追伐して、城內殛に平定しければ、士卒に四門を戍らして、親兵衛を等たるに、時移るまで出て來ず。今もなほ書院の庭に、在りとのみ聞えしかば、清澄們便高宗逸友、逸時景能、友勝良于們の六勇士と倶に、次團太鄰三を從へて、みづから其里に赴きて、親兵衛に對面し、且孝嗣が功を譽て、妖賊伏誅の歡びを舒などす。當下清澄がいふやうは、犬江主、前言違はず、はやく玉歩を旋らして、復素藤を生拘り給ひし、武衛勇略、今昔無雙、獨素藤のみならず、賊徒も遺なく討捕られ、做す事なかりし愚老さへ、聊面を起すに似たるは、皆是和殿の賜もの也。寔に賀すべし／＼。といふを親兵衛聞あへず、晩生何等の德ありて、

り。是天誅にあらずや。といふに大家有理と悟りて、倶に嘆息したりける。浩處に、這城内なる良民們は、折を得たり、と相歡びて、或は部して兵火をうち滅し、或は落る賊徒を捉へて、寄隊へ獻ずる生口のそが中に、素藤が囚牢司海松芽軻遇八と、その手の獄卒七八名あり。清澄隨卽軻遇八を牽出さして、嚮に野幕（野幕又名幕に作る、などのと相通なれば也。）沙雁太が首をもて、南彌六が首級に代たる、事情を尋問ふに、軻遇八答て、然候。小可は故城主、小鞠谷如滿が時より仕たる、囚牢預で候ひしに、蟇田が僭立に及びて、勢ひ仕ざることを得ず。然ども職分卑くて、性も亦愚なれば、那人の兇暴奢侈に、干りたる事候はず。常に寃屈の罪囚を、悄地に憐み候ひしに、往日南彌六が、首に靈ありければ、後の祟の害怕しさに、面貌聊相似たる、躬方の戰歿兒沙雁太の、首をもて代候ひしは、國主のおん爲を、思ひしに候はず、素より蟇田を辱く、思ふ德も候はねば、只那死靈を鎭ん與に、南彌六が首はしも、悄地に獄舍の北の方、恁々の地に埋葬して、表に小松を栽候ひき。倘疑しく思召さば、發して檢せ。相違あるべうも候はず。といへば故老の莊客們も、爲に清澄に告るやう、蟇田が跋扈したるより、罪なき民を虐げ捕へて、獄舍に繫ぐこと多かりしを、軻遇八悄地に憐愍て、答を緩くし候ひき。といふを友勝良于は、然也と應て共侶に、清澄に報るやう、這軻遇八はいぬる比、素藤

吉が事、その身の來路恁々と、告て先非をうち陪話れば、又友勝と良于は、不思議に獄舍を脱出たる、兵火の奇特を訴る、異聞に清澄駭嘆じて、和殿兩個の事はしも、先とく拯ひ出さん、と思ひつゝ來にけるに、みづからはやく獄舍を出しは、必是伏姫神の、冥助なること疑ひなし。倘しからずは戸を破らるゝ、幸ひはあらずして、和殿們は獄舍と共に、灰燼になるべからん。今さら思へば御方の得失、皆是神慮に依るもの歟。然ば苫屋田税の前愆も、今番の軍功鮮小ならねば、償ふに足ぬべし。又這次團太鉀三は、是北越の市人也とも、義俠は南彌六出來介と伯仲す。況犬士に緣あり功あり。異日恩賞なからずや。と慰められて次團太師弟が、不勝の歡びいへばさら也。然ば逸時景能も、又友勝も良于も、面を起す心地して、本意ある言ぞと思ひける。有恁し程に雜兵們は、耳を煞れし賊徒の首を、索て十四五級もて來つゝ、軈て實檢に入れけるに、孰も名ある兇黨なるが、果して碗九郎の、首級も幵が中に在り。何人の所爲なりけん、燒殘りたる柴垣の、重牆の青竹を、左の耳より右の耳まで、刺串きて在りしかば、清澄憶はず嗟嘆して、這淺木碗九郎嘉倶は、故城主小鞠谷如滿が、譜第の家臣なりけるに、その主如滿が、素藤に謀られて、終を弑逆に拿りし折、奥利本膳們と共侶に、讐に降りて恥とせず、媚を獻じ逆を資けて、重用せられし惡報覿面、その死に至りて、竹槍の、刑に等しき冥罰あ

傷られたる、刀瘡いまだ愈ざりければ、逃んとしつゝ後れしを、逸時と景能が、相撃にして首を捕りぬ。又次團太と鮒三も、好敵多く撃捕りけり。この餘浦安友勝と、登桐山八が、平田張盆作、奥利本膳を、生拘りける事の趣は、既に上にいへるが如し。落城の後清澄は、是等の實檢をしてけるに、單淺木碗九郎嘉倶のみ、伏誅分明ならざれば、躬方の士卒に尋問ども、これを知る者なかりしに、石龜屋次團太がいふやう、その碗九郎とか、喚做たる賊の頭人は、犬江主に伴はれたる、孝嗣主に撃れしならん。那人さまは始より、好敵なるも斬棄にして、首級を捕ることなかりしかば、小可見つゝ惜く思ひて、しかるべきその賊徒の首級は、後の標識にせん爲に、鮒三に吩付て、片耳を殺し候ひき。索ね給はゞ分明ならん。といふを清澄うち听て、その用心を嘆賞しつゝ、隨卽雜兵幾名に敷、下知して件の耳なき首級を、索ねてもて來よとて遣しつ、却次團太に孝嗣が、來歷素生を問ひしかば、次團太は親兵衛に、听たる趣箇樣箇樣と、政木狐の事までも、その崖略を報ぐるにぞ、清澄いよ〳〵感嘆して、しからんには那人は、寔に義士也、勇者也。不德ながらも故主の爲に、はやく功名を貪らざるは、今の世に得易からず。因ておもふに汝達も、犬江に由緣あるならん。といふを逸時景能は、聞つゝ恥たる面色にて、嚮に水路を來ぬる折、親兵衛に解示されし、他們師弟の義俠の顚末、及五十三太素手

ず索を掛さしけり。爾程に親兵衞は、當るに儘して賊力士們を、投落すこと既に八名、又只兩個殘りしを、左右に抱く兩羽締、雪の太山に若鷹の、雀を抓む風情あり。靄稍霽るゝ朝日影、東向の縁頬に、照添ふ堆朱の欄干に、雙脚をはやく踏掛て、閃りと飛たる修煉の剽姚、軈て地上に降立て、抱きし兩個の賊力士を、左右へ撲地投棄れば、兩個の夥兵が受拿て、押へて索を掛にけり。登時政木孝嗣は、遽しく親兵衞を、迎へて早即の大功を、云云と祝すれば、親兵衞聞つゝ含笑て、然也。素藤を捉へし折、愁に餘賊あれば、已ことを得ず擲ちたれども、そが儘殺さば嘛らず。然ばとて緩く投なば、身を起して必逃ん。いかにせまし、と思ひ難しに、折よく和殿が來ませしかば、活けず殺さず投渡したり。只心許なきは、那妖尼の往方也。正可に我靈玉の、光に撲れたりければ、走り果べうは思はねども、這頭に見えぬは、又奇也。兵毎樹の陰籬笆の隈を、索ねよかし。と吩咐れば、承りぬ。と應つゝ、迭代に渉獵れども、那地行けん妙椿が、在處はいまだ知れざりけり。然ば又寄隊の大將、荒川兵庫助清澄は、小森但一郎高宗と、二隊にわかれて攻入りしより、逸時景能、友勝良于們に、力を勠したりければ、前後よりさし挾て、敵を撃つこと數百に及べり。そが中に賊の頭人、礪時願八業當は、小森高宗の隊に捕捕られ、奥利狼之介出高は、田税逸友に虜にせられ、仙駄厩嘉六は、曩に南彌六に


妙椿を對治
親兵衛
二たび素藤
を擒ふす
妙ちん



高く振抗て、外面に立つ賊力士の、面を蒞て擲てば、力士も撲れて仰ざまに、觔斗りつ、素藤と、倶に欄干をうち越て、投落さるゝこと一丈あまり、檐下の松を劈きて、春日容なる石燈籠の、邊へ撞と墜てンげり。有恁る折から孝嗣が、這奥庭に來にけるを、親兵衛上よりはやく見て、政木主々々、その一人は素藤なり、生拘給へ。と喚れば、孝嗣歡び、こゝろ得たり。と應も果ず走り蒐りて、起んと蠢く素藤を、押て毫も動せず、臂近なりける車井の、甀索を掖寄せて、最も緊しく結栶りけり。然ば又賊力士們は、犬江の二字を聞しより、皆十二分の鬼胎を抱きて、近づく者はなかりしに、剛才素藤と一個の力士が、手毬の像く庭面へ、投落されしに舌を掉ふて、いかで逃んと欲すれども、庭にも亦孝嗣在れば、其隊の多寡を料難て、進退既に谷るものから、非如降參すればとて、這囘は饒されがたかるべし。鷸蚌の腐れ師蒐りにして、投殺されなば共侶に、と思ふ迭の似而非猛者心を、一緒に裒て八方より、咄と噇て群立蒐るを、親兵衛左右に引受て、搔抓ては投降す、嵐に背門の唉栗子の、苛毛武具も卷石に、鑽れて發と火花散る、無常迅速、俯累りて、死生も知ず平張けり。浩處に殿臺へ、使价に達たる兩個の夥兵は、清澄の隊に從ふて、這城内にうち入りしかば、親兵衛に會まく思ひて、尋ねてこゝに來にければ、孝嗣、やよと喚近著て、投降さるゝ賊力士們の、尙半死半生なるも、漏さ

なきもの也。這那共に覺期をせよ。と詞激しく罵れば、素藤怺へず拔撃に、向臑斫んと閃めかす、刃を親兵衛踏落して、逃んとしける項髪を、左手に抓み引寄する、そが程に妙椿は、襟の裙より拔出て、雨戸障子を推倒す、迅速恰拂ふが似く、身を免れて出んとせしを、親兵衛透さず素藤を、そが儘撐と投伏て、走り蒐りつ妙椿が、肩尖丁と拏留て、彌疾出す靈玉の、護身嚢を刺翳せば、至寶の靈驗忽たず、颯と濆走る、光に撲れし妙椿は、苦と叫ぶ、聲共侶に閨衣は、そが儘親兵衛が手に殘りて、那身は裳脫て樓上より、庭へ閃りと墜る折、と見れば妙椿が身の内より、一朶の黑氣涌出して、鬼燐に似たる青光あり、見る間に西へ靡きつゝ、消て跡なくなりにけり。爾程に素藤は、痛楚を忍び身を起して、宿直兵每はや逃たる歟。疾出て我を資けずや。と喚りながら親兵衛に、曲彔枕兒を擲々、逃るを親兵衛、逃さじとて、走り蒐れる勢ひに、素藤今は已ことを得ず、身を振返して組んとす。有恁りし程に、素藤が、臥房を衛る夜勤の力士們、昨夜も這樓上の三之間の、緣頬に臥たるが、物の响に驚き覺て、走り出來る十名許、或は十手鎖鉤、或は擊丸捕索を、各手々に携て、推捕卷て親兵衛を、搦捕んと閧くを、親兵衛佐と疾視て、若們目屎に閉られて、見れども這個犬江仁を、相遺れたる歟、知ざる歟。と鼻に指さす勇士の宏言、程しもあらず素藤が、組むを組して無手と捉る、帶の締塊搔抓て、肩より

れば、縦一時に戸障子を、蹴放つとても、翅なき身の、脱れ果べき路を得ざれば、刀の柄に手を掛て、寄せば斫ん、と疾視たり。又妙椿は親兵衛を、見しより襪を頭に被ぎて、狩場の野鶏の草に隠れ、影に驚く束鮒の、藻に籠れるに異ならず、戰く隨に錦綉の夜被の、脊筋波打つ生死の、海には息も吻あへぬ、阿瞞の身なれど、名號の六字も出ず、九字も印得ず、斷りしは珠數歟、術なさに、縮むは手さへ、脚なき蟹の、入る穴欲しと思ふめる、胸の機關糸絶て、搾くよしもなかりしを、親兵衛爾こそと冷笑ひて、やをれ素藤、はや忘れし歟。曩に國主の仁慈をもて、若們を恩赦の折、我亦以後を誡めて、倘復叛くことあらば、人手を借らず、我身單にて、誅戮すべし、と期を推たるに、その義を甘んじ承ながら、那妖尼奴に哄誘され、再叛忤逆の小利を得て、城に據ること纔に十餘日、天罰踵を旋さず、今又我に捉へらる、みづから招きし悪報の、速なるを思はずや。やをれ妖尼奴も這里へ出よ。若は老狸の精として、非理の怨に邪術を憑みて、反間の幻術、魔風の呪法、聊驗あるをもて、我明君を曇らして、謀りて我を遠離しより、一旦寄隊を撃破りて、桀を資て功ありけり、と思ひ誇りしは夢の間にて、靈玉はやく我身に復りぬ。若不測の邪術をもて、賢君虞臣を欺きたりとも、我靈玉を欺き得て、今よく我に敵せんや。人畜その差あるものから、若們は皆人面獸心、假に形貌を裝ふのみ、頭顱は既に

頭の殿のおん臥房は、這樓上にて侍るかし。天助尼公も那里に在せり。昨夜も亦おん酒宴に、酷く更闌侍りしかば、いまだ覺させ給はざるらめ。賤妾們は夷齋の民の、宅眷にて侍りしを、理なくも召拏られて、給事し侍れども、逆謀には干らず。いかで饒させ給ひねかし。といふを親兵衞うち听て、好々その義もこゝろ得たり。今一霎時音なせそ。いで〳〵。といひつゝも、階子傳ひに偸歩しつゝ、登る樓の第一の間は、素藤が臥房にて、次の間あり、三之間あり。この朝素藤は、昨夜も丑三過る時候、醉て臥房に入りしより、妙椿と枕を並べて、天の明たるを知らざりしに、妙椿急に搖驚して、やよ相公はやく覺給へ。城内に失火あるらむ、煙這方へ吹靡る歟、衆人噪ぐ聲すなり。意ふに寄隊に襲れて、攻破らるゝにぞあらんずらめ。やよ喃喃ゝと喚覺せば、素藤岸破と身を起して、そは安からぬ事になん。久しく敵の寄せざれば、火を放られし歟、しからずば、手失をやしいだしけん。といひつゝ掌拍鳴らして、誰か在る、疾來よ。と喚べども應の聞えねば、心いよ〳〵焦燥て、遽しく枕方なる、腰刀を搔拏て、身を起さんとせし程に、階子を登り來ぬる者あり。素藤はやく聲を被て、其首へ來ぬるは、誰そやと問ふ、詞もいまだ得果ぬ程に、屛風を托地と推開くを、と見れば是別人ならず、犬江親兵衞なりければ、素藤叶嗟、と駭怕れて、逃躱れんと欲すれども、外面は皆緣頰にて、欄干高く連りた

友勝良于孝嗣們、竝に次團太餌三は、思ひの隨に殺靡けたる、大刀風劇しかりければ、名ある賊の頭人を、或は撃捕り、或は生拘り、降參したる城の良民を、前後に立し相從へて、逃るを赶稠め推包て、漏さず緊しく攻たりける。丌が中に孝嗣は、單後堂へうち入たる、親兵衛が幇助にならん、と思へば敵を赶棄て、窅くも索ゆく程に、素藤が近習兩三名、既に寄隊のうち入りしを、知るといへども、恁々と、主に報るに遑なければ、身を脫れんとて出て來ぬるを、孝嗣得たり、と走り蒐りて、矢場に二人を斫仆し、又一人を生拘りて、隨卽此を鄕導に牽つゝ、樹粒間ある奧庭の、檜の兩折戸を蹴開きて、書院の邊にうち入りけり。是より先に犬江親兵衛は、案内知たる城なれば、只素藤と妙椿を、走らせじとのみ思ふをもて、敢餘賊に掛念せず、躬方にはなれて逸早く、身單後堂へ赴きて、素藤を索るに、奧まりたる樓の、下に夜勤の女房の、兩三個臥たるあり、起出んとせし程に、今親兵衛が來ぬるを見て、吐嗟とばかり駭きて、聲を立んと欲するに、皆戰れて齒も合ず。親兵衛他們を佶と睨へて、若們毫も聲を立なば、片端より皆首を刎ん。我は犬江親兵衛也。素藤妙椿は、那里に在る、疾告知せよ、甚麽ぞや。と急逼しく問れて、阿とばかりに、怕れて速には答難たる、そが中に、年歲三十あまりの女あり。やうやく頭を擡げしかども、親兵衛を瞻仰ること得ならず、僅に上に指さして、

ち聞しより胆落て、防戰んと思ふ擬勢なければ、只活路を求むる與に、同士撃をして疵を蒙り、或は城内に馳入られたる、夷灊の良民に生拘られて、寄隊へ牽るゝ者も多く、なほ残れる賊兵們は、乗んと思ふ塀を向上て、いかで命を免れん、と欲する者のみ多かりけり。爾程に、殿臺なる寄隊の陣營には、荒川兵庫助清澄、竝に小森但一郎高宗、田税力助逸友們、この朝憶りもなく、犬江親兵衛が諜状を得て、歡ぶこと大かたならず、時を移さず士卒を率て、舘山へ推寄する程に、忽地敵の城内に火光發りて、煙中天に冲りしかば、清澄早くこれを相て、原來犬江親兵衛們は、既に城内にうち入りけん、暗號の煙を颺たるぞ。兵毎續け。といふ隨に、一千餘騎を二隊に分ちて、正門へは清澄逸友、七百餘騎にて推寄來つ、又副門へは、小森高宗を大將にて、五六百の逞兵を、授て同時に攻伐しむ。勢ひ宛脱兎の像く、馬を走らし、塵埃を蹴起て、はやく近づく折から、城内なる賊兵們は、徒大額に崩立て、或は正門、或は副門、便宜に儘し城戸を開きて、脱れ去らんとせし外面には、攻寄來ぬる寄隊の軍兵、鬨の聲を颺、箭を蜚して、透間もあらせず、稠入りければ、賊徒は進退谷りて、城戸を閉んと欲すれば、後なる躬方に拄えられて、門扉を動すべくもあらず。副門も亦かくの如く、前後の敵に夾れて、撃るゝ者その數を知らず、屍は、伏累りて丘を做し、鮮血は、流れて泉に似たり、有恁し程に、逸時景能、

けるを、兩個の勇士は奮然と、走り蒐れる鎗下に、件の二賊を突伏せて、その武具を剝ぎ、大刀を奪ふて、迭に手ばやく身を固めつゝ、御方の勇士と一緒に做りて、名ある賊徒を撃んとて、いよ／＼拵む前面より、賊兵約莫十名許、寄隊に赶れて來ぬるあり。朝霧の霽間より、と見ればその隊の頭人は、平田張盆作與冬と、奥利本膳也ければ、良于友勝懽勇みて、先に立たる賊兵を、矢場に四五名突伏せて、良于は盆作と、又友勝は本膳と、鎗を合しつ戰ふ程に、本膳は友勝に、脛を刺れて忽地に、臀居に撲と滾びたる、程しもあらず良于も、亦盆作を突伏けり。這兩勇士の鎗尖に、殘れる賊兵五六名、退んとすれば、後に寄隊あり、進んとするに路もなければ、大家地上に跪きて、降人にぞなりにける。然ば良于友勝は、這賊兵們に吩咐て、尙半死半生なる、盆作本膳に索を掛さして、牽して先に推立しつゝ、軈て逸時景能們と、一隊に做りつ、よしを告るに、景能逸時歡びて、和殿們の事始より、忘れたるにあらねども、いまだ暇を得ざりしに、幸なるかな。と相祝して、倶に賊徒を攻伐けり。爾程に磯時願八、淺木碗九郎、奥利狼之介們は、思ひがけなき犬江親兵衛が、一隊の士卒を從へて、襲ふて城にうち入りぬ。と呼はる聲に驚き慌て、武具固めて出たれども、朝霧深く尙闇ければ、敵は纔に五六名、なるべしとは知るよしもなき、事の周章いふべくもあらず。然でも賊徒は犬江の二字を、う

賊徒を躬方の勇士們に、うち任しつゝ素藤と、妙椿を疾捉へんとて、素より熟たる城なれば、身は只單指す敵を、索ねて後堂にうち入りける。然ば又登桐山八良于と、浦安牛助友勝は襄に俘になりしより、是時まで獄舍に在り。幵をうち守る獄卒們は、敵のうち入りしに驚怕れて、那地ゆきけん在らずなりしを、いまだ悟らでありけるに、城内猛可に忽劇しく、兵燹間近く燃出て、大刀音人の叫ぶ聲、手に拿る如く聞えしかば、原來寄隊に攻破られて、城は只今落るにやあらんずらん。疾這獄舍を脫出て、賊徒を擊て會稽の、恥をし越に雪ずは、孰の時を期すべきや。と俱に心は焦燥ども、身に寸鐵の拿るべきなく、且獄舍も堅固にて、宅の罪囚を雜置かず。この死囚牢に在るものは、只友勝と良于のみ。戶口は這那一箇なれども、兩個の間に板壁ありて、力を勠するよしもなければ、いかにせまし、と氣を悶む程に、前面の守屋に兵火移りて、見る間に撐と倒れ掛れる、柱に獄舍の戶口を撻れて、八寸角なる鑰子戶を、忽地に打碎きしかば、友勝良于相歡びて、天の資と、這那俱に、はやく外面へ出たれども、身に掛られたる械兒あれば、迭に栗石を拾拿て、力を極め摧き棄て、俱に四下を見かへるに、いまだ燒ざる鎗二條、守屋の邊に建て在りしを、手に〳〵拿て腋挾み、敵ある方へと共侶に、連りに找む路の傍に、活路をや求難けん、立在む兩個の賊兵あり、良于友勝が來ぬるを見て、驚慌て逃んとし

併役行者と、伏姫神の冥助にこそ。と且感じ且歡ぶ、親兵衛は先に找みて、裂たる石の間より、奥深く入る程に、相從ふ逸時們、五個の兵每も、續きて内に找み入るに、洞の高は七尺許、地道の幅は三尺餘にて、然もその路直かりければ、各短鎗を携へしに、毫も障るものあらず。いと闇けれども凸凹なければ、跌きもせずゆくこと易かり。既にして二町あまり、來ぬらんと思ふ程に、前面にも亦大きなる石ありて、地道の蓋にしたる也。親兵衛これを搜り見て、亦復護身嚢をもて、拊るまにまに這石も、裂開くこと初の如く、前面へ出て四下を覷るに、這里は舘山の城内にて、第二郭なる高塀の、石垣の下也ければ、案内知たる逸時景能、准備の火藥に、篝火の、滅殘りしを手ばやく移して、先柴薪庫に火を放つゝ、咄と颺たる鬨の聲に、城内の賊徒驚噪ぎて、原來敵のうち入りたるぞ、大勢にはよもあらじ、推包で皆擊捕れ。と罵りつ鎗引提て、走り蒐るを、逸時景能、孝嗣次團太鮒三們、各敵を引受て、はや鎗下に幾人歟、突伏々々、聲高やかに、群賊知ずや、素藤を、復活ながら捉へん爲に、犬江親兵衛こゝに在り、田稅逸時、苫屋景能、此に在りこゝにあり。と名告掛たる勇士の鎗頭、當るべうもあらざりける、賊徒はいよ〳〵度を失ひて、原來犬江が又來つるぞや。逃げよ〳〵。とばかりに、敵の多少も朝霧に、辨よしもなく、辟易して、擊るゝ者ぞ多かりける。有恁りし程に親兵衛は、

思ひ合すれば、伏姫神の冥助なるべし、朝霧深く起籠て、なほ野干玉の烏夜に似たれば、鷄も晨はず、鴉も鳴かず。この故に舘山の城内には、四門を戍る賊兵們が、天の明たるを知ずやありけん、最貪眠き時候なるに、寄隊は殿臺に屯して、攻伐つこともなかりしかば、安きに馴て心怠り、篝も焼ず背を合して、皆打眠りて在りければ、敵の副門に近づきしを、夢にも知る者なかりけり。爾程に親兵衞は、逸時們同伴の、士卒五名を從へて、政木狐の誨たる、副門の邊に來て見るに、城戸より艮の方百歩許に、嵒石連り立たる岡ありて、岡の半腹に、最大やかなる石の、半分は土に埋れたる、苔滑らかに、蔦蔓、那這に生羅れり。此なるべし、と思ふにぞ、那仁の字の靈玉ある、護身嚢を、懐より、拿出しうち念じて、徐に件の石を撫るに、奇なるかな這大石、忽地中より兩個に裂て、左右へ開くこと三尺許、奥は正可に虚にて、山洞の像く見えしかば、逸時景能孝嗣們、次團太も鮒三も、胆を潰しつ立寄て、齊一内を差閲くを、親兵衞は含笑ながら、事恁々と囁き示せば、大家いよ〳〵感嘆して、原來這里は昔の城主が、作りたる活路なりしを、這巨石もて塞ぎしかば、素藤們は知ざる歟。しるといふとも這石を、拿除くこと輒きにあらず。幵を今力を用ひずして、兩個に裂きし、靈玉の、奇特を見つる不思議さよ。と倶に悄語くそが中に、親兵衞と孝嗣は、政木狐の誨違はで、恁る便宜を得たりしは、

の眼尾をや囘し給ひけん、然らずは狐龍の冥助なる歟、その走ること箭の似く、天飛ぶ鳥より速かりけれども、船内穏なれば、地上に坐するに異ならず。然ば戰飯はさら也、酒餚なンどさへ、五十三太素手吉が准備あり。札よき身甲、掩膊脛衣、短槍も都て人數に、合して執容たりければ、逸時景能こゝろ得て、親兵衛、並に孝嗣次團太、鍋三們に分ち與へて、軍裝を整するに、照文が兩個の夥兵は、豫その准備あれば、事遺る隈なかりけり。却說この曉天に、船は上總の夷灊なる、舘山へ程遠からぬ、便宜の浦に漕著しかば、十二日の月既に沒りて、天は明なんと思ふ時候、親兵衛はその船に、五十三太と、素手吉們の篙工八名を、そが儘に遺し留めて、大家濱邊にうち登るに、兩個の夥兵は當初、夷灊の荘客なりければ、這頭は熟路也といふ。親兵衛これをうち聞て、この夥兵們を先に立て、磯山重き捷徑より、速りに路次をいそぐものから、夏の夜なれば、明るに早くて、舘山近く來にければ、既にして黎明なり。有恁りし程に親兵衛は、船中にて寫たりし、書翰を兩個の夥兵に遞與して、汝達は殿臺なる、御方の陣營に赴きて、この書を荒川氏に達すべし。却口狀は箇樣々々。と密議を囁き示すにぞ、夥兵們はこころ得果て、別れて殿臺へいそぎけり。是よりして親兵衛は、逸時景能、孝嗣次團太、鍋三と共に都て六名、悄やかに舘山なる、城の副門に來にける程に、天は既に明たれども、後に

に、再會の日もあらば、我上を始より、詳に告給はしね。甲夜より久しく艄公の、坐席を借りしに、反て要なし。席料はよき程に、心囑して給ひね。といふも答も火急の別路、逸時景能孝嗣も、又次團太も鮒三も、皆照文にうち向ひて、別を告るそが程に、五十三太と素手吉は、第一番の快船に、案内をすれば親兵衞は、同作五名夥兵二名と、倶に閃りと乗移りて、一間に程よく坐を占れば、篙工は五十三太素手吉們、水煉達者の壯佼八名、八挺の艪を建列て、左右に別れて漕出す、聲勇しく艪拍子も、揃ふや月の都鳥、墨田河原を背にして、入江に續く澳津波、搖られゆられてゆく程に、自餘の作船兩三艘には、又五十三太が伙家の壯佼、或は十名二十名、打乘々々艪を軋らして、漕連ねつゝ、武夫の、數ならぬ身も憑る瀨の、あればある世に手束弓、引潮早き追ひ風に、疾こと宛箭の像く、波禦の盾張詰て、波間隱れ歟、水底に、いるよと見れば瞬間に、影だにあらずなりにけり。

第百二十一回

天資神祐石門牢戸を劈く
犬江親兵衞魔を破り賊を夷ぐ

爾程に、這夜親兵衞們が乘たるは、快船中の快船にて、篙工も覺ある者毎なるに、猶姫神擁護

聞にき。恁れば御方の陣營へ、諜し合して内外より、攻ずは全勝を得がたかるべし。田税苫屋の人々はさら也、五十三太素手吉們もこの意を得て、共に軍令を守らん、と誓はゞ倶して、その船に乘ん。然ずは這里に天を明すとも、伴ふべからず、乘るべからず。答を听ん、甚麼ぞや。と理り切たる仁者の指圖に、誰か一個も推辭べき。就中逸時景能は、歡び勇みて親兵衛に、禮を做しつゝ孝嗣と、次團太師弟に名告をすれば、又五十三太と素手吉們も、下知を承、誓ひを做て、乾兒乾弟に傳るにぞ、照文も亦歡びて、いひがひありと思ひけり。恁りし程に鐘の聲、淺草の方に聞ゆるを、僂ればはや四更也。親兵衛天を瞻仰て、這夜の月は、曉五更に沒ん。天明て我船上總へ著かば、進退極て不便也。大家船に乘ずや。といそがしつ、照文に別を告て、事熟たる、夥兵二名を借んといへば、照文異議なくその意に儘して、究竟なる兩個の夥兵を、擇て、親兵衛に隷けにけり。爾程に犬江親兵衛は、逸時景能、孝嗣次團太䑺三と、兩個の夥兵を從へて、水際の船に乘る程に、照文は殘れる夥兵と、伴當を前後に立し、馬頭上にこれを送りて、親兵衛を喚留め、犬江主、卑職も、同船して本國に、罷りて舘へこの段を、聞え上たく思へども、ゝ大法師の法筵に、御代香を兼たれば、去向をいそぎてその義に及ばず。歸藩の折に大功の、歡びを盡すべし。といふを親兵衛見かへりて、そは勿論の事也かし。和殿倘我義兄弟

は兩館の、おん使なればとて、敢助言をしぬるにあらねど、聞くに逸時景能の情願も、及五十三太素手吉とやらゞが、請ふ趣も、その理あり。然は思ひ給はずや。といふに親兵衞點頭て、その義は愚意と相似たり。田税苫屋の事はしも、死すべき所に死ざりしを、一旦は論ぜしかども、又存命て做す事あらば、前の愆を償ふに足ん。晩生一個軍功を、貪んとて拒んや。分說その故なきにあらねば、同船を饒すべし。這里なる舸公篙工毎は、那地ゆきけん影だに見せねば、五十三太素手吉們が請ふに儘して、他們が船を用ん事、勿論に候へども、館山へは倶しがたかり。そを何ぞとならば、安房、上總、下總掛て、二十餘城を管領し給ふ、大諸侯の沙汰として、纔に一郡一城の、妖賊素藤們を討し給ふに、漁戸破落戸さへに、軍陣に將てゆかば、國にその人なきに似たり。非如軍功ありとても、世の胡盧にならんのみ。今宵船を獻するも、明日館山なる敵を攻るも、その義異なるべくもあらず。恁れば五十三太素手吉們は、船を便宜の浦に繫ぎて、一人も升陸すべからず。館山の城破れて、網を漏れたる殘黨の、來つゝ津を求るもあらば、擒捕て獻すべし。然とて一人も殺すべからず。那城内には兇徒の外に、東濃の良民も驅入られて、已ことを得ず從ふもあらん、厶們を殺さば、不便ならずや。今殿臺なる陣營には、討隊の大將荒川淸澄、小森高宗田税逸友們と倶に、千數百騎を從へて、敵を壓えて戰ずと

則館の御手澤を、和殿に遞與し給ひし事、河鯉氏は改名して、政木大全と名告る事、次團太師弟も願のまに〳〵、軍旅の伴を饒されたる、事由さへ听果て、走りてかへり來にければ、然らば急げ、と宿所を出て、齊一推參仕りぬ。この義を海容し給ひて、相伴れなば一期の面目、この上や候べき。やよや曩蛋崎主、おん使の威德をもて、いかで執成給ひね。と逸時只管うち勸解れば、景能も亦語を續ぎて、果敢なき迄に口說くにぞ、五十三太と素手吉們は、久しく地上に平伏たる、頭を擡げて、親兵衛を瞻仰つ、又額を衝て、おそる〳〵陳ずるやう、小可們眼ありながら、富士も筑波も得ぞ知で、虎鬚を捋しは後悔至極。願ふは卉心もて、いかで饒させ給へかし。目今苫屋田稅の、兩大人のいはれし如く、小可每が快船は、俗にいふ鯨舟なれば、船每に艪を、八挺建て風に逆ひ波を斷る、勢ひ玉を滚す像く、走ること極て早かり。开を三四艘艤して、廻さして這里の河岸に在り。一艘に人十餘名、或は二十名を乘せつべし。我們おん伴仕らば、天明ぬ程に那便路なる、浦邊に寄せんこと難からず。然るを這里なる、艄公が船每は、皆凡庸の海船なれば、順風ならねば便りを得ず、走ることも亦遲かり。是等の利鈍を亮查あらば、愚意に儘させ給ひね。と迭代りにその意を演て、眞實歸服の誠心は、都て言語に見れしを、側聞したる照文は、找み出つゝ親兵衛に、うち向ひ揖して、喃犬江主、卑職這囘

志を告て、一臂の助力を、頼ばや、と思謀れる、意衷を五十三太素手吉弟兄、その宅の者每にも解示して、和殿の歇店を悄地に尋ね、甲夜より五十三太素手吉を、那里の奥庭に悄入らして、事の動靜を偸聞させしに、政木狐の忠告にて、素藤が舘山の、城を襲略りしといふ、再叛の爲體を、和殿聳て聞知りて、然らば今宵水路より、那地に行て素藤們を、一個も漏さず誅伐せんとて、茲に解纜の順風を、專等つゝ一路兒們と、閑談の事の顚末、並に河鯉氏と、石龜屋師弟の事、その大略を聞得たる、五十三太且宿所にかへり來て、那里で聞たる事の趣、箇樣々々と報しかば、我們兩個怡悅に堪ず、倘この時を失はゞ、孰の日にか宿志を遂ん。いかで和殿に對面して、驥尾の幇助を頼んず、と思へども然せる寸功なし。左さま右さま思惟るに、五十三太素手吉は漁戸なれば、近鄕隣國、都會の地へ、折々鮮魚を推送る、快船兩三艘を持り。且他們兄弟、乾兒們も、渡海の快船を漕熟て、風の好歹に拘らず、十數里の波上を、只一時歟、一時半に、漕走らすこと易しといへば、然らばその船をもて、和殿を上總へ送らして、我們も亦同船せば、明日は早天に那地に到ん。疾その准備をよせかし、と急しつ船を整るに、五十三太が乾兒にも、船を逸早く漕ぐ者多かり。然らぬも今番の件に立て、那舘山の城攻の、幇助にならん、と願はぬはなし。恁る折から素手吉は、蜑崎氏の憶りなく、同じ歇店に來會して、

ば、斫れども射れども物ともせず。この故に御方の士卒、或は落亡、或は撃れて、防ぐべうもあらざりければ、在下們相謀りて、恥を忍び命を免れ、倶に他鄕に走りしは、異日素藤征伐の、御用に達て、前愆を、償んとのみ思へば也。爾るに這兩國河原なる、五十三太素手吉弟兄は、逸時と舊緣あれば、他們が宿所に寓居しつ、嚮に落亡たる御方の士卒は、いかになりけん逢ふよしなけれど、いかで便直を旋らして、賊徒を伐て、會稽の、恥を雪んと欲するに、五十三太が乾兒們は、都て市中の生俠客にて、軍旅の事に熟ざれば、衆多かりとても憑しからず。いかにせまし、と思不娛しに、今日黃昏に三觀鼻にて、旅經紀の事により、五十三太們が理不盡に、鬪諍ひをしいだしたる、餘怨和殿に及びしかば、和殿怒りに堪給はで、矢場に五十三太素手吉を、左右に抓み投石に拿て、河に擲ち給ふ時、安房の里見の御内人、犬江親兵衛仁なるぞ、と名告られしにより皆駭怕れて、逃て五十三太が宿所に聚合ぬ。然でも和殿の武勇力量の、和漢に類稀なるよしを、豫より我們が、五十三太弟兄、隊下の者にも、折々噂したりしに、他們は和殿に撞見しつ、本事にいよ〳〵舌を掉ふて、逃還りし折、悠々と、我們に告たりき。登時在下們思ふやう、犬江氏は自餘の七犬士を、招會の輿に遊歴の、暇を賜ひぬと聞たるが、這頭を徘徊しぬること、必是所以あるべし。その來歷を搊らして、時宜によらば素藤對治の、夙

なる戰刀と、九寸五分の匕首を、帶たる兩個の武士、隊を離れ拔み出て、親兵衞が身邊に來つ、恭しくうち朝ひて、こは犬江主恙もまさずや、逸時にて候也、景能にこそ候なれ。と名告るに親兵衞なほ訝りて、睛を定めてよく見れば、寔にこは是別人ならず。嚮に舘山落城の折、賊徒の圍を殺脱て、往方も知れずと聞えたる、番士の頭人甲稅戸賀九郎と、苫屋八郎なりければ、親兵衞は歡ばず、勃然たる聲高やかに、汝達など耻を知ざる。その身は番卒の頭人を奉りて、舘山の城を守りながら、賊徒のうち入るを覺ずして、良于は生拘られ、士卒を多く擊してしも、なほ共侶に戰歿を要せず、辛く命を免れて、萍流ひ來て、這頭に在る歟。剰河邊の破落戸の、隊に入り氣を使ふて、良民旅人を殘害して、僅に口を餬ふにぞあらんずらん。しからば忠義兩ながら、虧たる鳥滸の白人の、いふよしありとも何をか聞くべき。疾退きて皆一列に、鋭も鈍くも鋒頭を、衝揃來て、勝負を決せよ。今さら躊躇ふ事かは。と思ひの隨に責罵るを、逸時と景能は、听つゝ敢爭はず、倶に徐に寛解ていふやう、噺犬江主、言一旦に如右思るゝは只傳聞に依られしならん。在下們は不似といへども、只顧命を惜むの與に、城を棄て阿容々々と、脫れ去る者ならんや。城を預りまつりし日より、守るに由斷なきものから、賊徒は不測の幻術をもて、うち入るまでは形體を見せず。況その勢幾千なるや、錐を立べき地もなかりしか




五十三太素手吉夜
船長の家を脅す

出て、今歟々々と敵を等つ。手に鐵扇を執れるのみ。左右に從ふ孝嗣次團太、鉚三も器械なければ、店前の柱に掛たる、捍棒を脇挾みて、寄せば打んと身構たる、前後に附副ふ夥兵們は、手に〳〵十手を握り持て、各先を蒐んとす。准備に透間あることなければ、非如五十三太素手吉們が、有ん涯りの伙家を盡して、三方より推寄するとも、輙く克を拿んこと、亦あるべくは見えざりけり。爾程に向水五十三太、枝獨鈷素手吉は、從ふその隊の破落戶を、六十餘名相倶して、整々として推寄來つ、旣にして近づく隨に、鮮曉の月は隈もなくて、白晝の似く明かりければ、他們が打扮紛ふべくもあらず。其身は漁戶町人なれども、戰國の習俗にて、近所に鬪戰ある每に、落人の武具を、剝もしつ拾ひもして、各々貯たればや、鉼兒身甲に身を擐めて、手に器械を執らぬはなく、いと苛めしくぞ見えたりける。然ば五十三太素手吉は、親兵衞們がはやく外に出て、船公の家を距ること、五十步計の程に在り。相從ふ者始に增て、約莫二十許名なる、勢ひいよ〳〵猛かりければ、戰ずして怯れたりけん、忽地巳々と喚禁めて、器械を伏せ、頓項巾を脫捐て、大地に跪きければ、大家ひとしく地上に跪坐て、謹み敬ふ者に似たり。親兵衞們はこれを見て、必是詭の、計なべし、と思へば毫も由斷せず、他們が立つを等程に、忽地寄隊裏よりして、玄色革縅の身甲に、間鐵打たる細鎖子の臂縛脛繳して、二尺七八寸

十三太們と、鬪諍ひをし給ひしにあらずや。件の五十三太素手吉は、地方に名高る任俠なれば、乾兒乾弟多くあり。甲夜の遺恨を復さんとて歟、その隊約莫五六十名、手に〳〵長械船竿など、或は猎兒竹槍を引提て、這方を投て來ぬるよし、目今悄地に告る者あり。各位は覺期の前にて、是非に及ばぬ事ながら、小可までも側杖打れて、家さへ人を損はゞ、翌より渡世の障りにならん。快外面へ立出て、術よく和睦したまはずは、免れ給ふべくもあらず。益なかりき。と呟けば、親兵衛听つゝ打笑ひて、然ぞあらん那奴們が、幾百十人寄來るとも、我本事をば知りたらんに、先度に懲りぬ、愚物の本性、敵手に足るものならねども、今立出て追返さん。汝達驚き騷ぐべからず。いで〳〵。といひつゝも、野袴の稜、紐に夾みて、刀緒引拔き、襷兒に掛て、兩刀腰に、勇士の身構、外面投て出んとすれば、孝嗣次團太鮒三も、身裝しつ共侶に、後れじとてぞ勇みたる、事の異變に照文も、推續きて立出る程に、夥兵竝に伴當們は、病痾の安否を問んとて、前より聚合て、次の間に在り。既に件の趣を、聞知りたれば、毫も凝議せず、立迎へしを照文は、喚近づけて恁々と、下知して親兵衛に隷けにけり。有恁し程に、艄公の、宅眷も奴婢も臥房を出て、事の悤劇に堪ざりけん、皆土藏に閉籠りて、網戸を引て音もせず。艄公篙工們も幾の間に歟、逃て其頭に在らずなりしを、親兵衛は問しもせず、はやく外面へ立

こは思ひもがけなき、犬江主、蜑崎生さへ、分に過たる褒賞は、當りがたく候なれ。現天道は盈るを虧く。果せるかな、蕙蘭繁らんとすれば、秋風是を破り、忠臣仕んとすれば、讒佞これを覆せり。在下寔に不肖なれども、孤忠を盡して容られず、剰不測の罪を得て、刑餘の日蔭兒になりにしを、思へばいまだ盈ずして、虧たることのみ最多かり。嚮にもいへることながら、故主は賢明ならずとも、譜第恩顧の義もあるに、この儘他姓に仕へなば、忌憚らざる者に似て、故主の怒を惹くに庶かり。畢竟我身は仦き時、政木狐に守育れ、今日は又那靈狐に、必死の命を拯れたる、前後の恩義輕からず。今よりの後、名と行ひを、懋て全うせずもあらば、陰徳慈善を旨としたる、政木狐に恥ることとあらん。こゝをもて今宵より、河鯉佐太郎を改めて、政木大全と名告るべし。政木は則他が徳を、生涯忘れざらん爲、大全は名と行ひの、又虧ることなからん爲也。犬江主、蜑崎主、この意を査し給ひね。といふに親兵衞十一郎、側聞せし次團太も、及鮒三も共侶に、賢者の用心故ありけり。とその忠信をぞ感じける。然ば又這條の、物譚ひに時移りて、夏の夜いよ／＼深しかば、親兵衞頻りに焦燥て、既に迭にいふべき事、聞くべき事は盡したり。風は好くまれ歹くまれ、快々船を出させん。大家立ね。といそがしけり。浩處に艄公は、店舗の方より走り來て、親兵衞們に報るやう、刀禰達はけふ曛昏に、三觀鼻にて五

隷させ給ひしにあらざるを、なでふ悉將てゆかんや。縱逞兵十名ありとも、素藤が幾千百の、兇黨に比れば、なほ九牛の一毛也。晩生敢身ひとつの、軍功を貪んと欲せず。荒川氏に謀し合して、餘賊を漏さじと思ふに在り。夥兵二人を借し給ひね。一人にても足るべけれど、急病の折などに、その代なくば不便ならん。殿臺の陣營へは、次團太鮒三を遣しても、密議をば達すべし。遮莫御内の雜兵ならずは、荒川翁、高宗逸友さへ疑ふて、その期を愆つこともあらん。是より外に所要なし。敵城に入るに及びては、河鯉石龜の幇助あり。就中河鯉氏は、一人當千の本事なきにあらず。只是今番の一事のみかは、我君に薦めまつらば、一方の扞城たらんこと、素より疑ひなきもの也。這義をこゝろ得給へかし。といへば照文點頭て、和殿は萬事に神々しきを、凡慮に測知りがたければ、丌は左も右も、意見に依るべし。河鯉生の事はしも、聞くが如きは忠孝拔群、智勇も然こそと査せらる。老侯のおん時より、卑職招賢のおん使を奉りて、關の八州を履歷りしに、八犬士の外はいまだ差せる、文武の英士に遇ざりしに、料ずも今かくのごとき、忠孝智勇拔萃たる、この人和殿に從ふて、今番の役に功あらば、卑職薦め稟さずとも、必重用せらるべし。然るときは錦の上に、花を添たる當家の至寶、何事か亦これに優すべき。實に公私の幸ひなりき。と只管に愛憐びしを、孝嗣听つゝ愀然と、羞たる頭を稍擡げて、

爲レ甚。謬寡人謬而。不レ悟下妖賊素藤等有中反間之術上。自二叨遐一棄股肱一而。復有二螳臂觝一レ車之孽一。是以覃二重用一斧鉞一。非レ卿乃不可也。因賜以二手書一。書屆之日。亟歸二寧本藩一。且拂二魔雲一而。明二天罰一。全二前功一以復二舊職一。寡人俟レ卿。一日猶レ如二千秋一。餘者有レ于二異日面談一。勿レ違。急々如二律令一。

文明十五年夏四月十一日　義成(花押)

とぞ寫せ給ひける。當下照文は、親兵衞に歸參を祝して、御諚恁地なれば、今宵の解纜勿論ながら、那妙椿は幻術あり、勢ひ先度と同じかるべからず。卑職が倶して來にける、究竟の夥兵十名あり。他們を和殿にまゐらせん。河鯉生次團太師弟と、倶に幇助にせらるべし。といふに孝嗣膝を找めて、次團太と共侶に、照文に初對面の、歡びを舒などす。就中次團太鯽三は、照文が執成にて、討隊の伴を饒さるべき、時宜にいよ〳〵勇氣を增て、又親兵衞に云云と、その情願を口說けり。恁りし程に親兵衞は、主君の手澤を懷へ、斂めて照文に答るやう、御諚の趣承りぬ。縱晩生一人也とも、征伐輒かるべけれども、倘妙椿を走らしなば、孽を遺すに似たり。次團太師弟の事はしも、町人なるを歎ふにあらず。なほ急ぐべき別義あれば、意見を加えたりけれども、然までに請はゞ伴ふべし。但し和殿の夥兵們は、素より晩生一個の與に、

奇く愛たき不勝の歡び、卒さらば舘の御諚を、快傳ん、とばかりに、こゝろ惴れて倉卒に、楮戸を隔て喚かけたり。無禮にこそ。と叮寧に、解示しつゝ懷より、主君の手澤一通を、拿出し扇子にうち載て、卒とて遞與せば、親兵衛は、找み近づき受拿て、兩三番うち戴き、吁辱き、我君の御懇命。獨に政木が忠告にて、素藤們が再度の叛逆、我君仁を召かへして、追伐の義を課せんとて、和殿幷に姥雪を、おん使に達し給ひきといふ、事由を听しより、そのおん使に得逢ずとも、一日もはやく妖賊を、討夷げて、我君の、賢慮を休め奉らん、と思ひ惴りしは我ながら、會勇士の本性にて、已ことを得ざるのみ。敢みづから征伐を、恣に做すに似たれば、識者の議論あるべきに、料ず今宵おん使に、値遇して素藤征伐の、君命を承まつる事、得易からざる幸なるかな。先々御書を。といひつゝも、開んとして、左右なく披かず、遽しく身を起し、緣頬なる淨水盤の、柄杓を拿抗げ、幾番歟、漱ぎ手を洗ひ淨めて、舊席にかへり來つ、懷にしたる主君の手澤を、拿出て徐に封皮を折きて、聲爽然に讀む程に、大家席を避け謹て、齊一これを聽聞す。その書に曰、

諭示 犬江親兵衛。可征伐再叛妖賊蟇田素藤等事

右悔往時之愆而。思今日得失。譬如心疑則生暗鬼。患眼者見日華。惑於是

をさ貯祿の、藥を腹し衣を被ぎて、寢るとも知らず目睡みしに、既にして日は暮たり。有恁し程に這一室に、來ぬる三四個の客ありて、相譚ふ聲に眠り覺て、心ともなくうち听しに、一個は犬江和殿の聲也。又一個は扇谷家の浮浪人、河鯉氏なる事も、その餘は越後の旅客師弟、此彼似たる寃屈の罪を、辛して免れて、亡命流浪の顚末まで、詳に聞知りたり。世は塞翁が馬なるかな。我船昨夕順風ならば、今日は穗北へ赴きて、和殿に逢ふよしなからんに、逆風により、病痾により、料ず這里に日を消しつゝ、反てはやく君命を、傳る時宜の歡しさに、病苦を忘れて生平よりも、心地淸やかになりしかば、疾起出て對面せまく、思ざりしにあらねども、各會話の、いと細やかなりければ、言の果るを等つ程に、偸聞ながら佳境に入りて、河鯉氏の必死の厄難、そを救ひしといふ靈狐政木が、箙大刀自に變化したる、其頭の奇談、いへばさら也、件の政木が神通もて、素藤が再叛きし、事恁々と和殿に告て、狐龍に化りて、升天の爲體、又這石龜屋師弟の薄命、奸夫婬婦に怨を復して、萍流ひてこの地に來ぬる事、且覊に三觀鼻にて、五十三太素手吉とやらゝに亂妨せられて、殆難義に及びし折、和殿が河鯉生と倶に、助力して立地に、其祟鬼を追拂ひし事、且和殿は玆に順風を、等つゝ上總へ推渡り、素藤們を討滅して、那前言を果さんとて、解纜いそしき鯁忠武略を、思へば事皆意表に出て、

とよ、這回咱們と與四郎が、和殿並に七犬士を、招會のおん使に遣られて、昨夕解纜をしけるよしは、既に靈狐政木とやらんが、神通奇特の忠告によりて、早く知られしと歟听たれば、今さら具に報るにも及ぶべからず。却卑職と與四郎は、昨夕台命を稟しより、日沒時候に稻村を罷出て、去向を異にし、相別れて、各快船にうち乘りて、武藏を投て漕走らせしに、昨夕は風波暴かりけるに、而逆風なれば、幾番歟吹戻されて、找むべうもあらざりければ、思ひしには似ず洋中にて、夜を明し又時を移して、今日夕晡の左側に、辛して這兩國河の、西の岸に漕著けり。與四郎はいかにしけん、船異なれば知るよしもなき、卑職は昨夜通宵、狂風洪波に搖惱されて、心神穩ならざる故に歟、我船この地へ著く已前より、頻りに頭痛瞑眩して、權且も堪がたかり。豫は船を千住河まで、漕して穗北の鄕士なる、氷垣の宿所を問試て、犬士の在處を撈らん、と思ひにけれど、朽惜くも、病著によりいまだ果さず、是非なく船を歇めさせしに、這里の屋主は、安房上總へ、日每に交加ふ、海船の問丸なれば、我を載たる篙工の每も、大略は相識れり。他が坐席を借りまゐらせん。一霎時將息し給へといふ、篙工們が意見に儘し、相譚して、那奥なる褊室を、借りて久しく臥て在り。篙工們には、暇を取して、船はそが儘返し遣し、倶したる夥兵一十名と、我私の作當們は、河原の艪兒矮屋に留め置て、這身はをさ

第九輯 卷之十六

第百二十回

命令を傳て使臣征伐を正くす
一葉を獻して窮士前愆を償ふ

再說、犬江親兵衛は、夜半の鐘の响くを聞て、今は解纜に好時候ならん。先艄公を促さん。といひつゝ軈て遽しく、みづから立まくせし程に、奥の一室に人ありて、やよ犬江氏等給へ、いふよしあり。と喚かけしを、大家驚き、且訝りて、其方を齊一見かへれば、うち咳きつゝ隔亮戸を、やをら推開きて出て來ぬるを、親兵衛は睛を定めて、と見れば是別人ならず、昨日稲村殿より命ぜられて、犬士を招會の使に達ける、蜑崎十一郎照文なり。照文この日の打扮は、玄色縐紗に自家の花號ある、夾衣を被て、深鐵色羊絨の戰袍を披著し、竇藍聯綾の野袴に、青蓮繭紬の副帶を締添、朱鞓の中刀を佩て、一刀を左手に引提たり。恁而徐に親兵衛們に、饒し給へ。と揖讓をしつゝ、上坐に著しかば、親兵衛は席を讓り、恭しくうち朝ひて、思ひかけざりき、蜑崎主。幾の程に歟この地に來て、那一室には在したる。と問へば照文點頭て、然ば

して、恩を謝し徳に答る、理義を思はで、愁に、酒家に從はんと欲するは、俠氣なりとも、宜しきにあらず。意ふに犬田犬川們、我七個の義兄弟は、千住の驛より程遠からぬ、穗北の鄕士、氷垣殘三夏行の宿所に在らずは、必結城の城下なる、丶大法師の草庵に來會して、本月十六日の大法筵に、預らまく欲するならん。叟們は、明日疾穗北へ行て、逢ずは結城へ赴きね。十六日には程もなきに。と諭せば次團太眼を睜りて、そは宣することながら、犬阪犬田犬川主の、舊恩德義を今さらに、忘れたるにはあらねども、おん身にも今日厄難を、拯れまつりし恩義あり。今番の大事に倶せられて、後に自餘の犬士達を、索るとも遲きにあらず、枉て饒させ給ひね。と口說けばいよ〱時も移りて、短夜なれや三更の、鐘鏗々と聞えけり。登時親兵衛は、遽しく次團太を推禁めて、聞ずや叟、彼那鯨音は眞夜半ならん。追風は誰何、艄公に、問促さん。といひかけて、みづから立まくせし程に、奧の一室に人ありて、やよ犬江氏待給へ、いふよしあり。と喚かけたり。此は是甚なる人ぞ、且下回に、解分るを聽ねかし。




次団太

よりして、荒川兵庫助清澄が、君命を稟奉り、素藤を討隊の大將にて、舘山の城を攻伐しに、那妙椿が幻術を、破るべき術あらで、今に全功を得ざる事、慍る折から義成朝臣は、靈玉の奇特あるにより、嚮に親兵衛を疑ひ給ひしは、怪尼妙椿が、反間の幻術なりしを、やうやく悟り給ふ程に、伏姫神の示現さへありければ、いよ〳〵千慮の一失を、御後悔大かたならず、快親兵衛を召返して、妖賊を伐夷ぐべく、幷に自餘の七犬士をも、いかで招き聚合んとて、昨日蜑崎照文と、姥雪與四郎に仰付られ、隨便犬士を招會の、使に達し給ひしといふ、政木の老嫗が忠告の、趣を悄語き示して、縱その路次同じからで、おん使們に逢ずとも、曩に素藤を赦免の折、我その衆議を折衷して、我君にも、亦東氏にも、約束の言あれば、快妖賊を討滅して、且は民の塗炭を拯ひ、且は舘の御心を、休め奉らんと思ふのみ。水路を急ぐはこの故なりき。といふに次團太鮒三は、心漫に勇れて、そは亦要ある椿事也。願ふは我們主僕をも、おん伴に召れ候へかし。おん幇助には足らずとも、手を空うはすべくもあらず。といふを親兵衛推禁めて、志は然ることながら、先度は我身ひとつにて、素藤們を成生拘りしに、今さら人の幇助を借んや。然れど這河鯉生は、我亦思ふよしもあれば、嚮に同伴を饒したり。叟は酒家と新面識にて、犬田犬川は舊識なり、且犬阪には再生の、恩さへあるに、いかにぞや、一日もはやく面會

りしかど、和君の上はなほ疎鹵にて、今宵猛可に上總なる、舘山とやらんへ適んとて、出船を這里に等給ふ、故をすらいまだ得知らず。歎しからずは其頭の事も、听まくほしう候。といへば親兵衞領きて、然也その義は他事に紛れて、解示す暇あらざりき。嚮にも既にいひけらし、洒家は七犬士に先だちて、不慮に里見殿に仕へまつりて、舘山の城を預けられしに、憶ず邪物の障㝵ありて、舘のおん覺始のごとくならず、七犬士們が在處を索ねて、遺もなく將て來よとて、往日猛可に遊歷の暇を賜り、姑且舊里下總なる、市川に旅宿をしつゝ、今朝早天より立去りて、這頭を徘徊しぬる也。亓を詳に說くときは、顚末箇樣々々なりとて、蟇田素藤が謀叛の事、且親兵衞が單身にて、舘山の城へ赴きて、素藤を生拘りて、兇徒を降して城を拔きし事、竝に素藤們を赦免の事、且濱路姬の鬼病によりて、舘山より親兵衞を、召來たして、姬上の、看病に隸給ひし事、又親兵衞が所藏の靈玉、前後兩度奇特の事、伏姬神の靈驗擁護の、事の趣を略談して、是よりの後、那地の事は、洒家知るよしなかりしに、嚮に政木に忠告せられて、上總に亦復兵亂あるを、料ず聞知ることを得たり。その故は又恁々也とて、素藤は女僧妙椿が、幻術の幇助によりて、舘山の城を襲略りし事、當日城の頭人たりし、登桐山八は生拘られ、又田稅戸賀九郎と、苫屋八郎は、辛く命を免れて、他鄉へ沒落したる事、この故に稻村

れる、扇谷家の忠義の老黨、河鯉權佐守如の獨子にて、河鯉佐太郎孝嗣、と喚做たる、忠孝無二の後生は、是這人の事ぞや。と告れば次團太鮒三は、胆を潰しつ顔うち目戍りて、そは亦思ひがけざりき。然る方樣とは知らずして、太く無禮を仕りぬ。饒させ給へ。とうち勸解るを、親兵衛禁めて、否その口誼は、日今の急務にあらず。這賢才子の事に就ては、又一條の奇談あり。始をいへば恁々也、終は箇樣々々也とて、守如孝嗣が忠にして、且父子兩度の大功を、奸黨が醋く思ひて、譖ちて陷れし事、因て孝嗣は、今日前面岡にて、死罪に行はれんとしける折、靈狐政木が機變をもて、孝嗣を救ひ拿りし事、又那兩個の政木と和奈三們の事、又根角谷中二們が事、親兵衛は料ずも、その折に行會して、那光景を目擊しつゝ、孝嗣が死を免れし折、便直を以武藝の本事を、試て却意衷を示して、はやく友垣を締びし事、政木狐は狐龍に做りて、升天奇特の事までも、その崖略を解示せば、孝嗣も亦漏たるを補ひて、母の慈善と政木の恩義、且親兵衛と値遇の緣、毛野道節們七犬士の、忠あり義あり好情ある、事をし玆にいひ出て、身の薄命をうち不娛れば、次團太と鮒三は、又奇に驚き髀を拍て、或は悲しみ或は喜び、或は怒り或はうち笑む、千狀萬態みづから禁ぜず、膝の找むを覺ぬまでに、只願感じて已ざりけり。且して次團太は、親兵衛に向ひ額を衝て、御敎諭によりて、自他得失の、所以を承知仕

て、其趣は極めて異也。正に造化の照對歟、こを重復といふべからず。陽は必單立ず、陰は必獨遊かず。是をもて物に配偶あり、事に對應あり。孰か主客なかるべき。曩には毛野が主人公にて、鮒三と叟は客也。今は叟が主人公にて、那時我は客なりしに、一トたび名告り逢ひしより、洒家は轉じて主と做りぬ。叟も亦地を易て、客にならざる事を得ず。造化の波瀾かくのごとく、神出鬼沒涯りもなきを、人見て心屬なきのみ。好く這滋味を知る者あらば、共に兩度の奇偶といふべし。然は思はずや。と解示せば、次團太听つゝ鮒三と、面を注し感嘆して、御論寔に精妙なるかな。愚痴文盲の耳にすら、解しがたからず、聞え易くて、殆敬服仕りぬ。小可何等の過世ありて歟、親き疎き推並て、八個の俊傑達に、然ばかり愛顧せられしは、現過分き福ひ、と稟さんもなほあまりあり。いと有がたく候。といへば亦鮒三も、滿面坐にうち笑れて、數ならぬ身も恁ばかり、得がたき團坐の後に侍りて、然る祕說さへ詳に、側聞を仕りぬ、僥幸也けりとて、日屬の憂苦を忘るゝまでに、いと憑しくぞ思ひける。當下又親兵衞は、次團太にうち向ひて、七犬士の事はしも、一槩こゝろ得られけん、但我這個一路人は、他聞の憚りあるをもて、いまだ具に告ざりしかど、然ばとて幾までも、いはで已べき時宜にあらず。叟、鮒三們は這人を、那里の旅客也と思へるや。こは叟も豫より、その名ばかりは聞知

虫が背に寫れし、文字に據て、木天蓼丸の、盜賊正可に知られしかば、箙大刀自の疑ひ解て、叟は轍魚の江に放され、死ざることを得たるにあらずや。是に由て又よく思へば、叟が必死を救ひしは、單犬阪のみならず、信乃道節、荘介小文吾、現八大角の六犬士も、不用意にして幇助になれり。そが中に小文吾荘介は、叟が義俠を敢忘れず、折々噂をしけるにより、餘の四犬士も、越後には、然る者ありと知りたりき。却小文吾荘介が、片貝にて死を免れて、他郷へ走ることを得たるは、那由充が善に與する、誠心より出たる也。其故は箇樣々々、と事の崖略を解示して、當時小文吾荘介は、是等のよしを叟に告て、辭別をせまほしく、思はざるにあらざれども、女々しく別を惜むの爲に、人に知られば其身々々の、二たび死地に入るのみならず、恩人稻戸由充を、連累の害怕あるをもて、意ならずも久しくなるまで、叟に物を思せけん、其も薄情にあらざるよしは、那二犬士の心術と、人柄を見て知るべし。因て今復思惟るに、曩には犬阪毛野胤智が、親の寃家を索る爲に、磨齒藥を鬻ぐ坐擊師に、打扮て湯島の社頭にあり。その折鋼三が邂逅して、叟の助命の宿願を、果すべき幇助を得たり。爾るに今は叟師弟が、使ひ盡しゝ路費の與、且犬阪犬田犬川們に、環會ふよすがにもとて、藥を賣りつゝ相撲の所作を、倣して此の河原に在り。予に窮阨を拯れて、憶りなく名告逢ひにける、那と這とはその事相似

士も、料ず叟の幇助になりしを、人告ざれば知ざるべし。といふを次團太訝りて、そは亦甚なる故候ぞ。と問へば親兵衛、然ばとよ、曩に叟を命乞の事、蟹目前の仁恕なりしも、簸大刀自は倘疑ふて、速には饒し難たるに、那賊婦船虫が、奸夫媼内と倶に、司馬濱にて、牛の角もて突殺されたる、幵が背に年來の、積惡を寫してありしに、木天蓼丸を偸拿たる、事さへ具なりけるよしを、稻戸津衞由充が聞知りて、隨卽簸大刀自へ、聞え上て諫めしかば、大刀自言下に感悟して、時を移さず恩赦の沙汰あり。叟が獄舍を出されしは、這一椿事によりて也。しかるに船虫媼内を、牛に突して誅戮しけるは、是神佛の所行ならず、その夜艾船虫は、犬田に撞見して生拘られ、又媼内は道節信乃們に、投伏られて、俘囚になりぬ。折から莊介、現八、大角も、皆その濱邊に聚合しかば、六犬士相謀ひて、賊僕賊婦を誅するに、甲夜に媼内が竊拿たる、赤鬼四郎の牛の角もて、劈し殺戮して、その積惡を世の人に、知せん爲に、他們が背へ、罪戻數箇條を寫著けしは、亂臣賊子を後々まで、懲さんとての當意卽妙、共に六犬士の所爲なるを、人知ざれば濱の堂なる、閻魔の冥罰なるべし、と生推量をしたるのみ。毛野道節が復讐は、その翌朝の事にして、正月二十一日なりき。約莫是等の顚末は、酒家富山に在りし時、神女の示教によりて知れり。有恁ばその折六犬士們は、叟の爲にしつるにあらねど、船

喚あるくのみにては、今番も買ふ人稀なるべし。人の心を樂する、遊藝などを施さば、衆人聚合ふべけれども、然る筋には素より疎かる、本性なるを爭何はせん。只年來嗜る技は、相撲の外にあるべくもあらねば、所詮老を忘れ羞を忍びて、箇樣々々の烏滸技をせば、看官極めて多かりてん。然るときは膏藥も、おのづから賣れざらんやとて、師弟當晩の歇店にて、悄地に商量したれども、招牌などの准備あれば、詰朝も今その事に、這那となく時を移して、既に未牌下刻より、三觀鼻に立出て、稽古相撲の技をもて、人脚を留め、立聚合して、專膏藥を售まくせしに、禍鬼忽地其首に起りて、一旦難義に及びしに、料ずも親兵衛と、孝嗣に助力せられて、事のこゝに及びしなり。然ば石龜屋次團太は、這來路の長談脩話を、鮒三と迭代に、解くこと詳なりければ、孝嗣も耳を傾けて、我身も似たる寃屈の罪科、他が奇遇も湯島の神の、冥助ならんと思ひけり。登時犬江親兵衛は、次團太にうち向ひて、適愛たき叟が命運、九死を出て一生を、得たる洪福のみならず、淫奔の後妻、不義の乾兒に、怨を復して天罰を、示しゝは多く得がたき、大丈夫の所行といひつべし。併鮒三の、師恩を思ひ義に仗りて、水火裏に艱難を、倶にしたるは是も亦、得易からざる弟子なるかな。此に就て今又思ふに、叟は只犬阪毛野に、救れたりしよしをのみ、人傳に聞知りて、信乃道節、莊介小文吾、現八大角們の六犬

終なく、恩を思はぬ者に似たり、と尋思をしつゝ鉀三に、恁々と說示すに、鉀三听て異議もなく、しかるべし、と應しかば、然らば去向を急んとて、その詰朝會津の里の、歇店を倶に立去りて、日に歩み夜に宿り、ゆき〳〵て武藏なる、豐島郡に來にければ、湯島の神社を拜みまつりて、鉀三と共侶に、默禱に時の移るを覺ず。この日は拜殿に通夜しつゝ、猶久後の冥助を祈るに、恩人物四郎の犬阪生、並に犬田犬川の兩勇士に、環會し給ひねとて、思ふ涯りを祈請しまつりて、更に去向を思慮るに、下總の行德は、小文吾が舊里なるを、豫聞知りたりければ、那里へゆきて尋問はば、在處を知るよしあらん歟とて、その日鉀三に、意衷を示して共侶に、行德へ赴きて、里人們に問試みしに、件の犬田小文吾は、猛可に當所を立去りしより、今は六稔にもやなるべからん。親文五兵衞は故ありて、安房へいなれて、那地にて、身故りたれば、家は絕にき。小文吾哥々は、いかになりけん、曩に一たびかへり來にき、と聞しが虛談ならんといふ、人の答に便りを得ざれば、次團太望を失ひて、又鉀三と共侶に、下總武藏の封疆河なる、西の漁村までかへり來にけるに、路費は竟に使ひ果して、纔に一日歟二日許、支るまでになりしかど、獨に奧の會津にて、賣れで殘りし膏藥は、なほ百盒餘りあり。這頭でこれを賣盡さば、本錢を失ふに至らずして、是より日每の房錢を得つべし。然りけれども先度のごとく、只

時候、我投方へゆくべけれとて、この春二月中旬に及びて、奥の會津に來にければ、客店に逗留して、鯽三と商議しつゝ、倶に久後の事を謀るに、路費は纔に十兩金にて、鯽三も貯祿はなきに、長き旅宿をすべくもあらず。然らば路費の竭ざる以前に、些小の旅行經紀をして、日毎に小錢を得ずもあらば、進退其里に谷て、後にせん術なかるべし。却何をがな賣るべきとて、更に思念を旋らすに、次團太が師傳の膏藥に、撲傷折損の奇方あり。折々人に施しけるに、經驗あらずといふことなく、藥材も亦輙ければ、身はなほ旅舍に在りながら、件の藥を製作して、鯽三に賣あるかせ、次團太も笠を深くして、日毎に會津の巷街を、呼りつ徧歷りて、多く賣まく欲せしかども、人その藥の可否を、いまだ知るよしあらざれば、そを買ふ者は稀にして、日日の房錢に足るべくもあらず。左右する程にはや、春を憂かりし旅宿に鎖して、三月下旬になりしかば、命の綱と思ひぬる、十金の路費は過半竭て、殘り寡くなる隨に、次團太倩思ふやう、曩に故郷を追れしより、はやくも五十日の光陰を歷たれば、縱追捕の沙汰ありとても、今は大槩寬みたらん。盤纏匱しくなりけるに、なほこの地方に日を過さば、乞丐にぞならんずらん。いでや武藏へ赴きて、湯島なる天滿宮へ、詣て解厄神恩の、賽願を致すべく、兼ては犬阪犬田犬川、那三犬士の在處を索ねて、再生の恩、値遇の緣、その歡びをいはずもあらば、始ありて

あり。心ばかりは人の道、倶に迷ぬ野干玉の、烏夜は潛ぶに便りよき、路を求めて通宵、窘くも走りけり。却說その明の朝開きに、近き地方の莊客が、鳴呼善土丈二們の横死したるを、見出してうち驚き、はやく村長に告しかど、殺されてより時旣に、幾か移りけん、敵手を知るべき照驗なければ、隨即事の趣を、片貝の有司に訴て、實檢使を稟給はり、軈て詮議を遂られしに、誰が所爲なるを知るよしなければ、鳴呼善們三個の亡骸は、由緣の者拿措くべしとて、居宅家伙は沒官せられて、石龜屋の迹斷絶し、今番購得たる者、その家に住替りにけり。然ば鳴呼善、土丈二們を殺しゝは、次團太が怨に堪ぬ、所行にこそありけめとて、猜していふ者多かりしかば、風聲片貝へ聞えしかども、稻戸由充はさら也、有司們は豫より、土丈二鳴和善が不義不貞の、訴を惜く思ひて、反て次團太を憐みたれば、事の疑ひありといへども、今さらに次團太が、往方を渉獵り追捕へて、糺明せんといふ沙汰はあらず。鳴呼善、土丈二、鮠八們が、與に寃家を索ん、と欲するものもあることなければ、他們が姦淫忤逆をのみ、里人夜話にしたりとなん、程歷て仄に聞えける。間話休題。爾程に次團太は、鮒三を從へて、晝は躱れて、夜を宗と走るに、信濃上野武藏までは、扇谷家の封内にて、長尾家の所領もまじれり。然るを其方に赴かば、去向の追捕心許なし。且陸奥へ赴きて、姑且那地に日を彌り、事の定りたらん

喃鯽三、這奴は和郎に脳骨を、摧れたれば、始より、痛く弱りけん休みたり。この儘十々滅を刺さずとも、又生くべうもあらずかし。嚮に嗚呼善が土丈二に、告るを聞て我知りぬ。他が屍骸の懐には、必金十兩あらん。亓も亦都て我東西なれば、拿るとも天道饒し給はん。亓を盤纏にして、他郷へ走らん。探りてあらば快出しね、といふを鯽三うち听て、そは勿論の事ながら、這里より小千谷へ遠からず、件の金を先拿て、悄地に宿所に立かへり、有ん涯りの錢財を、攎ふて走らば、身の所因を、求る折の本錢にならん。只這奴們を屠りしのみにて、手を空うすることかは、といへば次團太頭を掉て、そは亦和郎がいふことながら、然では飽く事を知ざる也。小千谷の宿所は我宅にて、那里の東西は我有也とも、既に罪を蒙りて、追放せられし我身なれば、我東西にして我有ならず。然るをこゝまでかへり來て、姦夫婬婦に怨を復し、屍骸に遺れる十兩の、金を拿るだに危窮の爲に、已ことを得ざる所爲なるに、慾を挿がば强人と、五十歩百歩の間のみ、天道饒し給ふべからず。這里は片貝街頭なれども、夜の曖に人迹絶て、知られざるこそ幸ひなれ。快々影を躱すべし、といふに鯽三有理と悟りて、軈て嗚呼善が屍骸を探るに、項に掛たる財嚢の内に、果して十兩許の金ありしを、そが儘拿て次團太に、遞與せば手ばやく懐へ、斂めて四下を見返り見かへり、いさふれ鯽三且ゆき給へ、と辭讓も有繁禮あり儀

苦む、土丈二鳴呼善は、饒し給へ、といふ聲も、霜夜の虫に異ならず、纔に手脚を動して、息絶々に呻唫しを、次團太然こそと冷笑ひて、若們今さら免れがたき、命を惜むは愚魯なり。念佛まうせ、と拿直す、刃を抗て土丈二が、胸前閼煞と刺串けば、下に布れし鳴呼善まで、串れたる四劬八苦の、兩手を握り眼を睜りて、共侶に息絶にけり。既にして次團太は、血刀を拔拿て、拭ふて鞘に斂めつゝ、鮀八が什倆したる、身邊に挨み近づきて、足もて頭顱を踏動し、やをれ憨兒、まだ死ずや。若は塚之山の小經紀、駝牡八が獨子にて、をさ〳〵相撲を好むをもて、我弟子にしたりしに、近曾若が二親の、世を去りしより、生活に親まず、產を破り邑を追れて、無宿になるべき者なりしを、我は師弟の義を思ふて、宿所に喚拿り、意見を示て、人と做ん、と東西さへ沒れて、去歳の秋より養ひしに、素より不實の本性なれば、恩を恩とは思ひもかけず、只その同氣相求め、同惡を相憐む、土丈二に相譚れ、鳴呼善に折々餌を飼れて、非義の利慾に惑ひけん、土丈二が讒訴の折、若は他が證人に、做て巧に我を誣たる、その綷の趣は、我身獄舍に在りし日に、人傳ながら聞知たり。然ば今招ねども、若も鳴呼善に倶せられて、命を贈りに出て來ぬるは、則是天罰にて、怨る處なかるべし。觀念せよ、と罵りて、項を緊しく蹂躙れば、云とばかりに手脚を張て、脆くも呼吸は絕にけり。當下次團太は、側を急に見かへりて、

て、孤屋の戸口にもて來つゝ、既に倒れて片息なる、嗚呼善が上に推累ね、楚と踏へて、血刀もて、男女の頭をうち毆きて、姦夫婬婦們思ひ知るや。今さらいはんは無益に似たれど、嗚呼善は原是我家の炊妾にて、父母兄弟もなきよしなれば、我前妻の不便に思ひて、刺縫の技、手習さへ、宵々毎に敎しかば、左やら右やら人並の、女子一匹になりし比、我妻は世を去りて、内を任すべき人を得ざれば、我には年十七八の、妹なれども問試しに、生涯仕へて洪恩を、永く復さんといふ若が情願、然もあるべし、と思ふをもて、推登して後妻に、做して世帶を掌らしたり。又土丈二は、我所親の、孤兒でありければ、總角の比より我乾兒にして、相撲の技さへ敎導き、京鎌倉の勸進相撲に、名を載らるゝまでになりしは、抑是誰が庇ぞ。有恁ば素より若們は、庸常の妻にあらず、渡世の與の弟子ならぬに、恩義を忘れて密通したる、その罪饒しがたけれども、然ばかりならば世間に、似たる憨兒なきにあらず、男女ひとしく追出して、地方の住ひを禁めもせんに、若們不義の情慾に、飽かで我身を推斃し、世帶を奪略んとて、事を計較み、誣訴て、寃枉の罪に陥れたる、その惡越に極れり。倘これをしも忍ぶべくば、孰をか忍ざるべき。こゝをもて皇天后土も、這奸逆の、賊男女を容れ給はず、冥罰踵を旋らさで、目今我に屠らるゝ、惡報を思はずや。甚麽ぞや、と罵り責て、那這となく刃頭をもて、突けば

て、叫びも果ず仆れけり。その時鮠八と挑みたる、鯽三は、小角觝なれども、膂力あり、修煉あり。鮠八も亦相撲を好みて、身長高く年壯ければ、技も膂力も相應しく、敵するに足る手を盡して、左右なく推も伏せられず。遮莫命運盡たればや、其頭に繁き夏草に、意ず足を縢して、辷りて小膝を突しかば、鯽三矢場に推倒して、乘し蒐りつ胸前を、刺んとするに、刃なければ、いかにすべき、と見かへる傍に、手鞠像の圓石あり。こは究竟、と拿る手もはやく、鮠八が頭顱を荏て、續ざまに撻程に、肉破れ骨も摧けけん、死活は知らず鮠八は、頭髻斷離れ血に塗れて、聲も得たてずなりにけり。

第百十九回

來路を說て次團太驥尾に附く
餘談を盡て親兵衛扁舟を促す

登時次團太聲を掛て、やよや鯽三一霎時等ね。邪奴にもいひ知する、引導の法語あり。生煞しにして閣ずや、といふに鯽三手を歇めて、且鮠八が呼吸を揣るに、衰りて動くべくもあらねば、そが儘放ちて身を起し、落しゝ刃と刀の柄を、那這と尋ね、拿抗て、小篠を手折て、鞴釘にしつゝ、鞘に收めて腰に帶けり。爾程に次團太は、深痍に弱りし土丈二が、頭髻を抓み、曳摺り

聲も劇しく、奸夫淫婦們、はや忘れし歟。次團太なるぞ、覺期をせよ、といはれて吽嗟と駭怕るゝ、嗚呼善はさら也、土丈二も、呀阿とばかりに猿馬を飛して、振放さんと角ひしを、次團太緩めず、中一中て、前面へ撲地と蹴回せば、土丈二遙に觔斗りて、水田の畔へ倒れけり。次團太得たり、と拔晃めかす、片手なぐりの刃の電光、嗚呼善は右の肩尖を、斫られて苦と叫びも果ず、颯と濆る鮮血と共に、虚空を抓んで仰反たり。愆りし程に鮠八は、土丈二が跡に續きて、走り入まくしてけるに、今次團太と名告れる聲に、胸を潰しつ胡謀て、張燈其里にうち棄て、足に信して逃走るを、鰤三透さず、赶蒐出て、白物等、と喚はりく、近づく儘に腋挿の、刀を晃りと引拔きて、撃つ甲斐もなく鞴釘走りて、柄のみ虚しく手に殘り、刃は前面へ怪蜚て、叢裏に墮しかば、鮠八これに力を得て、身を振回し衝と寄せて、四手に亘り引組んで、攅倒さんとぞ摚だりける。爾程に土丈二は、次團太に投られたる、痛楚を忍びて身を起し、殪して逃ん、と思へども、腰に寸鐵を帶ざれば、已ことを得ず、田畔に、建たる苗頭の小杉木を、力に儘し拔拿る程に、撃んと找む次團太を、寄せじ、と拂ふ一生懸命、受つ拄えつ挑みしを、次團太焦燥て物ともせず、踏入々々撃つ刃頭に、土丈二は利手を斫られて、落す杉木を拿も得ず、逃んとするを、次團太は、走り蒐りて礙と斫る、尖鋭き拳に土丈二は、背を四五寸斫劈れ

勒の世までかへる日はなし。その氣であるき給はずや、といはれて嗚呼善も、土丈二も、憶はず倶にうち笑ひて、鈍ましかりき、何事ぞ。宿所へ還りて寛やかに、いふともいはるゝことなるに、這途中に立聚合て、長商議を、人ありて、聞知られなば爭何はせん。卒ゆくべし、といふ程に、風音し來る猛雨、投石の像く降そゝげば、男女三個の歹人は、驚きながら天うち仰ぎて、見給へ、頃者の日和癖にて、降れども星は斑點に在り。姑且等ば、必霽ん、とはいへ這頭に家はなし、いかにすべき、と袖を挿頭て、見れば去向に野猪菰屋あり。一霎時那里に立聚ひて、笠宿せん、衣な濡しそ。やよとく〳〵、と侶走りして、飛が似くに路傍なる、菰屋を今宵の死所と、知らぬ譬喩の佛の座、五行鷲腹菜蹂躙られて、七草足らぬ路傍に、齊一雨を避んとす。然ば又次團太は、小千谷へ赴く中途にて、料ずも土丈二嗚呼善が、鮠八と共侶に、這路傍に立聚合て、うち相譚ふを見つ聞つ、只是天の錫ぞ、とおもへば勇む不勝の歡び、倶に性起つ脚三を、推鎭め耳を澄して、且那奴們がいふよしを、听果てこそ手を下さめ、と深念をしつゝ足場を量り、轆釘を濕し身を潛して、なほも動靜を覘ふ程に、俄然として降る驟雨に、慌る嗚呼善土丈二們は、各々先を爭ふて、入らまく欲する野豬小屋より、次團太は又出んとしたる、迭の勢ひ猶豫なく、憶ず撲地と撞中る、男女兩個の胸前を、左右に丁と引抓みて、怒りに乘する

信と仰付らるべきを、格別の御仁恕もて、今番は御沙汰に及れず。辱く思ひ奉りて、以後を怕れ愼むべし。退り立ね、と叱られて、やうやく年季は果たれども、脾撓くはなる、小腹も立ば、城下の酒肆へ立寄て、氣附藥の諸白は、利方はやき五六合、塞ぎし胸を忽地に、開き細魚の鹽加減、そを又あはせ物にして、夜食も一碗、又一碗、飲つ食ひつせし程に、憶ずも日を消したり、といへば嗚呼善はうち笑ひて、然ばかりならば好れども、事なからずや、と愁に、思ひ過しのせられしかば、將有の折の准備になん、那這となく撈裒めて、十兩金を懷へ、歛めて來ぬる夜行に侍れば、是すら胸の安からぬ、ひとつなりしに今這里より、男子二名に倶せらるれば、後安く侍れども、今さらに後安からぬは、那人の事也かし。薄情やな、那短刀の盗兒が、東國で招了せずもあらば、思ひの隨になるべかりしに、非如追放せらるゝとも、命に恙なくも在らば、寤寐安くは侍らずかし、といふを土丈二聞あへず、开も亦念の過たる也。追放せられし罪人が、倘當國に躱居らば、又訴て結果ん。然ばかりの事を知らぬ、那人にあらざれば、一トたび封疆を立去ては、かへり來る日のあるべきや、といへば鮀八然也、と應て、張燈卸して遽しく、蠟燭の眞を撮み棄、寔に哥々の了簡妙也。人の噂に耳引立て、躱居ると聞知らば、そは亦沒怪の幸ひ也。訴稟さば搦捕られて、其度は殺されん。倘又遠く立去らば、彌

は、次團太が妻嗚呼善にて、伴當は鮠八と、喚做たる食客也。又片貝のかたよりかへり來ぬるは、奸夫土丈二なりければ、迭にはやく張燈の、花號に厶ぞ、と猜したる。嗚呼善先聲を被て、やよ主歟、何どて遲かりし。嚮に里長故老達は、うち連てかへり來給ひしに、おん身單は遺されたり。かへさの遲速は料りがたし、と聞ては胸の休らはず、立て見居て見、等不娛て、日は暮たれど、まだ顏見ねば、思ひ難つゝ鮠八刀禰を、倶して迎に出侍り、といふ間に土丈二も、鱣て近づき立住りて、そは亦要なき事なりき。知らるゝごとく今日亭午より、猛可に片貝の御舘へ召出されて、等つこと約莫一晌有餘、やうやく仰出されしは、東翁の事也かし。その趣は、木天蓼丸の、盜賊は東路なる、司馬濱の邊に在りしに、這回その罪發覺れて、那地にて梟首せられたり。恁れば素より次團太は、那盜賊にあらずといへども、木天蓼のおん短刀を、久しく家に藏め措て、訴稟さゞりし越度あり。故に那身を追放せらる。衆皆この義をこゝろ得よ。但し土丈二は、另に御用あれば、なほ姑且等奉れ。その餘は退り出べしとて、身の暇を賜ひしに、我のみ單遺されて、俊寛僧都の心地はしたれど、罪あるべうも覺ねば、却等程にまつほどに、下晡になりし時候、再び局へ召よせられて、有司達宣ふやう、若は曩に次團太を、木天蓼丸の盜賊也とて、正可に訴稟しゝに、次團太は那盜賊ならず。恁れば若も疎忽の罪あり。

とばかりに、良縁奇遇を感嘆しつゝ、この歡びに就て亦、憎むべきは土丈二と、阿嫂との爲體、箇樣々々に候とて、奸淫不軌の顚末を、具に聶き報しかば、次團太听つゝ思ふやう、我ゆくりなく犬阪主の、妙術不測の幇助を得て、蟹目御前の仁恕に遇ずは、土丈二嗚呼善に誣られて、獄裏の鬼とならんのみ。今幸ひに窮鳥の、籠中を出て棲を易るに、做す事もなく阿容々々と、這奴們を那儘在せなば、大丈夫といふべからず。要こそあれ、と尋思をしつゝ、胸の祕密を艄三に、聶き示せは、一議に及ばず。その義尤しかるべし。己も既にその意あり。悄地に小千谷へ立かへりて、共侶に本意を遂てん。那里へ到らば箇樣々々、とその進退を定るに、艄三も一刀を、帶て來ぬれば事足れり。脫落りなせそ、と悄語きつ、謀し合して、その曛昏に、身裝しつ遽しく、件の茶店を立去りて、烏夜を便りに間道より、連りに路次を急ぎしかば、小千谷と片貝の間にて、千々三畷と喚做たる、一條路まで來にけるに、夜はまだ二更に過ざりけり。時なほ早しと思ふにぞ、路傍に守る人在らぬ、野豬孤屋あれば、立寄りて、艄三と共侶に、夜の深るを等つ程に、忽地小千谷のかたよりして、伴當に張燈を、秉して這方へ來る者あり。又片貝の方よりも、張燈引提て只一個、這方を臨て來ぬるあり。這那俱に野豬孤屋の、邊にて遭遭ひしを、他們が張燈の火光に就て、相れば紛ふべくもあらぬ、小千谷のかたより出て來ぬる

の御性直を、こゝろ得の與知する也。汝が身に取ては過分き、慝る祕密の情由あれば、生涯御恩を忘るゝことなく、勿論御法度を畏みて、當國にな躱れ居りそ。倘再犯の罪あらば、その度は赦されがたかり。祕よ、この義を思ひねかし。稻戸主の内意ぞとて、言前條に及びしかば、次團太听つゝ駭嘆じて、感涙の拭むを覺ず。その歡びを述る間もなく、雜兵に追立られて、ゆくこと約莫二里許、捉られたる地方にて、檢護の雜兵は、立別れつゝ遽しく、片貝へかへり去りにけり。爾程に百堀鯽三は、片貝の沙汰を聞知りて、茶店に憩て等て在り。雜兵們のかへりゆく程に、走り出つゝ次團太を、迎て歡びを舒、茶店に憩して、携來ぬる衣兒と、腋挿の刀などを、遞與して、准備の食籠を啓きて、叮寧に薦る程に、却湯島にてありし事、料ずも那坐擊師、物四郎の幇助を得たる、首尾を告知らすれば、次團太は亦荻野井三郎に、听し祕密を聶き示して、その物四郎と喚做したるは、犬田犬川の義兄弟、犬阪毛野胤智といふ、勇士なりし事、石濱信濃路、兩所の血戰、往日又武藏の鈴茂林にて、復讐の事までも、那人の上は慝々也とて、聞たる隨に解知らすれば、鯽三大く胆を潰して、原來我恩人も、犬川犬田に宿因ある、犬士の隊にてをはしにけり。今こそ思ひ合したれ、然る緣なくば、賴めばとても、最做しがたき技藝をもて、蟹目御前の愛給ふ、獼猴を捉へ、賞に代て、おん身を輒く救れんや。さても〳〵、

馭蘭二們、件の船虫媼内が、首を斬らして、高畷なる、濱邊へ並梟にきといへり。恁れば石龜屋次團太は、憐むべし寃屈の罪にて、他が屢陳ずるよしと、這郝既に吻合せり。矧又蟹目御前の、湯島の神の示現により、過分くも次團太の、命乞を做されしに、そのおん答を那おん許へ、仰遣さるゝ餘日もあらで、反て凶變の報ありしかば、恐れながら當所の賞罰、神佛の冥慮に稱はず、罪なき民を苦め給ふ、應報にもやあらんずらん、と悄地に議するも候はむ。はやく次團太を赦免あらば、蟹目御前のおん與に、是に優たる御追薦、あるべうも候はず、と證を援き道理を演たる、諫言濃やか也ければ、然しも雄々しき箙大刀自、胸の張り弓稍弛みて、箭竹心の直かる本性、思ひ返しゝ忍辱の、鎧にあらぬ衣の袖に、落る涙を堰留難て、現悞り、あやまちぬ。恥しや七旬に、程遠からぬ老が身は、蟹目の貞實賢才に、及ざりしを、今やうやくに、思ひ合する愚魯さよ。卒さらば次團太を、今日速に赦免すべし。然れども他が木天蓼丸を、久しく宿所に藏め措て、訴ざりしは越度也。この罪あれば、封内に在ることを許しがたかり。但追放せば律に稱ん。這義を具にいひ渡しね。疾々せよ、といそがし給へば、由充は這憲斷を、愛歡びて言承しつゝ、儀のごとくに行ひけり。是等の機密を次團太が、聞知るべきよしなかりしを、追放の折稻戸の、若黨荻野井三郎が、次團太に聶き示して、蟹目御前の御仁慈と、片貝殿

て、命乞しぬる那罪囚を、放ち遣らずはなき人の、後世の障りになりもやせん。那次團太は恙もなくて、獄舎に在る歟、甚麼ぞや、と問せ給へば、然候。その義も稟上んず、と思ふものから暇あらで、問れまつるこそ本意ならね。那次團太は恙もあらず。仰によりて幾番も、拷問を逐候ひしに、陳ずる趣始に差はず。木天蓼丸のおん短刀は、船虫と喚做す、賊婦が、懷に隱し帶たるを、箇樣々々の事により、一旦船虫を捕へし折、那短刀は、次團太が、宿所に遺し置きたるを、事に紛れて訴稟さず。幵は土丈二に誣られて、稟解べき證据を得ざれば、免れがたく候、と陳ずるのみに候へば、虛實を定め難たりしに、昨日五十子の城内より、來ぬる脚力の雜兵の、賣弄奇談を听候ひしに、料ず件の實を得たり。那船虫は去歲の夏、當國を迯去て、洋流ひて武藏なる、司馬濱の邊に在りしに、積惡の冥罰にて、奸夫媼内と共侶に、活ながら暴牛の、角に掛られて、突殺されたる。背に他們が年來の、積惡を寫してあり。是により船虫が、下野の赤岩に在りし時、非義奸曲の事破れて、犬村角太郎に追放され、更に緣連に伴れて、下野より武藏のかたへ、倶に赴く旅宿にて、緣連が携たる、木天蓼のおん短刀を、竊拿て走りし事まで、この時剏て見れしかば、觀る者都て驚き怕れて、神所行なめりといはぬはなし。この事はやく五十子の、城内へ聞えしかば、道節們が退去の後、守城の頭人根角谷中二、並に美田

はず、必同名異人にて、這回毛野に助劍したるが、眞の莊介小文吾なる事、今さら疑ひなきもの歟。人情をもていふときは、他們は豐島の殘黨たる、犬山道節に荷擔して、管領家を逐ひ奉り、且信乃が火攻したる、五十子の城に聚合ひしは、憎むべきに似たれども、亦公道をもていへば、人各忠義の與にす。他們は都て義士なれば、那常武縁連們と、日を同うして論ずべくも候はず。然るにても痛はしく、惜みてもなほいと惜きは、蟹目御前の御落命、今さら稟も疎鹵なるべし。誠や那おん家の蠹毒たる、佞人縁連們を刈除んとて、守如に仰合されて、微妙く謀らせ給ひしに、事傳聞の差錯にて、慍りて刃に伏し給ひぬる、貞烈無二のおん誠心の、この折に稍見れて、管領先非を悔給ひしは、亡後までの御大功と、誰か思ひ奉らざるべき。いと有がたく候、と稟すを箙大刀自は、听つゝ涙吒みて、然ばとよ、その事なれ。嚮に蟹目が東國より、はる〱と使价をもて、木天蓼丸の事に就て、久しく禁獄の聞えある、次團太とやらんが事はしも、湯島の神の御示現侍り。罪なき者のよしなるを、神こそ知せ給ひたれ。いかで許させ給ひねかし、と最叮寧に書哀て、おこせし消息此にあり。开を疑ふにあらねども、なほ又思ふよしあれば、速の沙汰には及ざりしに、幾程もなく五十子の、凶變はやく這里に聞えて、胸安からざる事のみなれば、けふまでは默止しかども、然しも蟹目が生前に、神の示現を畏み

級は腐亂して、眞僞詳ならねども、額藏の莊介が、所持したる兩刀は、落葉小篠にあらざれば、首級も小文吾莊介と、姓名同じき別人ならん、と千葉大石兩家より、意見を演て、那兩刀を、返されしよしを、今さら思へば、去年這里にて誅しゝは、必同名異人にて、這回毛野に助劍の、聞えある兩人こそ、實の小文吾莊介ならめ。然るにても犬阪毛野胤智は、就中無雙の猛者也。去歳の六月信濃路にて、鄕武豐實を擊果しゝも、他が所爲ならんといふ者あり。今茲は武藏の湯島にて、蟹目前の內意に依りたる、河鯉權佐守如に相譚れて、他が父の仇と聞えし、龍山緣連們を討捕たる、事情を今又思へば、現歹人にはあらざるなめり。是によりて再思ふに、曩に毛野に擊れたる、千葉の權臣、馬加常武、及額藏の莊介們、その友幾名にか擊れたる、大石生の陣番丁田町進、幷に卒川庵八郎軍木五倍二、簸上宮六們が、奸詐舊惡恁々なりき、と死後に噂をしぬるもの、乃者多くて證据もあれば、玉と石とを分別したり。しからば、初憎う思ひし、額藏の莊介も、又犬田小文吾も、執念深く祟るべき者にはあらず。但他們は豐島の殘黨、犬山道節が義兄弟にて、倶に謀りて管領家を、危うせしのみ恨むべし。この義を何と思へるや、と問れて由充阿とばかりに、謹て答まうすやう、最有がたきまで辱き、御意を承り候ものかな。實に賢査し給ふごとく、去年誅戮せられたる、那莊介と小文吾は、かの折も稟上しに錯

かりしに、纔に隔一日歴て、扇谷家の、忍岡の別館より、亦復火急の注進あり。則是別義にあらず。往る正月二十一日に、蟹目前竝に河鯉守如は、故ありて自殺の事、又那權臣緣連們は、物四郎の犬阪毛野に、鈴茂林にて撃果されし事、又毛野に助劍したる、犬田犬川の武勇の事、又恁々の義によりて、管領家も那茂林邊にて、豐島の殘黨犬山道節、幷に犬飼犬村們に、襲伐れ敗北して、高畷にて危窮の折、河鯉孝嗣が敵を拄て、主君を拯ひ奉りし事、又五十子の城はその折から、犬塚信乃に火攻せられて、一旦落城したれども、犬士は城に據らずして、はやく退散しける事、又管領定正主は、辛じて虎口を脱れて、忍岡の城に在する事、且河鯉父子の忠誠、此に至て虛しからず、蟹目前と守如は、事傳聞の錯誤にて、惴りて自殺に及びしかども、毫も越度なかりしよしを、管領肇て感悟あり。先非を後悔の事までも、漸々に告らるゝ、那地の急使片貝へ、著到三番に及びしかば、箙大刀自駭き給ひて、且その歎き大かたならず、軈て由充を召よせて、愀然として宣ふやう、いぬる日蟹目が自殺の事、那身に愆なかりしよしを、管領悟らせ給ひなば、そは切てもの事ながら、なほ訝しきは犬阪毛野に、助劍しつと聞えたる、犬田小文吾犬川荘介們が事也かし。件の兩個の尷尬兒は、去歲の六月誅戮して、石濱大塚兩所の使者、馬加鄉武丁田豐實們に、渡し遣したりけるに、件の鄉武豐實は、歸東の途にて命を喪ひ、小文吾荘介が首

財多からねば、計の出る所を知らず、いかにせまし、と思ひ不娯つゝ、憾しき日を彌る程に、次團太も亦女房嗚呼善、乾兒土丈二に誣られて、竟に羑里の人となりけり。しかるに小文吾と莊介は、長尾家の良臣なりける、稻戸津衞由充が奉りて、死刑に行ひしとも聞え、或は又稻戸由充が、悄やかに計ひて、相肖たる罪人を、斬首して事を濟し、件の兩個の犬士をば、他鄕へ落し遣したり、と聶き告るもありしかば、次團太半信半疑して、哀歡みづから判よしもなく、心許なく思ふものから、果は其身も井に墜たる、甑に似たり。端なく、人揚ざれば出る日なきを、鮒三がうち歎きて、いかで荏土へ赴きて、便りに就て誘へなば、救るゝ所因あるべき歟とて、今茲正月の中旬より、獨悄地に東路に、杖を曳つゝ湯島なる、天滿宮へ詣し折、藥を鬻ぐ坐擊師の、物四郎とか喚做す才子に、値遇して料ず幇助を得たり。折から扇谷家の夫人蟹目前、那神社へ詣給ひしかば、物四郎の愁訴により、次團太が助命の願ひを、立地に許容あり。伴當妻有復六を、火急の使に立さして、越路へ遣し給ひしかば、鮒三も开が後に跟て、倶に越後へ還りけり。却是までは豫より、看官承知の事ながら、その線筋を援るのみ。爾程に簸大刀自は、息女達多かる中に、殊に鍾愛深かりける、蟹目前の、東國より、次團太を赦免の懇望、神の示現のよし聞えて、消息叮寧なりけれども、そをしも非となほ疑ふて、速には恩赦の沙汰な

快立ね。といそがせば、次團太は承歡びて、孝嗣に口誼を舒、却䑸三を相倶して、親兵衛に從ひゆく程に、夜はなほ酉の中刻にて、河水清き夕月夜、白晝の如く明かりけり。爾程に犬江親兵衛は、孝嗣次團太、䑸三們を相伴ふて、嚮に出船を問試ける、艄公の宿所に赴きて、又恁と談ずるを、艄公聞て、しからんには、追風を等つまで奧坐席にて、各優に横臥び給へ。折から奧の一室には、病人の候へども、その次なる坐席にて、夕饌をまゐらせん。やよ誰か在る、案内をせよ。といふに奴婢們はこゝろ得て、燈燭秉りて親兵衛們を、奧坐席に請慇して、はやく夕饌を薦しかば、親兵衛を首にて、孝嗣次團太䑸三們は、飽までにうち喫ひて、蕭やかに相譚ふ程に、親兵衛は身を起して、重紙戸の透間より、隣室を偸看るに、旅客なるべし、只一人、衣を被ぎて臥たるが、その髻頭のみ才に見えて、熟睡しにけん、音もせず。枕方なる行燈の、火光いと幽にて、この餘は人影あることなければ、軈て團坐にかへり入りて、却孝嗣次團太們に、恁々と聶き示して、迭に聲を高うせず。登時親兵衛は、次團太師弟を問慰めて、他が來路の顚末を、具に知まく欲するに、次團太も亦折を得たれば、䑸三と共侶に、我身の來歴恁々也とて、詳にぞ報にける。事の趣を原るに、去歳の夏小文吾莊介が、片貝の獄舍に繫れし折、次團太單驚愕ひて、拯拿まく欲せしかども、力を勠する友もなく、威德もなく、錢

を見奉れば、十七八の少年にて、武藝力量、凡夫にあらず。倘別に爾る筋の、御舍弟もや候。と問へば親兵衛含笑て、疑惑はその以なきにあらず。洒家年四才の秋、必死の災阨ありし折、過世の母にてをはします、伏姫神の冥助により、恙なかりしのみならず、それよりして今玆まで、六稔安房の富山に在り。見らるゝ如く身長さへ、心術さへ大人備しは、仙境餌藥の故なるべし。然ば神女の示教により、我七犬士の上はさら也、叟の事すら粗聞知りて、逆こゝろを得ざる事なし。こゝをもて、叟は不測の窮阨ありて、片貝（越後國三島郡）の獄舍に繫れしを、この春正月某の日に、未見の由縁の幇助により、免るべきよしあるまでは、皆是神女に示教せられて、聞知ることを得たれども、我も亦故ありて、近曾出世を許されて、姑且國主に仕へしかば、爾後の事を知らず。知ざる事は尋問ふべく、猶我上も詳に、解示さまく思へども、這里にて祕密を談じがたし。といひつゝ孝嗣を見かへりて、喃叟、我倶したる這一路人は、犬士の隊にあらぬものから、こも忠孝の一箇士にて、名を孝嗣と喚做たり。浮世を潜ぶよしあれば、緩やかにこそ告知さめ。洒家は火急の大事ありて、今宵水路を上總なる、舘山へゆかまく思ふに、丙夜ならでは追風を得じ、と艄公がいふにより、漫行をしたりし甲斐に、料ず叟に邂逅して、恁は迭に慰めにき。嚮に我相譚ふたる、艄公の宿所に赴きて、出船を等つゝ餘談を盡さん。快

たる、歡びは短辭に、盡すべうも候はず。然ば君が大力なる、頭立たる兩個の歹人、五十三太素手吉とやらんを左右に受て、投懲し給ひし折、名告せ給ふにより肇て知りぬ。和君は安房の里見殿の御内人、犬江某主にて在しゝよしを、思へば不審なきにしも候はず。因て尋まつらんと欲す。和君は倘犬田小文吾、犬川莊介と喚做したる、兩個の勇士を豫より、知し召れ候はずや。と問れて親兵衞うち頷きて、然也。その犬田氏は、我外小父にして、犬川も亦我與に、同因果の義兄弟、蕃八犬士の一人也。原來犬田と犬川生を、相識る和主は越後なる、小千谷の郷の逆旅主人なりし、家號は慥に石龜屋次團太叟にあらざるや。と問回されて、呆るゝまでに、眼を睜り、顏うち長瞶て、什麼いかにして我實名を、はやくも猜し給ひけん、奇也々々。と嘆唱しつゝ、憶ず側を見かへれば、下露も亦訝りて、面を注しつ猶左に右に、こゝろ得がたくぞ思ひける。當下上風の次團太は、又親兵衞にうち朝ひて、這里に侍る後生は、小可が相撲の弟子にて、實の名は、百堀鮒三と、喚做したる、心術老實にて、機密を洩すべくもあらねば、介意をなし給ひそ。就てなほ不審あり。去歲の夏犬田主の、我宿所に淹留の程、眼病の折などには、特更におん身の事を、云云といひ出て、うち不娛たまひしを聞知て候に、姪の刀禰犬江和子は、當時七八才ばかりの穉兒にて、仂き時神に躲され、往方知ざるよしなりしに、目今和君

三太に目を注し、この時までも自若として、孝嗣と共侶に、勝負誰何とうち目戍りたる、親兵衛に近づきて、聲をも被けず左右より、肱腕丁と拉ぎて、推倒さんとしてけるを、親兵衛騒がず振解きて、左右に抓む兩個の項髪、手脚を一度に挐して、胭を拂て投しかば、五十三太も素手吉も、ひとしく遙に放下されて、河へ汆と落たりける。當下親兵衛聲高やかに、鼠の毎我名を知ずや。安房の里見の御内人、犬江親兵衛仁なるぞ。若們頑愚、非道の冥罰、本事を見せて咸懲さん、其首な退そ。と罵りて、群立つ中へ面も振らず、走り蒐れる勢ひは、虎の羊を駈る像く、當るに儘して打倒せば、孝嗣も亦倶に拺みて、敵手を撰まぬ白打の精妙、組しては投げ、投伏せては、四方に當る這那兩個の、勇士の幇助に、上風下露、膂力始に十倍して、旣に怯れし破落戸們を、搔抓み打倒す、劇しき四個の挐きに、誰か一人も怺うべき、允せ〳〵。とばかりに、逃水なれや陽焰の、命を辛く免れて、一人もあらずなりにけり。爾程に五十三太素手吉は、親兵衛が鬼神を欺く、勇力武藝に酷く懲りて、左右なく水際に泅ぎも著ず、流に儘して三四町、川下よりぞ逃たりける。然ば又上風下露は、走る破落戸們を赶棄て、舊の處にかへり來つ、恭しく親兵衛に、うち對ひ地上に跪居て、上風が先いひけるやうは、寔に不慮の災阨にて、敵手多勢に候へば、脱れがたしと思ひ候ひしに、御兩君の御助力にて、事はやく平ぎ




上風
三觀鼻に
上風乱妨に
あふ

横にする、招牌の竿に手を掛て、抜拿んとせし程に、五十三太透さず走り蒐て、腕を抓て聲高やかに、這奴も似たる痴漢也。乗掛たる出入の湊を、尻に帆揚て逃ればとて、那地へか逃さんや。是を啖へ。と榮螺に似たる、握拳を振抗て、打んとすれば下露は、その手を丁と捉禁て、衝と跟入て掖組みしを、素手吉、吁嗟と見かへりて、掖仆さんと背より、戕むを上風推隔て、受つ拄えつ相挑む、四拳は山風に、嵒根の蕨搖めきて、小篠を拂ふに異ならず。上風は年老たれども、素より相撲に修煉あり。下露も亦素人にあらぬ、技さへ力剛ければ、五十三太と素手吉は、思ふにも似ず推著られて、克を拿ること易からねば、慄ず兩聲ふり立て、大家出よ。と喚れば、群集の中に立雜りて、拳を握りし、五十三太們が、伙家の破落戸三四十名、咄と噇きて三七二十一に、走蒐れる破竹の勢ひ、衆人呀阿と駭怕れて、素破鬪諍ぞ。とばかりに、いめき頽れ立噪ぎて、只蟢子の雛を散すが像く、往方も知ずなりにけり。爾程に破落戸們は、齊一五十三太素手吉を、尉助て競ふ無法の突戰、先に戕むは、群立蒐て、兩個の敵手を打仆さん、と惴るを上風下露は、搔潛々々、拳を避て多く打れず。迹に續きし破落戸們は、招牌発兒膏藥筥まで、打摧き河へ放下して、連りに狂ふそが中に、素手吉は親兵衞を、只是逆旅の少年なり、と思悔り、生拘り懲らして、頑童にせばや、と火急の情慾、兩個の敵手を多勢に儘して、五十

下風に立つ、乾兒乾弟は舛もて量り、箕をもて簸るとも容易くは、量り盡さるべくもあらず。中にも特に勝れしは、枝獨鈷素手吉と喚做すあり。我肉身の弟にて、船を駝ひ山を拔く、膂力を誰とて知らぬはなし。約莫坂東八箇國の、關相撲を一膝にして、立合するともいかにして、克ふべくもあらざるに、口に本錢の沒らねばとて、いひたき隨の長談義、乞兒相撲の內拿は、寔に沙汰の涯り也。恁いはるゝが朽惜くば、立合て我と勝負せよ。快立ずや。と飽までに、罵り哮る勢ひに、惹れて枝獨鈷素手吉も、群集の中より找み出、親兵衞にうち向ひて、阿侍年少ながら、おん身も心づきなき所行也。乞兒相撲に一兩といふ、金花開せし酔興より、這云品は起りたり。金とり復して快いなずは、鬪諍の側杖打れんず。と諫すを親兵衞冷笑ひて、こゝろ得ぬ事をいふものかな。我も亦行人なれば、地方の私法を知ねども、我は我が盤纏をもて、這經紀に拿するを、和郞們に干る事にはあらず。といふを素手吉聞あへず、金は和主が盤纏でも、地方の習俗を破りては、祟を脱れず、敵手也。覺悟をせよ。と敦圉くを、上風見かへり、喚禁めて、各云品ありとても、その方さまは觀場兒也。然も少年なるものを、敵手喚り大人氣なし。鄙語にいふ無理の前には、道理は退く、自然の勢ひ、然る發憤しき情由あらば、明日は他鄕へ走るべし。下露東西皆拾收けよ。はやく旅宿へ罷るべし。といはれて萩野下露も、立しき腹を

眼を瞪らし向臑蹶出して、上風にうち對ひ、這奴甚大胆也。若は誰が許可を受て、這里へ出張て賣買をするや。約莫這漁父街頭にて、始て生活をしぬる客商は、必先咱們に罇を饋り、或は周折を送りなどして、しかして後に生活をすなるに、我まだ知らぬ經紀兒に、錢賺をさすべくもあらず。この故に我始より、衆人を警て、若が膏薬を買せざりしに、那國の馬の骨やらん、牛の屎やらん知らねども、見るには足らぬ似而非技に、金を取する烏滸人ありとて、开を亦受る該はなし。快その金を返さずや。と嚼著傪く罵るを、上風聞て毫も撓まず、身を構へうち向ひて、开はいはるゝことながら、和主は地方の老侠にもあれ、咱們は他郷の旅客なれば、知ざるを爭何はせん。然る人情ありとても、錢を賺て後にこそ、欲する隨に贈りもせめ。然るを和主が外醋氣にて、人を禁めて我膏薬を、買せざりしは非道也。況那方樣の恩貺を、和主が差配すればとて、いかにして返すべき。抑和主は何人ぞ。と問せも果ず大漢は、いよ／＼聲を苛立て、噫老耄奴が唔たり。淺草寺の觀音を、いまだ知ざる者はありとも、誰か我名を知ざらん。快垢拿に耳屎を、搔攫して聽聞せよ。武藏下總兩國河の、西の岸畔に隱れなき、向水五十三太と、喚做す俠豪は我事也。親の時より住田河、同じ流れで釣漁を、生活にしぬるのみならず、鬪諍の裁判、色情の受授、一旦人の憑みし事を、我撮合て、成ざるはなし。こゝをもて我

り。と辭ふを親兵衛推禁めて、恁ばかりの東西に口誼は要なし。君子は斷金の交あり、路上の人も知音と思へば、蓋を傾けて故舊の如し。豈白頭まで新なる、浮薄の交りに慣んや。といふに上風推辭得ず、且感じ且歡びを、述てやうやく收れば、下露も亦歡びて、盆兒に乘たる膏藥を、そが儘拿て親兵衛に、遞與さんとせし程に、佝立稠たる衆人の、內中に一個の大漢あり、忽地訛聲振發して、やをれ等ね、いふよしあり。と喚禁めつゝ隊をはなれて、土苞の邊に近づきしを、大家倶に訝りて、齊一見かへる夕月夜に、紛ふべくもあらざりける、この大漢の爲體、面黑く眼圓に、鼻は低うして左右に開き、唇厚くして髭髯に包れ、月額延て、春山の、結纓草より猶繁く、鬢毛亂れて、百足の、蜈蚣を串に貫きたるに異ならず。身には澁染の袴の夾衣を被て、片褄を叩く端折り、白栲の犢鼻褌の、尙巳時可なるを、前垂絡に結做して、直木理の梧桐の下駄の、小肉俎の似くなるを穿轟し、腰には緋の縮緬の、圓括の細帶を、右へ斜に片結びして、左の肩には、算盤纈の手巾をうち掛しを、拿直し項に綰ねて、搖動ぎ出たる面魂、酒氣芬々と、人の鼻を、穿つばかりの半醉半醒、人を物ともせざりける、地方實生の勢ひは、好て怒り好て爭ふ、煩惱口舌の祟鬼ならずは、蠻蜀二國の城隍歟、と思ひ怕るゝ衆人は、事いで來ぬ、と阽めども、見果ざらんもさすがにて、立も得去らで、そが儘在り。當下件の大漢は、

體を、似而非技ならず、と感じ思ひし、親兵衛恢ず、孝嗣に、目を注しつゝ拔み出て、こや〳〵と喚近づけ、我も前より這里に在りて、汝達が技藝を觀たるに、相撲の故實も杜撰にあらず、立合も亦法に稱ひて、老人には多く得がたき、修煉精妙、賞するに猶あまりあり。开を料ずも見つゝ聞つゝ、空骨折して、只やは已ん。我その膏藥を皆買んず、什麼何ばかりの價ぞや。と問れて上風笑しげに、下露が答を等ず、遽しく立迎へて、こは辱きおん花主もをはしましけり。今日携たる膏藥は、百盒許もや候はん。價は永樂壹貫文にて、事足るべく候へども、然ばかり多きは御用もあらじ。縱一盒召るゝとも、百十數人なる這内中にて、一個の花主と思ひ奉れば、面目この上や候べき。下露一盒まゐらせよ。といふを親兵衛聞あへず、否とよその膏藥の、多少に拘る事にはあらず。貴人御覽の相撲には、勝者には纒頭あり、平民も亦賞錢を取らするを、俗に命けて花とぞいふなる。その膏藥は左まれ右まれ、和主が技藝のおもしろさに、いで〳〵花を拿せんず。といひつゝはやく、懷より、圓金一枚拿出して、卒とて遞與すを上風は、呆貌して左右なく受ず、こは又意外の造化也。小可一儒士に聽ることあり、士は己を知る者の爲に死し、女は己を歡ぶ者の爲に、貌るといへば、知己とし思ひ奉る、刀禰の恩睨を云云と、推辭稟すは倒に、人を知ざる者に似て、反て無禮に候はん。なれども其はいと多か

よく覽せ。他が恁々の手を用て、推んとするを、恁受て、幾番も疲らかし、箇樣に投るは、某の手也。といひつゝ撲地と擲仆し、又掖起し拿組して、此は某の手、彼は亦、某の手也。といひつゝも、投ては起し、起しては、拿組む修煉、老相撲には、有がたかるべき身の動止、四十八手の祕術を惜まで、その趣を盡しゝかば、看官憶ず聲を合して、咄と譽たる感嘆に、一霎時は鳴も已ざりけり。登時荻野上風は、脱たる衣を手ばやく著て、又衆人にうち對ひて、目今覽せしごとく、老人酷く骨を折りたり。願ふは膏藥を召れ候へかし。といふ間に下露も、はやく衣被て帶引結び、貝籠の膏藥を、堆高く積乘したる、盆を拿て衆人の、身邊に近づき、立向ひて、刀禰達家傳の膏藥を召れずや。撲傷折傷、攧撲刀瘡に奇妙也。癰疔癤、もろ〳〵の、腫瘡にも奇效候ぞ。召れずや召れ候へ。と呼掛々々兩三遍、那這となくうち繞りて、只顧に請薦れども、咸逡巡をしぬるのみ、買んといふ者あることとなければ、上風望を失ひて、憶ず聲をふり發し、やよ下露、闔ねおきね。咱們當所へ初て來て、けふ生活の開手なれば、殊更に骨を折て、衆人達を慰めしに、人の山成す、群集に似げなく、纔に一盆十文の、膏藥を買ふ人なき歟、さりとては情なし。闔ねおきね、日は暮れたり。今宵は旅宿へ立かへりて、明日は他郷へ走るべし。益なかりき。と呟けば、下露も腹立しさに、嘆口氣しつ手持なく、稍退んとせし程に、前より衆人と立雜り見て、上風が爲

その技に修煉して、みづからも拿り給ひにき。況當時の武士たるをや。東鑑を檢するに、正治二年、五月二日、羽林賴家卿、小壺の浦に遊覽の折、常盛と義秀と、兄弟臨時の相撲あり、常盛既に負んとしけるを、江馬殿（義時）座を起推隔て、勝負を分たず、持にしてけり。常盛衣裳を著るに及ばず、賭物に牽れたる、おん馬にうち跨りて、そが儘逐電しつ、と見えたり。又宗尊親王將軍たりし時、建長六年、閏五月朔日、執權北條時賴朝臣の沙汰として、御前に於て、相撲の勝負を召決せらる。陸奥掃部助奉行たり。その相撲人、左右十名、皆在鎌倉、歷々の武士なり。（姓名は略之）勝たる者、持なる者は、御前に召て、御劒或は御衣を賜ふ。出席の雲客これを執れり。負たる者は、堪否を論ぜず、大盞もて御酒を賜ふ。各三度浮られけり。御一門の諸大夫等、この酌になん達れける。凡興あり亦感あり、時の壯觀なりといふ。亦是載て東鑑に在り。是より以降當代まで、相撲の賞玩衰へず。なれども近き世の事は、刀禰達知し召べければ、口狀は是まで也。恁はいへども小可は、寔に無筆文盲なれば、古昔の事を考て、囀るべき力はなし。少かりし時從ひし、師傅を口妄似しぬるのみ。漏しゝ事も錯へる事も、あらば允させ給へかし。既に日の暮候へば、賣買の打止に、弟子下露を敵手にして、立合の手を御覽に入れん。やをれ下露、快立ね。と喚れて應と答つゝ、衣脱棄て立對へば、上風軈て拿組て、刀禰達

の舊家と聞ゆ、今に至てこの方の師表たり。扨又武家執制の世になりては、平家世盛なりし時、伊豆國の人氏也ける、河津股野が角力の事は、曾我物語に見れて、世の人多くこれを知れり。又鎌倉の右幕下（頼朝）のおん時に、長居と喚做す相撲人あり。約莫關の八州に、克者なしと聞えしかば、頼朝卿の所望に依り、秩父重忠が立合ひしに、長居は酷くうち負て、骨を折れて癈人になりぬ。この角力の折、重忠は、烏帽子水干搔繕ひて、長居と立合けるよしを、古今著聞集に載せられたれば、昔貴人の御前角力は、裸體になる事はなかりけん、と思ふ人もあるべけれど、至尊御覽の角力たりとも、立合ふ折は、衣裳を著ず、その證文は上にいへるが如し。當時重忠の爲體は、敵手微賤の者なれば、故意衣裳を解ざりしならん。この一事をもて昔の角力は、裸體にならずといふべからず。又古今著聞集には、中葉の相撲人の、姓名多く見えたりき。そが中に腹攪と喚做す、名譽の相撲あり、天窻を敵手の腹に當て、攪りて勝ずといふことなければ、この綽號をなん得たりける。この時中納言伊實卿も、角力を好み給ひしかば、父大臣伊通公、开を懲さん爲、腹攪と立合して、勝負を試給ひしに、腹攪は伊實卿に、四辻を拿られて、頸骨も、折るゝ可に引著られ、攪んとするに攪り得ず、弱りて虛俯に倒れしかば、恥て逐電しつといへり。因ておもふに、昔の搢紳は、武弁ならぬも殊更に、相撲を好み給ひぬれば、

撲を拏らして叡覽あり、大隅隼人勝にき。と亦天武紀に載られたり。是よりの後、世々の朝廷、相撲の節會を行はれんとて、諸國の力士を召すを、部領使と唱へたり。その力士等は近衞に隷られ、拔萃たるを最手に補し、次を腋手助手に補し、なほ勝れるを拔手とす。後の相撲に推當れば、最手は大關、腋手は關脇、助手は小結、拔手は即横綱傳受の儔に似たるべし。然るを中葉に至りては、最後に執るを關といへり、關は所云うち止にて、名目にはあらざりしを、後世轉じて、大關の稱呼あり。昔は相撲人を分つに、左右と唱へて、東西とはいはず。且その爲體、犢鼻褌の上に、狩衣下袴を著て劍を挿し、立合ふ折に是を解て、裸形に倣れる事、今の相撲と異ならず。但し左右の爲體、各聊同じからず、左は葵花を挿頭とし、右は瓠花を挿頭とす。花は即綵剪也。左右或は紐を差し、或は紐を開きて帶に加え、或は袴を著ると、著ざるとの差別あり。その作法多端にて、事は西宮記、并に裏書、江家次第、并に裏書、吏部王記、北山抄等に見えたるを、今悉く引出んは、おん耳煩しく思召れん。こは只その崖略のみ。但し昔の内取は、後世の地拏花相撲の如く、左と左と合し、右と右を合するをいふ。召合は御覽の相撲也。又立合は、後世にいふ行司の事にて、弓をもて指揮して、その勝負を定る也。後世弓を團扇に代にき。古より近江の志賀氏、及吉田氏これを掌る。神代よりの名族にて、寔に無雙

凍瘡刀瘡にも、用れば亦妙也。却賣買の御愛敬には、此なる弟子、萩野下露を敵手に立して、捔力の手合を、電覽に欵まつらん。小可も其昔、年壯なりし時は、捔力を好み候ひしに、既に筋力衰へて、いふかひあらず候へども、その儔ばかりは左も右も、仕り候はん。晷も今は我年歳に似て、はやく暮景に及ぶものから、幸ひに夕月夜にて、天に一朶の雲もなければ、かへさを急ぎ給はざる、刀禰達はなほ在して、拙技を覩せ。先や捔力の來歷故實を、聊演述仕らん。といひつゝやをら退きて、凳兒に尻をうち掛て、扇子を笏に、うち咳き、抑捔力の濫觴は、むかし垂仁天皇の卽位七年、當麻邑の勇悍士、名を蹶速と喚做すあり、その筋力角を毀き、鈎を伸べ鼎を擧ぐ。天下に一箇として、敵手なし、と聞えしかば、天皇この義を知食、倭直の祖、高尾市を勅使として、出雲國の剛力士、野見宿禰を召上し、隨卽當麻蹶速と、捔力を拿して叡覽ありしに、野見宿禰は手煆煉にて、膂力も蹶速に捷りけん、蹶速竟に蹶仆され、脇骨胸骨踏折れて、叫びもあへず死でけり。宿禰はこの恩賞に、蹶速が地を賜りて、そが儘皇都に召置れ、朝廷に仕奉りぬ。こゝをもてその采邑に、腰折田と喚做す村あり、そは蹶速が舊地なるよしを、垂仁紀に載せられたる、本文に據て推量るに、當時の捔力は足を抗て、相蹶ることを旨とせり。この後天武天皇の十一年、秋七月、隼人來朝しける折、阿多隼人と大隅隼人に、相

第九輯 巻之十五

第百十八回

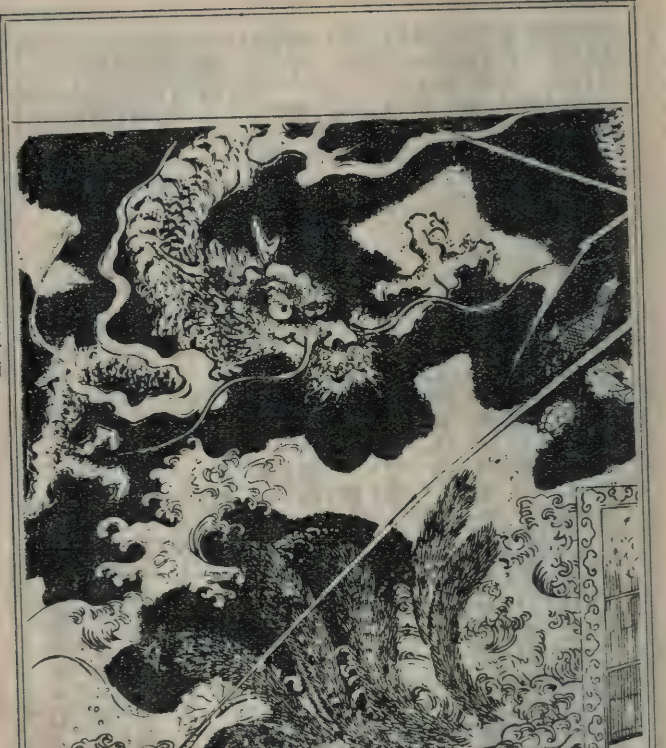
兩國河原に南客北人に逢ふ
千千三畷に師弟奸婬を屠る

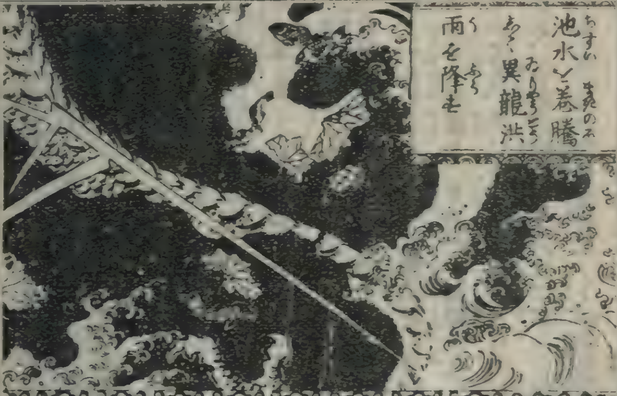
却說又邪逆旅經紀人は、聚來る人をなほ等貌に、やをら扇子を推啓きて、胸下を徐やかに、うち扇ぎつゝ在りける程に、既に沒る日を見かへりて、遽しく扇子を疊み、犢鼻褌に刺夾みて、找み出恭しく、聚人にうち向ひて、東西々々、南北係て、愙までに辱く、光臨を賜ひぬる、四方の君子達聞し召れよ。烏滸がましうは候へども、小可は旅より旅に、世渡るものにて候へども、當所へは初度の見參、然も今日より賣買の、開場で候へば、いまだ知せ給はぬも多かるべし。といひつゝ扇子を拔出し、逆手に叩く指示して、是に建たる招牌にて、崖略は知し召れけん。小可家傳の膏藥は、捔力の開祖と世にしるき、野見宿禰の神方にて、撲傷折損、搨痍に即效あること、風の塵埃を拂ふより速也。價は一盒永樂十文、貯置せ給ひなば、怪我不慮瘡に醫を招かで、重寶此より宜しきはなし。又只撲傷のみならず、癰疔癤、無名の腫瘡、癉

三十言を寫したる、畿形なる揉紙の招牌を、眞砂地に推植て、なほも寄來る人を等たり。畢竟這逆旅經紀人、恁地に人を欄して、甚なる枝を做すにやあらん。そは次の回に、解分るを聽ねかし。

に似たる水澪建り。仰ぎて西南を眺れば、夏の富士いまだ装を更めず。遙に東北を省れば、翠の筑波、尙霞を殘せり。武總兩國の都會にあなれば、海舶多く錨を卸し、商漁那這に軒を比べて、世渡り易き福地になんありける。然ば又這河邊に、三觀鼻と喚做す出崎あり、什麽何等の由來にて、這名あるやと原るに、看官知らざる所あり。約莫這水際に、翹て觀るときは、右は富士、左は筑波、前面は葛西の曠野まで、杳渺として障るものなく、只一覽にて、三箇の眺望あり。因て土人字して、三觀鼻と唱へたり。鼻は卽方言にて、猶出崎といふがごとし。然ばこの出崎には、千里鏡を貸す茶店あり、飯と酒を鬻ぐ小店もありて、邊鄙に似げなく熱鬧ひたる、折から人許多立聚合て、蟻兒の甘きに附くが像し。親兵衞と孝嗣は、今這出崎を過る程に、幵を那なるや、と訝しさに、心ともなく立寄て、稠人を搔分きつゝ、找み近づきてよく見るに、主僕とおぼしき老壯兩個、似而非技をして人を立せ、をさ〳〵膏藥を賣まく欲りする、逆旅經紀人にてぞありける。そが中に年齡、六十ばかりなるらんと見ゆるは、東人にて、年歲二十有餘なるは、從者なるべし。主僕俱に遠山形なる、染木綿の夾衣を、うち披りて帶をせず、白栲の犢鼻褌を、高く緊しく引結びて、跣足にて雙立たるが、地に畫して土苞に像り、そが傍に、天朝捔力鼻祖、野見宿禰、家祕神方、撲傷折損撮痍妙藥、荻野上風、相傳精製といふ、

共に舘山と喚做したる、城の名も亦同じ。袷を思ひ恰をおもへば、造化の照對あるに似たり、事吉兆となすべき歟。兩國河まで快退きて、船を央ふて上總へ渡さん。和殿の意見甚麼ぞや。と問へば孝嗣再議に及ばず、听くがごときは、前後同瑞、討論合考、寔によしあり。這回も大功疑ひなし。卒給へ、倶にいそがんとて、東を投してぞ立出ける。爾程に犬江親兵衛は、孝嗣を相伴ふて、兩國河原へ赴く程に、那里は雨のふらざりける歟、大地は乾る隨にして、歩の運びに障りなければ、思ひしよりもはやく來にけり。故ら日長き四月の天は、暮んとしつゝまだ暮ず。軈て這兩國河の岸邊なる、艄公の宿所に呼門ひて、恁々と相譚ふに、艄公答て、上總へいなんと欲りし給はゞ、只今は風も歹く、潮も亦宜しからず。意ふに這眞夜半には、必追風になりぬべし。波の上の事はしも、船で世渡る我們すら、自由ならぬが常なれば、急るゝとて爭何はせん。等んとならば、奥に坐席あり、那里で甘坐ぎ給へといふ。早の商量整ねば、親兵衞心焦燥て、外にも艄公なからずや、と思へば軈て立去て、又孝嗣と共侶に、便宜の出船を索るに、皆いはるゝことと相似たり。困じ果つゝ亦初の、長が宿所へかへりゆく。漁村の柳風に靡きて、蓑衣乾す門の夕日影、苫屋の煙天に滅て、友呼ぶ鷗浪に浴す。或は蒹葭の戰ぐ處、魚を踏む白鷺見れ、一葉繋ぐ械の頭には、羽を曝す鵜鴣在り。長汀弓の像く入江に續き、浮洲箭




池水に蟇騰
異龍洪雨を降す


政木茶店親兵衛須臾孝嗣憩

へ。昔年嘉吉の鬪戰破れて、結城の城廓没落の折、我老侯義實朝臣、當時は尙弱冠にて、里見又太郎と喚れ給ひしが、遺訓に從ひ、九死を免れ、氏元貞行主從三騎、安房を投て走り給ふ程に、落城より第三日の黃昏時候、相摸國御浦郡、箭探の浦に船を討めて、津を急ぎ給ひし折、白龍海底より顯れ出て、南を去て騰り去れり。恁る祥瑞あればにや、義實安房に赴き給ひて、いまだ幾日もあらざりしに、神餘が與に、義兵を聚合て、逆臣山下定包を誅戮し、その後朝夷郡平舘なる、麻呂小五郎兵衞信時が、約に背きしを討夷げ、最後に安房郡、舘山の城主なる、安西景連と戰克て、景連頭顱を授けしより、義實安房を平均して、四郡の主になり給ひき。這一條の舊話は、洒家富山に在りし時、伏姬神の示現によりて、粗知ることを得たるなり。有恁に今我們は、孝嗣和殿に舊緣ある、狐龍の升天を目擊したり。且その龍を辯論しけるも、新舊君臣、一致のごとし。且義實朝臣の箭探の浦にて、龍の升天を見給ひしは、嘉吉元年、四月十八日の事と歟聞ぬ。又我們が狐龍を見しは、今日文明十五年、四月中の二日なり。その日は聊違へども、共に中旬にてその月は是同じ。事の暗合是のみならず、昔年我老侯の、討滅し給ひける、安西三郎大夫景連は、安房の舘山の城主なりき。今は愚臣犬江親兵衞が、討果さまく欲しぬる、叛賊蟇田素藤は、上總國夷灊なる、舘山の城に在り。安房と上總と異なれども、

降りて、石の形は、蟠る、龍に似たるを見給はゞ、我成る果と知り給へ。願ふは犬江親兵衛主、儘しまつれる和子の上、直きに過ぎて向胆の、心足らずは幾番も、叱り懲らして杖となり、盾にもなりて武夫の、方に導き給ひねかし。今は時來ぬ、名殘惜し。さらば。とばかり外面へ、走り出つゝ松枝に、手を掛け閃りと立歟と見れば、蜚鳥の似く身を翔らして、程近からぬ不忍の、池へ炎と跳入りけり。時に雲湧き雨降そゝぎ、劲風天地を轟して、黒白を別ぬ震動雷電、常闇に似たるそが中に、龍火の光を向上れば、白龍雲間に顯れて、首を伸つ尾を垂れつ、卷ぞ騰する池水の、雨となりゆく疾き勢ひに、蓮葉斷離れ、細鱗放下されて、足下に踊るも多かりけり。この折親兵衛と孝嗣は、狂風暴雨に、老媼が茶店の、葭簀凳兒茶器までも、東西一箇もなく吹攫れて、雨を避るに術なければ、松の樹蔭に身を倚せて、倶に霽るゝを等たりしに、奇しきは最も劇しき大雨の、只這松の四下のみ、一滴だも降ざりければ、幸ひにして濡もせず、衣も滋吹氣を受ざれば、こも亦狐龍のこゝろありての、所行なるべし。と感嘆しつゝ、雙立て在りける程に、姑且して、雲斂り雨歇て、風雷餘波なくなりしかば、長き四月の天晴亘りて、夕陽西に尚殘れり。然ば親兵衛も孝嗣も、狐龍の奇特に疑ひ釋て、迭に他が噂をしつゝ、路の乾くを等程に、親兵衛傍を見かへりて、喃河鯉生、剛才化龍の升天を覷て、思合する事こそ候

載たり。作者の作り設けしにあらず。昔より和漢の博士、龍を辨ずる者多かれども、いまだ狐龍に及べるを見ず。故にこゝに借用す。看官原文を知るもあらば、亦復これと合し見るべし。

登時犬江親兵衛は、孝嗣と共侶に、つら〳〵と听果て、且羞且歡びを、政木の老嫗に演ていふやう、賢者は一字の師をだにも、等閑に思ふことなし。汝は素是異類にして、博識視聴を驚せり。我よく及ぶ所にあらず。こゝに又逢ふ日もあらば、詞敵にせまくほしきに、今遇ふて今別れ、別れて遇ふよしなしと聞く、薄縁こそいと慨しけれ。と不娯れば倶に孝嗣も、愀然と嗟歎して、昔は嬭母、假にも主従、けふは又我再生の、恩人とのみ思ひぬる、その歡びも、いふべきよしも、盡さで盡る値遇の縁、留め難つゝ哀別の、涙の雨に雲を召ぶ、龍にその身を做し果て、千尋底成す大洋に、潜るも後長からぬ、命三稔に終るまで、倘忘れずは春秋の、折々毎に訪來かし。悲しきかな。とうち歎けば、政木はいとゞ慰難て、一霎時目水に洗衣の、袖を斂めて、やゝ喃和子、女々しきことな宣ひそ。非如奴家は在らずとも、犬江主に従ふて、なほ七個の俊傑と、友垣結び、幇助を得て、仁義徳澤、世に稀なる、那明君に仕へ給ひなば、名を竹簿に誌されて、ふたゝび家を興し給はん。今よりして三稔の後、上總國夷灊郡、雉色村に石

情の差別あり、形の似るべくもあらざれど、腐草化して、螢になる也。狐龍も亦これと同じ。證文あるを讀むべき歟。烏滸なるべけれど、听給ひね。といひつゝ徐にうち咳きて、按ずるに奇事記に曰、驪山の下に、一白狐有りて、常に山下を驚撓せり。人祓除こと能ざりしに、唐の乾符の年、其白狐、忽一日温泉を穿て、自浴するほどに、須臾の間に、雲蒸し霧涌き、狐は則白龍に、化して天に升りて去りにき。後に陰晴るゝ折、山本の人、白龍の、山畔を飛騰るを見にけり。如此る事三年にして、忽一老父あり、臨夜毎に、山の前に哭けり。人伺ふて故を問へば、老父答て、我狐龍死にき。故に哭く爾といふ。そは何をか狐龍といふや。老父は亦何の故に、夜毎に出て哭くや、と問へば、老父答て、狐龍は、その身狐にして、化して龍に成りぬるもの也。化して三年にして必死す。我は狐龍の子也といふ。その人又問て、狐は何どて能化して、龍になれるや、といへば老父答て、此狐は西方の、生氣を稟て生れたり。因て全身白色なり。衆と遊ばず、近處の狐と居らず、驪山の下に託すること千餘年、後に偶雌龍と合へり。上天これを知りて、遂に命じて龍に爲せり。亦猶人間の、凡夫より、聖人に成るごとき耳、と言訖て滅にき、と諳記の隨誦する聲、清亮にして跌かず、理義分明に聞えけり。

作者曰、狐龍の事は、格致鏡原卷の八十八、獸類狐怪の部にも、又奇事記を援て、これを

づから蛇也。化して做れるは、眞龍ならず。开を亦稱て龍としいふは、僻言なるよしをいへり。因て我仁按ずるに、いにしへの人の龍といひしは、素より此一物にあらず、星を龍とし、馬をも亦龍と稱へ、蛟虬蛇蜥蜴をもいへり。恁れば種類多かれども、眞の龍とすべからず。眞の龍といふものは、蓋星氣とするに庶し。勿論形狀ありて、飲食するものにあらず、天地陰陽二氣の升降、雲を起し雨を降し、春見れて冬蟄す、是を名づけて龍と云。和名多豆とは、起の義にて、二氣の發起を取れるのみ。然るを世に龍といへるは、蛟虬蛇蚖蜥蜴などの種類のみ、眞の龍にはあらざる也。しかれども蛟虬蝮蛇の老たるは、形狀畫る龍に似たり。是等は眞の龍ならねども、化して龍に做るといふも、據なきにあらず。狐はその類ならぬに、化して龍になるてふ說は、洒家寡聞して、いまだ得知らず。具に敎よ、聞まほし。と問へば政木は點頭て、現眞龍のおん說は、古人未發の明辨にて、學者の惑を醒すに足れり。奴家が龍といへりしは、名は同うして物異也。眞の龍に侍らねども、陰陽二氣に從ふて、雲を召び雨を行る、然ばかりの能はありぬべし。然るを狐はその形狀、毫も龍に似ざればとて、狐龍の說を疑ひ給ふは、憚りながら親きを信て、疎を非としたまふならずや。譬ば田鼠と鴽とは、禽獸の差別ありて、狀も大く異なれども、田鼠化して鴽になる、と月令に見えたりき。又朽藁と螢火とは、非情有

併役行者の、利益に憑れるよしもあらん、冥助を仰ぎ給へかし。この餘の事は告ずとも、おん身の智計武勇もて、功あらんこと疑ひなし。といふを親兵衛うち听て、且感じ且歡ぶ、勇氣日屬に彌增たる、腕を憶ず扼りて、寔に得がたき有緣の忠告、よく機を查し隱微を明す、言皆意表に出るを听く、我身は今なほ富山に在りて、伏姬神の示現教諭を、承るに異ならず。老嫗は素是異類といふとも、その智廣大、菩薩に等し。いはるゝ趣こゝろ得たり。謹て明教に、從ざらんや、從ふべし。といへば又孝嗣も、政木の老嫗にうち向ひて、いと具なる敵地の案內、側聞せし我も亦、犬江主に從ふて、千里を走る蒼蠅の、驥尾に附く寸功あらば、又かへり來て慰ん。霎少の程ぞ等ねかし。といふを政木は聞あへず、否とよ奴家は、年來の、陰德の功課によりて、天帝の恩敕を承り、けふより狐龍に做り侍れば、今升天して、下界に在らず、遇ふを別の時こそ來つれ。と告るを孝嗣こゝろ得ず、什麼狐龍とは何等のものぞ。狐も龍に做らるゝや。と問へば又親兵衛も、倶に眉根をうち顰めて、我聞く、龍は神物也。和漢今昔世の人々、その名を知れども形を見ず。然るを唐山の史傳には、昔豢龍氏が龍を屠り、后羿龍を射るの說あり。是をもて抱朴子に、蛇龍といふ一種あり、蛇も千載を歷ぬるものは、化して龍に做るといへれど、陸佃が埤雅にその非を辯じて、龍はおのづから龍にして、蛇はおの

狸兒で侍るに、忌を忘れて、足往の犬に殺されける、貉の腹より出し玉もて、賊徒を資け、寄隊を破る、寶貝にしぬるは、後竟に、犬士に對治せらるべき、兆なるを悟らずや。寔に嗚呼の所行也かし。然ば狸兒はその智淺くて、野狐に及ざるを、是等に由ても知られ侍り。おん身他を對治して、件の玉を獲給はゞ、後に必用ることあらん、等閑になし給ひそ。こは妙椿が來歴出處の、崖略にて侍る也。扠又舘山の城にうち入るに、初の度とは同じからず。非如おん身の武勇をもて、素藤們は緝捕易くとも、はやく妙椿に聞知られて、他を走らしなば爭何はせん。恁れば敵に知らせずして、悄入るを妙とすべし。その折悄入るべき地方は、舘山の城の副門に、箇樣々々の目標あり、其處は昔の城主が、地道を穿ち造爲たる、一條の脱路也。後に千曳の石をもて、前後の口を塞ぎたり。今は丌を知れる人罕也。おん身が萬夫の膂力あるも、拿除く事容易からじ。其首より入らんと欲する折、箇樣々々に做給ひなば、毫も筋力を用ひずして、出入極めて隨意ならん。先後堂に赴きて、妙椿狸兒に撞見し給はゞ、力をもて征すべからず。その折には箇樣々々、恁々に做し給はゞ、妙椿が邪術忽地に破れて、他が腹心に貪縁りたる、玉梓が餘冤解脱せん。然るときは妙椿が、摠身朽木の倒るゝ像く、本形をあらはすべし。即是玉梓が、臨終の惡念、塵も住めず、煙の似く滅亡て、後々までも祟なき、是その證据ならんかし。

の本性のみ。國の安危を定るは、最も大事の所行なるに、良將勇士がいかにして、胆魂を妖怪に、奪るゝよしあるべきや。君子をば欺くべし、陷るべからずとは、恁ることをやいふならん、と奴家は思ひ侍るかし。然ば又妙椿は、那反間の邪術をもて、おん身を他鄕へ退けしより、敢又憚らず、をさ〳〵兇徒の軍師に做りて、寄隊を破るに風を起して、沙を飛し樹を覆す、その勢ひ當るべからず、嘯く虎より烈しかりしは、是も亦然る所以あり。他は甕襲の玉を持り。その玉は貉の腹より、顯れ出たる寶貝也。上古垂仁天皇のおん時、丹波國桑田郡の人と聞えし、甕襲が家に飼ける犬の、名を足往と喚做すあり、這犬一日貉を見て、立地に噬殺しゝに、その貉の腹内に、八尺瓊の勾玉ありけり。甕襲このよしを訴稟して、玉を朝廷に獻りぬ。這玉今は石上の、神宮にありとなん、書紀垂仁紀に載られたる。垂仁帝のおん時より、今（後土御門院の文明十五年）に至て、千二百許年、世は戰國になりし悲しさよ。恁る珍奇の神寶も、馬蹄の塵に埋まれて、有と知る人稀なりしに、妙椿狸兒が見出して、只顧愛玩祕藏しつ、初甕襲が垂仁帝へ、獻りける東西なれば、名づけて甕襲の玉といふ。貉と狸は等類にて、穴居して雨を避け、よく風を知る者なれば、昔も今もその皮を、鍛匠の吹革に用ひらる。風を出すの理によりて、妙椿件の玉をもて、呪文を唱て勁風を、起すに極めて效驗あり。遮莫那身は貉に等しき、

倶に菩提に入るものから、初八房の犬を孕みぬる、狸兒にも亦玉梓の、餘怨纏縁りたりけるが、是のみいまだ得脱せず、今も里見殿を怨めるよしは、當初義實主、八房の犬を見給ひし折、狸兒の乳をもて養れたる、事恁々と听給ひて、字書に、狸は犬に從ひ、里に從ふ者なれば、こは是里見の犬たるべき、因縁ありと宣ひしに、唯犬をのみ鍾愛して、狸の事は竟に問れず。狸兒は亦その功をもて、狐のごとく禿祠を造りて、祭られんと思ひしに、然る沙汰なければ喫醋に堪ず、はやく富山を立去りて、上總國夷灊郡、背善村に程遠からぬ、諏訪の神の社頭なる、老樟樹の樝に栖ひて、那里に在ること三十餘年、便宜もあらば國主御父子に、祟を做さんと思ひしに、玉梓が餘怨に滺るゝ、是宿因の惡心なりき。恁而蟇田素藤が、兩個の愛妾を喪ひて、哀慕欝悒に堪ざりし折、他はその虛に憑入りて、八百比丘尼の綽號を冒して、妙椿といふ女僧に變化し、遂に素藤を哄誘したる、非分の婚媾整はねば、素藤酷く國主を恨みて、叛逆籠城兩度に覃ぶ、事今日に迨れる也。なれども初妙椿狸兒は、神女の威靈を憚りて、軍陣には莅ざりしに、素藤們が死を饒されて、遠く追放せられし後、妙椿はこれも亦、我妙術もて義成主と、犬江の胸を狂して、素藤們を救しなゝど、實しやかに說誇りしを、素藤們はさもありけめ、と思ひ惑ふて、國主はさら也、おん身の慈善を恩とせず、吮下過ぎて、熱に懲りざる、那は小人

不才も人は各、得たる事あり得ざる事あり。この故に孔子聖人の、鋤壞へる技はしも、老圃に問へ、と宣へり。おん身に助言は烏滸ながら、龍の路は蛇こそ知らめ、那妙椿が幻術を、破りて擒捕まく欲せば、先他が來歷出處を、具に知ずはあるべからず。といふに親兵衞歡びて、そは亦得がたき珍說ならん、快々听まく欲しけれ。と應て膝を挟れば、孝嗣も亦うち含笑れて、倶に耳をぞ傾けける。登時政木は聲を低めて、然らば又一條の、昔話をしはべりてん。犬江主は豫より、傳聞給ひしを、思ひ合し給ふよしも侍らまし。抑安房國、長狹郡、富山の麓より、程遠からぬ村落に、犬懸と喚做す寒村あり。その村這名を得ざりし以前、文安四年、丁卯の秋、伏姫七歲になり給ひし比、件の村に貧しき民の、字を技平と喚るゝが、年來畜ける牝狗ありけり。這秋その狗兒、子を產けるに、只一隻子にて牡狗也。生れていまだ幾日も歷ざりし、有一宵その母狗は、狼に喫れてけり。雛狗はいまだ目だに開かで、蒙々たる比なれば、養ふべくもあらざりしに、奇しきは夜每に牝狸の、富山の方より出て來て、乳をもて雛狗を守みしかば、餓も死ざることを得て、最大きくなりし時、この事聞えて瀧田へ徵れ、義實主に寵養せられし、八房の犬、卽是なり。しかるに件の八房は、毒婦玉梓が後身なれば、里見に害あるものなりしを、役行者の利益にて、玉梓が惡靈終に解脫し、八房の犬も亦、伏姫讀經の功德によりて、

面目を、よくも得しらぬ臆談なれば、歯に掛るに足ざれども、恩を思はで再叛きし、素藤が悖逆は、その罪先度の類にあらず。曩に那奴を誅せざりしは、悪木なりとも、花開く梢に、斧を入ざる仁者の心、再度に至て饒さゞるは、放て山へ還しゝ虎の、人を喫ひしを屠るに同じ。仁者といふとも忍ぶべからず。縦素藤先度に倍して、幾千百人盾籠るとも、又活ながら捉ん事、嚢の物を探るより易かり。和殿一臂の力を勠する、義侠の意あるならば、卒給へ伴ふべし。といはれて孝嗣一議に及ばず、適要ある辯才智勇、金玉成す言毎に、感服せずといふことなし。小生既に知己の資を、仰ぎて進退を儘んと欲す。火を踏み水に没るとても、従ざらんや、倶し給へ。と憮るを政木は推禁め、又親兵衛にうち向ひて、曩犬江主、従ふ兵卒多からずとも、おん身那里に到り給はゞ、素藤們は先度に懲りて、手を出す者なからんが、妙椿は同じからず。他も亦霊玉に、怕れて敵することはなくとも、影を躱し跡を埋めて、風に烟の滅るが如く、忽然として逃亡なば、智勇も施す所あらで、又妖孽を遺すことあらん。這義を思ひ給はずや。と心属れば、親兵衛は、答難つゝ沈吟じて、現いはるれば、寔に爾なり。譬ば三面六臂にもあれ、目にだに見ゆる敵ならば、撃捕ることのかたくもあらず、他倘五遁の術などにて、見えずなりなば爭何はせん。开を禁る術なからずや。と問へば政木は點頭て、然ばとよその事なれ。才も

藤を伐せん、と欲りし給ふと听得たる、この一條は面目あり。畢竟我身の枉厄は、妙椿とかいふ妖尼の、幻術より出たるを、我思慮淺くて、今まで悟らず、又我犯しゝ罪なきよしを、解れて君侯の醒給ひしは、伏姫神の冥助なるを、是に至りて肇て知れり。咱們富山に在りし日は、伏姫神の示現によりて、知ざることのなかりしに、始に劣れる我智を思へば、憑むは仁字の靈玉のみ。曩に自然と土中を出て、我懐に入りけるを、訴まつるに由なくて、影護く思ひしに、开も那瓶を發れて、無りしよしを知召なば、異日稟し解くに證据あり。袷といひ恰と云、造化の默契妙なるかな。遮莫素藤が復叛きしを、知ずもあらばさて已なん。今その事を听ながら、稻村よりのおん使、蟇崎姥雪們に得逢ずとも、はやく舘山に赴きて、兇徒を遺なく討捕るべし。しからざればいぬる比、素藤を恩赦の折、東の叟が意見を演て、死刑を薦め稟しゝに、酒家單その議を否じて、素藤復叛く事あらば、人手は借らず、小臣が、立地に誅戮すべし、と稟しゝにより我君も、憑しく思食けるに、齟齬すと人にいはれやせん。我も亦始より、素藤が復叛んことを、思はざりしにあらねども、饒すまじき逆賊を、誅さゞりしは殘に克つ、迺主家長久の、基を固うせん爲にて、伏姫神の訓に遜れり。开を世の人は思はずして、君侯はさら也、親兵衛さへ、那妖尼に方寸を、狂されたる似而非仁政ぞ、と今更誚るもさぞあらん。厶們は仁者の眞

し給ふ、評議區々なりけるに、瀧田の城内にも、亦鸚鵡の奇異ありて、老侯那意を猜し給ひつ、隨即照文と與四郎を、稻村の城へ遣し給ひしかば、君臣いよ〳〵便宜を得て、照文と與四郎は、君侯の仰を奉り、去向を異にし船路より、猛可に起行し事の趣、この餘一事も遺漏なく、その崖略を解示して、蜑崎姥雪兩個の使价の、稻村の城を立去りて、便宜の浦より船出をしけるは、遠くもあらず、昨日の事也。この義もこゝろ得給ひね。と告る詞の委みなき、辯舌水の流るゝごとく、疑ふべくもあらざれば、親兵衞は歡しさに、憶ず膝を拍鳴して、奇也妙也、汝の忠告。倘この言を听ざりせば、我は他鄕を徧歷て、再叛の賊素藤們を、討捕る便りなからんに、思ひがけなき幸なるかな。と連りに稱えて已ざりけり。

第百十七回

恩に答て化龍升天を示す
津を問て犬童風濤に惱む

登時犬江親兵衞は、孝嗣にうち向ひて、河鯉主、今听れしごとく、上總に亦復賊亂あり。腹立しきは舘山なる、三番士們が阿容々々と、果敢なく城を攻陷されて、一個は敵に生拘られ、兩個は逃たる不覺さよ。又歡しきは我君の、おん疑ひを解せられ、急に仁を召かへして、又素

逆將蟇田素藤は、妖尼妙椿が幇助を得て、いぬる夜舘山の城を襲略りし事、その折城の頭人たる、登桐山八良于は生拘られ、田税戸賀九郎逸時と、苫屋八郎景能は、敵の圍を殺開きて、倶に他郷へ走りし事、是により里見殿は、荒川兵庫助清澄を討隊の大將として、舘山の城を攻伐し給ひしに、妙椿が幻術にて、魔風を起し寄隊を破りて、浦安牛助友勝を俘にしたる事、這夜艾、荒川清澄は、埋兵をもて、夜撃の兇黨、礪時願八、奥利狼之介們を生拘りしに、又妙椿が幻術をもて、件の二賊を騙略りし事、この後荒磯南彌六は、安西出來介と悄地に謀りて、素藤を刺んとて、敵城に入りて戰歿せし事、この比又里見殿は、曩に土中に埋措せし、親兵衛が仁字の玉を、清澄に貸んとて、穿出させ給ひしに、瓶のみありて玉のなければ、爰に始て惑醒て、後悔の心あり。その比又妙椿は、稻村の城に悄來て、濱路姬を攪擾ひ、走り去んとせし路にて、伏姬の神靈の、妙椿を蹴仆し姬を救ひて、一霎時富山に將て行て、妙椿が事、妖書の事、及假夏曳が冤魂の事、親兵衛は一毫も、怨てる事なかりしに、那妙椿が幻術をもて、里見殿に疑せたる、事の顚末を具に告て、稻村へかへし遣し給ひしかば、里見殿よしを听給ひて、慚愧後悔大かたならず、蟹崎十一郎照文と、姥雪與四郎們を使として、快親兵衛を召かへして、素藤妙椿們を對治すべく、この折をもて餘の七犬士の、在處をも涉獵せて、共侶に招き聚合んと欲

で侍る間、神佛も與し給ふべし。又孝嗣主の兩刀は、實に沒官せられしにあらず、根角谷中二が私慾にて、奪ふて收め置たるを、とり復して主に返しにき。そを竊盗の所行に似たり、といはるゝは心にず。然でも僻事なるべき歟。といふに親兵衛又點頭て、耳新なる論辯分明、理りならずといふことなし。咱們は及ばず、及びがたし。と譽るを政木は推禁めて、然な宣ひそ、奴家は知れり。おん身は世界に十人となき、八犬士の隨一人、神女の冥助に成長りぬる、奇童にてをはするよしは、嚮に憩ひ給ひし折、奴家ははやく猜したり。然ばおん身の懷には、天地の間に兩箇と得がたき、仁字の靈玉あり。凡庸の野狐ならば、非如長壽を有ちたりとも、掛向ものいふこと克はで、本形を顯すべきに、身は幸ひにさもなきは、既に靈狐の數に入りけん、心に毫も邪なき、是その證据で侍るめり。なれどもおん身の來歷を、まだ具には考ざりしに、方纔不忍の池畔にて、河鯉腋子に恁々と、おん身の事の顚末を、解示し給ふを知りて、いと憑しく思ふから、悄地に安房上總なる、城隍、土神達を招よせて、那里の安否を問試しに、又おもはざる異變あり。おん身はいまだ知り給はずや。といふに親兵衛驚兒を放ちて、开は何事ぞ、いまだ得知らず。快うち出しね、所まくほし。と問へば答て、然ばとよ、おん身が主君に疑れて、猛可に遊歷の暇を賜ひしは、素より邪魔の所爲なりかし。その故は箇樣々々。と

をもて、奴家は連添ふ雄狐の、老て死すれば又外より、入聟を將て來ぬるも、十をもて數ふべし。抑狐は陰類にて、群居せざるものなれば、只牝牡と栖るのみ。この故に唐山にて、文字にてきつねを狐に爲れり、狐は卽孤の義にて、群居ざるよしを取れり。是等は要なき贅言にて、おん身の與には釋迦に說經、孔子に語道に似たらんかし。といひつゝ吻々とうち笑へば、親兵衞屢點頭て、その義は既にこゝろ得たり。然らば又問試てん。汝は雄狐の死せし比より、靈狐の田地に入らまく欲して、情を割き慾を禁め、慈善を旨とせしといへば、後暗き行ひなかるべし。しかるに河鯉生を救んとて、をさ〳〵形貌を變化して、谷中二們を愚にせしは、是機變の術にあらずや。機變は神佛の憎む所、事に邪魔の入る所以は、隱慝機變の應報にて、恐愼むべき事なるを、靈狐の所行には似げなからずや。且汝が河鯉生に、贈りたる兩刀は、原河鯉の什物也とも、既に沒官せられしを、悄地に奪拿りたるならば、开は竊盜の所爲に似て、快らぬ所あり。この義も亦是故ある事歟。と詰れば政木は含笑て、理論は寔に然ることながら、機變も私慾の與にせず、或は世の與、君父の爲には、行はざることを得ず。況罪なき恩人の、枉死を救ひし一機變は、佛說に云善巧方便、孔子の敎に、直きを擧て、父は子の爲に隱し、子も亦父の爲に隱す、直きこと其中に在り、といはれしを思ひぬる、奴家が詭計は、恩義の與

かくの如し。然ば年來人の死を、救ひし數は九百にあまり、今一人にて千に滿ぬる、志願成就のけふこの折に、昔字育まるらせたる、和子を救ふて舊恩に、答侍りし一事兩用、いと歡しく侍るかし。と悄めき告る長談久話を、孝嗣つら〳〵听果て、感涙坐に氾むまでに、一霎時は答得ざりしを、思ひかへしつゝ嘆賞して、適微妙き汝の方便、嚮にもいひしことながら、我總角なりし比、親に听たる汝の事、むかし故なく逐電して、往方は今に知れずとのみ、思ひたりしに、思ひきや、その身は非人異類にて、賢人貞女も及ざるべき、陰德善行、我與に、再生の恩あらんとは。冊も亡母の慈善の餘德、世に復得がたき幸なるかな。と稱えて感謝に堪ざりし、歡び涯りなかりけり。この時までも親兵衞は、手を叉き頭を低て、默然として在りけるが、徐に貌を更めて、政木狐にうち向ひて、物千載を有ちぬれば、神に通じて靈ある事、和漢に例多かれば、汝が命長かるも、亦怪むに足らねども、その身旣に一千年の、長壽に迨れる靈狐ならば、曩に河鯉の家の簀子の下にて、子を產ぬる其比は、九百八十許歲なるべし。縱その身は異類也とも、物老ぬれば經紅竭て、有身ることは有がたからんに、然もなかりしは、こゝろ得がたし。と詰るを政木は听あへず、そは宜することながら、約莫天地の淸氣に稱ふて、長壽を有ちぬるものは、その身老ては又娠囘り、百歲每に血氣復して、情慾も亦始に異らず。こゝ

て歡びと、做しゝも多く侍りし也。翔奴家が這陰德を、思ひ起しけるその日より、今に迨て二十許年、人の必死を救ひし事、九百九十九名に侍り。この義天意に稱ひし故歟、身毛年々に白くなりて、その淸きこと雪の像く、尾も亦裂て九尾になりぬ。世の人九尾の狐といへば、近世の似而非物語、玉藻前の事をもて、皆惡狐とのみ思ふめれど、开は甚しき訛舛にて、九尾の狐は神獸也。又九星狐と稱するよし、瑞應編に明文あり。段成式が酉陽雜俎に、天狐といひしも九尾にて、日月宮に來往し、よく陰陽に洞達して、千里外の事を知る、天眼通を得たるもの也。奴家も修行の功德に因て、稍その數に入るにやあらん、白毛九尾の形を備、天眼通を得たりしに、五十子の城に在す、おん身の爹々守如大人、今玆正月廿一日に、免れがたき厄ありし折、奴家その義を知るをもて、救はまほしく思ひしかども、命數既に涯りある、定業なるを爭何はせん、本意ならずとのみうち不娛しに、又おん身さへ奸黨が、毒惡讒詐に中られて、寃屈の罪に死を促され、白刃頭に莅に至れり。今日我和子の死を救ひて、妳々の慈恩に報はずは、始ありて終なく、年來做しゝ我陰德も、空にやならん、と尋思しつ、這頭に多かる眷屬の、野狐を召聚合て、計略を說示し、奴家は卽越後なる、長尾家の老夫人箙殿に身を變じ、眷屬は百十數個の、作當に打扮して、根角谷中二們を愚にしつゝ、輙くおん身を救拿りぬる、因緣都て

獨居り。この時奴家おもふやう、身は幸ひに命長くて、數百年を歴たれども、靈狐になるべき功德なければ、通力も亦疎にて、牡は殘忍の人に殺され、我は幾程あらずして、その怨を復す折、誂したるのみ手を下して、和奈三政木を害せしにあらず。遮莫不良の人也とも、世に萬物の靈とし聞くに、身は畜生にて、仇とし謀りて、臏死地に陷れしは、人畜尊卑の差別を思はで、對應の義をもてしぬる、我愆にあらざらんや。然ば神にも佛にも、憎るべきは我身にて、天の冥罰怕るべし。恪まで罪障重ければ、今より幾層の功德を積て、世の爲又人の與に、慈善を旨とせずもあらば、志願成就の日はあらじ、と深念の臍を固めにけり。しかるに這上野の原には、昔よりして人憩ふべき、出茶屋などのあることなければ、三伏の最熱しき日、又玄冬の寒けき時には、旅客寒暑に堪難て、死に至るものなきにあらず。故に奴家は老媼に變りて、這里に茶店を置しより、往復ふ人の便りを得ぬるも、はや年來になりにけり。然ば日毎に獲ぬる茶錢は、乞兒、或は寒民の、餓たるに施しつ、又這頭なる溝壑梁の、朽損ねたるあるを見れば、奴家悄地に獨木を架して、人の便宜にせざる事なく、或は男女の情死を制め、意見を加え惑を諭して、故へ收めしも尠からず。或は困窮至極して、縊れんと欲する者、身を淵川に投んとしぬるを、救ふて錢を取らしつゝ、且生活の便宜副、誨えて宅眷を養せしかば、憂を轉し

我面影の異也しを、怪しと思ひ給ひけん、次の間に在したる、大人を連りに喚立して、爹々よ是覧せ。婆々が顔は狗兒に、倣り侍りたり、覧せ。やよ喃々、と喚るゝ聲の、奴家が宿耳に入りしかば、駭き覺て一霎時も堪ず、鈍ましや我は我が、本形を顯しけり、と思へばそが儘庭門より、走去て竟に還らず。なれども別の悲しさに、日の暮るゝ迄前栽なる、樹蔭に躲れて、泣て在り。守如大人も件の奇異を、覧したりければ、驚き怪み給ふこと大かたならず、原來政木は野狐なりしを、この年來知ずして我子を字育せしこそ悔しけれ。この事聞えて人知らば、武士たるものが畜生の、乳をもてその子を育にけり、といはれんは此上なき羞なり。祕よ口外すべからず、と奴婢們を緊しく警めて、その明の日に政木が保人、某乙を召よせて、昨日政木は逐電したり。然とて別に犯せる辜なし。往方を索て見出しなば、將て來よとのみ言示して、この餘の義には及れず。和子は五才になり給へば、嬭母なくてもあるべしとて、老女を守に隷給ひしが、久後我子の與なればとて、人薦れども後妻を、娶らで鰥夫で在したり。爾程にこの年の冬、奥隷の老黨某丙病死しければ、扇谷殿、守如をとて、开が迹役に成し給ひぬ。是により守如大人は、五十子の城に召れて、那首に移り住給へば、奴家は悄々にも、和子を見まく欲するに、路近からねば思ふに儘せず、不娛しさ涯りなかりしかば、忍岡を立去りて、上野の原に

月屬の、怨を復すことを得て、心に快かりしかども、政木が在らずなりしより、生しき嫡母を隷られなば、和子は必面嫌ひして、その乳を輒く喫給はじ。然らば和子の爹孃の、心苦しくおぼすべく、是より五疳の病などを、引も出さば爭何はせん。和子の奶々のおん好意にて、我子は安く生育しに、今その報をせずもあらば、恩を思はぬものに似たり。子毎は大きうなりしかど、乳汁は今なほ餘滴ありて、纈れば多く出るかし。今宵政木が逐電せしを、人の知らぬこそ幸ひなれ。せん術あり、と尋思して、その曉天に忍岡の、城内にかへり來て、政木に變じて、和子の臥簟に、添乳をしつゝ臥したりければ、東人御夫婦、いへばさらなり、一家兒の奴婢們、誰もかも、政木が逐電したるを知らず。況和奈三と共侶に、石神川に滾落て、底の水屑になりにしよしを、後まで告るものなければ、奴家を眞の政木にあらず、と知るもの絶てなかりけり。恁而この次の年、おん身の奶々は血塊の、病著重りて臥し給ひしより、鍼灸藥餌の效驗なく、約莫半稔有餘にて、竟に身故り給ひにき。奶々亡なり給ひしより、和子はいよ〳〵奴家を慕ふて、離れ給はず、放ちもせず、恩愛既に庸常ならねば、我實子の思ひを做しつゝ、守字むこと又二稔有餘、和子の五才になり給ひける、夏の日の事なりき、南向の小坐席に、奴家は和子に添乳をしつゝ、寢るとは知らず假寢せし折、和子は單覺給ひて、恰悧や稚心にも

の趣を、守如大人に報給ひしかば、大人は听つゝ點頭て、和奈三は譜第にあらず、その心術良らねば、身の暇を取らせん、と思ひつゝ得果さゞりき。惜むべき者ならずとて、預置せし和奈三が、保人を召よせて、家風に背きし他が越度を、恁々と聞え知らして、那身の暇を取らし給ひき。恁而又日數を歷て、我子は既に乳を離れて、稍大きくなりしかば、他の野山へ遣して、身單故の穴に在り。恁りし程に和奈三は、主家に在らずなりしより、なほ情慾のやる方なければ、悄地に政木に艶翰をおくりて、謀し合しつ夜に紛れて、誘引出して走りにけり。朋輩の奴婢們だに、开を知れるものなかりしに、奴家ばかりは豫より、恁らんよしを、猜したり。這時怨を復さずは、孰の時を期すべきや、と思へば當晩、和奈三と、政木が迹を跟て行しに、千住より去向遠からぬ、竹塚の邊には、和奈三が乾小父の莊客あり。那里を憑みて姑且の、身の躲處にすべしとて、开方を投ていそぎしを、奴家途にて遂して、瀧野川村へ拕て來つ、左右間なき細路にて、奴家は剪徑の山豪に、化て他們が前後より、兩個と見せて立顯れ、盤纏を遞與せ、と喚被々々、引拔き譃す刀の光に、和奈三政木は、吐嗟と叫びて、路を討めて迯んとしたる、歩下暗き小篠原、折から月は雲に沒て、黑白を別ぬ男女ひとしく、急流名高る石神川の、岸踏崩し滾落て、浮つ沈みつ流れしが、倶に溺れて死にけり。恁てぞ奴家は

ありと知りつゝ主には告げで、恣なる殺生は、言語同斷といひつべし。折から我良人は、京上りの留守なるに、一家兒なる僕從の、さる歪事をしつと稟さば、家を守れる我怠慢ぞ、と發憤らせ給はなん。恁る烏滸の沒黑兒は、今よりの後使ひがたかり。大爺のかへらせ給ふ日まで、速に下宿して、愼て沙汰を等べしとて、思ひの隨に叱り懲らして、子舍に退け、屛居らして、和奈三が保人某甲を、召來たし仔細を示して、那身を預け遣し給ひぬ。恁りし程におん身の奶奶は、奴家母子を憐み給ひて、這城内には岡もあり、林もあるにその狐の、牝牡この家の簀子の下に、栖ひし所以に牡狐は、無慙の人の手に掛られて、可惜命を殞したり。牡狐あらずなりぬれば、その牝狐は子を養ふに、さぞな便なく哀しからめ。日每に食を與へよとて、心術素直なる、奴婢に懇々と吩咐て、或は餠赤豆飯、油煠の豆腐、鰶魚などを、簀子の下に措し給ひて、旦夕に賜ひしかば、奴家は夜な〳〵外に出て、求食るに及ばず、飽までに、乳汁も卓散也ければ、子を養ふに便りを得たるも、皆是奶々の御恩に侍れば、いと忝く思ふにも、恨めしきは只和奈三のみ。然れども他は心猛く、殘忍無慙の暴男なれば、拿憑て命を果さん、術を施すべくもあらず。誰何せましと思ひ不娛つゝ、四五十日を歷る程に、守如大人は恙なく、華夏よりかへり來まして、返命をまうし給ひぬ。おん身の奶々はこの折に、掛田和奈三が事

けて、主の伴には立ざりき。爾程に我雄狐は、奴家が與に食物を、求に夜々外に出しに、有一日件の和奈三は、釣漁の地龍を穿拿るとて、心ともなく庭に印しゝ、狐の足跡を見出して、這足跡は猫より大きく、狗よりは亦像小也。這頭に狐の穴ありて、开が通ひ路にこそあらんずらめ、と尋思をしつゝ、その日の事歟、鼠を麻油に熬て、甲夜より庭に弶を掛けしに、我雄狐これを相て、弶也けり、と知るものから、畜生の悲しさは、その香に被れ心惑ひて、慾を禁ることを要せず、終には弶に掛られて、命を开里に殞しけり。爾程に掛田和奈三は、揣りしごとく狐を拿獲て、その宍をうち啖ひ、皮を售れどもなほ飽かず、狐の穴のあるべしとて、悄々に求獵る程に、我子狐の穴に在りて、鳴聲を洩聞て、原來この簀子の下に、栖る狐の穴はありけり。獵出して射て拿らんとて、罵り噪ぎて准備をしぬるを、おん身の奶々の聞知り給ひて、うち驚きつゝ和奈三を、召よせてよしを問給へば、和奈三隱すことを得ず、いぬる夜庭に弶を措て、簀子の下に栖ひぬる、牡狐を捉獲たる、事の趣を招しければ、奶々はいよ〳〵腹立給ひて、そは輕からぬ曲事也。我良人は性として、慈善を旨とし給へば、蕞爾なる虫也とても、故なく殺し給ふことあらず。況當所の鎭守の神は、妻戀稻荷にて御坐せば、狐は要ある獸也。且その狐を捉りし宵は、河鯉氏の先祖の忌日の、逮夜にしも丁れるに、簀子の下に栖る狐の、

るらん。と訝り問へは、找み近づき、発見に尻をうち掛て、原來忘れ給ひし歟。然らば具に告まつらん。犬江主も听給ひね。喃和子思ひ出給はずや。奴家はおん身の後の嬭母、後の政木で侍るかし。といふに孝嗣やうやく悟りて、原來我總角の比、大人の夜話に傳聞たる、故なく影を躲しゝ嬭母、政木は爾歟。こは〱什麼、思ひがけなき再會なりき。といふに訝る親兵衛は、我姓名を知られたる、こも亦奇也。とばかりに、口を鉗て听まくす。當下政木はうち點頭つゝ、又孝嗣にうち向ひて、やよ喃和子、這回奴家がおん身を救ひし、事の情を今さらに、說明さんは恥しく、面なき所行で侍れども、おん身の未生以前より、奴家は忍岡の城內に、牝牡柄馴たる野狐也しに、おん身の年二才の比、奴家は有身侍りしことあり。しかるにおん身の爹々、權佐守如大人は、素より忠義の士にて、當時忍岡の城預の、頭人でをはせしかば、那城內に在したり。又おん身の嬭々も慈悲深く、物を憐む本性なれば、いと憑しく思ふ間、奴家牝牡はその家に、寓來て簀子の下に栖れど、人に見られず、知られもせねば、奴家は开里にて子を産にき。この時又河鯉の家の若黨に、掛田和奈三と喚做すあり、その性酷く殘忍にて、殺生を好みたり。この年おん身の爹々守如大人は、君命により、京都將軍家へ、おん使に立給ひしに、那和奈三は、政木と喚做すおん身の嬭母と、幾の間に歟、密通してありしかば、その折病に推

られず、我身吹學に預らば、そは左も右も香意に依らん。目今は從ひがたし。と答る折から甃然と、這方を投て來る者あり。此は是別人ならず、這茶店の老嫗なりければ、孝嗣が引續らしたる、葭簀をやをら推啓きて、找入りつゝ親兵衞們を、見つゝ含笑み揖讓して、こは郎君、前面岡より、剛才かへり來ませし歟。奴家は所要の事に喚れて、宿所へ走りゆきし程、店うち空て侍りしに、好こそ等せ給ひたれ。おん連さまも茶を召れし歟。先沸らしてまゐらせん。といひつゝ吹筩拿抗て、埋火搔て吹起せば、竈木の煙立升る、霧の籬笆に白菊の、衰ひ易き風情なる、老嫗を孝嗣、つくづくと、相つゝ親兵衞が袂を掖て、犬江主那を見給はずや。那老嫗が面影は、嚮に我が必死を救ひし、假大刀自によく肖たり。倘その人にあらずや。とうち聶きつゝ指さし示せば、親兵衞も稍心づきて、現いはるれば聲音まで、毫も錯はず寔に似たり。故なからずや、いと奇也。と潛語く聲の聞えにけん、老嫗は徐に見かへりて、刀禰達さまでに訝り給ふな。前面岡にて河鯉主の、危き命を拯拿りしは、別人ならず、奴家に侍り。といふに孝嗣も親兵衞も、胸を潰しつ、さては。とばかり、呆れてなほも長視て在りしを、老嫗はさこそ。と微笑て、犬江主はけふ遭際の、初對面で侍る間、知らせ給はぬは理り也。河鯉賍子は名ばかりだも、听知りてをはさずや。奴家は政木で侍るかし。と名告れど孝嗣こゝろ得ず、怎麽政木とは誰な

里見殿の息女なりける、伏姫上は、犬士の與に、過世の母にてをはしましき、と料ずも曉得たる、首をいへば恁々なりとて、八房の犬の事、金碗入道、大の事、及親兵衞が二親の、義俠横死の事までも、詞急迫しく解示せば、孝嗣いよ〳〵感嘆して、咱們扇谷家に在りし日は、奸黨に仇とし忌れて、一個も知音の友なかりしに、高畷の軍陣にて、犬阪犬山兩勇士の、意衷を始て听しより、寃家ながらも心は似たり、知己也けり、と思ひしに、今又和殿の話說にて、凡人ならぬを知るに足れり。その水原を尋れば、姬神孝義の英烈より、自然と生れる八個の豪傑、里見に出て里見に仕る、宿因寔に羨むべし。安房は四郡に過ざれども、偉なるかな、造化の妙功。八顆の靈玉、八個の良臣、身を護り君を補佐して、武威八方に赫奕ん。久後までもいと憑し。感心の外候はず。と繰返したる心の誠を、親兵衞さこそ。と慰めて、恁思れなば他を求めで、里見殿に仕給へ。洒家一尺の書をまゐらせて、和殿を薦めまうしなば、必登用せらるべし。安房へ赴き給へかし。といへば孝嗣沈吟じて、そは忝き事ながら、非如不德の君といふとも、扇谷家は父祖の時より、恩顧重代の主君なりしに、今日死刑を免れたりとて、けふより他姓に仕ん事は、忍びがたき所あり。願ふは和殿の從者と倣りて、その投かたに伴れ、犬阪犬山、自餘七個の、犬士達に對面して、和殿と倶に那人々の、安房に參りて仕る後まで、幸ひにして棄

衣を拿出て、孝嗣に、卒とて遞與せば孝嗣は、受拿つうち戴きて、手ばやく上に襲被て、身裝をしたれども、あるじの老嫗のまだ還らねば、そが儘發兒に尻を掛て、親兵衛と倶に憩ひて在り。登時犬江親兵衛は、孝嗣にうち向ひて、嚮に話し漏したる、その身の禍福、伏姫神の冥助撫育、并に姥雪老夫婦、曳手單節母子の事、及七犬士の事の趣は、曩に姫神に告られて、听にし隨に、一事も省かず。且里見殿父子の賢明、四家老、諸勇臣の行狀得失、素藤が叛逆の顚末まで、その要を演繁を芟て、箇樣々々と悄語き示せば、孝嗣は听毎に、連りに感嘆の聲を得斷ず、憶ずも太息を吻て、適愛たき諸犬士の孝義英才。始は在下、君父の與に、犬阪生を恨みしに、そは僻事ぞと悟りしより、更に捨がたき思ひあり。矧今又その義兄弟、犬江和殿に邂逅して、この身の資助にならるゝは、過世ありて歟、寔に奇なり。恁まで八個うち揃ひぬる、儁傑達に宿緣ありて、君臣の義を結ばせ給へる、里見殿兩侯の、年來の德澤仁政、听くだに得がたき名將なるかな。羨むべし、うらやむべし。と只管嘆賞してければ、親兵衛なほも聲を悄めて、嚮にも既にいひけらし、我君侯は賢を招き、士に下り給ふをもて、老殿のおん時より、蜑崎十一郎照文と、喚做す家臣を、關八州へ遣して、智勇全備の士を、をさ／＼招し給ひにき。その折犬塚犬飼犬田は、下總なる行德にて、ヽ大法師と十一郎に、思ひがけなく相遇ふて、

たくや思はれん。又只我上のみならず、七犬士們が才幹言行、安房侯老侯、御父子の明德、賢を愛し民を撫、善政隅なく施し給ふ、賢君良佐の事の崖略、伏姫神の靈驗威德の、世に復得がたき奇談まで、解示さまく思へども、這里は久戀の處にあらず。卒給へ、上野の原まで退きて、迭に意衷を盡すべし。といふに孝嗣再議に覃ばず、現いはるればその理あり。物蔭もなき這池畔にて、長譚に時を移さば、谷中二們が稍醒て、立かへり來ば爭何はせん。非如その事あらずとも、忍岡へなほ遠からず。一步も快退くを、上策とすべきのみ。卒とく〱。とうち連立て、上野の原に來にければ、親兵衛遙に指して、河鯉生よ、那見給へ。那老松を片拿りて、建たる葭簀を折遶らしゝは、鬻に我憩ひたる、老媼の茶店で侍るなる。和殿の身の皮は囚牢衣にて、去向の外視宜からず。今日は殊さら溫暖なれば、我下衣は一箇脫て、裹て腰に纏たるあり。且那里へ立よりて、こをまゐらせん被給はずや。といふを孝嗣見かへりて、そは又得がたき好意なり。知己の隨意せざらんや。と歡び答て共侶に、件の茶店に來て見れば、竈の蒼柴、烟は立ども、何地ゆきけん老媼は在らず。然ばとて玆より外に、亦憩ふべき家はなし。一霎時等なばかへり來てん、と思へば兩個の後生は、そが儘裏面に入る折に、なほも葭簀を掖遶らして、外視を憚る目柴にしつゝ、倶に茶を汲みうち喫て、親兵衛は、腰に附たる、袱裹をうち被きて、

ず。武藝の程を知る上は、里見殿へ汲引せん、外を求ることかは。と意衷を告て慰れば、孝嗣深く感佩して、歡ぶこと大かたならず、四下を見かへり聲を悄めて、原來和殿は犬阪們、那七勇士と宿因ある、犬江生でありけるよな。那人々は、義兄弟、八名ありと聞しかど、高畷の對陣に、犬塚生すら虧たれば、和殿の上は聞知らざりしに、神の擁護に靈山にて、生育にきと聞く間に、思ひ合する奇特は覿面、今玆九歲の總角也とは、誰か知るべき。身長さへ、心術さへ、大人備て、智略勇力武藝まで、現神々しき雋傑、今昔無雙といひつべき、神靈傳授の大刀筋ならば、敵しがたきも然ることながら、方僅刃を合せし折、奇しきは和殿の懐より、光を發ち粲然と、我面を撻けるは、必是所以あるべし。といふを親兵衛うち听て、その疑ひも解易かり。我黨たる八犬士は、自然と獲たる靈玉あり。その八顆の玉毎に、仁義禮智、忠信孝悌、這八行の文一字づつあり、天造地作の寶貝にあなれば、厄を穰き讐を征する、第一の身の衞、これに優たるものはなし。就中我持る、玉には仁の一字あり、仁と名告るもこれに由れり。曩に富山を出し折、獨館山の城に赴きて、逆將蟇田素藤を生拘りつ、凶徒を降し城を抜きしも、我靈玉の威德によれり。憖れば和殿と挑みし折も、自然と光を發ちしならん。遮莫館山の城にてありし事、那兇黨が降伏の爲體を、告るにいまだ遑あらで、言詳ならざれば、こゝろ得が

の聞えあり、はやく轎子を寄られて、遂に和殿を救ひ拿りぬる、理非明辨の手談精妙、驚奇雀躍、愉快の光景、得がたき時宜になりしかば、麗廉們は咸退き去りて、那大刀自は、兩刀を、和殿に拿らし給ひぬ、と覷しは怪しや幻にて、其里に在りつる箙大刀自、最多かりける伴當さへ、瞬息間に在らずなりぬる、事の奇瑰に胸潰れて、出も得やらず、なほ竊覷しに、和殿も酷く驚きながら、恁々と單語て、且淺草の方へとて、快立去まくせられし程に、洒家悄地に思ふやう、那孝嗣は智勇の健雄、毛野道節們と相識れる、親子の忠誠、その甲斐もなく、僅に死罪を免れて、萍跡浮浪の人となりしを、我君侯に薦めまつりて、里見の家臣に做すならば、萬卒に倍て憑しからん。なれどもいまだ本事を知らず。錑してこそ、と尋思をしつゝ、和殿に先だち、間道より、悄地に走りて這里に在り、像の如くに計較て、聊試みたりけるに、倘凡庸の浪人ならば、我懐なる財囊を相て、正なき心を發すべきに、一所不住の浮浪の其身に、鐚一文の盤纏なけれど、然ることには掛念せで、洒家を路に倒れたる、病者ならんと憐み思ひて、喚活てもなほ屆かねば、介保せんとて手を掛られし、淸白仁慈の心操、君子なりしを知るものから、武藝の利鈍を撈らん爲に、陽瞋して手を下しゝに、投られながら跌き倒れず、はやく刃を抜晃めかして、撃果さんとて挑れける、大刀筋都て法に稱ひて、一人當千の手段なきにあら

一霎時立寄て、路の疲勞を憩へてありしに、里人なるべし、群立走りて、前面岡にて頭を撃る、那罪人をいて見んとて、慌しく相罵るを、こゝろ得がたく思ひしかば、茶店の老嫗に所以を問ひしに、老嫗の答の詳にて、忍岡なる城内の、機密を遺なく告られけり。然らでも酒家、富山にて、伏姬神の示現により、和殿親子の忠誠孝義を、聞知ることを得たりしに、今又老嫗がいふ所、いよ〳〵具なりしかば、洒家悄地に思ふやう、那孝嗣が忠孝なる、曩に高畷の對陣に、道節毛野們感嘆して、刃を交ず相別れにき、と傳聞しに慨しや、佞人們に誣られて、罪ならぬ罪に命を殞す歟。憐むに猶餘りあり。非如我這身ひとつにて、其死を拯ひ得がたくとも、切て首級を奪拿りて、選佛場へ葬らば、こも亦武士の情にこそ、と尋思をしつゝ遽しく、そが儘茶店を立去りて、前面岡に來て相れば、既に刑伐の折とおぼしくて、和殿を布革の上に牽居たる、そが身邊には實檢使あり、竝に大刀拿の武士もあり。他們は老嫗に聞知たる、忍岡の城の頭人、根角谷中二麗廉と、穴栗專作なるべし、と猜せらる。この餘幾十個の雜兵、四下を守護て、專非常を警めたる、後方は連る岡にして、樹立隙なく、戍卒あらねば、件の樹蔭に身を潛して、事の容子を偸看在りしに、覦目不樂しき和殿の終焉。白刃旣に頭上に在めば、胸は轟き胆冷て、拯ふに術もなき折から、幸ひなるかな越路より、長尾家の老夫人、當所へ發向

と、閃き出つゝ散徹して、只我眼を遮りしかば、いと朽措くも腕兒狂ひて、大刀筋安定ならざれば、心驚き訝しさに、恁は刃を歇めたり。意ふに和殿は人倫ならで、鷙に我死を救ひぬる、箙の刀自の等類歟、權者の化現歟、狐狸妖怪歟。惑ひを解きね、甚麽ぞや。と問へば親兵衛うち頷きて、その疑ひは然ることながら、洒家は妖怪變化ならず、實を諦せば和殿に等しき、窮達不定の孤客、這頭を遊歷しぬるものなり。我名はいまだ聞れずや、洒家は和殿が相識れる、毛野道節們の七犬士と、同因果の義兄弟、犬江親兵衛仁と喚做す、今茲九歳の總角なれども、童年才に四の秋より、伏姬神の擁護により、安房の富山の神崖崛に、人と成りにし甲斐ありて、心術さへ身長さへ、見らるゝ像く大人備て、文學武藝も姬神に、傳授せられて、然ばかりの、本事なきにあらざればや、料らずもいぬる比、世に復出べき時を得て、國主御父子の奉爲に、寇を夷げ敵を降しゝ、その功をもて寵用せられて、上總なる舘山の、城をそが隨預けられしに、故ある事か、幾日もあらで、君のおん覺妙ならず、自餘の犬士の在處を索ねて、一個も遺なく領て來よとて、猛可に身の暇を賜りぬ。我も亦同因果の、義兄弟に先だちて、單國主に仕るを、本意ならずとのみ思ひしかば、一議に及ばず領掌まうして、伴當をば一個も倶せず、投方へとて赴く程に、則一日の旅ならず、けふしも這頭へ來にければ、鷙に上野の松蔭なる、茶店に

第九輯　卷之十三、十四

第百十六回

賢士重て犬士を知る
政木肇て政木を詳にす

再説。犬江親兵衛仁は、尺にも足らぬ鐵扇をもて、河鯉佐太郎孝嗣が、最も劇しく撃つ刃尖を、受流し相挂えて、挑戰ふ至妙の武藝に、孝嗣祕術を盡せども、毫も透を得ざりしかば、憶ずも聲を被て、やよや少年、姑且等ね。問ふことあり。と叫びつゝ、身を跳らして圏繞の外へ、退きつ喘を定めて、刃を鞘に斂れば、親兵衛莞爾とうち笑て、思ふに優たる和殿の大刀筋、何どて雌雄を決せざる。と問かへされて、さればとよ、初和殿の爲體、人を揣りて貨財を奪ふ、騙兒ならずは必是、响馬剪徑を事とせる、又那麻生の松孺の、亞流ならんとおもふをもて、撃果さまく欲せしに、膂力凡庸ならずして、矢庭に我身を搔抓み、投石に拿し事の勢ひ、世に聞えたる村上義光、妻鹿孫三郎也とても、いかにして及ぶべき。加旃武藝精妙、纔に數寸の扇子をもて、我大刀風を扇ぎ返しゝ、神術奇特のそが上に、奇きは和殿の懐より、一道の光明赫奕

贊里見伏姫

經動從猛狗。紅淚滿羅裳。花亂富山雨。落英薰八方。

贊丶大法師

獵銃却成辜。法衣長避俗。歷遊二十年。終綴八行玉。

右拙贊一十七首叨題本輯簡端以歟於四方君子雅鑒

琴嶺𧎅史

八犬士及八犬女の端像（俗に是を口畫と云）は、第二輯三輯より、冉々に是を出して、今さら遺漏なしといへども、或は總角の折の姿を寫し、或は微賤の折の趣にて、いまだ其眞面目を見するに足らねば、今又こゝに是を出せり。しかるも惟伏姫は、生前死後の神體まで、曩に端像に出しゝかば、玆には省きて、七犬女を重出す。そが中に、濱路沼藺雛衣は、既に鬼籍に入りたれば、その墨色を異にして、繡像同じからざらしむ。又彼神女の贊詞の如きは、琴嶺君子の麗藻あり。因て、大を贊する五絕と倶に、亦簡端の餘紙に錄しつ。

天保七年丙申秋九月下澣立冬後の一日　　蓑笠漁隱識

二國たるに論なし。さばれ安房も、初は總國也。當時里見氏の威德を思料るに、土人相傳へて、里見九代記に據るに、里見の領地は、義堯より義弘へ傳へし所、安房上總、並に下總半國、是に加るに、三浦四十餘郷あり。此彼を合しても、七十萬石には、尙充ざるべきに、土人の口碑に傳る所は、何等に本づきていへるに歟、といへり。縱七十萬石に充ずとも、大諸侯と稱するに足れり。然れば起本の國といふとも、かくの如き小說には、褊小の安房をもて、里見の二字に冠すべからず。爾りとて、又房總と倡へなば、なほ三浦四十餘郷あり。因て南總といふときは、その地廣大に相聞えて、唯上總にのみ限るにあらず。這書に載する里見父子は、賢明當時に無雙なれば、南方藩屛第一の、大諸侯たるよしを、看官にしもおもはせんとす。作者の用意、素よりかくの如し。知ず僻言ならんかも。

本傳第九輯は、初の腹稿より卷の數いと多くなるをもて、第九十二回より、第百三回までの六卷を、九輯の上帙とし、第百四回より、第百十五回までの七卷を、中帙の上下とし、今板第百十六回より、第百二十五回までの五卷を、下帙の上とす。是より下にも、尙物語多かれば、亦復十卷を兩箇に釐て、下帙の中下帙の下として、明年二度に續出すべし。

八犬傳第九輯 附言

有人云、在昔里見氏は、安房に起りて、後に上總を略し、又下總をも、半分討従たりき。有恁ば安房は小國なれども、其發迹し地なるをもて、今も世の人推並て、安房の里見といふにあらずや。然るを叟は這書に名づけて、南總里見とす。便是本を捨て、只その末を取るに似たり。故あることと歟、いかにぞや。と詰問れしに、予答て云、否、子が今論ずるよしは、後の稱呼に從ふのみ。上れる代の制度を考るに、安房は素是總國の郡名也。邈古天富命。更求沃壤分阿波齋部率往東土播殖麻穀。好麻所生。故謂之總國(古語麻謂之總也。今爲上總下總二國是也)阿波忌部所居。便名安房郡(今安房國是也)と古語拾遺に見え、古事記並に書紀景行紀に、東の淡水門を定め給ふよし見え、且景行五十三年冬十月、天皇上總國に到給ひて、淡水門を渡り給ふよし見えたり。しかるに元正天皇の養老二年、五月乙未、上總國なる、平群安房朝夷長狹四郡を割て、安房國を置給ひしに、聖武天皇の天平十二年、十二月丙戌、安房國を元のごとく、上總國に幷せ給ひき。かくて孝謙天皇の天平寶字元年五月乙卯、安房國舊に依て、分立らるゝよし、書紀及續紀に見えたり。是よりして後は、安房と上總と、

たゞさせん便りも今はなき人の、見はてぬふみを綴りわびぬる。

實に吾この歌のごとく、綴わびぬるを査ね、といはるゝよしの理なれば、乞難てのみありける程に、幸ひにして翁の病著、八月下旬に本復の聞えあり。是よりして彼百十三回なる、四ひら五頁遺れると、十二の巻上下二冊、百十五回の終りまで、十月望の日に、綴り果されし喜びは、僕のみ歟、貸本屋まで、四方つ君子もさぞかし、と思へばいとも短き筆もて、長うなりたる本輯二帙、前後の發販料らずも、今まで遲滯せしよしを、白地に告まつるになん。

るの歳也。餘は倘いはけなかりけり。翁の悲愁沓すべし。この凶變に拘づらひて、未成の稿本の獲がたきこと、龍の腮にありといふ、珠に似たらん心地しけるに、事の障りは是のみならず、曩に六月の比より歟、翁も亦恙あり。僕時々訪慰めしに、一日翁の云、予が老て不幸なる、琴嶺を先だてしより、心たましひ衰へたればや、背局り腰さへ疼みて、人の扶助に起居をすなれば、忌は闋ても倘垂籠て、朝露夕槿の果敢なきを、觀念の外他事あらねども、坐して食へば箱も空し。現病著のせんかたなきより、なほ苦しきは世渡りなる哉。心の憂ひを帚ふべき、玉箒はなきものから、幾まで歟かくてをるべき。今一霎時待給へ。この疼痛だにおこたらば、遺れる卷を綴るべし。抑予が年毎に編る、册子物語の稿本は、傍訓などに誤脱あるを、みづから急に讀復しては、見遺すも多かれば、一二回づつ綴る毎に、先琴嶺に校閲させて、指摘を他に儘すれば、そを補ふに便りよかりき。因て這般の稿本も、十の卷百十一回までは、皆琴嶺に見せたるが、十一の卷の中央に至れる、百十二回十五頁は、五月朔日に綴りしかども、この比は琴嶺が、病著既に重やかなれば、予は見よかしともいはざりしに、他がはやく聞知りて、いかで校閲せまくほしとて、病の牀に在りながら、いと叮寧に誤脱を訂して、親の資助になれりしに、又見すべくもあらずなりたる、是すら歎きのひとつにあなれば、

拄えつ、撓ます去らず、姑且挑戰ひけり。這段はなほ長やかなる、腹稿いまだ盡さねば、看官訝るのみにして、思ひ得がたき事もあるべし。勿論、この中帙も六卷なれども、楮數殊に多かれば、釐て七册に做すものから、それすら這に限りあり。是より下の話說は、本輯下帙の出るを俟て、第一百十六囘に、解分るを聽ねかし。

八犬傳刊行の書林文溪堂等、贅言して言、本輯中帙七册の編述は、作者蓑笠翁約束あり。大凡五月下旬までに、遺なく綴りて取せんとて、今玆乙未春二月六日より、はやく硯を發かれしに、果して五月七日に至りて、十一の卷第百十三囘の二十四頁まで、稿本過半出來しを、筆工畫工、剛人の手に渡して、をさ〳〵刊刻を急ぎしに、次の日五月八日の朝、翁の獨子にて侍りける、琴嶺先生の訃(此云シキョノシラセ)聞えて、長き病著起つよしもなく、この朝辰時に、簀を易にき、と告られけり。先生は瀧澤氏、諱は興繼、字は宗伯、一稱は琴嶺、守忍庵と號し、又玉照堂と號す。方伎をもて業となせり。享年三十八歲也。五月十日、小石川茗荷谷、淸水山深光寺(淨土宗)なる、先塋中に祔葬せらる。法號して玉照堂君譽風光琴嶺居士と云。先生稟性尤孝順、言行老實ならざることなし。嗚乎惜かな。幼息一男二女あるのみ。長子は小學に入

と誰か見ざらん。孝嗣は、歩を住めてつく〴〵と、單心におもふやう、這旅客は年少かるに、一路兒のなかりし歟。こは酷く酒にや醉ひけん。然らずは病痾の發りしならん。倘我ならでこの處を、過る人那財嚢を見ば、必不良の心を起して、奪略るにぞあらんずらん。喚覺さばや、と惻隱の、心有繋に已ことを得ず、我を忘るゝ聲高やかに、やよ旅客覺給へ。やよ覺ずや。と幾番歟、雖呼々々應せず。捨ていなんはさすがにて、手を拿り脈を試るに、親兵衛は姫神傳授の、閉息の法をもて、脈さへ沈したりければ、孝嗣驚き手を放ちて、この人毫も酒氣なければ、醉て倒れし者にあらず。且寸口の脈平常ならで、有が如く無に似たり。意ふにこは顚癇にて、卽倒したるに疑ひなし。猶中脘を推試ずは、死活を知るよしなかるべし。と獨言つゝ、親兵衛が、衣領をやをら推披きて、懷へ手をさし入るゝを、親兵衛は臥ながら、その手を丁と拖りて、白日強盜奴何するぞ。と罵りながら身を起して、搔抓み、耶と聲かけて、眼上約莫一丈あまり、鞠蹴の像く投たりしを、孝嗣も亦本事あれば、宙にて閃りと斛斗りて、地上に立て滾ばず仆れず、怒れる聲を振立て、惡少年奴が陽滅せしな。然とも知らねば我は我が、誠心をもて看病りたる、恩に仇做す、白打三昧、爾らば本事を見知せん、覺期をせよ。と敦圉たる、勢ひ猛く腰刀を、晃りと拔て礮と撃を、親兵衛喋ぐ氣色なく、腰なる鐵扇拔持て、受つ


不忍の池の畔に孝嗣親兵衛と戦ふ
南總里見八犬傳第九輯巻之十二分巻下終



り來ば、いかにして免るべき。然らでも這里は忍岡の、城を距ること甚近かり。然ばとて身に纏たる、路費なきを爭何はせん。湯島の社へ參詣して、祈らまほしく思へども、稟たる親の服あれば、思ふのみにて是も甲斐なし。且淺草まで退きて、又主意をすべけれ。と獨語つゝ遽しく、裳の塵を拂ひつゝ、世を潛ぶ身も不忍の、池を遶りて正坎田舍、上野の方へぞ赴きける。

爾程に犬江親兵衛は、久しく樹陰に立躱れて、孝嗣が死を拯ひたる、簸大刀自主從の事の光景、又大刀自も作當們も、搔消す似く見えずなりたる、奇しき椿事に胸を潰して、出も得やらず在りける程に、剛才孝嗣が獨譚て、淺草寺のかたへとて、池を遶りてゆくを見て、肚裏に思ふやう、那孝嗣は忠孝の、聞えある後生也。只今他に說薦めて、我君侯の家臣に做さば、萬卒に倍て憑しからん。なれども徒その名を聞て、今日その人を見たるのみ、いまだ本事の剛柔を、知るよしなければ心許なし。鉼てこそ、と深念をしつゝ、樹陰を出て捷徑より、孝嗣に先だちて、走ること兩三町、不忍の池の盡處に、老たる偃松一株あり。其頭は芝生也ければ、親兵衛は松の根を、枕にしつゝ仰反倒れ、氣を喪ふたる面色して、那後生の近づき來ぬるを、等ともしらぬ孝嗣は、鬱々として偃松の、邊まで來にけるが、と見れば行裝せし一個の少年、腰に兩刀を跨へて、輾轉て樹下に在り。剩そが懷より、財嚢の半分顯れ出しは、必路費の金なるべし、

刀自は、又孝嗣にうち對ひて、喃佐太郎、今より浮浪の身也とも、武士たるものが寸鐵だも、帶ずして那里へゆかれん。因てその兩刀を取する也。然ばとてなほこの地方を、遠く去らずは後難あらん。はやく他鄕へ影を躱しね。當今東國の良將は、里見親子に優すものなし。安房上總こそ究竟なる、身の置所なるべけれ。やよや、この義を思ひね。と敎諭して大小の、刀をそが儘取らすれば、孝嗣は左右の手に、受戴きつゝ腰に帶て、感謝に堪ねば咤みたる、涙と共に額衝き拜して、又恩賜の歡びを、稟して頭を擡げつゝ、四下を見れば、こは什麼、今まで在りつる大刀自主從、轎子眉尖刀、挾箱、然しも多かる件當さへ、忽然として一人も見えず、只不忍の池の畔に、敲く水鷄の聲のみぞ、最も幽に聞えける。恠る神出鬼沒の行會、料知るべきよしなかりける、孝嗣酷く驚き呆れて、忙然としてありけるが、越に肇て心づきて、見れば帶たる兩刀は、曩に禁獄せられし折、根角谷中二が捕收たる、孝嗣が佩料にて、河鯉の家、先祖より、相傳の鋭刀也。原來大刀自主從と、見えしは狐狸の所爲にして、我與に這兩刀を、悄々地に捉て返せし歟、倘然もあらずは湯島なる、聖廟の靈驗にて、我死を救ふて、這刀さへ、拿も復させ給ひし歟、それかあらぬ歟、とばかりに、左さま右さま思へども、思ひ難たる奇異瑰怪に、尙疑ひは解ざりしを、恁てあるべき時宜ならず、倘谷中二們が迷ひ醒て、路より急にかへ

投ていそぎけり。恁而巣鴈駿平は、孝嗣を伴ふて、大刀自の轎子の、邊に聽てかへり來て、谷中二們がいひつるよしを、聞えあぐれば、孝嗣は、大地に平伏し、身の歡びを、稟すを、大刀自うち听て、やよ孝嗣初て逢ひ侍り。愛たき二世の忠臣を、奸黨に誣られて、寃枉に殺すがいとをしさに、左やら右やら救ひしかども、越後へ倶してかへりなば、倘管領家と盾を衝突、と思はれて和議も破れやせん。ふり捨がたく思へども、是より永く別るべし。聞ずや唐山のふるき常言にも、良禽は樹を擇て栖み、良臣は君を擇て、仕るとこそいふなるに、譜第也とて暗主の與に、忠を盡して盡し得ず、身を喪ふは愚ならずや。孰の里にも身を立て、後の榮を聞せよかし。と慰められて孝嗣は、感涙坐に落るをおぼえず、やうやくに頭を擡げて、思ひがけなき再生の、御恩は湯島の臺より高く、不忍の池もなほ淺かり。孰の時にか報ひまつらん。今さら短き詞には、罄すべうも候はず。といへば大刀自莞やかに、否とよ汝が爲のみならず、權佐守如が、蟹目前に冊きて、死に殉ひし忠心に、報ふと思へば恩でもなし。讒死を見るに不忍の、池の水草に放生會、子の河鯉を活鯉に、做すは老婆の親切のみ。と諭しつ傍を見かへりて、やよ駿平咱挿替の兩刀あらん、快出しね。といそがせば、駿平は阿と應て、一霎時後方に退きしが、逆准備やしたりけん、黃金表裝の兩刀を、廣蓋にうち載て、恭しくもて來にけり。登時大

似げなし、鈍ましや。と窘られて谷中二は、一霎時猶豫を請まつるとて、退きて專作們と、密談を凝せども、豫聞知る大刀自の、男魂那强情を、當坐にいひ解くべくもあらず。今孝嗣を放ち遣りて、後に罪を蒙るとも、這里にて戰歿するには優すべし。いはるゝ儘に孝嗣を、遞與してはやく五十子へ、走りまゐりて恁々と、聞えあげなばよろづに一ッ、罪を免るゝ據もありなん。是より外に術なし、と商議し果て谷中二は、故の處へ出て來つ、亦復芝生に拜伏して、目今仰の趣を、甲乙にも傳へ示し候ひしに、餘議なき御助命、辭するに路なし。因て孝嗣を遞與しまゐらせん。五十子の城へ光臨の折、在下們が罪ならぬよしを、舘へ宜く稟し給ひね。いかで〳〵。と諄復すを、大刀自听つゝ微笑て、そはこゝろ得たり氣づかひすな。駿平はやく孝嗣が、索を解して受拿ね。と指揮に駿平谷中二を、卒とばかりに推立して、倶に河鯉が身邊に至りぬ。登時根角谷中二は、專作に恁々、とこゝろ得さしつ、孝嗣に、掛たる索を解捐させて、駿平に對ひていふやう、御助命推辭事を得ず、孝嗣を遞與まゐらすれば、我們はこの處より、五十子へ赴きて、よしを舘へ聞え上ん、身の暇を賜るべし。去向を急ぎ候へば、又拜謁に遑あらず。この義宜くおん陪補を、憑み侍る。といひつゝも、專作に目を注して、先出役の夥兵們を、忍岡の城へかへし遣し、その身の伴當のみを將て、却專作と共侶に、五十子を

者の讒を信容て、可惜忠臣を誅すると、其愚その害孰ぞや。孝嗣素より罪あらず、然るをいはんや守如が、何の爲に逆心あるべき。能を娼む小人們が、良臣の榮を忌て、僞書を造りて、謀書と披露し、招了せざる首伏を、哄作て罪を譏り、君命を借て、私怨を果さんとす。厶こそ大辟不赦の罪人、必首を刎べきもの也。この義は什麽。と詰られて、谷中二答ることを得ず、それは、とばかり口訥りて、黄檗を舐りし唖兒に似たるを、大刀自呵々と冷笑て、孝嗣が罪なきは、今解諦して分明ならずや。又守如が忠誠なるも、逆心ありき、といはれては、蟹目前の貞實なるも、狗死になるのみならず、惡名も亦等かるべし。しからば我亡女兒の與に、その寃を雪めずは、武門の母たる甲斐もなし。倘孝嗣を遞與さずは、士卒に下知し、刃を交へて、汝達を咸撃果して、後に孝嗣を放ち遣りてん。然しても否歟、いかにぞや。と問逼られて谷中二は、困じ果たる頭を掻て、仰承り候ひぬ。然ば五十子へ人を走らして、舘によしを告奉り、放つとも放たじとも、那里の下知に依り候はん。といふを大刀自聞あへず、五十子までは二里に餘る、路の程を往て還る、使价を等て幾まで在らんや。この義を後に聞えあげて、管領不字をいはるゝとも、汝達が罪にはあらず。好も歹も婆々が身に、引受て計ふべきに、其頭に毫も遠慮せで、快孝嗣を遞與しねかし。遮莫命は惜からずや。否とも應とも胸を定めよ。武士には

し草枕、旅宿累ねて來ぬる程に、奇しき夢想に神の告あり。譬ば湯島の天滿宮、枕上に立給ひて、蟹目前の傳なりし、權佐が獨息子、河鯉佐太郎孝嗣が、寃枉の罪に陷されて、命危き事由を、最詳に告させ給ひて、他が父守如は、多く得がたき忠臣なりしに、聊事を聞僻めて、自殺したるを讒臣們が、逆謀ありとて主君を惑し、剩その子孝嗣も、親に劣らぬ忠誠の、志ある後生なるを、又奸黨が稟掠めて、禁獄數日に及びつゝ、本月の某の日に、恁々の地方にて、竟に死刑に行れんとす。はやく荏土へ赴て、孝嗣を救ふべし、と正可に示させ給ふとおもへば、忽然として夢は覺にき。幵より路次をいそがして、今日しも這地に來ぬる程に、孝嗣を死刑の事、里巷の風聞、果して違はず。因て湯島の神社へ、詣て這里へ來ぬる也。是より五十子の城に赴けば、管領へは左にも右にも、宜くまうし做すべきに、快孝嗣を放ちねかし。といはるゝよしの像輒なるに、谷中二呆れし面色にて、そは仰では候へども、孝嗣が叛逆は、大赦の折でも數まへがたき、大僻なるをいかにして、御内緣をはします、老夫人の御助命也とて、饒さるべき者に候はず。且佛の教にだにも、果敢なき事に相喩て、泡沫夢幻といふなるに、憚ながら御夢想の、神託は信がたかり。婦人の仁に候はずや。といはせも果ず、大刀自は、聲苛立て、默れ麗廉、泡沫夢幻の譬喩ありとも、神の示現を信仰して、罪なき人の死を救ふと、佞

夫人の先伴、是甚麽なる打扮ぞ。但見る、第一番の排列は、鐵砲弓手四十名、次に長尾の家の花號を、緋の油箪に縫箔したる、一對の挾箱、次に猩々緋の重鞋掛たる、眉尖刀を持る者、次に歩兵三十名、却その次は夫人の轎子、左右に從ふ老黨若黨、齊々として二十許名、皆行裝華やかにて、陣笠野袴、掩膊脛衣、列を正して守護したる、次は雜色數十名、醫師の轎子茶辨當、伴の女房は轎子にて、十挺あまり續きたる、是より下は騎馬の老黨、伴鎗陪伴、雨衣籠は、なほ迥にしていまだ見え來ず。婦人に似げなき武備巖重、覷を驚かす可也。却說大刀自の轎子の、既に近く來ぬる程に、駿平軈て走り還て、轎子添の老黨に、谷中二が姓名、その餘の事まで、箇樣々々。と聞え上れば、大刀自はやくうち听て、且先伴を住よ。と下知して又駿平に、こゝろ得さしつ轎子を、舁居させて等程に、伴當們は整々と、立わかれつゝ行儀よく、左右二側に星列たり。登時巣鴈駿平は、又谷中二が身邊に迫りて、やよ根角生、老夫人の對面せんとて、おん轎子を建られたり。快々。といそがすにぞ、谷中二は阿と應て、走りて轎子に近づきて、芝生に拜伏してければ、大刀自は轎子の、戸を開かしつ端然と、谷中二にうち對ひて、汝が根角谷中二なるよ。這囘我身の恁猛に、東國へ發向しぬる所以は、原主筋なる扇谷家と、我子景春が和議整ひたる、歡びをまうさん爲、及亡女蟹目前の、上墳せまくほしさに、思ひ起せ

るや。といはせも果ず、谷中二怒れる聲ふり立て、無益の諄言誰かは聞ん。疾々首を刎ずや。と劇しき指揮に穴栗專作、承りぬ。と身を起して、孝嗣が項の後毛を、兩三遍拊揚つゝ、念佛せよ。と聲かけて、夏なほ寒く氷做す、刃を晃りと振抗る、程しもあらず、一個の武士、駒盾野袴、刀に革鞘、淺紫の三尺帶の、締目長き逆旅の打扮、湯島の方より忽然と、飛が似くに走り來つ、間近くなる隨に、越後方言の聲高やかに、やよ管領家の人々等給へ。洒家は、箙大刀自のおん作當、巢鴨駿平行深と喚做す者也。老夫人の御意を得て、傳ふべき旨候ぞ。一霎時刃を止ずや。と扇を抗つゝ喚かけたり。思ひがけなき事なれば、驚き訝る谷中二專作、庖丁すべき河鯉の、頸は得撃たで投頭の、思念に暇なかりけり。既にして巢鴨駿平は、はやくも走著しかば、谷中二聽て発兒を放ちて、遽しく立迎へて、御邊は越の老夫人の、おん作當に候歟。在下則扇谷殿の御內にて、忍岡の城守護の頭人、管領家の御諚によりて、逆臣河鯉佐太郎孝嗣を、刑罰の爲出役したる、根角谷中二麗廉で候也。越の老夫人何等の故に歟、遙々の御參向、逆その御沙汰も聞えず、いと佻々しき御旅行は、こゝろ得がたく候。といふを駿平うち听て、御不審寔に理りながら、老體朱門の婦人として、恁猛可なる御旅行は、その所以なくてや候べき。この義は老夫人に見參の折、疑ひを解るべし。といふ詞いまだ訖らず、徐もて來ぬる


刃を住て
谷中二
大刀自に謁
せん作
谷中二



觀んとて聚合し里人は、趕散されて又聚ふ、引板の鳴子に群雀、囀りあへず樹に登りて、遙に躱れて觀るも多かり。恁りし程に、親兵衛は、岡の邊にいと繁き、樹蔭を便りに近づきて、人に知られず闕窺たる、登時根角谷中二は、孝嗣にうち對ひて、河鯉佐太郎、承れ。若が父權佐守如は、當家恩顧の老黨でありながら、煉馬の殘黨犬山道節、幷に犬阪毛野們と通同して、出頭無二の良臣たる、龍山免太夫縁連們を狙撃して、北條家の和議を破り、剩君侯を危くして、五十子の大城へ、犬塚信乃を引入れし折、守如が奸詐密謀、はやく發覺れんとせしに怕れて、那身は自滅してけるを、その子孝嗣僞りて、忠死のよしに稟倣して、君を惑し奉り、更に又毛野道節們と、折々密書をかよはして、五十子忍岡の兩城を、攻略せんと相謀たる、虎狼の野心、大辟不赦、九族越に數を盡して、誅せらるべき者なれども、母は曩に世を去りて、兄弟姉妹もあらざれば、先祖の忠勤を思食て、罪一人に止られ、目今斬首せらるゝ者也。御諚辱く承奉りて、刃を受よ。といひ渡すを、孝嗣听つゝ嗟嘆して、現衆口は金を鑠す、忠義を誣て謀叛といひ、奸佞を稱て良臣といふ歟。綠衣黃裳、貴賤を亂り、冠履處を異にして、天地反覆す。然ばにや、伍子胥誅せられて吳王亡び、范蠡去て、大夫種罪を得たり。この期に及びて、何をかいはん。屍は野荊を肥すとも、寃魂必天雷と、なりて讒臣們を撃殺さん。思ひ知

嗣は多く得がたき、是忠孝の士也。道節毛野們も相憐みて、刃を交さりしと聞にき。然ばとて今我身單にて、拯ふに由もなきものから、切て首級を拿奪て、便り宜き讃佛場へ、葬るも是武士の好意。徒やは已ん、と尋思をしつゝ、足を早めて打出の、前面間に來て見れば、既に刑罰の折とおぼしくて、年二十許なる後生の、面白く、月額の迹伸て黑きが、背手に結枉られて、布皮の上にをり。此は是孝嗣ならん。又實檢使と見えたる武士の、紺純子の皂き天鵞絨の、下縁ある野袴に、萌葱羅紗の戰外套をうち被りて、朱鞘の兩刀背めしく、発見に尻を掛たるは、根角谷中二麗廉なるべし。又年齡三十有餘なる一個の武士の、袴の半分隱るゝまで、高股裁を拿たるが、葱白の太き綱組の、襷に臂を顯して、殺柄被たる一口の、刀を晃りと拔持つゝ、罪人の後方に跪坐たり。こは那穴栗專作ならん。この宅雜兵數十名、或は捍棒を衝鳴らして、饕んとて近づく衆人を追拂ひ、或は鎗、鏃、叉を推立持て、整齊として守護したる、その事の爲體、五道の冥官餓鬼を屠り、夷狄の庖厨に豚兒を解くも、恁やあらん、と思ふばかりに、凄じくも亦嚴なる。後は高き岡にして、招くともなき間道芒草は、劍の山歟と疑れ、前は不忍の池にして、紅蓮の芙蓉いまだ開かず。正是人間榮枯黍一炊、三寸息絶れば萬事休す。仰ぎて寃を叫べども、皇天答ず、幽魂今夜誰が家に落ん。恁る哀れを知らず貌に、今孝嗣が撃るゝを、

とよみたるも、又新勅撰集、小野小町の歌に、

武藏野の向の岡の草なれば根を尋ねても哀とぞ思ふ

と詠たるも、倶に忍岡の事にあらず、素より是國府に近き岡なるよし、先哲の考證あり。然るを又這頭にも、同名の、岡あるよしは聞知らず、土人の私稱にこそ。と詰れば老媼は點頭て、宣ふよしは、寔に以あり。向岡は這頭にあらねど、忍岡を喚更て、前面岡といふ者あり。又不忍の池の西のかた、本郷へ續る岡を、前面岡と喚做すも、土俗の私稱にて、取るには足らぬ事ながら、喚來れるも久しくなりぬ、今さら咎て改めがたかり。鄕に入ては鄕に從ふといふ、世の常言も侍らずや。因て俗稱に儘すれば、尋ね易くて便利に侍り。といひつゝ吻々とうち笑へば、親兵衛もうち含笑て、現いはるればその理あり。然ば酒家も前面岡へ、快行てん。と腰纏より、錢を出しつ、茶價を遞して、菅笠拿て遽しく、茶店を出てゆく程に、肚裏に思ふやう、奇也。那老媼が物のいひざま、民間微賤の者に似ず、甚麼なる人の果やらん。是すら心憎かるに、河鯉親子の事はしも、我身富山に在りし時、伏姫神の告させ給ひて、最詳に聞知りたるに、今又老媼が說く所、這那符節を合する像く、言具にして一事も漏さず。他いかにして城内の、機密を探得たりけん、故なからずや。こも亦奇なり。そは左まれ右もあれ、那孝

聞えあげしかば、憐むべし孝嗣主は、竟に死刑に處られし、今日未下刻、前面岡へ牽出されて、首を刎らるゝと聞えたり。そが實検使は根角生、大刀拿には穴栗生が、五十子より出役す、と逆件の風聲あり。方僅衆人の物見んとて、走りゆきしは外ならず、爾る好人の撃るゝを、憐みはせで樂しげに、薄情かりける人心、益なき所爲で侍らずや。といひつゝ外面瞻仰て、長き日ながらけふもはや、未の中刻になりにたり。噫鈍ましや長物語に、耳咻しく思れけん。茶釜沸湯りぬ、又一碗、まゐらせん歟。と茶碗を拿て、汲まくせしを親兵衛は、遽しく喚禁めて、否、閣ねかし、茶は欲しからず。現阿懷の物がたりにて、我疑ひは釋けたれども、忠臣孝子の誣られて、罪ならぬ罪に身を殺すは、宿世怎麽なる應報ぞや。恁ばかり不平の事はなし。切ては其里へ赴きて、外ながらその人の、面影ばかりも見まくほし。向岡は那里ぞや。と問へば答て、件の岡は、不忍の池の畔を、左へ五六町ゆき給はゞ、前面に連りたる岡侍り、這里を距ること遠からず、七八町もや侍らんかし。と云を親兵衛聞あへず、原來同名異地なるべし、我聞く武藏なる向岡は、卽故き名所なり。开は國府の南の方、玉川を隔たる、數里連れる岡をこそ、向岡と喚做たれ。然ば萬葉集なる、柿本朝臣人麿の歌に、

　出でて見る向の岡の本繁み開たる花は成らず止らず

諦し稟しゝかば、管領いよ〳〵恥させ給ひて、孝嗣の忠孝を、賞給ふこと淺からず、父の本領を賜りて、身邊近く召使れしに、功を娟み榮を羨む、佞人們は憚ばず、折に觸つゝ讒言して、その非をいふ者多かりければ、管領亦復惑されて、然しも二代の忠臣を、悄々地に疑ひ給ひしかば、遂に外樣へ退けて、五十子へは倶し給はず、そが儘に忍岡なる、城内に置れしかば、孝嗣は群小の、讒を怕るゝ爲に、病痾に假托て出仕せず、垂籠てのみ在りけるを、佞人們は尙飽ず、そが中には縁連と、親しかりしも多かれば、この折をもて龍山の、與に怨を復さん、と思ふ心の起りけん、いと怕るべき僞書を僞りて、河鯉佐太郎孝嗣は、毛野道節們に内應して、忍岡と五十子の、兩城を攻拿せん、と欲する密謀慥々也とて、件の僞書を披露せしかば、管領驚き怒り給ひて、有司に命じて孝嗣を、搦捕せ獄舍に繫ぎて、毛野道節們が在處を問るゝ、呵責緊しかりけれども、素より寃枉の罪なれば、招了すべきよしもなし。こゝをもて、忍岡守城の頭人、根角谷中二麗廉承りて、日毎に拷問を加る程に、五十子の城内より、美田駁蘭二、穴栗專作出役たり。然けれども孝嗣主は、毫も屈せず死を極めて、寃枉のよしを叫ぶのみ、另にいふよしもなかりしを、谷中二駁蘭二相計ひて、那人の首伏の、條々を與造て、毛野道節們は、孝嗣が、搦捕られしを聞知りて、いよ〳〵深く躱れけん、今さら照驗候はず、とに巧

の折毛野と道節と、現八大角の四犬士は、初對面の口論あり。孝嗣これを洩聞て、原來毛野と道節は、始より謀し合して、舘を狙撃しにあらず、と心に猜し疑ひ解て、毛野を怨まずなりしかど、却已べきにあらざれば、名告被け敵を招きて、勝負を決せんとて勇しを、道節們は感嘆して、敢亦刃を交へず、毛野共侶に找み對ひて、問答數回に及びつゝ、道節は分捕したる、馬を孝嗣に返しゝかば、孝嗣聽てうち跨て、一箭射て相別れたる、その折の進止、寔に愛たき武者態なりしを、敵ながらも犬士達は、只頗感じて已ざりき、と知れる者の話也。恁而河鯉孝嗣主は、忍岡の城に赴きて、主君に見參し奉り、蟹目御前も父守如も、自殺せし事の趣を聞えあげ、又毛野は道節と、謀し合して君侯を、犯しまつらせしにあらざる事、その故は箇樣箇樣、と對陣の折洩聞たる、毛野道節が初對面の、口論を事の證として、上樣のおん愆ならぬ、事由を稟し解きぬる、辯論詳なりければ、管領昨非を悟らせ給ひて、御後悔大かたならず。其詰朝孝嗣主は、五十子へ赴きて、昨日犬山が濱邊に梟たる、主君の頭盔を拿卸し、聽て五十子の城に入て、敵の退きたるにより、躬方の殘兵に四門を守らせ、却忍岡の城にかへり來て、頭盔を返し奉り、且五十子の爲體、及信乃道節が白壁に、書遺したる文言を、恁々とうち誦して、このおん耻辱は緣連が、君を賣まく欲りしたる、邪智奸佞より起れるよしを、解

聞えしかば、上様驚き歎かせ給ひて、愁に縁連を、除んとせし故に、毛野が口より事を洩して、那道節に告たりけん、然ばこそあれ思ひがけなき、剛敵途に起りしより、館は危窮に及ばせ給ふ。始を推せば毛を吹て、倒に疵を求めたる、我愆を爭何はせん。君あしかれとてせし事ならぬ、赤き心をなき後に、知らせまつらめ、とうちわびて、自刃して亡給ひしとぞ。然ば河鯉權佐守如主も、神ならぬ身の事の仔細を、知るよしなければ、毛野を怨みて、腹搔斷たる臨終に、獨子也ける佐太郎孝嗣に遺言しつ、君の先途を見奉りて、拯ひまゐらする事克ずは、いかで館のおん馬前にて、戰歿せよ、と勵したる、折から犬山們が義兄弟、犬塚信乃が詭計をもて、隊兵纔に二十名を、倶して城内に紛れ入て、火を放ちて攻たりければ、城は果敢なく陷されて、城兵多く撃れにけり。恁りし程に管領樣は、又高畷の頭にて、犬飼犬村兩勇士に、最も稠しく追逼られて、近臣は皆撃れぬ、殘るは大將のみなれば、馬を岡の邊に馳寄せて、腹を斷まくし給ふ程に、件の河鯉孝嗣主が、父の亡骸を轎子に、舁して走り來にけるが、三十名許の士卒をもて、主君の危窮を拯ひまつりて、隊兵を分ちて忍岡の、城へとて延しまゐらせ、其身は些の殘兵を從へて、小川を隔て敵を俟つ、必死の覺期しるければ、犬飼犬村兩雄は、感じて左右なく撃も蒐らず。折から道節を首にて、犬阪犬川犬田們さへ、料らず這里に聚合しかば、こ

河鯉佐太郎孝嗣と喚做たる、廿歳計の後生也、と豫より風聲あり。那人の爹々、權佐守如主は、奥家老で侍りしが、上樣蟹目御前の御意を得て、新參なる佞人龍山縁連を擊んとて、犬阪毛野胤智と喚做たる、智勇勝れし後生を憑みしに、那縁連は、犬阪が、親の寃家でありければ、商議卽座に整ひて、この春正月某の日に、縁連幷に阿黨の甲乙、相摸なる北條家へ、和議の使に赴く折、鈴茂林の頭にて、犬阪これを俟著て、縁連主僕と、副使なる、鰐崎猛虎們を擊捕りつ、この餘越杉駱三一峯、竈門鍋介旣濟、と喚做たる奸黨主僕は、悄々地に毛野の助劍したる、犬田犬川とか聞えたる、勇士の爲に擊れにけり。この事はやくも五十子の、城内に聞えしかば、管領酷く怒らせ給ひて、みづから毛野を追捕の爲、隊兵三百餘名を將て、驀地にうち出給ふ。鈴茂林の浦邊には、煉馬の殘黨、犬山道節忠與といふ猛者が、同盟の義兄弟、犬飼犬村の兩勇士と、二隊にわかれ埋伏したる、その隊の猛卒七八十名、猛可に起りて前後より、挾みて攻擊つ大刀風、當るべうもあらざりけん、管領方は亂謀ぎて、擊るゝ者尠からず。おん大將は辛しく、三四個の近習と倶に、敵の圍を殺脫て、五十子を投て走り給ふを、道節透さず赶蒐て、克彎て發つ箭に、管領樣は頭を射られて、頭鎧は矢場に落たれども、幸ひにして裏を缺れず、這里にて從兵四名の内中、兩個は道節に擊れにけり。爾程に五十子の城内には、この事はやく

の妻歟母歟、年齢六十有餘の老媼なるが、客待つ程の手技ならん、眼鏡を掛て、苧を績てをり。親兵衛は曉天に、市河を立去りしより、六七里の路を來ぬれども、日のいと長き限りなる、四月の天の薄曇り、十日に近き時候なれば、晷はなほ高うして、未牌の初刻になりぬべし。既にして湯島へは、遠くもあらぬ程なれば、親兵衛は這頭にて、先や姑且憩んとて、件の茶店に立よりて、発兒に尻をうち掛れば、老媼は遽しく頭を擡げて、客ありけり、と見てければ、眼鏡外しつ銜みたる、苧を疾苧桶に紈ね弃めて、身を起しつゝ出迎て、こは相公、はやく來ませしな。今日は朝より日和のよくて、いと煖に侍るかし。といひつゝ軈て竈燒著て、澁茶一碗、塗盆に、載て卒とて薦る折から、這頭の里人とおぼしきが、幾個となく奔走して、誰も來よ、他もいなずや。憐むべし那人は、今囚牢より牽出されて、前面岡へ來るぞとよ。噫無慙やな。南無阿彌陀、妙法蓮華、けふ限りの、命にこそ。と不忍の、池の邊望て走る光景、最臘しかりければ、親兵衛是を訝りて、喃阿懷、那衆人は、何を覩んとて走るやらん、刑罪人でもありて歟。と問れて老媼は嘆口氣して、然ばとよ、心なし們が、何面白くて人戰めきに、行て觀るべき者には侍らず。那議に就ては苦々しき、物がたり侍る也。いまだ傳へも聞給はずや、今日前面岡なる中明亭にて、首を撃るゝ罪囚は、扇谷家の御内にて、二世の忠臣と聞えたる、

もあらぬ、再會を等れんのみ。といはるゝことの理りなれば、水澪はさら也、依介は、惜む別を禁めあへず、明日と契りしその次の朝、未明に行德まで送行て、遂に袂を分ちけり。恁而親兵衛は、この朝、行德へ來ぬる折、外戚古那屋の香華院へ立よりて、上墳して本堂へ、香料を寄進しつ、退きて鹽燒く濱の、光景を眺望るに、外祖文五兵衛の舊宅は、人の購得たりしより、今さら訪ん由縁はあらず、只母屋の瓦にのみ、古那屋の花號を遺したり。親兵衛は四才の秋まで、母にも祖母にも携られて、折々這里に來にけるを、思へども只夢に似て、思ひ難つつ懷舊の、端緒と做る事のみ多かり。恁てあるべきにあらざれば、單肚裏に思ふやう、玆よりして眞間國府臺、葛西墨田河まで杖を曳かば、名勝故迹多かるべけれど、山水の爲ならぬ、旅にしあれば、それも要なし。今番は思ふよしもあり、先江戸へ赴きて、湯島妻戀を歷覽し、金曾木より穗北に到りて、犬塚犬山三四の兄弟、今も那里にありやなしや、便宜を探るにしくことあらじ、と既に尋思をしぬる折、兩國河へかへり行、快船ありと聞えしかば、譚ひよりて賃錢を、定めてその船に乘たりけるに、潮時もよく順風にて、水行三四里なるべきに、一時許に船果ければ、艤て陸路にうち登りて、上野の原まで來にける程に、と見れば老たる松の下に、発兒兩三脚並建て、葭簀構の出茶屋ありけり。這煎茶を鬻ぐ茶博士は、根岸金曾木頭なる、農戸

そが中に、小文才ある閑兒は、伊呂波韻を採毛蝀までに、幾遍となく、繰返しつゝ辛じて、並立たる、五七言の、平仄だも整ざる詩を、茶良樣とかいふ惡筆もて、可惜唐紙に寫ちらせしを、懷にし來て寄するもあり。又こそけれの手爾遠波だも、得知らざる諷咏兒は、よみ出すことの像易にて、雅言俗語の駁雜なる、三十一字を羞もせず、最美麗しき高檀帋に、筆勢折たる釘の像きを、慠然として遺るもありけり。是により親兵衛は、依介と商量しつ、餅十五六斛搗煉して、一鄕遺なく餽り遣し、又東西贈られたる酬には、その人々を宿所に招きて、置酒して一日筵を開き、且犬江屋の艄工們にも、この折酒を飮しけり。恁る雜費は、親兵衛が、携たる盤纏を以して、剩主人依介に、金五兩を取せしを、依介驚き推返して、云云と推辭めども、親兵衛肯ず、理を盡して、薦めて水澪に遞與しけり。爾程に親兵衛は、舊里人に愛顧せられて、逗留數日に及びしかば、猛可に依介に別を告て、先行德の方へとて、立去らんと欲せしを、依介水澪は推禁めて、放ち遣るべうもあらざれば、親兵衛徐に諭していふやう、錦を被て故鄕に還るは、寔に人の面目なれども、我身正しく里見殿に、仕て重任大祿の、榮を得てかへり來ぬるにあらず。只是孤客ながら、同因果なる義兄弟、七犬士の在處を索よとある、君の仰を稟たるに、舊里也とてなほ浮虛々と、這地方に日を彌らば、そは忠ならず義にあらず。今より後はかたく

に八房あり、そをうち轉せば親の名の、房八となる名詮自性を、思ふも不娛し手束弓、春は過けり、花は根に、我は舊巢へかへれども、返らぬ親の慕しく、栽にし友もなつかしき、心の憂ひ帚ひ難て、塵に交る塵の世や、歎きは果しなかりしを、然而在るべきにあらざれば、又依介を先に立して、香華院へ參詣す。五七町の程にして、はやく寺に來にければ、祖先の墓に花を手向て、方丈に赴きつ、名簿を出し、布施をまゐらすれば、住持聽て對面して、十念を授らる。布施の多きに依りてならん、屢茶を呼び、果子を薦めて、似げなき俗談せらるゝに、親兵衛は困じ果て、依介に目を注し、やうやくに辭し去て、犬江屋へかへり來にければ、水澪は准備の酒餚を、羞めて良人と共侶に、管待初に彌增けり。爾程に這市河の里人們は、幾の程にか聞知りけん、大八の眞平が、神躱しに遇ひしより、既に六稔の光陰を歷て、いぬる日に還されたるが、今茲九歲の童なるに、身長猛可に大きうなりて、文學武藝、いへばさら也、萬事に就て神々しき、神童と稱られて、權且安房の稻村に在りしに、親の上墳をせん爲に、けふしもかへり來にけり。と話續ぎいひもて傳る、陜き田舍の事にしあれば、一鄕はやく知ざるはなく、次の日の朝より、四五名連署したる、罇を贈り海鮮を贈り、或は果子煎茶なンどを贈るもありて、良賤老弱陸續と、咸犬江屋へ詣來つゝ、歡びを演對面を請ふ者、幾百人なるを知らず。

備す貸草履、こは憚りぬ。と手を抗て、足に穿つゝ出てゆく。恁而犬江親兵衛は、宿所を去ること遠からぬ、二親の墓所に來にければ、依介は水を汲み、携たる花を立て、卒とて傍に跪坐たり。房八沼藺が死せし比は、世に憚の多かれば、墓表を建ざりしに、爾後は滸我の御所より、信乃を追捕の沙汰も聞えず、舵九郎が伙家の光棍們は、祟を怕れ他鄉へ走りて、後安くなりしかば、房八沼藺の一周忌に、墓碑を依介が造立て、義俠夫妻之墓といふ、六大字を勒してあり。その折と三回忌に、建し卒都婆は舊たれども、なほ朽もせでそが儘なるを、親兵衛はつく〴〵と、見つゝ跪き合掌して、念誦に時の移るを覺ず、追慕の淚胸に盈て、哀悼悲泣に堪ざりしを、思ひかへし念じ果て、やうやくに身を起せば、頭に障る樹の枝あり。こは六稔前に、犬塚信乃が、實栽にしたりと豫聞えし、那八房の梅にぞありける。親兵衛はこの樹の事を、曩に富山に在りし日に、伏姬神の告給ひしかば、知ざるにあらねども、思ひしよりはやく大きうなりて、枝條は四方に榮えたる、弱樹ながら屈曲して、蟠龍に似たる勢ひあり、折から夏の孟なれば、結びたる實は青やかにて、八房ならずといふものなし。依介これを指さして、この梅玆に生出しより、五稔許になりたるが、今玆肇て花さきて、枝に麗たる實の異なれば、里人稱て八房の、梅と喚做候。と告るに親兵衛さもこそ、となほも向上て、點頭くのみ。現犬と梅

らね。水澪は御親族の季ながら、初見參に候はめ。やよ歡びを稟さずや。といはれて水澪は額づきつ、膝を找めつ共侶に、いと叮寧に慰めたる、人の誠に親兵衞も、亦外ならぬ心地して、團坐程よく相譚へば、依介は又過去を、只顧にいひ出て、那舵九郎が暴虐し折、受たる眉間の舊痍の、痕を示しつ神の加護、年ふる郷に再會の、果はめでたし〳〵。と饗應に手の屆く、板厨の壺の錦手の、錦に添し花丹楓、果子を薦めつ慶賀の、盃を快勸んとて、立まくせしを、親兵衞は、遽しく推禁めて、やよ阿叟、その義は且閣ね。今とて急ぐ事ならぬ、管待は後に饗ん。今日この地方へ立よりしは、私の旅行ならぬ、君命に依るものから、然とて去向をいそがねば、一兩日は止宿せん。嚮に大母の消息にて、聞知られたることもあるべし、我身ばかりは同因果の、七犬士に先だちて、君侯御父子に見參し奉り、聊武功ありといへども、又故ありてや、首尾妙ならず。自餘の犬士の在處を尋て、遺なく都て俱して來よとて、約は坂東八箇國を、遊歷の暇を賜り、萬里の旅客になりたる也。恁れば幾時を涯りとも、量知られぬ旅なれば、和主夫婦に對面すべく、親の御墓を拜ん、と思ふばかりに立寄りにき。先墓參せまくほしけれ、墓所へ案内を賴むのみ。と諭しつ水澪に水を乞て、漱ぎ家廟を問ふて、父祖の木主に燒香す。その間に依介は、衣腕更つゝ、背門傍なる、籬笆の楊梅花折拿て、等程もなく親兵衞が、出れば

れば、次の日朝日の昇る時候、はやく市河に來にければ、艄工を勞ひ船を還して、親の名蹟と聞えたる、依介夫婦の宿所を尋ねて、名告をしつゝ對面す。依介水澪はいぬる日に、妙眞が消息して、親兵衛が事㥠々、と告られしにこゝろ得て、いと歡しく思ふものから、見れば聞しに增穗の芒草、色づくまでに長伸て、大人備たるに胆を潰して、呆れて一霎時長視てをり。親兵衛は亦亡親の、住にし宅にかへり來て、こゝ歟とばかり、なつかしき、昔しのぶの檐の衿、袖は露けき懷舊の、涙を拂ひうち向上て、心ともなく立在しを、依介水澪は稍鑒定て、遽しく立迎へ、こは思ひがけもなき、現和子にてをはせしな。先這方へ。と前に立て、帚拿る手も精悍しく、船荷の塵埃掃よせて、上坐に請升すれば、親兵衛は揖讓をしつゝ、野袴の裙掖下し、刀を解て坐をトれば、依介は水澪と倶に、茶を薦めなどしつゝ、恭しく額を衝て、山がへりの歡びを、云云と舒ていふやう、いぬる日に妙眞さまより、おん消息を賜りて、告させ給ひしおん身の高運、伏姫神の冥助にて、六稔富山に生育給ひ、心術さへ身長さへ、大人備給ひしと聞えたる、奇話珍說に、一たびは、驚きもしつ、歡しさは、涯りもあらず候ひき。思ふに倍たる御成長、ムぞと名告給はずは、いかにして知るよしあるべき。はやく安房へ赴きて、訪ひ奉らんと思ひしかども、日每に船荷の多かれば、今に果さで倒に、訪れまつるこそ本意な

獨阿彌七と喚做すは、南彌六が弟にて、上總なる蘇々利の農戸也。件の阿彌七に、兩個の兒子あり、冢子を阿彌太郎、次を增松と喚做たるが、倶に尙總角也。又出來介が妻は世を去て、成之介と喚做す獨子あり、今玆は十一二なるべし。件の成之介が亡母の叔父は、上總國夷灊郡、山田村に程遠からぬ、弓折塚なる引接寺の住持なるをもて、出來介則成之介を、手習讀書の爲にとて、年七八の比より、件の寺に預け置くよし、この折復五郎が聞えあげしを、義成具にうち聞給ひて、南彌六出來介が忠義に死せしは、縱その事成らずといふとも、人の及ばぬ所にして、戰場の陣歿に優れり。異日賞すべきよしもあれば、親族兒子の居所姓名を、漏さず記し留めよ。と有司に命じ給ひけり。恁て又淸澄們へは、妖書の事、及神女の威力に女僧妙椿が、懲されたる那夜芟の事の趣、又南彌六が遺書の事、又老侯の畜せ給ふ、鸚鵡に奇談ありし事、是により親兵衞們、八犬士を召させ給はん爲に、照文と與四郎に、おん使を仰付られて、遣し給ひし事の由を、佳橘に仰示さして、親兵衞が歸參しぬるまで、いよゝ屯を固く戍りて、那寬字をな忘れそとある、下知狀を賜りければ、佳橘は隨卽稻村の城を辭し去て、亦復馬をはやめつゝ、殿臺へぞ還りける。話分兩頭。爾程に犬江親兵衞は、那日大母妙眞に辭し別れし折、伴をも馬をも途より還して、單港口の船を央ひつゝ、艤てうち乘て漕走らせしに、通宵順風也け

而この次の日の黄昏時候に、殿臺の陣中より、荒川清澄が使者として、詰茂作橘が只一騎、稻村の城に著到して、荒磯南彌六、安西出來介が、素藤を刺んとて、敵城に入て、戰歿の事の顚末、且南彌六が怨魂は、その首級に住りて、梟首に及れざりし事、是故に、舘山の牢獄司が、贋首を梟し事、清澄この義を聞知りて、急に士卒を遣して、出來介が首級を奪捕せ、且敵の雜兵一名を生拘りて、事の仔細を責問ひしに、南彌六出來介が、勇戰の爲體も具に聞え、素藤は痍を負ぬ、撃れし士卒尠からず。亦那牢獄司が、南彌六の贋首に用ひしは、南彌六に撃れたる、賊徒名幕沙雁太の、首級にてありければ、一笑に堪ざるもの也。然ば出來介が遺書ありて、志の程も知られ、忠義分明に候へば、首級は近き山院に葬らして、異日墓表を建べき事、又滿呂復五郎以下の刀瘡兒の、久しく痊ざる者五六名候へば、將息の與、大城内にかへし置まく欲す。そは皆籠轎に乘せたれば、明日來著仕らん。先件の趣を、聞えあげまつらん爲に、馬を走らし候ひきとて、清澄高宗逸友們が、連署の呈書をまゐらせければ、有司これを受とりて、三家老に告知せ、當晩披露に及びけり。恁而この次の日に、復五郎を首として、刀瘡兒も來にければ、各宿所にかへし居らして、醫師に命じて藥を賜り、又滿呂復五郎に、南彌六出來介は、兒子なき歟、しかるべき親族の、あらずや、と問せたまふに、南彌六は、妻もなく子もあらず、

し給ふ御教書と、路費を遞與し、御諚を傳へて、縱情願也とても、獨行はしかるべからず、一兩個の伴當をば、領てゆくべし。と諭すにぞ、與四郎固辭むことを得ず、瀧田より從へ來ぬる、鞋奴只一名を、倶して照文と共侶に、稻村より首途す。長き日ながら影敧きて、下晡になりにけり。爾程に照文は、夥兵十名、奴隷五名、及瀧田より倶して來ぬる、私の伴當と共に、二十餘名の從者を領て、與四郎と共侶に、便宜の港口に赴きつ、當晩海船に執乘て、武藏の千住を投て走らすれば、與四郎は纔に一個の、伴當を從へて、別船にうち乘つゝ、こは下總なる市河へとて、遙けき水行をいそぎけり。恁りし程に辰相は、瀧田よりかへり來て、義成主に恁々。と返命を聞え上るに、既に鸜鵒の奇談にて、這方の事を那里に知られ、はやく照文と與四郎を、遣されたる後なれば、又させる事もなし。なれども君侯のおん愆を、みづからも悟り給ひて、親兵衛を召かへさせ給ふ、この一條は老侯の、御本意に稱せ給へば、歡び給ふ事大かたならず。因て南彌六出來介が、任俠義烈の事の趣、鸜鵒の告も漏せし事を、云云と聞えあげしに、老侯御感淺からず、譜第恩顧の者ならぬ、他們すら守の與に、命を惜まで義に勇るは、併守の殿の、士を愛し民を撫ぬる、仁慈の致す所也とて、おん歡びのよしを告稟しゝかば、義成も亦歡び給ふ。父子賢明のおん相譚を、傳聞くもの稱讃して、咸憑しく思ひけり。恁

結城へ赴き候はん。君侯も聞召たるごとく、、大法師は宿願あり、季基公を首まつりて、嘉吉のむかし結城にて、陣歿したる人々の、菩提を弔ふべき爲に、春より那地に庵を締びて、大念佛を修行す、と豫その聞えあり。本月の十六日は、那諸靈位の亡日にて、結願のよしなれば、その日に至らば犬士們も、倶に結城に赴きて、法筵に會候はん。非除來會せずもあれ、小臣は御父子の御名代を奉り、十六日の結願に、必法會に預るべし、と老侯の御諚あり、御布施なども儀のごとく、多く遞與させ給ひしを、柳筥に藏めつゝ、伴當に持せ候ひき。又老侯の宣ひしは、始賢士を招する、墨印は我一署也。這回は守の殿の、御教書を齎すべし、と仰られて候。と稟せば、義成點頭給ひて、寔に義ある仰也。しからば我も犬士們へ、招狀を與ふべく、祖靈へ香奠をまゐらすべし。十六日の結願に、餘日いくばくもあらざれば、十一郎は、今宵水行を、先武藏まで赴くべし。縱去向は異也とも、與四郎も倶に首途せよ。十一郎は十個の夥兵の、外に東西持すべき、奴隷なくば不便ならん歟。木曾介藏人は、是等の旨を有司に傳へて、事の准備を急ぐべし。と仰に大家こゝろ得果て、齊一退り出にけり。恁而照文と與四郎は、饗膳美酒を賜りて、權且伴當の揃ふを等しに、幾程もなく事の准備、整ひにきと聞えしかば、隨即氏元貞行は、招狀と香料を、照文に遞與しけり。又與四郎へも、親兵衞を、召かへ

行德は母親の、親里なるよししるければ、僕は蟹崎生と、路をわかちて那里に赴き、那山林の名迹と聞えたる、依介夫婦に對面して、穿納問ば、那人の、往方を知る據候はん。御旋に悖るに似たれども、作當は一個も要なし。況雜色轉卒也とも、御内人を倶していなば、影護くて倒に、進退不如意に候はん。この義は許させ給へかし。主にて候道節に、先だちて御扶持の下に、召置るゝ身の本意ならねば、晉音も倶にうち不娛侍りぬ。いかで一霎時の暇を賜り、道節竝に餘の犬士們の、在處を索候はゞや、と思ふ折から犬江の腋子すら、仰によりて這地には、在らずなりしと人傳に、聞知りしより胸潰れて、伴にも得立ず愁に、執遣されし老が身の、遣る方もなく候ひしに、懸る御用に擇れて、蟹崎生と共侶に、那八犬の人々の、迎にいね、と仰の趣、寔に得がたき造化也。面目這上や候べき。この身單で候とも、犬江はさらなり、犬士達に、逢ば必說薦めて、倶さでは還り候はじ。といと勇しく稟すにぞ、氏元貞行有理と感じて、聽て執做奉れば、義成莞然とうち笑給ひて、他が情願寔に餘議なし。夥兵を隷て遣さん、といひしは非常の與なれども、幵も亦不便に思はれなば、強るは要なし、隨意たるべし。却十一郎は甚麼ぞや。この義に就て瀧田にて、另に仰はなかりし歟。と問せ給へば、照文答て、然候。目今與四郎が稟せしごとく、小臣は穗北なる、氷垣許索ゆきて、那里に犬士の在らずといはゞ、

やくも大人に告させ給ひし、おん計ひはいよ〳〵妙也。この義大人の夢想に入て、恁々と告給ひなば、なほ疑ひもをはしまさんを、朦朧ならぬ現身の、鳥もていはし給ひしかば、大人は毫も疑ひ給はで、快照文と與四郎を、這方へ遣し給ふにより、事立地に合期して、料らずも這便宜を得たり。濱路幷に妖書の事さへ、既に知召たらば、照文們も聞知りたらん。然ば今さら告んは要なし。先や與四郎を召べしとて、近習にこゝろを得さし給へば、遠侍に侍りたる、與四郎は近習に引れて、おそる〳〵義成主の、おん面前にまゐりしを、義成遙に瞻して、やゝ與四郎近く找みね。嚮に我思ひ淺くて、犬江親兵衛を遠離たるは、實に無此上謬なりき。因て召かへさんと欲す。幵使价には十一郎と、汝に優ものなきをもて、瀧田へ辰相をまゐらせしに、奇しき鸚鵡の忠告ありて、大人のはやくも汝達を、這方へ遣し給ひしは、特に便宜のおん計ひ、忝くこそ思ひ奉るなれ。左にも右にも十一郎と、商量して快起行ね。路費はさら也、夥兵們を、伴當として遣すべけれ。單親兵衛のみならず、餘の犬士にも索遇はゞ、我意を傳へて倶して來よ。やよやこの議をこゝろ得よ。といと懇に仰すれば、與四郎は額衝たる、頭を擡げて氏元と、貞行にうち對ひて、掛向は最も惶き、御諚承り奉りぬ。嚮に瀧田を出る折、蟹崎生と既にはや、商議仕り候ひき。逆知し召れけん、下總なる市河は、是親兵衛が故鄕にて、

意衷に猜し給ひしかば、毫も疑ひ給はずして、臣と與四郎を、いと慌しく召させ給ひて、前條を恁々と、仰示させ給ひつゝ、若們は速に、行裝の準備して、稲村へ走りまゐでよ。守の殿に告稟さんに、この事果して驗あらば、歡びて用ひられん。非除倘義成は、然る後悔の心なくとも、鸚鵡の奇談を听れなば、親兵衞が召かへさるゝ、物種になるよしもあらん。快々せよ、といそがし給ふ、仰畏み言承まつりし、小臣幷に與四郎は、驚奇感嘆辨よしもなく、時を移さず準備して、日今來著仕り、尊意を伺ひ奉れば、君侯にも件の御准備なる歟。長相をもて老侯へ、稟させ給ふは奇異妙絶、恐れ入て候。と一五一十を告稟せば、側聞せる氏元貞行、倶に奇談に駭然たる、そが中に義成主は、憶ずも、手を額に加えて、鳴乎奇なるかな、妙なるかも。鸚鵡の奇言は、我大人の、御明査に錯ひなく、女兒の君の神靈の、神謀にこそあらんずらめ。現神通の无量なる、曩には民の童女に、化現して、賊徒征伐に、緩急の理を示させ給ひ、更に叉疾風もて、躬方の刀瘡兒に冥助を施し、昨夜は叉明々地に、神體を顯して、濱路を拯ひて、女僧妙椿を、懲し給ひしのみならず、義成が妖賊に、惑されたる愆を、諭させ給ひしそが上に、親兵衞が、童年に似げなく、大きうなりしは類ありとて、史書を援て、世の疑ひを、解き給ひぬる論辯廣博、最有がたき示現なるに、今朝は叉瀧田なる、鸚鵡に憑て我意衷を、は

に七犬士們を、召さるべきおん使には、照文與四郎に優者あらじ、と那里にも評議ありて、おん使を遣さるべし。开を等給はゞ時も移りて、今日の役には達がたかり。はやく件の兩人を、稻村へ遣されよ。必な疑ひ給ひそ、と諄復しつゝ稟しゝかば、老侯驚き訝り給ひて、單おん胸裏に思ひ給ふやう、昔唐山晉の時、張華が畜し白鸚鵡は、主人に惡夢の兇兆を、報て免るゝことを得たりといふ、事文後集に本文あり。又唐の天寶年間、長安なる豪民、楊崇義が妻劉氏は、鄰舍兒にて疎からぬ、李弁と密通したりしかば、倶に計りて崇義を殺して、涸井の中に埋めつつ、知ず貌して訴けり、是により、檢吏その家に來て、仔細を糾明しぬる折、崇義が畜ける鸚鵡あり、有司に向ひ聲ふり立て、崇義を殺せし惡棍は、劉氏と李弁也と云、その聲分明也ければ、奸夫淫婦は免るゝ路なく、その罪立地に發覺れて、軈て刑戮せられけり。時の天子玄宗帝、件の鸚鵡を忠とし賞て、封じて綠衣使者といふよし、載て天寶遺事にあり。然けれども今の鸚鵡は、僅に他鳥の聲を倣すのみ、人の言語に倣へるも、一兩言に過ざるに、かくの如きは疑ふべしといふ、宋明の人の小說に、記著たるも有といへども、是等は鳥の神なるもの歟、他し鸚鵡と一列に、論ずべくもあらずかし。然ば唐山の例に憑りて、今我鸚鵡の奇談を思ふに、こは這鳥の心から、いへるにはあらずして、伏姫の神靈の、いはしたるにぞあらんずらん、と

隨卽この義を命ぜられ、稻村よりいまだ一言も、まうさるゝ事なきものから、善事は急げ、と俗にもいへり。照文は速に、與四郎を倶して、稻村へまゐるべし。我推量に違はずは、用ひらるゝ義あらん。と仰によりて物とりあへず、汗馬に鞭を鳴らしつゝ、宙を飛してまゐりしに、與四郎は歩行ながら、老足今番も健にて、毫も後れず候ひき。しかるに御父子御同意なる歟。這里よりも辰相を、瀧田へ遣し給ひしは、事暗合に候はずや。といふに義成主なほ訝りて、开も亦奇しき事ながら、大人は亦いかにして、我胸中を、白地に、然ばかり猜し給ひけん、こゝろ得がたし、甚麼ぞや。と問せ給へば照文答て、然候。那船來の鸚鵡の事は、君侯の知召すことながら、且始より稟上ん。今より十稔あまり前つ秋、外國の商舶、颶風に漂流して、當國洲崎の浦に歇りし折、君侯の仁恩により、破船を修復ひて、かへり去ことを得たりける、外國兒們その歡びに、方物種々を、獻りしそが中に、鸚鵡一隻ありしを、老侯にまゐらせ給ひしかば、軈ておん便室なる、楣の柱に掛させて、年來畜せ給ひしに、件の鸚鵡、今朝老侯の、起出給ふを等貌に、忽然と聲を立て、やよや老侯聞し召せ、稻村殿はいぬる比、犬江親兵衞を遠離給ひし、おん愆を知し召て、今は御後悔大かたならず。その所以は箇樣々々、恁々の事候とて、濱路姫上の御危難、神女の擁護、又那妖書の事までも、その崖略を告まつりて、親兵衞幷

らしつ、或は伏姫神の靈驗威德の、大かたならぬを稱讚し、或は南彌六出來介が、忠誠義俠を憐て、事の吉凶思ひ得がたし。明日は必殿臺より、告らるゝことあるべしとて、專素藤誅伏の、計議を旋らし給ふ程に、蟹崎十一郎照文が、老侯の仰を稟て、姥雪與四郎共侶に、瀧田より來にけるよし、その聞えありしかば、義成訝り且歡びて、大人の仰は何事やらん、いまだ尊意を得ざれども、好折からに來ぬるかな。先十一郎を召べしとて、そが儘に等給ひけり。然ば蟹崎照文は、近習に引れて、閑室に、まゐりて見參に入りしかば、義成主は、照文を、身邊へ招き近著て、先老侯の御安否いかに。と問果て却宣ふやう、這里にも火急の所要あれば、汝と姥雪與四郎を、大人に借奉れとて、方僅東六郎を、瀧田へ遣したりけるが、途にて他に逢ざるや。と問れて照文、然候。路もや錯ひ候ひけん、辰相には逢ず候ひき。といふに義成點頭給ひて、そは左まれ右もあれ、大人の仰は何事やらん、承るべし。と宣へば、照文聽て膝を找めて、御諚餘の義に候はず。最憚あることながら、君侯は犬江親兵衛に、遊歷の暇を賜りしを、悔しく思召ならずや。といはれて義成主驚きながら、そはいかにして知られにけん、誰が告たるぞ、不思議なる。と仰に照文然候。この義に就ては尤以あり。老侯料らず御胸中を、知召すよしありければ、仁を召するおん使には、小臣と與四郎こそ、相應しきものなればとて、

り、日を經て往方を知らずといへども、心當ある處々へ、追隊を蒐させ給ひなば、又姥神の冥助によりて、索逢ふべく候はん。といふに辰相も亦稟さく、仁を召さるゝおん使には、蜑崎十一郞照文と、姥雪與四郞こそしかるべけれ。十一郞は、親兵衞が、幼きより相識れり。及與四郞は、伏姫神の、引接冥助を蒙りて、六稔富山に親兵衞を、守傅きたる因あれば、他們が御諚を傳達して、說薦めなば、親兵衞が、澁りて稟すよしありとも、かへりまゐらざることを得ざるべし。但十一郞も與四郞も、瀧田の御城内に候へば、某おん使を奉り、馬を那首へ乘走らして、是等の義を老侯へ、聞えあげ奉らば、必件の兩人を、遣されんこと疑ひなし。この義はいかが。と正違て、各意見を述しかば、義成滿面うち笑つゝ、幾回となく點頭給ひて、汝達が稟す趣、一個として我意に、稱はずといふものなし。獨に我謬て、薄情や仁を他鄕へとて、出し遣りしを大人のさぞ、心憂思食にけん、この義は義成瀧田へまゐりて、分說をすべけれども、然では今とて火急なる、所要を果すに不便也。六郞は我名代に、はやく那里へ赴きて、いかで大人に陪話たてまつり、照文と與四郞を、倶して速にかへり來よ。この餘の事は箇樣箇樣。と怠狀の趣を、詞急迫しく吩咐給へば、辰相はこゝろ得果て、然らば瀧田へまゐらんとて、遽しくぞ退出ける。爾程に義成主は、有司們を退かして、なほ氏元貞行を、身邊近く侍

三家老杉倉氏元堀内貞行、東辰相幷に有司の甲乙を、召聚合て、昨夜濱路姫の危難の事、伏姫神の冥助によりて、救ひ返させ給ひし事、又那妖書の事までも、詳に解示し給へば、咸愕然と面を注して、或は驚き或は歡び、囚牢司の訟稟しゝ、神女は伏姫の神靈にて、女僧は妙椿なりし事、茲に始て曉得て、奇也々々。とばかりに、嘆唱祝壽の聲も齊一、高き武運に應驗の、違ざりしを感じたる、その歡びを稟しゝかば、義成羞たる面色にて、明暗迷悟判然たる、この期に及びていよゝ面なき、咱愆を爭何はせん。畢竟犬江親兵衛を、遠離しにより妖賊們が、術邪を行ふことを得たり。然ばとて親兵衛なくとも、房總二國の兵を盡して、伐ば鏖にせざらんや。然しては又躬方の士卒を、損ふ事も多からん、と思ふによりて始より、征伐緩なりしかば、素藤我を侮りて、做す事なしと思ふらめ。今は千萬悔とも及ばず、只速に親兵衛を、召かへしなば躬方に利あらん。汝達この義を何とか思ふ。と問せ給へば氏元は、貞行辰相と共侶に、膝を拵めて稟すやう、御諚寔にその理あり。嚮に故なく親兵衛を、遠離させ給ひたる、賢慮の程を料難て、慨しく思ひ候ひしに、开も妙椿が反間の、幻術の所以なるよし、方僅發覺れしは公私の幸ひ、併伏姫神の、冥助は君が仁政の、應報にこそ候はめ。といへば又貞行も、臣們が愚意も氏元と、異なるべくも候はず。犬江仁が啓行しよ

及慝慝者を捉へんとて、迹を跟たる堅市も、件の女僧に禁呪せられて、倒れて前後を亡ぜし事、且那女僧が肱腋に抱きし、美女の事、神女の事、告訴極て奇異也ければ、大家ひとしく駭嘆じて、所以を知るよしなかりしに、單義成主のみ分明にて、伏姫神の冥助により、濱路姫は恙なく、返されたりける當晩の光景、今亦告訴吻合したるを、意裏に感嘆し給ひけり。浩處に、荒磯南彌六が逐電の事、預人より訟あり。その趣を听し給ふに、訴人の稟すやう、南彌六は、昨日の下晡に、恁々の爲體にて、東の城門より出たり、と聞え候ひしが、今朝までもかへり來ず、逐電ならんと思ひしかば、他が宿所を穿鑿せしに、硯筥の内に遺書一通あり。事恁恁に候とて、鑒てその書をまゐらせけり。是によりて南彌六が、義俠の心術正可に顯れ、安西出來介と謀し合して、素藤を刺まく欲する、計略の事の趣、逆徒を欺くべき與に、長須賀に梟措るゝ、罪人戸郎六が首級を携て、舘山なる敵城へ、赴くといふ事情の、詳に知られしかば、大家二たび駭嘆じて、原來長須賀の首級偸兒は、戸郎六が與にすなる、伙家の悪棍にはあらで、舘の御恩を深くも思ふ、南彌六が所爲なりけるよ。志氣はさることながら、敵地の幫助に憑みたる、那安西出來介は、智勇勝れし者にあらず、南彌六荊軻の勇ありとても、いと〳〵心許なし、といはぬものなんなかりける。恁而この日の聽果しかば、義成主は別席にて、

第百五十回

前面岡に大刀自孝嗣を救ふ
不忍池に親兵衛河鯉を釣る

登時義成主は、吾嬬前を見かへりて、俺娣子具に听給ひし歟。妖書の顚末今やうやくに、悟り得たりしのみならず、我女兒の神靈の、示現いよ〳〵灼然也、今さら何をか疑んや。這を听那を思へば、我謬の大かたならぬを、恥るにあまりあるものから、長談緩話は无益に似たり。快親兵衛を召返して、妖賊を討滅すべし。おん身は濱路を慰めて、なほ聞漏せし事あらば、委曲を盡さし給へかし。いで〳〵。といひつゝも、遽しく身を起して、軈て前廳へ出給ふを、奥隷の老黨老女は、先に立後に從ふて、驛路にあらぬ鈴間なる、鈴兒の緒拿て牽鳴らせば、其頭に等て侍りたる、兩個の童扈從們が、答をしつゝ出て來て、老黨老女に立替りて、そが儘主君に俱したりけり。然ば這朝、三家老、有司們も皆出仕したるが、義成出させ給ひしかば、隨即問注所を啓して、けふの訟を定らるゝに、囚牢司の訴あり、昨夕長須賀の申明亭に梟られたる、盜兒戸郞六の首級紛失の事、並に當晩奇怪の事、件の顚末は箇樣々々。と梟首守護の、乞丐堅市と喚做者の、稟しゝ義を聞えあぐるに、首級を竊みし尷尬兒は、怪しき女僧に擊仆され、

第九輯　卷之十二　下

本輯は、第七卷百零四回より、第十二卷百十五回までの六卷をもて、中帙とせしよしは、第七卷の簡端にいへるが如し。しかるに這十二の卷は、楮數殊に多なれば、猛に釐て上下二册とす。是故に中帙は七卷になれるなり。そを殘彫果るを俟ば、發兌の時に後れんといふ、文溪堂の好に儘して、七の卷より十の卷まで、四卷を中帙の上として、いぬる日既に發行したり。かくて十一十二の卷上下三册も、權且中帙の下と唱へて、續きて今番出し訖ぬ。帙さへ上下に分ちしは、勿論一霎時の程にして、是より後は七卷を、一帙にして賣まくす。亦是書肆の請ふによれり。

抑犬江親兵衞の列傳は、百四回の段左に起りて、今や百十五回に至るまで、いまだ全く說訖らず。後又二三回にして、八犬具足の卷に至らん。且八士全聚ふたりとも、物語尚多かり。看官明年全局の、大團圓まで閱しなば、日者此彼推量の、違るを知るよしもあらん。誰か作者の腹稿を、詳に探り得て、未發の後回を知れる者ぞ。玆に唯その一人あり、仰ぎて造化の小兒に問ふべし。呵々。

ば、已前の狗兒が等てをり、奴家を背にうち乘せて、雲を起し宙を走るに、駛こと宛駿馬の像く、這大城へ來ぬる程に、奴家は騎に堪ずして、憶ず狗兒の背より、滾びて大地へ忽然と、墜されて庭の樹間に在り。夢かと思へば、臥房にあらず、現かと思へば、覺ずしてかへり來たれり。然而あるべきにあらざれば、軈て樹蔭を出し折、侍婢毎の見出して、安否を問ふに、我を怪む、胸はやうやくおちゐ侍れど、そを知食よしもなき、物を思はせ奉りぬる、罪いと重きを爭何はせん、饒させ給へ。と陪話給へば、義成主いよゝ慚愧て、奇也々々。と稱給ふ。心はおなじ吾嬬前も、奇しく愛たく歡しさの、神の冥助の辱くて、感涙の外なかりしを、側聞する老黨老女は、頭を擡げ目を注しつゝ、世に有がたき伏姫の、靈驗威德灼然なる、奇特に心耳を洗れて、疑ふべくもあらざれば、憶ず倶に感嘆の、聲もひとしく尊みて、いと憑しくぞ思ひける。

ずして、親兵衛を召返すべし。素藤誅伏しぬるとも、後車の餘轍を忘るゝことなく、いよ〳〵犬士を重く用ひて、才略武藝に任しなば、那百萬の大敵も、怕るゝに足ざるべし。和女稻村へかへれる折、爹々にこの義を傳へよ、といと叮寧に諭させ給ふ、示現にいよ〳〵畏みて、頭を擡げ又伏拜みて、原來おん身は伯母君の、神靈にこそをはすめれ。今にはじめぬ應驗冥助、得がたき御恩に侍るかし。那八犬士の事はしも、奴家も豫聞知り侍り。そが中に犬江親兵衛は、六稔の程に身長の、いといたう大人備て、生年九歲とまうせども、十六七の少年にも、立優れるは甚なる故ぞ、と訝り思はぬ者も侍らず。この疑ひを解し給はゞ、好家裏に侍らまし、とおそる〳〵問まつりしを、神女は听つゝ點頭給ひて、その疑ひは理りながら、非常の人には異體あり、猶靈木の一夜に生て、一夜に巨樹と成れるが如し。これ凡庸に異なる處、人も亦これに似たることあり。昔唐山東晉の時、安帝の義熙七年に、無錫の人の子、趙末といひし童男、年八歲、一旦身長の伸ること、暴にして八尺に至れり、且その髭髯も蔚然たり、と晉書に載せしを思惟よ。宇宙の間往として、何等の物か對なからんや。憖れば異邦に趙末あり、今は我國に犬江仁あり。世の人視聽に廣からねば、その事必なしとして、疑ふものの惑ひを解くべし。今はしも是まで也。二親のさぞ安からざらむに、快稻村へ還りねとて、送りて岩崛より出し給へ

犬江親兵衛を、疑ふて遠離たれば、素藤二たび折を得て、又舘山の城に據りにき。そをしも火急に攻伐ざるは、義成が寛仁大度、士卒を思ふ故なれども、併素藤の、天罰その時いまだ至らず、仁を等て前功を、全うさすべき天機あり。もししからずは咱神力もて、素藤妙椿、いへばさら也、舘山の賊徒數を盡して、鏖にせん事の、かたくもあらぬ所行なるを、只那寛の一字を論て、事を急がせざればこそ、妖孼屢起るものから、里見の軍威を落すことなく、缺損あるも死を免れて、事竟に大害に、至らざりしを思はずや。今は禍鬼解除せられて、和女の上にも窮阨なく、賊徒は霜の解るがごとく、誅伏せん事疑ひなし。开も親兵衛を召返さずは、誰か亦よく那妖賊に、當りて克を一擧に奏せん。八個の犬士に輕重なけれど、先入なれば親兵衛を、疑ずして重く用ひば、餘の七犬士は招かずも、皆共侶に來會せん。所謂隗より始るよしにて、こも亦自然の理りなるを、悟らざりしは疎也。那素藤は、妖尼の、幇助ありとも小敵にて、心腹の患にあらず。然る小敵だも征伐に、その人を失へば、如意ならぬ事多かるに、異日倘百萬の、大敵西北に起ることありて、海陸共に攻寄來ば、房總諸城の守將戍卒、悉皆解體せん。その折にしも八犬士の、幇助あるにあらざりせば、誰か亦よく大敵に、當りて那吳の周郎が、赤壁の克に倣ふべき。遮莫今番は義成の、やうやくに惑醒て、先非を悔る據あれば、咱言を俟

女僧を遮留め給へば、女僧は怕れし面色にて、斫拂ん、と角ひもあへず、神女に胸を撲地と蹴られて、奴家を捐て仆れ侍り。登時神女は奴家が身邊へ、狗兒を拯めつ奴家をも、乘せて翠天に升りつゝ、去向遙に倶し給ふ、快きこと宛箭の像く、風に撲れて布襲は、解けて地上に墜にけん、苦しきこともあらずなりにき。恁而神女は、雲の集る、高峯にやをら降立て、奴家が手を拿り扶掖て、岩窟に入り給ひしが、內はいと洞亮にて、月の夜艾に異ならず。この折神女のおん顏の、正可に拜れ給ひしかば、忝さの彌增て、問まつらんは惶さに、跪坐て氣色を伺ひ奉るに、神女は翔て妙音を、かけて慰め給ふやう、濱路よ、然のみな怕給ひそ。咱儕は那尼の類にあらず、過世は和女の親族にて、八犬士們が母なれば、今宵の厄を見過しがたさに、那惡物を懲たり。恁ばかりにては無明の醉を、醒すにいまだ足らざるべければ、具に告ん听ねかし。抑當國主義成は、その器其量親に劣らず、仁義の良將なるをもて、征せずして上總を從へ、下總半國をさへ併するものから、天道は盈るを虧く、夷灊一郡、舘一城の、素藤が逆謀は、卽天の警戒にて、小敵也とて侮りがたき、後響を示すに在り。こゝをもて咱身いぬる比、犬江親兵衛仁に課て、老侯の厄を拯ひまゐらせ、猶且蟇田素藤們を、降伏の功あらせしかども、又素藤を幇助ぬる、邪魔の幻術大かたならねば、義成の明き鏡も、魔雲に曇り心惑ひて、鈍や

はさら也、吾嬬前は夢かとばかりに、憂ひを轉す哀みの、涙乾かぬ袖の上に、歡び涙堰あへず、女房們を見かへりて、そは又奇しき事也かし。對面してこそ詳なる、事由は知るべけれ。吁芽出たや。と宣ふ程に、濱路姬は奧隷の、老黨醫生侍婢們、四五名に册れて、はやくも這里に來ましつゝ、身の歡びを稟し給へば、老黨老女女房們も、倶に壽き奉りぬ。登時義成主は、要なき男女を退して、濱路姬を身邊近く、侍らしつ席を賜ひて、吾嬬前と共侶に、奇異の安危を尋ね給ふに、濱路姬の宣ふやう、昨宵眞夜半時候也けん、奴家は熟睡したりしに、母君の御聲にて、連りに喚せ給ひしかば、覺るともなく應をしつゝ、遽しく身を起して、建たる屏風の外面に、立出て見れば、一個の女僧あり、思ひがけなき事なれば、吁唉と叫ぶ程しもあらせず、矢庭に奴家を引よせて、楚と銜する布嚢に、息さへ籠りて聲立ざりしを、左の肱腋に捉稠て、那里より出にけん、去向もしらずもて去るゝ程に、既にして一里許、來ぬらんと思ふ比、路に一個の男あり、撞見頭に女僧を見て、尶尬兒等、と喚禁つゝ、推捉へんと立よりしを、拳一拳て仆したる、後方にも亦人ありて、棒もて女僧を撃んとせしを、呪文を唱へ、觔斗を打して、并をしも倒して、毫も謀がず、左手に刃を拔持て、始に仆せし一個の男子の、胸前刺んとせし程に、いと嬋娟なる一個の神女、最大きなる狗兒の背に、尻うち掛つゝ忽然と、虛空より降り來まして、

濱路は只管情慾の、やる方なさに親兵衞を、慕ふて狂浮れ出たるなめり、と思せん爲也けんかし。そを鈍ましや始より、惑されつゝ親兵衞を、疑ひしより像賢に、出し遣りたる故にこそ、竟に守りを失ひて、濱路を奪略られけめ。一期の瑕瑾を爭何はせん、悔しき事をしてけり。と悄語きつ良將も、返すよしなき千慮の一失、おなじ惑ひは吾嬬前も、醒て甲斐なき子ゆゑの闇に、啼音をしのぶ夜の鶴、たゝまくをしき脛よりも、長き別れに堪難て、歎き沈ませ給ひけり。浩る折から巽なる、小坐席のかた譟しく、人の散動めく聲せしを、義成はやく聞著給ひて、那は何ぞ。とばかりに、耳を攲給ふ程に、給事の老女女房們が、遽しく來て稟すやう、方僅思ひがけなくも、東なるおん內庭の、樹立深き邊より、五の姬君の忽然と、あゆみ出させ給ひしを、折から巽のおん緣頰に、單侍りし友禽が、心ともなく見奉りて、驚きつ歡しさに、聲ふり立て朋輩を、喚聚合つゝ皆共侶に、走下りつゝおん坐席に、迎入れ奉りて、却昨夜よりおん往方の、知らずならせ給ひしに、恙もまさで還らせ給ふ、事の顚末を問奉りしに、姬上答給ふやう、我身にこよなき厄難あり、昨夜は特に危かりしに、神の冥助を蒙りて、只今還させ給ひにき。是等のよしは家尊と母君に、見參して稟上てん。一霎時也ともおん胸の、安からずをはしましけんに、快このよしを聞えあげよ、と仰によりてまゐり侍り。といふに義成主の歡び


かく八


千倉の
里見氏
を

しつゝ艶書をば、封も披かず燒棄て、人には知せず言を設て、その次の日親兵衛に、身の暇を取せしに、爾後那靈玉を、土中より拿出せし折、玉の失せしに疑ひ起りて、原來濱路と親兵衛が、不誼淫奔は幻にて、そも物怪の所爲ならずや、と思ひ惑ふて決難しに、今又おん身も他們が艶翰を、料ずも得たらんには、濱路が逐電寔に由あり。我拾ひしはその夜艾、燒棄たれば、見すべくもあらず。今朝又おん身の見出せしは、那里にあるや、そも亦奇也。といはれて吾嬬前は面なげに、こゝに侍り。と懷へ、手を刺入れて出し給ふ、艶翰を義成受拿て、ひらき給へば素紙也。是はいかに。と訝りて、返し給へば吾嬬前も、胸を潰しつ左見右見て、現不思議なる事に侍り、今朝憶もなく得し折に、見つるは素楮ならざりしに、文字の迹なく消耗せしは、そもや甚なる故なりけん。言疎忽に似て倒に、いひ解よしも侍らずかし。とうち陪話給へば、義成主は、沈吟じたる頭を擡て、俺娣よ、おん身の疎忽にあらず、我拾ひし那艶翰も、亦その艶翰と異ならで、實は素楮なりけんを、封も折かで燒棄たれば、疑念を解くよしなかりしに、今朝又おん身の手に入りし、艶翰は文字の消耗て、紙のみ正可に殘れるは、いぬる比貞行直元們が、召返されし下知狀の、素楮なりしに相似たる、妖書なるを稍悟りぬ。こは親兵衛を遠離て、濱路を奪略まく欲する、素藤が與に計れる、那妙椿が幻術にて、這回も妖書を遺せしは、

とうち不娛給ふを、吾嬬前推禁めて、そのおん恨みは理りに侍れど、奴家が思ふよしはしからず。濱路は犬江親兵衛が、宿直の折より情由ありけんを、はやく遠離給ひしかば、慕ふて、惑ひ出たるならん。正しき證据の侍るかし。といはれて義成又驚きて、そは亦甚なる證据のあるや。と問せ給へば、然ばとよ、濱路が在らずなりしより、往方をしるべき照驗に、なる東西のあらん歟とて、他が書案手匣などを、甲乙となく啓檢侍りしに、枕邊に置せたる、鼻紙臺なる紙の間に、親兵衛が濱路に贈りし、艶書一通侍りにき。那親兵衛は九歲といへども、心術大人備て、身長は年十五六の、少年にも優り侍れば、生情さへはやつきけん、思ひがけなき事にて侍り。と悄語給ふを義成主は、听つゝ歎息し給ひて、それにて思ひ合するよしあり。知られたれば隱すによしなし、我も亦いぬる比、親兵衛が宿直の夜艾、濱路が臥房の次の間にて、他們が艶翰を拾ひ得たり。折から親兵衛は、其頭に在らず、臥房の方に男女の、悄語く聲の聞えしを、驚さんはさすがにて、怒を忍び退きて、獨つらく思惟るに、青年每の惑ひにて、色情により生涯を、愆つものは世に多かり。就中親兵衛は、智勇兩ながら人に勝れて、當家に功ありしを、濱路は左まれ右もあれ、只今他們が辜を糾して、可惜犬士を喪はんは、寔に不便の事にして、後に悔しく思ふこともあらん。快親兵衛を遠離て、他們が中を堰にはしかじ、と尋思を

是のみならず、安西出來介が首級をば、程遠からぬ山院へ遣しつ、叮寧に葬らしたる、墓表朽せず世々に貽りて、人その義俠を稱えけり。こも亦後話也。是より先に、稻村の城内には、荒川兵庫助淸澄が、殿臺の陣中より、まゐらせたる使者、安西出來介詰茂佳橘を、かへし遣されける詰朝、濱路姬のをはしまさずとて、給事の女房們が、驚憂ひて辨よしもなく、隅なく尋まつりしは、黎明よりの事にして、往方をしるべき照驗なければ、已ことを得ず奧隷の、老黨に告知らせ、終にはおん母吾嬬前に、聞え上まつりしかば、母君驚き歎せ給ひて、うちも閣せず義成主に、訴稟させ給ふにぞ、義成も亦驚き給ひて、事の仔細を尋んとて、みづから後堂に來ませしを、吾嬬前は立迎へて、閑室にて密談あり。然而宣ふやう、濱路が在らずなりけるは、昨宵夜半の事なりけんを、次の間に臥たりし、侍兒每もこれをしらず、稍曉方になりし比、空しき臥簞を見出して、うちも譟ぎし事なれば、往方は絕て知れず侍り。いかで士卒を部して、快々涉獵らせ給ひかねし。と請も得果ずうち泣給へば、義成主も嗟嘆に勝ず、眉を顰て宣ふやう、這囘の椿事も那物怪の、所爲にこそあらんずらめ。然ずは深き窻の下に、且しくらせし少女子が、夜半に臥房を拔出て、那里へとてかゆくべきや。倘果してしからんには、縱追隊を蒐るとも、索逢ふことかたかるべく、命の有無も心もとなし。寔にしうねき物怪の、祟にこそ。

優たる南彌六出來介が忠魂義胆、慿てこそ乃祖々々の惡名を、雪るに足るべけれ。就中南彌六は、その靈首級に住りて、梟首を免れし勇者なれども、那妙椿が幻術に、不意を撃れて克がたかりしは、是命運の致す處歟、惜むにも猶あまりあり。這生口は員にも足らぬ、獄卒なりと聞えしを、誅するとも何の益あらん。意にその獄吏、軻遇八とやらんが祟を怕れて、南彌六が首級を隱せしは、這方の與にせし事ならねど、亦憎むべきものにあらず。因て這生口は、放ちてかへしいなすべし。且沙雁太が首級は要なし、こは家裏に取せんず、快もてゆきね。と、言示して、そが緬紲の索を雜兵に、解して軈て追立れば、獄卒は恩を稱て、宛鼠の逃るがごとく、館山を投てかへりゆく程に、返されたる沙雁太が、首級を城へ齎しては、奇也といふとも妙ならず。と呟きつ路傍なる、沼田の中へ投棄しを、猶底深く踏入隱して、立かへりし折軻遇八にのみ、祕密を聶き報にけり。閒話除繁、爾程に淸澄は、高宗逸友們と商量しつゝ、南彌六出來介が忠死のよしを、館へ聞えあげんとて、更に又詰茂住橘に、連署の呈書を齎して、稻村へ遣す程に、滿呂復五郎重時に、出來介南彌六が事の趣、慿々也と告示すに、倘起ことを得ざる金瘡兒、復五郎と共に四五名あり、他們は都て住橘に俱して、稻村へかへし遣さん、徐に將息せよかし。と命じて各簑轎に乘して、看病の雜兵幾名歟、隷て安房へぞ還しける。事の差配は

とありけるを、清澄屢〻讀復して、感ずる事大かたならず、軈て高宗を招きよせて、よしを告て談ずれば、高宗も亦訝りて、南彌六出來介義俠をもて、館の洪恩を報ぜん與に、敵城に入りて戰歿したらば、梟首孰か免るべき。然るを一個は南彌六ならで、沙雁太の首級ならんには、咱們もこゝろ得がたしと云。その詞いまだ訖らず、田税力助逸友は、那首二級を奪拿り、そを戍る敵の雜兵一名を、生拘にしつ、士卒を領て、はやくもかへり來にければ、清澄はその卽功を、賞て高宗と共侶に、先その兩個の首級を相るに、そが一級は出來介なること、今さら疑ふべくもあらず。又その一級は、南彌六が首ならず、果して名幕沙雁太なれば、隨卽件の生口を、牽出さしてこの義を問ふに、愿果べくもあらざれば、おそる〳〵陳ずるやう、既に猜し給ふごとく、那南彌六も戰歿したれど、そが首級に靈ありて、始は擡げがたかりければ、館山の獄吏、海松芽軻遇八が密に計りて、那折南彌六に撃れたる、沙雁太が面影の、聊肖たる所あれば、這那首級を入替て、梟首の數に充し也。又南彌六出來介が、素藤を撃まくせし折、その爲體は箇樣々々にて、蟇田は最初に痍を負て、既に危かりけるに、女僧妙椿が幻術もて、急に躬方を幇助しかば、兩個の猛者は武勇を折かれ、進退猛可に自由ならで、遂に多勢に撃果されて、梟首に及び候ひきと云、招了分明也ければ、逸友高宗、いへばさら也、清澄連に感嘆して、思ふに

首級を奪れしは、反て我身の幸ひ也。然では件の替貨を、敵こそ知らめ、躬方には、いよゝ知るよしなからん、と尋思に胸はうち豁けて、後安くぞおもひける。恁りし程に、殿臺には蒲呂復五郎が、その身の看病に隷られたる、雜兵をもて訴あり。清澄隨即其者を、召近づけてよしを問ふに、雜兵のいふやう、安西出來介が撃れしよしを、復五郎も洩聞て、うち驚きつゝ枕邊なる、小屏風に手を掛て、辛して立まくせしに、憶ず屏風を推倒して、發し掛りつ推破りたる、屏風の裡に書翰あり、この折に顯れ出しを、見れば出來介の手迹にて、寫遺し申事とあり、因て私に開封せず、そが儘呈閲仕りぬ。さて又昨日出來介は、復五郎が病痾を問ふて、晤譚の趣箇樣々々、恁々に候ひき。憶ふにその折復五郎が、枕邊に建たる小屏風の、外面破れてありければ、出來介悄々地に其をうち見て、件の書翰を刺入れたる歟、是よりの外今さらに、思ひ合することは候はずといふ、復五郎が告訴のよしを、清澄听つゝその書を拿て、軈て封皮を折き見るに、荒磯南彌六が義俠の事、又安西出來介は、嚮に稻村へまゐりし折、南彌六に相譚れて、倶に素藤を刺まく欲する、計略は箇樣々々。と僞首の事、箭書の事、その崖略を誌著て、倘不幸にして事成らで、我們二名撃れなば、この義を人のしるよしなくて、敵に降參せしなめり、と疑れなん事のをしさに、一筆こゝに遺すもの也。異日這書を看る人あらば、稟し給へ。

て、兩個の生口、業當と、出高を騙略たる、名幕沙雁太に彷彿たり。恁れば那出來介は、敵に降參せしにはあらじ、撃れたるにて候。といふを淸澄うち听て、原來安西出來介は、拔駈して撃れし歟、然ずは賊徒沙雁太が、出來介に內應して、那城內へ引容けんを、事發覺れて兩個ながら、撃れたるにぞあらんずらん。そは左まれ右もあれ、一人也とも御方の首級を、當陣近く梟られながら、知りつゝ閣くべきにあらず。开を戍る賊徒を蹴散して、首級を奪拿るべしとて、事の准備を急しつゝ、則田稅逸友に、二百餘名の士卒を授けて、那松原へ遣しければ、逸友隨卽馬をはやめて、推寄せつ、士卒を拺めて、咄と噇て駈散せば、首級を戍る獄卒們は、驚騃て逃走るを、一町餘り趕蒐て、开が一人を生拘りつ、兩箇の首級を雜兵に、持して殿臺へ退く程に、館山の城兵們は、敵出たりと聞知りて、撃果さんとて罵噪げども、猛の事にて合期せず。左右する程に、赶れたる、獄卒們が逃て來つ、寄隊は首級を奪略りて、はや退きぬ。と報げしかば、擬勢いたづらになるものから、素藤は始より、毫も譟がず冷笑ひて、淸澄們が不能なる、敵の首を捕得がたさに、斬梟られたる他們が躬方の、首を奪ふて手柄と思ふ歟、いと烏滸也。と嘲りて、心いよ〳〵驕りたり。然ば又海松芽軻遇八は、寄隊の爲に獄卒一名を、俘にせられしと傳聞て、肚裏に思ふやう、噫某甲が貧乏闔なる、寔に不便の事なれども、寄隊に

つ、更に又沙雁太們が亡骸を、北の郭なる山蔭に埋るに、皆是妻子もなきものなれば、是を來て見る者もあらず。素藤が恩惠に疎かる、士卒の上にも愆ること多かり。然ば沙雁太が首級には、鮮血多く染著たるに、面相の南彌六と、聊似たる處もあり。そを又鬢の亂髮を、顏へ揮掛などしつゝ、術よく假裝たりければ、敵も味方も贋首なりとは、思ひかくべくも見えざりけり。只這一奇事のみならず、異日荒磯南彌六は、首級を當城の郭内に、葬らるゝことを得て、義俠遠近に聞えしかば、そが墳墓あるにより、遂に郭の名に負して、荒磯郭と喚做しけり。こは是後の話也。爾程に這朝、殿臺なる里見家の屯には、昨日安西出來介が、野鷄を射て捉んとて、弓箭を携て出たるが、今に至てかへり來ず、他は御方の不利を見て、舊好あれば、素藤に、降參したるならんといふ、衆議の訴に及びしを、淸澄听て頭を敧け、出來介が不義と不義ならぬは、皆是推量のみにして、思ひ合するよしもなし。快舘山の城の邊へ、間諜者を遣して、他が往方を探らせよとて、心利たる雜兵に、下知して悄々地に遣せしに、いまだ幾程もあらずして、其者饗てかへり來つ、却淸澄に報るやう、小可密旨を承まつりて、舘山を投し赴く程に、城より五六町這方なる松原に、斬梟たる首二級あり、敵うち戍れば憚りて、樹間を潛り近づきて、熟視れば梟首の者、一箇は安西出來介也、又一個は御方にあらず、いぬる日素藤が使に立

素藤が恩寡くて、政の最苛きを、疎ましとのみ思ひしかば、大家異議なく承引て、その指揮にぞ從ひける。登時海松芽軻遇八は、恭しく南彌六が、首級に對ひ合掌して、肚裏に念ずるやう、荒磯大哥、本意なかりけん、遺恨さこそと猜したり。よりて和主の首級を梟さで、悄々地に隱しまゐらせん。和主の代には、躬方の一人、名幕沙雁太の首をもて、箇樣々々に計ふべし。沙雁太が面影は、和主に肖たる所あり、且年齡も相應しければ、實に究竟の替貨ならずや。願ふはこの祕事を、人に知らせず、我身を護りて、罪をな得さし給ひそ。と諄返しつゝ祈る程に、獄卒們も皆共侶に、跪坐て一齊拜みけり。既にして軻遇八は、念じ果て身を起しつ、卒試に撞ずや。といふに一人膂力ある者、逸早く我よりて、首級に兩手をうち掛つゝ、矢聲を出して撞抗るに、始には似ずいと輕くて、瓜を採るより易かりければ、大家二たび訝りて、その靈あるに怕れけり。登時軻遇八は、事の奇特の憑しさに、敢跕むこゝろなく、はやく南彌六が首級を隱して、後々までも人に知らせず。嚮に本膳が下知を傳へて、躬方の士卒の撃れたる、沙雁太を首として、その亡骸を北郭なる、山蔭へ皆瘞めよとて、そをしも既に遞與されたれば、悄々地に沙雁太が首級をもて、出來介が首級と倶に、城外へ出し遣るに、殿臺の方へ距ること、五六町にして並樹の松あり、その樹の間廣かる地方に、兩箇の首級を竝梟けて、獄卒們に戍らし

に、命じて首を斬らせしかば、城外へ出さして、梟並べんとて準備をせしに、南彌六が首級は眼を閉ず、忿れる面色活るが如く、見るだに快からざるに、その首級猛可に重くなりて拿揚ぐべくもあらずなりしを、獄卒驚怪みて、左せん右せよと罵りつゝ、索もて柤結り朸に掛て、擡起さんとしたれども、索は斷離れ、人は輾轉て、いよ〳〵重くなりし事、千曳の石に異ならねば、大家呆れ手を叉て、立團ひつゝ徒長視てをり。登時軻遇八思ふやう、この荒磯南彌六は、むかし安房にその名聞えし、洲崎無垢三が外孫なるよし、世の風聲に隱れあらず。那無垢三は、神餘の與に、逆臣定包を撃まくせしに、謬て光弘主を、犯して誅戮せられたる、當時の風聲を語り傳へて、這頭の人も皆知れり。爾るに今又南彌六も、里見の與に頭の殿を、刺まく欲りせし事成らで、矢庭に撃れし勇者の寃魂、終に首級に止りて、恁る奇特を顯すならん。我は小鞠谷の舊臣にて、已ことを得ず蟇田殿に、仕へて今に至れるのみ、素より里見に恨みはあらず。恁まで奇しき首級と知りつゝ、なほ多勢をもて擡出して、强て梟首するならば、竟に我身に祟を稟ん歟、是も亦知るべからず。然ばとて明々地に、聞えあげなば疑れて、貳ごころあるものといはれん。然るときは是も亦、罪得がましき所行なるべし。要なからずや、と尋思をしたる、主意既に決りければ、思ふよしを恁々と、獄卒們に聶き示すに、獄卒們も這年來、

手に入らば、おん身の随意なりぬべき、濱路を急ぐ事かは。と慰められて素藤は、笑つゝ屢く點頭て、意見誠にその理あり。本膳は、南彌六と、出來介が頭顱を刎て、城外へ梟首せよ。寄隊の奴們よしを聞かば、さぞな胆を落すらめ。沙雁太以下の力士們の、撃れしは皆屍骸を埋め、倘息あるは扶退けて、尼姑に乞ふて藥を用ひよ。願八盆作碗九郎、狼之介們は、其隊々々の、戍りをな懈りそ。寄隊の陣へは間者をもて、虚實を探りて注進せよ。我疾淺きにあらねども、神藥寔に卽効ありて、起居も既に自由を得たり。先や奥へ退きて、徐に將息すべきのみ。天は明ぬらん快せよ。と言語急迫しく吩咐て、卒とてやをら身を起せば、妙椿は又懐より、件の妙藥一包を、出して本膳に遞與していふやう、そは金瘡兒に取する也。一匙づつ分ち用ひば、死を起すもの多からん。とこゝろ得さしつ素藤を、扶けて奥へ入る程に、本膳その餘の老兇黨も、言承をしつ、歡びを、舒て齊一日送りけり。恁而本膳碗九郎們は、猛可に多く雜兵を、召登し下知を傳へて、金瘡兒を退け、屍骸を出し遣り、血に塗れたる席薦はさら也、簀子緣頰遺もなく、洗ひ流せ。といそがする。鬪諍果ての棒ならで、朸幾條舁入るゝ、簇は迹のまつり事、譙樓の太鼓音高く、天は耿々と明にけり。休題單表、這館山の城の囚牢司に、海松芽軻遇八と喚做す者あり、南彌六出來介が亡骸を、奥利本膳より遞與されて、梟首の爲に獄卒

南彌六也、又那一個は出來介也。倶に認得れる奴們なれば、透さず祕術を施して、仆して躬方の甲乙に、討捕し侍りにき。と報るに素藤歡び感じて、今にはじめぬ事ながら、いと憑しき神術妙算、折よく還り給はずは、危かりしをこよなき造化。恪まで微妙き活菩薩を、一霎時なりとも苦しめたる、その嫯鬼とは何にかあらん、世の風聲に聞えたる、伏姫の靈なるべき歟。そは左まれ右もあれ、おん身の撲傷瘥りて、恙なきこそ愛たけれ。却今宵の騷劇は、那安西出來介奴が、内應の箭書をもて、箇樣々々にいひ誘へ、子二刻の時候なるべし、荒磯南彌六共侶に、荒川清澄が首捕て、來つるといひしに計られて、召入れて對面せしに、實檢の折不意を撃れて、我すら痛擯を負たるに、懽しきは尼姑の妙藥、疼痛立地に退きて、心地も生平に異らずなりにき。なほこの上に情婦を、搔攫ひもて來られなば、そは十二分の造化ならんに、拿復されしは月に雲、花に嵐の恨みにこそ。といふを妙椿聞あへず、そも又折のあるべきに、隴を得て蜀を臨む、情慾は且閣給へ。今さら思ひ合すれば、いぬる夜艾南彌六が、長須賀の申明亭にて、竊みし首級は、清澄の、僞首にせん爲にこそありけめ。然とは思はざりしかど、敵の幇助になるべきもの也、結果んと欲せしを、果さで遺憾かりしに、這里にて終に討捕せしは、他が命運盡たる也。明なばはやく斬梟けて、寄隊に胸を潰さし給へ。里見父子を討滅して、安房も上總も

在らずなりしより、障るものもなかりしかば、前宵人定りて、潛びて姫の臥房に近づき、喚覺しつゝ迷して、出るを聽て搔攫ひて、長須賀まで來にける折、那荒磯南彌六が、其首に梟たる罪人の、首級をものしていなんとしたる、撞見首の事なれば、那奴が咱儕をあやしみて、引禁めんと角ひしを、拳一拳て仆せしに、後方に一個の乞兒あり、棒もて咱儕を撃んとせしを、近くはよせず跌走したり。登時咱儕思ふやう、這南彌六は相識ならねど、地方に名高る俠客なれば、我も粗認得たり。今は里見に從ふて、稻村の城に置るれば、こも敵がたの一人也。今更闌て罪人の、首級を竊拿りたりし、事情はしらねども、這奴に姫を見られては、後の障りになりもやせん。結果るにしくことあらじ、と尋思をしつゝ戒刀を、晃りと拔て、南彌六が、胸前刺んとせし程に、里見を護る欺鬼ならん、憶ず开奴に妨られて、刺も果さぬのみならず、慷慨や姫を拿復されて、剩胸を蹴られしかば、脆く一霎時も得堪ずして、そが儘其里に俯たるが、はやくも我に復へりてなん、影を躱しつ十町あまり、上總路投て走る程に、蹴られし胸の最酷う、痛みて堪がたかりければ、路の樹蔭に臥てをり。昨夜通宵、今日も終日、心ならずも氣を頤ひつゝ、時を移し日を過して、やうやく瘥り果しかば、日暮て开里を立出て、日今かへり來て見れば、敵の刺客とおぼしき、兩個の猛者が奮撃突戰、多勢に撓ず克に乘る、そが一個は

撃つ燒刀はこの世の別れ路、身は宍醢になるまでに、鮮血流るゝ出來介も、おなじ枕に死でけり。登時顚八盆作は、先素藤を扶起して、喚活んとせし程に、妙椿はやく拯みよりて、やゝや人々譟ぎ給ふな。咱儕金瘡の神藥あり、一たび是を用れば、氣力淸やかなるのみならず、痍も亦隨て、愈ること速也。いで〱。といひつゝも、懷より一包の、丹藥をとり出して、且素藤が、眉間の痍に塗らしつ、餘るを口中に推入れて、水を求め沃ぎ下して、背を徐に拊る程に、素藤忽地息出て、膝組直して四下を見かへり、原來若們恙もあらで、那廝敵を擊果せしな。尼姑よ、還り給ひし歟。と問へば大家答るやう、旣に知せ給ふごとく、那南彌六が勍勇なる、出來介も亦思ふに倍て、刃尖鋭かりしかば、那御覽ぜよ、沙雁太麻嘉六、いへばさら也、夥兵們も皆辟易して、擊れたるもの五七名、痍を負ふたるも尠からねば、殆難義に及びし折、料らず尼公の幇助によりて、兩個の寃家は那像く、擊捕て候。といへは素藤眼を睜りて、憎むべし出來介奴が、恩義を思はで、寄隊の與に、飽まで我を欺きしは、南彌六よりも罪重かり。生拘にせば思ひの隨に、悪戮しにすべかるに、誅罰开里に至らざりしは、今さら飽ぬ心地はすれど、尼姑の幇助は千金也。尼姑は亦何等の故に、昨日は還り給はざりけん、我情婦はいかにぞや。と問へば妙椿含笑て、然ばとよ听給へ。いぬる日稲村へ赴きて、内外隈なく覘ひしに、犬江が




南弥六義侠

ふて仆れたり。恁りし程に出來介も、懷劍はやく拔持て、倶に拯みて南彌六を、資けて素藤を撃んと競へば、遣らじと拄る力士們を、當るに儘して殺拂ふ、這那必死の挦きに、頤八盆作碗九郎、本膳父子も度を失ひて、皆素藤を撃せじ、と扶起しつ逃迷ふ、周章大かたならざれば、南彌六と出來介は、いよ〱機に乘る勢ひ猛く、敵手を擇まず殺結ぶ、然しも烈しき大刀風に、力士は多く瘢を負ふて、仆るゝもあり俯すもあり。頤八盆作碗九郎、及本膳も狼も、猫も杓子も殺立られて、素藤主僕方に今、撃果さるべう見えたる折から、突然として金屏風の、陰より顯れ出る者あり。是則別人ならず、八百比丘尼妙椿也。今這事の爲體を、見れども驚く氣色なく、手に先結ぶ祕密の印、口に呪文を唱る程に、南彌六佶と見かへりて、殺拂んと振抗る、刃は千曳の石より重く、手足猛に痲癱れて、瞑眩きけん乒乓つゝ、臀居に撐と輾轉ぶ、响に駭く出來介も、術に中られ度を失ひて、觔斗りつ仰反仆れて、速には起も得ざりけり。恁る奇特に賊徒の老兵、狼之介們に至るまで、皆見かへりつ、機をとりなほして、得たりや應と共侶に、走り蒐れば南彌六出來介、身を起さんと悶掻けども、女僧の魔術に枷掛られて、脚なき蟹に異ならず、眼を睜り泡を吐く、遺恨遣るかたなかりける。そが中に南彌六は、刃を突き立、氣を勵して、立あがらんとせし程に、振閃かす衆兇の、白刃の光は夕立の、雨より繁く前後より、

て、件の首級を左見右見て、御諚では候へども、我們那里にありし折、清澄が面前へ、牽れしは夜分にて、その後對面せし事なければ、這首と那面影と、似たることは似たれども、眞僞は稟上がたかり。といへば素藤點頭て、しからば沙雁太麻嘉六は、往る日使价に立し折、清澄に對面せしならん。好檢て眞僞を決めよ。と指揮に件の兩人も、膝を找めつ左右より、見ること約半晌許、言語齊一稟すやう、いぬる日我們殿臺へ、赴きし折應對せしは、高宗と逸友のみ。清澄は上坐にあり、正しく對面せしにあらねば、他なるべき歟、他ならざる歟、眼力届かず候。といふに南彌六焦燥て、噫鈍ましき人々かな。清澄は頤に、大きなる黒子あり、こは皆人の知る所、其頭に心づかれずや。といはれて頷く沙雁太麻嘉六、現その黒子は遠外ながら、正可に見おぼえ候ひき。といへば素藤、しからんには、其にましたる證据はあらじ、そは那里ぞ。と首函を、又曳寄する程しもあらせず、南彌六はやく膝を找めて、黒子は左に候。といふよりはやく懐に、隱し持たる短刀を、晃りと拔て丁と撃つ、拳尖く素藤は、額を斫られて仰反りしを、疊掛て撃んとすれば、大家ひとしく駭噪ぎて、原來尷尬兒、逃すな。と叫び群立つそが中に、沙雁太と麻嘉六は、南彌六が前後より、遮隔て組留るを、南彌六透さず振放つ、修煉の刹姚、怒氣奮勇、先に立たる沙雁太が、細頸撲地と撃落せば、挂難たる麻嘉六も、深痍を負

ふを南彌六冷笑ひて、騃たる事をいふ人かな。陪臣なりとも淸澄は、則國主の名代にて、當所討隊の大將なるを、我們纔に兩個にて、人にしらせず亓が首捕て、當城に來ぬる揮きは、類なかるべき大功なるに、人傳に見せまゐらせんや。烏滸なることを。と敦圉くを、本膳听かず、頭を掉て、禮儀に疎き田野の匹夫、這里にて自由は做しかたかり。實檢を遂られて、虛實分明ならんには、大功ともいふべけれ。然ば虛實を知らるゝまでは、誰か小心せざるべき。そを遞與さぬは贋首歟。烏滸なることを。とやりかへすを、素藤聞つゝ聲を被て、本膳が遠慮、その理あり。然とて他を怕るゝにあらず。南彌六は首級を遞與して、共侶に近く找みね。問ふべき事のありもやせん。饒々。と鷹揚に、いはれて南彌六欣然と、應をしつゝ復礙議せず、裹みし首級をうち開きて、卒とて遞與すを、本膳は、准備の首函にうち乘して、捧げて找む後方より、南彌六も亦膝を找めて、素藤に近づくこと、間六七尺になりしかば、沙雁太麻嘉六推禁めて、こは不覺也、且扣よ。席を犯すは无禮也。やよ扣えずや。と制したり。爾程に素藤は、首函を曳よせて、熟視つゝ眉を顰めて、いぬる日我戰場にて、淸澄を見たれども、その間遙なるに、他も兜を戴きたれば、面を認るに足らざりき。願八と狼之介は、嚮に俘囚にせられし時、那陣に在りしかば、淸澄を面善りたらん。近く寄て見よかし。といふに業當出高は、共侶に找み出

る、圓括の帶を三重繞らして、鷗尻にぞ締びたる。右手に抱きし袱包は、淸澄の首級なるべし。前面を佶と見亙して、阿容たる氣色なかりけり。又安西出來介も、身甲に釬臑盾して、遠山形なる身纏を被たるが、此も亦腰刀は、入る折本膳に遞與せしかば、既にして無刀也。登時蟇田素藤は、本膳が披露を竢ず、眼を睜り聲を被て、返忠の降人安西景次、又一人は、同志の降人、荒磯南彌六とやらゝなる歟。曩には若們我與に、安房の瀧田に赴きて、里見義實を刺まくせしに、反て敵に搦捕られ、剩那隊に從ふて、我に向ひて弓を彎きしは、獅子身中の虫に等しき、悖逆の罪饒しがたかり。しかるをやうやく先非を悔て、みづから新にせん爲に、寄隊の大將荒川兵庫淸澄が首級をもて、歸降の贄にせまく欲する、返忠に詭りなくは、罪を宥め功によりて、舊のごとくに倣養れん。件の首級を齎したるや。と問へば出來介額を衝て、然候。愚衷のよしは箭書をもて、嚮に聞えあげたれば、今又具に稟さんは要なし。相倶したる刎頸の一友人、荒磯南彌六が、幇助によりて、淸澄が首級を持參せり。いかで實檢に備まつらんとす。覽し給へかし。といふに素藤頷きて、そはこゝろ得たり、快もちね。快々。といそがせば、南彌六は阿と答て、持たる裹を解かけて、找近づかんとせし程に、本膳はやく遮り止めて、やをれ南彌六不敬也。首實檢には法式あり、自身の披露を許されんや。そが儘洒家に遞與しね。とい

嚮に安西出來介が、返忠の報ありしより、然しもたのもしからぬにあらねば、更闌たれどもいまだ睡らず、專々事の准備を下知して、吉左右什麼、と等程に、果して子の半を過る時候、出來介南彌六共侶に、荒川淸澄が首級を齎して來ぬるよし、その聞えありしかば、歡ぶこと大かたならず。しからんには我實檢して、殿臺へ推寄せてん。先實檢を急ぐべしとて、股肱の兇黨を召聚合るに、各准備の事なれば、平田張盆作礪時顯八、淺木碗九郎奧利狼之介、名幕沙雁太仙駄麻嘉六に至るまで、僉身甲に軀を固めて、問注所に聚合たる、局の内には究竟の、雜兵三四十名、器械拿て非常に備ふ、用心素より等閑ならず。植列たる燭臺は、晃星の像く照赫奕て、遺す隈なく明かりける。上座なる重席の上に、錦繡の裀兒の、可巳時なるをうち布て、大將著座の儲とす。素藤も立出て、はやく席に就く程に、奧利本膳盛衡は、出來介南彌六を相俱して、既に問注所の緣頰に來にけるが、相從ふ力士五六名、件の降人們が左右に立て、止々と禁めて推縮座るを、大家ひとしく見かへれば、降人の沿習にて、腰には寸鐵だも、帶ることを饒されねども、南彌六が面魂、一癖あるべき者とおぼしく、年紀は四十許にて、骨逞しく身長卬かり。身には仁田山紬の、紺と褐と二條を、迭代に染做たる、繩目形なる夾衣の、下には兵庫鎌衣の、帯布裏なるを被籠て、毘舍門掩膊の鞐掛なるに、十王頭の脛衣して、煤竹色な

第九輯　卷之十二上

第百十四回　義侠元を塞て郭號を遺す　神靈寃を懲して處女を全す

却說安西出來介は、荒磯南彌六共侶に、當晚館山の城の副門に來にければ、城門を遽しくうち敲きて、やよ當城の人々にものいはん。是は安西景次と、荒磯南彌六們で候也。嚮に忠告の箭書をもて、案内仕て候へば、事情を知られたるべし。稟しゝよしの錯ふことなく、寄隊の大將清澄が、寢首を掃て來ぬる也。快々內へ入れ給へ。やよ頭の殿（素藤をいふ）へこれらのよしを、稟し給へ。と喚りけり。登時這隊の雜兵們、閾の窻より透し見るに、豫て面善れる出來介にて、その餘は件の南彌六なるべし、兩個の外に潛び來ぬる、敵ありとしも見えざれば、則屢問糾すに、疑ふべくもあらざりけり。因て這隊の頭人たる、奧利本膳に報知しつ、驪て出來介南彌六を、城內へぞ入れにける。有恁し程に本膳は、隊兵を領て出て來つ、卽使兩個の降人なる、安西荒磯に對面して、その來路を尋るに、いよ〳〵紛れあらざりけり。然ば又素藤は、

六頁に出づ」を看ても、大略は猜せられんを、猶も具に知まく欲せば、又這次の巻に、解分るを聴かねし。

是より千秋樂とぞ稱ける。是より續る盃の、數幾番か累る隨に、南彌六痛く醉たりければ、おもはず睡臥て、日の暮ぬるをしらざりけり。既にして南彌六は、點燭時候に覺しかば、遽しく身を起して、阿彌七を喚ていふやう、不覺なりき、痛醉けん、憶ずもはや日は暮たり。我私の旅ならねば、今宵を這里に曉がたかり。快罷らん。と告別して、立出んとせし程に、落間がはやく聞著て、准備の饌をもて來つゝ、一霎時と留めて薦めぬる、夜食の箸を拿ざらんも、人の情を思はぬに似たり。陽には急ぐ面色すれども、時なほ早しと思ふにぞ、更に又坐を占て、飽までにたうべ果しかば、歡びを述、再會を、契りて遽しく出てゆくを、阿彌七落間は、兩個の兒子と、倶に門まで目送りけり。爾程に南彌六は、駝搭來ぬる身甲、掩膊脛盾の一裹と、又那蔦野戸郎六が首級は、豫に阿彌七許ゆく折に、往還稀なる山蔭の、舊朽木の櫨の内に、深く祕し措たりければ、先その處へ赴きて、裹を開き身裝して、首級を携へ、夜に紛れて、安西出來介に約束したる、菫野に來て見れば、出來介ははやく等てをり、迭に歡び相近著て、准備恁々と囁き示す、閑談に時も移りて、夜は子の時候になりしかば、卒とてそが儘うち連立て、舘山の城へいそぎけり。畢竟南彌六出來介が、計りて敵城に入るに及びて、事の勝敗甚麼ぞや。幷はこの處の出像（此繪二六

る道ならねば、願ふは増松を我に取らせよ。我身今は幸ひに、稲村の城に召置れて、月俸を賜れば、功あらん折御家臣に、なされん事疑ひなし。這回この地にかへり來ぬるも、守の密旨を奉りて、殿臺の陣中へ、おん使に立たる也。憑れば逗留久しからで、明日は稲村へかへりまゐらん。非如約束したればとて、今番伴ひゆくにはあらず。我發迹る日のあらば、その折にこそ喚攬るべけれ。甚麼この義を饒さんや。と他事なくいはれて、あるじ夫婦は、理り也。と承歡びて、更に又異議に及ばず。倶にその意に儘せしかば、南彌六は懐にせし、勒肚の財嚢より、圓金十兩とり出して、阿彌七夫婦に與へていふやう、這は是逆より、所貯祿の餘財也。薄義なれども増松を、養嗣に約束の牽出物ぞ。といひつゝ又財嚢を探りて、圓金四五兩出し薦めて、こは和主們へ土産の代也。受收め給ひね。といふを阿彌七左右なく取らず、なほ云云と推辭しを、南彌六听ず、頭を掉て、そは又無益の口誼也。咱家年來那這となく、許多の友に交りたれば、錢財を喪ひしことも少からず、得たることも多かりしに、今は爾る友のあらねば、喪ひもせず、得ぬることもなけれど、稲村殿に召置れて、俸祿を賜る身にしあれば、憑ばかりの貯祿は、あらずとて事を缺んや。推辭む事かは。といひ諭して、頻りに薦めて已ざりければ、阿彌七落間は辭難て、受戴きつゝ歡びを、陳てやうやく收めけり。憑而南彌六は改めて、先増

人の兄の、來ぬるを歡び出迎へて、手ばやく先上坐に、花筵を布き、請登して、猛可に酒を溫め餚を調へ、良人と倶にこの日屬、人の噂に聞たるよしを、いひも出、又問ひ慰めて、恙なかりしを壽きたる、欵待等閑ならざれば、南彌六も亦歡びて、その身安房にてありし事、國主御父子の仁慈にて、助りがたき命さへ、饒されたりける洪恩德義の、首より尾まで、箇樣々々、と說示せば、阿彌七落間は听く每に、且驚き且感じて、是に就ても叛逆人の、速にも滅亡ざるを、慨しとのみ思ひたり。却這阿彌七夫婦の中に、兩個の男兒あり。そが冢子を阿彌太郎、次を增松と喚做したる。阿彌太郎は十三歲、增松は十一歲になりぬ。折から普善村なる何がし院へ、手習にゆきたりけるが、目今かへり來にければ、二親は云云と、告て給仕に侍らしつ、兩個の兒子が手習の、倣書册子をうち開かして、南彌六に見せなどす。登時南彌六は、久しく見ざりし兩個の侄の、思ふに優ていといたう、大きうなりしに胆を潰して、そが倣書を左見右見るに、弟の手筋優りたり。且阿彌太郎は、農業に疎からず、又增松は、武藝を好みて、その師を得まく欲すれども、相應しからぬ技なれば、親は只顧推禁めて、許さるべくも侍らず。と問すがたりに母親の、告るを南彌六うち听て、そは憑しき事なりかし。就て我亦思ふよしあり。阿彌七も听給へ。知るゝごとく身は孤獨にて、娶らざれば子はあらず。然ばとて後なきも、亦是人た

訪はゞ、疑ろゝことありもやせん、と尋思をしつゝ、人煙なき、山邊を獨徘徊して、この日を工夫に消しけり。單表荒磯の南彌六は、昨宵安房なる長須賀の申明亭にて、梟首の盗兒鳶野戸郎六が、首級を竊獲たりしより、通宵路次を急ぎて、この日未下刻時候、上總の舘山の城近き、普善村に來にけるが、這里なる枝村に、字を乙接と喚做すあり。この地方の農戸に、阿彌七と聞えしは、南彌六が弟なり。他はその心術、兄南彌六と同じからで、最老實なるものなれば、畊作にのみ身を入れて、要なき友を得まく欲せず。こゝをもて家兒の荒磯が、年來左右に事を好みて、専々俠氣を旨とするなるを、よからぬ所行ぞと思ひしかば、折に觸ては諫めしを、南彌六は歡ばず。是より迭に疎濶になりて、又年來を過すものから、南彌六は今さらに、骨肉の情なきにあらねば、肚裏に思ふやう、今宵我計れる如く、賊首素藤を討捕獲ずは、命は其里になきもの也。這里まで來つゝ我弟に、逢はでこの日を空しく消さば、後に悔しき事もあらん。一霎時那里に立寄て、暮るゝを等ば、一事兩用、これに優たる便宜はあらじ、と尋思をしつゝ、然氣なく、乙接村に赴く程に、阿彌七は野田挊ぎして、晝食たうべに還る折、料らず南彌六に逢ひしかば、迭に歡び無異を祝して、軈て宿所に相伴ひけり。然ば又阿彌七が妻は、這胞兄弟の従母妹にて、名を落間と喚れたる、心操歹からず、萬事に誠あるものなれば、絕て久しき良

よしを告れども、密議は祕して、些も知らせず、退き去らんとしたる折、復五郎が枕に建たる、小屏風の故たるか、外面破裂たるあり。こは究竟とおもふにぞ、懐にせし遺書を、手ばやく取出て、件の屏風の、敗れたる處より、悄々地に裏へ挿入れつゝ、遽しく退きて、休息所に來て見れば、朋輩の雜兵兩三名、鰾膠放れたる弓を粘てをり。出來介他們にうち對ひて、洒家は火速のおん使价を、勤果したるにより、權且休足の暇を賜ひぬ。一兩日は所役なきに、いでや近き野に出て、求獲て野鷄を射て捕りてん。獲あらば和主們と、倶に今宵の酒菜にせん。酒調へて等給ひね。と實しやかにいひ誘へて、鎖甲を著擐、臂縛皆繳して、獵箭を腰にし、角弓を攜て、外面投て出たるが、素より獵の爲ならねば、悄々地に小徑をうち遶りて、舘山の城に近づきつゝ、樹梢の隙より那這と、便宜の處を覗ふに、副門の乾に當りて、崖岸のいと高き、究竟の要害あり。這頭は都て切所を憑みて、戍るその隊の兵の、多からじと見えければ、出來介はなほ那這と、樹間立潜き近くよせて、箭勢を量りて、准備の箭書を、三條まで射て入れまくせしに、そが二條は得届かず、一條は塀を串き、又一條は、空塹の、頭へ果敢なく落たれども、最後の一條は、思ひの隨によく走りて、城の内に入りしかば、今は心安かりき、と思へばはやく退きて、この日の暮るゝを等程に、近き普善蔀々利村には、年來相識多かれども、慭に他們を

略行れずは、生て二たび還りがたかり。然るを御方に知るものなくば、忠義の與に棄し命の、狗死にならんのみならで、御方に今猶必勝の勢ひなければ、首鼠兩端の思ひを做て、又素藤に降參せし歟、と疑れもせば朽惜からん。然ばとて這回の機密を、人に告べくもあらず。我子は一個ありながら、尚總角にて、弓折塚なる、遠山寺に在るなれば、言遺すべき便りもなく、今般の對面は、いよ〳〵かたかり。只滿呂重時のみ、年來貳なく交りたる、同憂中の友なれば、他に悄々地に告ずして、出てゆきなば我上の、聞えし折に恨みやせん、と思ふものから金瘡兒なり、告なばおもひを增せんのみ。要こそあれ、と深念をせし折、傍に人のなかりしかば、舘山の城へ射入るべき箭書と、今番南彌六に相譚れたる、忠義の趣悉々と、寫す遺書一通を、悄々にものしつゝ、重封皮しつ、そを懷にして、滿呂復五郎が病牀に赴きて、稻村よりかへり來にける、事由を報知して、病痾の安危を尋るに、復五郎は深痍なれども、都て窮所にあらざれば、死ざることを得たりしに、陣中は透間多くて、夜風を禦ぐに便りなければ、遂に破傷風になりしより、面色痛憔悴して、みづから身を起すこと得ならず。復五郎は、出來介が、火急の使价に擇れて、稻村よりかへり來ぬる、那里の首尾をうち听くにも、人の功績の羨しさに、身の薄命をうち歎けば、出來介さこそ。と慰めて、昨日南彌六が宿所を訪ふて、對面せし

のもなし。就中素藤は、歡び信て、感じて已まず。盆作にうち對ひて、與冬適論ぜしな。然らば今宵更闌て、那出來介が南彌六と、共侶に來て城門を敲かば、よく問極め內へ入れて、速に我に報よ。齎したる首級を實檢して、清澄に疑ひなくば、そは天の錫也。立地に出陣して、殘る奴們を殺拂ん。其頭の准備もせよかし。と下知して評議は果しかば、僉こゝろ得て退出けり。話分兩頭。爾程に安西出來介景次は、詰茂佳橘と共侶に、稻村の城を辭し去りしより、その夜も歇はず馬をはやめて、次の日の朝未明に、殿臺へかへり來にければ、清澄によしを報て、下知狀をぞ遞與しける。これにより清澄は、逸友高宗們を招き聚合て、倶にその書を披き見るに、清澄們が請ふに儘して、急に城を攻伐つべからず。宜く寛の一字を守りて、敵の懈るを等べしとある、君命を傳られ、且義成主の自筆にて、寛の一字を寫せ給ひし、扇子を命令の證据にとて、清澄們に賜ひしかば、清澄は、高宗逸友們と、倶に賜を拜し相懽びて、よしを士卒に徇示し、固く屯を戍らして、一騎駈の闘戰を許さず。出來介佳橘を勞ひて、休息の暇を取らせけり。恁而安西出來介は、昨日南彌六に相譚れたる、約束を錯へじ、と思へば兩夕睡らざりける、長途の疲勞を醫してこそ、と尋思をしつゝ退きて、一霎時假寢の枕に就きしが、午後時候睡覺て、更に又思ふやう、今宵計りて、敵城に入るとても、敵にも亦その備ありて、計

ん勢を挫め攻撃て、鏖にし給ひね。倘火を放つ暇なくば、淸澄が首級を携て、南彌六と倶に推參せん。その折實檢あるべきもの歟。愚衷寸楮に罄しがたかり。餘は拜謁を期しまつり候。誠惶々々、謹言。

とありけるを、素藤は兩三番、くり復さしつゝうち听て、現出來介が返忠は、擣鬼ならず聞ゆれども、今の世の人心、必とすべからず。衆議に依るこそよかめれとて、盆作願八、碗九郎沙雁太、麻嘉六狼之介們、この餘も都て頭達たる、兇黨を召聚會て、よしを告箭書を見せて、その意見を問けるに、大家半信半疑して、虛實を安定にいふものなく、評議區々なりけるを、平田張盆作推禁めて、各何ぞ狐疑多きや。敵に佯りて、反忠の、內應を做す者の、火を放ちて暗號とせんとて、敵を切處に哄引寄せて、伏兵をもて擊破る、手段は和漢の軍書に多かり。恁れば安西出來介が、火を放ちて暗號にせんといふとも、這義は決して信ずべからず。他倘淸澄の頭顱を捕て、南彌六共侶、身を脫れて、今宵當城へ來るならば、則是照据あり。召入れて實檢に、備ていよ〳〵相違なくば、はやく殿臺へ推寄て、攻擊ときは躬方の大利。敵に備なきのみならず、主將の橫死に驚噪ぐ、士卒は狩場の野雞に似て、逃るを緊く赶稠て、鏖にこそすべかンめれ。疑ひ惑ふことかは。と席を拍て論ぜしかば、大家倶に然也と答て、更に異議するも

たき歟。いかに〳〵、と思ふのみ、人に問ふべき事ならねば、胸安からずありける程に、この日未下刻、後門を戍る雜兵が、箭書を拾ひたりといふ訴あり。そは奥利本膳が夥兵なりければ、本膳その箭を携來て、よしを素藤に告知らせしを、素藤は訝りながら、箭書を本膳に讀して听くに、こは安西出來介が、內應の密書にて、その書に云、

在下們、曩に安房の富山にて、里見義實を狙撃まくせしに、不幸にして犬江親兵衛に生拘られて、久しく獄舍に繫れたりしに、舊家の子孫たるをもて、義成竟に在下們を、饒して這回の軍役に從はしたり。この故にいぬる日より、淸澄の陣中に在り。しかれども、胡馬の北風に嘶き、烏鵲の南枝に巢るよしは、故を忘れざれば也。在下們已ことを得ず、姑且寃家に從ふものから、君に受たる年來の、洪恩を忘れんや。脫れ去てその大城へ、還りまゐらんと思へども、功なくば饒されがたけん。この義も計較はありながら、滿呂復五郞重時は、いぬる日の鬪戰に、流箭に傷られて、存亡不定なるをもて、商量敵にすべくもあらず。粤に同盟の義兄弟、荒磯南彈六と喚做す者あり。他は名だたる任俠にて、昨日安房より來にければ、隨即南彈六に密議を示して、遂に幇助に做す事を得たり。是により、今宵淸澄の睡頸を捕て、陣屋に火を放て、暗號とせん。殿臺に火の起るを見給はゞ、はやくお

遣して、敵の動靜を撈らせよとて、をさ〳〵准備をしたりしに、淸澄は、推寄せても來ず、城中姑且無事なりければ、素藤は退きて、旦も夕も後堂に在り。小人專に暇あれば、妄想慾火と倶に起りて、遣るかたやなかりけん、うち戲れたる語次に、妙椿に聶くやう、恁いはゞおん身の與には、情薄きに似たれども、嚮におん身の法術をもて、犬江親兵衛を追遣らせしより、我復此に據ることを得て、里見と牛角の軍はすれども、いまだ濱路姫を見ることを得ず。こも亦例の妙術にて、搔攫ひもて來給はゞ、我本來の望足りて、おん身は正室他は側室、玉と黃金を左右の手に、持るよりなほ樂しからんを、まだ其田地に至りがたきは、抑甚麼なる因果ぞや。と諄說くを妙椿慰めて、しかおもはるゝは理り也。咱儕何でふ世間の、婦女子に等しく喫醋せんや。那少女を搔攫ふて、おん身の望を稱ん、と思はざるにあらねども、旗揚の始より、又大敵を引受て、日毎の軍議に暇なければ、まだ手の屆かで默止せしに、敵寄すべくもあらざれば、今宵稻村へ赴きて、翌の旦開に領て來なん。臥簞備けて等給ひね。と輒きまでにいひ誇りて、出てゆく折告もせず、妙椿はその黃昏より、忽然と見えずなりしかば、素藤は、いはれし事の、違ひあらじ、と憑しくて、曉るを遲しと等たるに、次の日に至りても、妙椿はかへり來ず。こは那濱路姫の臥房の下へ、埋措せしと聞えたる、犬江が靈玉ある故に、輒く便りを得か

つの鐘、數へもやらず夏の夜の、いとゞ深ては明易き、七ッと六は十三里、熟れし路とて遙なる、上總を投て走りけり。不題再說。素藤は、妙椿が、幻術の幇助により、討手の大將清澄們を、思ひの隨に眩惑して、前日那隊に生拘られたる、願八と狼之介を、略復したりければ、歡ぶこと大かたならず、この勢ひを拔ずして、殿臺へ推寄て、清澄を撃捕てん。尼姑も倶に出陣して、例の風もて敵の士卒に、息をな吻し給ひそ。といふを妙椿推禁めて、惴り給ふな、开は歹かり。咱們が起す猛風は、野戰に利あれども、屯を撃つに妙ならず。且殿臺は、その地高くて、敵を隈なく直下せば、箭を發ち石を擲つ、他に利ありて躬方に利あらず。況三社の名神あり。就中正八幡は、源家の氏神なるをもて、我術も亦思ひの隨に、行ひがたきよしもありなん。清澄鈍く謀られて、生拘二名を復せしかば、必怒りて推寄せ來つべし。その折に又風を起して、亂るる處を攻擊たば、漏すことなく鏖にせん。既に寄隊を殺掠はゞ、その勢ひをもて稻村へ、攻入らんこと易かるべし。と諭せば素藤感服して、敢又兵を出さず。軈て礪時願八と、奧利狼之介を召よせて、那陣中の虛實を問ふに、件の兩個は、再生の、恩を稱て答るやう、清澄多勢にあらねども、士卒號令をよく守りて、使ること手足の如し。矧及高宗逸友們の勇士あり、侮りがたく候。といふに素藤頷きて、然らば他が推寄來ぬるを、等て中途に逆擊ん。細作兒を


妙ちん


かさね
善惡も知
らぞ
二人
烏夜に挑む

口に唱る呪文と倶に、乞兒は棒を持たる儘に、觔斗りつ二三間、後ざまにぞ倒れける。恁ても女僧は少女子を、左に抱きて毫も放さず、右の手をのみ揮らかして、腰に帶たる戒刀を、晃りと拔て、南彌六を、結果ん、と立寄る折から、奇なるかな一個の神女、最大きなる狗兒の背に、立つゝ富山のかたよりして、瞬息間に影向の、快こと宛箭のごとく、降集る雲を靡かして、忽然として件の女僧の、目前に立給ひしかば、女僧は吐嗟、と駭き怕れて、已ことを得ず戒刀もて、殺拂ん、と晃めかす、那時遲し、這時速し、神女は右の脚をもて、透さず女僧の胸前を、丁と蹴給ふ神罰覿面、女僧は一聲叫びも果ず、搔抱きたる少女子を、放ちて仰ざまに倒れけり。登時神女は、少女子を、狗兒の背にうち乘して、又雲を踏み、中天に、うち升りつゝ身を翳して、往方も知ずなり給ふ。恁りし程に南彌六も、乞兒も倶に我に復りて、神女の奇特を見てしかば、いよ〳〵驚き且畏みて、一霎時は仰ぎ瞻送りしが、那女僧も亦孰地ゆきけん、搔滅す似く見えずなりたる、外の奇怪に空骨折ぬる、乞兒は、なほも南彌六が、立も得去らでありけるを、星の光りに透し見て、撃ん、と棒を搔拿て、走り蒐るを、南彌六は、閃りと避て兩三番、空撃させて衝入る剽姚、足を飛して礑と蹴る。蹴られて乞兒は阿とばかりに、死活は知らず轉輾ぶを、見かへりもせぬ南彌六は、足に信する星月夜、鎌倉山にあらねども、奇異にあふぎがや

つゝ、素藤を、撃まく欲する宿意を寫して、硯筥の底に藏め、物旣に整しかば、長き脇挿の刀を帶て、身甲をば袱に、包みてみづから是を搭駝ひ、その曛昏に正門より、出て長須賀に赴きつ、申明亭に來て見れば、果して葛野戸郎六は、旣に首を刎られたる、首級は梼に掛て在り。倘甲夜なれば、幵を成る乞兒に、憚りて手を下さず、其頭を徘徊せし程に、短夜はやく深初て、子二刻時候になる隨に、乞兒們は退きし、守舍に入りけん在らずなりたり。南彌六これに便りを得て、潛びよりつゝ、戸郎六が、首級をやをら拿卸して、手ばやく准備の編袱に、推裹み腰に附て、ゆくこといまだ幾ならず、思ひがけなき岐路より、突然と走り來るものあり。南彌六心驚きて、誰そや。と透し長視れば、怪しむべし一個の女僧、いと美麗しき少女子に、布嚢を銜せしを、肱腋に楚と抱きたり。當下南彌六おもふやう、這奴は出家に似げもなく、必是拐兒にて、良家の女兒を竊みしならん。唯やは遣らん。と怺へぬ俠氣、近づく隨に立塞りて、尶尬兒等。と喚禁めつゝ、肩尖抓で掖寄するを、女僧は噪がず振放ちて、透さず中たる修練の拳に、南彌六は憶ずも、脂を撲して、苦と叫ぶ、聲もろ共に乒乓て、臀坐に撲地と仰反たり。浩處に一個の乞兒、捍棒を挾みて、南彌六が迹を跟て來つ、方僅這女僧が光景に、怯としながら持たる棒を、拿直し振抗て、耶と聲被けて撃んとせしを、女僧ははやくも見かへりて、

又素藤を刺まくす。善悪その差ありといへども、行ふ所は異ならず。俗に云内股膏薬に、似たりとて譏る人もやあらん。といふを南彌六推禁めて、人は何ともいはばいへ、暗きを去て明きに就く、昨は非にして、今は是也。一善一悪、我に在り、世の褒貶に拘づらはんや。行ふ所は似たりとも、悪を資けて榮んより、善に與して死んこそ、大丈夫とはいふべけれ。後を見かへることかは。と諭せば出來介又異議せず。然らば和殿は、明日悄々地に、那首級を携て、黄昏までに迹より來よ。我は守の下知狀を、賜りて又通宵、騎馬にて還る路なれば、翌の旦開に御方の陣へ、歸著せん事疑ひなし。約束をな違へそ。と示し合しつ、立別れて、東の宿所へ退りけり。爾程に、東六郎辰相は、この日申牌の左側に、稍宿所へ退きかへりて、隨卽出來介佳橘們に、下知狀を遞與していふやう、這個の書簡の內には、舘のおん自筆の扇子もあれば、いよ／＼路次に小心して、兵庫助に遞與すべし。この餘の事は慇々と、叮寧にこゝろ得さして、身の暇を拿らせしかば、出來介は書簡を、項に掛け別を告げて、佳橘と倶に又騎馬にて、始のごとくその通宵、連りに路をいそぎけり。然ば又南彌六は、今宵上總へ走るべき、用意を做す程に、先市に立出て、刃を擇て、一口の、匕首を買とりたるが、倘宿望を得遂ずして、命を喪ふ事あらば、我志空となりて、人は逐電せしと思はん。一筆遺すにしくことなし、と深念をし

肖たり。年の齢も相應しくて、五十許に見えたれば、こは我與の奇貨、今宵我はその首級を、竊て舘山へ赴くべし。和主も亦殿臺なる、御方の陣屋へ還りなば、先舘山の城内へ、内應の箭書を射入れて、箇樣々々にいひ誘へ、同志の乾兒、荒磯南彈六と喚做す者と、倶に清澄の寢首を捕て、今宵夜半に持參せん。その折はやく城門を開きて、入れさせ給へ、とその書に寫さば、素藤必信容れて、首級實檢をすべしとて、我們兩個に對面せん。その折倶に匕首を、懷に躱し近づきて、素藤をだに撃捕らば、その餘の奴們幾名ありとも、殺散さん事易かるべし。恁て火を放て暗號を做さば、荒川主その火烟を見て、こは敵城に變あるならん、と猜してかならず攻入るべし。かくの如くなるときは、事十二分の造化なるを、那妖尼がその機を查して、敵に毫も由斷なく、其頭の田地に至らずとも、對面だにせば、素藤を、撃果して戰歿せん。哄計りては、只是のみ。甚麼この義をよくせんや。と又他事もなく聶き示せば、出來介听つゝ歡びて、那城内へ、入ることは和主に在り。既に入て、素藤を、撃捕ることは我にあり。機密といひしそは又得がたき妙策也。箭書の事はこゝろ得たり。和殿明日那地に迨らば、啓善の邊の薜々利なる、董野にて我を等ね。翌の夜艾共侶に、舘山の城へ赴ん。とはいへ、人の心術ばかり、安定ならぬものはなし。始は我們、素藤が、與に老侯を刺まく欲りし、今は國守のおん與に、

ら、當初和主們は、素藤に從ふて、富山の情由さへあるなれば、御方の士卒が疑んとて、三人を一人遺されて、この回の軍役に、漏れしは我身の貧乏闕。武士ならねばとて、心まで、見貶されしは情なし、いかで我、素藤を、撃捕る事のあるならば、君侯はさら也、家老達、貓兒も釋氏も胆を潰して、稀なる義烈、と掀て思はん。しからんには貳なき、命を其首に喪ふとも、名は後の世に遺るべし、とは思へども素藤に、仕へし事なき我身なれば、那兇黨に相識あらず。何をよすがに舘山の、城内へ入ることを得て、謀りて素藤に近づくべき、と獨肺肝を摧きしに、今日究竟の便宜を得たり。なれども我身單にては、なほ事足らぬ所あり。いかで和主を相譚ん、と思ひし折に訪れしは、大望成就の祥ならめ。忠義の與には百稔の、命もいよ〳〵惜からずや。とふたゝび問ふを聞あへず、丌は又諒し、我も武士也。火を踏み水に淪むとも、なでふ和殿を資ざらんや。快々機密を告よかし。といふに南彌六點頭て、便宜といひしは、別義にあらず。和主も面善りてあらんずらん。いぬる比我們が、久しく禁獄せられし程、同じ獄舍に繫れたる、蔦野戸郎六、と喚做たる罪人は、人を殺せし强盗也。積惡既に分明なれば、今日長須賀(安房郡に在り稻村を距ること西北一里許なり)の申明亭に、梟首せらるゝと聞えたり。しかるに件の戸郎六は、俗に云他人の猿肖にて、その面影は、左なる、頤の黑子まで、荒川主によく

き敵に克、必落べき城を屠るは、誰も皆よくすべし。その克がたき敵に克、落しがたき城を抜くを、寔に勝といはまくのみ。和主、年來の好を違へず、縱命を捨るとも、我を資けて共侶に、忠臣義士と喚れんと、思はゞ機密を談ずべし。又人並に命を惜みて、急遽脚の一役を、面目也と思ひなば、和主を憑ず。とく〳〵ゆきね。といふを出來介聞あへず、哥々は痛く酔たるな。いはでもしるき事ながら、我先祖は當國にて、世々一郡の主なりしに、景連が不義により、家は迹なく亡びしを、我その流を汲む甲斐に、切て昔の儀ばかりだも、いかで再興さん、と思ふ心を知らず貌に、しかいはるゝこそ恨みなれ。初我謬て、素藤に従ふて、他が與に刺客と、なりて瀧田の老侯を、狙撃まくせし折に、和殿も倶に義の與に、命を惜まで幇助となりしに、今又和殿の一大事を、資けずは男子にあらず。何事まれうち出しね。不忠不義の伎倆ならずは、憂を分ちて、死を倶にせん。さのみ疑ふことかは。と誓ひを示す心の誠に、南彌六面を和げて、外面見出し、門の戸を、闔てふたたび坐を占て、額を合して悄語くやう、和主もおもへ、我們が、曩に富山で神童に、生拘られたりし時、命は既になきものなりしに、老侯御父子の仁心深く、罪を宥め頸を接して、月俸をさへ賜りぬる、這再生の大恩を、稟つゝ人に捷れたる、忠も盡さず義に仗らずは、富山で犬江に撻れし折、那儘死ぬるを優りとせん。此は是我日屬の、志なるものか

んとて出てゆきぬ。又出來介は、この年來、淺からず交りたる、荒磯南彌六が安否を訪ふて、今番舘山攻の勝敗を、告て他を慰めばや、と思ひにければ、こも只身單、荒磯が宿所に赴きしに、折よく南彌六は宿に在り、遽しく出迎へて、先その恙なきを、祝し祝され、饗應は外飾もなき、灶兒に蒼柴折燒て、茶を薦め酒を盪め、目刺鰯を酒菜にて、一霎時は憂を遣替す、盃の間每に、南彌六は出來介に、陣中の得失を、問へば答て、然ばとよ。いぬる日初度の闘戰に、御方は勢ひ克べかりしに、敵の軍師と聞えたる、女僧妙椿の魔風に撲れて、浦安牛助友勝は生拘られ、滿呂復五郎は、深痍を負ひぬ。當晩賊徒は夜撃に寄せしを、荒川主が伏兵をもて、夜撃の頭人と聞えたる、礪時願八業當と、奥利狼之介出高を生拘りしに、その後自他の生口を、交易の義によりて、鈍や、業當出高を、賊徒に騙略られたり。是等の故に、急脚の、使价に、我と荒川の、若黨佳橘を差來されしが、おん下知を等程に、聊暇あるをもて、哥々、和殿にあはまく思ひて、悄悄地に出て來つる也。といふを南彌六聞つゝも、憶ず腕を扼りて、そは安からぬ事にこそあれ。然までに敵に謀られながら、推寄て攻撃もせで、遙々這里へ脚力三昧。我陣中に在るならば、一個なりともうち向ふて、花々しく戰歿せんに、孰も命の惜かるよ。と譏るを出來介推禁めて、さないひそ。那女僧ば、神出鬼沒の手段あり。力技にて勝れんや。といへば南彌六冷笑ひて必勝べ

姑且して義成主は、又辰相們に宣ふやう、靈玉の事はしも、何ばかり悔おもふとも、今さらに術もなきを、長詮議は無益也。又犬江仁が事は、我なほ思慮を旋らして、召返すとも返さじとも、目今こゝに議すべからず。只要緊は、素藤を、征伐の一議也。我脚の病著の、恁まで過半瘥りたれば、出陣はかたくもあらねど、然ではなほ軍功なき、清澄が面なかるべく、我も亦那幻術を、急に拉ぐ術はあらず。恁れば清澄が請ふに儘して、寛の一字にしくことなけん。窮方にも二三百の、戰歿金瘡兒あるよしなれば、加勢の軍兵五百名を、殿臺へ遣すべし。と宣掟給ひつゝ、近習に硯筥を拿來たさして、墨を磨らし筆を染て、傍に措れし扇子を開きて、手づから寛の一字を寫して、これを辰相に遞與して、又宣ふやう、這扇子は、清澄們へ、我命令の照据也。坐右に掛てこの議を守らば、事速に軍功なくとも、窮方を損せず、敵を押えん。汝們連署して、清澄們に、我這旨を傳へよかし。又那靈玉の亡たる事は、各祕て人にな知らせそ。恁る折に人聞知らば、怪に驚き奇を唱て、牽强傅會の評をや倣さん。就中女子毎には、兎毛許も聞せぬぞよき。この義も都てこゝろ得よ。と最叮寧に示し給へば、大家倶に言承して、うち連立てぞ退りける。爾程に、安西出來介景次は、詰茂佳橘と共侶に、東六郎辰相が宿所に留められて、下知狀を等程に、姑且暇ありければ、佳橘は、主の清澄が、宅眷に陣中の趣を、告知せ

たるに、他に借りたる靈玉を、その折に得返しはせで、埋めし儘に喪たりとて、今邇しく親兵衛を、召返さんはさすがにて、女々しき者と思はれん。因て熟思惟るに、那玉は親兵衛が、母の胎内より感得して、靈驗ありと聞えしに、非除異人の敎也とも、他が衛を拿放させて、濱路姫が身の衛に、せんとて土中へ埋めしは、我第一の愆なりき。總て名劍、古鏡の類も、その人によりて、身の衛と做り、又その人により祟を受く、例は和漢に多かるを、枚擧るに遑あらず。恁れば那靈玉も、親兵衛にこそ身の衛に、なりて應驗多かりけめ、濱路が爲になるものならねば、自然と亡せしも以あるかな。𪜈をいかにぞや我ながら、いよゝ迷ふて悟るによしなく、今その玉を拿出して、荒川兵庫に貸與へ、女僧妙椿が幻術を、折んと欲りせしは、是愆に愆を、こゝに累ねし私情のみ。大人君子の苟且にも、得做まじき事なるを、今まで心つかざりしは、我も亦鬼魅妖怪に、志を奪れし歟。弓箭八幡、饒させ給へ。是に由て又思ふに、我が親兵衛を疑ひしは、𪜈も亦心の惑ひなりし歟、それかあらぬ歟。と計りに、いふに啻間の苔淸水、流れながれて入る大洋の、胸廣かりし名將も、測り難たる妖孽魔障、覺んとしつゝまだ醒ぬ、无明の醉ぞ深かりける。然ば四個の老黨は、召返されぬ親兵衛に、情由ありけん、と猜するのみ、明君みづから愆を、飾り給はぬ懺悔の義を、理り也とも慰難て、感心の外なかりけり。

甚麽なる故ぞ。是を今我心に問へば、靈物自然とその主を、慕ふてはやく飛去りし歟、昔も恡や水江の、浦島子が不樂しらに、悔も憾も後竟に、返らぬ玉と玉手匣、盒のみありて何にせん。不覺なる所行してけり、と悔の八千度百千度、思へどもおもひ難給ふ、惑ひを釋んよしもなき、氏元貞行辰相們、及輿隷の老黨も、只云云と慰めたる、そが中に氏元は、貞行にうち對ひて、和殿は何と思ふやらん。上の賢査違ふことなく、靈玉自然とその主を、慕ふて飛去りたらんには、勿怪の幸ひなるべけれども、或は妖怪變化の、玉を欲するものありて、幵が偸拿りなどせば、往方を知ることかたからずや。といへば貞行沈吟じて、恠る非常の事はしも、今さら凡夫の臆度をもて、思ひ得べきにあらねども、疑へば然る事の、なきにしもあるべからず。なれども鬼魅妖怪は、世に名だたる劍を怕れ、故りたる鏡を怕るゝとぞ。然るをいはんや神々しき、那靈玉に憚らで、何物歟竊拿べきや。と諭すを辰相見かへりて、各の論議、そのよしあれども、倶に推量の外を出ず。願ふは犬江親兵衛を、召返して問せ給はゞ、萬に壹おん疑ひを、解るゝよしのありもやせん。といふを義成主所給ひて、三個の論議皆由あり。木曾介が疑ひも、その事なしといふべからず。又藏人が論ずるよしは、寔にその據あり。然とて當否は定めがたかり。唯六郎がいふ所、事の捷徑に似たれども、竊に我思ふよしありて、權且親兵衛を遠離

ひし、封皮は土氣に濕りたれども、舊の儘にてなほありけり。爾程に靑侍們は、亦空瓶を吊起して、緣頬より退きつ、奥隷の老黨は、辰相們が後方に坐り。登時義成主は、四個の老黨に宣ふやう、汝們はこの靈玉を、いまだ一覽せざりしならん。よき折なるに、見よかし。と仰に大家額を衝て、御諚の如く其玉は、人の噂に聞知るのみ、現拜見こそ願しけれ。と答る間に義成主は、壺の封皮を拿放ちて、內に籠たる香盒を、拿出しつゝ左なる、掌にうち乘して、然ば見せんず、僉找みね。といひつゝ右手を蓋に掛けて、やをらうち開き給へば、內には、那玉なかりけり。こは什麼いかに。と駭きて、膝の下を那這と、索難つゝ又壺を、拿揚つ、うち覆して、看れども見えぬ玉の往方に、呆れて手を叉み頭を敧け、思ひ不娯させ給ひたる、今この事の爲體に、俱に訝る四個の老黨、就中奥隷の、某甲は項を鶴して、我愆にあらずや、と思へば胸の安からねども、問まつらんはさすがにて、等しく口を鉗みたり。姑且して義成主は、憶はずも太息を吻て、老毎、この香盒を見よ。嚮に我この內へ、容たる玉のあらずなりしは、不思議といふもあまりあり。只這香盒のみならず、又是この壺へ斂め、壺へはこの封印を、我手づから箴たりし、封皮は故の儘なりければ、人を疑んよしもなし。那瓶と共に三重なるを、濱路が臥房の簀子の下の、土中へ埋措せしかば、紛失すべき東西ならぬに、見えずなりしは、

て礪時に易ん、といひ哄えたる、卽これ也。汝們は、心もつかずや。夫牛は仁獸也、狼は惡獸也。又桐は直木也。礪は磨石にて、疎砥也。仁獸の牛、惡獸の狼に敵しがたく、直木の桐、疎砥の堅きに及ざるは、猶孔子の盜跖に怒罵られ、孟軻の臧倉に讒諂られたるが如し。盜跖、孔子を罵るといへども、孔子の聖人たるに害なし。臧倉、孟軻を譖るといへども、孟軻の大賢たるに害なし。此に由て他を思ふに、二賊が昨日拯れて、躬方の禁獄を免れしは、實に免れたるにあらず、機變をもて人を欺きしのみ。又良于と友勝が、敵の俘囚を免れがたきは、いまだその解厄の、時の至らざるならん。素藤、旣に詐の、謀行れて、業當出高を奪得たりしかば、縱良于友勝を、久しく囚置くとても、急に害する事はなからん。是その望を遂たる故也。然は思ずや。と論じ給へば、氏元貞行辰相は、感じて膝の進むを覺ず、倶に主君の宏論を、稱賛しつゝ、なほ這那と、論議に時を移したり。浩處に、那奧隷の老黨某甲は、方才土中より穿出したる、靈玉の瓶をそが儘に、兩個の靑侍に吊運して、もて來て且緣頰に、やをら措しつ、找み入りて、よしを恁々と報稟せば、義成逈に欄して、その瓶には壞の黏たるな。內なる壺を拿出せよ。と仰に老黨、緣頰に、退りて靑侍們と共侶に、八重際せし徼索を、左右して解捨て、內なる壺を拿出して、兩手に捧げてまゐらせける。壺には鬮に埋めし折、義成手づから封じ給

も亦知るべからず。こゝをもて我思惟るに、犬江親兵衛が感得したる、那仁字の靈玉は、よく邪を退け妖を征す。應驗の灼然なるを、人の知る所也。件の玉は往る比、我親兵衛に借得てより、今猶埋めて土中に在り。濱路が病著搓りて、那物怪も絶たれば、只今玉を穿出さして、權且清澄に貸與へなば、今親兵衛が在らずとも、件の女僧が怪しき手段を、破る身の衛になりぬべし。この義は什麽。と問ひ給へば、氏元貞行辰相們、一議に及ばず承諾ひて、御掟寔にその理あり。然るべし。と稟しゝかば、義成則近習を立して、嚮に玉を埋る事を、奉りたる奥隷の、老黨を召よせて、目今那玉所要あり。速に奴隷を聚合て、簀子を放ち、穿出さして、瓶もろ共に疾もて來よ。快々せよ。といそがし給へば奥隷の老黨は、承りぬ。と應つゝ、慌しくぞ退出ける。

第百十三回

三匝の瓶里見侯を醒す
一級の首南彌六を愆つ

義成主は、那靈玉の、瓶を等給ふ程に、又三個の老黨と、素藤征伐の得失利害を、云云と討論しつゝ、他が機變の怪しかりしに、就て又宣ふやう、机上の理論は、儒の虚文、多辯は要なきことながら、名詮自性なきにあらず。那素藤が狡猾なる、牛助をもて狼之介に易、登桐をも

業當と出高を、素藤が使者に遞與して、還し遣したりけるに、豈思んや、良于友勝は、眞のものにあらずして、草偶兒で候ひき。

と讀むに主從胸を潰て、丌も亦女僧が幻術ならめ憎むべし〳〵。と義成憶ず敦圉給へば、側聞する三家老氏元貞行辰相も、倶に呆れて嘆息す。是よりして下の條は、淸澄們が意見を寫て、素藤既に慿までに、怪異女僧の幇助を得て、人を愚に做す手段あるを、只力をもて克んとせば、又幻術に中られて、反て不覺を取るのみならず、多く御方を喪ふべし。慿れば先度の吉例に遵ひまつり、權且寛の一字を守りて、遠圍にして日を彌らば、賊徒必戰米竭ん、その時急に攻伐たば、一擧して素藤を、虜にせん事疑ひなし。但生口の賊徒二名を、奪略られしそが上に、攻伐遲延に及びなば、怠慢のおん咎、影護く候へば、おん旨を請まつりて、以後の進退仕るべく候。因て注進の狀件の如し。四月日、晋上、杉倉木曾介殿、堀內藏人殿、東六郎殿、田稅力助逸友、小森但一郎高宗、荒川兵庫助淸澄　各名の下に花押あり

とありければ、義成屢點頭て、三家老們に宣ふやう、老輩いかに思ふらん。淸澄が主意甚佳。寛の一字を守る事は、先例既に上吉也。姑且賊の妖氣を避て、他が戰米竭たる折に、伐たば必ず功あるべし。なれども又その間に、妖賊手段を旋らして、御方を惱す事あるべき歟、是

樹を覆し、天地晦冥になりしかば、御方は是に辟易して、雜兵は多く撃れ、金瘡兒は、滿呂復五郎們、七八十名に及びたる、そが中に浦安牛助友勝は、落馬して脚を傷りし故に、敵の虜になりしといふ、條を下まで讀しも果ず、義成主は、駭き嘆じて、嗚乎危哉々々。果して是素藤を、幇助ぬる惡物あり。曩に貞行們を魅りて、中途より返せしも、地道を穿て、諏訪の巨樹の、樾より伏兵を出せしも、その女僧が所行也けん。然而その次は甚麼ぞや。と問せ給へば又讀む二箇條。然れども清澄高宗、逸友們は薄痍も負はず、速に殘兵を、聚合て羽賀へ退きしに、當晩礪時顚八業當、奥利狼之介出高、と喚做たる兩個の賊徒が、五百個許の兵を領て、羽賀の屯を襲ひし折、清澄早くその機を猜して、伏勢をもてうち破り、賊徒の頭人、出高業當を生拘て、次の日屯を殿臺へ移せしよしを、詳に載しか、ば義成主含笑て、適愛たく計りにけり。然では責の敗軍の、恥を早くも雪めたり。而その次は。と第三箇條を、亦復讀して听給ふに、素藤們が機變の事、いぬる夜本陣に生拘たる、賊徒礪時顚八業當、奥利狼之介出高と、御方の俘囚、登桐山八良于、浦安牛助友勝と、換まく欲する素藤が、情願のよし聞えて、今朝舘山の賊寨より、素藤兩個の使价をもて、只管に乞ふにより、なほ又再四詮議の上、相違あるべうもあらざれば、則素藤が所望を許し、先良于と友勝を受拿て、しかして後に、

せば、出來介は欣然と、承歡びて、且いふやう、嚮には在下們が志願のごとく、今番の役に立られしに、復五郎は、初度の戰ひに、痛痍を負て、いまだ得起ず。身も亦させる功なきを、慨しく思ひ候ひしに、恁る火速のおん使を、承り候は、面目何事かこれに優すべき。今宵終夜騎走らして、明日は未明に大城へ、著到仕り候はん。この義御心安かるべし。と答て驪て往橘と倶に、遽しく退きて、身裝しつ、書篋を、項に掛け、二騎相竝て、稻村を投ていそぎけり。この時晷は斜きて、下晡なりければ、出來介佳橘は通夜、連りに馬を走らしつゝ、その詰旦いと早く、稻村の城に來にければ、酒正門の番卒に、上總なる殿臺の陣中より、荒川清澄がまゐらせたる、脚力也、といひ知らして、二疋の馬を茲に駐めて、東六郎辰相が、宿所に赴き、對面を請ふて、舘山攻の勝敗恁々。と來意を告て、淸澄們が、連署の書翰を遞與しけり。是により辰相は、出來介佳橘を勞ひて、そが儘宿所に留置き、件の書翰を、書篋に、藏たる儘作若黨に、持して君所へ出仕したるに、姑且して杉倉氏元、堀內貞行も出仕せしかば、隨即件のよしを告て、倶に披露に及びし折、義成主は、その書翰を、近習に讀して听給ふに、第一箇條は、初淸澄們が、舘山へ推寄て、素藤と戰ふて、躬方は勝に乘たる折、素藤が陣中に、妙椿と喚做たる、一個の怪異女僧ありて、はやくも行ふ幻術に、魔風猛可に吹暴れて、沙を颺げ

無邊無量の敵と知りつゝ、性起らば、他們が圏套に、又乗せらるゝ事もあらん。先稲村へ注進して、上の賢慮を伺はゞ、幸ひにして後難を、免るゝよすがにならん。世に大將たるものの、軍陣に莅みては、天子の命だも俟ずといふ、唐山の制度はあれども、そも亦時宜に依るべき也。進退賞罰、心を師として、己が隨意做さん事は、臣たる者の本意にあらず。この義に儘じ給はずや。と喞語がましく諭すにぞ、逸友も高宗も、當然る理に勢ひ折けて、沈吟ずること半晌許。憶ず倶に太息を吻て、現貴老の御主意、その上や候べき。はやく是等の顚末を、稲村へ報奉りて、おん下知に依るこそよけれ。快々脚力をまゐらせ給へ。と異口同意くいそがせば、清澄いよ〳〵心決して、高宗に筆を執らしつ、這回闘戰の始より、今日妖賊の機變の事まで、幾箇條にか識さしたる、事遺もなかりしかば、清澄は遽しく、安西出來介景次と、その身の年來使ひぬる、詰茂佳橘といふ一箇の若黨を召よせて、稲村へまゐるべき、火急の脚力を吩咐て、書翰を出來介に遞與していふやう。この書は、東六郎の宿所へもてゆきて、おん旨を伺ふべし。我汝達に好馬を借さん。佳橘も倶に騎馬たるべし。努々遲緩すべからず。と嚴に課すれば、高宗逸友も、亦心を屬けて、舘山なる那女僧が、幻術は料りがたかり。曩に藏人武者助すら、欺れたる事あれば、路次には倶に小心して、馬を間斷なく走らすべし。快々立ね。といそが

友們と倶に、奥へいなんとせし程に、人の駭き叫ぶ聲、平ならず聞えしかば、他は奈何。とばかりに、迭に面を指しつゝ、倶に訝しく思ひたり。浩處に、醫師と両三個の雜兵が、奥より慌しく出て來つ、清澄們にうち對ひて、敵の使价の倶して來たりし、登桐主浦安主に、目今湯液を薦んとして、謬て藥碗を、とり落しつゝ、那人達に、濺ぎかけ候ひしに、怪しむべし、件の兩個は、登桐ならず、友勝主にも候はず。變じて兩個の草偶兒に、なりてこそ候なれ。と報るに清澄、高宗逸友、驚き呆れて辨よしもなく、遽しく身を起して、齊一其首に行て見るに、果して兩個の草偶兒、臥し横たはりて蒲團の上にあり。原來良于友勝と見えたるは、此なりけり、と悟れども、悔て甲斐なき一期の不覺に、且恥且憤りて、眼を睜り手を叉き、尋思も似たり、三個が當惑、今さらせん術なかりけり。そが中に逸友は、恨に堪ず、聲高やかに、噫憎し、舘山の妖尼奴が、兩個の生口を奪略らんとて、幻術をもて恁までに、人の眼を瞞したり。遠くはゆかじ、使价の奴們、赶住めて、顚八と、狼之介を捉復さん。兵毎、馬を牽出さずや。と敦圉き暴く叫立れば、高宗も、共侶にとて、身を起さんとしてけるを、清澄急に推禁めて、小森田稅、さのみな惱りそ。かくの如き幻術をもて、人を欺く金剛禪們を、駿馬に乘て赶ふたりとも、いかにして及ぶべき。慭に手を出さば、いよ／＼胡盧にならんのみ。知力をもて征しがたかる、

て又高宗は、本陣へ赴きて、素藤が兩個の使价の、承諾しよしを清澄に、報て逸友と共侶に、舘山より良于友勝を、送り來ぬるや、と等程に、那城内には豫より、用意をしたりけん、約莫一時あまりを經て、又那沙雁太麻嘉六は、登桐山八良于と、浦安牛助友勝を、俵轎にうち乘して、舁してはやく來にければ、高宗隨即雜兵に出迎せ、案内の與に、その身も倶に立出て、本陣へ伴ひけり。登時荒川清澄は、逸友をもて、友勝と、良于を受拿らするに、他們は金瘡に惱る歟、然らずは獄舍に疲勞れたる歟。速には轎子より出難しを、軈て雜兵們が扶出しつゝ、二人の左右より手を挽て、緣頰へ推登するに、果敢々々しくはものも得いはず。清澄は是を見て、先良于と友勝を、奥の方なる、帷幕の陰へ遣して、雜兵に勦らせ、毉師を召て、他們が安危を尋れば、毉師は先良于友勝、兩個の脈を診ふて、金瘡は、一二子倶に愈たり。氣力に疲れあるのみ。といふによりて疑はず、卽便雜兵に下知しつゝ、生拘の賊徒、礪時顚八、奥利狼之介を、獄舍より索出さして、綁縛の索を解すれば、高宗逸友こゝろ得て、沙雁太麻嘉六に遞與す折、交易相違なきよしを、云云といひ知らすれば、沙雁太と麻嘉六は、歡びを舒、件の二人を、受とりつ伴ふて、外面へ退るとやがて、吊し來たる轎子へ、乘して伴の轎夫に、舁して卒とばかりに、飛が如くに走去りけり。姑且して清澄は、良于と友勝に、敵の虛實を問んとて、高宗逸

助あり、蘇生して今に在りといへども、歩行不便の人となりにき。然るを又友勝も、寇の俘となりしより、獄舍の艱苦さぞあらんを、恁る便宜に救れずは、忠戰義烈も、甲斐なきに似たり。又良于も忠義の本性、素より名ある士なるに、俱に鏖殺にせられん事は、君のおん爲にしかるべからず。なほ又賢慮を旋らし給へ。と憚る氣色もなく議しゝかば、高宗も亦いふやう、不佞が臆斷も、田稅生と異ならず。非除目今兩個の生口、顱八狼之助を交易して、返し遣し給ふとも、素藤誅伐せん折に、他們いかにして免るべき。只その天罰の至る所、速かると遲かるのみ。身方の勇士を喪はゞ、悔とも及びがたかるをや。と俱に意見を盡すにぞ、清澄然なり。と點頭て、しからば使价の兇黨に、箇樣々々に答給へ。疎忽の應對すべからず。といふに高宗こころ得て、退りて廳て沙雁太と、麻嘉六にうち對ひて、來意のよしを總大將に、具に傳へ候ひしに、敵身方の生口を、交易の事はしも、その例なきにあらねば、枉て所望に依べきなり。先良于と友勝を、本陣へ送り來しね。他們が命に恙もなくば、對面してその後に、業當出高の二名を選與すべし。この義倘相違あらば、交易破談に及んのみ。立かへりてこの趣を、蟇田に傳達候へかし。といはれて沙雁太麻嘉六は、こゝろ得貌に額を衝て、御返答承りぬ。然らば兩個の生口兒を、俱して亦復まゐるべし。何でふ相違あるべきや。と答て出てゆきにけり。恁

二人は、密議を稟て、伴當才に四五名を、倶して件の屯に赴き、先小森但一郎高宗が陣所に到て、恁々と名告しかば、高宗は訝りながら、みづから出て對面しけり。登時沙雁太がいふやう、在下們は、蟇田權頭が使价にて、野幕沙雁太、仙駝麻嘉六と喚るゝ者なり。鬪戰の沿習にて、互に勝負ありといへども、俘にせられ虜にしたるは、倶に是二人のみ。こゝをもて、舘山の獄舍に囚置く、登桐浦安兩個をもて、いぬる日より當陣に、捕籠置るゝ、礪時願八業當と、奥利狼之介出高に換まく欲す。こは素藤が情願也。許容あらば、登桐生と、浦安生を送り返すべし。この義をもて荒川主へ、まうし給へ。とぞ舒たりける。高宗これをうち听て、雜兵們に兩個の使者を、衞らしつ、退きて、遽しく本陣へ、ゆきて件の趣を、清澄に告しかば、清澄听つゝ眉を顰めて、自他の生口を交易の事、和漢に例なきにあらねど、素藤が詐欺多き、輕々しく許容すべからず。先逸友を招き寄せて、衆議の上にて應をせんとて、雜兵を走らして、田稅逸友を招しつ、件のよしを恁々と、聞え知して意見を問ひしに、姑且して、逸友がいふやう、現素藤は、詐欺多かり。なれども先良于と、友勝を受拿て、爾後に業當と、出高を遞與し給はゞ、一切後悔なかるべし。貴老の知せ給ふごとく、牛助友勝は、浦安兵馬乘勝が弟也。兵馬は、曩に御曹司に倶し奉り、當所諏訪の社頭にて、賊徒の火銃に擊れしに、幸ひに神の資

んといはせば、淸澄歡びて交易すべし。この義はいかに。と說誇れば、大家ひとしく感服して、そは特更に奇妙なる、おん計ひにこそ候へ。件の二人を交易して、後安くなりての後、亦復尼公の妙術を、借りて淸澄を破るときは、良于まれ、友勝まれ、二度虜にすべき事、嚢中の東西を探るより易からん。先その使者を擇ませ給へ。といふに素藤頷きて、使价を擇むはかたくもあらねど、まだ妙椿に、この義を談ぜず。後悔なからん爲なれば、尼姑の意見を听くにはしかじ。一霎時等ね。と推留めつゝ、そが儘奥へ赴きて、然而妙椿に、恁々と、件の計議を解示せば、妙椿听つゝ微笑て、その計略りきにあらねど、甲と乙とをとり替ては、一亘りにて損益なきを、妙也とは倘いひがたかり。良于をも友勝をも、返さで這方の二人をのみ、とり復す手段あり。そは咱儕が法術もて、敵の眼睛を瞞さん、箇樣々々に相計ひ給へ。と耳を引よせて囁けば、素藤滿面うち笑れて、感ずること大かたならず。开は又我籌策の、上をゆくこと遙にして、大奇精妙、至極の手段、おん身ならで、誰かよくせん。その期を愆ち給ふな。と示し合しつ遽しく、故の坐席に出て來て、然而盆作本膳們に、妙椿にいはれたる、奇術の手段を囁き示せば、大家いよ〳〵歡び感じて、快々計らせ給ひね。と又他事もなくいそがしけり。恁而蟇田素藤は、野幕沙雁太、仙駝廠嘉六に機密を示して、殿臺なる、荒川淸澄が、陣屋へとて遣しければ、件の

衆議竟に一決せず。この故に素藤は、細作兒を遣して、敵の虚實を覘せんとて、黄昏時候より出し遣りしに、その者夜中にかへり來て、清澄は、今朝未明に、殿臺へ屯を移しぬ。羽賀には敵一人も候はず。と報しかば、素藤いよ〳〵後悔して、我もしその義をはやく知らば、そが路に埋兵して、清澄を撃捕るべきに、縱其首までに及ばずとも、他が戰米は、幾十疋の、馬に駄して運しけんを、奪略ざりし悔しさよ。然るにても、願八と狼之介は、殺されたる歟、甚麼ぞや。と問へば答て、然候。件の二人は、そが儘に、殿臺へ將てゆかれしを、見たる者ありと聞にき。恁れば緊しく禁獄せられて、那屯にこそ候はめ。といふに素藤慰められて、細作兒を退かしつゝ、その終夜枕を碎きて、思ひ得たる事ありければ、明るを遲し、と盆作本膳、碗九郎們を召聚て、清澄は、昨日未明に、屯を殿臺へ移せしと聞えし事、竝に願八狼之介は、今なほ命恙なくて、獄舍の中に在りといふ、細作兒の注進を、解示して又いふやう、我思ふに、願八は、我股肱の老黨、狼之介も亦、智あり勇ある後生なるに、他們を敵に保質に、略られては後の戰ひに、影護き所あり。況首を刎られもせば、我隻腕を失ふに異ならず。因て他們を救援るべき、我に一箇の籌策あり。今日殿臺へ軍使を遣して、嚮に我虜にして、今も獄舍に繫置く、登桐山八良于と、又いぬる日生拘たる、浦安牛助友勝をもて、願八狼之介に換

の明たれば、清澄は、諸隊の士卒に、腰纏戰飯を開して、高宗逸友と共侶に、生口顚八狼之介を、雜兵に牽しつゝ、屯を殿臺へ移しけり。その手配神速なれば、舘山の賊徒は、いまだ是を知らず。然而那里へ到りては、山林の竹木と、藤蔓を伐拿らして、はやく陣屋を組建るに、士卒僉老實にて、使るゝこと、手足のごとく、只一日に成就して、長陣の准備等閑ならず。昔這地方は、上總介平廣常が、舘ありし迹なれば、殿臺と喚做たる、實に究竟の要害也。爾程に清澄は、修造を高宗に任用し、又舘山の兇黨が、推寄來ることあらん歟とて、逸友に五百個の、兵を授けて守らしつ、その身は作當二三十名を將て、當所に故りたる三所の神社、正八幡宮宇佐の神、諏訪明神へ參詣して、逆賊誅伏、當陣無異の、神助を默禱したりける。然ば又この朝、舘山の城内には、昨夜顚八狼之介們に從ひて、羽賀へ夜擊に赴きたる雜兵が、幾名か脫れ來て、躬方敗軍の事の顚末、狼之介も、顚八も、果敢なく俘にせられたる、爲體を報しかば、素藤太く驚きて、盆作本膳、碗九郎、沙雁太、疏嘉六們を召聚て、事の趣を言示し、ふたゝび羽賀へ推寄て、いかで顚八狼之介們を、拯拿ん、と敦圉けども、大家倶に驚き呆れて、早に應をする擬勢もなし。そが中に本膳は、最愛の獨子が、敵の虜になりたるよしを、聞くにも堪ず胸潰れて、恨の淚やる方なく、單只管素藤に、薦めて又清澄を、攻擊んとて請ひしかど、

つ高股を、刺れて苦と叫びもあへず、馬より撻と墜しかば、高宗の隊兵們、走り蒐りつ、狼之介を、起しも立ず推伏せて、索を掛てぞ牽立ける。爾程に、礪時願八は、狼之介が後方より、賊徒を找めて、清澄を、襲ひ撃んとせし程に、敵にも准備ありしとおぼしく、陣鼓の音烈しく聞えて、躬方は多く撃るべき、勢ひ胸に應しかば、心駭き胆落て、原來敵に備あり。慭に出高を、拯んとせば我も亦、捕圍れて、難義に及ん。先この地方を退きて、又せん術もあるべけれ、と尋思をしつゝ、乘たる馬の、鑣面を推遶らして、退き去んとせし程に、思ひがけなく後方より、清澄が一隊の伏兵、忽然と起り立て、その勢約莫五六百名、四下の草木に火を放て、咄と揚たる鬨の聲に、願八いよ〳〵駭怕れて、躬方の撃るゝを見かへらず、路を索て逃んとせしに、清澄はやく士卒を找めて、他撃留よ。と下知すれば、性急雄の壯武者們、各先を爭ふて、殺靡けたる刀尖は、只是芋の葉を刈る似く、賊徒の首を喪ふ者、幾名といふ數を知らず。そが中に願八は、敵と猛火に路を堰れて、脱るゝ隙を得ざりしに、剩田税逸友が、逃走る賊徒を赶て、去向の方より來にければ、願八は怺難て、滾ぶが像く馬より下りて、逸友が馬前に、跪き命を乞ふて、復降參をしたりしかば、逸友は隊兵に、願八を結梱らして、然而清澄に報しかば、清澄は、逸友高宗の、功を賞て共侶に、なほも賊徒を擊果したる、その首三百餘級を得たり。恬りし程に天

馬には鑣子を掛たれば、鐵轡の音もなく、人には枚を銜して、ものいふことを許さず、戰號を定め、進退を示し合し、篝炬を提さして、連りに路をいそぎしかば、丑三刻の比及に、清澄が屯せる、羽賀の陣所に來にければ、顚八は二百個の、賊徒を領て、後方に續き、狼之介は隊兵三百名を從へて、清澄が本陣へ、はやくも潜び近づきつゝ、咄と吶て、塢槌もて、はや陣門を打破らして、眞先に馬を乘入れしに、內には一個の敵もあらず。こは什麽、と訝りて、原來敵は臆病鬼に、誘引れて安房へ退きし歟。しからずば、躬方の夜擊を、猜して備を儲けしならん。衆皆出よ。と喚りて、そが儘馬を乘逡巡らして、退き去んとせし程に、左右に繁き茂林の內に、陣鼓をうち鳴らして、顯れ出る兩個の騎馬武者、士卒を拔る聲も等しく、再叛の賊、那里へ逃るや、恁あらんと思ひしかば、甲夜より等しを知ざる歟。小森高宗玆に在り、田税逸友こゝにあり。刃を受よ。と罵りて、鎗を素扱て走り蒐れる、兩隊の精兵四五百名亂れ立たる兇黨を、推包て攻擊つ大刀風、當るべくもあらざれば、賊徒はいよ／＼慌譟て、一扛も支得ず、路を索て逃んとしつゝ、擊るゝ者ぞ多かりける。そが中に狼之介は、後陣の幇助を心に憑みて、姑且挑戰ひつゝ、左右に近づく敵の雜兵を、鎗もて刺伏せ敲き倒して、稍退んとせし程に、憶ず小森高宗に、去向の路を塞れて、一雲時雌雄を爭ひしに、克ふべくもあらざれば、逃んとしつ

べからず。願ふは今宵小臣に、逞兵三百名を貸給へ。眞夜半時候に推寄せて、清澄を撃捕るべし。といふを素藤うち听て、爾が意見、理なきにあらねど、清澄を凡庸なる、敵手と思はゞ失あらん。已ね〳〵。と制るを、出高听かず、眼を睜りて、御掟に悖るは無禮なれども、小臣は遊倅にて、是までさせる御用なければ、人に知らるゝ功名を得ざりき。然ばとて、做す事もなく、倘この折を喪ひなば、臍を噬むとも及んや。枉て饒させ給ひね。と只管乞ふて已ざりければ、願八他を勇悍として、素藤に薦るやう、狼之介が夜撃の軍議は、寔にその圖に當りたり。尼公の術を借らずとも、功あらんこと疑ひなし。心もとなく思ひ給はゞ、微臣も亦出高を、帮助て功を奏すべし。快々出し遣らせ給へ。といふに素藤點頭で、願八、和殿が倶に行かば我何をか貽むべき。然らば兵卒五百名を授けん。狼之介は、三百名を領て先に找み、願八は、二百名を從へて、その鬪戰を援けなば、必失なかるべし。なほ小心こそ緊要なれ。准備をせよ。といそがせば、狼之介は忻然と、歡びを舒席を辭して、願八と共侶に、退りて人馬を汰へける。然ばこの條の趣を、側聞せし本膳は、その子を知あり勇あり、と思ふ歡に堪ざりけん、人に讓らで盃を、引受々々喫しかば、酔て曉るも知ざりけり。閒話休題。却說奥利狼之介は、礪時願八と共侶に、五百個の隊兵を領て、この夜子の左側に、悄々地に舘山の城を出けるが、

て、兇徒を纏めて徐々と、舘山の城にかへり入りしが、約莫この日の戰ひに、撃捕りしは敵の雜兵のみ。但清澄が先鋒の頭人、浦安牛助友勝と喚做す者を、生拘たりと聞えしかば、素藤斜ならず歡びて、然ば先丌奴をもて、軍神を祭りてん。快牽出して斫るべしとて、願八們に吩咐るを、妙椿聞て、禁めていふやう、今友勝を砍し給ふとも、總大將清澄は、なほ一千餘の殘兵を領て、羽賀の屯に在るなれば、躬方の軍威を增すにもあらず。慿れば又友勝をも、獄に生拘り給ひたる、登桐山八良于と、等しく獄舍に籠置て、又後の戰ひに、清澄を首として、名ある寄隊の奴們を、鏖にしたらん折、件の友勝良于を、斫らして倶に軍門に、梟竝べ給ひなば、獄におん身主從が、遺なく犬江親兵衞に、牽れて陣門に曝されたる、恥を雪るに足りぬべし。這義を思ひ給はずや。と詞急迫しく諭すにぞ、素藤屢點頭て、然ばその友勝をも、緊しく獄舍に繋置きね。と下知して權且他を斫らせず。先勝軍の壽祝せんとて、その曛昏より廣書院へ、有功の兇徒を聚へて、盃を取らしつゝ、酒半酣に及ぶ程に、奥利本膳が獨子なる、奥利狼之介出高は、席末より膝を找めて、素藤に對ひていふやう、弱冠の憚氣もなく、諸老臣をうち踰て、軍議に及ぶは烏滸に似たれど、料るに今日の戰ひに、寄隊は痛くうち負て、羽賀の屯に退きたれば、金瘡兒も多く候はん。然ば那身に痍なきも、人馬倶に疲勞果て、事の役には達

澄高宗逸友、遺恨に堪ねば愀然と、倶に歎息したりけり。姑且して高宗は、清澄に對ひていふやう、いと憚りなる助言に似たれど、久しくこの地に屯せん事、進退共に不便の義あり。何となれば、這地方は、なほ敵の城へ遠かり。且里の名を羽賀といへり。羽賀は剝るゝといふに通ひて、盜泉勝母の忌べきに似たり。尤愚按に候へども、殿臺は、その地高くて、敵城へ遠からず。只その進退に、便り宜しきのみならず、その名も亦相應しくて、國主の軍兵屯せば、新に名づけし如くなるべし。願ふは宿老殿臺へ、御陣を移し給へかし。といふを清澄うち聞て、开はよく心つかれたり。人を愚にする幻術也とも、神の威靈に勝ことなし。明日は那里へ陣を移して、兩所八幡大神宮、竝に諏訪明神へ、詣て妖賊降伏の、冥助を祈り奉らん。就て我又思ふよしあり、力助も听給へ。素藤今日の戰ひに、十二分の捷利を得たれば、いよ〳〵進む心あらん。然ば我敗軍の、疲勞を料る兇黨が、今宵夜擊に推寄來つべし。日暮なば細作をもて、城の動靜を覘して、然る事ありと知るならば、伏勢をもて擊果さん。那妙椿がその隊にありとも、思ひの隨に引著けて、急に起て拉がば、術を行ふ遑あらで、魔風の孽なかるべし。その隊配は、箇樣々々、恁々也。と尋き示せば、高宗逸友歡び感じて、その議寔に圖に當れり。然ば准備をすべけれとて、先細作をぞ遣しける。爾程に、蟇田素藤は、走る寄隊を追捨

を走らし風を避て、退くこと七八町、僅に猛風歇にければ、後れし士卒を等程に、天晴れて、日光洞なり。この時小森高宗も、件の魔風に士卒亂れて、四零八落になりしかば、僅に七八個の雜兵を從へて、免れて這里に聚合にけり。憩りし程に、風に撲れ眼を腫して、命を免れたる躬方の士卒、旌旗馬標をはやく見て、這里那里より走り來つ、一千有餘になりしかば、清澄は玆までも、敵の長赶することあらば、又一戰すべけれとて、備を立て等たりけるに、賊徒は既に城内に、かへり入りぬ、と聞えしかば、清澄も亦羽賀へ退きて、躬方の金瘡兒と、戰歿の士卒を數るに、撃れたる者二百餘名、金瘡兒は、滿呂復五郎を首として、雜兵八十餘名也。亓が中に、浦安牛助友勝のみ、日の暮るゝまでかへり來ず、存亡量りがたければ、清澄頻りに嗟嘆して、我賊徒征伐の、おん使を奉りて、戰ひの開場に、妖尼の魔風に折かれて、多く士卒を撃したる、剰名ある一勇士、浦安牛助を亡ひては、兵馬の歎き想像られて、左にも右にも面伏也。友勝が存亡を、知れる者はあらずやとて、陣中隈なく問せしに、一個の雜兵がいふやう、浦安主は、風の爲に、乘たる馬の倒れにけん、憶はず足を傷りたりとて、左右なくは身を起し難しを、賊兵居多走來て、搦捕て將て去にき。その折に小可も、亦那風に吹倒されて、叢の中に在り、幸ひにして敵の覘に、かゝらざりけん虎口を免れて、御陣へかへることを得たり。と報るに清




妙椿
清澄を破

を撃捕りね。と戰麾連りにうち揮れば、咄と揚たる鬨の聲と、共に前後を爭ひ競ふ、礪時願八、平田張猛作、躬方を拨めて擊んとす。寄隊はこれに毫も噪がず、開き合せし逸友友勝、馬上に鎗を打振々々、縱横無尋に刺崩せば、得たりと拨む、その隊の軍兵、射れども擊ども、怯まず去らで、最も烈しく攻立れば、淸澄こゝぞ、と麾うち振て、軍は既に克たるぞ。この圖を拔かで素藤を、擊捕ずや。と喚りたる、聲勇しき修羅鬪場。寄隊は奮勇十倍して、克に乘たる勢ひに、賊徒は怺へず浮脚に、なりつゝ亂れ噪ぎたり。當下妙椿、後陣に在り、躬方は既に負色に、なりたるを見て、遽しく、懷より甕襲の玉を、拿出し額に當て、一霎時呪文を唱れば、怪むべし、忽然と、結陰る天の起住ひ、疾風颯と吹き暴れて、砂を飛し樹を倒す、勢ひ面を向べからず、世は常闇となるまでに、黑白を判べきよしなければ、然しも勇みし寄隊の軍兵、人馬齊一吹倒されて、其身々々の大刀眉尖刀に、劈れ深瘡を負て、矢庭に死するも多かりければ、豫准備の糞汁大蒜、獸の鮮血ありといへども、濺ぎ掛べき標識なく、脚下暗きに度を失ふ者、その龍骨車に足を踏入れ、うち覆し轉輾びて、汚穢れし物を頭より、浴みて噎も尠からず。この故に後陣なる、高宗も、兵を、拨めて躬方を拯ふに由なく、約莫剛きも猛からぬも、僉總崩れに敗走りて、雜兵の擊るゝ者、幾名といふ涯りも知られず。淸澄は辛じて、逸友們と共侶に、馬

子甲身に、同繩の胡瓜盛を肩脊に戴き、絳と黄と、白の三色を、繩目の如く縫做したる胞羅披て、二尺五六寸なる大刀を佩き、素柘の弓に、闕弦掛たるを、左手に握持ち、連錢驄の、太く逞しき馬に、韓鞍措て、優にうち乘り、右手には三年筍の節短なる、磨白の鞭を執て、前面を佗と見亘したる、右に田税逸友あり、左に浦安友勝あり。中黒の白旗、花菊の馬標、齊々整々として、隊伍正しく、騎馬武者步兵、次第を衞りて、魚鱗の像く備たり。登時荒川清澄は、持たる鞭もて、素藤を、差招き聲高やかに、やをれ再叛の賊、正可に听け。恩を稟て恩を思はず、報ふに寇をもてする者は、心禽獸にも劣りたり。爾は五逆の罪人にて、既に虜になりたるを、我君仁慈の御心篤く、犬江親兵衞が請まうせしまに〱、赦すまじき首を接して、遠く追放ち給ひしに、幾程もなくかへり來て、妖術をもて舊城に、ふたゝび據らんと欲するとも、大兵既にうち向へば、今番は免るゝ所なし。頭鎧を脱て、綁縛の、索を受よ。と責罵れば、素藤呵々とうち笑ひて、暗きたりな、瘦老黨。夷灊は素是我封疆。館山の城も亦、里見を憑て得たるにあらず。然るを義成時運に乘して、人を侮る非義多かり。この故に我獨立の、武運を專試しに、時早かりけん、犬江奴に、一旦俘にせられしかども、その罪にあらざれば、義成我を害し得ず。こゝをもて我又來て、我城郭を拿復せしを、恩に叛くといふよしあらんや。兵毎那奴

も亦細作兒をもて、敵の多少を探らするに、國守は病著に臥て、稲村の城に在り、老黨荒川兵庫助清澄を大將として、その勢一千五百餘騎、羽賀の曠野に屯して、明日快城を攻んとすといふ、注進孟浪ならざりしを、素藤听つゝ冷笑て、那犬江奴が在らずなりては、義成が又推寄するとも、鏖にすべかるに、況荒川清澄なンどは、我敵手に足る者ならず。先や明日逆寄せして、這奴們に胆を潰させん。兵毎明日の朝駈の、准備をせよ。と下知しつゝ、譟ぐ氣色はなかりけり。却說その次の朝、清澄は羽賀よりして、士卒を勸めて、館山の、城稍近く寄來る程に、素藤も亦一千有餘の、賊兵を從へて、中途に敵を逆へたり。兩軍迭に近づく程に、と見れば賊將素藤は、重青の錦の鐵鎧戰袍に、鍪像打たる龍頭の、五頓項鐵盔を豬頸に戴き、紫金裝の大刀に、豹の皮の尻室掛て、二十四挿たる鷲羽の征箭を、筈高に駝做したる、左手に、重籐の弓の握太なるを、腋局に挟著て、驪馬にぞ乘たりける。右に礪時願八あり、左に平田張盆作あり。この宅、腹心虎狼の賊兵、稲麻の似く立竝びて、縹緋に白く、月中の蝦蟇を染出したる、旌旗三四旒、朝風に吹靡したる、後方には妖尼妙椿、白綸子の夾衣に、純黑の錦の袈裟を掛て、一口の寶劍を、背に斜に駝搭して、鐵驄馬に跨たるが、故意武具を著けざりけり。清澄適にこれを見て、怺へず馬を勸めたる、是甚麼なる打扮ぞ。但見る、清澄この日の戰裝は、綠線縧の好楽

に、一千五百の軍兵を引率して、その曉天に、稲村の、城を出て上總なる、舘山を望て進發す。然ば安西出來介景次、滿呂復五郎重時も、雜兵にうち交りて、倶に先隊の中に在り。最も日永き時候なるに、淸澄連りにいそぎしかば、十餘里の路の程を、只一日に推寄來て、この夜は羽賀に屯しつ、後れていまだ聚合ざる、後陣の士卒を等程に、先細作兒をもて、舘山の城の虛實を探らせしに、籠城の賊兵は、一千四五百名あるべし。そが中に、千代丸豐俊、武田信隆の殘兵五六百名、野幕沙雁太、仙駝廐嘉六と喚做たるを頭人として、僉素藤が隊に屬きたり。又妙椿と喚做す女僧あり、八百比丘尼の綽號を偸みて、年齡は八百歲に、なりぬといへども、面影は、美しうして尚少かり。這女僧、素より幻術ありて、素藤を幇助るにより、天助尼公と尊稱せられて、賊中の軍師たり。昔善蘇々利の村人們が、風聲都てかくの如しといふ、崖略はやく聞えしかば、淸澄は、准備をしたる、糞汁大蒜獸の血を、多く龍骨車に分ち湛さして、賊兵幻術ありと見ば、速に射ぎ掛て、破るべしとぞ下知したる。這夜は人馬の脚を休めて、その詰旦辰の左側に、舘山の城へ推寄するに、この時後れし軍兵も、皆悉後陣に在り。一千五百の兵を三隊に分ちて、田税逸友、浦安友勝を先鋒として、小森高宗を後陣と定め、淸澄は中軍に將として、隊伍を亂さず拔みけり。甫程に、舘山の城内には、寄隊近づきぬと聞えしかば、素藤

聞え知らするに、南彌六望を失ひて、堪ずや單找み出て、又清澄に對ひていふやう、御諚を推辭奉るは、罪得がましく候へども、我們、守の御恩を稟しを、寸功もて報ひまつらん、と思ふは一致の志のみ。小可一個異なるに候はず。縱這身は町人でも、今戰國の貴賤を思ふに、武門名家の子孫まれ、家衰へて、民間に、降る者いと多かり。又莊客市人にても、志氣ある者は、竟にその身の掙きにて、武士に做りて家を興すも、尠からず候に、小可をのみ町人也とて、願ひを袪け給ふ事、然りとては情なし。この義をなほ幾回も、聞えあげさせ給ひね。と怨じて只管庶幾へば、清澄頭をうち掉て、志は然ることながら、三人を都て軍役に、從はしなば、躬方の士卒に、疑ふ者あるべしと、思食たる賢慮なるに、強て願ふは不敬也。汝は別に用ひさせ給ふ事もあらんかし。姑且思ひ住るべし。と諭せば出來介復五郎も、倶に南彌六を慰めて、云云といひけるを、南彌六听かず、眼を睜りて、各こそ情願遂て、我をば何とも思はざるらめ。非如這身は町人でも、昔は人に知られたる、洲崎の無垢三が外孫なるに、今この時を失ひては、何をよすがに外祖父の汚名を雪むべき。無益の餘命を貪りて、慭に物を思んより、我只死ん。と敦圉きしを、なほも諌めつ推立して、倶して外面へ出にけり。爾程に、荒川兵庫助清澄は、人馬はやくも整ひて、出陣の暇を賜り、小森高宗浦安友勝、田稅逸友們と共侶

糞汁大蒜、獸の鮮血、汚穢れし物を灑ぎ掛るに、しくことなし、と漢籍に見えたり。嚮には我その准備をしたれど、賊徒を征伐しぬる折、怪しと思ふ事はなかりき。然りとて這回准備なくば、不覺を取る事ありもやせん。豫其頭に用心して、速に進發せよ。時日を過すべからず。といそがし給ふ征伐の、軍議はやくも決著して、皆言承をしたりける。开が中に清澄は、單面目身にあまりて、隨卽軍兵催促の、御敎書を賜りつ、退りて人馬を整るに、武備怠慢なき家風になれば、士卒立地にうち揃ひて、明日出陣と聞えたり。登時荒磯南彌六は、安西出來介、滿呂復五郎と共侶に、荒川兵庫助清澄が隊に就て、這回素藤征伐の、軍陣に從ひ行んとて、只管に請ひ稟しゝを、清澄隨卽聞えあげしに、義成主宣ふやう、現他們は、再生の、恩を思ふて軍役に、從んと願ふ事、そのよしなきにあらねども、南彌六は武士にあらず、但その俠氣あるのみにて、原是上總の町人ならずや。然るを出來介復五郎們と、倶に今番の軍役に、從んと欲するは、事を好むに似て、相應しからず。且他們三名は、既に舊惡を洗除して、今良善の人と做るとも、始を推せば、素藤が、腹心の間者也。开を三人倶に領てゆかば、朔方の士卒疑ひて、快らず思ふ事あらん。恁れば出來介復五郎は、軍役に從せよ。南彌六はなほ城内に、留置くこそよかめれ。と仰示させ給ひしかば、清澄聽て退り出て、則件の三人に、御諚恁々と

素藤幻術ありといふとも、邪は正に克ことなし。この時倘命を惜て、他人に譲りなば、そは祿を偸める也。臣們館山に推寄て、賊徒を夷げ候はん。賢慮をな悩し給ひそ。といへば義成主頭を掉て、否汝們は家宰也。政事を任する者なるに、願へばとても推並て、四個は討手に遣しがたし。木曾介は智勇あれども、この中の極老にて、桑楡の暮景に及びたり。縦ゆかまく欲りするも、軍陣に莅むべからず。又藏人と六郎は、既に先度の軍勢あり。兵庫助は甚麽ぞや。と問れて清澄忻然と、膝を找めて稟すやう、微臣不能を見かへらで、重任を承まつること、年來になるものから、いまださせる軍功なし。願ふは素藤征伐の、おん使を奉りて、斧鉞を加え候はん。この義を許させ給へかし。といへば義成主點頭て、汝は思慮あり、武藝あり。且その性急ならで、功を貪るものにあらねば、這回素藤を討手には、究竟の大將なるべし。汝いよくゆかまく欲せば、我左右の三勇臣、田稅力助逸友、及小森但一郎高宗と、浦安牛助友勝をもて副として、一千五百の士卒を授ん。賊徒は素より妖術あり。嚮に館山の城内より、殿臺なる樟の櫨まで、地道を穿て、伏兵の、出沒自由なりけるに、幾日もあらでその地道の、あらずなりしは、いと奇也。這回も亦更闌て、館山の城を襲ふ折、賊徒の數千に見えしといふは、丌も亦他們が幻術にて、實に然ばかりの多人數を、從へたるにはあるべからず。那幻術を折くには、

召よせし歟、と世の人いはゞ武門の瑕瑾、最朽惜き事なるべし。因て再按ずるに、いぬる比素藤們を、誅戮せんとて、議せし折、單親兵衛が恩赦を請ふて、他復叛く事あらば、人手を借らず身單にて、誅伐すべし、といひし事あり。恁れば亦親兵衛も、那折既に素藤が、ふたゝび叛ん事を知れども、他們を懲して降しゝ折、僉立地に降參せば、恩赦を請ん、と諭せし言を、食ざらん與にして、則勇士の眞面目、信義を旨とすれば也。是によりて他を思ふに、今も親兵衛がこゝに在らば、必人手を借らずして、誅戮の術あるべきに、玆に在らぬを爭何はせん。他路にして、素藤が、復叛きしを聞知りて、立かへり來ば幸ひならん。今さら召も返しがたかる、情由は只今いへる如し。曩には我那叛賊を、征伐のいと緩やかなりしは、只義通の安危を思ふ、辰相們に諫られ、且神と親との教を悟りて、本意ならぬ日を過せしかども、這回は又素藤に、拿られたる保質なし。我身に脚の疾なくば、速にうち向ふて、賊徒を遺なく夷げて、民の塗炭を救ん事、かたくもあらぬ所行ぞかし。然ばとて病著の、瘥るを等て征伐遲礙せば、寇の英氣を頤ふて征しがたきに迫りやせん。誰か今我與に、憂を分ちて叛賊を、夷る者あるべしや。といひつゝ嗟嘆し給へば、慰め難たる四個の老黨、共侶に眉を顰て、御諚寔に理り也。臣們が短才淺智なる、然までには思はざりける、親兵衛が事はしも、今さらこゝに議すべからず。

はゞ、他が往方を渉獵得て、領て來ることも候はん。賢慮甚麽。と正首達て、齊一意衷を舒しかば、義成熟うち听給ひて、現六郎がいふごとく、嚮に素藤を追放せしは、單親兵衞が意見に依りたる、我柔弱の失也、と思ふ者も多かるべし。しかれども、初素藤は從事して、當家の與に功なきにあらず。但他が分に過ぎたる、婚姻の望稱ざりしを、執念深恨み、謀反して、剩義通を捉籠たりしに、女兒の神靈と、親兵衞が、奇しき功により、那逆賊を、我陣營に牽せし折、那儘はやく誅戮せば、後の患はあるべからず、と思ふは通てのこゝろなれども、倘素藤を最屓者あらば、悄々に必いはん。他は最初に、當家に功あり、望稟せし婚縁を、無心に許されざりしかば、恨みて野心を起したり。幵を憎しとて一人も漏さず、都て梟首し給ひしは、罰重くして恩薄かり、と異論を做すことなからずやは。那折この義を思ひしかば、洒親兵衞が諫る隨意、赦すまじき素藤們を、追放せしは我仁政、叛くまじき再生の、恩を思はで又叛きしは、則他が重罪也。こゝに至て是非邪正、判然として明亮ならずや。縱是非の間に惑ふて、他を最屓まくする者ありとも、今更にその觜を、容るゝ處なかるべし。又親兵衞が事はしも、我思ふよしあれば、自餘の犬士の所在を索ねて、遺なく倶してかへり來よとて、嚮に游歷の暇を取せしに、この義によりて召返さば、纔に一個の叛賊を、這回も征する事克はで、那神童を

第九輯　巻之十一

第百十二回　君命を稟て清澄再叛の賊を伐つ　機變を旋して素藤牛狼の囚を易ゆ

再說、義成主は、素藤を征伐の事に就て、氏元貞行、辰相清澄們の、四家老を召聚會て、事の意見を問給ふに、四家老は、先主君の、病著を問奉りて、然而評定に及びたる、當下東辰相がいふやう、憑稟さば益もなき、譫言に似て候へども、いぬる日犬江親兵衞が、素藤を捉へし折、はやく誅戮し給はゞ、後の患ひはなかるべきに、慦に親兵衞が、徧意を旨として、恩赦を稟薦めしかば、我君素より寛仁大度の、大御心をもて容させ給ひて、赦すまじき逆賊の、首を接し給ひたる、仁政反て仇となりて、事ふたゝび玆に及べり。はやく親兵衞を召かへして、討手に差向け給はずは、誰かよく他が幻術を、拉ぐ者候べき。といへば氏元、貞行、清澄、皆共侶に諾なひて、臣們が愚意も辰相と、異なることも候はず。竊に親兵衞が、御諚を稟て、起行にき、と聞えしより、然ばかり日數を歷たるにあらず、兩三日の程なるに、快部して追し給

我速に打向ふて、事、賊徒大勢也といへども、先度のごとく拿られたる、人質の憂ひもなし。那城を攻落し、素藤並に兇黨を、誅せんこと輙かるべきに、いかにせん、我身に昨今病著あれば、馬に乘らん事不便也。然ばとて我病著の、瘥るを等ならば、賊徒にいよ〳〵勢ひ馮て、民の塗炭に及びやせん。汝達各意見あらば、稟すべし。とぞ仰ける。這回いまだ盡さねども、楮數こゝに定限あり。是より下の話說は、又卷を更めて、第一百十二回に、解分るを聽ねかし。

處々より注進多く聞え、又舘山なる躬方の城兵の、撃漏されたるが二百許名、漸々に脱れ來て報るを听くに、昨夜蟇田素藤に、城を落されたる事の顚末、城の頭人、登桐山八良子は生拘られ、田税逸時、苫屋景能は、落亡たるか、戰歿せし歟、その存亡は詳ならず。賊徒は數千の大勢にて、郭內錐を立る地もなく、八面成敵なりしには似ず、いかにして繰入れたりけん、第二郭にて起り立つまで、音もせざれば、城の士卒は、夢にだもこれを知らず。是故に度を失ひて、落城に及びし事、又その甲夜より猛風起りて、兵庫を壞られたる、其頭の事まで具なる、衆口錯ざりしかば、君臣上下驚き呆れて、既に評議區々也。しかるに、義成主は昨夜より、猛可に脚疾あり。醫師們脈を胗ふて、こは脚氣にをはしますとて、隨即連りに湯藥を、薦めまゐらする折也ければ、評議の席へは出給はず。先上總の諸城主へ、御教書を遣すべしとて、その書に載られたる一箇條は、素藤再叛の聞えありといふとも、各は先度の如く、城を守りて動くべからず。且より征伐の使をもて、速に誅戮すべし。軍兵那里に在陣の間、倘戰米の所要あらば、その折下知に隨て、はやく本陣へ運送せられよ。と示させ給ふ。諸方へ急脚の使者を部して、この日齊一當城より、出し遣り給ひけり。恁て又義成主は、杉倉氏元、堀內貞行、東辰相、荒川淸澄と、倶に四個の老黨を、便室に招き寄せて、然而宣ふやう、今番素藤が再叛の

後堂を、掌らせて夫人の似く、夜は悄々地に枕を竝べて、その徒の思はんことを羞もせず。却顧八猛作、本膳碗九郎に、祿を多くし夥兵を授けて、重用始に彌倍しゝかば、件の四個は、素藤に、薦めて夷灊の豪民の、米錢を責拿るに、偖推辭む者あれば、立地に推寄せて、屋廬を破却し、資財を奪ふ、亂妨涯りなかりしかば、豪民們は驚き怕れ、僅に宅眷を携て、逃て他郷へ走るも多かり。然ば近郡騷動して、風聲今朝より囂しく、稻村へ注進の、人馬は櫛の齒を挽く像く、將門叛きて、東路に風噪ぎ、純友起りて、西海の、浪暴かりしも恁ありけん歟、と思ふ可の人心、阽まぬものなかりけり。單表、上總の殿臺なる、八幡諏訪三社の神主、梶野葉門們は、隔昨上總へ、還ることを許されて、昨日殿臺なる、宿所に歸著きたりけるに、この夜館山の城に凶變あり。間近かる事なれば、素藤が再叛きて、件の城を攻略りしといふ、風聲を、その詰旦、甲乙倶に聞知りて、駭くこと大かたならず。素藤又館山の、城に據りて猛威を振はゞ、嚮に我們が逸早く、國主へ注進したりしを、憎みて必害するならん。今番もはやく、稻村へ走りまゐりて、事の趣を注進すべく、且は那里に在留して、賊徒の害を免るべけれ。と示し合しつ共侶に、その旦開きに宿所を出て、勉て路次をいそぎしかば、這回も又稻村へ、注進の第一番にて、その忠告を賞せられ、則他們が願ひのまに〳〵、城内に留置るゝ程に、

志を改めなば、許して用ひ給へかし。又日は經ても歸伏せずは、その折誅戮せられんのみ。急ぐは短慮に侍らずや。といふに素藤怒を鎭めて、現他は然る者也。萬卒は得易くて、一將は極て獲がたし。兵每その良于を、牽立ゆきて、獄舍に繫ぎね。由斷して拿りな脫しそ。と言語急迫しき下知に從ふ、賊兵們は、承りぬ。と答て聽て良于の、索拿縮て牽立れども、良于はなほ罵り已まず、聲潤るゝまで哮りしを、本膳碗九以下の兇黨、聞くに得堪ず目を注して、いと〳〵憎しと呟きけり。恁て又素藤は、嚮に夷灊の軍民の、強顏く當りし報ひにとて、礪時顚八、平田張盆作に、居多の雜兵を從して、背善蘇々利の諸村へ遣し、嚮に出し遣られたる、兇黨の妻子はさら也、初城內に在りけると、在らざりしとに管らず、年少く顏美しきは、咸拿入れて、賊徒に這回の賞に取せ、又後堂にも召入れて、妙椿の使用とす。又只この事のみならず、豪民に催促して、戰粟軍要金を多く譴拿り、又十六歲より五十歲までなる、民一二三百名を、城內に驅入れて、都て軍役に使ひしかば、其勢六七百になりたるに、武田信隆、千代丸豐俊の殘黨の、尙近郡に潛居たるもの、素藤復起りぬ、と聞知りて、兩黨都て六百餘名、野幕砂雁太、仙駝礮嘉六と喚做す者を頭人として、僉館山の城に來て、素藤が隊に屬きしかば、素藤勢ひ壯になりて、敢國主を憚らず。隨即妙椿を軍師として、天助尼公と尊稱し、軍議の外は


逸時景能脫虎口
良干奮激去ち素藤を罵ふ



に、義成敢その義を思はず、慢に我を侮りしより、事遂に干戈に及びて、嚮に籠城したる折、那犬江親兵衛が、幻術に眩惑せられて、一旦俘になりしかど、我英雄を虐くせざる、天の惠神の助あり。この故に義成は、我を誅すること克はで、士卒と倶に追放ちにき。こゝをもて我又來て、亦我城に據れるのみ。纔に三十餘日の内に、はやく數千の士卒を聚合て、會稽の恥を雪めたる、武略に胆は潰れけん。志を傾けて、今より我に從はゞ、功あらん折重く用ひん。慿ても命は惜からずや。といはせも果ず良于は、眼を瞪らし聲ふり立て、やをれ、素藤過言也。爾は原是刑餘の山賊、曩に奸計を旋らして、小鞠谷の所領を奪りたる、その惡近曾露れしより、人僉これを知らざるはなし。況國主の恩に叛きて、御曹司を捕り奉り、虎狼蛇蝎の威を振ひしも、我神童犬江が爲に、若們兇黨數を盡して、既に俘にせられしを、犬江親兵衛が意見によりて、國主の仁慈、如來に等しく、首を續し給ひしに、なほも虎狼の心をもて、事今こゝに及ぶとも、國主の大軍うち向はゞ、朝日に霜の解る像く、誰か一人も漏さるべき。覺期をせよ。と勇士の奮激、思ひの隨に罵れば、素藤勃然と怒に得堪ず、其奴甚無禮也。先その舌を引拔きね。快々せよ。と敦圉きしを、妙椿聞て遽しく、屏風の背より走出て、素藤を諫るやう、良于が非禮過言、最憎むべきものといへども、怒に乘して殺すは要なし。姑且獄舎に繫して、

て、なほ一歩も退かざりしに、士卒は過半撃捕られて、良于虜になりしかば、怯れたるにあらねども、逸時佗と尋思をしつゝ、拯む景能を推禁めて、倶に退きて談ずるやう、やをれ、八郎、苫屋氏、目今戰歿したりとも、落城の不覺は償ひがたかり。所詮命を免れて、異日賊將素藤を、狙撃なば、倒に、忠臣勇士の名を揚やせん。和殿の意見甚麼ぞや。といふに景能點頭て、足下の主意、寔に理あり。事一旦の恥を忍ばで、狗死をしたらんは、大丈夫の本意にあらず。快落給へ、卒共們に。と慴語きつゝ、鎧を脱棄て、落る躬方の雜兵の、中に交りて後門より、出て往方も知らずなりけり。然ばこの夜の戰ひに、城内の士卒、都て五六百名、僅に命を免れしは、二百名に過ざるべし。この宅は賊徒に撃捕られたる、血は流れて盾を流し、屍は積れて累々たり。恁而夏の天明しかば、素藤は先士卒に、城の四門を守らして、首實檢をしたりしに、宗徒の城兵、田稅逸時、竝に苫屋景能は、幾間にか落亡たりけん、それかと思ふ首級はあらず。單登桐山八郎良于を、顚八盆作が隊に生拘りて、重索掛て、雜兵に、牽して廣庭に推居たり。當下蟇田素藤は、發見に尻をうち掛たる、左右には本膳碗九郎、以下の兇黨を侍らして、意氣揚々たる面色しつゝ、良于を佗と見て、爾は登桐山八郎。謹て我いふよしを听け。原這城地は、我義兵をもて、自然と得たる所にて、義成が城にあらず。且我はこの年來、里見に忠あり功ありし

稠入る敵に立逆ひつゝ、齊一防ぎ戰ふものから、如法闇夜の進退便なく、敵の多少も量り難しに、賊徒は日子明亮にて、烏夜にも迷ふ者はなきに、又妙椿が幻術にて、其勢數千に見えたりし、敵城内に充滿て、錐を立べき地もあらねば、城の士卒は防禦に由なく、驚き慌度を喪ひて、撃るゝものぞ多かりける。當下願八盆作は、眞先に找む聲高やかに、當城の奴們、いまだ知らずや。我主蟇田頭の相公、會稽の恥を雪んとて、當晩數千の逞兵を領て、當城を拿復し給へり。番士の頭人田税逸時、登桐良于們は那里に在る。命惜くば面縛して、降參せよ。と喚りたる、勢ひ潮の沸く似く、古昔の義秀親衡也とも、敵すべうもあらざりけり。恁りし程に城の頭人、田税戸賀九郎逸時、登桐山八郎良于、苫屋八郎景能は、夜撃入りぬ、と聞しより、はやく兵具に身を固めて、刀鎗引提走出、烈しく士卒を罵勵したる、三士齊一敵を拄えて、瞬息間に幾人歟、早鎗下に刺伏たれども、敵は視に餘る大勢なれば、素藤を擇撃に、せまく思ひし甲斐もあらで、各淺痍を負ながら、這里を先途と戰ふ程に、登桐山八郎良于は、本膳碗九郎を左右に受て、連りに戰ふ大刀風に、當るべうもあらざりけん、件の二賊は、後より找む、躬方に讓りて引退くを、良于はなほ脱さじとて、焦燥つ隨に脚下なる、屍骸に撲地と跌きて、忽地撐と輾びしかば、賊徒は得たり、と幾人か、推累りて生拘りけり。この折逸時景能は、一所に敵を拄え

明るを等てこそ、と敢驚き譟ぐ者あらず。要なき武具なれば也。恁而子時過る時候、猛風やうやく止にければ、士卒們倶に心おちゐて、各睡りに就にけり。爾程に、蟇田素藤は、三四百の賊徒を領て、既に城の後門へ寄せ來にければ、妙椿は轎子より、やをら立出て、素藤に聶くやう、這城内には、昔より、一箇の脫路ありといへども、今は人これを知らず。其里より入らば、便宜なれども、年來千曳の石をもて、出口入口を塞ぎたれば、目今はせんすべあらず。恁れば塹へ架梁を、渡してはやく入らんのみ。いで〳〵。といひつゝも、懐より一條の、麻索を拿出して、城に向ひて擲ちければ、その索長く閃き亘りて、八九丈前面なる、塀の上に掛るとそが儘、忽然として巧成す、雲の梯にぞなりにける。工妙魯般も及ざるべき、手段に駭ざるものなく、一霎時長視て、左右なくは、渡るものなかりしを、素藤頻に焦燥て、既に渡の就たるに、快々找め。と下知すれば、性急雄の賊徒五七名、各鎗を挾みて、這架梁を渡ゆくに、危氣もなく見えしかば、大家倶にうち續きて、輒く渡り果る程に、妙椿は、素藤を、先に立しつ、共侶に、渡りて城にぞ入りにける。然ば賊徒は豫より、案内知たる事なれば、第二郭迄潜び入て、常夜燈を打滅々々、鬨を咄と發りつゝ、諸役所に殺入て、短兵急に攻立れば、睡端なる城の士卒は、倶に駭き起出るに、鎧擐る間あらざれば、各素肌に短鎗を引提、或は弓箭を携て、

先鋒後陣と隊伍を整へ、顚八益作、本膳碗九、幷に本膳が獨子にて、奥利狼之介出高と、喚做たる、今玆十八の後生們を、前後左右に從へて、山路を連りに急ぎゆくに、いと闇けれども、那水にて、眼を洗ふたる效驗なりけん、衆兵一個も後るゝものなく、思ひしよりもはやく來て、舘山の城の後門に、推寄する折、鼕々と、譙樓の太鼓の音聞えて、丑の初刻になりにけり。

話表、舘山の城内には、この日稲村殿（義成をいふ）の御教書到來して、犬江親兵衛仁には、夜勤の役を免し給ひて、七犬士を迎の與、隔昨猛可に起行して、その投方へ遣されたり。是により、逸時良于景能們、倶に舘山に勤番して、彌滋由斷なく、よくその城を守るべし。と仰渡されたりければ、件の三士は訝りながら、親兵衛が這里に在らずとて、守るにかたき事かは、と倶に思へば懸念せず、軈て承書をまゐらせて、下知を士卒に傳へつゝ、その怠るを警めけり。恁りし程に、この夕、暴風吹起りて、或は城下の廬舍を倒し、或は城内の樹木を覆す、風の勢ひ凄じくて、現平ならぬ宵也ければ、城下竝に背善蘇々利の村人は、各戸を閉、風を害怕れて、外に出るものなかりけり。況舘山の城内には、田税逸時、登桐良于、苫屋景能們、いよく〳〵士卒を警めて、毫も睡らざりけるに、風はます〳〵烈しくて、這夜東の郭なる、兵庫兩座許、壞れたるよし聞えしかども、黒白もしらぬ烏夜なれば、今さらに何とかすべき。天の

添え、右手に戰麾を携て、奥より徐々と出て來つ、緣頰に建させたる、牀几に尻をうち掛て、先著到を問などす。登時妙椿は、素き夾衣小袖の、尙巳の時許なるに、黑き天鵞絨の帶を前にて結び、黑純子の袈裟を掛て、故意法衣を著けず、水白紋紗の阿高祖頭巾を、最も目深にうち被り、手に一口の戒刀を引提つゝ、緣頰に立出て、願八盆作們に對ひていふやう、咱僧這筧の水に、今朝より屢加持したれば、兵每に快いひ傳へて、人別に這水をもて、兩眼を洗せなば、恁野干玉の烏夜也とも、物を見ること明亮ならん。今日は四月朔なれば、月を得がたくて不便也。然るを躬方の士卒們が、烏夜にも眼明ならば、猫兒の鼠を捕るにも勝りて、敵を擊つに自由なるべし。咱僧も蟇田大人と倶に、舘山へ赴きて、悄々地に術を行はん。既にその准備して、轎子は背門に在り。雜兵們に吩咐て、咱僧を乘せてゆきねかし。といふに願八盆作は、一議に及ばず、こゝろ得果て、時を移さず隊の兵每に、件の義を傳へしかば、皆歡びて先を爭ひ、はやくも筧の水をもて、各眼を洗ひけり。この折風は既に止て、夜は子一刻の時候になりぬ。素藤星を瞻仰て、時分は今ぞ、兵每立ね。快々拔め。と下知しつゝ、牀几を放ちて下立たり。その間に雜兵們が、背門なる轎子を吊もて來て、卒とて緣頰に舁寄すれば、妙椿軈てうち乘るを、擡起しつ、素藤の、後に跟きてぞ倶したりける。恁而蟇田素藤は、その隊の賊兵三四百名、

る。兵庫を吹壞らして、那武具をとり復さん。はや黄昏になりたるに、先や效驗を見給へ。と說示しつゝ、懷より、錦の囊に收めたる、甕襲の玉を拿り出して、そが儘巽方にうち朝ひ、額に推當うち念じて、一霎時呪文を唱れば、疾風颯と吹起りて、砂を飛し樹を鳴らす、奇特に駭く賊兵們は、吹倒されじ、と喦稜に、各携り俯累りて、頭を擡げ得ざりけり。恁りし程に日は暮て、這夜亥中の左側に、怪むべし風のまに〳〵、莽の庭へ瓦剌々々と、音して天より墜る東西あり。その數幾百なるを知らず。大家さては、と意中に曉得りて、避て撲るゝ者もなく、墜果し折これを見るに、曩に親兵衛に剝れたる、躬方の武具なりければ、衆兇都て、妙椿の、奇術を感ぜぬ者もなく、先素藤の武具を、尋拿て、緣頰に、登し置き、爾後各認得あるは、手に〳〵いそしく擇拿て、鎧を擐つゝ大刀を佩き、鎗眉尖刀を携て、適愛たき武者態やとて、齊一笑局に入りにけり。然ば當晚の戰飯は、各豫山蛤を、多く捉り、炙りなどして、腰にしたるを拿出しつゝ、或は樹の根に尻を掛け、或は草を折布き坐して、飽までにうち啖ひけり。他們は蟇田の隊兵なるに、主の家號に相似たる、蛙を食としたる事、實に是獅子身中の、虫に等しき者とやいはん。名詮自性思ふべし。間話休題、爾程に素藤は、黑革縅の甲一縮して、臂縛脛楯に身を固め、黄金裝の大刀の、二尺八寸なるを、鷗尻に佩做て、刻室なる匕首を插

城より出てかへるさ也とて、在下們が躱在る、山陰に立寄り給ひて、妙術をもて犬江親兵衛を、逐遣らはし給ひたる、事の顚末を解示され、恁れば今宵舘山の、城をとり復さんと思ふ也。下晡にならん時候、汝達は咸相倶に、咱莽の庭へ來よかし、と其期を知らせ給ひしかば、在下們天に歡び、地に喜びて、時を移さず、這里那里に潛居る、夥家の兵每に徇傳へて、日の歪くを等たりしに、只今尼公の喚せ給ふ、と思ひし隨に忽然と、都て這山へ來にければ、尋も惱ず、見參に、入り奉る一期の幸ひ、何かは是に優すべきやとて、甲唱れば、乙續ぎて、心も似たる四個の兇黨、亘り聯翩の拍子よく、一五一十の話説を、素藤听つゝ歡び感じて、今さら思へば、乙も甲も、始よりして尼姑の幇助に、漏たるはあらざりき。恁れは今宵會稽の、羞を雪んと欲するに、我はさら也、兵每に、大刀もなく鎧もあらず。怎麼何をもて一城の、大敵を伐べきや。といふ間に妙椿は、奥より徐に出て來つ、素藤にうち對ひて、その武具も咱術あり。曩に舘山の城内にて、犬江親兵衛に剝捕られたる、身方の鈍鎧刀鎗は、今もなほ那城の、兵庫に藏めてあり。今宵先法術をもて、开を咸とり復して、隨即夜擊に用ふべし。然ば咱儕がこの年來、特に祕藏の寶貝あり、甕襲の玉と名づけたり。這玉をもて風を祈れば、猛風俄頃に吹暴れて、屋を覆し樹を倒す、效驗一たびも差ふことなし。因てこの寶貝をもて、風を起して、舘山な

に〳〵と思ふのみ、倶に外面を長視てをり。姑且して迴前向なる、樹の間巖の蔭よりして、近づき來ぬる居多の人响、跫然として聞えしを、と見れば、素藤が故隊兵、礪時顚八、平田張盆作、奥利本膳、淺木碗九郎們を先に立して、一隊約莫三四百名、莽の庭に聚合たる、身皮都て窶果て、一刀だにも帶ざりけり。素藤は這衆人を、うち見て驀て緣頬に、走り出聲を掛て、先顚八們に對面して、別後の苦樂を尋るに、顚八盆作、本膳碗九、甲乙四個の老兇は、言語齊一告るやう、往日に我們は、分ちて船に乘せられて、武藏或は相摸の浦へ、追放されたりし折、八百尼公の法術にて、雜兵奴隷に至るまで、這頭に近かる奥山へ、皆悉領て返されき。その事は幻にて、水路を渡り來にける歟、或は雲に乘せられて、飛行して來にける歟、我上ながら夢の如くて、楚とは覺候はず。然るにより料らずも、僉這四下へ返されしかども、太山なれば、食物なし。剪徑して行客の、盤纏を略まく欲するに、身に寸鐵を帶ざれば、思ふのみにてせん方あらず。只草深き地方には、山蛤の多かれば、口毎に各捉啖ひて、才に饑を淩ぎて在り。爾程に相公も亦、八百尼公の法術もて、はやく這頭へ將て返されて、這草庵に御座すよし、尼公の示教によりて聞知るものから、いまだ對面を許されねば、間近き山に在りながら、一たびも訪奉らず、各倶に艱苦を忍びて、尼公の幇助を等たるに、今朝しも尼公は、稻村の、

舘山の城を略復すには、又是甚麽なる妙計あるや。と問ふを妙椿聞あへず、开も亦手段なからずやは。嚮に寄隊の陣へ牽れて、追放せられし舅方の士卒、顚八盆作、本膳碗九、及雜兵們、いへばさら也、當日副門より落亡たる、士卒も都て法術をもて、いぬる日より這四下なる、太山に潛せ置たれば、期に莅てこの處へ、喚聚合んこといと易かり。且前祝に酒うち喫て、姑且倶に樂むべし。酒菜は咱儕が准備して、五六種庖湢に在り。快拿出し給ひね。といふに素藤訝りながら、遽しく身を起して、庖湢の板厨を開て見れば、果して鯛あり平魚あり、或は筍蕗鷄卵まで、皆悉調理して、五六箇の青磁の碟子に、装做してありければ、呆るゝまでに喜び感じて、手ばやく酒を煖めつゝ、坐席へ餚を出し來つ、所陜まで安排べて、妙椿と共侶に、屢々盃を遶らす程に、又稲村にてありし事を、听もしつ問れもして、酔て倶寐の假枕、結ぶは夢の褻語、樂み涯りなかりけり。左右する程に日は斜きて、下晡になりしかば、素藤は又妙椿に、舘山の城をとり復す、術策を問つゝ催促す。登時妙椿は、枕搔遣り身を起し、一霎時外面を瞻仰て、現今は好時候ならん。豫那這に潛せ置きたる、舅方の士卒を喚集ん。いで〳〵。といひつゝも、緣頰に立出て、筧の水もて手を淨め、口を漱ぎて外面に、立向ひ眼を閉て、口に呪文を唱果て、軈て坐席に入りしかば、素藤はそのこゝろを得ず、よしを問んはさすがにて、いか

に、義成は性として、短慮の猛將ならざれば、立地に思ひ復して、敢その氣を顯さず、拾ひし艶箇を懐に、夾めて臥房に還りしが、件の男女の中を裂て、いかで人には知らせじとて、艶箇をば讀まで、燔棄たり。その艶箇は、いぬる比、堀內藏人貞行と、杉倉武者助を欺きて、大樟村より稻村へ、旨くも還し遣したる、御敎書と同じ手段にて、次の日再閱すれば、素紙になるものにしあるを、燔棄られしは、こも亦妙也。又那囘義成が、夜深て單濱路姫の、病牀へ赴く折、表第と奧の關の戶の、鎖は必固かるを、輒くも開かせしは、咱法術で侍れども、義成は訝りながら、後にその義を糾しも咎めず。是も亦親兵衛が、所爲なるべし、と思ひしならん。這一條は、遠からぬ、大隔昨の夜の事ぞかし。その詰朝義成は、親兵衛を召近著て、いまだ招きに應ぜざる、七犬士の所在を索ねて、倶して來よとて、遊歷の、暇を拿らせたりけるが、瀧田の祖母の宿所にだにも、逗留を免されず、急ぎて逐立られしかば、親兵衛は水路より、其宵他鄉に赴きにき。那奴が在らずなりたれば、舘山の城を略ん事、今宵一夜を過すべからず。非除又年を歷て、親兵衛がかへり來ぬるとも、那玉をだに還されずは、水母の小鰕に離れし似く、要なき人にならんのみ。奇々妙々に侍らずや。と鼻螽めかして說誇れば、素藤怡悅に勝ずして、耳を敧け膝を找めて、听惚るゝこと半晌許、憶ずも止息を吻て、適愛たき、尼姑の神術。抑

亦うち笑て、そは憑しき事也かし。鳥の聲水の音、耳に听くのみ、友もなき、這人不入の山守に、做りて等たる甲斐ありけるよ。といへば妙椿頷きて、然ばとよ聞給へ。豫おん身に示せしごとく、咱儕稻村へ赴きて、法術をもて城内に、妖孽をいでかして、竟には犬江親兵衛を、遠く他鄉へ逐遣らしたり。その手段は箇樣々々。と那假夏鬼の寃鬼に、濱路姫の魘れて、遂に病著になりし事、又役行者と見せたる、假異人の示現の事、是により舘山より、犬江親兵衛を召來たして、濱路姫の宿直として、七日夜勤をさせし事、その折那靈玉を、病の牀の簀子の下なる、土中へ埋めさせし事まで、説示して又いふやう、姫の病著瘥りの時候、一夕義成に疑心を起さして、更闌て、那身一個、濱路姫の臥房に行く折、次の間に宿直をしたる、親兵衛をば咱術をもて、その夜半より打睡らして、義成には他を見せず。是等の所行も那靈玉を、他が懐にあらせずして、土中へ埋めさせたる故に、思ひの隨に行ひ易かり。倘玉を初のごとく、親兵衛が身に附てあらば、いかにしてよくせんや。手段の妙なるを思ひ給へ。然而義成には、姫の臥房にて、男女の惜語く聲を聞し、且濱路姫が、親兵衛に、贈りし假遺簡を拾はせしかば、義成怒りに堪ずして、件の男女を推竝べて、手擊にせんと性起りたり。この折をもて親兵衛を、結果なば愉快れど、濱路姫さへ殺さしては、おん身の與に妙ならじ、と思ふものから禁難し

雨にあふ、幸なるかな。と歡び唱て、長く良善の人となりけり。爾程に墜八は、南彌六、出來介、復五郎に、別れて家路に赴きしが、罪障眼前の活地獄に、懲りて俠客の交を要せず。上總の宿所に還りては、畊作の暇ある每に、よくその母に仕るのみ、後々に至りては、噂も聞えずなりしとぞ。恁て又義成主は、件の五人を赦免の朝、瀧田へ使者を遣して、九三四郎們、五個の罪人を、赦免し給ひし事の趣、幷に犬江親兵衛に夜勤を免して、七犬士を、招き來たすべき與に、昨日他には遊歷の、暇を給はりたりし事、濱路姫徹牀の、歡びをさへ恁々と、老侯に報給ひしかば、義實主うち聽給ひて、或は歡び或は訝り、什麽犬江親兵衛を、獨然る使には、只今猛に出し遣りけん、こゝろ得がたき事なりき。とうち呟き給ひつゝ、先照文を召よせて、よしを示して問給ふに、照文も亦驚くのみ、竟にその意を得ざりしかば、他を稻村へ遣して、義成主に事の情を、尋ねさせんはさすがにて、そが儘默止給ひけり。話分兩頭。爾程に蟇田素藤は、單人不入の山の庵を、守りて妙椿の還るを等しに、件の女僧が出てゆきしより、約莫十有三四日を歷て、三月も既に盡る時候、その朝妙椿は、忽然とかへり來て、獨緣頰に在りしかば、素藤驚き、且歡びて、迎入れつゝ、計りし事の、成就したる歟、否。と問へば妙椿含笑て、惴り給ふな。問れずとも、詳に告て歡ばせん、と思ふてかへり來ぬる也。といふに素藤も

恕に出て、九三四郎が這年來の、孤忠の善報なるべしとて、近きはさら也、遠かるものも、聞傳へ語り續て、後まで美談にしたりけり。墨之介、九三四郎が事、この下に話なし。又この恩赦の日に、出來介復五郎、南彌六墜八にも、有司赦免の義を示して、若們が事はしも、縱大赦の折也とも、數まへがたき大罪なれども、老侯の格外なる、御仁心をはしまして、守に宣はせしよしもあれば、都て命を助らる。上總へかへり去まく思はゞ、速に退り立ね。又這地に在まく願ひ稟さば、月俸を賜りて、城内に留置れ、異日もし功あらば、提立給ふべし。とありければ、四個の罪人皆歡びて、恩を稱へ額を衝て、御諚承り候ひぬ。當國は、我們が舊里で候へば、上總へいなんことを欲せず。況以後の露命を繫ぐ、月俸をさへ賜るをや。願ふは、犬馬の力を盡して、再生意外の洪恩を、報ひ奉らんとぞ稟しける。そが中に墜八のみ、上總に老母の候へば、椿村へかへりゆきて、親を慰め候はんとて、身の暇を乞まつりしを、有司恁恁と聞えあげしかば、義成主憐愍給ひて、墜八が情願は、九三四郎にこそ及ばざらめ、是亦孝子の心也。宜しく路費を取らせよ。と仰示させ給ふにぞ、有司は又這仁政を、歡び承て退出つゝ、儀のごとくに行ひければ、出來介、復五郎、南彌六は、當城に住ることを許され、墜八は路費を賜りて、椿村へ返し給ひぬ。然ば行く者も住る者も、轍の魚の江に還り、枯たる苗の

しは、抑是甚麽なる故ぞ。と呟くものも多かりけり。恁而この次の日に、濱路姫の徹床の壽祝あり。是により、上總の殿臺なる、兩八幡諏訪、三社の神主は、忠告紛れなければとて、上總へ還ることを許され、又いぬる比、瀧田の城より、牽渡されたる五個の罪人、安西出來介、滿呂復五郎、天津九三四郎、荒磯南彌六、椿村墜八們は、亦復獄舍に籠置て、虚實を糾し問れしに、都て他們が陳ずる趣、始終毫も違ふことなく、且菅善蘇々利の村人們が、稟せし義と吻合して、歸降の情願實事なるよし、その聞えありしかば、恁る愛たき折なればや、義成主有司に下知して、件の罪人們を赦免あり。この義は瀧田の老侯の、仁慈なるよしをいひ渡さる。又上廿理墨之介は、天津九三四郎が故主といへども、素より是癡人にて、曩に素藤に吩咐られたる、密義には干からず。且他は神餘光弘の、落胤なる事も、亦菅善村の民毎の、口碑に紛れなく、當郡舊家の後裔なれば、義成特に憐み給ひて、長挾郡神餘村は、他が庶字の地なるをもて、那邊にて、二百貫文の采邑を賜り、天津九三四郎後見して、生涯を送らせよとて、諸役免除、本領安堵の、御教書を成し下されければ、九三四郎は天に歡び、地に喜びて、國主の恩を拜しまつりつ、墨之介に、倶して神餘村に赴きしが、幾程もなく墨之介の、宿所を造り、奴婢を使はせ、その身は生涯後見して、徐に光陰を送りけり。是併、瀧田の老侯、并に當主の仁

しくことあらじ、と尋思をしつゝ、懐にせし護身嚢の、紐解ひらきて件の玉を、斂めて項に掛る程に、篙師毎が高やかに、客人、船は整ふたり。追風はいよ〳〵宜しきに、快乘り給へ。と喚聲かどふ、浦波暗む王莽時、親兵衛は、應々。と答も果ず、步を早めて、步板架を渡りつゝ、件の船に乘移る。その間に篙工毎は、帆裝しつ步架を退て、はや漕出す大洋に、浮宿の鷗兒靜なる、淺瀨は上總、下つ總、市河を投て走らしけり。案下再說。この日稻村の城内には、義成の主千慮を盡して、既に犬江親兵衛を、他鄉へ遣し給ひしかば、隨即奥隷の老黨某甲を召よせて、濱路が病著瘥りて、物怪も亦鎭りたれば、今日より犬江親兵衛に、夜勤の役を兎したり。且恁々の所要あれば、又親兵衛に吩咐て、他を他鄉へ遣しにき。水路を行ば今宵必、纜を解くならん。這義四個の家老はさら也、有司給事の老女們に、傳へてこゝろ得させよ。と仰渡させ給ひしかば、件の老黨承りて、退りて君命の趣を、遺もなく徇傳へしかば、堀内貞行、東辰相、杉倉荒川、四個の老黨、有司近習の輩まで、事情を知るよしなければ、訝り思はざるはなく、那犬江親兵衛は、大功の賞として、往日他を舘山の、城主になされたりけるに、若七犬士の所在を索ねて、伴ひ來たさん爲のみならば、始よりして件の一義を、奉りたる十一郎、照文などこそ相應しからめ。重く用ひたる親兵衛に、又輕々しく然るおん使を、仰付させ給ひ

がら、薄情や土中に埋れて、又見ことのかたかるは、我命運も、玉と倶に、長く光を喪ん、祥なりけん歟、といへばえに、いはぬ心の慨しさを、遣る力もなく思ふ折から、忽然として後方より、光明颯と晃めきて、投石の似き物にやあらん、項に礑と中るとそが儘、はやく衣領より滾墜て、九の兪の邊に住りしを、親兵衛、吁嗟と駭きて、遽しく手を衣の、内に入れつゝ掻撈るに、果して木欒子の大きさなる物、只一顆背にあり。訝りながら拿出して、見ればこは別物ならず、嚮に君侯に貸まゐらせて、濱路姫の臥房の下なる、土中へ深く埋置れし、仁の字の玉なりければ、こは乍麼いかに、とばかりに、一たびは訝りあやしみ、又一たびは歡びて、つらつらと思ふやう、嚮には我這玉を、毫ばかりも惜むことなく、君侯の所望に從ひまつりて、那里に留め措きたりしに、靈玉我を慕へる歟、二重の瓶、三尺の、土中を出て路遙なる、我懐に入りたるは、嗚呼神なる歟、靈なる哉。姫上病著瘥り給ひて、物怪も亦鎭りたれば、這玉那里に要なしとて、伏姫神の神謀りに、計りて返させ給ひし歟、それかあらぬ歟、奇也妙なり。この事稻村殿にては、知し召さでをはさんに、縱こは我玉也とても、恁る奇特を告まうさで、この儘藏置くならば、影護き所あり。後に又おん疑ひを、受奉る事あるべき歟。然ばとて今さらに、又稻村へ歸まゐりて、稟上んは面伏也。左まれ右まれ、吉凶禍福を、神の隨意儘するに、

親兵衞は、妙眞許はやく立去りて、その投方へ罷りにき、と有つる儘に答へよ。と言語せわしく吩咐れば、大家これをうち聞て、仰こゝろ得候也。遮莫密事のおん使也とも、身單にては不便にをはさめ。切て一人は倶し給はずや。といふを親兵衞聞あへず、开は益もなき口誼也。倶すべくは誰にかも、憚て倶さゞるべき。快々ゆきね。といそがせば、大家やうやくこゝろ得果て、立別れ馬を牽て、稻村を投てかへり去を、親兵衞一霎時目送りて、今はしも心安し、と思へば便宜の港口なる、艄公の宿所へ赴きて、今宵下總の市河へ、出船あるや。と尋るに、艄公答て、出船はなし。なれども幸ひに追風よければ、賃銀多く賜りね。只今船を出すべし。といふに親兵衞再議に及ばず、いはるゝ隨に銀を取らして、件の船に乘まくす。登時篙工兩三名、飯櫃薪、飲水の桶なンどを携て、卒とて馬頭上へゆく程に、親兵衞は开が後に跟て、倶に水際に赴きて、他們が船を艤るを、等つゝ獨鵠立處れば、長かりし日の沈果て、黃昏時候になりにけり。恁りし程に親兵衞は、肚裏に思ふやう、現に人の榮辱得失は、宛一炊の夢に似て、秋の天の瞬間に、晴曇るより猶果敢なし。抑我身昨日までは、數百の士卒に將として、舘山の城主なりしに、今日は一僕身に從はで、萬里の孤客となりにけり。そを憂るにあらねども、那靈玉は、我末生より、自然と得たる寶貝にて、年來這身の護におなるを、主君の與とはいひな

給へ。復見參に入るべけれ。といふも答も、隱口の、果し名殘は、血筋の誠、親の又親、子の叉子には、愛も情も厚氷、解て流れてゆく水と、人の往方の定めなき、盈虛に迷ふ潟を无み、夜の鶴より哀れ也。

第百十一回

妖尼庭に衆兇を聚ふ
素藤夜舊城を襲ふ

却說犬江親兵衞は、祖母妙眞に辭し別れて、城の正門まで來ぬる程に、路に後れたる三個の伴當が、折よく這里にて赶著けり。是により親兵衞は、正門の守屋に立寄て、那兩個の番卒に、歡びを演などして、預けし馬を鑣奴に、牽出さしつ、乘はせで、そが儘に浦曲のかたに、ゆくこと纔に一町許、伴當們を見かへりて、若們はいまだ知ざるべし。我は今朝悄々なる、君命を稟たれば、單他鄕へ赴く也。恁れば去向に伴當ありては、倒に宜しからず。因て若們三名は、又稻村の御舘へまゐりて、左右兒們に件の義を、報て舘山へ還るべし。却這馬は、稻村なる、厩役人へもよしを告て、初のごとく預け置ね。こはいぬる比老侯より、拜領の名馬なれば也。若們路にて日の暮るゝとも、必歇店に就べからず。夜は深たりとも那里へまゐりて、人倘問はゞ、

兵衛窻うち仰ぎて、日のいと永き時候ながら、憶はず時を移しけん、晷は酷く攲きぬ。左ても右ても盡せぬ名殘、身の暇を賜るべし。といふに妙眞含泪て、等に等つゝ貌見ても、切て一宿留めもせず、世に武夫の沿習とて、苦しきものは仕の途。是を思へば又原の、船長の母と喚れんこそ、倒に樂しかるべけれ。喃親兵衛、今宵出船に乗るにやあらん。幾比かへり來ますべき。と問れて親兵衛、阿とばかりに、答難たる身の往方、那濡衣を乾すよしなくば、安房の浦邊に立かへり、寄る白浪はありとても、我還る日はなきものを、と思ふものから然氣を見せず、沈吟じたる頭を擡げて、然也。今より去向を料るに、武藏と甲斐は隣國なれば、往還輒く候はん。但犬阪の在る處、速に知れずは日を過さん歟、遲速は定めがたけれども、然ばとて歳月を、累る事は候はじ。寛に等せ給へかし。といひつゝ刀を搔拿て、衝建てはやく身を起せば、妙眞は、ゆく人を、涙と倶にとゞめかねて、端近う送りつゝ、作當なきを訝れば、親兵衛急に見かへりて、否、乗馬も候へば、作當は、正門なる、塲城に等し置にき。といふに妙眞頷きて、いふまでにあらねども、儞は萬事に心術の、神々しくはあるものから、初旅なれば心もとなし。餘の犬士達に環會ふまでは、旦夕の食物、足曳の山踰、海川の、津に小心し給へ。と心を屬れば親兵衛は、一議に及ばず諾ひて、开はこゝろ得て候也。みづから愛して恙なく、かへり來る日を等


妙ちん



志んべゑ

く時なく交加て、六稔儞と共侶に、富山に曉しくらせし事を、說も示して慰められしに、折の叨くて一人だも、宿所に在らず。かへり來て、よしを听なば最酷う、遺憾くぞ思はれん。といふに親兵衞眉を顰めて、开は最殊勝の事なりき。那人々が還りなば、親兵衞は君命を稟て、他鄕へ赴き候ひき、と傳へさせ給へかし。といふ間に炊妾が、茶を沸らしつゝ汲もて來て、先親兵衞に薦めたる、茶頓は鹹き鹽打の、豆炙は、今も世話にいふ、實房州の炙倒れ、地方がらとて東西もなき、質素に過ぎたる欵待は、婦人東道の無造作に、意の介なかりけり。姑且して親兵衞は、勒肛の財囊より、金一裹拿出して、これを妙眞に薦めていふやう、今番は猛可の見參にて、まゐらすべき東西候はず。こは我君より賜りたる、一百金の半分也。卒福分を仕らん。欲かる東西もあるべきに、是もて求め給へかし。といふを妙眞聞あへず、开は亦要なき事ぞかし。當御舘より這年來、扶持賜りて、奴婢までも、隷置し給ふから、自由ならざることもなし。況往日稻村樣の、這里へ凱陣なされし折、咱儕を近く召出され、儞の武功を譽させ給ひて、多く白銀卷絹を、賜りたれどそが儘に、使はで今に有るぞかし。然るをその金何にせん。と推辭を親兵衞なほ薦めて、开は然る事も侍らんが、盤纒多きは、盜賊の、殃危を惹く媒妁なれば、姑且く預け奉らん。攸め置給へかし。といふに妙眞固辭難て、澁々金を受拿りけり。登時親

ふに妙眞呆貌して、开は亦本意なき事なりき。濱路姫上は、おん病著の、瘥らせ給ひし歟。他郷へ御用は怎麼なる事ぞ。と問れて親兵衛、然候。那物怪は鎭りて、姫上瘥り給ひたり。因て某と同因果の聞えある、小父犬田主はさら也、犬塚犬山、犬川犬飼、犬村と倶に六犬士、或は武藏の穗北に在り、或は甲斐の石禾にあり。獨犬阪毛野胤智と喚做たる、一犬士の所在知れずといへども、尋て遺なく將て來よ、と仰付られ候ひき。といへば妙眞頷きて、开も亦餘義なき事なりき。武藏へいなば、便路ならん。儞の舊里、下總なる、市河へ立寄て、依介許訪ひ給へ。水澪は咱們の姪なれば、儞の輿にも親族也。件の夫婦が正首に、折々簡牘もて、安否を問し、東西など贈來したりき。よくこゝろ得て給ひねかし。といふに親兵衛異議もなく、开はこゝろ得て侍る也。伏姫上の神靈の、宣示給ひしかば、依介が事はしも、豫聞知り侍りにき。然らでも兩尊の墓參を、必すべく思ひ侍れば、那里へ立も寄ん事、勿論に候かし。扠花咲の翁媼(與四郎と音音也)と、媳御孫達は恙もなきや。宿所は近く候歟。と問へば妙眞頷きて、然也。那人々を置るゝ處は、壁一隔隣にて、内に通路も侍るから、一家兒に異ならねども、今日は富山なる、伏姫上の、おん墓へ詣づべく、峯上の觀音へも參らんとて、老夫婦が兩個の媳婦と、兩個の孫を伴ふて、早旦に出て行給ひき。音音の刀自も、曳手單節の、胞姉妹も懇切に、間な

苦海愛河の世は定めなく、弘誓の船出遠ければ、別れてゆくも住るも、假の宿りと知りながら、返らぬ人のなつかしきは、恁る像身のあれば也。喃親兵衞、いふて益なき事ながら、見れば思へば儞の面影、幼穉貌は耗ねども、鼻梁のいとよく融りて、特に眼睛の淸やかなるは、房八に肖たりけり。又ものいふて笑折に、片靨の見はるゝは、阿沼藺に肖たり。四個の親身、父さへ母さへ、外戚の、祖父さへ黄泉の行客と、なりて五稔六稔の今日まで、殘るは我這身單に、思ひ難たる哀歡苦樂、遣る瀨もなきは恩愛の、羈にこそ。といひかけて、又潸然と泣沈めば、親兵衞、然こそ。と慰めかねて、日を數瞬き、鼻をうちかみ、やよ大母樣、爾思召すおん歎きは、理にこそ候なれ。我身二親を喪ひしは、僅に四才の比かとよ。名をのみ知れど、面影を、照すよしなき水鏡、深き懷を汲てこそ、父とも母とも大父とも、見奉るはおん身のみ。益なき悲泣に心を屈して、病な煩ひ給ひそ。といへば妙眞頭を擡げて、然也々〳〵、爾ぞがし。噫鈍ましや。言に紛れて、まだ茶をだにもまゐらせざりき。那炊妾は、那里に在る。親兵衞、阿饌は欲しからずや。先盃をまゐらせん。といひつゝ立を推禁めて、否、閣し給へかし。いまだ何も欲しからず。偶參り候へば、緩やかにうち譚ふて、慰めまうす該なれども、いかにせん、猛可に君命を奉りて、今より他鄕へ赴き侍れば、立かへり來ぬる日に、又見參に入るべけれ。とい

うなりにき、と人の噂に聞ながら、然までに大人備たらんとは、つや〲思ひかけざりき。嚮には姥雪翁をもて、消息を寄られて、相見るごとく慰め侍り。先這方へ。と愛々しく、軈て坐席へ請登すれば、親兵衞は刀を解て、後方に閣き、恭しく、妙眞にうち對ひて、我うへはいぬる比より、傳へも聞せ給ひけん、曩には時の不祥にて、憶はず別れまつりしを、夢かとぞ思ふ六稔歴て、浮世に出しは、神女の擁護。快見參に入らばや、と思はざる日はなきものから、仕の途に入りしより、我私を顧る、暇なければ昨日まで、空に過せし胸苦しさは、一日も千秋に異ならざりしに、やうやくに時至りて、恙も在ず、拜顏の、歡び何事かこれに優すべき。寔に芽出たく辱き、再會にこそ候なれ。といへば妙眞點頭のみ、涙にものをいひ難し、顔を背けて兩袖を、絞るばかりの行潦、ながらへてこそ相見ぬる、歡しさに就て又、深き歎きの杜も今、願事遂し對面に、泣じと屢目を拭ひて、喃親兵衞、儞が二度の大功は、蜑崎主も、與四郎翁も、告知し給ひしかば、喃儕が年來二柱の、おん舘に受奉りし、御恩を聊返しにき、と思へば然しも身の幅の、廣き世界に二人と得がたき、孫を思へば又その親の、事さへ胸に浮れて、得泣まじき事をすら、泣くは老女の愚痴ならん。儞の爲には外大父樣、覺てやをる、行德にて、故の古那屋の文五兵衞翁、今まで存命給ひなば、愛くつがへりて歡れんに、

せて、閃りと乘りて驀地に、瀧田を投て走らするに、素より駿足なるをもて、幾里の路の程を、思ひの隨に乘著て、はやく瀧田の城に來にければ、軈て馬より下立て、番卒們を喚ていふやう、我は犬江親兵衛也。大母妙眞許赴くに、伴當の後れたれば、一霎時這馬を憑み侍る。妙眞の宿所へは、なほ程ある歟、那里ぞや。と問へば番卒毫も凝議せず。豫聞知る武功の犬士、親兵衛なれば、一兩名、遽しく立出て、仰こゝろ得候ひぬ。妙眞尼姑の宿所へは、我們案内を仕らん。卒給へ。と答つゝ、一卒は馬を牽入れて、塲城の内に繋留め、一卒は親兵衛の先に立て、鄕導をしたりしかば、尋ねもわびず、二の城門を、うち過て又一町あまり、柳巷路と喚做す邊に、諸士の耳房多くあり、幵が舍尻に空地あり。空地の北に茅葺なる、一座の小舍ありて、竹笆を折繞らしたる、兩折戸の頭にて、番卒急に足を住めて、親兵衛を見かへりつゝ、尋ね給ふ妙眞尼姑は、卽這里で候。と誨て軈て辭し別れて、走りて正門へ還りゆくを、親兵衛は勞ひて袺みたる野袴を、引伸しつゝ兩折戸を、敲きて連りに喚門程に、妙眞奥より立出て、應をしつゝ戸を開きて、親兵衛を見て、訝しげに、那里よりぞ。と尋れば、親兵衛も左見右見て、おん身は是大母樣ならずや。某は大八也、犬江親兵衛で候ぞ。と名告るに妙眞胆を潰して、相ること約莫半晌許。忽地に含泪て、原來和殿は、親兵衛なりし歟。六稔富山に在りし程、最も大き

こは我を疑ふて、追放ち給ふならん。然ばとて身に取て、毫ばかりもおん疑ひを、受べき覺なきものから、餘の犬士に先だちて、大功ありしのみならず、更に閨門に立入りて、婢妾們と一列に、夜勤を仰付られしを、媢しと思ふ佞人が、讒言をしたりけん。君侯は素より賢明にて、佞便利口の小人を、信容れ給ふべくあらねど、衆口は金を鑠し、市に三虎を致すといふ、古人の常言、以あるかな。功成り名遂て身退くは、是達人の用心にて、生涯無異の捷徑なるを、誰も知りたる事ながら、俸祿富貴を貪りて、退くことを忘るゝときは、獵禽盡て狡兎烹られ、平家亡びて義經讒死す、榮枯得失、今昔一致、こは驚くに足らねども、我里見家に仕へてより、いまだ三十餘日に過ず、はやく上總の舘山なる、城を預けられしのみ、尙一撮土の采邑も得ず、坐席格式、一として、定められたる事なきも、那折よりして兵權を、一時に掌りしかば、忌るる事のありなまし。今よりの後幾程なく、我義兄弟なる犬士們に、環會ふ日のありとても、這身に受たる濡衣を、乾さずは這地に住りて、仕の途に入るべからず、と悄々地に胸を決めつゝ、第二の城門を出しかば、伴當們を見かへりて、我は火急の所要ありて、瀧田の城内に召置るゝ、大母計赴く也。若曹は、我馬に、後れじとて走るべからず。十人の内中七人は、舘山の城へかへりゆきね。伴若黨一名と、馬の鑣隷鞋奴は、徐に續きて瀧田へ來よ。その馬寄せね。と牽向さ

して、徑に發足仕らん。この義を許させ給はんや。と稟せば義成主沈吟じて、开は亦餘議なき事ながら、瀧田に逗留すべからず。妙眞に對面せば、はやく退くを佳とせん。老侯には別人をもて、是等のよしを聞えあげてん。意ふに汝が遊歴に、伴當の多かるは、反て路次の煩ひならん。夥兵を擇て一兩名、倶してゆく義は便宜に儘せよ。快々退出候へとて、身の暇を賜ひにければ、親兵衛は額衝て、遺る事なき御懇命、肝胆に銘じて忘るべからず。願ふは貴體恙なく、猶良善の政事こそ、あらまほしく候なれ。といふに義成點頭給ひて、こゝろ得たるぞ、快退りね。と仰に親兵衛、阿と答て、賜の金、懐へ、攸めて飄て立つ鳥の、跡は濁さぬ春の池、庭の嫋葉の樹下陰、暗からぬ身に疑ひの、罹るや松に蔦蘿、墨畫の杉戸推開て、廊下よりぞ退出ける。爾程に親兵衛は、既に思ふよしあれば、この朝本番なる、甲乙にも別を告げず、猛可に仰を稟たれば、瀧田へ赴くとのみいひ知して、伴當們を召よせつゝ、青海波の馬を牽して、一二の城門を出る程に、肚裏に思ふやう、今日君侯の仰こそ、左にも右にもこゝろ得ね。那物怪は退散して、濱路姫の病著の、稍瘥り給ひしかば、宿直の役を免されしは、しかるべき事ながら、又舘山へ返されず、剰猛可に遊歴せよとて、身の暇を賜りて、瀧田の大母の宿所にすら、一日も逗留すべからず、と掟させ給ひしは、故ありぬべき事ぞかし。言には出し給はねども、

里に在らずなりて、復物怪の障りあらば、何をよすがに禳んや。縦汝は在らずとも、玉を那儘埋措かば、然る障㝵なかるべし。尤無心の至りなれども、汝がかへり來ぬるまで、那靈玉を我に預けよ。知らるゝごとく二重の瓶に、藏めて土中に瘞たれば、火災盜賊の患ひなし。扨是は納戸財なるを、盤纏の與に取らする也。この意を得よ。と叮寧に、悄語き示して、黄金百兩、紙に包み折敷に載せしを、手づから拿出て與へ給へば、親兵衛は遽しく、膝を找め受藏きて、身を退かして稟すやう、御諚の趣辱く、都て承り候ひぬ。微臣一人七犬士に、先だちて恪までに、御恩を稟まつる事、實に本意に候はねども、獨に老侯の御危難を、富山に拯ひまつりしより、素藤對治の事により、憶はず紈袴に繫れしは、心苦しく候ひしに、今遊歷の與に身の暇を、賜ふて自餘の犬士們を、倶して歸參れとある敎命は、寔に臣等が幸ひなり。況路費のおん金を、御手親賜はする、寵恩懇篤、身にあまりて、譬を取るに物もなく、感涙の外候はず。又靈玉の事はしも、既に知せ給ふごとく、年來奇特多かれば、この身の護に候へども、君の與には一命を、獻るとも辭すべからず。然るを矧那玉をや。御用に達ば、是亦幸ひ、微臣かへり參るまで、埋措せ給へかし。しからば今日啓行を、仕らん事勿論なれども、大母が月來俟わびけんを、あはでこの儘別れなば、後の歎きも不便也。一霎時瀧田へ立寄て、祖母妙眞に對面

三四の犬士們は、去歳の冬より武藏なる、穗北の鄕士、氷垣某甲とやらんが家に寓居す。この餘、那犬阪毛野胤智が、往方はいまだ知れずとぞ。又犬川莊助、犬田小文吾は、毛野が所在を索るとて、甲斐の石禾の指月院を、立出しより穗北へは、尙來會せざるよし、曩に蟹崎照文の、噂によりて聞知たり。那信乃道節、現八大角は、今もなほ穗北なる、鄕士の宿所に淹留しぬるや、その後の事聞えねども、他們は年來汝の所在を、索難つゝ在るらんに、汝が我に仕るよしを、告も遣らずは不義に似たり。我この春は照文をもて、件の宿所へ遣して、信乃們四犬士の安否を訪し、且毛野們三犬士の、來會せし歟、否、と問せんとこそ思ひしに、義通が身に禍鬼起りて、素藤を征伐の、軍陣に日を彌り、且濱路が病著、物怪の、祟に因て、三春を、空に過しつ、信乃道節們を、訪する暇あらざりき。恁れば汝穗北に行て、信乃道節、現八大角が、今なほ那里に在るならば、對面して恁々と、その身の上を報知らすべく、那首に在らずは、往方を索ねて、犬士八名具足の日に、斷伴ふてかへり參らば、單館山の城主になりて、上總に在るに勝らずや。因て汝に遊歷の、暇を只今取らする也。一には關の八州を、遺もなく歷覽すべく、一には七犬士を、索て倶に還り來よ。恁れば急に立去て、寛く還るを妙とすべし。然ば汝が祕藏の玉を、今返すべき該なれども、いかにせん、濱路はいまだ徹牀せず、且汝が這

るらん。方僅這艶簡の我手に落しは、他們が與に主親の、恥を掩滅すよすがあり。濱路は左まれ右もあれ、親兵衛は、世に罕なる、豪傑の氣質あり、且八犬士の一人にて、自餘の犬士に先だちて、我に仕て、兩三番大功ありし者なるに、思案の外と俗にもいふ、這情慾の罪を糾さば、可惜犬士に疵を附て、後世までの遺恨なるべし。所詮中を裂き遠離て、他們が惑ひの醒し折、召返すにしくことあらじ、とはやくも主意決りければ、枕方に置給ひたる、提燭をやをら引よせて、件の艶簡を推團め、燈燭の上に翳し給へば、發と起昇る灰と共に、提燭をはやく吹滅して、遠く搔遣り、脇挿の、刀を又枕方なる、刀架に掛亙して、ふたゝび枕に就き給ふ。寛仁大度の賢君子、竟に睡らで明る天を、今か〳〵と復寢の床に、不娛しさ涯りなかりけり。恁而其詰旦、義成主は、親兵衛を、召近著けて、左右なる、近習を退けて宣ふやう、濱路が病著瘥りて、物怪も亦退散せしは、またく汝が功にして、那靈玉の奇特もあらん。濱路はいまば浴湯せず、病の牀にありといへども、既に本復に及びしかば、今日より夜勤を免すべし。就て我思ふよしあり。汝は仦りし時より、伏姫の靈の擁護によりて、富山の奥に生育たれば、關の東西なる諸國はさら也、這安房上總の地理だにも、知ざる所多かるべし。且自餘の犬士們は、年來汝が所在を索ねて、八人具足せるまでは、參りがたしと幾回か、推辭しよしの聞えたり。しかるに

ながら找入りて、濱路姫の臥房なる、次の間に來て見給ふに、燈燭の光幽にて、親兵衛は這里に在らず。いよ〳〵ます〳〵訝しければ、そが儘一霎時立在て、悄々地に四下を見かへり給へば、濱路姫の臥房にて、男女の囁く聲したり。淺ましき事今さらに、いふべうもあらざれば、退去んとし給ふ程に、弗憶く東物ありて、脚に掛るを又訝りて、悄と拿抗て、提燈の火光に、照してつら〳〵と見給ふに、是則艶書也。標識は具ならねども、こは疑ふべくもあらぬ、濱路姫の手迹にて、親兵衛に贈れる也。義成主は勃然と、忽地怒りに堪ざれば、先那奴們を推並べて、手擊にせん、と只管に、惴る心をやうやくに、推鎭めたる君子の本性、胸に深念は、在曉の、月ならなくに這艶簡を、人には見せじ、と懷へ、夾めてなほも偸歩しつゝ、臥房へかへり給ひしを、那里に夜勤の婢妾們も、這里に當番の近習們も、短夜なれば貪睡くて、皆夢にだも知らざりけり。爾程に義成主は、單臥房にかへり入りて、坐して手を叉み頭を傾け、熟思惟給ふに、親兵衛は、人に勝れて、身長こそ十六七の、後生の像くなれ、生年九歲の孺子なれば、縱婦女子の中に置くとも、淫奔がはしき事はあらじ、と思ひしは我淺慮にて、形體と倶に心さへ、はや大人備て早晚に、色情は起にけん。約莫男女の密會は、倶に死刑に行ふべき、法律に明文あり。他們が情由を人知らば、我は許さんと欲りするとも、助け得がたき罪過なるを、幸ひに人はしらずやあ

そが儘物怪鎮りて、濱路姫はいとはやく、病惱平ぎ給ひにければ、隨卽洲崎明神の社、及役行者の石巖、富山なる峰上の觀音、伏姫の墳墓へ、賽願の使者を遣して、後々まで障㝵あらで、姫上命運長久を、なほも祈らせ給ひし日より、吾嬬前はさらにもいはず、義成主も夜を安く、人定より枕に就きて、睡り給はざることなかりしに、親兵衞が參りしより、第七日といふ夜に迨りて、何となく寢苦しさに、睡りかねつゝ短夜の、深ゆく隨に胸うちさわぎて、平ならず覺給ひしかば、こは濱路が病著の、更に危窮に及びしか、然らずは又物怪の、立顯れて惱す歟。什麽親兵衞はいかにしけん、近習們を遣して、安否を尋問せばや、と尋思をしつゝ、次の間に、臥たる近習某甲を、喚覺さんとて遽しく、頭を擡げ給ひしが、否、既に小夜深て、四更の土圭の方僅响きしに、憖に他們を遣して、問してさせる事もなくば、徒に這那の、人をさへ驚して、事に益なきのみならず、女々しくも疑ひの、心より暗鬼を出せしならん、と笑れもせば悔しかるべし。所詮我みづからゆきて、那里の安否を探り知るに、しくことあらざるべし、と思ひかへし給ひしかば、襖を搔遣り身を起して、枕方なる脇挿の、刀を帶て、次の間なる、紙門をやをら推開きて、幵首に有ける提燭を秉りて、行燈の火を移しつゝ、幵を携て遙なる、幾間歟獨うち過ぎて、奥と表第の間なる、關の鎖を推し給ふに、思ふにも似ず開きにければ、訝り

ぬはなく、晝は雙陸歌骨牌、貝合などをして、長き日の徒然を慰めまゐらせ、夜は亦物よく讀む女房に、源氏物語を讀しつゝ听給ふに、其の中夜の程のみにて、約莫二更の左側より、曉るまで熟睡して、一たびも覺給はねば、婢妾們の夜勤をも、大かたは退けて、枕方に侍るもの、一兩個になりしかど、其すら心怠りて、倶に睡りて曉る天を、知らざるも間ありけり。爾程に親兵衛は、宿直すること七夜さばかり、五の君既に瘥り給へば、在らずもがな、と思ふものから、いまだ暇を賜らざるに、自由にすべきよしのなければ、勤榮なき夜を守る間、やうやく氣は倦心疲れて、連りに眊を催せしを、勉めて睡らじと思へども、堪がたければ、臂近なる、雙陸局を引寄して、面杖衝て、寢るとも知らず、そが儘一霎時打眊みけり。然ば又、義成主も、吾嬬前も、多かる息女達のそが中に、濱路姫は、仂き時、暴鷲の殃危にて、往方も知ずなり給ひしより、世になき人と思ひ絕て、年來を過し給ひしに、料らず蜑崎照文が、甲斐國より倶しまゐらせて、這地に還り給ひしかば、鍾愛自餘の七個の、姬上達より八入に增て、慈愛み給ひぬる、通ての親の情なるに、今番物怪の祟にて、命危かりし比、不測に異人の示現ありて、物怪は箇樣々々の、怨靈也と聞えしかば、大山寺なる衆徒に課せて、夏曳が怨靈解脫の爲に、水陸の好事を執り行はし、且犬江親兵衛を、館山の城より召來たして、宿直を命じ給ひしより、

歡びを云云と、聞えさせ給ふ語の次に、物怪退散したるに與、思ひしに倍す濱路が容體、恁恁と解示して、是またく靈玉と、親兵衞が、奇功也。是等のよしを嚴君に、詳に稟せとて、聽て暇を賜ひにければ、照文は退きて、舊子舍を賜りて、又親兵衞に對面の折、妙眞は恙もなくて、再會を俟事の情、又與四郎は、文五兵衞が、音音と媳婦們と、兩個の孫と、倶に住へば、妙眞を、置るゝ舍と檐を比べて、僅に壁を隔るのみ、旦夕迭に交加ぬれば、詞敵の多かるよしを、告知しなどせしかば、親兵衞は心おちゐて、左にも右にも我二柱の、君恩也。と稱へつゝ、今番又思ひがけなく、老侯より東西賜せし、この歡びを稟し給ひね。姫上いよゝ痊可り給はゞ、その折暇を給はりて、見參にこそ入るべけれ。といふに照文こゝろ得て、別を告て、伴當を、倶して瀧田へ退りけり。是よりして濱路姫の、病著いよゝ平ぎ給へば、親兵衞が宿直せしより、纔五六日の程に、三たびの饌も生平にかはらず、氣力は日毎に淸やかなれども、いまだ日數を經たるにあらねば、浴湯結髪はし給はで、なほ垂籠てをはしませば、親兵衞に對面し給はず。只他がものいふ折に、その聲を聞給ふのみ。遮莫那物怪は、夢にも見ゆることなければ、宿直の醫師、奥隷の甲乙には、夜勤を免し給ふものから、親兵衞をのみ初のごとく、夜は次の間に侍らしたり。然ばおん二親胞兄弟達の歡び、いへばさら也、給事の女房們の、なべて歡び勇ま

御曹司は、舍弟次丸と共侶に、嚴君の左右に侍り給ひて、親兵衛が事毎に、その功あるを褒美給はして、茶を賜り果子を賜り、過ぎし館山の事をさへ、うち譚らはして興じ給へば、親兵衛は、長き日の、闌るを覺ず慰めまつれる、面目あまりありとぞ思ひける。却說この日も暮にければ、親兵衛は、又濱路姫の、臥房の次の間に宿直したるに、今宵も物怪顯れず。濱路姫は今朝よりして、面色も光澤やかにて、心地淸々しく覺るとて、白粥を食ことの、兩三番に及びしかば、吾嬬前歡び給ひて、今宵は犬江親兵衛と、夜勤の女房們に、東西を賜ふべしとて、午よりこの議を命ぜられ、赤豆飯、煮染物、剛鬣魚の鹽炙、石決明の腤膊烹、濱防風の酣茄、蒸果子餠なゝどを、五六箇の折櫃に裝做て、その甲夜に賜りければ、婢妾們は歡びて、先親兵衛に分ちて薦め、各々賜りて、芽出たき宵とぞ思ひける。愆りけれども親兵衛は、暮るゝより旦るまで、端然として外覷もせず。婢妾們が稍狎れて、ものいひ被るもなきにあらねど、纔に應をしたるのみ、要なければ這方より、ものいふことはなかりけり。この次の日に瀧田より、老侯の使として、蟹崎十一郎照文が、稻村の城へ來て、箇樣々々と御意を傳へ、親兵衛が夜勤を勞らはして、銘茶と乾果子兩壺を賜り、且五の君の病著の、稍瘥らせ給ひぬる、歡びをなん聞え給ふ。義成この義を聞給ひて、照文を召よせて、老侯の安否を尋ね、親兵衛に東西たまはせし、

の餘の賜は、犬田小文吾が親、文五兵衛の例をもて、那里にて宛行れん。且妙眞に對面の折、今番犬江親兵衛を、舘山より召來たして、當城に在勤の、事の趣を告知して、宜く他を慰むべし。と仰示させ給ひしかば、與四郎は大かたならぬ、君恩を拜し、賜を受とりて、退きて親兵衛を尋るに、他は昨夜の宿直に疲勞れて、天明て後に睡に就きぬ、いまだ覺ずと聞えしかば、敢又驚さず。昨日消息を遞與されて、いはれしよしは听果たるに、這里にて時を移すは要なし。異日又來て對面せん、と思ひにければ、親兵衛の、伴當を留置き、その身の伴當のみを領て、瀧田を投ていそぎけり。是より先に義成主は、田税力助逸友を使价として、瀧田の城へ遣して、犬江親兵衛を召させし事、那玉の事夜勤の事、且親兵衛が宿直せしより、昨日は物怪顯れず、濱路姫は丙夜より、睡らせ給ひし事までも、遺なくおん父義實主へ、聞えあげさし給ひけり。爾程に親兵衛は、未牌の時候に起出て、與四郎が來ぬる事、且白銀五十枚を賜りて、休息の爲、瀧田の城へ、遣はされたり、と傳聞て、歡ぶこと斜ならず、軈て浴湯し沐梳り、夕饌を賜る程に、君侯(義成)又夫人(吾嬬前)より、宿直衣と平生服と、必用の調度さへ、皆具て賜りければ、親兵衛は寵恩の、隈なきを畏みて、その歡びを稟せしに、姑且して義成主は、親兵衛を召よせて、昨夜の宿直、虛しからで、その功ありし歡びを、云云と宣はするに、義通

は既に前集に見えたり）のおん臥簟を、故のごとくに做し奉りぬ。今宵よりおん身近う、宿直を仕らせよ、とある御諚也。卒給へ案内をせん。といふに親兵衛異議もなく、亓は承り候ひぬ。しからば參り候はん。と答て軈て共侶に、濱路姫の病の牀の、次の間に來にければ、給事の老女出迎へて、今番の夜務を勞ひなどす。當下親兵衛は、濱路姫の病惱輕重、又物怪の障の有無を、云云と尋れば、老女答て、姫上は、黃昏時候に、啻一たび、魘れさせ給ひしのみ。おん身の舘山より來ませし、と聞えし後は然る事なく、只今睡らせ給ひき。と答る間に、看病に通夜して侍る婢妾們が、數名歟、親兵衛を、物の隙より偸看て、仂なく聒く聲す。年三十可なるは、出て親兵衛に對面しにけり。左右する程に、短夜なれば、窻の隙より亮亘りて、庭に雀の聲する時候、親兵衛は暇を賜りて、又奧隷の某甲に、引れて罷出しかば、舘の內なる褊子舍をもて、休息所と定められ、這里にて早飯をたうべなどす。豫臥簟も儲てあり。晝は勤務もなき身なれば、權且睡臥給ひね。と給仕兒們の薦るまに〳〵、軈て枕に就にけり。恁りし程は、姥雪與四郎は、この日巳の五刻過る時候、親兵衛が伴當の、後れたるを斷俱して、稻村の城に來にければ、堀內藏人貞行、東六郎辰相奉りて、問注所に召登し、則國守の仰を傳へて、富山以來の賞として、白銀五十枚を賜り、瀧田へ退りて、宅眷們を、慰めて在留すべし。月俸、こ

と、共に一箇の壺に納れ、又その壺を瓶に藏めて、濱路姫の臥簞の下なる、土中を穿ること三尺許、今宵速に埋させよ。こは世に兩個と得がたかる、奇貨なるぞかし。等閑にして碎くべからず。その事を做果るまで、濱路が病牀を外へ移して、埋る折に我に報よ。我みづからゆきて見ん。鍫拿る者を多く聚合て、快々せよ。と分付て、件の玉を遞與し給へば、奥隷の老黨は、こゝろ得果て退りけり。登時義成主は、又親兵衞に宣ふやう、目今汝が聞くごとく、玉を土中へ埋る折は、我みづから指揮をすべし。然らば心もとなき事なし。權且遠侍に退りて、長途の疲勞を休らへよ。事整はゞ、濱路が臥房の、邊へ案內をするものあらん。その折宿直をせよかし。と叮嚀に課すれば、親兵衞は、歡びを、稟して遠侍へ退りけり。恁りし程に、義成の夫人吾嬬前は、今宵犬江親兵衞が、一騎館山の城より來ぬる事、及守の所望に儘して、那靈玉を貸まゐらせ、嚮に異人の敎しごとく、埋措るゝ事までも、具に傳聞給ひて、その歡び大かたならず、軈て專婦使をもて、親兵衞に果子を賜り、又美酒と、餚數種賜りて、疲勞を慰め給ふ程に、夜は丑三の時候になりけり。浩處に、甲夜に靈玉を預けられたる、奥隷の老黨出て來つ、親兵衞にうち對ひて、犬江生、さぞ徒然に候はん。鯫生が奉りたる、靈玉は埋果たり。舘のおんみづからをはしまして、瘞したりければ、心安く思ひ給へ。因て五の君（濱路姫をいふ。事

く埋措んとにはあらず、那物怪の對治せられて、濱路が病著瘥りなば、拿出さして返すべし。這一椿事は、我意にあらず、婦女毎の云云と、願へばとても大人氣なし、と思ふものから談ずるのみ。苟且ながら靈玉を、土中に埋措れん事の、敦しくは借りずもあらなん。然らば坐席を擇ずに、縦濱路が枕方也とも、便宜に儘して、宿直をせずや。といはれて親兵衞、阿とばかりに、答難つゝ沈吟じたる、肚裏に思ふやう、この靈玉は、我身と倶に、親の胎内に在りし日より、自然と得たる寶貝なれば、牡鹿の角の束の間も、人に貸すべきものならねども、君命なるを爭何はせん。愁に姫上の、枕方に宿直して、外樣の譏誚を受んには、優すべきものを、と尋思をしつゝ、頭を擡げて稟すやう、御諚の如く、這靈玉は、生れし日より片時も、身を放つことなかりしかども、祖母を年來御扶持の下に、召置るゝ御恩を思へば、獻つるとも惜しからず。況一霎時の御用をや。姫上瘥り給ふまで、埋措し給へかし。と承諾まうしつ項に掛たる、護身嚢を開きつゝ、玉を拿出て、懐紙に、載て恭しくまゐらするを、義成やをら受とりて、後方に侍りし近習們に、燈燭を秉して、件の玉を、左さま右さま一霎時見て、聞しに勝れる奇妙の美玉、果して自然と仁字あり。奇也々々。と嘆賞しつゝ、鼻紙臺なる香匣に、裝攸め、臺に登して、奥隸の老黨某甲を遽しく召よせて、玉を埋る事由を、解示して宣ふやう、這個玉を香匣

臥房に、宿直して試てよ。勿論汝は、うち見には、十六七の後生なれども、實は九歳の童ならずや。然ば奥まりたる閨門に、通夜して看病の婦女輩と、共侶に侍るとも、忌嫌ふべきよしもなく、人の譏誚もあらざるべし。什麽この義をよくせんや。と亦他事もなく聞え給へば、親兵衛は困じたる、面色しつゝ稟すやう、御諚承り候ひぬ。千軍萬馬の大敵に、打向へとある御用ならんには、思ひの隨に克得ずとも、面目も候はん。然る類にはあらずして、煙の如く、影の似く、眼に見えても、手には捕られぬ、物怪ならばいかにして、輙く對治せられんや。術なき所爲に候へども、推辭奉らんは最も惶し。御意に隨ひまつらん事、勿論に候へども、姫上のおん枕方に、夜と共に侍らん事は、影護きを爭何はせん。御病牀の次の間にて、宿直仕るべうもや。といふを義成主聞あへず、开は左も右もの事ながら、就て又一條の所望あり。汝が持る靈玉を、濱路が臥房の簀子の下なる、土中に深く埋措かば、いよゝその效速にて、後々までも障导なしといふ、異人の教誨ありとか聞にき。こは婦女毎の告訴にて、正しき照据あるにあらねば、半信半疑、決斷しがたし。なれども、嚮に館山の兇黨が、汝の玉の光に撲れて、轉倒氣絶したりと聞けば、その所以なしといふべからず。汝濱路が枕方に、近づく事を欲せずは、權且玉を我に貸ね。簀子の下に埋措して、その效をも亦試てん。然ばとて件の土中に、久し


淡路姫の病牀に侍女等物怪を見て駭怕る



等閑になし給ひそ。とこゝろ得さしつ、消息を、拿出して遞與すにぞ、與四郎やをら受收めて、いはるゝ趣こゝろ得たり。先度の夜行と同じからねば、在下は、和君の馬に、附て走るも無益ならん。既に晷は斜になりぬ。在下は歩行なるに、暮なば路にて歇店に就て、明日稲村へ參り候はめ。快々出させ給ひね。といふに親兵衛再議に及ばず、既にして逸時良于、景能們に別を告て、伴當をばいそがせず、皆姥雪に從ふて、徐に來よ。と分付て、單青海波にうち騎りつつ、舘山の城を出る程に、未の五刻になりにけり。爾程に親兵衛は、十數里の路程を、纔に二時許に騎走らして、酉の五刻の左側に、はやく稲村の城に來にければ、軈て本番の甲乙に、就て恁々と聞えあげしかば、義成主その著到の、神速なるを譽させて、遠侍にて夜飯を賜り、馬をば厩役人に預けよとて、這宵親兵衛を、身邊近く、召よせて對面あり。然而宣ふやう、汝舘山に在城してより、その地いよ〳〵無異なるよし、既にその聞えあり。歡び思ふ所也。今番猛可に召來たしぬる、所要の義は、使を兼て、加番の輿に遣したる、苫屋八郎に聞つらん。抑濱路姫が病著は、物怪の祟と聞ゆ。醫藥はさら也、驗者の祈禳も、今にその效驗を見ず。汝は武勇世に比類なく、且那仁字の靈玉を、感得したるよしさへあれば、件の物怪を鎭ん事、汝にしくものあるべからず、と人もいひ我も思へり。望しからぬ所行なりとも、今宵よりして濱路が

第九輯 巻之十

第百十回

反間の術妙椿犬江を遠ざく
妖書の孽仁妙眞に辭別す

却說犬江親兵衛は、濱路姫の鬼病のよしを、うち聽しより毫も疑議せず、隨卽守城の勤番を、自餘の三士（逸時、良于、景能）に儘しつゝ、遽しく身裝して、立出んとせし折に、姥雪輿四郞に悄語くやう、知らるゝごとく稻村より、恁猛に召させ給へば、我は靑海波に乘走らして、はやく那里へ參るべし。翁は然したる御用にあらねば、寛に出て來給ひね。因て憑むべき事こそあれ。我身富山を出しより、憶はず紈袴に暇なければ、いまだ大母（妙眞をいふ）に對面せず。今番稻城へ參りても、そが儘留置れん歟、是も亦知るべからず。しからんには更に又、等も不樂しく思はれん。我豫寫措きたる、消息一通玆に在り。翁瀧田へ退る日に、這消息を大母に見せて、よしを告て慰め給ひね。目今火急の君命を稟て、言私に及びぬるは、忠臣の本意にあらねども、倘人竝に俸祿を、定めて賜る身にしあらねば、恁ばかりの事は許されもせん。

文は言承して、いそぎて罷出にけり。爾程に義成主は、猛可に四家老（杉倉、堀内、東、荒川）を召聚合て、件のよしを議させ給ふに、皆しかるべし。と稟しゝかば、隨卽犬江親兵衛を、當城に召來たすべしとて、苫屋八郎景能に、御教書を持たし、加番として、倶に館山の城へ遣すべき、雜兵三百名を授けらる。親兵衛が在らざる程は、守禦の士卒を增すべき爲也。且姥雪與四郎も、親兵衛と倶にかへりまゐれ。老人の事なれば、姑且瀧田へ遣して、休息の暇を賜ふべしとて、その義も御教書に載られたり。寔に火速のおん使也ければ、景能は雜兵們の、揃ふを等ず馬に乘て、一騎館山を投て走らしけるに、今朝辰牌に稻村の城を出て、この日未の初刻に、那里へ著到してければ、親兵衛は、逸時良于、與四郎と倶に諚使を迎へて、御教書を賜り命を拜して、景能を管待す程に、景能は、濱路姫の病著危殆の事の趣、夏旻が怨靈障㝵のよしを、箇樣々々と告知すれば、大家ひとしく駭嘆じて、安からぬ事に思ひけり。畢竟親兵衛が、與四郎と倶に、稻村の城へまゐりて、後の話說甚麼ぞや。开は次の卷に、解分るを聽ねかし。

に魘れ給ひて、玉體安からざりし折、義家朝臣に詔して、寢殿を衞らし給へば、義家朝臣奉り、裝束の下に身甲して、弓箭を携て、その甲夜より、おん枕方に近づき奉り、既に御惱の折に莅て、義家大音に喚り給ふやう、鎭守府將軍、前陸奥守源義家、敕詔によりて這里に在り。何なる天魔地妖也とも、立地に退散せよ、と最も緊しく喚かけて、弓弦を三たび鳴らし給ふ。その聲殿上に响亘りて、听者毛骨も竦立までに、最凄じかりけるが、是より物怪消滅して、御惱瘥らせ給ひしといふ、這事載て、舊記に在り。恁れば今番親兵衞を、舘山より召來して、姫の病牀を衞らしなば、その效なしとすべからず、と思ふは誰何。と宣ふを、照文承りて、異議に及ばず、御詮定に理りにこそ候へ。況異人の示現あるをや。君にも知せ給ふごとく、親兵衞が持る靈玉は、光を放ちて邪兇黨を、遺なく懲せし奇特あり。然ば親兵衞は、身單にて、千百に餘れる大敵を、一時に降伏せしめたる、武功の神童に候へば、人すらその年歲の多からぬを、忘れて侮るもの候はず。且犬は物怪の、怕るゝといふ因ある犬江には、妖怪まれ怨靈まれ、なでふ憚らぬことや候べき。速に召よせて、御病牀守護の義を、仰付られ候へかし。と薦め稟せば、義成主は、然也々々。と點頭給ひて、しからば汝瀧田に退りて、大人にこのよしを聞えあげよ。與四郎も召よせて、他をば瀧田へ遣さん。こゝろ得てよ。と仰すれば、照

をはせしかば、母刀自おん胸安からず、こは病痾の所爲ならんとて、悄々地に洲崎明神へ、詣さし給ひたる、そのかへるさの事かとよ、途に異人の示教あり。是則洲崎の洞嶇なる、役行者の化現にて、吉凶禍福、後々まで、いはれしよしに違ざりき、と傳聞たる事しもあれば、這囘の異人も那行者の、示現ならじとは謂がたかり。なれども婦女子のいふ事にて、正しき照據あらざるに、驚されて親兵衛を、徵て濱路の看病を、課せんは何とやらん、識者の議論も影護かり。なほ再三思惟て、そは左にも右にもせん。權且等せ給ひね。と禁めていそぎ給はねば、吾嬬前は本意なきを、一霎時は默止給ひしに、那寃鬼は、夜毎々々に、立顯るゝこと始に倍て、姬の病著重らせ給へば、母君いとゞ堪かね給ひて、快親兵衛を召させ給へ。と守に請し給ふ事、兩三番に及びけり。浩處に瀧田より、濱路姬の安危を問るゝ、老侯の使者として、蜑崎十一郎照文が、朝鮮人參十莖と、生乾の王殘魚一箱を齎らして、稲村の城へ來にければ、義成主對面して、その恩貺を拜して、兩種を濱路姬の病牀へ遣し、然而照文に老侯の、恙なきを歡び聞え給ふ語次に、件の異人の教しといふ、事恁々と言示して、この義先蹤ありといへども、畢竟女子の告訴なれば、我半信半疑して、一日二日と過せしが、つら〳〵と思惟るに、異人の虛實は、左まれ右まれ、良將勇士の妖怪を、鎭たる事例多かり。就中昔堀河院、物怪

せし折、養家の繼毎と聞えたる、淫婦夏曳卽是なり。件の夏曳は、密夫と、謀りて良人を殺さしたる、極惡の罪發覺れて、當時刑戮せられたり。這罪障により、浮む瀨あらで、魂魄今も中流に在り。しかるに姫は、故鄕に還りて、胞姉妹達と共侶に、富貴自在なる深窓の、下に養れ給ふから、夏曳はこれを酷く思ひて、身の惡報を見かへらず、只姫をのみ怨みたる、その祟甚深かり。幵を鎭んと欲し給はゞ、はやく犬江親兵衛を、舘山より召よせて、他が所持せる仁字の玉を、借りて姫上の臥し給ふ、簀子の下に深く瘞め、且親兵衛に、姫の病床を、うち衞らし給ひなば、怨靈立地に退散して、後々までも障导なく、病惱速に平ぎて、百年の壽を保ち給はん。御達稻村へかへりまゐらば、是等のよしを上樣へも、守へも具に聞えあげよ。倘疑ふて惑ひを執らば、後悔其里に達がたし。こゝろ得たる歟。と尊大に、言示しつゝ應を等たで、洲崎のかたへゆく歟と思へば、忽地見えずなりにけり。恁る奇特に女房們は、誰か驚き畏まざらん。是必役行者の、示現にこそ、と感涙の、找むを覺ず伏拜みて、當晚稻村の城へ還ると驟て、先おん母君吾嬬前に、件の奇異の趣を、詳に稟しあけしかば、吾嬬前驚き給ひて、信仰いよ〳〵淺からず、打も閣べき事ならねば、濱路姫にも恁々と、件のよしを告させて、國主に聞えあげ給へば、義成主、眉を顰めて、昔年我女兒の伱かりし時、日夜うち泣てのみ

ふこと大かたならず。是よりして夜は通宵、睡らせ給ふこともなく、三たびの饌も退けて、湯劑も果敢々々しくはたうべ給はず。形痩色蒼みて、病苦に堪がたく見えさせ給へば、給事の女房們は、日夜枕方後方に侍りて、看病まゐらせずといふものなし。然ばおん父義成主は、うち驚せ給ひつゝ、良醫を徵て、醫案を尋ね、又陰陽師に祓禊して、病鬼を鎭んと欲りし給ふに、或は鬼病也といひ、或は物怪也といふ、その勘文は相似たれども、いまださせる效驗なかりき。又おん母君吾嬬前の沙汰として、當國養老寺の境内なる、洲崎明神、及その寺の山脚なる、役行者の石巖へ、代參の女房を遣して、濱路姫の病著平安の願文をまゐらせ給ひ、又富山なる伏姫の墳墓、幷に峯の觀音堂へは、侍品を使者として、冥助を祈らし給ひけり。恁りし程に、役行者の石巖に參りたる、女房們がかへるさに、異人とおぼしき一個の老翁、鬢髯の眞白なるが、眉に八字の霜を置たる、童顏仙骨凡ならず、身には麁栲の淨衣を被て、手に錫杖を衝鳴らし、最も高き足駝を穿て、路傍に鵠立在り。女房們が伴當を、倶して轎子を吊しつゝ、心ともなく近著來ぬるを、件の異人喚かけて、喃和女郎們は、稻村より、洲崎へ代參に立られて、下向し給ふにぞあらんずらん。今番濱路姫の病惱は、寔に所以ある事なれば、鍼灸藥餌を盡すとも、又神佛に禱るとも、輒く瘥り給ふべからず。那物怪は別人ならず、姫の甲斐國に在

いへるぞ宜なる。素藤は早晩に、妙椿と狎親みて、或は巫山の雲と做り、或は楚臺の雨と做て、倶に臭骸を抱きしより、妙椿に亦頭を剃せず、折々興に乘しては、調戲き涯りを盡せども、外に憚の關もなければ、樂み多しと思ふものから、宿望胸に絶ざれば、ともすればいひ出て、那法術を促す程に、既にして春深き、三月十日あまりになりにけり。恁而有一日妙椿は、素藤に悄語くやう、日屬おん身に催促せられし、那犬江奴を遠ざけて、舘山の城をとり復すに、今は大抵好時候也。咱儕は聊投かたあれば、出て五七日還るべからず。久しきことにはあらざるに、留守し給へ。と苟且に、こゝろ得さしつ飄然と、往方も知ずなりにけり。この故に素藤は、人なつかしき山腹の、莽に獨日を彌れば、鳥の聲風の音にも、胸轟きて安からず、赦免に漏れし俊寛僧都が、單鬼界の島守に、なりけんも恁やとばかりに、想像るゝ寂寞世界、夜は殊さらに萬籟聲なく、睡られぬ隨に種々無量の、妄想胸に浮むのみ、最堪がたく思へども、志願成就の近からんに、恁ばかりの事何かあらん、と氣を勵しつ慰めて、只妙椿がかへり來ぬるを、今日歟明日歟と等たりけり。案下再說。この時安房の稻村には、三月某の日の夜艾より、城内に妖怪あり。譬ば婦人の寃鬼なるべし。眞白の衣を被下したるが、長き黑髮を振亂して、濱路姫の寢所の邊に、立顯れたりけるを、正可に見きといふ者多かり。その折々に濱路姫は、魘れ給

亦咱儕の法術に在り。事の成るまで這里に在しね。然とて光陰を過さんや。遠からず那城を、とり復すべう思へども、犬江奴が舘山に、あらん涯りは不便也。那奴を主に疑して、遠く他郷へ走らしなば、手に唾して那城を、略ん事極めて易かり。その法術は、恁々也、箇樣々々。と祕密の魂胆、思ひの隨に解示せば、素藤滿面うち笑れて、うち頷きつゝ應をしつゝ、奇也々々。と嘆唱しつゝ、遽しく席を避て、妙椿を伏拜みて、女菩薩、我身の一大事は、既におん身の方寸に在り。只方便に儘するのみ。等閑になし給ひそ。と憑むを妙椿聞あへず、开は宣ふな。世間に、緣なき衆生は度しがたし。況おん身は知己なるに、憑れずとも然ばかりの、力を盡さで已べきや。と慰めつ、手を拿りて、扶起して、又上坐に、復してなほも果しなき、閒談に時を移しけり。是よりして素藤は、養れて這菴に在り。人迹絕たる太山なれども、主の女僧が幻術もて、東西いと多く貯たれば、野味魚肉さへ匱しからず、喫めども竭ぬ酒さへあれば、每日每日に管待されて、長き春の日も徒然ならず。且妙椿は、世人傳へて、八百歲といふめれど、うち見は四十許なりしに、幾の程にか少やぎて、誰に見せても三十には、いまだ至らじと思ふべき、面影の艶々しきに、男女席を俱にして、夜も亦臥房を異にせず。主と客と二人のみにて、旦ても暮ても盃を、繞らす外に所爲もなし。然ば世の常言に、酒は必是色の、媒妁也、と

せん與なりき。みづからその身を見かへりて、擣鬼ならぬを知り給へ。始ありて終なき、浮たる人と同列にな思ひ給ひそ。と窘めて、一五一十を解諭せば、素藤は、听く毎に、意表に出る事のみなれば、始て夢の覺たるごとく、且感じ且羞て、亦いふよしもなかりしが、憶ずも太息を吻て、現不可思議なる、女菩薩の妙術。恁る手段はありながら、那犬江奴を厭勝の、手を空くすといはるゝを、思へば我身、士卒と倶に、鈍く手稠になりたるも、亦怪むに足らずかし。抑這里は孰國にて、女菩薩は亦幾の時候より、這頭に菴を締びたる。勢ひいはるゝ如く也とも、我を帮助る術あるや。願ふは爲に會稽の、耻を雪るよし欲得。いかで〳〵。と請求れば、妙椿、然こそと慰めて、心弱しや、恁ればとて、我から胸を腐らすこと歟。咱儕おん身を資ん、と思はずはいかにして、遙々這里へ誘引んや。這地は則上總なる、羽賀舘山の間にて、人不入と喚做たる、殺生禁斷、斧斤不入の、故しもあれば恁までに、人迹絕たる太山に侍り。然ば昔より這山にて、禽獸を獵る事はさら也、樵夫造炭翁、草刈る童も、入れば必山神の祟あり、生て還るは稀也、といひもて傳へて犯す者なし。旅客も亦憚りて、外を過りて、這峯上を、うち踰てゆくことしなければ、浮世を潛ぶ隱宅には、玆に優たる地方は侍らず。因て咱儕は、おん身の與に、擇て菴を締びたり。志願成就の折を得ば、遠近に散在しぬる、士卒を招き裒ん事も、

千軍萬馬も當りがたかり。この故に、おん身はさら也、城内の士卒、千百數名、那奴一個に威服せられて、阿容阿容として降を請ひしは、素より是人力もて、敵しがたきによりて也。咱儕も亦この年來、祕藏の明玉なきにあらねど、那奴們が感得の、玉には及ぶべくもあらず、勝を攬ることかたければ、かの折におん身們を、助けも得せず、救ざりしを、うらむは比丘尼に睾丸の、なしとて不足にせらるゝと、又何ぞ異なるべき。といひつゝ吻々とうち笑へば、素藤も堪難て、腹を抱て笑ひしを、妙椿禁めて、且听給へ。かの折おん身を覿面に、助けず救ざりしかども、おん身と倶に多かる士卒の、命を其里に執留めしは、咱儕が擁護したる也。那親兵衛は勇士なれども、未生よりして仁字の、玉を感得したるをもて、殺生を旨とせず、物を憐む心深かり。又義成も仁義を倡へて、暴戾の君にあらざれば、誅すべかりしおん身們を、殺さで追も放させしは、他們が主意のみならず、那守護神の隙を窺ひ、その心の緒を狂はして、思ふ處へ援よせたる、咱法術の所以ぞかし。然ば昨日墨田河にて、西の岸なる繫舟も、又蓑と割籠の飯も、皆是咱儕の方便にて、おん身の熟睡したる折、舟を這山に遠からぬ、浦邊にはやく漕戻して、悄々地におん身を領て來つゝ、喚も覺さで樹下に、そが儘臥させ置たりしは、咱精妙の手段あるを、おん身に知

たるを、竟に悟らで已にけり。爾程に妙椿は、地坑に柴を折燒て、先素藤に茶に薦め、且早飯を羞めたる、管待等閑ならざりければ、素藤纔に心おちゐて、又妙椿に云云と、いぬる頃義通を、俘囚にしたる始より、國守と鬪戰の爲體、且犬江親兵衛の、武勇に城兵敵し得ず、謀りし事の畫餅に做りて、林を逐れし山の群猿、主に棄られし路の雛猫に、似たる艱苦を云云と、告るを妙椿聞あへず、开は宣ふな、始より、咱僧は天眼通をもて、一事も漏さず皆知れり。いまだ曉得給はずや、曩に舘山の城内より、諏訪の社頭の巨樹の樝まで、遠く地道を穿ちき、と見えたるも咱幻術にて、城の士卒の那里へ迨るを、凡夫の眼に見せざるのみ。この故に樝の内に、在りと見えたる地道の出口は、後に迹なくなりたる也。譬ば、世にいふ仙術に、須彌を縮めて罌粟の内に、容るゝも皆這理りなるを、思はざりけん鈍ましさよ。然ば咱僧は別れて後も、月來おん身の影に立、形に添て幾回となく、助けし事の多かりしに、いかにせん、那犬江といふ神童には、孝烈儔多からぬ、伏姫の神靈が、間なく時なく守れるに、剩那奴が未生より、感得の靈玉あり。鴻濛肇て判れし折、天地と共に生出たる、天津八尺の勾瓊なりしを、役小角が刻做て、最多角數珠に作りしより、その數識の八箇の大玉には、仁義禮智、忠信孝悌の八字を分ちて、おのづからにその一字、玉毎にある者なり。就中犬江が持るは、德を天地と共にすといふ、仁


人不入山に
素藤
妙椿に逢ふ
妙ちん



ば歡びに勝ねども、なほ疑ひの解ざれば、左右なく母屋へうちも登らず、且妙椿の爲體を、左さま右さま又よく相るに、尙未時可なる、白綸子の小袖の、帽最長きを被て、黑繻子の、廣は五六寸なる帶を、前にて寬に結びたり。始て見たりし面影より、年十あまり少やぎたるが、風もや感けん、圓頂の毛は、二分歟三分歟延たれば、天鵞絨の似く黑みたる、富士額際立て、化粧ぬ美目の馨やかに、愛敬づきたるも奇異なるを、權者なればと怪まざりける、素藤が先いふやう、尼姑は曩に苟且に、別れし後は信もなく、我那犬江親兵衞に、生拘られて寄隊の陣へ、牽れしを知ざる歟。兀自妙術はありながら、始には似ず、かの折に、救ざりしは甚麽ぞや。憑甲斐なき人心、益なかりき。と怨ずれば、妙椿さこそ。と頷きて、情由を得知らぬ凡夫の臆斷、如右思るゝは理りなれども、一朝にはいひ釋がたかり。先這方へ。と慰めて、筧の水を洗足盥へ、移して脚を濯して、卒とて母屋へ請登すれば、素藤は地炕の邊に、やをら坐を占て四下を見るに、菴は都て三間にして、納戸あり庖湢あり。坐席の正面に、六字の名號の卷幅を掲げて、御前の机案に香爐あり。兩個の竹の花筩に、太山莽と、山櫻の半開きたるを、最も許多く活たるが、その六字の名號を、南無陜張陏陁と、寫たれば、こゝろ得がたく思ふのみ、義を問んはさすがにて、訝りながら、敢詰らず、他が憚るよしありて、故意文字を異にし

と半晌許。人に問まく思へども、牛を牽て峰を下る、牧童だも見ることなく、踈朶を駝ふて谷を出る、樵夫にも逢ふことあらず。宇津山ゆく業平ならで、夢歟現歟、現にも、夢にも人に逢ざりしを、却あるべきにあらざれば、覺束なくも辿々て、人煙を索てゆく程に、と見れば前面の谷蔭に、最も大きなる蓋松を片拿て、締掛たる草 菴あり。竹の柱茅の檐、側曲る隨に伐らず削らず。人跡絶たる這太山にも、住めば住む人のありけるよ、と思へば有繫に憑しくて、葛に攜り岨を傳ひて、辛うじて那里に迨るに、柴垣締遶らしたる、東面なる兩折戸は、半分斜に開きたり。找み入りつゝ喚門へば、主人なるらん女子の聲して、這里は浮世の外なれば、人に訪るゝことはなきに、誰にかあらん。と呟くのみ、速には立も迎ざりしを、素藤心焦燥て、否咱們は仇の爲に、家を喪ひ路に迷ふて、憶ずも來ぬる也。願ふは一霎時憩して、一碗の饒々を賜ふべく、里へ出る路の程を、指南せられば、大慈大悲の、功徳何事歟これに優すべき。やよ喃々。と叫立れば、內には應と答つゝ、やうやくに立出て、やをら障子を引開るは、是則一個の女僧也。素藤を見て像訝に、思はざりけんおん身は正に、蟇田の大人にあらずや。といはれて素藤驚きながら、眼睛を定めて這女僧を、見れば是別人ならず、八百比丘尼妙椿也。こは什麼いかに。とばかりに、鄙語にいふ、地獄にて、逢る佛の船護光、又浮瀬はありけるよ、と思へ

邊に赴く程に、折から盈潮也ければ、舟は這方の岸に寄りたり。軈て閃りとうち乘て、見れば故たる菅簑あり。こは究竟の衾兒にこそ、と搔拿てやをら引起せば、下に一箇の割籠あり。拿揚て試るに、重やかなるを訝りながら、開きて見れば飯と味噌あり。天の賜慚愧し、とうち戴きつ、箸を索て、立地に啖ひ盡せば、海月の骨にあふ心地して、然ばかり力憑にけり。この時黄昏なりけるに、昨夜は里見の雜兵們に、うち守られたる船に搖られて、目睡もせず來にければ、今宵ははやく枕に就て、疲勞を醫し氣を養ふて、明日の便宜を索ぬべし。世話にも果報は寢て等、といふことあるに。と獨語て、臥しつゝ被く蓑蟲の、鬼の子ならで山賊の、親に稟たる似非胆勇、浮宿の鳥に身を倣て、今宵も舟に波枕、所寓の岸は定めねど、住めはすむ世の墨田河、心ばかりは濁江に、影は宿らぬ甲夜闇の、黑白も知らぬ高鼾、軈て熟睡をしたりける。素より疲勞れし癖なれば、素藤は宿轉もせで、幾時歟睡りけん、鳥の聲に喚覺されて、忽然と眼を開けば、こは什麼、那河邊なる繫舟を、宿としたるに似るべうもあらず。と見れば松柏の故たるが、枝を交へ日光を掩ひて、頭の上に差出たれば、うち驚きて遽しく、身を起しつゝ四下を見るに、有つる舟は迹もなく、這頭は正に山中にて、深林奇巖の外に物なく、狐兎栖を得て、浮世に遠く、幽冥に近かり。つく〲と思ひ難て、兩手を叉みつゝ惘然と、鵠立こ

田川なる、西岸に泊しかば、陸に登し追放ちて、雜兵們は又船を、漕して安房へ還りけり。當時蘂田素藤は、獨岸邊に鵠立て、前面遙に看亘すに、彼首は舊たる名處にて、昔在五中將の、卒事問ん、と咏み給ひたる、都鳥にやあらんずらん、喙と脚の朱かるが、淺瀨に立て求食る見ゆ。況梅若塚の楊柳の枝は、長き輪囘を今もかも、無常の風に靡くめり。紫の筑波峰は、遠く夕霞天引て、綠なす牛島は、近く角組む蘆葭も伸たり。袷と云恰といひ、情景兩ながら盡し得て、趣あるに似たれども、汨羅に呻唫ふ屈原ならねば、沈んとするに命惜けく、還んとするに家はあらず。背に受たる笞瘡に、衣の障れば疼かるに、額には十文字の、黥をせられしかば、誰も罪人なるを知るべし。那里に歇店を求ん歟、と思ひ難つゝ長き汀渚を、徘徊しつゝ時も移りて、下晡になりにけり。登時素藤は、肚裏に又思ふやう、益なき足を疲勞して、東西欲しうなりたるに、這頭は都て水原にて、里人の家もなければ、況酒沽る又六が門などは、夢にだも見がたかるべし。願八盆作を首として、我兵每は分たれて、那里へか追放されけん。はやくも逢はゞ恁る折、商量敵になるべきに、思ふのみにてこも無益なる、我から速に定難たる、身の往方こそ果敢なけれ。見れば那里の水草の中に、繫舟一艘あり。今宵は且那舟に、曉して終夜好主意を、絞り出して左も右もせん。是より外に術なし、と尋思をしつゝ遽しく、舟の

罪戻は、他事ならず。縱舊家の氏族にもあれ、這房總の民として、大人を犯し奉らん、と欲せし者で候へば、實に歸降を願ふとも、必是極刑に、處すべき事は勿論なるを、然までに憐愍思召す、御仁心を爭何はせん。再問して言實ならば、仰に悖り候はじ。と答給へば、義實主は、像快に點頭て、そは憑しき事也かし。當家の先祖、義家朝臣は、降人安陪宗任を、饒して身親く使れしかば、宗任遂に復讐の、害心を轉して、良臣となりし例あり。今の滿呂安西は、宗任にこそ及ばざらめ、人として再生の、恩を思はぬものはあらじ。親兵衞が請稟して、那首惡たる素藤すら、死罪を饒されきと聞えしに、その餘は物の數にもあらず。必よ我所以に、苛くなものし給ひそ。といと正首に慰め給ふ。閑談數刻に及びたる、その詰朝義成主は、義通御曹司と共侶に、瀧田の城を辭し去て、稻村へとて還らせ給ふ。伴立昨日に彌優て、貞行辰相以下の士卒を、前後左右に從へたる、馬の足掻も緩やかに、路さへ長き春の日の、天よく晴て、戰吹く風に、偃す草は、野も山も、君が威德の涯りなく、高き例に仰ぐなる、今を盛の花の雲、西も東も遲々と、路傍にたつ陽焰の、五百に餘れる人馬の裝ひ、愛たくも亦勇ましきを、這里にも觀る者多かりけり。話分兩頭。爾程に、蟇田素藤は、辛くも死刑を饒されて、東辰相が隊の雜兵們に、水行より身單を、武藏のかたに送り遣られし、次の日の未牌の時候に、その船は墨

實主ははやくより、其里に在して待せ給ひぬ。瀧田の諸臣、稲村殿の伴當も、許されて觀る者多かり。然ば伶人は秘曲を盡して、舞樂の袂を翻す。堪能の吹鼓、五番にして果しかば、妙眞音音們は、暇を給はりて、曳手單節と共侶に、力二尺八を携て、宿所へぞ退りける。恁ても饗饌竭ざれば、義成主は、御曹司と、共に當城に止宿あり。その甲夜の間に義成主は、賞罰の可否を、老侯に問まつれ給ふ言の叙に、上甘理墨之介弘世の事をいひ出て、有つる儘に報給へば、義實主點頭給ひて、神餘は當國の舊家也。そが子孫に疑ひなくば、宜く扶持し得させ給へ。況擬人ならんには、いよゝ憐むべきもの也。又天津九三四郎は、件の弘世に孝順也。既に孤忠の聞えあれば、他も亦罪を饒して、弘世に隷るを仁といふべし。又那蒲呂復五郎、安西出來介と喚做す者も、眞實歸降の心あらば、饒して祀を繼し給へ。讐に報ふに德をもてすといふ、聖教に稱ひやせん。又荒磯南彌六は、昔年當國の俠者にて、犬江親兵衛の曾祖也ける、杣木樸平と共侶に、謬て神餘光弘を、犯して刑戮せられたる、洲崎無垢三が外孫也といひにき。志氣ある者とし見ゆれば、他們も赦免あらまほしけれ。近日件の罪人們を、稲村へ遣すべし。有司に命じて、虛と實を、左にも右にも糾し極めて、饒さるべくは饒し給へ。誅するに優すよしもあらん。こは是老が願ひにこそ。と叮寧に宣へば、義成主謹て、仰承り候ひぬ。他們が

てもかくても今世では、逢がたからんと思ひぬる、稚枝の春に、老樹すら、なほ憑しきは命に侍り。非除一年三箇月、相見ずとても胸安かり。氣長く折を等侍らんに、世に有がたき御諚の上に、おん東西多く賜する、御恩に御恩を累られて、いよゝ冥加に餘り侍り。と歡びを稟して退る程に、義成主は、又音音と曳手單節、力二尺八們を、身邊近く召よせて、六稔富山に親兵衛を、守傅きたる奇特の事、及與四郎が南彌六を、搦捕たる當日の搼き、且親兵衛に從ひて、舘山へ赴く折、駿馬に後れず走りし事、他をも權且舘山の城内に、留置るゝことのよしを、叮寧に聞え知らして、その功を譽させ給ひ、這五名にも白銀と、卷絹と綿をその人別に、多く取らし給ひしかば、音音はさら也、曳手單節も、感涙坐に咜て、答奉らん所を知らず、恁る御恩も道節們に、舊緣ありける餘慶にて、併伏姬神の、冥助にこそ、と更に又、稱稟しつ、福草の、幸ある世とて存命し、身の賤きを忘るゝまでに、惶うも歡びを、聞えあげつゝ、妙眞と、俱に罷出んとせしを、義成主留めさせて、好折なるに、汝們は、妙眞も共侶に、女房の勾欄にまるりて、能樂を拜見せよ。老侯が召させ給ひしも、开が與にぞあらんずらん。穉兒們がさぞ樂しかるべし。いそぐことかは。と宣へば、大家亦復歡びを、稟して軈てその役人に、挽れて勾欄へまるりけり。恁而能樂始りぬ。と聞えしかば、義成主は、義通君と、俱にその席に出給へば、義

祝壽の酒宴あり。この折義實主は、貞行辰相、高宗友勝們を召よせて、その軍功を褒賞させて、東西を賜ふこと差あり。又小森衞門篤宗、浦安兵馬乘勝、田税力助逸友も、倶に老侯に見參して、病後の禮を稟しけり。既にして酒宴初獻の折、義成主、及義通君も、名刀各一口と、夷灊の土宜種々を、老侯に獻り給へば、義實主も、這二所に、牽出物をまゐらせ給ふ。其馬二頭は、蜑崎照文鮹船貝六郎奉り、庭上に牽もて出て、貞行篤宗に遞與しけり。恁而伶人參聚ひて、祝言の猿樂あり。この折妙眞と音音們と、曳手單節も兒子と共に、今日老侯の召させ給ひて、既にまゐりぬ、と聞えしかば、義成主は、妙眞と、音音們五名を召よせて、先妙眞に、今番犬江親兵衞が、舘山にて武勇の捍き、奇特の大功ありしよしを、云云といひ知らして、汝はさぞな一日もはやく、見まくほしう思んが、他が舘山に在ざれば、なほ心もとなきよしあり。因て那里の城主に做したり。いよ〳〵靜謐ならんには、遠からず召來たして、對面させんと思ふかし。この意を得よと慰めて、白銀幷に卷絹と、綿さへ多く賜ふにぞ、妙眞は感涙の、拭むを覺ず頭を擡て、君と神とのおん庇蔭にて、孫にて侍る親兵衞が、心術さへ身長さへ、六稔の程に最大う、世にも人にも勝れたる、不測の功を人傳に、聞侍りしより歡しさに、胸は潰れて宿も睡られず。別れし後の哀しかりしも、忘るゝまでの身の幸に、譬を取るに物も侍らず。と

徒を刑罰の議に就て、國主仁政の越まで、詳に聞えしかば、瀧田の老侯の歡びはさら也、稻村に在す、義通の母君を首として、女兒の御達も、次丸も、諸臣孀毋們、女房まで、天に歡び地に喜びて、倶に歸城を待まつる、准備に暇なかりけり。この時、義通君の傅なる、小森衞門、浦安兵馬、近習田税力助們は、曩に義通の伴に立て、上總なる殿臺に赴きし折、那諏訪の社頭にて、憶はず兇黨に撃れたる、銃瘡稍愈しかば、その折の士卒數十名と、倶に迎に出たるが、義成父子舘山を、立去り給ひし次の日に、上總と安房の界なる、市之坂の頭にて、君侯父子に見參して、義通君の馬の前後に、從ふことを許されけり。恁りけれども義成主は、なほ稻村へいそぎ給はず、降人千代丸豐俊と、上甘理弘世們と、要なき士卒雜兵をのみ、過半稻村へかへし遣し、義通と共侶に、瀧田の城へ赴きて、先老侯に見參しつゝ、今番の歡びを稟し給へば、義實主喜悦大かたならず、犬江親兵衞が富山の搴き、及舘山にて素藤們を、威服したりし大功を、照文が注進にて、聞たる隨にいひ出て、義通の武運愛たきを、祝して笑局に入り給へば、義成主は、その言の、漏たるを又云云と、詳に解稟し給ひて、今番の勝利は外ならず、只是大人の御盛德と、女兒の靈の神助によりて、面を起し候ひきとて、傍をやをら見かへり給へば、義通も亦膝を找めて、大父の君に、身の幸ありける、歡びをなん舒給ふ。是より席を改めて、

又貞行に課するやう、那千代丸豊俊は、素藤が黨類なれども、數世榎本の城主なりければ、素藤と同例に、拔きて追放つべきものにあらず。他は汝に預んず。稻村へ領て還りて、緊しく閉籠置ねかし。又上甘理墨之介弘世、と喚做す者あり、他は要なき癡人なれども、神餘の落胤なるをもて、こも稻村へ遣すべし。この義は竊に六郎們に、分付たりき。と宣へば、貞行はこゝろ得果て、その仁政をぞ感じける。この次の日に義成主は、義通御曹司を伴ふて、凱陣の提點あり。堀内貞行、東辰相、小森浦安、以下の甲乙、勇士猛卒千五六百名、隊伍を整へ相從ふて、舘山の城を出給へば、犬江親兵衞、姥雪與四郎、及田税戸賀九郎、登桐山八共侶に、或は城の內外を警固し、或は遠く郊外まで、送りて凱陣を祝したる、約莫その事の爲體、但見る甲の綅糸は、五彩あり間色あり。騎馬武者は後陣に從ひ、步兵走卒は先隊に多かり。二十四挿たる白羽の征箭、握太なる重籐の弓、この日を晴とぞ打扮たる。旌旗は山風に飜飜として、白鷺の群飛像く、刀鎗は朝日に晃亘りて、玉の柳の糸にも似たり。近村の良賤街頭に聚合て、觀者路を去あへず、或は跪坐て拜むもあり。當家の武德を稱讃したる、聲囂々と聞えけり。是より先に、瀧田稻村の兩城內には、蟹崎照文、苫屋景能著到して、犬江親兵衞が武功の顚末、素藤立地に虜にせられて、從類降伏したる事、こゝをもて義通君は、優に陣營に還り給ひし事、賊

城に留められて、守禦の一條は承りぬ。這の城主に做されん事は、望む所に候はず。我身長は四尺に近くて、智勇も人並なればにや、纖芥の功ありといへども、生れてより纔に九箇年、誰か孺子にあらずといふべき。然るをこの一城を、領けさせ給ひなば、相應しからず候はずや。且自餘の七犬士は、いまだ見參に入らざるに、徵臣一人拔萃されて、恁る大任に當りては、樂しくも候はず。願ふは這舘山の城主には、另に人を擇ませ給へ。徵臣はその隊に屬て、力を盡し候はん。といふを義成主聞あへず、幵も亦仁義を旨とすなる、賢者の心なるべけれども、汝は非常の人にして、既に非常の大功あり。なでふ非常の賞なからんや。我はさら也、人も皆、汝が功の莫大なるを、うち仰ぐのみ、その年の、幼少なるを誰か論ぜん。且遠く唐山の、故事を原るに、昔燕の昭王が、賢者を招まく欲せし折、然しもなかりし臣郭隗を、先重く揚用ひしかば、樂毅鄒衍の諸賢才、齊より燕に聚來て、王を佐け齊を伐て、七十城を降しつゝ、竟に覇業を起したり。恁れば汝を這城主にして、今我重く用るは、那郭隗が例に似て、郭隗の儔にあらず。自餘の犬士們このよしを、傳聞なば相歡びて、皆聚來て我を佐ん。然るときは燕の昭王が、樂毅鄒衍を獲たりしに、優りこそせめ劣んや。我心既に決せり。やよや勿推辭そ、いなみそ。と諄復しつゝ諭し給へば、親兵衛は困じ果て、僅に言承をしたりけり。姑且して義成主は、

者助と雜魚太郎は、榎本と聽南なる、二箇所の城を相守りて、各城邑を理めよといふ、御教書を齎して、使者を二箇所へ遣し給へば、その地方の民安堵して、歡ざるものなかりけり。恁りし程に貞行は、犬江親兵衛に對面して、その大功と神女の擁護を、越に始て听知りて、胆を潰しつ感嘆して、實に我君侯の、洪福也とぞ稱ける。

第百九回

八百尼山居に敗將を誘引ふ
濱路姫病牀に寃鬼に魘はる

登時又義成主は、親兵衛に宣ふやう、眞里谷信昭が反忠にて、豐俊降伏したれども、單武田信隆のみ、沒落の聞えあり。いまだ往方を知らざれば、なほ枕を高うして、睡るべくもあらずかし。恁れば嚮に課せしごとく、汝は、這舘山の城主として、逸時良干們と共侶に、守禦の用心怠るべからず。瀧田なる妙眞が、さぞな見まくほしかりとて、かへり來ぬるを等つゝあらんか。そは我宜く慰めて、いよ〳〵當郡無異ならば、汝を瀧田へ遣さん。その折祖母に對面せよ。今姑且の事なるべきに、勉めよかし。と叮寧に、聞え給へば、親兵衛は、額衝たる頭も擡て、仰承り候ひぬ。前にも推辭奉らん、と思ひながら事の多くて、その義に及ばず候ひき。微臣當

もなほ那里に在り。又藏人貞行は、武田信隆を赶たりけるに、他は海船にうち乘りて、脱れ去りにき、と聞えしかば、軈て廳南に赴きて、眞里谷信昭に對面して、功を譽て城を受拿り、相俱したる侄の壯佼、堀内雜魚太郎貞住に、士卒三百餘名を授て、廳南の城を守らし、眞里谷信昭を伴ふて、又榎本の城に來つ、隨卽直元と商議して、洒家みづから舘山なる、御陣に注進すべけれとて、軈て千代丸豐俊を、檻車に乘して、夫役們にこれを舁し、又信昭を伴ふて、舘山に來ぬる也。義成主は、貞行們が勝軍の顚末を、うち聽て感悅淺からず、則眞里谷信昭に對面して、一旦の野心、その罪なきにあらねども、忽逆意を轉して、武田信隆が廳南なる、城を一時に攻落したる、忠戰尤賞すべし。恁ればこの功をもて、前の罪を償ふに足れり。本領を安堵して、參勤懈るべからずとて、鞍置たる馬一疋と、大刀一口を賜りて、椎津へ還し給ひしかば、信昭は恩を拜して、誓書を獻り、且素藤們が降伏の、歡びを演、隊兵を領て、椎津の城へ退りしが、今番犬江親兵衛の、胆勇奇特の大功を、聞知りしより舌を掉ひて、國主の武德を仰ぐのみ、永く一方の扞城となりて、竟に叛くことなかりけり。信昭の事、這下に話なし。却說又義成主は、貞行直元が功を譽て、現今番の挊きは、曩に義通に俱したる折、中途よりかへり來ぬる、疎忽の罪を償ふべし。藏人は年老たり、我に從ふて、稻村へ凱陣せよ。武

ひとしく追撃々々、息をも養ず攻たりければ、武田の一軍亂立て、左右なく退難たりしを、豐俊逈にこれを見て、眞里谷が心變りを知らねば、うち驚きつ、且性起りて、目今武田を撃しては、我も當城を有ちがたかり。信隆撃すな、兵毎とて、三四百の軍兵を、魚鱗に備へ、城門推開きて、驀地に馳出でしに、二十日あまりの烏夜に紛れし、直元が一隊の伏兵、忽然と起り立、瞬間に二隊にわかれて、一隊は城に入替り、一隊は豐俊を遮留めて、攻伐つこと酷急也。爾程に、貞行貞住は、信隆を拿獲て、攻著々々揉だりければ、信隆、士卒を多く撃して、馬を棄して逃走るを、貞行はなほ漏さじとて、その通宵赶撃しかば、信隆は身に從ふ、近臣纔に五名になりぬ。今さら皈るに家もなければ、便宜の浦に船を徵め、主從辛く命を免て、日を歷て甲斐國に赴きつ、那里の國守武田信昌は、親族なれば、その隊に屬て、時の至るを俟しとぞ。こは是後の話也。又豐俊はその夜艾、杉倉直元の伏兵に、最も緊しく攻られて、闘戰難義に及びし折、と見れば城内に火光發りて、鬨の聲高く聞え、敵はや入替りぬとおほしくて、那這に推建たる、中黑の白旗の、風に飜りて見えしかば、他は什麼とばかりに、且駭き且悔れども、勢ひ既に窮りて、免るべくもあらざれは、阿容々々と降を請ふて、敵の俘になりしかば、士卒は、四零八落に落亡て、竟に落城したりける。因て武者宣助元は、榎本の城を守りて、今

後武田信隆には佯りて、信昭猛可に持病發りて、對陣に堪がたかり。權且居城に退きて、將息すべし、といひ哄て、その隊の士卒を從へて、夜に紛れて退陣せしを、信隆は欺れて、毫も疑ふ心なく、眞里谷が在らずなりたりとて、戰ひがたき事かは。と呟きつ士卒を勵して、なほも日毎に貞行、と鋒頭を交爭ひしに、有一日信隆が、廳南の城の殘兵が、幾名か逃れ來て、信隆に報るやう、往日眞里谷信昭主が、その隊の士卒を從へて、廳南の城に來ましつ、信隆主の傳言あり、密議もあれば、城の番士に、對面せまくほりする也。速に入られよ。と喚はらせ給ひけり。眞里谷は無二の身方にて、且一方の大將なれば、誰か是を疑ふべき。隨即城門を推開きて、城内に迎入れしに、眞里谷の一軍入るとひとしく、鬨を發り火を放ち、三七二十一に殺靡けたる、只是不慮の攻擊に、城内の士卒駭譟ぎて、擊るゝ者尠からず。素より身方は小勢にて、防禦に術のなかりしかば、多くは副門より脫れ去て、城を奪れ候ひき。といふに信隆驚呆れて、原來信昭、義に叛きて、我を出し拔きたりけるな。我居城を拿られては、一日も恁て有がたかり。今宵悄々地に退きて、快廳南に立かへり、奪略られし我城を、とり復して後にこそ、又豊俊を拯はめとて、當晩篝火を燒棄、人馬を纏めて、退き去んとせし程に、貞行は逆より、直元と謀し合しつ、伍にて武勇の壯佼なりける、堀内雜魚太郎貞住と二隊に備て、左右

勝の趣を、具に聞えあげにけり。开をいかにぞと尋るに、初堀内藏人貞行と、杉倉武者助直元は、一千の兵馬を領て、千代丸圖書助豐俊が盾籠りたる、長柄郡榎本の城を攻けるに、椎津の城主、眞里谷信昭、及聽南の城主、武田信隆も、年來素藤豐俊們と、交り淺からざるをもて、免れがたしと思ひけん、各五百の軍兵を領て、みづから援兵として、榎本なる、城外二箇所に屯しつ、犄角の勢ひを張りしかば、貞行直元、兵を分ちて、直元は城を壓へ、又貞行は、眞里谷武田の、兩敵と戰ふて、勝負區々なるものから、敵を三方に受たれば、果敢々々しき事もあらで、憶ずも日を彌る程に、春は二月の下澣になりけり。登時眞里谷信昭は、獨熟思ふやう、我交遊の義によりて、里見と矛盾に及べども、こは長久の計にあらず。意に素藤が、今寄隊の大軍に、怯まで城を持固るは、初虜にしたりと聞えし、義通あるの故にして、外の繋ぎの城もなければ、幾まで敢然而あるべき。戰飯箭種竭るに及ばゝ、必誅滅せらるべし。その折大軍寄加らば、いかにしてよく拄んや。我は國守の通家にて、千代丸武田と同じからず。義成の亡母、五十子の刀自は、我養父靜蓮大人の、第二の女兒なりければ、我と他とは從母兄弟の義さへあるものを、今この時に反忠して、志を顯さずは、後悔臍を噬む事あらん。嗚呼爾なり、と肚裏に、主意既に決りければ、寄隊の陣へ箭書を射被て、貞行にその密意を示し、爾

ずして、追放ち給ひしは、その制度法家の旨に違ひて、柔弱に過ぎたるにあらずや。虎狼は、山に還すべからず、悪木は、根を遺すべからず。我恐らく、後の患ひなからずやは。と呟きけり。話轂饒舌。却說犬江親兵衛仁、東六郎辰相は、素藤們を追放したる、次の日陣屋を遺なく毀ちて、家なき城下の民に取らしつ、第三日の朝、士卒を領て、倶に舘山の城にまゐりしかば、義成これを勞ひて、親兵衛に宣ふやう、當城既に著落して、夷灊は風波起ずなれども、那千代丸、眞里谷、武田なンどの、餘寇いまだ伏誅せず。曩に貞行直元に、一千の士卒を授けて、討手として遣せしより、折々注進ありながら、いまだ全勝のよしは聞えず。恁れば又當城も智勇兼備の者にあらずは、餘焰を鎭ることかたかるべし。因て汝を、這舘山の城主と做して、逸時良于を副とせん。與四郎も共侶に、當城に住りて、宜く計議に與るべし。又那上甘理墨之助は、神餘光弘の落胤たる事、嘗善の村人們が口碑に在り、最憐むべきものなれども、その性殊に憨にて、且癡人なるを爭何はせん。他は稻村へ將てゆきて、なほ計ふべきよしもあらん。この餘の事は箇樣々々と、叮寧に示し掟て、隨即士卒五百名を、住めて當城を戍らし給ひ、既にして凱陣の、人馬をいそがし給ふ程に、この日堀內藏人貞行は、二百餘名の士卒と倶に、生拘千代丸豊俊と、降人眞里谷信昭を領て、當國廳南より凱陣しつ、義成主に見參して、鬪戰全

人皆これを榮とす。この折又義成主は、那神餘光弘の、落胤と聞えたる、上甘理墨之介弘世が事を尋させ給ふに、病臥て宿所に在り。そが儘人に舁れ來て、見參に入るものから、その性の果敢々々しからぬに、病者なれば、問るゝことを、恍惚としてよくも答へず。この後昔善の村長故老に、那安西出來介、滿呂復五郎、天津九三四郎、荒磯南彈六、椿村墜八們が、來歷素生を問し給ふに、嚮に蜑崎照文が聞えあげたる、他們が招了の趣と、吻合せしのみならず、出來介復五郎の宿所には、滿呂安西の家譜あり、と聞えしを、拿寄て見給ふに、照較疑ふべくもあらず。是等の賞罰は、稻村へ、凱陣の後沙汰あるべしとて、先素藤が婢妾、兇黨の宅眷を出し遣りて、その所因なき者は、いまだ娶らざる莊客に賜り、且曩に素藤に、寃屈の罪を負せられて、誅滅せられたる農民の、親族宅眷を召出して、米錢を取らし給ふ、仁政隈もなかりしかば、那身はさら也、士民們、皆悉歡びて、慶賀稱讃の聲、街衢に盈たり。そが中に、生才學もて、一理屈ある者は、悄々に眉うち顰めて、守の仁政佳といへども、素藤は、五逆の罪人也。因て律を按ずるに、大赦を行はるゝ折也とも、五逆と人を殺せしは赦さず。況那顛八盆作、本膳碗九郎など、喚做たる兇黨は、賊首素藤が虜になりしに、害怕れて、猛可に阿容々々と、降を請にき、と聞えたり。縱面縛して參るとも、眞實の歸降にあらず。然るを一人も誅せ

し、水を與へ、膏藥を、背に布て推居たり。素藤以下の兇黨も、かくの如くなるべかりしを、親兵衞下知して、笞の數、三十を饒せしかば、七十扱きて止にけり。この餘烏合の兇卒們は、最多ければ、扱くに及ばず、咸その額に黥して、都て追放せられけり。是等の事に時移りて、日は西山に沈む時候、護送の雜兵部して、素藤竝に居多の賊徒を、便宜の海邊に牽もて行て、或は五名十名づつ、分ちて船に乘し漕出して、武藏は、墨田河の西岸に迨り、相摸は、三浦岬崎に到て、咸追放ちてかへり來にけり。是より先に親兵衞辰相們は、件の一義に日の暮たれば、這夜はそが儘在陣して、君侯に旨を伺ひ、次の日陣屋を毀しつ、素藤に自燒せられし、城下の里正故老を召よせて、家なくなりし民每に、頒ちてこれを拿らせしかば、大家歡び恩を拜して、家作の料にぞしたりける。爾程に義成主は、その日嫡男義通と馬を並べて、舘山の城に入り給ふ程に、居多の士卒相從ひ、及本陣へまゐりたる、軍民們も皆陸續と、行列を正して從ふたる、事の形勢、武備嚴重なる、中黑の白旗、長柄の數鎗、或は弓手銃手、その程々に隊伍を紊さで、徐に伴ひまゐらせけり。登時田稅戶賀九郎逸時、登桐山八郞良于は、姥雪與四郞と共侶に、君侯父子を迎まつりて、城內無異の趣を、云云と聞えあげけり。是により義成主は、姥雪與四郞を召出して、老に似げなき神行の、功を賞て東西を賜ふに、打大刀甲冑をもてせられしかば、

素藤は兇惡なれども、只私の怨讐にして、天子將軍に叛きまつりし、國賊にあらざれば、法度を緩めて追放つとも、誰か亦これを非とせん。遮莫、大約小人は、威さゞれば懲りぬもの也。素藤を首として、頭立たる兇黨は、各額に黥して、且一百鞭撻て、封疆盡處より追放すべし。この義は則親兵衞と、六郎に課せんず。速に如右行ひね。我は義通を携て、城に入りて萬緒を掟ん。照文竝に景能は、馬を瀧田と稻村へ走らして、是等のよしを注進せよ。快々。といそがして、出し遣りつゝ、程もなく、小森高宗、浦安友勝、以下の士卒を從へて、義通君と共侶に、舘山の城に入り給へば、親兵衞と辰相は、雜兵に下知を傳へて、先蟇田素藤と、礪時願八、平田張盆作、奥利本膳、淺木碗九郎們、都て頭立たる兇黨を、局の內に牽居さして、國主仁恕の寛刑を、恁々と言示し、若們倘この義を忘れて、立かへり來て惡事を做さば、其回は決して饒さじ。縱城郭に據りて、千百の、兇黨を復鳩るとも、我這犬江親兵衞が、在らん涯りは人に讓らで、立地に咸屠戮せん。是を思へ、これをおもへ。と諄復しつゝいひ懲せば、素藤竝に兇黨は、額を衝き洪恩を、稱て承伏したりけり。當下雜兵幾名歟、下知に隨ひて、素藤們が、額に遺なく黥して、衣を脱しつ推伏て、背に笞を中ること、一百扳に及びしかば、皮破れ宍顯れて、鮮血の流るゝこと尠からず。各苦痛に堪ずして、叫喚の聲も立ずなる比、扳果て引起

ず。檻を開きて虎を放せば、後の患ひなきことを得ず。宋襄の仁、微生の信、その行ひは果して美し、しかれども事に益なし。この義をいまだ念れずや。と詰れば親兵衛含笑て、いはるゝ趣その理あり。但素藤は勾踐と、同日の論にあらず。且越王勾踐は、呉王夫差が父の讐なるに、饒せしは不孝にて、義にも亦違ひたり。素藤は然る仇にあらず。只御曹司を辱めたる、報ひは則木に登し、車に建て、陣門に、曝したれば事足るべし。又勾踐が手下には、范蠡大夫種などゝ聞えたる、最逞しき謀臣ありき。素藤には然る智謀の臣なし。縦夫差が謬て、勾踐を饒すとも、西施を受て、溺るゝことなく、忠臣伍子胥が諫を容て、佞人太宰嚭を用ひずは、勾踐其何とかせんや。昔漢末の諸葛亮は、南蠻國を征伐せし折、その蠻王孟獲を、七たびまで虜にして、七たびこれを饒せしかば、孟獲竟に感伏して、誓ふて長く叛かずなりにき。素藤目今饒されて、亦復叛くことあらば、その折人手を借らんと欲りせず、晩生早に誅罰して、餘塵を帚ひ候はん。宿老姑且狐疑を禁めて、この義に儘し給はずや。と憚る氣色もなく論ぜしかば、辰相竟に諾なひて、又いふよしもなかりけり。義成主は、甲乙の、問答をうち聽て、感悦特に淺からず。然而宣ふやう、六郎が意見もその理あり。我も如右こそ思ひしに、親兵衛が論辯は、又一級の上に在り。殘に克煞を去り、寇に報ふに德をもてせば、我後いよ〳〵長久ならん。現

つらんと思ひ候ひき。抑素藤們が悖逆は、饒されがたきものなれども、願ふは我君格另の、仁政を施て、他們が頭顱を接し給へ。初徵臣、素藤を、生拘りし折約束して、咸立地に降伏せば、國主に大赦を請まつりて、死ざることを得さしめん、といひしを那奴們甘じ承て、阿容阿容として皆悉、面縛して牽れ候ひき。そが中に倘一人、義に仗り命を惜ざる、眞勇のものあらば、纔に一個の敵を怕れて、かくのごとくに至らんや。素藤既に生拘られて、他們は首なき蛇の像く、僅にその尾を動せども、今さらに做す處を知らず。是小人の本性にて、畢竟命を惜むの外なし。恁れば今素藤們を、饒して追放し給ふとも、又何ばかりの事をせん。非如今咸頭顱を斬梟給ふとも、當家の政事仁義に違ひて、武德衰へ給ふことあらば、奸民必武を接て、叛くもの多からん。願ふは仁恕のおん計ひこそ、あらまほしく候なれ。と道理を舒て諫稟せば、辰相怺へず、親兵衛に、うち對ひて難ずるやう、現和殿の意見を聞に、丹も亦人の及ぬ所。仁といふ名に相應しからんを、左右いふべきにあらねども、那唐山なる呉と越の、二國の得失を憶ふに、那越王勾踐は、呉王夫差が父の讐也。戰ひ既に勝利を得て、會稽山に住せしを、攻も殺さで、詭議の、和議を容れ命を饒して、剰國へ還せしかば、勾踐遂に攻撃て、夫差を殺して呉を斬したり。今素藤を饒し給はゞ、那呉越の得失と、亦何ぞ異ならん。寔に仇は養ふべから

涯忘れずは、是に優たる幸ひはあらじ。然れば唐山の鄙語にも、苦中の苦を喫ざれば、人の中なる人となること、いとかたかり、といひしにあらずや。阿子は今年十一歳、親兵衛には二才の兄也。他と比ぶべくもあらねど、兀自(ソレデモ ヤハリ)幼少といふにはあらず。這教訓を小耳に留めて、幾々までも、親兵衛が、忠義の大功をな忘れそ。やよ親兵衛に謝せよかし。と諭給へば義通は、感涙坐に阤みて、承りぬ。と應つゝ、遽しく身を起して、又改めて親兵衛に、歡びを述、忠義を稱て、三拜せまく額衝給ふを、親兵衛驚き推禁めて、故の席に請薦れども、義通頭をうち掉て、否とよ、然のみ推辭事かは。こは舘の仰にて、伯母の御靈を拜する也。和殿一個の上にはあらず。と爭ひながら三拜の、禮を正しく行ひ給へば、親兵衛は困じ果て、背に汗を流したり。これを見る者、義通君の、年には倍て怜悧きを、且感じ且相賀して、倶に千歳を唱へつゝ、日屬久しくうち顰めたる、眉を一時に開きけり。事の便宜に辰相們は、親兵衛に名對面して、大功を讃し、奇異を稱て、各齊一敬ふたる、口誼訖りて辰相は、義成主に稟すやう、素藤們を誅罰の事、稲村へ牽すべきや、這里にて梟首せしめんや。願ふははやく天罰を、示して後の兇奸を、懲し給ひね。と請まつるを、義成聞つゝ頷きて、その義も亦親兵衛が、思ふ旨こそあらんずらめ。仁は孰を佳とするや。と問れて親兵衛膝を找めて、件の一議は、仰なくとも、請ま

衛が、不思議の大功神速にて、勍敵降伏したりしかば、聊恥を雪め侍り。是併家尊の大人の、軍威にも憚りて、纔に一個の親兵衛に、征せられたるものにやあらん。抑犬江親兵衛が、六稔富山に生育しといふ、神助奇特の顚末は、豫に景能が告しかば、その崖略を听知り侍り。寔に奇しき事也きとて、その歡びを演給へば、義成像快に頷きて、然也、阿子がいふごとく、親兵衛が事はしも、常理をもて、論じがたかる、その功も亦神靈の、助る所あればならん。素藤奸智に逞しくて、一旦他が辱を受しは則我愆にて、阿子が不幸に似たれども、今さら思へば後轍の、戒となる事多かり。世に貴介の公子たるものは、襁褓の内より長となるまで、婦人の手にのみ守鞠養れて、世の人情を知るによしなく、民の艱苦を思ふもの稀也。こゝをもて、萬事みづから賢として、身の愆を听くことを憎み、人の惡を聞くことを、樂と做す故に、讒言是より行れて、佞人親愛せらるゝことあり。且身には美服を襲ね、口には美食を毎として、起揮くこともなく、安坐のみして人を使へば、人に使るゝ苦辛を悟らず。この故に、多くは脚氣の、病痾を生じて、救ひがたきに至るものあり。況聲色に耽り、大酒を好むが如きは、みづから壽命を損へども、死に至るまで悔なきが、是貴人の通病也。しかるに阿子は、叛賊に、俘にせられ、責悪れて、虎穴に在ること四五十日、辛くも死なでかへり來にける、事をし生

席末に侍りたり。程しもあらず親兵衛は、東門の頭にて、馬より下りて投入るを、守門の雑兵額衝き迎へて、云云と喚れば、照文遽しく立出て、先親兵衛に、大功の、歡びを舒案内をして、件の席に伴ひければ、親兵衛は又改めて、義通君に見參して、歸陣の歡びを稟しけり。一霎時ありて、義成主は、身甲の上に、時服を襲被て、烏帽子直垂綺羅やかに、黄金裝の大刀を佩て、近習に幕を絞らしつゝ、屏風の背より立出て、上座に著給へば、東辰相、小森高宗、浦安友勝以下の毎、幾名歟從ふて、皆左右にぞ侍りける。登時義成主は、先親兵衛を召近著て、席を賜ひ勞ひて、昨今二度の大功を、褒賞給ふこと大かたならず、手づから打鮑を賜りて、君臣の義を祝し給へば、親兵衛は席を避て、謹て稟すやう、微臣神女の示教によりて、纖芥の功あるに似たるも、皆是君の洪福のみ。然るを御曹司を閣れて、見參に入りまつること、冥加あまりて最もかしこし。願ふははやく御對面あれかし。と薦め稟して、後方を佗と見かへれば、照文景能こゝろ得て、卒とて軈て義通に、倶して御前にぞ出にける。當下義通御曹司は、恭しく嚴君にうち朝ひて、勝軍の壽を、舒て且宣ふやう、孩兒憶はず叛賊の、爲に俘囚となりしより、快死なばやと思ひしかども、うち守る者間斷なければ、朽惜き事いと多かり。この故におん身親、征伐に日を彌り給ひし、御欝悆を猜しまつれば、不孝の罪免れがたかり。然るを犬江親兵

を、馬の前後に從へたり。この時舘山の城の塹の頭には、里見の士卒五百許名、田税戸賀九郎逸時と、登桐山八良于們これを領て、左右二備に守護したるが、義通君の轎子の、正門より出るを見て、咸遽しく跪坐てぞ、遙に見送りまゐらせける。然ば降參の逆徒們は、既に寄隊の陣門に迫りしに、親兵衛們は城を出て、なほ幾程もあらざりけり。折から普善蘇々利の村人們が、いかにしてはやく聞知りけん、老弱男女聚ひ來て、觀る者人の山を做したり。約莫這城下なる民毎は、曩に素藤に自燒せられて、這頭にあらずなりしかど、近き村に人の多かる、田舍に似げなき光景なるを、親兵衛はつく〴〵と、見つゝ心に思ふやう、上總は民人富裕にて、畊作漁獵釆薪まで、都て生活の便宜を得たり。然ばこそあれ素藤は、世を累ねたる城主ならぬに、年來奢侈を極めしは、以あるかな、と嗟嘆して、徐に馬を歩めける。爾程に降人們は、牽れて陣の北門にまゐりしかば、小森高宗(字は但一郎、)浦安友勝(字は牛助)雜兵居多從へて、出て降人們が姓名を、問つゝ實檢簿に寫さして、局内へ追入れたり。そが中に素藤をのみ、車子よりいまだ下さず、そが儘陣門の外面に、在らして士卒に守らせしかば、觀る者いよ〳〵多かりけり。左右する程に、義通君の、轎子近著來にければ、東辰相蚕崎照文、雜兵を從へて、東門より迎へまゐらせて、儲の席に案内をしつゝ、壽祝を演などす。當下苫屋景能は、なほ御曹司に從ひて、


おせん



義通に倶しく
犬江親兵衛
賊徒と国守の
陣営に牽く

る、雪車歌とかいふものも、㤱やあらんと思ふ可に、いと訛て俗備たれども、寄隊の耳には興
あるべし。素藤は始より、親兵衛が仁恕を唱て、大赦を請んといへりしを、倘やと憑て、罵り
噪がず。果敢なき命を惜むの故に、身の存亡を他に儘して、阿容々々として絏縛に、就ていふ
事もなかりしが、這時肚裏に思ふやう、昔我親は、京都にゆきて、六月の祇園會の、山鉾を觀
たる折、應聲虫の病痾により、搦捕られ禁獄せられて、竟に命を殞し給ひき。思へば今は我
うへにて、㤱車に推建られたる、容は宛祇園會の、山鉾にも似たりけん。其も義通を幾回歟、
城樓に登し柱に吊して、讒惡みて寄隊に示せし、報ひなるを爭何はせん。却も那八百比丘尼は、
那里へ影を躱しけん。我㤱なりしを知ざる歟、知れども救ふに術なきや。初の程は這那と、帮
助になる事多かりしに、今この折に效驗を見せぬは、益なかりき、と胸にのみ、うらみは葛に
吹く風ならで、憂苦をやる瀬はなかりける。閒話休題、素藤が車子の次に、降參の賊卒三百
五六十名、或は五人或は十人、數珠の像くに繋れて、こも民毎に追立らる。是より十間餘りを
隔て、義通の先伴なる、軍民約四五十名、叱咤の掛聲遠く聞えて、先を赶ふこと嚴重也。この
餘、百餘個の軍民は、轎子の後に從ひ、由緣ある民は許されて、左右に從ふも多かりけり。次
に犬江親兵衛仁は、初の儘なる禮服にて、馬上優に歩せたる、伴當は多からず、五六個の軍民

懸りし程に、倶に笑局に入り給ふ。武門の幸ひこの上なしとて、鐵壁の、石城より堅かるべし。東辰相は、逸時良于兩隊の士卒を、速に出し遣りて、雜兵に、陣門の、掃除をいそがし、准備を整へ、旌旗を建、刀鎗を晃めかし、本陣の八面に、士卒を備へ、武を赫奕して、親兵衞が降人們を、牽して義通君に倶して來ぬるを、今か〳〵と待たりける。却說。這時舘山の城内には、義通君の伴當の、准備整ひぬ、と聞えしかば、親兵衞下知して、第一番に、素藤以下の降人毎を、先御陣へ牽べしとて、城の北門より出し遣し、次に義通君の轎子添は、苫屋景能奉りて、軍民百五十名を從へたり。登時犬江親兵衞は、名馬青海波にうち乘りて、殿して徐もて來ぬる、約莫事の爲體、白布の標幟兩竿に、叛賊蟇田素藤と寫し、又降伏兇黨と寫せしを、兩個の軍民捧持て、眞先にぞ找みたる。次に礪時顯八、平田張盆作、奥利本膳、淺木碗九郎們、素藤に重用せられて、頭人たりし逆徒二十餘名を、背手に綁縛て、居多の民們が追立ゆくめり。次に蟇田素藤を、太く長やかなる杉木の杪に綁著て、賸げて車に推建しを、軍民二十名してこれを牽くに、杉木の杪より結び下たる、四條の麻索を操れる者あり。欹き倒さじとての與也。そが中に、手巾を顱遷にして、偏袒ぎたる者一人あり。扇を開きうち招きて、聲高やかに音頭を操れば、牽兒大家節を合して、遣材唄を謌ひけり。越の國なる雪の深山に、杣木樵つゝ家路にかへ

賀九郎逸時と、登桐山八良于に、五百個の士卒を授け、程よき處に備を扱めて、那城より出るもの、皆悉出果なば、立替り城に入て、姥雪與四郎を相資て、姑且四門を衛らすべし。剛才人の告るを听しに、舘山の賊兵們が、副門より落亡ぬる歟、山路を投て出るもの多かり。撃捕ばやとて動搖めきしを、我推制めて、追も撃せず。那城には、今親兵衛あり、他が武勇に害怕れずは、誰か一人も落亡べき。必竟方の吉事ならん、と思量りしに、果して違はず。よしを士卒に徇示して、逸時と良于に、快々下知を傳へよ。と事遺もなく命じ給へば、辰相はこゝろ得果て、遽しく退りにけり。登時蜑崎照文は、義成主の身邊に侍り、那里の注進を聞しより、忻然として稟すやう、既に知せ給ふごとく、那犬江親兵衛は、今より六稔前つ秋、神隱しにあひし折まで、西も東もまだ知らぬ、纔に四才の小兒なりしに、名將勇士も及びがたかる、かくの如き大功あり。數ならねども徽臣が、、大法師と共侶に、弗憶く犬士們を、見出せしより兩三番、おん使に立られしに、丌を將て還る功なかりしに、單親兵衛が拔出て、昨今老侯郎君の、危難を拯ひ奉り、寇を生拘り城を拔きたる、この擧によりて身の鈍かりし、面も起し候ひき。といへば義成主うち頷きて、寔に汝が稟すごとく、僅に親兵衛一人ですら、忠武大功比類なし。況八人具足して、當家の股肱にならんには、攻るときは、百萬の、勇兵に捷るべく、戍る時は、

知りて、胆を潰しつ且相賀して、勇ざるものなかりけり。恁而この日亭午の時候に、舘山の城より出て、寄隊の陣へ來ぬるもの、兩三名ありしかば、雜兵們訝り咎めて、捉へて本陣へまゐらせしに、他們則陳じていふやう、小可每は、この月來、素藤に駈入られて、那城に候ひし、東濱の良民で候が、犬江主に吩咐られて、注進の爲にまゐれり、といひけり。是により、東辰相立出て、そのよしを尋問ひしに、犬江親兵衛が武勇の事、素藤既に生拘られて、衆兇降參したりしかば、親兵衛則城內なる、軍民三百餘名を二隊に分ちて、そが一百五十餘名は、姥雪與四郎を頭人として、城を戍らせ、この餘は都て御曹司義通君に倶し奉らせて、程なく御陣へ御歸座あるべし。勿論素藤以下の降人は、牽して實撿に備んとす。この餘の事は箇樣々々。と詳に聞えしかば、辰相は怡悅に堪ず、且這民們を留置て、よしを主君に聞えあげしに、義成主は始より、天助神祐大かたならぬ、親兵衛なれば、謀るが如く、功なからずや、と憑しく、思ひ給はざるにあらねども、なほ心もとなくて、今まで胸の休からざりしに、恁る注進聞えしかば、その喜びいふべうもあらず。然而辰相に宣ふやう、犬江親兵衛、不測の功あり、素藤既に生拘られて、義通かへり來るならば、我はなほ這陣に在りて、そが賞罰を左も右も、行ひ果して城に入らん。爾せざれば、親兵衛が、大功を掩ふに似たり。さばれ非常の與なれば、田稅戸

し事、却照文と景能は、天の明る時候來にければ、親兵衛は景能と與四郎を、鑣奴と伴若黨に打扮して、騎馬の左右に從へつゝ、舘山の城に赴き、照文は、注進の爲、景能が乘捨たる、馬を他が鑣奴に、牽して本陣に來ぬる事、瑰奇異聞の趣を、首より尾まで、一事も漏さず告稟ししかば、義成主は、いふもさら也、左右に侍る辰相們、老黨近臣駭き嘆じて、奇也々々。と稱へたり。登時義成主は、照文が注進の、速なりしを勞ひて、辰相們に宣ふやう、那犬江仁の事は、我も豫十一郎が、告たるにより、聞知たれども、女兒の君の神靈の、冥助によりてこの年來、富山の奥に生育しすら、思ひがけなき異聞なるに、今玆九歳の童にして、身長才幹、武藝まで、古の賢人勇士に、異ならざるは奇なるかな。慿まで天祐神助を得たる、俊傑ならんには、必又大功あるべし。就中歡ぶべきは、那山中の一條也。昨日嚴君危難の折、他倘富山にあらざりせば、誰かよく先途に達て、寇を輒く捉んや。この一事をもて人力人智の、及ばざるを知るに足れり。我は二千の士卒を領て、三十餘日城を圍みて、勞せしのみにて功なかりしに、方僅親兵衛が身單にて、よく義通をとり復さば、兀自我家の幸ひ也。城内に火を颺て、暗號を示す事もあらん。その折城に攻入りて、快親兵衛に力を戮せん。遮莫且這方より、然る氣色を見はさで、事の安危を窺ふべしとて、その隊配を定らる。當下士卒は、犬江仁が、奇談を初て聞

大かたならず、且老侯の恩澤慈善に、感じて歸順を願ふ事、幷に天津九三四郎員明が孤忠の事、又南彌六も凡庸なる、俠客にあらざれども、陳謝そのよしありながら、いまだ正しき照驗なければ、倶に瀧田へ遣して、獄舍に繫ぎ置るゝ事、この日又老侯は、伏姬の墳墓に、香華を手向給ひつゝ、猶も峯上に攀登りて、觀音堂へ詣給ふ程に、かへさは既に日の暮たれば、大山寺へ止宿の事、この日苫屋八郎景能が、次丸君の仰により、青海波といふ名馬を牽して、稻村よりまゐりしに、老侯瀧田にましまさねば、軈て富山の麓まで來て、見參に入りしかば、老侯他をも大山寺へ、召倶させ給ひし事、當晩犬江親兵衛は、身單敵城へ赴きて、御曹司を拯拿り奉らんとて請ひ稟しゝを、老侯初は許し給はず、教諭叮寧なるものから、親兵衛は只管惱りて、神女の示教に候へば、枉て許させ給ひね、と屢請ふて已ざりければ、老侯是非なく御許容あり、則名刀小月形と、服章なる社杯小袖を、親兵衛に賜りつ、駿馬青海波にうち跨りて、大山寺を出るに及びて、景能與四郎伴當たり、又照文は、御陣へまゐりて、是等のよしを聞えあげよ、と仰付られたるにより、馬を親兵衛景能們と、共侶に走らして、大山寺を出たるは、眞夜半の時候なりし事、恁而親兵衛は逸早く、羽賀の松原まで騎著て、路上佛堂に憩ひてをり、殊さらに賞すべきは、那㹀雪與四郎が、老人には似げもなく、駿馬に後れずよく走りて、毫も疲勞ざり

房の舊黨都て五名、山の半腹に埋伏して、兩個の伴當を射て仆し、既にして老侯の、危窮に及び給ひし折、料らずも犬士の一人、那犬江親兵衛仁が、突然として樹間より、顯れ出先途に達て、刺客們を撃伏て、老侯を救ひ奉りし、勇力武藝比類なかりし、不思議の大功ありし事、且親兵衛は、六稔以來、伏姫神の冥助により、養れて富山なる、岩窟の内に在り、今茲は甫の九歳なれども、最殊う大きくなりて、身長は三尺四五寸、心術も孺子にあらず、文學武藝學得て、通達せずといふことなき、神童なりし事、又親兵衛に生拘られたる、出來介、復五郎、九三四郎、墜八が首伏の事の趣、並に九三四郎が故主と聞えし、神餘長挾介光弘の落胤なる、上甘理墨之介弘世の事、又姥雪與四郎、その妻音音、二個の媳婦曳手單節も、又是伏姫神の冥助によりて、親兵衛と倶に富山に在り、曳手單節は、その良人と、婚姻の折有身しを、知らで臨月遙に過ぎて、甲乙共に男子を、安らかに產しかば、則父の名をそが儘に、力二尺八と喚做す事、又那荒磯南彈六は、親兵衛に撃惱されて、辛くして逃んとしたる、山路に與四郎が生拘りて、老侯に獻り、夫婦姊妹、兩個の孫まで、見參に入りし事、又痍を負たる兩個の伴當、鮹船貝六、小水門目は、親兵衛が介保して、神授の奇藥を用ひしかば、立地に蘇生して、矢傷もはやく愈し事、又五個の刺客們は、伏姫の神靈の、灼然なりしに駭き怕れて、先非を悔こと

第九輯　巻之九

第百八回

義成仁を旨として刑を寛くす
貞行主に謁して克を奏す

話表、里見安房守義成主は、神と親との教誨に從ひ、只那寛の一字を守りて、叛賊蟇田素藤を攻伐つに、敢火速の兵をもてせず、をさ／＼城を遠圍にして、憶はずも日を彌る程に、既にして春もはや、二月下旬になりにけり。浩處に有一朝、蜑崎十一郎照文が、瀧田殿（義實をいふ）の使として、一騎本陣に來にければ、義成聽て對面して、そのいふよしを听給ふに、老黨東六郎辰相を首として、小森但一郎高宗、浦安牛助友勝、田税戸賀九郎逸時、登桐山八良于們も、皆左右にぞ侍りける。登時蜑崎照文は、義實老侯の仰を舒て、義成主に告まつるに、富山の麓河猛可に水涸て、登渉に自由を得たる事、是により老侯は、昨日大山寺へ詣給ひしかへるさに、伏姫の墓を祭らんとて、近習纔に兩三名を領て、那山に登り給ふ程に、素藤が刺客、安西出來介、蕭呂（又麻呂に作る）復五郎、天津九三四郎、荒磯南彌六、椿村墜八など喚做たる、安

ころ得て、はやく轎子を舁寄せけり。畢竟里見御曹司、父の陣營に送還されて、後の說話甚麽ぞや。开は次の卷に、解分るを聽ねかし。

はやく御陣へ走りまゐりて、是等のよしを注進せよ。その餘は、這顛八と、盆作をも牽預りて、我出る折を等ね。又力士們は、本膳と、碗九郎を牽もて退りて、おん轎子の准備をせよ。こゝろ得たる歟。と言示せば、百姓們は歡び承て、顛八盆作を受拿りつ、守門の頭人共侶に、牽立て皆退りしかば、力士幷に雜兵們は、嘆息しつゝ皆悉、大刀も鐵鎧も脱棄て、本膳碗九を先に立、こも皆外面へ出にけり。姑且して力士們は、四五名書院へかへり來つ、親兵衛にうち對ひて、御曹司をおん送りの、准備整ひ候ひぬ。と報るを親兵衛うち听て、然らば我もおん伴せん。案内をせよ。と赶立して、綑り措たる素藤を、小兒の像く腋下に抱きて、そが儘玄關に出しかば、與四郎軈て走り寄て、事の歡びを舒などす。登時親兵衛は、與四郎に、權且當城に留りて、守るべき旨を言示し、又百姓們を喚よせて、卒とて素藤を遞與すにぞ、大家豫の下知に違はず、素藤を受拿て、杉木の杪に綑著て、縢げて車に推建けり。恁りし程に義通君は、嚮に社參に被給ひたる禮服を、舊のごとくに裝ひて、小刀を帶て景能を、從へて出給ひつ、親兵衛にうち對ひて、神速の大功を、譽て歡びを演給へば、親兵衛は謹て、歸陣を祝して稟すやう、他御覽ぜよ。素藤を、長杉木の杪まで太きに、登して御陣へ牽し侍り。恁ては君が會稽の、恥を雪るに足りぬべし。快々出させ給ひね。といふに義通笑しげに、うち點頭て立給へば、百姓們がこ

願八と盆作に、索を掛てうち戍れ。那奴兩個は、素藤が、惡を資けし舊盗也、努々由斷すべからず。本膳と碗九郎には、腰索を被て、おん送りの、事の准備を勤させん。快々せよ。といそがせば、力士們は身の祟を、怕れて推辭ことを得ず、先願八と盆作に、武具を脱して、緣頬より推下して索を被け、又碗九郎本膳には、小手を饒して是も亦、綑りて緣頬に牽居たり。浩處に、這城內なる百姓們は、素藤既に生拘られて、餘類は降參せしよしを、傳聞皆歡びて、四門を戍る頭人を、搦捕り綑縛て、牽つゝ書院の庭に來て、然而親兵衛に訴るやう、恐れながら我們は、夷灊の良民每で候ひしを、素藤に駈拿られて、他が軍役に從ひしは、實に本意に候はず。爾るに逆將俘にせられて、當城おん手に入りたるよしの、洩聞えしより怡悅に堪ず、隨即守門の頭人們を、搦捕て呈獻せり。この餘の雜兵仂武者なンどは、事の敗れに駭怕れて、咸副門より山路を投て、多く落亡候ひき。と告れば親兵衛頷きて、开は切てもの事なりき。今當城に在る若曹、良民たるもの幾名ぞや。と問へば答て、然候。二三百名候はん。といふに親兵衛又頷きて、然らば一百五十名は、御曹司のおん伴して、御陣へ送り奉れ。又一百五十名は、我伴當、姥雪與四郎を頭人として、權且當城を戍るべし。又素藤をば箇樣々々、恁々にして領てゆかん。杉木と車の准備をせよ。先若們が一火の中內にて、こゝろ得たる者兩三名、

き、武功のよしを思ふにも、恥しきは我うへ也。時の不祥にあなれども、久しく賊徒に屏籠られ、或は城樓に推登されて、責碩恐れたりけるを、躬方の士卒も、嚴君も、鬱したらんかし。然る辱を受たるに、生て還るが歡しとて、この儘にして阿容々々と、大人に見參なるべきや。初のごとく轎子に、うち乘りて初の如く、居多の士卒を從へずは、恥を雪るよしあらず。什麼この義をよくするや。と問れて本膳碗九郎は、景能が答を待ず、俱に額衝て稟すやう、その義は御こゝろ安かるべし。おん轎子は損はで、當城に藏めてあり。然ば城內の士卒、數を盡して、おん伴を仕らん。只穩便の御沙汰をのみ、願しくこそ候なれ。いかで〳〵。とうち陪話て、走りて書院に赴きしを、景能は冷笑ひて、なほ幼君を守護してをり。恁而本膳碗九郎は、故の緣頰にかへり來つ、親兵衛にうち對ひて、義通君のおん答、箇樣々々と告しかば、親兵衛、然こそと點頭て、現大將の器、智勇自然と備り給へり。今この坐席へ迎まつりて、見參に入るべけれども、おん父君の恁とは知らで、胸安からず御坐すらめ。やをれ若們、おん送りの、准備をはやく整へよ。そが中に願八盆作、及碗九郎本膳とやらん、この餘も重立たる兵每は、皆面縛して、御陣へ參れ。縱雜兵たりとても、或は武具を著用し、或は腰刀を帶ることを許さず。この義に叛くものならば、先素藤より屠戮して、皆悉頸を刎ん。後方に侍る力士每、

事の准備をはやくせよ。我俱したる若黨は、曩に諏訪の社頭にて、若們が火銃に、擊れたる御方の近臣、苫屋八郎即是也。那折都て深痍に仆れし、御曹司の作當は、亦是神女の冥助によりて、蘇生して稻村の城にあり。恁まで天福神助多かる、國主に弓を彎たるは、天に對ひて唾吐くより、なほ甲斐もなき白物也けり。快々せずや。と罵懲せば、顚八盆作、碗九本膳、以下の兇黨舌を掉ふて、戰き怕れて仔細に及ばず、承りぬ。と應して、本膳と碗九郎は、走りて外面へ赴きつ、先苫屋景能に、親兵衞が奇異武勇の事の趣、幷に籠城の將卒が、咸降參の義を報知して、案內して義通君の、身邊へぞ赴きける。單表、里見御曹司義通君は、久しく當城に屛籠られて、慰めまゐらするものもなく、柵締たる一室の內に、旦しくらし給ひしに、この日思ひがけなくも、賊徒本膳碗九郎が、苫屋景能を俱して來て、城兵都て降參の、事情を告まうしつ、遽しく囹圄を拔き、別宿に出しまゐらせて、儲の褥に請登すれば、景能聽て見參して、恙なかりしを祝し奉り、然而犬江親兵衞が、武勇大功の速なりし、事の由を告まうせば、本膳と碗九郎は、歸降のよしを聞えあげて、御陣へ送り奉らん。徐に出させ給ひねとて、茶をまゐらせ果子を薦めて、をさ〳〵勦り慰めけり。義通君は是等のよしを、つく〴〵とうち听て、景能に宣ふやう、我も那犬江が事は、人の噂に聞知るものから、尙總角にてかくの如

て唱嘆しぬれども、皇國にも這親兵衞仁あり。その功甘羅と孰與ぞや。开は左まれ右もあれ、約莫我義兄弟は、感得の靈玉あり。その玉には八行の、文字を分ちて、玉毎に、一字づつ自然とあり。开を我持るは仁字の玉也。因て名を仁と告りにき。若們我を撃んとせし折、光に撲れて度を失ひしは、我靈玉の奇特なるに、幻術ならんと猜せしは、這素藤が愛歡ぶ、邪術に思ひ比べし歟、淺慮臆斷笑ふべし。縱素藤邪術をもて、御曹司を捉り奉りて、計略を得たりとすとも、我君仁義の大軍もて、攻潰し給はん事は、石をもて卵を、壓すよりもいと易けれども、這城內へ駈拿られたる、罪なき民の、瓦礫と共に、燒れん事を憐愍給ひて、最寛やかなるおん計ひは、唯御曹司を思召す、故のみにあらざるを、若們愚物の本性にて、漫に誇りて我君を、做事あらじ、と侮りたる、報ひを目今知るや知ずや。先非を悔しくおもふとも、皆是五逆の罪人なれば、誰か一人も饒さるべき。刑罰踵を旋さで、梟首せられんものなるを、我又神女の示教に憑りて、仇に報ふに德をもてして、曼讃信の仁を施さずは、若們生て、今まで在んや。先はやく是等のよしを、御曹司に聞えあげて、慈悲の恩免を請まつりね。我も亦御陣に參りて、國主に大赦を請ひまつらん。倘等閑の計ひあらば、素藤を首として、誅して首級を御陣へ獻ぜん。若們首を接まく願はゞ、目今立闕の頭に在る、我伴當に報知して、御曹司を送り奉る、

滿が家臣也ける、兎巷幸彌太遠親を哄誘して、如滿を弑し、城地を奪ふて、罪を遠親に負したる、奸計立地に成熟して、夷濡を横領したれども、當時は、その惡發覺れず、初病民を多く救ひし、功ある由のみ聞えしかば、そが儘城主になされしは、是我君の寛仁大度、天地に等しき洪恩なるに、开をうち忘れ心傲りて、舊黨願八盆作を、竊に招き寄せ、幇助として、民を虐げ驕を極め、剩非分の婚姻の、宿望遂がたきを深く恨みて、又奸計を旋らして、義通君を捉り奉り、又滿呂安西、神餘の舊黨、幷に俠客南彌六們をもて、我老侯を富山にて、犯しまつらんと欲りしたる、その惡既に極れり。遮莫昨日、その刺客們を、我那山にて生拘りしかば、瀧田の獄舍に繫れたり。抑我身に、同因果の、義兄弟七名あり、その窮阨ある每に、富山なる伏姬神の、冥助を得ずといふものなし。就中我親兵衞仁は、年四の秋よりして、又那神女の擁護を蒙り、六稔富山に生育たる、今玆は甫の九歳なれども、見よ、身長さへ、心術さへ、恁まで大きうなりたるを、誰か驚き仰ざるべき。神變不測、無類の神童、二人と見ること有がたければ、結緣の爲禮拜せよ。然ば我、這素藤の、素生と奸詐をよく知たるも、身單誑使に立たるも、皆是神女の示教に憑れり。昔唐山なる秦の甘羅は、年十二の童なりしに、呂不韋に說て趙に使し、大功ありしを、司馬遷が、史記てふ書に載せしより、唐人們は詩にも賦し、物にも引

見れば、無慙や素藤は、酷く親兵衛に踏伏られて、呼吸も絶べき形勢なれば、大家吽嗟、と駭噪ぎて、拯ひ拿まく思へども、初めに懲りて、和郎立ね。和主且試に、先へ蒐れ。と瑕讓る、虞芮の訟果しなく、分惑ひぬる田の畔の、蛙兒に似たる面框、感停跂て長視てをり。登時素藤聲戦して、やよや兵毎、我を救へ。命に代る東西はなきに、勸解よノヽ。と叫ぶにぞ、親兵衛呵呵とうち笑ひて、臆病鬼の受地子毎、主の命を乞んとならば、皆縁頬に羅列れて、我託宣を拜聽せよ。倘又不の字をいふ者あらば、一壓中て素藤を、踏殺さんず、立ずや。といはれて答も投頭の、尋念に遑あらずなりたる、保質をさへ拿られしかば、一言半句も爭ふものなく、皆刃を捐鋒を倒して、頭を低腰を折め、阿容々々として縁頬に、出て命を乞んとす。顛八盆作、いへばさら也、碗九本膳、力士們さへ、外面に在る雜兵まで、人多ければ推合て、繡眼鳥の像く竝びたり。その間に親兵衛は、力士が棄たる捕索の、臂近にありけるを、搔拿はやく素藤を、緊しく綳りて動かせず。そが儘傍に牽著て、縁頬に竝び坐る、逆徒に對ひて示すやう、やをれ同惡の白物們、この期に及びて命を惜む歟。狂ふ猿馬を丹田に、よく推鎭め、謹て、我いふよしを聞ねかし。這素藤は、近江の山賊、但鳥跖六業因が獨子にて、初は但鳥源金太と喚做たる、原是刑餘の罪人なれば、當年この地へ發れ來て、愚民を惑はし、榮利を謀り、小鞠谷如


舘山乃城に犬江親兵衛衆兇を威服す
不ん騒
不ん作
力士
力士


親兵衛
力士

な、親兵衛が懐より、一道の光颯と粲爛して、打向ふ兵毎の、面を撲地と撻しかば、大家都て眼を射られて、諸聲高く、苦と叫ぶ、碗九本膳、顱八盆作、力士も倶に觔斗りて、簀子に腰を撲悩し、或は柱に頭を破りて、平張俯たる儘にして、一霎時は起も得ざりけり。今這奇しき光景に、外面なる雜兵們は、驚怕れて找み得ず、只囂々と鬨くのみ。韓盧を吠る痩狗の、門に聚合ふに似たりける。登時親兵衛聲高やかに、若們何ぞ無禮なる。蟇田は我君麾下の城將、虎狼の野心を逞くして、今籠城に豎ぶとも、軍陣の作法をもて、國主の使者を迎ふべきに、恁まで傲恣なる、非禮を容ざる、天罰覿面、恁ても悔ずや、懲りずや。と罵責られて、素藤も、驚きながら毫も怯まず、眼を瞪らし聲ふり立て、猴子奴、幻術ありとても、我刃尖に向んや。开里な退そ。と敦圉て、突と身を起し、引抜く大刀風、兩段になれ、と丁と撃つを、親兵衛噪がず身を反して、扇子をもつて那這と、柔挫ひながら、耶と聲かけて、刃を礮と打零せば、素藤叶嗟と踏入て、組んと找むを引著て、項を抓み揉輾して、隻足に楚と踏伏せたり。現比類なき勇力に、壓れて苦楚堪がたかる、素藤は、千曳の石を、背に受たる心地やしけん、面色宛土の如く、饒せく。と叫べども、吭逼りて聲立ず、絶る可に呻吟きたり。恁りし程に、顱八盆作、本膳も碗九郎も、力士們もやうやくに、我に復りて共侶に、身を起しつゝ眼睛を定めて、

のみなるに、純紺錦の戰袍を披下し、堆朱の刻函の大刀を佩て、膝に鐵骨の軍扇を衝建、虎彪の皮をうち累たる、稛子に坐して上座に在り。左右に侍る老黨兩個は、奥利本膳盛衡、淺木碗九郎嘉倶也。倶に立革縅の鎧を擐たるが、こも披膊をば著けず、象頭と鮫函の、解手刀を腰に帶たり。この餘、究竟の力士四五十名、短鎗肩尖刀の鞘を除して、二行に侍立し、一百有餘の雜兵は、弓箭火銃を手々に持て、孫廂の下に羅列れたり。その事の爲體、齊々整々として、猛威を赫奕し、素破といはゞ、打も蒐るべき面魂、都て一人當千と、見えざるはなかりけり。當下頓八盆作は、倶に書院の縁頬に跪きて、寄隊の使臣犬江親兵衛を、おん下知により領てまゐりぬ。と名告をすれば、素藤は、其力を佗と見る程に、親兵衛は揖讓もせず、長袴の下遣返して、誼使なれば、勿論上席、宜く用捨あるべし。といひつゝはやく抜登りて、床間なる鎧櫃を、掖出し尻うち掛て、正面なる、第一の上座に著しかば、素藤主從一個として、呆れて瞻仰ざるはなく、他は誰何。とばかりに、早に答る者もなし。登時素藤勃然と、怒れる聲を苛立て、噫無慙なる、猴子が狂態、おもふに這奴は瘋人ならん。はやく引摺降さずや。と勢ひ猛く下知したる、聲共侶に碗九郎、本膳頓八盆作們は、承りぬ。と應つゝ、大家蒐れ。と身を起せば、四下に守護の力士每、咄と噓て、短兵を、晃めかしつゝ親兵衛を、推捕稠て擊んとす。那時遲し、這時速し。奇なるか

なる小事にこそ、と思ひ返しつ、赶蒐來ぬる、雜兵們に目を注して、禁めてなほも親兵衛の、先に立つゝ案内をす。既にして玄關の、式臺に登る折、親兵衛はなほ刀を帶て、伴當に遞與さざりしを、顚八盆作共に咎めて、こは無禮なり、作法を知らずや。諸侯たりとも使臣たる者、兩刀を帶て、玄關へ、登ることを許さんやは。最烏滸也。と制するを、親兵衛听かず、冷笑ひて、然ばかりの事知らぬにあらねど、人に尊卑あり、禮に吉凶あり。我君は、是房總の國主也。蟇田は原その麾下の城將、所領一郡の外を出ず。縱和順の折也とも、對應の義に及ぶべからず。矧謀叛籠城せられて、怨敵御方と分れては、只軍陣の作法に由るべし。約莫その君の使として、敵城に來ぬる者、身に帶たる刀を放さば、丌は降人に異ならず。且這刀は、君家の重寶、我老侯の賜なれば、權且も身を放つべからず。益なき事を咎んより、快々案内に達ずや。と答て從ふべくもあらぬを、顚八も盆作も、先度に懲りて爭はず、肚裏には冷笑ひて、只今何ともいはゞいへ、主君對面の折にこそ、猫兒に逢たる鼠の像く、頭を擡げ得ざらんに。と呟きながら聞ぬ貌して、軈て書院へ伴へば、景能と與四郎は、倶に玄關の簷下にをり、今奥に入る親兵衛の、背影を目送りて、心悄々地に伏姫神の、擁護を祈念したりける。却說犬江親兵衛は、坐席幾間かうち過つゝ、長廊下を遶り來て、引れて儲の書院に赴き、と見れば蟇田素藤は、朱緅の甲の、吊腿

の蟇が瀾より出て、迎ることを要せずは、犬江も亦角門より、決して出入すべからず。この義は什麽。と詰られて、それは、とばかり顚八盆作、腹は立ども理の當然に、爭ひかねていふよしもなく、先快士卒を走らして、親兵衛にいはれしよしを、素藤に注進しつゝ、故意門卒を叱りなどして、大門をぞ開せける。登時犬江親兵衛は、馬より閃りと下立て、門内に投入る程に、顚八盆作相迎へて、名告をしつゝ案内に立けり。その事の爲體、蟇田が士卒、犇々と、鎧たるもの二三百名、左右二行に相備へて、長鎗眉尖刀を晃めかし、或は弓箭鳥銃を携て、專虎威を張るものから、親兵衛は自若として、毫ばかりも見かへらず、引れて中門に迨るまで、景能は隷從ふて、左右に眼を配りたり。爾程に與四郎も、續きて馬を牽入れしを、城の士卒們罵り咎めて、こは漫也、疾出。よといふを與四郎冷笑ひて、靜謐無異の折ならば、馬を門前に繫ぎもせん、這籠城の最中に來て、獨門外に主を等んや。時宜を思はぬ衆人かな。といはせも果ず城の雜兵、二三十名群立蒐りて、推戻さんとて閙く程に、名馬も事情を知りけん、忽地に嘶き狂ひて、前より拱むを噬倒し、後より寄るを蹴返したる、勢ひ禁むべくもあらざれは、衆兵齊一駭譟ぎて、憶はず捫擇せし程に、與四郎は馬と俱に、突然として中門を、過りて玄關の頭に來にけり。登時顚八盆作は、件の悤劇を見かへりて、苦々しくは思ふものから、大事の前

べき。人がましき老黨を、擇て使价におこされなば、城門を開きて入れもせん。寄隊の陣に人はなきや。年は幾か知らねども、額髮ある少年の、加以犬江と名告れるには、狗竇こそ相應しからめ。开を角門より入れらるゝは、分に過たる管待なりき、と思はで過言は身の程知らぬ、白物也。と遣り返せば、親兵衛呵々とうち笑ひて、若們聞ずや、古の、賢しき人の例を思ふに、武内宿禰は、年十四の時、天皇(景行)の敕詔を奉り、北陸、及東方諸國を巡察して、百姓の叛るを治めたり。又日本武尊は、おん年二八にて、熊襲が魁師と聞えたる、川上梟師を誅し給ひき。又厩戸の皇子(聖德太子)の如きは、生ながらの聖にて、聰明睿智儔稀也。又應神の太子、兎道の稚郎子は、髫歳にして智慧廣大、始て百濟の王仁們に就て、天朝漢學の開祖たり。遠からぬ世に迨りては、菅家は五歳にして、五言絶句の作あり。後醍醐の八歳の宮、孝順戀字のおん歌あり。又その武勇の捷れしは、安陪貞任が獨子千代童子、十三歳にして、萬夫無當の勇あり。楠正行十三歳、父正成の遺訓を守りて、既に恢復の大志あり。この宅、源爲朝源太義平、源牛孺、曾我箱王、義朝の金王、敎經の菊王、熱田の御所五郎丸、枚擧るに遑あらず。是をもて觀るときは、才あると才なきと、人の賢と不肖なるは、老小をもて論ぜんや。且我家號を犬江と告るとて、狗竇より入るものならば、若們が主と憑む、蟇田は瀝より出入するや。蟇田

なれば許されん、と思量りし所行ならん。开は左まれ右もあれ、飽まで武威を赫奕して、开奴に胆を潰させん。事の准備は恁々にして、箇樣々々に計ふべし。この議を餘の老黨にも、士卒にも相傳へて、事整はゞ城内へ、开奴を容れて、案内をせよ。我書院にて對面せん。快々せよ。といそがせば、願八異議なく感服して、承りぬと應つゝ、走りて外面へ退りけり。爾程に犬江親兵衛は、城の門前に馬を駐めて、主僕等こと半晌許、こゝろ頻りに焦燥つ隨に、景能と與四郎は、迭代に城門を敲きて、開よく。と喚れども、城内なる雜兵們は、等ねく。と答るのみ、速には開くべくもあらず。恁りし程に礪時願八は、平田張盆作與冬と共侶に、華やかなる武具して、隊兵多く領て出て來つ、正門を戍る雜兵們に、目を注し下知を傳へて、寄隊の陣より來ぬると聞えし、犬江親兵衛と歟喚做たる猴子主僕が、門外に在るならば、內へ入れよ。と喚れば、雜兵們は應と答て、角門を推開き、卒おん使价入り給へ。といふを親兵衛冷笑ひて、馬より下りず、聲高やかに、若們などて我身單を、害怕るゝことの甚しきや。縱城門を咸開くとも、後より續く敵はなし。君子はゆくに徑によらず。況國主のおん使价として、角門より入る義やある。禮儀を知らぬ白物かな。と窘められて願八盆作、悚へず兩聲ふり立て、唔たり猴子奴が、月屬寄隊の大軍だも、屑ともし給はざる、我君の武威をもて、今さら誰にか憚る

籠中の鳥に似たれども、然ばとて又攻も撃れず、防禦の外に他事もなく、四門の衛戍を警て、憶はずも日を彌りしに、忽地國主の使价と名告て、最尊大に喚門ひしを、士卒驚き且訝りて、闖兒の小牖より張見るに、思ふにも似ぬ主僕三名、騎馬なるは少年にて、鑣奴は老人也。壯なるは若黨のみ。他は誰何、と呆惑ひつ、遽しく退きて、這隊の頭人、礪時顧八業當に報しかば、顧八听つゝ眉を顰めて、城樓に登りてこれを見るに、果して違ざりければ、左右を見かへり冷笑ひて、意ふに義成攻厭倦て、和議の使に那小兒を、おこせしにぞあらんずらん。先このよしを聞えあげてん。漫に許して内へな容れそ。いで〳〵といひつゝも、遽しく下立て、單みづから本城なる、後堂へ赴きて、素藤に報るやう、目今寄隊の使者と稱て、額髪ある猴子一名、禮服にて馬にうち跨り、犬江親兵衛仁と名告て、僅に兩個の伴當を從へ、胆太くも正門なる、御橋を既に渡り來て、對面を請ふといへり。因て猜し候に、義成久しく攻厭倦て、詮術のなき隨に、義通と牽替に、濱路姫を餽送んといふ、和睦の使价にこそあらめ。いかゞ計ひ候はんや。といふを素藤笑しげに、听つゝ屢點頭て、开は推量に差ふことなく、必和議の使价なるべし。然るを某甲某乙と聞えたる、一二の老黨を閣きて、二十に足らぬ小猴子を、大事の使价に立せしは、柔よく剛を征するといふ、拙策なる歟、爾らずは、愆失ありても、怯を取りても、弱輩

繋置ねかし。快々といそがせば、照文景能異議もなく、しかるべし。と應ても、親兵衛が今日の謀慮を、まだ知らざれば今さらに、心もとなく思ふのみ。恁てあるべきにあらざれば、景能は遑しく、身裝を更めて、伴若黨に打扮けり。照文は又景能が、馬を乘捨置ん事、惜むにはあらねども、一疋也とも軍陣に、必要あるものなれば、我は步行より御陣にゆきて、二疋の馬を牽んといひけり。浩處に後れて來ぬる、照文景能が伴の鐮隷僕侶們は、疲たる足を曳つゝ、折よく赶著得てければ、大家他們を勞ひて、一霎時喘を定めさせ、照文は又馬にうち跨り、苫屋が伴の奴隷には、景能の乘捨たる、馬を牽し相倶して、國主の陣へいそぎけり。却說犬江親兵衛は、景能と與四郎を、馬の左右に從へて、舘山の城へ赴く程に、朝日隈なく半竿昇りて、路傍に開初たる、山櫻の露馨やか也。既にして親兵衛は、舘山の城の正門に迫りて、一町許這方より、景能を走らして喚門するに、景能憚る氣色なく、單正門の橋際に拔向ひて、聲高やかに喚るやう、籠城の人々にものいはん。目今國主のおん使、犬江親兵衛仁來れり。主僕纔に三名なるに、駭怕れて箭を發ち、銃丸を飛して拒むべからず。はやく主長に報知して、城門を開きて迎へずや。と兩三番喚門程に、親兵衛も亦馬を拔めて、主僕三名、正門なる、橋を渡しつゝ、開くを遲しと、鐵門の頭に立たりける。この時舘山の城兵們は、久しく國主の大軍に圍れて、

まだ明ざりけり。この時照文景能は、倶に後れていまだ見え來ず。唯姥雪與四郎のみ、駛馬に赶携りて、一町とも後るゝことなく、倶にこの地方まで來にければ、親兵衛深く嘆賞して、翁は齢頽きたるに、路を千里の馬と倶に、烏夜にも迷はで逸早く、十數里を來ぬる事、又是一奇といひつべし。意ふに年來靈山に、心神を頤ひて、仙骨をや得たりけん。併伏姫神の、擁護も玆にありけんかし。といふに與四郎含笑て、いはるゝごとく我身ながら、奔走思ひの隨にして、壯年に彌增せしは、寔に神女の冥助なるべし。蜑崎苫屋の赶著まで、玆にて憩ひ給はずや。といふに親兵衛點頭て、那這と見かへるに、在曉の月既に出て、いと明かりける樹間に、舊たる佛堂ありしかば、軈て馬より下立て、這廢堂の緣頰に、尻をうち掛て憩ひてをり。當下與四郎は、袂なる、手巾を拿出、汗を拭去て、馬には草を食せなどす。左右する程に天は明て、烏の森を離るゝ時候、景能照文二騎相並びて、やうやくに來にけるが、親兵衛の等つゝ在りしを、うち見て倶に馬より下て、主僕を只管勞ひけり。就中與四郎が、青海波に後れずして、よく走りしに胆を潰して、最恥しく思ふものから、鄙隷の奴僕們は、酷く後れけんいまだ來ず。登時親兵衛がいふやう、和殿們既に來ませしに、這里にて時を移すべからず。我は快舘山なる、敵城に赴きて、御曹司を拯拿りてん、益なき奴隷を等ことかは。苫屋主の乘たる馬は、這頭に

を駝る情あり。この餘、蜑崎十一郎照文、苫屋八郎景能も、己がじしなる打扮して、各馬に乘たるが、倶に歩捷き奴隸を擇て、鑣奴にぞしたりける。恁而犬江親兵衛仁は、馬を甃石の頭に找めたる、人品初に彌增て、最長やかなる額髮を、左右へ耳まで振分たる、面色特に美しく、威ひあれども猛からず、意氣揚々たる打扮を、觀る者齊一稱贊して、憶ず耶々と喝采にけり。登時親兵衛、馬を駐めて、玄關にうち朝ひ、鞍の前輪に額衝俯すを、義實主觀つゝ聲を被て、適愛たき勇士の行藏、我は明日より汝が吉左右を、瀧田の城に俟つゝ在らん。曉天近し、快ゆきね。と仰に親兵衛、阿と應て、馬に拍れ乘遶らして、觀る間に出る三門口、與四郞も亦後れじとて、夸父が日を逐ふ勢ひあり。後方に續く景能照文、腰に吊たる張燈は、烏夜の螢火と晃めきて、竝樹の松の右ひだり、二町あまりを瞬間に、はやくも見えずなりにけり。

第百七回

犬江親兵衛活ながら素藤を捉ふ
里見御曹子優に陣營に還る

却說犬江親兵衛仁は、當晚名馬靑海波にうち跨て、大山寺を出しより、纔に二晌許にして、素藤が舘山の城に程遠からぬ、上總州夷灊郡、羽賀の鄕の頭なる、竝松原まで騎著しに、天はい


花咲の翁
馬を走らしく
親兵衛星夜
大山寺と出づ


親兵衛

大家廣庭に星列れて、事の容を觀るもの多かり。然ば住持役僧們は、義實主の身邊に侍り、沙彌喝食們は所化寮の、窗より闖くも尠からず。今宵は天好晴たれども、晦に近き月いまだ昇らず。遮莫玄關の邊なる、甃石の左右には、多く庭燎を焼たりければ、烏夜にも遺る隅なくて、白晝の如く明かりけり。爾程に犬江親兵衛は、青葱綅の身甲に、鋲打たる細鎖子の鉼摐て、上には、綟の飾磨紺の熨斗緬小袖の、中黑の花號あるを著下し、下には薄紅の𦡢膊の小袖二可うち襲被て、純褐の長社衦の、こも中黑の花號あるを穿たる、袴の襠をいと卭く綰揚げ、鞋は撒金に、箭竹龍胆を描金にしたる、絲柄の短刀に、小月形の名刀を、瑠卭に腰に跨え、細柄ある馬上張燈を、斜に帶の間に挿て、那名馬青海波に雲珠鞍置て、眞紅の厚總の、燃出る可なるを掛たるにうち跨り、紫と白と絞分たる靮子を搔繰りつゝ、十繫とかいふ、馬立小屋の頭より、徐々と歩せたるが、故意脛巾をば著けず、著坐に便よからん爲也。當下媼雪與四郎は、紺の綿臈衣の袖大きなるを、脛高に端折褰げて、海鼠形の脛衣の革紐を、前樣に楚と結び、正平革の勒肚して、恩賜の一刀を腰に跨え、麻織の草鞋を穿て、右手に楠の長炬を、秉りつゝ鑣面に從ふたり。正に是一個は十歳未滿の神童、年小なれども、身長卭く、深山を出る新鷹の、雲を凌る勢ひあり。一個は七旬前後の老翁、齡頽きたれども、筋力壯に、谷河渉す沐虎の、子

には飽まで豆秣を飼して、腰戰飯を忘るゝな。十一郎八郎們、與四郎も共侶に、退りてはやく准備をせずや。と仰に大家、阿と應て、立まくすれば、親兵衞は、恩賜の衣裳を左の肩に、被ぎて退るそが後方より、照文景能與四郎も、うち續きてぞ退出ける。この折までも席末に、侍りし姥雪の媳姑、音音竝に曳手單節も、却あるべきにあらざれば、後に跟きつゝ出る折、音音はいそぐ良人の袂を、掖住めて悄語くやう、上の御恩のかしこきに、就ても小心し給ひね。いふまでに侍らねど、老ては勤に勝難て、朽惜き事もありなまし。馬に後れて期に合ずは、倶しがひもなく侍らなん。心にかゝるは只これのみ。といふに與四郎點頭くのみ、應もあへず、景能們に、後れじとてか袖うち拂ふて、庫裡のかたへぞ走りける。爾程に義實主は、次の間に侍りたる、近習を召て云云と、住持に請ふべき事の趣、その餘も下知を傳ふべき事、且親兵衞們が身裝して、立出んとしぬる折、快知らせよ。と分付給へば、近習は屢應をしつゝ、こゝろ得果て立にけり。左右する程に、眞夜中の、鐘鎬々と响く時候、件の近習は走り來つ、親兵衞們が身裝、皆整ひて候。と報るに義實、然ばとて、遽しく身を起し給へば、目はおん佩刀を持て後方に從ひ、貝六郎は提燭を秉て、軈て先にぞ立にける。既にして義實主は、玄關に立出給へば、音音は曳手單節と倶に、力二尺八をも喚覺して、式臺に聚合てをり。又老侯の伴當は、

相應からず。因てこれを取する也。卒々。といそがし給へば、親兵衛は、又膝を找めて、受戴きて稟すやう、小臣のみかは、與四郎さへに、恪る御恩は有がたきまで、那身に餘り候はんッといへば義實主頭を掉て、然にあらず。他夫婦は、兩個の娘と共侶に、六稔和郎に仕へたる功あるをもてこの義に及べり。其を手づから取せぬは、故主と聞えし道節に、いまだ對面せざれば也。賞は貴賤に依るべからず、推辭は要なき事にこそ。と諭し給へば親兵衛は、いよ〱ます〱感佩しつゝ、退きて、然而與四郎に、うち對ひつゝ、やよ翁よ。目今御諚の趣を、具に拜聽せしならん。こは拜領のおん東西ぞや。といひつゝ遞與す中刀を、與四郎は、夢歟とばかりに、屢捧戴くのみ、只感涙に胸塞りけん、ものいふべくもあらざりけり。然ば後方に侍りたる、音音幷に曳手單節も、倶に感涙陀みて、皆老侯を拜しまつれる、歡びいふべうもあらざるべし。是等の事の趣を、見も聞もせし照文景能、以下の近習も目を注しつゝ、這君にして、這臣あり。現羨むべき榮にこそ。と感じ思はぬ者もなし。春の夜なれば短くて、はや子の五尅になりしかば、義實主は、親兵衛們に、身の暇を給はりて、罷出んとする程に、又喚返して宣ふやう、和郎が騎馬の打扮を、我見まく欲するかし。三門より這方には、寺法に騎馬を許されねども、こは軍陣の使价にて、勿論非常の大事にあなれば、住持に請ふて、玄關の、邊より乘しめん。馬

當が、もてまゐり候ひき。といふに義實主、左見右見て、先副佩の兩刀を、傍に置して、親兵衞に、うち對ひて宣ふやう、和郎はいまだ听ざりし歟。我家に、大月形、小月像と名けたる、重大の刀あり。大月形は、家督と共に、昔年義成に讓與へたり。といひつゝ件の副佩の、刀をやをら拿抗て、見よ此は是小月像也、夜行に迷ぬ奇特あり。世に聞えたる重寶なれども、今日和郎が大功の、賞として取する也。その短刀に挿添て、舘山へ赴けかし。又その小袖と、肩衣袴は、長短和郎に相應しきや、量りがたき東西なれども、开を著て今番の使价を勤めよ。こゝろ得たる歟。と言示して、手づから刀を遞與し給へば、親兵衞は遽しく、膝を找めて、小月像を、受戴きて席を避け、腰に帶つゝ稟すやう、然ばかりもなき小臣が、微功を賞し給はんとて、恁莫大なる賜は、冥加にあまりておん承を、稟すも畏く候也。御服章なる衣裳だに、拜領容易からざらんを、況當家の御重寶と聞えたる、這おん刀を賜らんや。おん使を勤果なば、程なく返しまゐらすべけれ。といふを義實主推禁めて、否、汝達八人は、我外孫ぞと思ふよしあり。伏姬が靈のその短刀を、拿出て和郎に與へしも、事情は同じかるべし。そが儘帶て、子孫に傳へよ。なでふ返すことあらんや。と諭して又中刀を、拿抗て宣ふやう、親兵衞、これをも和郎に取せん。こは與四郎に讓り與へよ。他は馬の鑣銜に、打扮つとても敵地也。朴刀は

ん。與四郎は老人也。駿馬の足に及んや。已ねく〳〵。と禁め給へば、與四郎怺へず眼を睜りて、御諚では候へども、小可はこの年來、山路に熟て、身の衰を、毫も覺候はず。こは那仙果神藥を、たうべし所以に候はん。千里を走る馬也とも、赶續んこと極めて易かり。いかで許させ給ひねかし。と怨じて只管請まつれば、親兵衛陪補しまうすやう、他は知せ給ふごとく、稀古の齢に候へども、世の老人と同じからず。倘路にて疲れなば、搔抓みて、小臣が、尻馬に乘せ候はん。この義も御こゝろ安かるべし。といふに義實主含笑て、然らば甲乙倶にゆきね。安房殿へもこの趣を、はやく通達せずもあらば、期に莅て不便ならん。といひつゝ傍を見かへりて、十一郎は、我副馬に、うち乘て他們と倶に、路次をいそぎて是等のよしを、躬方の陣へ注進せよ。八郎を借るよしは、別人をもて明日稻村へ、いひ遣すべう思ふかし。と仰に歡ぶ與四郎はさら也、照文も欣然と、倶に言承したりける。登時又義實主は、目貝六を喚近づけて、我兩箇の柳箱には、副佩の兩刀と、嚮に著たる禮服あらん。倘掩膊と脛甲と、身甲もあらば、皆廣蓋に、うち載て快もて來よ。と分付給へば件の兩臣は、承はりぬ。と應つゝ、いそしく倶に立にけり。姑且して貝六目は、老侯の副佩の刀、衣裳はさら也、這餘の東西をも、兩三箇の、廣蓋に載てもて來つゝ、侯の身邊に安排べて、御身甲も掩膊脛甲も、非常の備に、おん伴

て甲冑の、准備なきを爭何はせん。と問れて親兵衛、否、伴當の、多きは路次の煩ひあり。この身の外に一人也とも、帮助を求むべくもあらねど、然しも國主のおん使、と稱て那里へ赴くなれば、伴若黨一名と、鐃隷の奴僕はあるべし。這兩個にて事足りなん。況甲冑なンどは要なし。願ふは禮服一領を、貸給ひね。と稟すにぞ、義實主眉を顰て、そは易きことながら、和郎は國主の使と唱て、那里にゆきて何といふやと。問れて親兵衛、然候。籌策は密なるをよしとす。機に臨み變に應じて、術はいくらも候はん。目今こゝにて云云と、安定にはいひがたかり。と答まうせば點頭て、然らば和郎に拿すべき、我身甲と掩膊脛甲も、柳筥にあらんずらん。幷を禮服の下に著籠めよ。却誰をか伴若黨に、打扮して遣すべき。といひつゝ左右を見かへり給へば、苫屋景能找出て、その義はいかで小臣に、仰付られ候へかし。曩に御曹司に倶し奉りて、殿臺に赴きしかば、那里の地の理は旣に知れり。且稻村より乘もて來ぬる、馬も這里に候へば、那靑海波に及ばずとも、五十歩百歩の間にて、赶續き候はん。といへば又與四郎も、おそる〳〵席末より、膝を找めて稟すやう、願ふは和子の鐃隷に、小可こそ參るべけれ。六稔以來守傳きしに、今さら憖る大事の件に、立ずは生甲斐候はじ。といふを義實主うち笑ひて、八郎は、稻村の、使者にはあれど、內人也。自他の差別のなきものなれば、所望に依るもよかンな

人ならざれば、縦せん術ありとても、舘山までは路の程、十數里なるものを、這夜を犯して遣られんや。明日は瀧田へ領て還りて、和郎が祖母妙眞に、對面させんと思ひしに、その義なくば恨みやせん。和郎敵城にゆかんとならば、異日義成にその義を告て、謀じ合して、便宜に任せん。惴るは要なき事にこそ。と諄返しつゝ制め給ふを、親兵衛听ず又いふやう、賢慮寔にその理あるべし。そを總角の生賢像に、御諚に悖らば罪得がましく、寔に畏う侍れども、古語にも兵は拙速を、貴ぶとこそ聞えたれ。久して謀の、巧なるをよしとせず。今より那里へゆくにあらずば、御方の機密を敵に知らるゝ、透これなしとすべからず。小臣も亦祖母に、對面を急ざるにあらねど、そは私の恩愛のみ、臣たる者の本意にあらず。痛ましいかな御曹司は、虎穴の内におん身を置れて、いくその艱苦を受給ふらん。そを想像り奉れば、一日も千秋に異ならず。然ば神女の示教にも、山路の寇を對治して、快義通を拯拿りね。と宣はせしに、這里に宿て、今宵を工夫に過しがたかり。御許容あらば、公私の大幸、この上や候べき。いかでいかで。と只管に、忠義に厚き武勇の魂、止るべくもあらざれば、義實僅に點頭給ひて、然までに思はゞ禁めはせねど、暁方までは烏夜なるに、さりとては心もとなし。非如和郎十勝の、計略ありとても、その身單ゆかんは危し。我伴當の數を盡して、咸和郎に從はせん歟。他們は都

照文貝六與四郎們、近習外樣の伴當は、左右に從ひ前後を衞りて、張燈篝火振照らしつゝ、ゆくこといまだ幾ならず、小水門目は、その身の伴當と、大山寺なる道人、兩三名に手炬を秉して、迎に來つゝ路傍に、跪居て老侯に見參す。義實主は音音們を、那里へ送り屆たり。と報るを听つゝ只管に、馬の足搔を早め給へば、既にして大山寺なる、三門に來給ひつ、軈て馬より下立て、玄關に赴き給ふ程に、住持は、役僧を領て、遽しく出迎へ、軈て客殿に案內をして、茶を薦め果子をまゐらせ、富山の奇談、神女の靈驗、听たる隨にいひ出て、その歡びを舒などす。恁りし程に役僧們は、行童喝食を給侍に立して、先准備の夕饌を、老侯に羞めまゐらせ、次に親兵衞照文們、都て幾十名の伴當にも、遺る隈なく夜飯をものして、馬にも秣を飼したる、管待極めて叮寧也。そが中に親兵衞のみ、老侯と一席にて、たうべることを許されしかば、人咸これを羨みけり。恁而伴當們の餕遺もなく、果たりと聞えしかば、義實主は、與四郎と、音音曳手單節們に、嚮に听たる奇譚の、漏たる事もあらん歟とて、皆並て客殿へ、召登し給ひける。おん後方には照文景能、貝六日們も侍りたり。登時親兵衞拔出て、義實主に稟すやう、我君、願ふは小臣に、權且暇を賜ひねかし。恩賜の馬に乘走らし、今より舘山へ赴きて、御曹司を拯ひ拿り奉り候はん。といふを義實主見かへりて、那は又甚く性急也。和郎は、庸

に、百里を行くこと易かりてん。この雜毛の波濤に似たれば、龍種ともいはゞいふべし。なれどもこは外飾にて、世に稀なるを愛るのみ、良馬と做すに足らざる歟。と阿容たる氣色もなく稟しかば、義實主駭き感じて、適要ある才子なるかな。今這馬を和郎に取せん。鞍鐙さへ皆具ひて、牽もて來たれば便り好し。うち乘て我先に、立て非常に備へずや。と仰に親兵衞忻然と、額を衝き、賜を、拜して又稟すやう、烏滸がましうは候へども、小臣が曾祖杣木樸平は、青海苔村の民也とか聞にき。この馬も那里の牧より、出たらんには舊縁あり。先乘試候はん。といひつゝ軈て牽退けて、閃りとうち乘る轡法に、暴馬なれども靜にて、主のこゝろに隨ひけり。登時犬江親兵衞は、輪騎を做すこと兩三遍、舊處に下立て、又おん前に參りにけり。義實主は、親兵衞が、武藝膂力の捷れしを、嚮に目撃し給ひしかど、馬術までは能せじ、と思ひ給へば這暴馬を、賜りて乘せ給ひしに、精妙かくのごとくにあなれば、いよゝ感悦淺からず。況照文以下の伴當、孰か甘服せざるべき。ます〱憑しく思ひけり。爾程に義實主は、晴たる星をうち仰ぎて、噫漫なりき。要なき事に、甲夜過ぬらん。卒ゆくべしとて、發兒を放ちて立給へば、鏕奴がはやく牽よする、馬にうち乘給ふ程に、親兵衞も亦青海波に、乘てぞ先に立にける。この餘苫屋景能は、稻村より乘もて來ぬる、馬ありければ許されて、騎馬にて後方に從ふたり。恁而

景時が、生唼磨墨也といふとも、是には優さじと見えたりける。當下景能がいふやう、原るに這馬は、當國蒼海巷の牧より出たり。既に擬するごとく、青白の駁、波に似たれば、牧士們命けて、青海波、と喚做たりと承りぬ。と告れば義實頷き給ひて、寔に毛色の波に似たるは、青海巷に相稱へり。开は好名也、後々まで、如右喚すべけれとて、只管賞讃し給ひつゝ、側に侍りたる、親兵衛を見かへりて、和郎、這馬を何とか見たる。と問れて親兵衛、然候。孔子の御まへに、語道に似たれど、小臣曾聞ることあり。約馬は、八尺以上を龍といひ、七尺以上を騋といふ。六尺なるを、通て馬とす。良馬は、頭を王とす、宜く方なるべし。目を丞相とす、宜これ明なるべし。脊を將軍とす、必是强を欲す。腹を城郭とす、好張ることを欲する也。四下を令とす、得て長かるべし。眼は高く匡うして、眼睛、鈴を懸たる如く、眼下は、鬣と鬐を懸たる像く、鼻孔大うして、鼻頭に王火の二字あり。口中尤赤かるべく、膝骨は圓して、張たるを宜しとす。耳は、相近くして堅く、小うして厚かるべし。伏龍骨は砍て、頸長く、雙趺大うして突出、蹄は厚く、腹下平にして八字あり。尾骨高くして、垂るゝこと長かるべし。かくの如きを千里の馬とす。此は是いはでもしるき、李伯樂か相馬經の、崖略に候歟。這馬、高七尺有餘、骨法右の趣に、及ざる者ありといへども、龍と驪の間たり。よく騎る者は、一日

略を听知りたれば、相歡びて御下向を、なほも那里に等奉りしに、日暮るゝ迄も見え給はねば、有繋に心もとなくて、准備の張燈蕉火に、路を照しておん迎に參りにき。就て稻村よりのおん使、苫屋八郎景能も、久しく河原に等奉りしが、牽し來たりしおん馬と、その身の伴當をのみ那里に留めて、こゝまで推參仕りぬ。と告るを義實听給ひて、來ぬる伴當を勞はせ、然而景能を召近づけて、汝は長途の疲勞も厭はで、我迹を那這と、慕ふて這里までも來ぬる事、歡び思ふ所也。次丸が贈りぬと聞えたる、馬は麓へ下りて見ん。大山寺まで伴せよ。と仰に景能歡びを、稟して軈て退きけり。この時迎に來たる伴の近習們が、今朝瀧田より吊したる、老侯の轎子を、這里まで昇せしと聞えしかば、照文們薦稟して、乘せまゐらせんと欲せしかども、義實頭をうち掉て、けふは特に長途なるに、皆山路にて疲勞にけんを、いかにして我身單、優に昇して還らんやとて、毫も听かで、麓まで、そが儘下向し給ひしを、雜色奴隷に至るまで、傳聞つゝ感服して、皆忝く思ひけり。既にして義實主は、麓の河原にかへり來て、發兒を建させ、尻うち掛、又景能を召近づけて、けふまゐらせたる那馬を、觀んとていそがし給ふにぞ、景能隨即伴當に、蕉火を秉らし、四下を照して、馬を牽寄て見せまゐらするに、現その形勢、凡庸ならず。毛色は、蒼と白を雜えて、鱗の像く波に似たり。高は七尺有餘にして、那高綱

九郎が事はさら也、その後甲斐の石禾にて、信乃道節に環會たる、其頭の事を艸として、濱路姫の上までも、甲乙となくいひ出れば、親兵衛も亦照文が、嚮に聞漏らしたる我うへと、姥雪一家の事までも、皆詳に說示すを、照文いよ〳〵奇也。と稱へて、連りに步の挫むを覺ず。側聞する貝六郎も、憶はず止息を吻く迄に、その言每にうち驚きて、幾番となく見かへりけり。爾程に義實主は、甲乙の物がたらひの、最興あれば、笑局に入りて、來るともおぼえず、又舊の、樹楹間なき邊までかへり來給ふ程に、然しも長かりし春の日の、生憎越に暮果て、加以今宵は烏夜なるに、樹の下ゆけばいとゞしく、其里とも絕て辨よしぞなき、主從倶に挫難て、殆困じ果たる折から、去向の路より閃々と、蕉火張燈見きて、人馬許多近づき來にけり。登時義實主從は、這衆人の親疎禍福を、量り難つゝ路傍に、杖を住て熟視るに、他們が引提たる張燈の、花號は中黑也ければ、僅に心おちゐたる。照文は貝六と、共侶に找出て、來たれるはおん伴當們歟。上には這里まで御下向なり。快燈燭をもて來ずや。と兩聲高く呼はりけり。當下來ぬる伴當們は、應と答て、路傍に、わかれて二行に扣えたる、そが中に近習兩三名、持る張燈うち抗て、遽しく找み來つ、照文們にうち對ひて、嚮に日萌三が、仰を稟てかへり來ぬる折、今日の御危難、後竟に、御利運になりし事の趣、幷に犬江姥雪們が奇異の顚末、その崖

及べからず、屈曲たる早蕨は、畳る波の磯打歟、と疑はる。建立せられしより既にはや、二十稔有餘を歴たれども、觀音堂は荒もせず。只赭塗の柱高欄などの、雨風の爲に處々、剝たるもありけり。與四郎音音が六稔以來、仕まつりし甲斐ありて、人詣ねども、香華絕ず、蜘網もなく鳥も糞さで、尊さ更にいふべうもあらず。貝六郎が玆までも、携たる花の折枝、なほ餘りありければ、そを佛前の花瓶に植加などす。登時義實主は、堂內に陟找みて、燒香默禱を凝らし給へば、親兵衞、照文、與四郎、貝六も、主の後方に並跪きて、共侶に拜みけり。是より下向に赴き給ふに、登るには似ず足も找みて、いまだ疲勞もあらざりける、義實は、照文と親兵衞に宣ふやう、十一郞はけふ料らずも、親兵衞と再會の本意を遂て、他が恁大きうなりたる、神助の奇特を知るといへども、左に右に暇なかりし、我面前を憚りて、別後の情義を盡さゞるべし。折から山路は交加ふ人なし。けしうはあらず、相譚ひね。听つゝあるかば、疲勞を忘れて、好慰にあらんず。と仰に照文、然候。御內人は多かれども、小臣のみ親兵衞と、憂苦を倶にしてければ、別後の事も問まほしく、恙なかりし歡びを、舒るに暇候はねば、雙ておん伴に立ながら、靴を隔て癢を搔く、心地のみして候ひき。然らば御免を蒙て、這通路來し方を、語り慰め候はん。と答まうしつ、親兵衞と、うち斷話つゝゆく程に、那神罰に心地快かりし、舵

と與四郎を、喚近づけて宣ふやう、玆より峯上へ遠くもあらじ。卒觀音堂へ參詣せん。與四郎案内をせよかし。と只管にいそがし給ふを、照文諫め稟すらく、御諚では候へども、亦復那里へ迨らせ給はゞ、御下向は山路に暮て尤不便に候はん。願ふは異日參らせ給へ。けふのみに限ることかは。といふを義實聞あへず、否、我も亦其頭の事を、思ざるにあらねども、嚮に危難を免れしも、又親兵衛を得たりしも、皆伏姫の神靈の、冥助擁護に依るといへども、他が菩提の爲にとて、建立したる峯の堂の、觀音薩埵の妙智力を、加え給ひしも知るべからず。その佛恩を思ひながら、賽願を疎にせんや。況建立の後、幾程もなく、山河の爲に路を絕れて、詣ることを得ざりしに、その路開けて玆まで來ながら、空に歸るはこゝろにず。與四郎先に立ずや。と諭して只管進み給ふ。理りなれば照文們は、再議に及ばず隨從ふて、軈て峯上に倶しにけり。是より路はなほ嶮岨にて、熊徑鳥路の羊腸たるを、主從辛して登る程に、やうやくに巓に屆りて、那這となく見亘すに、安房上總の海はさら也、武藏伊豆相摸の海濱まで、煙霞の間に見れて、走船の白帆幽に、一葉の波濤に漂ふに異ならず。況澳津鳥の、夕陽に群飛ぶ光景は、百花の春風に、翻るに似たりけり。然ば補陀落山の秋の月も、夜々玆に隈なかるべく、祇陀竹林の春の鳥も、朝々暢ひ來ぬらん、と思ふ可の靈場佳景、嵯峨たる奇嵒は、刀して削做すとも

山は慶雲を吐て、奇峯を累ね、風は松濤を起して、彈琴に似たり。靈芝石上に黏て、五彩眼に美しく、異禽幽谷より出て、友を求る聲あり。沙石は、黑白を雜えて、棊仙を見るに由なく、飛泉は底當を見はして、深淺を料るに易かり。實に是塵外の一天地、東海無雙の仙境なりき、と意中に賞讚したりけり。且して義實主は、念じ果て退き給ふに、舊にし事のみ偲れて、憶はず嗟嘆せられたり。又犬江親兵衞も、出世の暇を稟さんとて、墓に朝ひて拜稽す。次に、照文貝六郎、與四郎も許されて、迭代に拜みけり。就中照文は、亡父輝武の事をしも、今亦こゝに思ひ出て、哀慕の情やる方なきを、只是一蓮托生、と念じて稍罷りにけり。祭果て義實主は、這伴當們を從へて、那首級を瘞みたる、塚を見んとて赴き給へば、曩に與四郎音音們が、築建にきと聞えたる、馬塚も玆にありけり。義實主は、兩個の塚を、左さま右さま覷して、現親兵衞が伏姬の、靈に聞にきといへりしごとく、午と戌とは六合也。今までは這丘を、犬塚とのみ喚做たれども、犬塚は信乃が家號と、相混じて宜しからず。因てこの丘を改て、犬馬塚と喚すべけれ。衆伴この意を傳へよ。と仰に大家異口同音、承りぬと應けり。この後居多の歲月を歷て、嵒嵫なる家伙鍋釜は、化して石になりたるが、犬馬兩塚と共に、里見九世、義安の時までありけり。其後はいかにしけん、今は聞えずなりしとぞ。話省饒舌、登時義實主は、照文

衛と照文は、義實の手を挽まゐらせ、或は藤蔓に携り、嵒稜に手を掛て、辛して前面に迫るに、與四郎は朴刀を、衝立々々先に拔みて、荊棘を拂ひ、垂たる枝を推揚て、徐に導引まゐらせけり。既にして義實は、嵒廬に辿り著て、先那這と見給へば、廬門の邊には、地炕ありて鍋を掛たり。この餘は、碗と折敷と、手桶柄杓、擂盆菜刀燧匣あるのみ。裡面には、筵を幾枚か布たれども、衾夜物などは見えず。義實これを訝りて、親兵衛們は、この年來、夜はいかにして寢たるやらん。春冬の寒けき夜にも、衾はなき歟、甚麼ぞや。と問れて親兵衛然候。這嵒廬に在るときは、冬の夜もいと暖くて、汗する可也ければ、衾は欲しくも候はず。夏はいと涼しくて、蚤蚊もあらず候ひき。といへば義實點頭給ひて、然ぞあらん、其も亦奇なり。と稱へて軈て伏姬の、墓頭に迫り給へば、標の松は翠を增て、梢高くぞなりにける。然れど　掃除に箒隙を遺さず、小草なども刈拂ひたる、墓には、今朝植たらん、と　おぼしき色々の花多くあり。靑磁の香爐に燒さしたる、煙なほ仄にて滅ざりしは、是も亦與四郎音音が、手向たりけん、と猜せらる。登時艄船貝六郎は、齎したる花を植更て、石滴を汲みつゝ沃ぎなどす。與四郎も亦これを幇助て、准備はやくも整ひければ、義實は　懷　より、一裹の香を拿出て、件の香爐に燒熏らしつゝ、廻向に時も移るべし。爾程に照文貝六は、跪坐て後方を見かへれば、

し給へば、萠三は遽しく、花を貝六に遞與しけり。當下與四郎は、主の先に立、親兵衛、照文貝六は、左右に從ひつゝゆく程に、音音は又曳手單節と、力二尺八をも侍らして、目萠三、自餘の近習と、倶に跪坐て目送りまつるを、義實急に見かへりて、萠三們はこゝろ得たる歟。その生口毎を領て、瀧田へ還らば、我は今宵大山寺へ、止宿のよしをも有司に告よ。いふに及ぬことながら、夜分の小心、門戸の守衛等閑にすべからず。快々ゆきね。といそがし給へば萠三は、唯々と應して、なほ姑くは跪坐たり。既にして義實主は、遠くなりゆき給ふ程に、大家ひとしく身を起して、萠三は自餘の同僚們と、倶に五個の生口毎の、索拿分ちて牽立れば、音音は、捨たる眉尖刀を、又携て、媳孫們と、倶に目に導れて、齊一麓路へいそぎけり。却說里見義實主は、山路を陟り給ふこと、纔に兩三町にして、一條の谷川ありけり。こは麓河の水源なれども、此すら水の涸たりければ、昔見たると同じからず。前面は卽伏姫の、墳墓ある嵒巉也、ゝ大法師が年尙少くて、金碗大輔孝德と喚れし時、八房の犬を撃んとしたる、その鳥眼銃の銕丸あまりて、伏姫落命し給ひたる、事さへ思ひ出られて、涙と共に目も逈に、霞籠たる山又山の、嵒根躑躅花開初て、遲々と長き春の日も、路の栞も那這と、結ぶは夢の浮世ぞ、と觀念の外他事もなし。抑這河の水涸たれども、疊壁綠苔高く蒸て、升降不便の難處にあなれば、親兵

く候也。却要緊の一條を、稟上漏し候ひき。稻村の大城より、苫屋八郎景能が、次丸君のおん使として、駿馬一疋を牽しつゝ、今朝瀧田の御隱館へ、來著仕り候ひしに、君は今朝未明より、大山寺へ御參詣の、よしを傳承り、快見參に入らばやとて、軈て那首へ赴きしに、那首にははや御坐さず。又御登山の趣を、聽知りてなほおん迹を、慕ひつゝ這山の麓まで、參りしかども、臣們をすら許させ給はで、遺し置せ給ひしかば、這里までは得伴はで、御下向を等し候ひき。件の駿馬は、青海巷村より、今番二頭獻りしを、そが一頭は、舘山なる、御陣へ牽して、おん嚴君へ、まゐらせ給ひぬ、と聞えたり。又一頭は、老侯へとて、獻らせ給ふにこそ。と聞えあぐるを義實主は、聽つゝもうち含笑て、次丸は尙幼小なるに、父祖へ孝順、歡ぶべし。そは氏元清澄們が、稟薦しにぞあらんずらん。と仰に親兵衞找出て、願ふはそのおん馬を、小可に貸給ひね。今より舘山へ騎走らして、立地に御曹司を、拯拿り奉らん。と惴るを義實見かへり給ひて、壯なる哉、勇士の情願。幵も歡ぶべき筋なれども、義成が大軍ですら、動しがたき勍敵を、和郎一個ゆきて、成ことあらんや。幵は歸城の後、左も右もせん。然までに急ぐ事かは。と制めて許したまはねば、親兵衞は、いふかひなし、と思ふものから爭ひ難て、應をしつゝ退きをり。爾程に義實主は、先や墓所へいそがんとて、やをら杖を搔拿て、衝立て身を起

吒を省ず、同志の甲乙さへ誘引て、推參仕りたる甲斐に、御危難の事の趣、伏姫神の靈驗奇特、及大八の犬江親兵衛が事の顚末。幷に與四郎音音們、一家兒の、再生の奇談まで、料らず君のおん後方にて、粗听知りて又さらに、胸を潰し候ひき。事皆君の御洪福、最歡しく候。と壽きまつれば、義實主は、含笑ながら點頭て、然也。嚮には若們を、制めて籠に在らせしかども、今は人に要ある折也。招れずもよく來つるかな。萌三は、一兩個の、同僚と倶に、這生口們を、快籠へ牽下して、那首より雜兵を領て、今宵瀧田へ遣して、有司に告て獄舍に繫ぎね。又目は、音音曳手單節と、兩個の穉兒力二郎尺八を、大山寺へ案內して、今宵は那首へ止宿させよ。我も亦時宜により、又那寺へ立寄りて、曉るを等て、明日歸城せん。親兵衛と與四郎を、我鄉導にすべければ、十一郎貝六們は、這里より登山の伴に立つべし。就中十一郎は、親兵衛が年四の秋、神躱に遇ひしより、他が生死存亡を、思難つゝうち不娛しに、料らずも今對面して、年來の胸開けにけん、寔に奇しき事ならずや。と仰に照文額を衝て、御諚の如く、和漢今昔、世に神童なきにあらねど、身長さへ憖猛可に、大きうなりしは一大奇事にて、古にも儔なく、後の世はなほ有がたからん。前よりつら〱相候に、幼貌は耗ねども、その人としも聞ざりせば、いかにして認るべき。猶緩やかに來し方の、物がたりを听ばや、と思へば樂し

て、なほ鞫問して、言實ならば、安房殿に聞えあげて、都て那里の下知を等べし。命乞はその折の、時宜に依るべきものなりかし。と宣ひながら天うち仰ぎて、思ひがけなき這那の、問答に時を移して、上墳をいまだ果さず。快ゆくべし。と遽しく、身を起さんとし給ふ程に、貝六目は、左右より、找出つゝ稟すやう、蓢三がおん花を、求得てかへりまゐりたり。又蜑崎十一郎照文と、この餘御伴の近習兩三名、倶にまゐり候ひしが、おん事多かる最中に侍れば、なほそが儘におん後方に、扣てこそ候なれ。と聞えあぐれば義實主は、亦復石に尻を掛て、そはよき折也、快召ね。と仰に目貝六は、阿と應つゝ退きたる、程しもあらず東峯蓢三は、莽草と桃の花などを、手に持て找み出、且照文以下の伴當も、倶に見參に入りにけり。登時蓢三がいふやう、曩に仰付られたる、おん花を求得て、還りまゐらんとせし程に、十一郎們は、御登山に、おん伴當の寡きを、いと〳〵心もとなしとて、倶に推參仕りぬ。爾るに君には御危難ありしを、幸ひに神童の、賊徒を搦捕りしといふ、事大概は側聞して、皆共侶に、一たびは、驚きつ又歡びて、御高運のこよなきを、今さら感佩仕りぬ。と祝し稟せば照文も、找み近づきて稟すやう、曩には御登山のおん伴を、許させ給はざりしかども、蓢三をすら、おん花の、御用に遣させ給ひしかば、いよ〳〵胸中安からで、一霎時は那里に候ひしが、左にも右にも堪がたさに、おん

且我曾祖杣木翁と、汝が外大父無垢三は、倶に金碗氏の舊僕にて、八郎主の劍法を、受たるよしも傳聞にき。乃祖をいへば、我は四世、汝は祖孫三世なれども、行狀霄壤の差ひあり。譬ば這天津九三四郎のごとき、當年那古七郎と、倶に主君の先途に達て、戰歿の聞えありける、天津兵内が弟也といへり。當年那兵内と、倶に戰死したりける、那古の任は、犬士の一人、我小父犬田小文吾是のみ。因ておもふに、その先人の、忠死も亦得失も、異なることのなけれども、子孫の行狀同じからねば、受る所の榮辱禍福、かくの如き差池あり。この義を熟思ふべし。恁れば若們が縲絏の恥辱は、皆是自業自得にて、憐むよしもなき事ながら、昔を思へば我も亦、空谷跫音の情なきにあらず。陳ずるよしに詭なくて、良民にならまく願はゞ、我纖芥の功に易て、命乞して得さしもせん。身の非を飾る事をなせそ。と諭せば南彌六額を衝きて、仁義の教諭、肝胆に、銘じて死後まで忘るべからず。非除這身は許されずとも、今はしも恨なし。犬馬の齢呉竹の、四十に洎ぶ今までも、身の愚魯を知ざりければ、大父の汚名を雪ん、と思ひつゝ罪を累ねたり。皆愆にて候ひきとて、只管陪話て已ざりしを、親兵衛、然こそ。と頷きて、退きて義實主の、身邊にまゐりて稟すやう、言皆听せ給ひけん、他も招伏仕りぬ。別に仔細も候はず。と告るを義實うち听給ひて、嚮にも既にいひけらし。他們は瀧田の獄舍に繫ぎ

乞ひまつるべきに、茲に心のつかざりし歟、その愚は丙丁相似たり。取るよしもなき白物なるかな。慝ても陳ずるよしあるや。と連りに問れて南彌六は、羞たる頭を稍擡て、小可無學俗骨にて、血氣の勇を旨としたる、弱冠の初より、俠を磨き意を立て、みづから許して世の豪傑ぞ、と思ひ誇りしは、井中なる、蛙に似たる淺智短才、後悔臍を噬ども及ばず。獨に和君に撃れし折、疼楚に堪ず、逃迷ふて、峯上の方へ走る程に、那姥雪とかいふ翁に、撞見して擒捕られしは、撲傷によりて進退不便の、命運茲に盡たるならん。縱みづから新にして、恩免を請稟すとも、赦されがたき大辟の、罪戾を爭何はせん。死も亦恥には代がたかり。只速に死んのみ。といひつゝ傍の樹に觸て、頭を摧きて死まくせしを、親兵衞、ヤヽ。と牽禁めて、やをれ南彌六、狂へる歟。賞罰は上に在り。大辟不赦の罪人なるに、恣に死まくすとも、なでふ自殺を許さるべき。心を鎭めて听ねかし。汝は、那定包に謀られて、不測の罪を醸したる、外祖州崎無垢三が、本性に似たりと思ふ歟。我は當年無垢三と、倶に當國の俠民なりける、杣木樸平の曾孫也。然ば我父、山林房八は、大父の汚名を雪んとて、身を殺して仁を做しゝより、我身に至て思ひがけなき、天の資神の庇あり。世に俠者といはるゝものは、不義に與せず、奸邪を負けず、善人の與に憂を分ちて、よく理義に明なるを、世々に命けて義俠といふ。我父房八則是也。

幸也けり。と道理を盡して諭し給へば、與四郎音音、曳手單節も、這宅のもの推並て、感嘆の外なかりけり。そが中に親兵衛は、額に汗しておそる〳〵、老侯に稟すやう、目今仁字のおん諭は、尊く承り候へども、何でふ臣等がこれに當らん。譬ば那鼠璞の如く、名は同うして、その物異也。最恥しく候かし。就て那南彌六とか聞えたる艦廄兒は、既に墜八が招了にて、素生は見れ候へども、尚詳ならざる義あり。那奴も拷問仕らん歟。聞召るべうもや。と詞急迫しく問まうせば、義實听つゝ頷き給ひて、有理左に右とうち紛れて、他が事に及ざりき。親兵衛徐に尋問ね。與四郎音音、曳手單節は、穉兒們共侶に、瀧田の城へ、我領て還ん。姑且後方に退きて、下向の折を等ねかし。と仰に畏む老夫婦、兩個の孀婦は、兩個の兒子を、先に立しつ、皆共侶に、近き樹下に退きて、事果るまで跪坐たり。登時犬江親兵衛は、樹下に繋置したる、生口荒磯南彌六が、身邊に找みうち對ひて、やをれ艦廄兒、南彌六とやらん、聞くに汝は當初、當國洲崎の俠客也ける、無垢三が外孫ならずや。神餘の子孫あるにより、憂を分ち死地を踏み、昔在無垢三が愆て、光弘主を犯したる、辜を償んと欲りせしは、然もあるべき事ながら、理義も邪正も思はずに、逆賊素藤が與に、我老侯を、犯しまつらんとせしは甚麼ぞや。實に神餘の爲を思はゞ、九三四郎們に說薦め、稻村殿（義成をいふ）へ訴稟して、恩祿を

げて稟すやう、世に有がたき御懇命、數ならぬ身に餘りぬる、一家の幸とまうさんも、猶憚りに侍るめり。皆是神女の御引接にて、緣しあればぞ、犬江の和子の、餘慶を受し歡びは、駛馬の尾に附たる蠅の、千里に到るに似たらん歟。故主で侍る道節すら、まだ見參に入らざるに、丌が家僕の宅眷なる、我們に惶うも、忝はおん目を賜はする、面目あまりて今さらに、影護くも侍るかし。といへば亦與四郎も、音音も倶に稟すやう、媳婦們が聞えあげたるごとく、時宜にはあれど、道節們に、先だちたる見參は、寔に惶う候ひき。といふを義實主推禁めて、否賞罰は貴賤によらず。我は只若們が、忠信節義を賞するのみ。微賤也とて歎んや。譬ば、道節們七犬士のごとき、我照文をもて幾番歟、招きよせまく欲りせしかども、他們は倶に固辭まうして、八人具足せん折まで、得まゐらざりけるに、招かずして親兵衛仁を、越に得たるは時なるかな。夫仁義八行は、虧べからざるものなれども、就中仁を根柢とす。那竹の節あるごとく、則仁を根として、餘の七行は、各節也。然ば孝悌忠信も、又義も禮智も仁なければ、その德聖に至りがたかり。この故に八士の一人、曼讃信の一仁先出世して、忠孝義信、禮智も悌も、皆這仁に由らんのみ。差こそ異なれ、媼雪一家も、倶に曼讃信の仁に由て、その忠義節操の、應報を得たる也。我聖人にあらざれば、玆に仁を做得ざれども、不用意にして仁を得たり。僥

る、程しもあらず曳手單節と、兩個の孫兒を作ふて、舊處に出て來つ、大家程よく並坐して、義實主に拜見す。當下親兵衞找み出て、老侯に稟すやう、他們は則音音が媳婦、十條力二尺八が妻也ける、曳手單節姊妹にて、兒子は後の力二郎尺八にこそ候なれ。と聞えあぐれば與四郎も、笑しげに額を衝く程に、音音は、兩個の孫兒の頭に、兩手を掛けつゝ額を衝して、倶に千歲をぞ唱へける。爾程に義實主は、這四個の母と子を、つら／＼と見つゝ宣ふやう、やよ曳手單節とやらん、若們が再生の、奇特は既に與四郎音音が、告しによりて具に知れり。寔に天鑒愆たず。若們姊妹孝順にて、よく姑に仕へずは、いかにして這應報あらんや。且力二尺八が、遺腹の子あるを知らで、その期を過して安產せしは、いよ／＼奇異といひつべし。今よりして與四郎音音を、花咲の翁とも、又花咲の媼とも喚ん。然ばこそあれ若們も、又是枯樹に花媳なれども、憐むべし、良人に後れて、青年にして孀婦になりぬ。倘この憂ひ徹りせば、得がたかりけん子をば得生まじ。倚伏は糾ふ纆に似たり。哀しむべからず、歡ぶべからず。そは若們が兒子なるよ。兩個ながら怜悧像也。年十許にならん折、我孫達の陪從にせん。舅姑共侶に、瀧田に參て扶持を受よ。城内には、犬江親兵衞が祖母、妙眞も在るなれば、詞敵によかゝなん。先よくこの意を得よかし。と懇に仰すれば、曳手單節は感淚の、落るを押へて共侶に、頭を擡

して、上毛なる、隱宅に來て在し程、身の護に藏措きしを、又那白井の寄隊を防ぎて、あの眉尖刀の銛鈍も、聊鈌み侍りたり。开を那折に喪はざりしは、伏姫神の冥助にて、與四郎が朴刀と、此彼同じ奇特に侍り。爾るに嚮に犬江主が、今日上の御登山の折、障导あらんを對治せんとて、單身出てゆきしかば、與四郎も亦推續て、麓路投ていそぎしを、有繫に心もとなくて、非除老女の果敢々々しく、事の要には達たずとも、上に寇做す賊徒あらば、一個也とも擊捕ばや、と思ふ心に身をば料らで、あの眉尖刀を携しを、烏滸とや思召れけん、寔に烏滸に侍るめり。といひつゝ吻々とうち笑るゝを、袖もて急にうち掩ふ、老樹の花の唇は、薄からずして馨やかに、實ある言葉の男々しきを、義實感心淺からず。听果て又宣ふやう、思ふに優たる、音音が用心、這夫にして這妻あり。現一對なる忠魂義胆、今の世にはいと〱得がたし。就て若們が兩個の媳婦、曳手とやらん、單節とやらん、开が兒子們も那里に在るや。と問れて音音は歡しげに、隨即答まうすやう、嚮に他們も賤妾と倶に、那樹下までまゐりしかども、御免を蒙らで、一族渾て見參に、入りまつらんは無禮なるべし、と思ふによりて推止めて、おん目前へは出さゞりき。といふを義實聞あへず、そはさぞ立も疲れけん。そが兒子をも這方へ召ね。けしうはあらず、快々。と仰に音音は、阿と應て、身を起しつゝ遽しく、件の樹蔭に退りた

第九輯 卷之八

第百六回

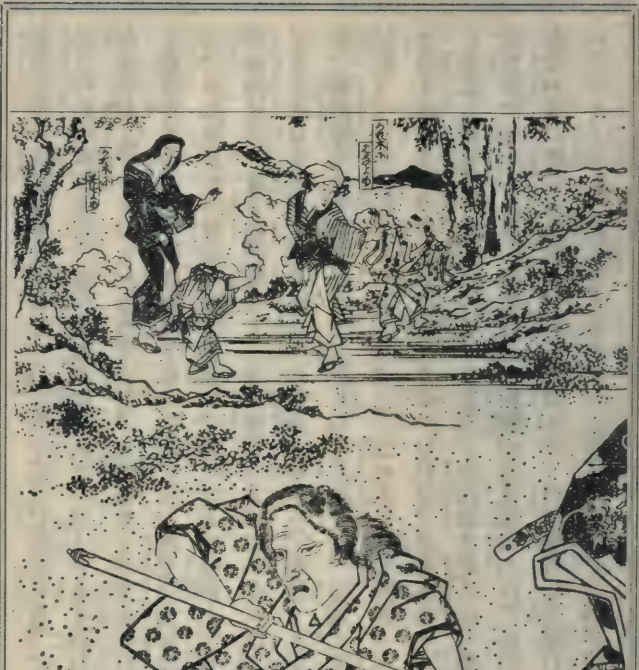
青海波を牽して景能稻村より來たる
黑闇夜を犯して曼讃信舘山に赴く

却說里見義實主は、又姥雪夫婦にうち對ひて、我方僅解も示せしごとく、顧へば東西皆因あり緣あり。就てこゝろ得がたきは、與四郎が朴刀と、音音が眉尖刀を携たるは、开も亦出處あること歟。猛火の中に死を免れて、身を這山に置れしには、相應しからぬ器械也。それも亦伏姬の、亡魂の授けし歟。と問れて與四郎額を衝て、おん疑ひは理り也。這朴刀は小可が、曩に武藏の戸田河原より、兩個の兒子力二尺八が、首級を悄々地に奪拿て、荒芽山へ赴きし折、身の護に携へしを、當夜白井の寄隊を防ぎて、箭種も既に竭きしかば、又是をもて幾個歟、近づく敵を砍拂ひつゝ、軈て猛火に身を燒して、死まくしたる折までも、倘この刃は放さゞりしを、我身と倶に這御山に、領て置れけん。その折より行り。皆是神女の靈應なりき。といへば音音も亦いふやう、曩に煉馬を沒落の折、駿馬と倶に那眉尖刀を、賤妾が手親牽きもしつ、携へも

魂の、親兵衞と若們を、養ひしは外の東西ならず、皆我施行の有餘なるを、問ずして知るべきのみ。恁れば由て來たることあり、不思議にして、不審義にあらず。然も思はずや。と宣へば、大家吁とばかりに、いよ〳〵感嘆したりける。這回いまだ盡さねども、楮數こゝに定限あれば、卷を更て第百六回に、解分るを聽ねかし。

らず。小可音音們、兩個の媳婦が、六稔以前に再生の、幸ひは伏姫神の、冥助なりしを稟上ぬる、一期の歡び、附驥の功、過世ありけん一家の榮、と稟すは烏滸に候はめ。這尷尬兒は、墜八とやらが、招丁に著れたる、那南彌六に疑ひなし。皆是君のおん威德にて、世に有がたく候。と稟せば音音も、千歲の、壽をなん唱ける。是を听ぬる里見主從、生口每に至るまで、皆駭然と面を注して、新奇を感嘆したりけり。そが中に義實主は、扇子を膝に、歌杖に、推立頭を傾けて、つら〳〵と听果て、感心尤淺からず、姥雪夫婦にうち對ひて、現不可思議なる神助靈驗、方才面前に視聽くにあらずば、誰か實說と思ふべき。嚮にも既にいはまくせしを、言多きにより果さゞりき。親兵衞も听ねかし。我はこの年來、伏姫が菩提の爲に、他が月の亡日每に、精白米五苞、幷に味噌醬油、菜蔬柴薪の料を、大山寺へ遣して、貧民乞兒に齋を與へ、又夏冬の肇には、布を施行に牽せしに、詣來て齋をたうべるものの、寡き折も、米はさら也、その餘の東西も殘らずとぞ。誰がもて去とは知らねども、恁る事折々あり。又布なども如右也、と聞えしも久しくなりぬ。又親兵衞が被たる襦衫も、頤へば出處あるに似たり。昔年伏姫が常に布用ひたる、錦綉の衵兒ありけるを、他が身故りたりし比、大山寺へ遣して、調度なゞどと共侶に、那里の寶藏に弆め置せしが、彼と此とよく相似たり。よりて思ふに、六稔以來、伏姫が亡

見參して、倶に御恩に預りまつれ。今より浮世に出る身なれば、道節自餘の犬士們にも、再會必遠かるべからず。陽世幽冥、隔あれば、是より永く別れなん。この義を遺なく傳へよ、と神女の仰候ぞや、といはれて音音、曳手單節も、皆共侶にうち驚きて、遽しく漱ぎ、線香を燒き身を淨めて、那里に在とは知らねども、穉兒力二尺八にも、諭て大家共侶に、俯つ拜みつ、おん別れの、惜かる隨に感涙の、坐に拭めば袖濡れて、詮方もなく候ひき。折から花降り、音樂聞えて、尊さ越に彌增せしを、然而あるべきにあらざれば、一霎時目送り奉りたる、犬江生は時分を料りて、今日老侯に寇做す奴們を、對治せんとて精悍しく、身裝しつ、棒挾みて、麓路投て出てゆきしを、有繫に心もとなくて、推續んとて准備をしぬれば、音音幷に媳婦孫們さへ、共侶にとて、後に跟くを、禁めもあへず來ぬる折、逃迷ひけん一個の尷尬兒、足を曳つゝ前面より、來ぬるに撞見したりければ、遣も過さず、組伏せて、索を掛候ひき。他は身に受たる撲傷の、疼痛にや堪ざりけん、小可如き老人に、敵し得ずして玆に及べり。恁而這尷尬兒を、牽つゝ這方へ來る程に、同類の尷尬兒四名は、はやく犬江生に搦捕られて、そが招了を聞召す、折からなれば、仂なく技まず、言の果るを等候ひしに、逃たる賊徒南彌六を、趕捉へんとて人々の、既に立まくせられしかば、已ことを得ず聲をかけて、君の見參に入るのみな




山路に迷ふて
南弥六
生拘らる
なミ六

郎巳々、と推禁めて、拔み出額を衝て、又義實上に稟すやう、其後做べき事もなきを、幸ひにして鋤鍬あれば、畊作せばやといひつるを、親兵衛腋子が諾はず、衣食は折々伏姬神の、賜らんと仰するに、畊して何にせん。且這山には石多ければ、水田陸佃、共に要なし。但這峯上に觀音堂あり。そは老侯の志願にて、伏姬上の菩提の與に、昔年建立ありしかど、落成の比よりして、這山河の水倍て、船も筏も竿屆かねば、今に迨て二十許年、(長祿三年より、文明十年まで)參詣の貴賤、登山に路なく、那里に久く香華絕たり。翁と媼們は身の勤に、折々御堂を掃除して、香を燒き花をまゐらせ、親族有緣、亡人々の、菩提を弔ふこそ相應しからめ、と誨させ給ひしかば、斷歡びて、朝每に、峯上に登りて、觀音薩埵を、拜みまつらぬ日は稀にて、別當しつゝ遙けくも、六稔の光陰(時に文明十五年なり)を歷にけるよしは、旣に稟上たる如し。恁而今日朝未明に、犬江生が慌しく、小可每に告るやう、翁們はいまだ知ざるべし。いぬる日より這山河の、水の猛に落たれば、今日瀧田の老侯の、伏姬上の墳墓を、祭らんとて登山あるべし。その故は箇樣々々。と那素藤が反逆の事の顚末、幷に御曹司義通君の、御窮阨の趣を、言語急迫しく解知して、又神託を傳るやう、姥雪們皆承れ。今日老侯の登山の折、箇樣々々の危難あらん。そは犬江親兵衛に、對治させんこといと易かり。若們もこの折をもて、老侯に

べる事を得たりしかば、姉も妹も、胎内なる子の、猛可に大きうなりたる也。恁れば安產遠からず。又何をか疑んや。开も併此年來、若們一家、父子夫婦は、忠義節操拔群なるに、もし後なくば應報足らぬを、造化の神の憐愍て、力を用ひ給ひけん、神女の冥助のみとな思ひそ。善には善の報ひあり、惡には惡の報ひあり。那房八が身を殺して、仁を做たる應報と、粗相似たるを悟りねかし、と叮寧に示し給ひしかば、皆疑ひの霧晴て、玆にも照す天津日の、惠に遇る神の加護、惶うも忝さに、大家涙咜む迄に、感嘆せざるも侍らざりき。是より三十日許を經て、曳手單節も、同日に、產の氣つきて、安らかに、生たるは倶に男子にて、その面影は、力二にも、尺八にも肖て、毫も違はず。思ひがけなく兩個まで、孫を得たりし祖父祖母は、共侶に愛くつがへりて、甲乙倶に拿揚つ、產湯浴する谷河の、水より深き媛神の、おん惠を感じおもふ、歡びいふべうも侍らずかし。然ば曳手單節們は、血暈もあらで肥立程に、乳も亦多に出しかば、孫們は甲乙よく肥て、病氣もなく生育侍り。因て父の名をそが儘に、曳手が子を力二郎、單節が生みしを尺八、と名づけて年來養育しつゝ、今玆は六才になり侍り。身長の伸たると、智慧力量さへ神々しき、犬江和子にはいかにして、及ぶべうも侍らねど、うち見には、尋常なる、七八才の童蒙より、大きうや侍らん歟。といひかけて吻々とうち笑へば、與四

しきは腹内にて、折々動くもの侍り。爾も甲乙一對の、患ひは不思議に侍るかし。甚麼なる病痾の所爲ならん。心にかゝるはいぬる年、婚姻の比よりして、今なほ月水を見ず、血塊とかいふものの、年を歴れば毛を生じて、形を做すことありと聞けば、それかあらぬ歟、我ながら、淺ましとのみ思ひ侍り。といひしを與四郎がうち听て、凡夫の臆斷、いたづらに、云云とものを思んより、又神童によしを告て、神女の旨を伺ん。然はとて軈て件の義を、腋子に告て、病癥の、根元を問奉りしに、親兵衞腋子の答るやう、曳手單節は懷妊也。素より病痾の所爲にあらず。初力二尺八們と、添臥纔に一宵といへども、その折他們は姊妹倶に、既にして有身たり。折から煉馬家滅亡して、夫婦離別の憂苦あり。この故に胎内なる子の、氣血足らねば、大きう得ならず、臨月遙に過たるに、生れざりしを、その母們さへ、今までも知ざりし也。そが徵は、曳手單節が、那比より昨今までも、月水にならざるをもて、疑ひを解くに足ん。爾るに過日、姊も妹も、荒芽山の窮難を脱るゝ折、乘たる馬を野武士們の、鳥眼銃に撃れしかども、馬はなほ他們を乘せて、這地方へ來ぬる事も、その折兩個の遊魄の、墜て他們が懷に入りたるも、皆是神女の神力によれり。那日の燐火は、力二郎と、尺八が遊魂なるを、神女の憐み給ふの故に、兩個の妻の胎に投じて、胎内の子の氣血を補ひ、且這山なる神藥仙果を、たう

なども、神女の賜ふとおぼしくて、求めざれども得ることあり。約莫日毎の食料の、竭んとすれば、孰の間にか、一苞つつ又ありけり。俵藤太が龍宮より、得たりと聞えし米苞も、恁ありけん、と思ふ可の、無盡藏にて、最奇なり。恁而神女は親兵衛腶子に、手習讀書を肇として、文學武藝遺もなく、教給ふ歟と思ふ事、年來間斷なかりしかども、小可們が眼には、神女を拜みまつること克はず。又おん聲も聞えねど、獨和子のみ分明なるべし。細沙を坦して、字を寫覺え、その書なくして、素讀をしたり。或は撃劍弓馬の技、獨學にして獨學ならず。是等をこそ奇しき中の、一大奇事と思ひ候ひしに、親兵衛腶子は、身長の、年々に伸ること、世の俍子に十倍して、六稔の程に、三尺有奇、五寸許になりにたり。こは大奇異に候はずや。といひつゝ少許退きて、腰に夾みし手巾もて、額の汗を推拭へば、音音は良人に立替りて、又老侯に稟すやう、事の珍奇は、それのみならで、尙一椿事の御利益侍り。初曳手單節們が、這御山に來ぬる比より、猛可に腹の大きうなりて、譬ば有身たりしものの、臨月に異ならねば、病痾の所爲にあらずや、と思ふものから思ひ難て、他們を質し問はべりしに、曳手單節が答るやう、豫知せ給ふごとく、亡夫達と婚姻の折、幾日もあらで別れしより、二たび枕を並ることなく、一稔あまりを經る程に、その亡魂に見えしのみ。恁れば今さら奴們が、有身るべうも侍らねど、只怪

たるが、是より數日飢ざりけり。恁而又小可們は、曳手單節も共侶に、塚の頭にゆきて見るに、果して舊たる鋤鍬二挺、繫き箭竹の中にあり。是も神女の賜ならん、と思へば拿りつゝうち戴きて、兒子等が首級はさら也、舊塚と推並べて、馬の亡骸を埋め、塚を造りて、又畠蠏にかへり來ぬれば、神童は、晝寢をしたり。折から初秋の事なれば、被たる衣の薄かるに、脇不縫の間より、その背の見えたるが、丸の俞より臀に痣子ありて、形牡丹の花に似たれば、犬士の黨誰もかも、同じ像の痣子あり、と聞しを今更思ひ合して、こゝにつらく〳〵思惟るに、小可們は、少かりし時、過失こそあれ、この年來、積たる功德は毫もなしゝ然るを神女の恁まで に、一家四人の必死を救ふて、這山に置給ふ事、その所以なくばあるべからず。頤ふに這神童を、我們四個に守させて、その徒然を慰る、よすがになさん、と思召たる、神謀りにぞあらんずらん。現我故主も犬士の隊にて、倶に骨肉に優す過世あり、と豫听しを今又思へば、這神童に仕るは、道節主に仕ると、又何ぞ異なるべき。況五犬の黨は、昨日寄隊の虎口を免れて、恙あらず、と託宣あり。今さらに他を求んや、と思ふこゝろを音音にも、及娘們にも喜き示せば、大家然也、と點頭て、倶に心をひとつにしつゝ、守して和子を慰めたり。是日よりして鍋釜なんど、米さへ味噌さへ菜蔬さへ、誰がもて來るとは知らねども、皆畠蠏の內に在り。又夏冬の衣

報れば、女弟も續て、迭に盡す來し方の、物がたりに日の闌るを覺ず。當下音音は笑しげに、曳手單節にうち對ひて、今も爹々の告給ひたる、犬江神童の身邊には、伏姬神のをはしまして、守らせ給ふよしなれども、爹々にも奴家にも、凡夫の視には見え給はず。なれども那子の神々しきは、託宣にこそありつらめ。恁れば和子に再生の、歡びを稟すべく、尙この後の吉凶禍福を、問て往方を定めてん。やよ立給へ、と心を囑て、大家倶に石窟の、頭に跪坐て、神童を、俯拜みつゝ稟すやう、おん誨により曳手單節も、この地方に來て在りしを、見出して介保しつつ、恁再生の幸福を得たり。只惜むらくは媳婦們が乘たる、馬は斃れて生べうも候はず。他はいかで仕らん。又我們は那地を投て、赴かば道節們に、環會よし候はん。この義も教え給ひねかし、と問へば徐に見かへりて、然なり。馬の亡骸は、那里の犬塚と推並べて、叮嚀に埋め得させよ。戊と午とは地枝六合也。素より因緣なきにあらず。鋤も鍫も那里にあらん。又這山は年居多、饉の河水淵と成て、人馬の通路久しく絕たり。縱汝達故主を慕ふて、他鄕へ去んと欲するとも、目今は山を出がたかり。咱們と倶に這石窟を、宿として時の至るを等ね。今よりして衣食の類は、姬神の賜なん。皆先これをたうべよとて、秋桃四顆を拿出て、手に手に授けられしかば、大家ひとしく受戴きて、件の桃をたうべしに、味ひ宛蜜の似くて、只一箇にて飽

給ひそ、と一五一十を解諭せば、曳手單節は听く毎に、驚きつ亦惶みて、齊一空をうち向上て、伏拜むこと半晌許。然而小可們に報るやう、奴們は、知せ給ふごとく、過日荒芽山の隱宅へ、大敵打向ふと聞えし折、犬田主の介保にて、合鞍に乘せられつ、落ぬ與にと絆索をもて、幾重歟縢著給ひて、牽退けて、遠からぬ、樹間に繫置れしを、寄隊の雜兵群り來て、牽もて去ん、と競蒐るを、犬田主の走り來て、防戰ひ給ふ程に、刀尖狂ひて、繫ぎし馬の、絆索を撲地と斷れしかば、馬は猛火に駭躁ぎて、狂ひ走りつ、駐んと、欲する敵を蹴倒したる、勢ひ當りがたければ、犬田主も術なかりけん、馬は快こと箭の如く、去向も知らず走りたり。その折に奴們兩個は、倶に生たる心地はあらねど、倘鞍局より墜もせず、縢られたる故に侍り。恁てぞ馬は直走りに、走ること幾町なりけん、路に居多の野武士在り、奴們が馬の走るを見て、駈駐んとしたれども、駐るべくもあらざれば、遣過しつゝ連發ちし、銃响高き鳥眼銃に、馬は竅所を撃れけん、嘶きあへず跳騰りて、倒れんとせし折から、忽然として燐火とおぼしき、兩個の團燄晃き來つ、奴們が頭の上に、撲地と墜ると思ひしのみ、共侶に呼吸絶にけん、爾後の事を知ず侍り。しかるに大人達のみならで、撃れし馬の奴們を、乘して遙々這深山邊に、來ぬるは全伏姫神の、擁護なること疑ひなし。世に復得がたき幸ながら、倘夢にては侍らずや、と女兒が

見れば果して曳手單節は、昨日乘したる馬と倶に、呼吸絶てなほ馬上に在り。こは〳〵誰何、とばかりに、駭譟ぎつ兩個して、曳手單節が繋げられたる、絆索を急に解捨て、抱き下してよく見るに、身に受たる疵はなし。憐むべし件の駿馬は、肛門より腹内まで、銃傷を受にけん、後足さへ蹄さへ、血に塗れて死たるが、その鞍下に附られたる、カニ尺八が首級もそが儘あり。人こそ大切也けれ、と思へば婆々と共侶に、曳手單節が手を拿りつ、又胸膈を撫試しに、寸口の脈は、糸よりも、細やかなれども尚絶えず、鳩尾溫なりければ、又兩個して、兩個の媳婦を、抱き起しつ、臂近なる、石滴を口に沃ぎ入れて、神女の冥助を只管に、祈りて喚活などせし程に、歡ぶべし曳手單節は、忽然と甦生りて、小可們を見て、訝り疑ひ、又歡びも大かたならず。思ひがけなき這地方に、聚合しよしを問れしかば、我們答て、伏姫神の、靈驗冥助を蒙りて、萬死を出て、一生を得て、この山に來ぬる事の顚末、又那犬江神童の、厄を神女に救はれて、本月の五日より、この山なる嵓竇に、置るゝと解示されし、其言の首より、疑ひを解き惑ひを醒せし、奇話珍説の尾まで、簡約にて遺なかりける。越に剏て身の往方と、神の擁護を感悟せし、事情を告知して、和女們も、昨乘たる馬の、深痍に死なで幾十里なる、這山へ來て甦れしは、幵も亦神女の冥助にて、世に有がたき再會は、皆是神の恩徳也。工夫にな思ひ

り。我は則翁們が故主、犬山道節忠與們と、大かたならぬ宿因ある、八犬士の隨一人、犬江親兵衛仁也。過日我身は、下總なる、市河の邊にて、箇樣々々の大厄ありしを、伏姬神の救せ給ひて、這山へ領て來給ひしは、隔昨五日の事ぞかし。其よりして今も姬神の、傍に在して慰め給へば、徒然ならず、這里に在り。昨日翁們を猛火の內に、救ふて這里へ領て來給ひしも、亦姬神の冥助なるに、身の歡びを稟さずや、といふこと每に大人備て、且過去を悟り未來を示す、辯論意表に出ざることなく、世に又あるべきことならねば、且驚き且惶みたる、夫婦が歡びいふべうもあらず。こは神女のこの穉兒に、憑りていはせ給ふならん、と思ひにければ謹て、原來おん身は五犬士達の、噂に初て听知りたる、犬江腕子でをはせし歟。神女は何里に在するぞや、と問へば後方を指さして、那々那里に在するに、と教られても小可と、音音が視には見え給はねども、深信いよ〳〵胆に銘じて、忝き事限りなければ、其方に朝ひ、身を投俯して、默禱に時の移るを覺ず。やうやく頭を擡れば、親兵衛腕子の又いふやう、神の冥助は、翁夫婦、只是兩個のみならず、五犬士も恙なく、寄隊の虎口を免れたり。又兩個の媳婦曳手單節も、昨日神女に導れて、玆の犬塚の頭に在り。那里へゆきて快見ずや、と又指さし誨られたる、小可音音共侶に、驚奇哀懽判よしもなく、慌惑ひつ、嵒崛の、頭也ける塚下へ、走ゆきつゝ共侶に、

是に携れ。と宣示して、犬子の絆を投被給へば、小可們は夢歟と可に、且駭き且感激して、音音も倶にその麻索に、携ると齊て中天へ、掖登されて、忽然と、黒白も知らずなりにけり。恁而其詰朝なるべし、小可も亦音音も、やうやくに我に復りて、共侶に身を起しつゝ、驚きながら四下を顧るに、怪しや身は這深山に在り。水は纎々として、奇嵒の間に流れ、松は亭々として、凉風の秋に唫ず、異草地に滿て、覩熟ざる花馨ひ、林鳥梢に集て、耳珍しき聲したり。是すら意外の奇觀なるに、なほこゝろ得がたきは、年四五なる穉兒の、一人山扉の内に在り、手に草花を耍子て、餘念もあらず見えにけり。登時小可們思ふやう、原來身ははや冥土に到りて、這頭に置るゝものなる歟。然らば前面なる谷川は、俗の口順に聞えたる、賽の河原にあらんずらん。若しからずば那穉兒の、一個這頭に在るよしあらんや。七歲未滿の孺子也とも、死しては靈のあるべきに、問試ん、と尋思をしたる、夫婦悄々地に商議しつゝ、倶に嵒扉の頭に赴きて、喃和子よ、事問ん。這里は什麼那地ぞや。這山の名は何といふらん、倘知りたらば誨ずや。和子は亦何等の故に、獨這頭に置れしぞ。其由あらん、甚麼ぞや。と問へば件の穉兒は、莞やかに見かへりて、翁們はいまだ知らざるべし。這里は安房の富山也。二十稔あまり前つ比、里見の息女伏姬上の、山居し給ひて、果は刃に伏給ひしは、則這嵒扉にて、墳墓も亦這里に在

うち歎くことの切なりしを、道節听て深く憐み、這宵、亡親道策に、代りて猪平の與四郎が、做しゝ昔の罪を宥めて、酒盃を拿らしつゝ、賤妾と夫婦に做し給ひぬ。是等の情由は忌々しくて、面正しくはなきことながら、原野合の夫婦にて、離別したるはそが故なれども、兒子の忠孝、與四郎も、功あるをもて許されて、小篠が雪の侶白髪、老ての後に婚禮は、世に有がたきことながら、恥しくも亦哀しさの、やる方もなく侍りにき。といひつゝ涙吒みたり。當下與四郎焦燥て、益なき雜談いはずもあれ。と禁めて貌を改めて、却その次を稟上ん。この夕音音が隱宅へ、道節們を宿せしよしを、白井へ密訴せしものあり。これにより緝捕の頭人、巨田薪六郎助友が、軍兵多く從へて、不意に起りて、推寄せ來つ、事の難義に及びしかば、我們必死を究めし折、犬士の一人、犬田生が、曳手單節は我舊里なる、行德へ領てゆかん、といはれしかばその議に任して、豢立置たる駿馬にうち乘せ、小可音音は、道節と、四犬士を、後安くて、延さん爲に、稠入る敵を、姑且防戰ひしかば、竟に弓折れ勢究り、免るべくもあらざれは、そが儘奥に退きて、家に火を放け、夫婦ひとしく、煽々たる猛火の內に、跳入らんとせし程に、奇なるかな煙の裡に、嬋娟たる一個の神女、最大きなる犬の背に、尻うち掛けて出現あり。小可と音音を制めて、若們は、是忠臣節婦、天助感應なからんや。努々戰沒すべからず。

四郎、後に梶原（又神谷に作る。里呼加爾波なり）の矠平、と喚れしものにて候也。又此に侍るは拙荊にて、名を音音と喚做たる、道節の嬭母なりき。聞も及せ給ひけん、今より六稔前つ秋、柒月の初旬、我兒十條力二郎、及その弟尺八郎は、武藏豐島の戸田河にて、犬士を追隊の大敵を、遮留め斷戰ふて、竟に戰歿仕りぬ。折から音音は、兩個の媳婦、曳手單節と世を不娛て、上毛州甘羅郡、白井の城に程遠からぬ、荒芽山の隱宅に在り。柒月六日の事なりき。兩個の兒子、力二尺八が亡魂の、母の宿所へ歸り來にける、怪談の候へども、要緊の事ならざれば、其頭は言略き候はん。然而。といひつゝ言訥りて、後方を見かへり、やよ音音、是より後の事はしも、渾家こそよく覺たるらめ。代りて稟上ずや。といはれて音音も膝を找めて、義實主に稟すやう、目今良人與四郎が、聞えあげまつりしごとく、賤妾と媳婦は、煉馬家の、滅亡より世を不娛て、件の山家に在りしかど、良人は年來故ありて、武藏の梶原に流寓ひて、漁獵して世を渡りにき。折から主なる犬山道節、及その黨犬塚犬川、犬田犬飼も不憶く、賤妾が隱宅に聚合ひし夜艾、與四郎も亦悄やかに、武藏より來にけるが、兩個の兒子力二郎、尺八が亡魂の、媳們が馬に乘り牽れ來て、犬士の輿に、戸田河にて、追隊の頭人丁田氏と、思ひの隨に戰ふて、件の頭人町進を、擊果したる事の形勢を報知らせ、又二親の離別して、年來胡越に異ならぬを、

實を相て、遽しく、その眉尖刀を掻遣捨て、裳をはやく解下しつゝ、阿容ず俱にぞ找みける。却說老翁は南彌六を、索拿縮て、義實主の、目前遙に牽坐て、膝折俯たるそが後方に、老嫗も跪坐て共侶に、先老侯を拜しけり。爾程に義實主は、這老男女の爲體を、料り難つゝ訝しさに、傍を見かへり、やゝ親兵衛、他們は原是甚麽なる者ぞ。和郞と親しく相識りたらば、他も亦這山に、年來住や熟たりけん。嚮に和郞が同宿の、者しもあれば徒然ならず、といひしのみにて具ならねば、事問ばやと思ひながら、他事に紛れて、果さゞりしに、其人ならば、怪しうはあらず。といひつゝ老翁を佶と見給ひて、やをれ老人、親兵衛と、山居同宿の者ならば、近く找みて、顚末を、詳に聞えあげよ。やゝ快々。と扇をもて、連りに招き給ふにぞ。老翁は阿と應して、先南彌六を、貝六目に、牽遞與しつゝ、主の身邊へ、找めば老嫗も後に跟て、おそるおそる近づく程に、貝六目は、南彌六を、又樹下に繫置て、親兵衛と共侶に、主君を左右に守護したり。當下老翁は恭しく、義實主にうち朝て、手をうち拍し額を衝たる、頭を擡て稟すやう、今恁る瀨に逢ざりせば、素より賤しき我們が、貴人に近著まつりて、親くものをまうさんこと、彌勒の世まで有がたからんを、惶けれども稟上ん。言長くとも聞召れよ。數ならぬ身の死して又、世に見るゝ小可は、犬山道節忠與が父なりける、犬山道策が舊僕にて、初の姓名は姥雪與

といふを、日と貝六郎は、共侶にうち听て、しからば我們二個に一個、おん許を蒙りて、渉獵て在らば、牽もて來てん。と惴るを親兵衛推禁めて、不知案内なる和殿們より、我走一走行て索ん。いでく。といひつゝも、身を起さんとせし程に、傍の樹蔭に又人ありて、やよ和子、一霎時等給へ。其南彌六をば搦捕て、先の程より這里に在り。やよ等給へ。と呼禁めて、樹間を徐に出來るものあり。此は是甚麼なる者ぞ。其は又這下の回に、解分るを聽ねかし。

第百五回

名山靈有り枯樹復花さく
逃客路无し老俠俘を獻る

登時樹蔭に人ありて、犬江親兵衛を喚禁め、徐に出て來にけるを、大家誰や、とうち見れば、則一個の老翁也。鬢髯のいと皓かる、枯野に殘る小草の上に、置く朝霜に異ならず。身體は瘦て、枝疎なる、漁村の松に似たれども、筋骨いまだ衰へず。龜齡鶴算幾ぞや、倘鑊鑠と輕健なる、氣力面に見れて、花田の布の綿腸衣の、裳を叩く褚み、白布の手袖脚衣して、手に朴刀を携たるが、那南彌六を緊く綑りて牽立々々拢みたる、後方に續くは、一個の老嫗也。こも麁栲の衣を被て、下短に壺折り縢げし、打扮殊に精悍しく、手に眉尖刀を挾みしが、義

取りにき。又景連は、義實が、功を娼みて邪計を旋らし、攻滅さんとせられし故に、已ことを得ず鋒を交へて、克ことを得たる也。慿れば他們が滅亡は、則自業自得にて、怨る所なかるべし。然けれども麻呂安西の、同宗たるもの罪を謝して、軍門に降參せば、我豈執念深祟らんや。時宜によりて舊家の後を、立て家臣に做すべきに、遠く走り深く躱れて、反て悪人素藤に、扶持せられしは、是も亦、人を知ざる惑ひ也。この餘、南彌六墜八們は、素是市井の俠者にして、志氣ありといふとも、無明の醉は同じかるべし。そは左まれ右もあれ、絶たるを繼ぎ廢れたるを興すものは、古昔聖王の道にして、開國の主の善政也。陳ずるよしの違ずは、安房殿（義成をいふ）に命乞して、願ひのごとく做も得させん。但その言の證据なし。異日なほよく鞫問して、賞罰はその折にあらん。先この意を得よかし。と仰に大家額を衝て、歡び面に顯れけり。

姑して天津九三四郎員明は、犬江親兵衛にうち對ひて、目今墜八が稟しゝごとく、那荒磯南彌六は、市井の俠者で候へども、罪を饒して用ひ給はゞ、必做すことあるべきもの也。他一旦は逃たれども、撃れし苦痛に堪ずして、山路を遠く走りがたさに、其頭に躱れて在るべき歟、是も亦知るべからず。倘逃果して舘山へ、還らば虚實を蟇田に知られて、妙ならざる義も候は、ん。はやく人を遣して、往方を渉獵し給はずや。といふに親兵衛頷きて、我も亦如右思ふ也。

り。無垢三が忿て、光弘主を犯せしを、最酷う羞思ひて、神餘の氏族の在しなば、いかで一臂の力を盡して、外祖の汚名を雪ん、と思はざる日もなき所以に、撃劍白打相撲の術まで、その師に就て習得たり。膂力も人に捷れしかば、里の俠長、と衆人に、尊敬せらるゝものにこそ候へ。恁りし程に光弘主の、落胤あるよしを、聞知りしより歡びて、遂に這天津氏、九三四郎と交を、結びて年來疎からねば、今番の計議に荷擔を容れ、小可を伴ひて、三個の人々と共侶に、侯を擊まく欲せしかども、這少年の勇敢武藝に、敵すべくもあらざれば、辛く命を免れたり。他憖に漏ずして、囚れて這里に在るならば、俱に奇特に感悟して、みづから新にすべかりしを、逃亡たるは幸ひならず。他が不幸に候ひきとて、遺なく招了したりけり。義實は、衆口衆意の、齊一かりしをうち听給ひて、嗟嘆に堪ず、生口們を、つら〳〵と見かへりて、やをれ天津員明とやらん、神力瑰異に驚きて、後悔陳謝は遲からずや。汝が亡君長挾介光弘に落胤あらば、何どてや早く恁々と、瀧田へ告訴せざりけん。弘世とやらんが事はしも、義實が知ざるのみならず、當時金碗八郎すら、その子の事を知らねばこそ、何ともいはで身故りたれ。そを義實が執立ずとて、恨みたるは愚痴なれども、その孤忠は憐むべし。又景次重時とやらんもしかぞかし。當時麻呂安西を、義實が討ちしにあらず、信時は、景連に、賣られて終に自滅を

山の城内に扶持せられて、安西麻呂們と同列たり。しかるに素藤心傲りて、我們をよく見かへらず。弘世はその性愚にて、剰病者なればとて、月俸なども年々に、貶して定のごとくにせられず。口を餬ふに足らねども、在下をのみ苛刻く、使ること日毎に多かり。なれども這回の密議を稟て、這個の人々三四名と、倶に今日老侯を撃まくせしは、神餘の後を立られざりしを、恨しく思ひしそがうへに、事成らば神餘の舊領、長狹平郡を與ん、といはれしに心迷ひて、賢明德義の良將を、暴虐奸詐の蟇田が與に、狙撃まく欲りしたる、先非を悟りて罪を知る、後悔は麻呂安西と、いひ合さねど同意なり。非如我身はこの儘に、結紐頸を撃るゝとも、弘世主を憐愍て、小祿也とも宛行れ、神餘の祀を嗣し給はゞ、この年來在下が、盡せし孤忠も虚しからず、死して榮ある一世の歡び、快く目を閉ぐべし。願ひまつるはこの義のみ。又この男子は、同志の俠客、荒磯南彌六が乾子にて、椿村の墜八と、叫做すもので候也。といへば又墜八も、跪きつゝ陳ずるやう、小可は蟇田殿に、稟たる恩も候はず。素より國主老侯を、怨まつる事もなし。但我乾父南彌六は、昔年杣木樸平と、倶に定包を撃まく欲りして、愆て光弘主を、犯せし當日撃れたる、洲崎無垢三が外孫也。外祖無垢三が撃れし折は、なほ總角でありしかば、上總の夷灊に逃去て、年來を歷たりと听にき。恁而件の南彌六は、外祖に劣らぬ俠氣あ

既にして、主君の胤を、孕て五箇月に及びし比、光弘果敢なく撃れ給ひて、定包長挾を横領したるに、我姉は光弘主の、胤を孕りと聞知りて、淫婦玉梓にこゝろ得さしつ、毒を養んと欲するよし、事幸ひに洩聞えしかば、在下姉を伴ふて、悄々地に上總へ走りつゝ、蘇々利村なる親族許、共侶に潜びて在り。恁而月來になる隨に、我姉は產の氣つきて、生れしは男兒也。故主の落胤なるをもて、左も右もして鞠養む程に、我姉は時疫にて、竟に黃泉の客となりにき。折から山下定包は、里見の義兵に討滅され、叉麻呂と安西も、滅亡したる事の趣を、世の風聲に聞くものから、然とて還るべき家もなし。是より安房さへ上總さへ、里見の有となりしかど、神餘の子孫を尋求めて、絕たる家を嗣せんと、宣はするといふ沙汰も聞えず、いと怏く思ひしのみ。訴出んはさすがにて、百折千磨の世を渡りつゝ、腋子を養ひまゐらせしに、腋子は質弱多病にて、且その性も人並ならねば、年十五六に及びても、菽と麥だに分ち得ず。剩風濕に嬰り、脚攣て、年中三百六十日、枕の外には友もなく、筆把るばかりの氣力もあらず。いと朽惜く思へども、鍼灸藥餌、加持呪法も、空憑めにて效驗なき、生來なるを爭何はせん。浮世を潛ぶ身にしあれば、神餘の姓氏を憚りて、迺腋子の姓名を、上甘理墨之介弘世と名づけまゐらせて、果敢なく時の至るを俟しに、料らず蟇田素藤の招きに應じて、這年來、主僕二名、館

庶幾外候はず。なれども身の罪輕からねば、縱饒されがたくとも、仁義の君の手に死なば、そは切もの事なるべし。天神地祇も照覽あらん。今いふ所虛談にあらず。願ふは亮査あれかし。と那陳ずれば、這も陳じて、迭代に後悔の、招了紛れなかりけり。親兵衞これをうち听て、義に稟すやう、老侯聞召れし歟。初他們が毒箭をもて、おん伴當を射仆せしに、侯を犯すに弓箭をもてせず、槍を引提てうち向ひしを、こゝろ得がたく思ひ候ひしに、那折弓弦の斷れたるは、神女の擁護に候はん。就てなほ疑ふべきは、安西廝呂の黨こそ、侯を怨るよしもあらめ、神餘は逆臣定包が、弑逆により家亡びしを、我君義旗を揚給ひて、定包を討給ひしかば、素より是その德あり。爾るに恩義を仇として、擊まくせしは、甚なる意ぞ。この義を質し候はばや。といふを那餘の生口們は、听つゝ倶に聲を掛て、犬江生々々、我們も來歷來意を詳に聞えあげん。疑念を解て、憐愍を、垂給ひね。と叫びたる、そが一個の且いふやう、在下は、神餘長挾介光弘の近習なりける、天津兵内明時が弟にて、天津九三四郎員明と叫做すもの也。當年這地の俠民と聞えたる、那杣木樸平と、洲崎無垢三が、諜し合して、山下定包を擊んとせしに、反て那逆臣の、奸計に陷られて、光弘主を犯せし折、我兄天津兵内は、樸平無垢三們と戰ふて、命を其里に殞したり。是より先に我姊は、光弘主に仕へしかども、那玉梓の儔にあらず。

り、人迹久しく絕たりしに、いぬる日猛可に水落て、渉すに易し、と聞えしかば、老侯驟て登山あり。亡息女伏姫の、墳墓を豫するとて、伴の蒼隷が罵りしを、洩聞しより心勇みて、間道を走り、先だちて、快這高峯に陟り來つ、那里の樹蔭に埋伏しつゝ、悄々地に準備の毒箭をもて、伴當二名を射て仆し、同じ箭局に老侯を、脫しはせじ、と彎固めたる、二張の弓弦は忽然と、斷れて役には達たずなりにき。最も怪しき事ながら、却已べきにあらざれば、更に準備の竿槍をもて、推拿稠て擊んとせし折、侯には不測の帮助出來て、咱們四名は生拘られ、一個は酷く擊惱され、辛して逃亡たれども、料るに痛楚に堪ずして、遠くはゆかで仆れしならん。現怕るべき這少年の、勇力武藝は、億萬人に捷れしのみに候はず、年來神女の冥助によりて、恁る深山に人と成りたる、瑰談奇話を側聞して、身の非を悟りし慚愧後悔、世は是澆季に及べども、爭ひがたき神靈冥福、併老侯の、賢明仁義の俊德なくば、今菑害を轉して、這祥瑞に逢ふよしあらんや。然ば昔年景連と、信時の滅亡は、賢を媢みて邪計を行ひ、非義の利をのみ欲せし所以にて、老侯の罪ならざりしに、我們理義に暗ければ、只仇とのみ思ひ怨みて、恩赦を願ふことを要せず、反て奸賊素藤の、扶持を求め、その隊に屬て、他が爲に老侯を、刺まくせしは、紂を資けて、周武を擊つに似たるべし。今は邪念を轉しぬ。濁を去て淸に附ん、と

藤は、慢に酒色に荒みしより、民を虐げ奢侈を極めて、又我們を見かへらず、祿を減し格を貶して、奴僕の像く赶使るゝを、いと朽惜く思ふものから、外によるべの岸もなければ、立も得去らで在りける程に、素藤猛に逆謀あり。緣故は、國主の息女、濱路姫を娶ん、と欲りせし宿望稱はねば、執念深までに國主を恨みて、去歲より間なく時となく、計策を旋らして、義通君を拿籠めつゝ、國主の多勢を引受て、いまだ勝負を分ざるよしは、是世人の知る所、今亦具にいふにしも及ばず。恁而素藤、いぬる比、我們を閑室に、招よせて聶くやう、汝達瀧田に赴きて、義實を狙擊果しなば、事の潰に義成を、擊捕んこといと易かり。然るときは房總一國は、我掌に入りぬべし。汝達這回大功あらば、安房四郡を釐與へて、各一郡の領主に做さん。甚麽、この義をよくせんやとて、亦他事もなく憑れしかば、我們歡び、准備をしつゝ、其夜城內を潛出て、當國に赴きたる 同志の甲乙纔に五名、本月の初旬より、瀧田の城下を徘徊して、潛入らまく欲せしかども、城郭總て堅固にて、いまだ便宜を得ざりしに、老侯けふは未明より、大山寺へ參詣の、風聲城下に聞えしかば、時を得たり、と厮歡びて、像のごとくに准備をしつゝ、迹を跟け去向を料りて、狙擊まく欲せしに、微行とまうせども、五六十個の伴當あれば、左右なくは手を下しがたかり。奈すべきと思ひ難しに、年來這頭の山河の、水炭淵を做しゝよ

兒們を、鞭撻責ん。と立蒐れば、嘘恥兒們は、驚き慌て、跪きつゝ諸聲揚て、やよ等給へ、人人よ。責られずとも聞えあげん。既に推量せられしごとく、我們は素藤と、一味のもので候へども、然とて來歴なきにあらず。且鎖りて聞給はずや。と叫ぶを義實うち听給ひて、しからんには答を住めて、徐に言を盡させよ。と仰に目貝六は、承りぬ。と應つゝ、左右に別れて跪坐たり。登時件の嘘恥兒們は、頭立たる者とおぼしき、兩個が先陣ずるやう、在下は、故の當國の一郡司、安西三郎大夫景連が再任にて、安西出來介景次、と叫做すもので候也。と名告れば、又一個がいふやう、在下も亦昔年、老侯に討滅されたる、麻呂小五郎信時が同宗にて、麻呂復五郎重時、と叫做すもの也。然ば景連信時の、滅亡の比はしも、我們が親は病死して、自他孤兒也ければ、由縁の人に携られて、悄びて上總へ走りつゝ、夷灊の背善村に落住りて、世を民間に不娛たりしに、蟇田權頭素藤が、館山の城主になりしより、安房四郡の舊領主、神餘麻呂安西の子孫あらば、稟出よ扶持せんとて、尋るよしの聞えしかば、我們兩個、神餘の兒孫と、共に館山に赴きて、來歴を演、家譜を捧げて、仕んことを請ひしかば、素藤歡び對面して、軈て城内に留め、扶持せられたる、管待通て等閑ならず。賓客の禮をもて、月俸、その餘の東西までも、多く宛行はれしかば、我們心を傾けて、いかで恩義に報ん、と思ふにも似ず素




五郎

て、蘇生りて、身はいと安く、矢傷もはやく愈にけん、既に起居に自由を得たり。勇士の帮助は、伏姫神の、神力にこそ候ひけめ。得がたかるべき大奇大幸、最も惶く候。と稟すを義實うち聽給ひて、原來若們、身は仆れても、心神去らで、有つる事を、聞知りたる歟、开も亦奇也。且その矢傷の立地に、愈しは逆伏姫が、這親兵衛に授けしといふ、神薬の效に憑れり。曩に義通の伴當們が、多く矢石に傷られて、一旦命終りしに、稲村の城に將て還されて、甦生の奇特ありけると、等き神の祐にこそ。併親兵衛の介抱なくば、いかにして、事よくこゝに及ぶべき。快歡びをいはずや。と仰に目貝六は、倶に親兵衛にうち對ひて、額をつき恩を稱へ、歡びを舒て、又いふやう、我們は、那箭にて、共に命の終るとも、惜むに足らぬことながら、老侯恙ましまさば、千遍悔とも及んや。然るを和殿の帮助に依りて、君臣無異の幸福あり。短き詞に盡しがたかる、洪恩にこそ候なれ。といふを親兵衛聽あへず、开首の口誼は、無益也。我身に何等の功あらんや。皆君侯の洪福にて、神女の冥助顯然たり。嚮には稟す事の多くて、いまだ這廝兒們が、來歷を責問ざりき。意ふに館山の城内より、素藤がおこしたる、刺客にぞあらんずらん。といへば目と貝六郎は、然也々々。と點頭て、拷問の事はしも、咱們兩個に任し給ひね。いで〳〵。といひつゝも、共侶に身を起して、樹枝を折て鞭としつ、繫置れし廝

兩個の矢傷をよく見るに、貝六郎が死に至るまで、なほ楚と握持たる、義實主の刀あり。そを拿放ち、摩うち拂ひて、捧げて返しまゐらするを、義實やをら受拿て、腰に揷副給ひけり。恁て又親兵衞は、腰に吊たる藥籠より、那神藥を幾粒か、遽しく摘出して、噬碎きつゝ、矢傷兒們が、身に中たる箭を拔捐て、這那共に瘡口へ、藥を塗著推容れて、囓りたる牙を推開きて、餘れる藥を沃ぎ入るゝに、石滴を掬ぶ療養に、手の屆きたる進退精妙、兩個を倶に掖起して、背を三四拳撻しかば、死せりと見えたる貝六目は、神藥胃中に下ると聽て、忽地に蘇生りて、眼を開き息を吻き、一霎時愕然たりけるが、氣力やうやく我に復りて、痛楚もあらずなりにけん、共侶にうち驚きて、恙なかりし主を見つ、又親兵衞と、生口の、尷尬兒們を見かへりて、今さら我を怪むまでに、相歡びて慌しく、主君の身邊に找朝ひて、共侶に稟すやう、臣們は、嚮に寇の獵箭に、射仆されしを知れるのみ、其後の事を覺えず。爾るに這一少年、その姓名は人の噂に、豫より聞知りたる、那八犬士の隨一人、犬江生の折もよく、君の先途に達まゐらせて、那尷尬兒們を四名まで、生拘にしたる事の趣、且姫神の靈驗冥助、年來那身を這頭に置れて、人と成給ひしといふ、和漢今昔未曾有の、奇談、耳に入り心に通じて、一事も漏さず聞知りしより、覺ての今も記憶せり。恁りし程に大かたならぬ、犬江生の介抱に

伏姫は、世に稀なる、女俠にこそ、と思ひしに、死後の神靈恁までに、灼然にして功績多かり。和漢に儔あるべしや。願ふに、和郎が六稔の程に、最大きうなりたるは、現仙境に生育て、神漿奇果を旦夕に、たうべたりける故ならん。それかあらぬ歟、いよ〱奇也。見るに、和郎が腰に帶たる、短刀は、我認りたり。そは伏姫が終焉まで、身をし放さで、命根を、悍くも斷し東西なれば、當日姫の亡骸と、倶に柩に斂めしを、復茲に看る不思議さよ。恰と云恰と云、因あり緣あり、證据あり。身に那痣もあるならん。恁れば和郎がいふよしの、搗鬼ならぬを知るに足れり。今さら何をか疑ふべき。この餘も多く這那と、思ひ合するよしあれども、急ぐべき事ならざれば、そは後にこそ解示さめ。寔に姫の孝順なる、這八犬士の一人もて、我災厄を救ひたる、神力不可思議、感深かり。是に就ても更に又、痛み思ふは兩個の伴當、鮹船貝六、小水門目は、寇の獵箭に窮所を射さして、忽地命を殞しけん、惜むべし〱。と嘆息しつゝ愀然と、那亡骸を見かへり給ふを、親兵衛慰め稟すらく、おん伴當們が受たる矢傷は、非如窮所にあらずとも、毒箭にこそ候はめ。爾らんには只一箭にて、呼吸絶たるも、寔に以あり。遮莫小可幸ひに、神女の授け給ひたる、回生起死の神藥あり。必その效覿面にて、活ずといふことなしと听にき。先や試候はん。といひつゝはやく身を起して、矢傷兒の身邊に立より、

に、始よりして刃をもてせず、棒もて總て擊仆して、搦捕り候ひしは、寇ながらも怒に乘して、殺さじとての所行にこそ候へ。那七犬士は、小可が、所在を年來尋難て、八人具足せん折ならでは、參りがたし、と固辭まうしつ、今も他鄕に流寓たる、その義その信、多く得がたき志を恁々と、神女の告させ給ふによりて、事詳に聞知るものから、然とても我うへを、言報やらんよしもなく、心苦しく候ひしに、這身單が那人々に、先だちて、今見參に、入り奉る不思議の計會、併人力人智の、よくすべき事にはあらず。皆是神女の神謀にて、君には恙ましまさず。寇は大槩對治せられて、我身の顚末、遺もなく、聞えあげぬる意外の歡び、何事か又これに優すべき。恁れば程なく御曹司を、拯攙まゐらせて、御欝忿を慰め奉らん。この義も御心安かるべし。うちも任させ給はずや。と稟す詞の委なく、過去來の事さへに、前後紊さぬ物がたらひは、宛水を流すが似く、辯論義あり、亦忠あり。現憑しき勇士の嫩生、是八犬士の、隨一と、いはでもしるき、相貌才學、自然と備る豪傑の、心術言語に顯れて、思ひがけなき事のみなるを、義實主はつく〴〵と、听つゝ連りに駭嘆じて、なほ听く隨に疑ひの、胸うち豁け含笑れたる、事の歡び大かたならず。腰なる扇子を拔拿て、颯と推啓き、親兵衛を、うちあふぎつゝ宣ふやう、適愛たき後生なるかな。言皆意表に出ざることなき、和郞が顚末、奇なる哉。

寇に拿籠られて、今なほ舘山の城内に在り。この故に義成夫婦、及我大人の最大う、胸安から
ずをはします、大人の登山も、この義にあなれば、儞先這高峯なる、寇をはやく對治して、更
に又舘山へ、赴きて那素藤を、降して我伾義通を、拯ふて大人と義成夫婦の、憂苦を慰めまゐ
らせなば、六稔儞を養育したる、我も面を起すべし。いふべきよしは、是まで也。既に這世
の縁盡たれば、今より永く別れなん。努怠るな、忘るべからず。やよ勉よや、勉よや。と繰返
しつゝ諭し給ひて、自餘の者にも云云と、別を告て、又忽然と、降聚る雲に神躱れして、搔滅
す似く亡給ひたる、迹には香氣馥郁と、異花降り、音樂翠天に聞えて、峯上に殘る白雲も、風
のまに〳〵あらずなりにき。登時小可、哀慕に得堪ず、母に別るゝ心地して、外視思はで跿跎
しつゝ、うち泣てのみ候ひしを、同宿の甲乙に、只管諌慰められて、やうやく我に回るものか
ら、幾の時にか忘るべき。今も心の悲みを、然こそと查し給ひねかし。恁あるべきにあらざれ
ば、君の與に寇を帚ふて、神女の誨に悖らじ、と思ふ心のいそがれて、前より這頭に樹躱れて、
御登山を待まつりしに、果して神女の示現に違はず、君に寇做す尷尬兒あり。そが四個を生拘
りたれども、鈍や一個を漏せし折、なほ追稠なば、捉ふることの、かたかるべくもあらざりし
に、走るを捨よ、と敎給ひし、神の隨意赶捨たる、用意は是のみならず、那奴們を對治しぬる

きものから、儞は特に薄命にて、幼き折二親を、喪ふて、剰、必死の大阨ありしかば、見過しがたさに、その窮阨を、救ふて這里へ領て來つゝ、五六稔養育して、像のごとくに、生育しは、只是儞の身單を、悲しきものに思ふにあらず。親房八は、安房の俠民、杣木撲平が後にして、その身を殺して仁を做したる、義俠そのよしあるをもて、その子は料らず仁字の、靈玉を得て、八犬士の、隊に入りたる故ぞかし。夫仁義八行は、人皆天より稟たる所、貴き賤き誰もかも、五常八行の心なからんや。然けれども、世の庸人は、通て人慾の私に、迷ふて、遂に八行を、執喪ざるものは稀なり。恁れば世の億萬人に、捷れて五常八行を、做得んことは易からねど、就中仁をのみ、孔子も輙く許さゞりしは、素是天とその德を、等くしがたき故也けり。自然なるを天と呌做し、人に在りては仁といふ。儞は親の義俠によりて、仁の一字を得たりしかば、その名を仁と喚るれども、我おそらく、その德を、天と等しく做し得んや。縱至仁に至らずとも、婦人の仁に倣ふことなく、今より勉て、殺生を、好まで忠恕惻隱を、心とせば事足りてん。世に武夫の業はしも、大刀を帶、弓箭を拿て、君父の與に仇を防ぎ、身をしも護るものにしあれど、只當前の敵を撃て、降るを殺さず、走るを捨て、人を征するに德をもてせば、則忠恕の義に稱ふて、仁といふ名に羞ざるべし。頃者は、我任なる、冠者義通窮阨あり、久しく

ながら怪しきまでに、最も大きくなりぬるは、日毎に神女の賜りし、仙菓奇果の故なる歟、理をもて論じがたければ、神變奇特といはまくのみ。然ば、神女の御恩徳は、枚擧るに遑もあらず。手習讀書、弓馬擊劍、文學武藝、何くれとなく、皆教させ給ひしかば、六稔以降修煉せし、本事なきにも候はず。なれども神女は旦暮に、我們と共侶に、嵓屈には在さずかし。要ある折には出顯し、要なき折には見え給はず。恁而今朝しも姬神の、又忽然と立顯て、小可們に宣ふやう、けふ恁々の左側に、我父纔に兩三個の、伴當を領て、我墳墓を、見んとてみづから山踏して、這頭へ來給ふことあらん。その折不測の寇ありて、犯しまつらんとこそすべかゝめれ。親兵衛は、このこゝろを得て、時分を料りて、件の寇を、對治して、我大人の、見參に入り奉れ。這餘のものは箇樣々々。と叮寧に宣示し給ひて、這個一口の短刀と、這錦繡の襦衫一領を、小可に賜りて、又宣ふやう、その懷劍は、我生前に、身を放さゞるものなりき。截味尤覺あれば、そをもて汝が身の護にせよ。錦繡の襦衫は我手づから、昨宵縫たるものぞかし。汝も八犬士の一人なるに、けふ我大人に初見參に、その麁袴の衣のみにては、身の皮無下に鄙備たり。よりてそをしも取する也。抑儞と同因果なる、七犬士の黨は、我生做せし子に異ならぬ、宿因深きよしあれば、孰を疎に思ふべき。然ば他們が窮阨毎に、影に立形に添て、救ざることな

加以年居多、人迹絶て、浮世に遠き、恁る深山に誰鞠養て、人と成しけん、訝しさよ。故こそあらめ、甚麽ぞや。と問れて親兵衛然ゝ候。おん疑ひは理り也。既に知られまつりし如く、小可纔に年四なる、秋柒月の初旬にかありけん、舵九郎とか叫做たる、歹人の手稠にせられて、命危かりし折、不測に神女の擁護によりて、那舵九郎を誅戮せられ、這身は神女に掻攫れて、這山に領て置れしより、伏姫上の墳墓ある、嵓窟を宿としつ、その日よりして姫上の、神靈に夜となく晝となく、養れまつりしを、初は宛夢に似て、思ひ辨よしなかりしに、やうやく人と成る隨に、折々神女の誨によりて、我うへを知れるのみならず、大母妙眞は、那時候より、君の御恩を稟まつりて、恙もあらず、今もなほ、瀧田の御城內に在る事の顚末、外伯父、犬田小文吾悌順の上はさら也、この餘同因果の六犬士、犬塚犬川、犬山犬飼、犬阪犬村の流浪窮阨、昨は恁々の事ありき、けふは又箇樣々々の事こそあれ、と七犬士們が、六稔以來の、履歷動靜その折々に、一事も漏さず、神女の告させ給ひしかば、暸然として那人々の、傍に立て看るごとく、知らずといふことは候はず。然ば三滄四時の衣、皆姫上の神通力もて、那里よりか取寄せて、恁養れまつりしは、又只我身單にあらず、這年來同宿の、人の幇助も候へば、人迹絶たる深山に在ても、徒然としもおもほえぬ、身は年毎に長伸て、既に樹するごとく、我

まさず。いと歡しくこそといふ、辯說さへに都ならで、大人備たりける進止の、世に憑しく見えにけり。爾程に義實主は、思ひがけなき曲者們に、伴當二名を射て仆され、已ことを得ず手を下して、みづから防戰んとて、刀の柄に手を掛給ふ、程しもあらず一個の少年、犬江親兵衛仁と名告て、樹立の蔭より顯れ出、瞬間に五個の、寇を撃伏せ赶走らしたる、武藝勇敢、人柄まで、思ふに優たる挿きに、且驚き且訝りて、うち目戍りてをはせしに、禍鬼はやくうち攘ひぬる、這少年は豫聞く、犬士の一人、犬江親兵衛仁なりき、と名告ること、既に分明なるものから、疑霧いまだ霽ねば、そが儘に傍なる、巨樹の株に尻をうち掛け、眉根を顰め左見右見て、原來和郎は、妙眞が、孫と聞えし犬江氏、那大八の親兵衛なりし歟。生れながらに仁の字の、玉を持りし甲斐ありて、親房八に優りやすらん。犬士の隊に入りぬべき、恁々の痣子ありといふ、妙眞竝に照文們が、噂に豫听しかど、神躱しとかいふことにて、往方も知らずなりにしは、六稔以前の事にして、年四ばかりの秋ならずや。然ば和郎はやうやくに、今玆は九才なるべし、と思ひしに似ず、身長は、約莫三尺四五寸あらん。筋骨さへに逞しく、凡庸の少年の、十六七歲なるものといふとも、及がたかる武藝勇力、單身にして、五個の、寇に當りて物ともせず、四個を生拘り、一人を、撃走らせしは、和漢に稀なる、神童とこそいふべけれ。

親兵衞は、三七二十一に、競蒐れど、當るべうもあらざれば、多勢を憑む假猛者、槍を拈て右左より、咄と噇きて、向に前なき奮勇剽姚、素樸の棒もて撃拂ふ、毫も噪がず身を反して、刀拔く間も奈麻與民の、腕前臂肩腰骨を、撃惱ば、曲𢌞兒毎は避易して、皆竿槍を打折られ、聊本事あるものなるべし。連りに槍をうち閃めかされて平張伏たる、そが中に一個の曲𢌞兒、邪と聲かけて、丁と撃つ、劇しきして、刺んと衝むを、親兵衞は、ものゝしや。と受住て、撃れて痛楚に堪ざりけん、苦と一聲叫棒の術中に、這も亦槍を打折られ、餘れる棒に肩尖を、樹の間潜りて逃走るを、親兵衞透さず赶ふたりけるに、びも果ず、仆れんとせし脚踏住めて、舊所にかへり來つ、撃仆したる曲𢌞兒四名を、往方も知らずなりしかば、冷笑ひつゝ赶捨て、傍の松に繫住め、兩袒ぎし袖を斂め、裳を下し塵う腰に准備の藤蔓もて、咸犇々と綁縛めて、額衝き跪坐て稟すやう、烏滸がましうは候へども、我姓名ち拂ひて、義實主の身邊に來つゝ、小可は下總なる、市川の船長にて候ひし、山林房八がは、豫より、聞召たることもあるべし。犬江親兵衞仁にて候也。君がけふの厄難獨子にて、初名は眞平とも、又大八とも喚れたる、聊先途に達まるらせて、見參に入りまつるを、我恩神の誨によりて、豫知るよしありしかば、寇は輒く對治せられて、おん身に恙ましこと、又是神慮に憑れるのみ。君臣一致の時日到來、

南總里見八犬傳

第九輯　卷之七

東都　曲亭主人　編次

第百四回

老侯に謁して親兵衛神助を訟ふ
奇特に驚て刺客等各歸順す

再說、那尶尬兒們は、手に〳〵槍を閃かし、義實主を拿稠て、撃果さんとて閃く折から、思ひがけなき樹間より、只見る一個の大童男、犬江親兵衛仁と名告て、叫禁めつゝ突然と、走り出來る面魂、足柄山に生育たる、又那酒田公時ならずは、童話に聞えたる、桃太郎にはあらずや、と驚き呆るゝ尶尬兒們は、勢ひ忽地胆落て、他は怎麼、とばかりに、憶はず倶に乒乓と、逡巡して、左右なくは、有繋に撃も蒐り得ず。然とて續く敵なきを見て、思ひ回せし諸聲高く、噫嘻きたり、小猴子奴が、秣を刈り牛を鞭ち、狗を走らし兎を赶はゞ、その身に相應しかるべきを、命も知らぬ似而非胆勇、由なく仇の助劍して、息絶る折、後悔すな。快撃仆せ。と動搖め

懿哉八犬之英士。起八方也。妙哉一顆之靈玉。護一身也。仁義禮智。救柔挫剛。忠信孝悌。補君討讎。抑離散有時。行會有日。八士不盡讐者。殆二十餘年。終同歸一州。而威名不朽。然當時載筆者未具。粤肇有演義書。是蓑笠翁所編述。筆端波瀾。與彼水滸三國演義拮抗。自是書一出于世。而人人方知犬士所以爲犬士。可謂奇且盛矣。余叨賦拙詩以爲證。詩曰。

犬姓俊雄都八人　倶惟里見股肱臣
乾坤到處曾無敵　踔躒蓑翁稗史陳

琴籟閑人題

なゝその　翁さびたる　すさみには　おぞしや似げも
あらがねの　眞金にあらぬ　あだしぶみ　つゞれさせてふ
むしよりも　はかなかりけり　あめつちの　むすびの神の
あやまちか　かくまでをこの　しれ人を　うみいだしけん
ゆゑよしを　いはまくすれど　くちなしの　花のみめでて
山ぶきの　實のありとしも　得ぞしらぬ　あだし世の人
あながまや　あだしこの名を　としあまた　あだにしられし
身をいかにせむ

反歌

かくれてもなほあだなりきみの笠の名はあらはれしあめのしたはも

天保六年といふとしのはつきとをまりふつかにしるしつ

蓑笠漁隱

あるのみ、大かたは違はずといひにき。よしや寫し僻めずとても、今さら疎文をいかゞはせん。看官これを思ひねかし。又大師河原撫子話といふ、合巻の繪草子も、予が舊作にて、今より三十一年已前、文化二年乙丑の冬、艸書堂が刊行せしを、今亦畫を更重刻して、新板の如くにしつゝ、鬻ぐものありと聞にき。是等も作者に告ざりければ、思ひがけなく人傳に聞にき。この餘も予はいまだしらぬ、烏滸の重刻さぞあらむ。吾在世にすら書肆等が、恣なる事かくの如し。なからん後はいかなるべき。そも浮たる名の所以にはあれど、名を賣らるゝこそうるさけれ。近世明和安永年間、風來山人(平賀鳩溪)が戯墨の策子、太く世に行れしかば、その身後に至りても、僞作せしもの多く出たり。今をもて昔をおもへば、わがうへにのみあらざりける。こゝに虚名の昨非を知りて、嗟歎のあまり懐を述たる、吾ゑせ長うた反歌あり。こも亦要なきすさみながら、録してもて箴とす。歌にいへらく、

あだし世に　あだし世わたる　あだし名の　あだにしたてば
はづかしき　こゝろあさ瀬の　水ぐきは　ちびたる筆と
すみ田河　いざこととはん　人しあらば　なしとこたへて
夏の夜は　ほたるあつめし　まどの外に　杖をもひかで

なしとも拙くて、今さらに又見るに得堪ず。嘔吐もしつべきものなるを、去歳の冬そを重刻して、端像を新しくせしもの出たり。爾るもその翻刻本には、再板とするしたれば、椀久松山物語のごとき、世を欺くに優すよしあれども、倶に作者に重刻の、義をも告ず、恣に畫を更、或は書名を更て、竊に蠅頭の微利を欲りする歟。人を人とも思はざりける、皆是賈竪の所行にぞ有ける。よりていぬる比、その再板本を予も閲せしに、自序の落款にをかしき事あり。そは題㆓於雜貨店帳合之暇㆒としるせし是なり。雜貨は唐山の俗語にて、此間にいふ高麗物の類なり。四十餘年の昔といふとも、予は高麗物を鬻ぎし事なし。便是當年の洒落にて、都て稗官者流の肚裏には、種々无量の意材あり。譬ば雜貨高麗物の、品類最も多きに似たれば、掇云云とするせしが、廼當時の洒落にて、識者の笑を取る爲なれども、开も流行に後れては、をかしからぬのみならで、看官疑惑ふべし。然ば件の船字文は、水滸焚椒錄などを、此彼と撮合して、綴做たるものながら、四十年前の拙作にて、疎文いふべうもあらざるを、翻刻して世に出されては、穉き折せし手習葉子を、老後に汝が手蹟ぞとて、賣弄せらるゝに異ならず。いと恥しきものにしあれば、翻刻本は、原刻と、文の錯へるや、さもなきや、予はよみ見るに懶ければ、古兒琴嶺が在世の口、今玆の春二三月の比にやありけん、命じて舊本と比校させしに、處々に誤脫

いへらく、書を校するは、風葉と、塵埃にしも異ならず。隨て拂ひぬれば、隨て又これあり。書として孰か誤寫なからむ。况遊戲の策子をや。吾亦ふかく懸念せず、そは知る人ぞ知るべからむ。褒貶毀譽を度外に置て、具眼の指摘に儘するのみ。

予が著したる物の本、或は合卷と唱る繪册子の、ふりたる板家扶を購求めて、恣に畫を新にし、且書名を改めて、そを新板に紛しつゝ、翻刻して鬻ぐものありと聞にき。そは勸善常世物語、三國一夜物語、化競丑三鐘などの事は、嚮に本傳前輯の、簡端に既にいへり。近屬又括頭巾縮緬紙衣三卷を重刻して、椀久松山物語と書名を改め、出像を新しくせしものあるを見き。その書は、文化三丙寅年、書賈住吉屋政五郎の需に應じて、予が綴りたるなれば、今に至て三十許年の、春秋を歴ぬる舊作なれど、知らざる人は惑されて、新板ならんと思ふもあるべし。且書名の更ざまも、甚なる狡兒の所爲なりけん、椀久松山物語と改めしは、作者の用意を得ぞ知らぬ、寔に烏滸の點竄なるかな。夫椀久は嫖客也、又松山は遊女也。縱その小傳を爲るとも、その書に命くべきものにあらず。是を作者の用心とす。かゝる意味だもしらずして、放なる更改は、莊子に所云儵忽が、混沌を損ふと、亦何ぞ異ならん。只是嗟嘆に堪ざるもの也。

又高尾船字文(中本五卷)は、寛政七乙卯年、予が始て綴りし策子物語なりければ、いとをさ

作るべし、荷は誤寫也。二の巻正行、當に正儀に作るべし。六の巻雛肚、雛は皺のあやまりにて、筆工の手にたがへるを、校閲の折撿遺したり。この餘てにをはの錯へるは、輯毎になきはあらず。第一輯は殊に多かり。啻この本文のみならず、本輯上帙の引に、孔子家語を引て、有二文事一者必有二武備一といふべきを、誤て文備に作れり。（本書此に從つて訂正せり）又第八輯の自序に、莊子を引て、名者實之賓とある、者の字を脱されたり。是より先にも、自序に誤寫あり轉倒あるを、後に至て見出せしは、いかにせん悔ども及ばず。發販の後、その板に、埋材などして彫更るは、六日の菖蒲、十日の菊にて、長視榮なき所行なれば、梓行の書肆が歡ばず、承引ながら等閑にて、竟に果さずならぬは稀也。遮莫その誤謬あるも、多かる本文はさることながら、漢文の自序などは、二三頁に過ざるに、そをしも校合のゆき屆ぬはいかにぞや、と思ふ人もあるべけれど、序目は、巻々を稿じ果て、いと後に綴りぬれば、刊刻も隨て、最太う後れしを、本文摺刷の折などに、急迫しく校閲しぬるをもて、熟讀重訂の暇なければ、二三頁の物といへども、撿遺さゞることを得ず。且出像などに至りては、蛇足の爲に、動もすれば、作者の畫稿と違ふもあれど、改め畫かせんはさすがにて、そが儘にして閣くも多かり。看官作者の苦界を知らねば、そも稿本の誤謬なめり、と思はぬは稀なるべし。いにしへの人の

徵を發明せしものなし。隱微は悟りがたけれども、七法則すら知らずして、綴るものさぞあらん。及ばずながら本傳には、彼法則に倣ふこと多かり。又但本傳のみならず、美少年錄、俠客傳この餘も都て法則あり。看官これを知るやしらずや。子夏曰。小道といへども見るべき者あり。嗚呼談何ぞ容易ならん。これらのよしは知音の評に、折々答へしことながら、亦看官の爲に注しつ。

予が毎に編る、策子物語の寫本はさら也、彫果る折卷々を、校閲せざることはなけれど、刊行の書肆として、性急ならぬ者もなければ、作者のこゝろに儘せぬ事多かり。且その卷々は、己が綴れる文どもなれば、眼に熟れてまだ忘れぬを、なほ幾回も讀復せば、誤寫ありとても心つかで、暗記の隨に讀るゝから、動もすれば檢遺して、後に悔しく思ふ事尠からず。總て刻本は、書畫倶に人に誂へて、板下てふ物を調へぬれば、必その板下に、訛舛なきことを得ざる也。是に加るに、剛人の誤刀あり。半頁十一行なるも、眞名毎に傍訓あれば、眞名と假名と二行になりて、半頁二十二行に等しき、その文字幾百なるを知らず。然るを熟たる眼にて、最も急迫しく校閲しぬれば、檢遺す誤脫多かりしを、事過ぎたるは姑閣きぬ。本輯上帙六卷にも、筆工の誤寫ありしを、出販の後に見出しにき。そをひとつふたつ左に錄す。一の卷剕荷、當に荊軻に

ども、必是同じからず。重復は、作者謬て、前の趣向に似たる事を、後に至て復出すをいふ。又照對は、故意前の趣向に對を取て、彼と此とを照らす也。譬ば本傳第九十回に、船虫媼内が、牛の角をもて戮せらるゝは、第七十四回、北越二十村なる、闘牛の照對也。又八十四回なる、犬飼現八が、千住河にて、繋舟の組撃は、第三十一回に、信乃が芳流閣上なる、組撃の反對也。這反對は、照對と相似て同じからず。照對は、牛をもて牛に對するが如し。その物は同じけれども、その事は同じからず。又反對は、その人は同じけれども、その事は同じからず。信乃が組撃は、閣上にて、閣下に繋舟あり。千住河の組撃は、船中にして樓閣なし。且前には現八が信乃を搦捕んと欲りし、後には信乃と道節が、現八を捉へんとす。情態光景、太く異也。ここをもて反對とす。事は此彼相反きて、おのづからに對を做すのみ。本傳にはこの對多かり。枚擧るに遑あらず。餘は傚らへて知るべきのみ。又省筆は、事の長きを、後に重ていはざらん爲に、必聞かで稱ぬ人に、偸聞させて筆を省き、或は地の詞をもてせずして、その人の口中より、説出すをもて脩からず。作者の筆を省が爲に、看官も亦倦ざるなり。又隱微は、作者の文外に深意あり。百年の後知音を俟て、是を悟らしめんとす。水滸傳には隱微多かり。李贄金瑞等、いへばさら也、唐山なる文人才子に、水滸を弄ぶ者多かれども、評し得て詳に、隱

ヽ大と倶に一十九人。是を一部の主人公とす。かゝればその人多からず、又その人寡からず、水滸の多きと、西遊の、寡きには似るべくもあらず。この餘も忠臣義士はさら也、彼泛々の者といへども、始あれば終あり。中途にして立滅せし者、一人としてあることなし。看官徐に結局まで見ば、作者の用意を知るよしあらん。

唐山元明の才子等が作れる稗史には、おのづから法則あり。所謂法則は、一に主客、二に伏線、三に襯染、四に照應、五に反對、六に省筆、七に隱微即是のみ。主客は、此間の能樂にいふシテワキの如し。その書に一部の主客あり、又一回毎に主客ありて、主も亦客になることあり、客も亦主にならざることを得ず。譬ば象棋の起馬の如し。敵の馬を略るときは、その馬をもて彼を攻、我馬を喪へば、我馬をもて苦しめらる。變化安にぞ彊りあらん。是主客の崖略也。又伏線と襯染は、その事相似て同じからず。所謂伏線は、後に必出すべき趣向あるを、數回以前に、些墨打をして置く事也。又襯染は下染にて、此間にいふしこみの事也。こは後に大關目の、妙趣向を出さんとて、數回前より、その事の、起本來歷をしこみ措也。金端が水滸傳の評注には、縇染に作れり、即襯染とおなじ。共にしたぞめと訓むべし。又照應は照對ともいふ。譬ば律詩に對句ある如く、彼と此と相照らして、趣向に對を取るをいふ。かゝれば照對は、重復に似たれ

とす。かくて第八輯に至りては、文溪堂の需る爲に、十巻二帙を一輯とす。第九輯は巻の數いよ〻ます〻多くなりつ、二十巻を三に分ちて、上帙中帙下帙とす。そを第五輯までの如く、毎輯五巻ならんには、十三四輯に至るべし。然るを九輯に約めしは、文溪堂の好にあなれど、今さら思へば、こもよしあり。八は陰數の終り也、八の下に十あれども、十は一にかよふをもて、陰數の終りとせず。九は陽數の終り也、かゝれば八犬英士の全傳、局を九輯に結ぶこと、その所以なきにあらずかし。

吾嘗唐山の稗史を見るに、水滸西遊記傳の如き、是大筆の手段といへども、水滸は一百八箇の豪傑、その人極めて多ければ、史進魯智深、楊志武松等、全傳開手の豪傑なるに、梁山泊に入りしより、その勢ひ始に似ず。倶に軍陣に疩むの外は、ありといへどもなきが如し。況百八人ならぬ者は、始ありて終なく、俗に云立滅せざるは稀也。又西遊記は、三藏師徒、孫猪沙と是四名のみ。その人極めて寡ければ、其事相似て且重復多かり。水滸にも亦重復あり。長物語は覺ずして、彼重復の瑕疵あること、年來みづから筆を把て、是等の苦海に墮落せざれば、所以ありけり、と悟るに由なし。最烏滸がましき說話なれども、本傳は、始より、用意をさく〳〵加減あり。迺水滸百八人の、百を除きて八犬士あり。又加るに八犬女あり。且里見侯父子と、

花を失ひぬとて、嗟嘆しけるもありと歟聞にき。遮莫なほ幸ひに、第八輯より下は、江戸の書肆が刊行すなる、文溪堂の所藏になれゝば、作者の面を起すに似たり。榮辱得失、物皆爾なり。本傳にのみ限らんや。是等によりても有爲轉變の、速なるを思ふに足れり。かくて第八輯は、江戸の書林文溪堂が刊行しつゝ、天保三年壬辰の夏五月二十日に、上帙五卷（四の卷は上下二卷なれば卽五卷也）を發販し、下帙五卷（八の卷を上下二卷とす）は、四年癸巳春正月續出し、第九輯上帙六卷は、今玆乙未春二月二十日に發兌しぬ。中帙七卷は、今番出せり。又下帙七卷は、明年丙申の春歟、遲く成るとも、秋冬の時候までには、必よ續出して、大團圓になさまく欲す。かゝれば六輯以下の分卷、共に六十八卷、一百二十八回にして、竟に全部たらんもの也。抑策子物語の、かく長やかに續るは、この書の外にいまだ見ず。天もし作者に春壽を借して、この筆ずさみあらざりせば、二十餘年の久しきに、飽こともなくよく堪て、この結局を世の人に、見することはかたからんを、命あり時ありて、團圓將に近からんとす。あな懽し、あなめでた。稗官冥利に稱ひにけん、と思ふも烏滸の所爲にぞありける。

この書第五輯までは、一帙五卷を一輯とす。第五輯の六卷なるは、四輯の足らざるを補へる也。しかるに第六輯より以下は、涌泉堂等が乞ふに儘して、或は六卷を一輯とし、或は七卷を一輯

泉堂が刊行しけり。第五輯發販の年よりして、中絕こゝに五箇年なりき。かくて第七輯七卷は、おなじ年の冬十一月、稿本旣に成るものから、涌泉堂も亦本錢續ず。その上帙四卷は、書林文溪堂の資助によりて、十二年己丑の冬十月二十九日に發販せしを、當時予はさりとも知らず、下帙三卷は、十三年春正月、辛くして續出すことを得たり。しかるに亦涌泉堂も、等閑にして理義を思はず、始よりして校閱を、一字も作者に乞ざりければ、傭書劂人の爲に謬れて、稿本と同じからざるもの多くあり。況七輯發兌のよしを、報ることもなかりしかば、予はその例に違へるを、咎めて云云といひし折、書林永壽堂、文溪堂等、爲に勸解るに怠狀をもてしつゝ、陪話數四に及びにけるを、なほ聽ざらんはさすがにて、いふかひもなく已にけり。かゝりし程に涌泉堂は、後輯の刊行に、微力足るよしなければとて、第一輯より七輯まで、所藏の刻板を沽却せしかば、大阪の書林某甲が、購得てもて去にきと聞えたり。然而第八輯より以下の刊行は、文溪堂が購受て、續出す事になりしかば、本傳新舊の板家抉は、江戸大阪と兩家になりぬ。第五輯より下、こゝに至て、刊行の書肆の替りし事、前後都て四名也。且いまだ結局に至らざるに、その板分れて七輯までは、遙に浪速に售遣られて、予は毫ばかりも識らざりける、彼地の書肆の藏板になりけるを、思へば一奇といはまくのみ。識者はこの折眉を顰めて、江戸の

八犬傳第九輯 附言

本傳は、文化十一年甲戌の春、書賈平林堂（弓張月の板元）の爲に、第一輯の復稿を思ひ起せしに、平林堂頽齡既に七旬、長編の刊行做し果さん事、心許なしとて、そが夥計の書賈、山青堂に讓らんと請ひしかば、予その意に儘して、當時稿本五卷を、山青堂に取らしけり。かくて書畫剞劂の工成りて、おなじ年の冬、始て世に見はるゝこととはなりぬ。十三年丙子の春正月、第二輯五卷を續出すに及て、世評いよ〱喝采、看官亦復後輯の出るを俟こと、一日千秋の如しといふめり。是よりして後山青堂多慾の故に、他事に耽ると聞えしかば、刊行等閑の年間これあり、第三輯五卷は、文政二年己卯春正月續出し、第四輯四卷は、三年庚辰冬十二月發販し、第五輯六卷は、六年癸未春正月續出しにけり。第一輯を刊行の年よりして、こゝに至て十箇年になりぬ。然ば每編出るを俟つゝ、看官渴望せざるはなく、掌球撫玉に異ならず。その時好に稱ひしもの、今昔無比と聞えながら、刊行の書肆が等閑なる、贏餘を他債の爲に果して、本錢續ずなりにけん、新舊五輯の刻板を、涌泉堂に賣與へしかば、第六輯よりの下、續刻の書賈替りて、第六輯五卷（五の卷を釐て上下とす。本輯卽六卷なり）は、十年丁亥春正月、涌

第九輯第十九箇端賛言……五五二

第九輯 卷之十九

第百二十六回……五五七
假捕使三路行兵
義兄弟兩林懲惡

第百二十七回……五七三
大庵厄親兵衛喪伴
石菩薩前信乃悟應報

第九輯 卷之二十

第百二十八回……六〇三
大士露宿迎追隊
老僧褰袂示冥罰

第百二十九回……六二四
忠僕事死靈佛起本
孝子去京傳燈法脈

第九輯 卷之二十一

第百三十回……六五〇
里見侯白濱葬旅櫬
大法師穗北果客情

第百三十一回……六七八
八行靈玉光增良主
九歲神童氏請花營

第九輯 卷之十五

第百十八囘……三七九

兩國河原南客逢北人

千千三啜師弟屠姦姪

第百十九囘……四〇八

說來路次團太附驥尾

盡餘談親兵衞促扁舟

第九輯 卷之十六

第百二十囘……四二五

傳命令使臣正征伐

獻一葉窮士償前愆

第百二十一囘……四四二

天資神祐劈石門牢戶

犬江親兵衞破魔夷賊

第九輯 卷之十七

第百二十二囘……四六五

讓勳功親兵衞赴法會

後賞祿安房侯溫寒鄕

第百二十三囘……四八八

小乘樓一僕謁故主

、大庵十僧資法筵

第九輯 卷之十八

第百二十四囘……五一三

守師命星額齋遺骨

受殘捨癇僧告禍鬼

第百二十五囘……五四〇

逸疋寺德用與二三士謀

退職院未得名詮諫不得

第百十一回……一七九

妙尼庭聚ニ衆兇一

素藤夜襲ニ舊城一

第九輯　卷之十一

第百十二回……二〇四

稟ニ君命一清澄伐ニ再叛賊一

旋ニ機變一素藤易ニ牢獄囚一

第百十三回……二三三

三匠瓶醒ニ里見侯一

一級首慰ニ南彌六一

第九輯　卷之十二上

第百十四回……二六〇

義俠塞レ元遺ニ郭號一

神靈懲レ竃全ニ處女一

第九輯　卷之十二下

第百十五回……二九一

前面岡大刀自救ニ孝嗣一

不忍池親兵衞釣ニ河鯉一

第九輯附言……三一六

第九輯　卷之十三、十四

第百十六回……三四〇

賢士重知ニ犬士一

政木牽詳ニ政木一

第百十七回……三六一

答レ恩化龍示ニ升天一

問レ津犬童惱ニ風濤一

南總里見八犬傳 目錄 四

第九輯 卷之七

第九輯附言……一

第百四回……一五
諷老侯親兵衛訟神助
驚奇特刺客等各歸順

第百五回……三六
名山有靈枯樹復花
逃客無路老俠獻俘

第九輯 卷之八

第百六回……五五
牽青海波景能自稻村來
犯黑闇夜曼讀信赴舘山

第百七回……八四
犬江親兵衛活捉素藤
里見御曹司優還陣營

第九輯 卷之九

第百八回……一〇四
義成旨仁寬刑
貞行諷主奏克

第百九回……一二八
八百尼山居誘引敗將
濱路姬病牀被寃鬼魘

第九輯 卷之十

第百十回……一五二
反間術妙椿遠犬江
妖書孽仁辭別妙眞

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

南總

里見八犬傳

四

